

---

# 落下世界の迷子

さとり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

落下世界の迷子

### 【Nコード】

N27860

### 【作者名】

さとり

### 【あらすじ】

何処に行っても勉強からは逃れられないのか！と絶望する志真。大人しく慎重な性格が裏目に出る菊乃。兄、吹雪のように惨めに死にたくない、強かに情報を集める伊吹。不幸な事故によっているべき世界から落っこちた運と間の悪い人間達の、異世界生活。

一寸先は、

おかしな事など何もしなかった。

何度と無く、出来る限り思い出してみたが、出た結論は一緒だった。

いつもと同じだった。その日に限って何かしたわけでも、変わった事があった記憶も無い。少なくとも、彼女には。勿論何から何までいつもと同じ、なんて事は無いが。前日は晴れていたが、その日はやや曇り空だったし、そのせいか半そでが肌寒く感じられる程度に気温は低かった。時間だって、友人との会話が盛り上がって、いつもよりは遅かったかもしれない。

けれど、そんなもの誤差の範囲だ。

その、ちよつとした誤差が運命を決めた。

どうしようも無い事だ。偶然、運が悪く、その時間のその場所に居合わせてしまった。ただそれだけ。たったそれだけの事が、取り返しのつかない事態を招く事になる。そういう事もあるのだ。

どうする事も出来ない、運命のようなもの。

だから、結局、

あれは、事故だったんだ。

そう、納得した。

一ヶ月前に言われた事を、ようやく素直に受け止める気になった。灰谷志真はその日、異世界とか呼ばれる場所で、16の誕生日を迎えた。

空が青い、から憂鬱。

そんな気分だった。曇りだったら最低で、雨だったら最悪。気分が悪いのは天気などのせいではなく、目前に迫ったテストのせいだ。どうしよう、勉強って本当に面倒くさい。今更じたばたしたところで、仕方が無いが開き直る事もできない。下手をしたら夏休みに影響が！あー、何でもっと真面目に授業受けなかったのだろう。これは毎回試験前に必ず思う事である。ちっとも次に生かされない後悔。憂鬱な気分の志真の隣で、友人は相変わらずのほんわか笑顔でこちらを見上げた。

あー、相変わらず癒される笑顔だ。

「そういえば、志真、もうすぐ誕生日だったよね」

「ああ、うん、そう」

突然出た誕生日の話題に、反応しきれなかった。何よう、と三上梢が笑う。

「嬉しくなさそう」

「そういうわけじゃないけど、その前にテストが立ち塞がってるから。あー、嫌だなー、テストなんて無くなっちゃえば良いのに」

「でも、それが終われば夏休みだよ」

「後に夏休みが控えてようと、テストはなー」

「ほんとに、嫌そう」

あはは、と梢が声を上げて笑う。

可愛いなあ、と素直に思える笑顔だった。色白で、細い黒髪はいつもさらさらと流れている。大きな黒い目だとか、長い睫だとか、細くて小さい手足だとか、全体的に梢は可愛らしい。子供の時から特別可愛かったけれど、最近は何か色気みたいなものまでプラスされて、華やいだ雰囲気が一層人目を引く。

彼氏ができたから、だろっか、やっぱり。

志真は自然と眉間に皺を寄せていた。

可愛くて素直な梢、そんな彼女を何かとしようもない事で苛めていた江口将太、そして梢の事で将太と喧嘩していたのが志真だ。

幼馴染というやつである。

中学に入って妙に大人しくなったなーと思ったら、高校に入っただけで将太は梢に告白した。好きな子を虐めるという古典的なあれだったのか、と妙に納得したが、梢が付き合う事を了承したのには驚いた。正直、予想外の展開だった。

寂しかった。

実は将太の事が好きだった……とかいうオチは無い。運動神経が良く、サッカー部でそこそこ活躍している将太は最近そこそこの人気があるようだったが、志真にとっては変わらず良き喧嘩相手ではない。

きょうだい…弟分、そんな感じ。

ただ、3人という輪から弾き出された事が寂しかっただけ。

(子供だなあ)

自分で、自分が嫌になる。

自己嫌悪。ぼんやりした目に、世界が二重に映っていた。見慣れた商店街、声を張り上げる店の人、買い物客や、学校帰りの中学生に、高校生。ざわめきは遠かった。焦点がはつきりしないのは、ぼんやりとしているせいだろう。

「志真？」

遅れた志真を梢が振り返って呼ぶ。

「あ、ごめん、ちょっとぼーっとしちゃって」

慌てて、一步を踏み出した。

踏み出したところで、灰谷志真は世界を失った。

「え？」

梢は振り返ったまま、目を瞬かせた。

話しかけた筈の相手は、どこにもいない。途方に暮れて、きよろきよろと辺りを見渡すが、自分は一人だった。

そうだ、最初から、

……ひとり、だった筈。

「ええつと？」

分らない。自分はどうして振り返ったのだろうか。不安になる。賑やかな商店街で、急にどうしようもなく、寂しい気持ちになった。その日、一人の友人を無くした事実すら、三上梢から失われていた。

狭く薄暗い部屋に、人がひしめいていた。

全部で18人。

明らかに多すぎる人間が、それぞれ真剣な表情で手元に置かれた薄い長方形の石を眺めている。薄く青紫に光るそれは、中心にどこかの国の景色を映し出していた。人が多い、と誰かが苦々しく呟く。

「7、8、9……同調現象、収束に向います」

若い男の緊張した声と共に、石に映し出されていた景色が薄くなつていく。そして、やがて見えなくなった。誰かが溜息をついた。

「確認できたか？何人だ」

「黒髪黒目の若い娘が一人」

「同じく黒髪黒目の……恐らく娘。髪が短く、少年のようだが女性だろっ」

「言い争っていた若い男二人の姿も確認しました」

「他には」

それぞれが、首を横に振る。

「4人か、よし。確認したものは捜索部隊に特徴を伝える。危険はほぼ無いと思われるが、警戒は怠るな。捜索部隊には、なるべく容姿が近いものを出せ。混乱を深めるのは避けたい」

「了解しました」

慌しく出て行く人々を見やり、再び石版へと目を移す。光も失い、只の透明な結晶石となったそれには、もう何も映し出されてはいない。輝く金の髪を肩の上で揺らし、男は首を傾けた。

「18世界の、場所は『日本』か。これは、ウィガーの出番だな。は、ヤツは嫌がるだろうけど、他にいないから断れないだろうし。今回の哀れな世界喪失者、手間のかからないヤツ等だと良いけどな」

黒髪の青白い男と、対照的に日に焼けた大柄な男は、口論していた事も忘れて呆気に取られていた。二人の性格上、我に返るのは大柄な男の方が早かった。

「何だこれ、どうなってやがる」

話を振られた青白い男は、何度も首を左右に振った。景色は変わらない。

「こつちが聞きたい」

「……………」

二人の前には、いや、四方に広がるのは砂の海。商店街にいた筈の二人は何故か、砂漠としか思えない場所にいた。照りつける日差しは、夕暮れ時の優しいものとは程遠い。青すぎる空の色と、黄色い砂からの照り返し。

何もかもが冗談としか思えなかった。

「意味分かんねーぞ」

「……………」

じつとりとした汗が、顎に向った。

小柄なために、年齢よりも幼く見られる少女は、溺れていた。商店街のどこにも、溺れるようなところなど無かったはずなのに。何の予告も、予兆も無く、突然にそこに落ちていた。

目に焼きついた深い青と、それから潮の匂い。口に入ってくる水がしよっぱかった。

海だ。

あり得ないことだった。

何の気構えも無いまま海に放り込まれたためにパニックになっていた少女は、自分が泳げることも忘れて溺れていた。

何が何やら分からない。

そんな事態は灰谷志真にも容赦なく襲い掛かっていた。白い湯気、むっとした熱気、静まり返ったその場所で、志真は震えていた。

呆気にとられた空気が、啞然とした視線が痛い。

自分以外の全員が、その身に何も纏っていないかった。その上、どうも男ばかりのようだった。何となく、変な場所だったがどうもこれは、ここはいわゆる、

（お、男湯！？）

見慣れない肌の色や、耳の形やら何やら、志真の目には入らなかった。

（な、何で、どうして！？梢！？）

わけがわからない。本当に何が、何だか。

その日、四人の人間が世界を失い、世界から四人の人間が失われたが、当の本人達はまだその事実を知らない。  
それどころではなかった。



## 灰谷志真の場合

気がついたら男湯にいたんです！

果たしてその主張が通るか否か、灰谷志真は真面目に考え込んでいた。事実なのだが、非常に嘘っぽい。苦しい言い訳に聞こえる、下手をすればちょっと頭のかわいそうな人のようだ。

当事者の志真にしても、未だに信じられない。自分の頭が不安になつてきているくらいだ。ひよつとして、あれか、気が付いていなかったけど多重人格者だったりするのか。それにしてもこんな事態は初めてだ。

だがしかし、梢がいる。

梢がきつと一緒にいた事を証言してくれるだろう。時間帯を照らし合わせれば、きつと疑いも晴れる。晴れなくても、何か分かるだろう。きつと、多分。ここがどこだか分からないが。

志真は頼杖をついたまま、溜息を吐いた。そこは3畳位の狭い部屋だった。テレビでよく見るような取調室とは雰囲気が違う。明るいライトグリーンの床と、同色の机と椅子。壁や天井は白く、壁の上方四隅に四角いライトがついていた。机の上には丸いクッキーのようなものと、白いカップに入った匂いのきついハーブティー。

ドアが二つあったが、下手に動くと思われそうなのでじっとしている。

(ここ、どこなんだろう)

ぼんやりとした不安があった。

商店街を歩いていて、気がついたら男湯にいた。それだけでも訳が分からないが、その後も。騒ぎに気がついた店の人が出てきて、志真を外へと連れ出した。何やら怒鳴られていたのだが、その言葉がまるで分からなかった。

混乱していたせいだろうか。

その後、白地に青い刺繍の入ったマントをつけた、おかしな人達

がやってきて志真をここへ連れてきた。

彼らの交わす言葉も、やはり分からなかった。格好も変だった。金髪に青い目に、緑の目。顔立ちも日本人離れしていた。外国の人、ただ喋っていた言葉は英語ではなかった。詳しくは知らないが、ドイツ語やイタリア語でもなかった。多分。

異常だ。

薄々と、事の重大さに気がつきかけていた。

そもそも、突然あんなところにいた事事態が。

(……梢)

志真は手の中の携帯を見つめた。さつきからずっと圏外だ。せめてこれが繋がれば、とさつきから祈っているのだが。

(うち、帰りたい)

心細かった。

「失礼」

俯きかけていた志真は、弾かれるように顔を上げた。眼鏡をかけた痩せすぎの感のある女性が、分厚い書類を手には部屋へ入ってくるところだった。背中の中半ばまである黒髪を、首のところまでひとつに纏めた、化粧気の無い女性。何となく、敵しそうな人だと感じて、緊張が高まる。

「お待たせしました」

(に、日本語だ)

良かった。安堵で、全身に入っていた力が抜ける。

眼鏡の女性はてきぱきとした仕事で書類をおくと、志真の前に座った。細い、緑色の瞳がじっと観察するように見つめてきて、居心地が悪い。

「あ、あの、私何というか、あんなところに入るつもりは全く、ですわね！」

「わたしはリザレット・クラウラ。今回、貴方方に起きた世界喪失

現象に対しての調査と、補佐をさせて頂いている異界人保護委員会の者です。以後、よろしく」

言い訳を遮つての言葉に、咄嗟に反応できない。

(りざ、何……？せかいそうしつ現象？)

男湯への侵入について責められなかった事だけは、理解できた。

「えっと、あの」

「まずは、私の話を聞きなさい。ざっと説明しますから、質問は後に。ああ…、先に貴方の名前を頂いておきましょうか」

「は、灰谷、志真です」

「では、シマ。貴方の身の上で起こった現象について説明させていただきます。どうか、落ち着いて最後まで静かにお願いします」

その言い方に、自然と眉が寄る。何か聞くのが怖い。しかし、聞かなければ何も分からないはまだ。

そんな志真を、彼女は静かに見据えた。

「貴方は今、不幸な事故によって別の世界に来ています」

志真は言われた通りに静かにしていた。というか、反応のしようが無かったのだ。言われた言葉の意味がいまひとつ、伝わってこなかった。この人、大丈夫だろうか。それが最初の感想だった。

訝しげな表情を浮かべる志真から視線を外さず、女は続ける。

「通常は重なる事の無い『世界』同士が繋がる、その現象をわたし達は同調現象と呼んでいます。長くても数十秒ですが、その時間帯は非常に危険で、稀に貴方のように本来いるべき世界から、繋がった別の世界へと来てしまう者がいるのです。滅多に起こる事はありません。そもそもこの同調現象が起こる事自体が稀で、18世界：と、これは私達の貴方の世界の呼び名です。その18世界と繋がる事に限れば30年に1度程度でしょうかね。それもたった数十秒程度で、範囲も精々が数メートル。無人の場所で起こる事も多い」

ですが、と更に言葉は続く。

「今回は、特に人の多いところで発生したようです。こういう場合、稀に間の悪い人間が引つかかってしまう。勿論、普通ならば属する世界からの引きが強いわけで、問題など起こらない筈なのですけどね。時々、繋がりが薄くなっていた人間なんか、間違った方を選んでしまう。それが、世界喪失者、つまり、貴方ですね」

じわじわと不安が広がる。何だか分からないが、この人は本気だ。「簡単に言ってしまうえば、ここは貴方が知るどの国でもなくて、世界でもない。異世界というやつです。言葉、分からなかったでしょう？ 私は、貴方のような者を補佐するために、18世界の言葉を覚えていますが。貴方に理解して欲しいのは、貴方は二度と戻る事が出来ないということです。あの世界にも、家にも二度と帰れない、それをまず分かってください」

言葉が出なかった。

帰れない？この人は何を言っているんだろう。

「水が、高いところから低いところへ流れるように、こちらから貴方の世界へ人が流れる事はない。逆はあっても。来た者は帰れない、少なくとも今のところその方法は見つかっていません。諦めてください」

「あ、諦めてくださいって、そんな。帰さないとか言われても」

「帰さないではなく、帰れない、ですよ」

「で、でも！帰らないわけにはいかないよ、皆、心配してるだろうし、私だって嫌だよ！帰りたい！」

眼鏡の女は、僅かに目を細めた。

「心配は、していないでしょうね」

「な、何言って……」

「世界を喪失した者に付随する現象がありました。世界から喪失された人間の事を、その世界は認知できなくなるのです。いなくなつた事すら、認識できなくなる。痕跡があつても、誰も気がつく事ができない。無いものを見る事はできないから、何でしょうかね」  
ことり、と目の前に何かが置かれた。

長方形の、2ミリ程の薄い透明な石だ。石の中に何かが映っている。はっとした。それは、あの夕暮れの商店街だった。数人の人間に混じって、志真と梢が歩いている。

「分かりますか。これはあの瞬間の記録です」

「梢」

声は聞こえない。少し志真が遅れて、梢が呼ぶ。はっとしたように足を踏み出した瞬間、志真の姿は消えた。食い入るように見つめる志真の目に、首を傾げる梢の姿が映っている。

不思議そうに、どこか不安そうに辺りを見渡して。

明らかに反応が薄かった。目の前で友人が消えたというのに、何だか。

そうして、何事もなかったかのように歩き出す。

志真が消えたことなんか、まるで知らないみたい。

「な、なんで…」

「あなたが世界から消えたから。そして、彼女は貴方を認識できなくなった。貴方の家族も同じでしょう。友人も、知人も、全てから貴方は思い出される事は無い。あなたは世界を失ったんですよ」

その日からの事はあまり覚えていない。

ずっと寝ていた事もあつたし、食事を取らなかつたり、暴食してみたり、暴れた事もあつたかもしれない。その間中ずっと考えてはいたが、やはり理解できなくて、しかし現実が変わらなかつた。

携帯は圏外のまま充電が切れていた。

裏切られた気持ちになつてた。梢の目の前で起こつた事なのに、志真が消えた事にすら気がつかない、いなくなつた事を、ずっと誰にも。

そんなの、信じられなかつた。信じたくなかつた。

頑なに拒否する志真に対して、リザレット・クラウラは根気良く

説明を繰り返した。怒りも哀れみも無い、鉄面皮でくどくどと同じような説明でもって、志真に信じがたい現実を突きつける。

気がついたら一月経っていた。

状況が変わらないまま、誕生日を迎えて16になって。

それで観念した。

いつからか、決めていたのだ。

誕生日になっても状況が変わらないようなら、夢から醒めないようなら、もう諦めようと。観念して、現実を受け入れて、どうするかを決めよう。

(まあ、決めようって言ったって)

選択肢は限られている。

## 坂巻菊乃の場合

その日菊乃は何となく商店街へ足を伸ばした。何か欲しい物があつたわけではない。ただ何となく、家へ真っ直ぐ帰りたくなかつたからだ。

家へ帰りたくない。とは言っても、それほど真剣に帰りたくなかつたわけではなかつた。ほんの少し遠回りして、帰る。つもりだつた。

坂巻菊乃は、小さく溜息を吐く。

今はもう、帰りたくても帰れなくなつてしまつた。流石に1週間という長い時間を過ごせば、これが夢ではない事は実感できる。そして、リザレット・クラウラという少しきつい顔の女の人が言うには、菊乃は同調現象というものに巻き込まれてここ異世界へと紛れ込み、更に二度と帰れないらしいのだ。

非情に困つた事態だが、人為的なものでなく突発的な事故のようなものだと言うなら、誰かを責めるわけにもいかない。

都合よく帰れる方法が見つければ良いのだが……、最初はそう思つたが、思い直した。もしかしたら、これは良い事かもしれない。菊乃がこの世界へ着てしまつたのと同時に、向こうの世界での菊乃の存在は忘れ去られた。それならば、菊乃がいなくなった事を悲しむ人も、心配する人もいないという事だ。

2ヶ月前にバツイチこぶ付きで再婚を果たした母だつたが、こぶである菊乃がいなかつた事になればただのバツイチ。新婚生活はもつとスムーズにいくであろうと思われた。

その結論に達した事で、菊乃の気持ちは幾分か楽になつた。

いつもと同じように現れて、同じような説明と説得を繰り返すクラウラに、菊乃は短く分かりましたと伝えた。

少なからず驚いた様子で、クラウラは探るような眼差しで菊乃を見つめる。

「随分と、冷静ですね。人形のように黙り込んでいるのは、シヨックを受けているせいだと思っていましたけど……」

今まで殆ど黙り込み、泣きも笑いも怒りもしなかった菊乃の本意を、クラウラは掴みかねているようだった。

「何が起こっているのか、まるで分からなかったもので、ちゃんと話を聞くべきだと思つてそうしていました。突拍子も無い話ですが、どうやら夢でも無いようなので」

「その通り。これは現実です」

「理解しているつもりです」

念を押すクラウラに、菊乃ははっきりとその意思を伝えた。

「教えてください。私はこれからここで、どうやって生きていけばよいのですか？」

「……ここを出たら、取り敢えずの住むところと保護者が与えられます。そこから、働きながら学校へ通つてもらふ事になるでしょう。卒業し、5年の観察審査を終了すれば、市民権が与えられます。異世界人であっても」

放り出される事は無いと分かつて、安堵する。親の庇護の元生活していた菊乃が、いきなり右も左も分からない異世界で自立するのは無理だと、自分でも分かつていた。

「ですがその前に、ここを出るための審査に通らなければならない」「？」

「この世界にとって、貴方は安全であると証明する必要がある」「腕力も体力も少ない菊乃のような子どもの、何を警戒しているのか。小さなテーブルを挟んで向こうに座るクラウラの顔は、どこか冷たく厳しいものだった。

「サカマキキクノ。貴方がこの世界へ落ちたのは、本当に偶然ですか？」

「……どういう意味ですか。事故だと言ったのは貴方の筈です」「そう。いつもの同調現象、だった筈。今のところおかしい点は見つかっていません。貴方が一番最初に接触したのが、異世界人であ



る以外は」

一番最初……

菊乃は記憶を巡らせた。あの時、それが起こった際、商店街をぼうつと歩いていた菊乃は、その異変にすぐに対応できなかった。軽い眩暈を感じながら、一歩足を踏み出した先に地面が無かった。ひやり、と冷たいものが背筋を走る感覚。見開いた目に飛び込む青。何が起こったのか分からぬまま、菊乃は海に落ちていた。

幸いだったのは、それほど高いところから落ちたわけではなかったこと。思い切り海面に腹を打ったが、痛みを感じる程度で済んだ。ただ、その後が問題だ。

菊乃は泳げないわけではない。だが、いきなり何の心構えも無いまま海に落ち、颯爽と泳ぎ始める事はできなかった。目視できるところに、白い砂浜が見えたような気もする。だが、パニックを起こしていた菊乃はそこで溺れていた。

何が何やら分からないが、死を覚悟した時、菊乃を助けてくれたのは、

「異世界、人？」

菊乃の2倍はありそうな黒い豹だったのだが。その後に出会った人だろうか。その辺の記憶は曖昧で、あまり覚えていなかった。

「溺れる貴方を救った者です。知人ですか？」

どうやらクラウラが言っているのは、黒い豹のことらしい。

「いえ……知らない、ですけど」

その会話に激しい違和感を覚えつつも菊乃は素直に返答した。豹に知り合いはいない。こちらの世界では、動物と人の区別は無いのだろうか。

「本当に？」

「…はい。その、つまりあの人は、私と同じ世界から来た、異世界……人なのでしょうか？」

「違いますよ。貴方の世界にはああいう人種はいない。それは分かっています」

こっちはさつぱり分らない。

「貴方方が別々の世界から来たという事は、承知してます。ですが、同調現象というのは滅多に起こるものではなく、この国にいる異世界人の数も限られている。それなのに、偶然同調現象で落ちてきた異世界人を、偶然同じ異世界人が助けた。勿論絶対にはありえないことではない、ですが可能性としては限りなく低い。それが起こったことに、私達は注目しているのです」

そんな事を言われても困る。それが正直な菊乃の気持ちだった。クラウラが何をそこまで気にしているのかも理解できない。

「私達は、ほんの少しの『おかしなこと』も見逃す事はできないのです。サカマキ・キクノ」

今この世界にいるという事事態が、菊乃にとってはおかしな事だった。ちよつとどころではなく、とんでもなく。

けれど、菊乃は理解してもいた。とにかく彼らの菊乃に対する疑いを晴らさない限り、自由は無いということ。問題は、一体何を疑われているのか分からないことだ。

でも

あれは、秘密にしておいた方が良さそうだ。心の中で考える。こちらへ落ちる前、足を踏み外すほんの一瞬前に誰かに呼ばれたような気がした事。ただの気のせいかもしれない。だが、疑われるようなおかしな事は、なるべく少ない方が良い。

慎重に行動した菊乃だったが、実際に自由を得るのはそれから随分先の事となる。

## 各務兄弟の場合

「こりゃ、何の冗談だ」

夕暮れ時の賑やかな商店街から、いきなり灼熱の砂漠へ様変わりした景色。変わったのが景色だけだったら良いのだが、気温も急上昇している。照りつける白い太陽も容赦ない。このままでは、日焼けで酷い事になる。だがここは見渡す限りの砂の海で、時々ぼつんと枯れたような植物しか見当たらない為、日光を避ける場所はなかった。

じりじり肌を焼く熱に、流れ落ちる不快な汗。

やけにリアルな夢だ。

真つ赤な顔で汗を拭いながら痩せすぎの青年、各務伊吹はそう思っていた。商店街がいきなり砂漠に変わる事なんて、有り得ないことだ。伊吹の頭がおかしくなっていて、幻覚でも見ているのなら話は別だが。

伊吹はこれを夢だと信じている。だから、隣で喚いている男の事を冷めた目で見ることが出来た。

無駄に背が高く、伊吹とは正反対に鍛えられ、短気で喧嘩っ早くてしかもバカのように強い男。彼にとっては厄介この上無い、3つ上の兄である各務吹雪のことを。

「こりゃテメエの仕業か、伊吹！」

なんて叫ぶバカな男は、所詮夢の中の住人だ。商店街をいきなり砂漠に変えるなんて真似を、どうやって実現したというのだろう。

「あんまりバカな事言わないで欲しいな。いくら夢の中でも」

「はあ？夢？」

「そうそう。夢って事は分かってる。だってこんなの現実であるわけないだろ。さっさと覚めると良いけど」

「…夢、これが？」

吹雪は目を細くして、辺りを見渡している。相変わらず凶悪犯の

ような人相だ。

「にしては、リアルだな。実際、くそ暑いし……。さつきから目や口に砂が入って気持ち悪い…最悪だな。何でこんな夢見るんだ？」

夢の住人である兄はぶつぶつと不満を述べている。何だか少し違和感を感じたが、暑さで頭がくらくらしていた伊吹に深く考える気力は無かった。

砂漠を脱出しようという考えは起こらなかった。これは夢なのだから、何とかして夢から覚めれば良い。それで終わる。夢ならばいずれ覚めるだろう。

そして夢は覚めなかったために、兄弟は熱中症で危うく死に掛けた。間一髪で捜索隊が間に合わなかったら、伊吹は死んでいたことだろう。助かった事が良かったのか悪かったのが、伊吹には分からないが。

「体の具合はどうですか？」

違和感の無い日本語で話しかけてきたのは、眼鏡をかけたすっきりした顔立ちの女性だ。名前をリザレット・クラウラと言って、この世界で数少ない日本語習得者である。

「はあ、何とか」

冗談みたいな話だが、伊吹と吹雪は異世界に来てしまったのだ。

1週間ほど寝込んでいた伊吹は、その話を聞いて再び1週間ほど寝込むはめになった。我ながら脆弱な神経である。しかしどうしても受け入れがたい話だった。

伊吹は淡白な人間だった。あの世界にも、友人、…はいなかったか家族にもそれほど執着があつたわけではない。多少寂しいような気もするが。

それよりも、読んでいた漫画や小説の続きが気になってしょうがなかった。それと、部屋にあるパソコン、中学2年生の時からつけていた日記など、人に見られたくないものの行方も気がかりだ。リザレットの話信じるなら、あの世界に伊吹という人間は存在しな

かった事になつてゐる筈で、消えた人間に係する事物もそれと認識されなくなるとの話だった。だとしたら、誰にも見られる心配は無い、のだが。

一抹の不安は消せない。

「まだ顔色が悪いですね。もう少しここで休んだ方が良さそうだ」  
元より病人みみたいな顔色なのだが、伊吹は神妙に頷いた。すつかり慣れてしまつた狭い療養室の外へ出る勇氣は、まだない。

伊吹は、あちらの世界でも殆どひきこもり気味の生活を送つていた。一応大学には行つていたが、講義が終わると家へ直行し部屋へ籠るような毎日だった。あの日は偶々、母親に頼まれて買い物に出たのだ。

「こより」の仏壇に供える花。

それを買ひに出歩いて運悪く吹雪と鉢合わせしたのだ。花屋の近くで足止めされなければ、こんな事にはならなかつたかもしれない。しかしこうなつてしまつた事は、両親にとつては良い事かもしれない。半ひきこもりの伊吹や、揉め事ばかり起こしている問題児の吹雪。家族の足を引っ張る二人の厄介者がいなくなれば、心労も少しは減るに違いない。

瑞希と葉月。二人の妹と両親はきつとうまく家族をやつていくことだろう。

「貴方のお兄さん」

え、と伊吹は顔を上げた。

「気になりませんか？どうなつたのか訊ねないのは、意図的にそうしているのですか」

「…あまり、仲良くないので、それにどうなつたって言われても、あれじゃあ…」

「助からない、と？」

「？…そりゃあ、普通助からないと思います。この世界の人間はどつだか知りませんが、僕の世界の人間はあんな事になつたら死にます」

あの後、熱中症で倒れた後の事だ。意識が朦朧としていたが、確かに伊吹は見た。突然巨大な鯰のような生物が現れた。砂の中を泳ぐようにして現れた砂色のそれが、あつという間に吹雪をまる飲みにする、再び砂の中へ潜っていったのだ。

呆気ない最期だった。

暴力的で短気で、好きになれない兄だったが流石に少し可哀想な気もする。妙な場所で怪物に食べられるなんてついていないどころの話じゃない。消えてほしいとは思っていたが、死んでほしいとまでは思っていなかった。ただ自分と関わりのないところに行ってくれば。

砂漠で怒鳴っていた兄を思い出す。あそこで変な怪物に食べられなかったら、今もここにいたかもしれない兄。そんな『もしも』を想像して、伊吹は顔をゆがめた。

きつと無茶な事で伊吹に怒りをぶつけ、この人達と揉め事を起こし、心証を悪くするのだろう。それを思えば、いなくなつて良かったのかもしれない。

「砂漠の搜索は続けられていますが、今のところ手がかりは見つかっていません。ゾイ：貴方の兄を飲み込んだ生き物ですけど、それを一匹一匹捕まえて腹を裂くわけにもいきませんし、搜索は難航しています」

今更見つかつたところで、とつくにあの怪物の栄養分になつていくだろう。無駄な事をするものだ。

黙っている伊吹に、リザレットは探るような目を向けた。

「？」

何だろう。もしかしたら、ここで唯一の肉親の筈の相手に対して冷たすぎるとか思われているのだろうか。人間性を疑われているのかも知れない。まずいだろうか。ここで彼らの心証を悪くするのは、得策ではない。だが、悲しんだり取り乱したりするふりをする気にはなれなかった。

「難しいですが、手は尽くします。何か分かつたら、貴方にも報告

「がいくようにしましょう」

「……どうも」

「では、ゆっくり体を休めてください」

リザレットが部屋を出て行ってようやく、伊吹は肩の力を抜いた。

「これからどうなるんだろう。」

「そればかりが不安だった。」

## 志真と宿屋一室、曰く付き 1

志真が落ち着いた後は、とんとん拍子に話が進んだ。簡単な歴史と、この国の成り立ち、有り方、常識なんかを学び、その後暫くの住む場所と、働き場所を提示された。2週間後からは、学校へも通えるらしい。いたれりつくせり、だったが、その代わりに拒否権は無かった。

不安だ。

荷物を片手に、志真の表情は暗い。

もうすぐ迎えが来る事になっている。長くお世話になっていたこのでかい病院みたいな白い建物とも、ついにお別れだ。緑に囲まれ、何と小川みたいなのまで流れている広い庭に、2メートルくらいありそうな高いブロック塀。志真はその、裏門からこっそり外へ出された。しかも何か黒い布を頭から被らされて。

なに、この犯罪者みたいな扱い、と思わないでもなかった。不安（または不満）が顔に出ていたのだろう。リザレットは、静かに言った。

「正門の方で少し揉め事が起こっている。巻き込まれるのは嫌ですよ。」

まあ、勿論。だけど、揉め事って何だろうか。平和な国だと教えられたけど、違うのだろうか。

「揉め事と言っても、たいした事ではない。とにかく、貴方はここで待っていなさい。直に、迎えが来ます。」

そこで言葉を切って、リザレットは志真をじっと見つめた。初めて見た時から変わらない、痩せた白い顔が少しだけ緩む。

「ゼ・セノー・カオウイ」

「え」

呆気に取られる。意味の分からない言葉に、初めて見たちゃんとした笑顔みたいなもの。目を丸くした志真に、一つ溜息を零してリ



ザレットは口を開く。もう、笑顔は無かった。

「ちゃんとしなさい。私に出来るのは、ここまでです。後は自分で道を切り開きなさい」

「は、はい。いろいろありがとう、リザレットさん」

「仕事ですから。では、さようなら、志真」

そう言っつてリザレットは志真を残し、塀の中へ戻っていった。

あれから30分は経過している……と、思う。時計が無いから分からないが。直に来るって言ったのに。

はつきりいつて心細い。

言葉も常識も分からない異世界で、うまくやっていけるだろうか。言葉も分からないのに、どうやって仲良くすれば。

考えれば考えるほど気が重い。

「おい」

考え込んでいた志真は、それが自分にかけられている声だと気がつかなかつた。

「おい、その女」

「日本語！」

がば、と勢い良く顔を上げる。思ったより近くに顔があった。真つ先に飛び込んできたのは晴れた空みたいな色の瞳。長身痩躯の、20代後半くらいの男だ。彫の深い、渋めの男前と言っつていいかもしれない。(志真はもうちょっと優しそうなのが好みである)こげ茶色の短髪に、浅黒い肌。見るからに厳しそうな雰囲気をかもし出している。

ひょつとして、この人がリザレットの言っつていた迎えだろうか。

何か、気難しそうな男だ。

じろじろと見ている志真に気分を悪くしたのか、男はむすつとした顔でため息を吐いた。愛想0だ。ますます感じ悪い。

「灰谷・志真、だな？」

「はあ、そうですけど」

男は間違いない日本語を喋っている。何で。嬉しいが、戸惑う気

持ちの方が強い。施設でも、リザレット以外に日本語を喋る者はいなかった。

「俺の名はウィガー。ウィガー・ハルベルトだ。君が今日から住む予定の宿屋で働いている。連絡があつて君を迎えに来た。質問は？」

「何で日本語なんですか」

「……聞いていないのか」

何を。

きよとんとする志真に、ウィガーは舌打した。うわあ、結構柄が悪いぞ。

「全くあいつは！俺はこの国の元騎士だ」

「はあ」

「この国の騎士は他世界の言葉のどれか一つを習得する事が、義務となっている。数ある言葉の中から俺は『日本語』を選んだ。それだけの話だ」

「それじゃ、他にも喋れる人がいるんですか!？」

何か世界が広がった感じた。希望が見えた!

「俺とクラウラともう一人いるだけだ。使用頻度の低さから、18

世界の言葉も、『日本語』も、非推奨言語だからな」

しぼんだ。

持ち上げられて叩き落とされた感じである。そんな志真にウィガーは追い討ちをかけた。

「そういうわけで、君にはこの国の言葉を覚えてもらう。二週間で」

「にしゅうかん!」

なっ、と志真は顔を引きつらせた。

いくらなんでも無理だ！自慢じゃないけど、中学から授業を受けている英語だって殆ど喋れない。しかし、そんな志真の困惑を他所に、ウィガーは当然の事のように言う。

「学校が始まるからな」

「いやいやいや！普通学校で言葉を習うんでしょう！？普通は！」  
「学校に『日本語』を話せる奴はいない。当然教師にもだ。それで  
どうやって言葉を習う。最低限でも覚えておかないと苦労するのは  
君だぞ」

「そんな！」

いつそ登校拒否したい！

「それに最低限会話できなくてどうやって店を手伝うつもりだ」

「み、みせ？」

「……クラウラから聞いている筈だが？家に居候している間は、掃  
除と、それから食堂の仕事を手伝ってもらう事になる。簡単な調理  
と給仕くらいだが」

そういえば聞いたような、聞いていないような。

ぼんやりとする志真を見下ろして、ウィガーは眉間に皺を寄せた。  
「大丈夫なのか」

大丈夫です！とか、強がる気力も無かった。しかし、嫌でも、大  
丈夫じゃなくてもやっていかなくちやならないのだ。

それから志真は、ウィガーに宿屋まで案内される事となった。  
徒歩で二時間。

この国の一般的な交通手段は、馬か馬車、飛行船、船。ここまで  
が普通のもので、変な長方形の板みたいなもの、空を飛んで移動  
する乗り物、ジバ。魔法の絨毯、というには硬そうなヤツだ。この  
世界にある特殊な鉱石を使って作ってあるらしい。一度は乗ってみ  
たい。あと、広い道の真ん中を走る、電車みたいな乗り物もある。  
そんな中を、志真とウィガーは徒歩で2時間も費やしたのだ。

「後どれくらい？」

「もう少しだ」

を、少なくとも10回以上繰り返して。

最初に聞いてから、少なくとも一時間は歩いたぞ。お前の少しは一体どうなっているのだ。そんな文句すら言う気力もないほど、志真はくたくたに疲れていた。

宿屋は何というか古かった。

ちよつと無骨な石造りの4階建てで、一階は食堂件酒場になっていた。丁度昼ご飯の時間、中々人が入っているようで、志真は挨拶もそこそこに裏口から4階へと上がらされた。

無駄に背の高いウイガーの背中を追いながら、きよろきよろと辺りを観察する。外壁は石材で出来ていたが、中には木材も使われている。廊下や、階段、ドアなどが木だ。

「ここだ」

ウイガーの足が止まった。

廊下の一番奥の部屋だ。他の部屋と同じように、深い緑に塗られたドアの前で、志真はウイガーを見上げた。視線はあわなかつた。何故か。

「あー」

「ここがお前の部屋になる。家の客室の中でも上等なところだ。風呂とトイレ付きで寝室ともう一部屋ついている。まあ、日当たりは悪いがどうせ昼間は殆どいない、構わんだろう」

明らかに志真の声を無視したウイガーに、不信がつのる。

「ちよつとー」

「服は数枚、買っておけ。その服は目立つ。支度金は支給されているな？店の場所は後で妹に案内させよう」

「誤魔化すな！私が一番聞きたいのはこれの説明なんだけど！」

びしっと、志真が指差した先は、ドアの真ん中である。

ドアの真ん中に、やけに古びた紙切れが張つてあるのだ。赤い色で、なにやらごちゃごちゃ書かれている文字は全く読めない。読めないが。

「何なのこれ」

「……従業員用の部屋、と書いてある」

「嘘だ！目見て言ってみろ！明らかにこれ御札とかそーいうやつじゃないのか！」

「煩いぞ。大きな声を出すな」

「出したくもなるわあっ！」

多分これはあれだ。何か曰くつきの部屋なのだ。考えてみれば御札の事だけじゃなく、ウイガーの態度が妙だった。宿屋に入ってから、一度も目が合わなかった。

不機嫌そうに、むっつりしていたのは多分、機嫌が悪かったからだけじゃない。

誤魔化したい事があつたからだ。

「大体おかしい！ただの厄介でお荷物な居候に、宿屋で一番良い部屋つて！良く考えなくても絶対怪しい！」

「……お前、ひねくれているな」

「ごく普通に覚える疑問だと思います！」

お世話になるのだから、多少の事は我慢しようと思っている、が。嘘はやめてよ。そういう事されると、信じられなくなる」

信じたいと思っているのに。

志真は今、一人ぼっちだ。家族も友達もない、そんな世界で生きていくには、信じられる人が必要だ。一人で生きていけるなんて言えるほど、志真は強くないし賢くもない。

ウイガーはしかめっ面のまま、額に手を当てた。

「…良いか」

低い声音に苦いものが混じっている。

「俺は幽霊の存在など信じていない」

「うわ、やっぱりそういう系」

「噂に過ぎん。だが、客から苦情が相次いでな……、馬鹿らしいが妙な噂が広がっても困る。良いか、ただの噂だからな」

そんなに必死で否定されると、余計に怪しいんだけどな。

「ふーん。幽霊か……、それってやっぱり何か曰くがあつたりするの？」

「……まあな」

ウィガーはやや戸惑った様子だ。

「怖がらないんだな。てつきり、部屋を変えろとこねるかと思ったが」

「怖くないわけじゃないけど、私幽霊とか見た事無いし、多分平気。隠されてるのが嫌だったただけだもん」

「……そう、か」

「まー、後でその曰くとかいうのも教えてよ。取りあえず部屋見て良い？」

「……ああ」

まだ何かあるのか。ウィガーの心なし暗い表情の理由は、すぐに分かった。

## 志真と宿屋一室、曰く付き 2

予想に反して部屋の中は明るく、清潔だった。志真がイメージしていたような、いかにも何か出そうな雰囲気はまるで無い。

「おー」

広いし、綺麗だ。

大きな出窓には、レースと桃色のカーテンがかけられ、薄い青色の硝子で出来た一輪挿しには、可憐な感じの白いマーガレットみたいな花が生けられている。

木製の丸いテーブルに2脚の椅子。どれも華奢で可愛いデザインのもの。

椅子にのった手作りっぽいクッションは、花柄や赤い生地を組み合わせたものでやたら可愛い。

(なんだ、これ……)

嫌な予感が湧き上がる。

志真は何が潜むか分からないジャングルの奥地でも歩くような面持ちで、部屋の中を歩いてみた。

隅に置かれた本棚と机。同じ木材なのか薄いベビーピンクで、引き出しの取っ手部分が銀製で、兎の形をしている。メルヘン！右側にあるドアの向こうは寝室で、中にトイレとお風呂に続くドアがあった。

前の部屋の半分くらいの広さの寝室には、どーんと大きなお姫様ベッドが。あの、上からカーテンみたいなのが垂れたあれだ。白いレースとベビーピンクのやたら可愛い代物に、志真は思わず後ずさった。

ふわつとした枕の両隣に、愛らしい白兎と黒兎の人形がいる。首元に巻かれた、赤と青のリボンがまた可愛い、が。

こ、これは……！

志真は、平均的な女子高生よりも多少筋肉質だ。背も低く無いし、

髪は黒くて硬いし、肩より下に伸ばした事は無い。肌の色も白くないし、目元がきつくて未だに（認めたくないが）男に間違えられる事もあるくらいなのだ。

それが、

この中で生活する自分を想像した志真は、げっそりとした顔になった。

「これは無い……ちょっと、ウイガー！」

志真は部屋を飛び出した。幸い、ウイガーはまだそこにいた。

「あの部屋突っ込みどころが多すぎてどこから突っ込めば良いのか

……！」

「志真」

「もっとう普通部屋の部屋で良いんだけど、物置とか屋根裏とかで」

「志真」

がし、と頭を掴まれて志真は沈黙した。

何、この扱い、乱暴な！と抗議する暇も無く、そのまま顔を横へ向けさせられる。強制的に向けさせられた視線の先には、ふわっとした雰囲気美人がいた。

「この宿屋の主人、リアラ・ハルベルトだ」

何故か気鬱そうな溜息を吐き、ウイガーは更に言葉を紡ぐ。

「俺の、母だ」

「は、母!？」

にこにこ微笑んでいるリアラに、志真は驚きの声を上げた。抜けるような白い肌に、零れ落ちそうな大きな青い瞳。長い睫毛、波打つ柔らかそうな髪も薄い金。華奢で儂げで、とても同じ人間とは思えない。

主にウイガーと。

「あんまり、似てないね。それにちょっと若すぎない？」

「……父の再婚相手だ。義母、と言った方が良いか。ちなみに父は3年前に亡くなっている」

「あー、やっぱり」



納得だ。流石にリアラは、ウイガーのような子供がいるような年には見えない。異世界だから、こんなに見えて実は若いのもかもしれないが。しかし、若くて美人な義母なんて、ちよっと……

「昼ドラのちよっといけない匂いがする」

「……ひるどら？何を言っている」

「お昼にやってるドラマ。禁断で背徳的な感じがするっていうか、だってちよっと複雑じゃない？こんなに若くて綺麗な人が同じ屋根の下にいるって。母親とは言っても血は繋がっていないんだし」

その辺どうなの、と。

言葉は通じないから平気かもしれないが、一応小声でウイガーに耳打ちする。

にやにやと、志真の人の悪い笑みに、ウイガーは眉間に深く皺を寄せた。言いたい事は伝わったようだ。

「くだらん事を言うな」

「やー、だつてさー」

「お前……若い娘の考える事にしては、慎みが無いぞ。妙な想像はやめろ」

「考え方、古い！そんな頑固親父みたいな事言つてると、若い女の子にもてないぞー」

「大きなお世話だ！お前こそ女を主張するならそれらしくしたらどうだ！」

「煩いな！凶星だからって怒鳴らないでよ！」

「違つて言っているだろう！」

志真とウイガーは睨みあった。とことん気が合わない。そう感じたのは多分、二人同時に。

にこにここと、二人の口げんかを見ていたリアラが何かを言い、それに対してウイガーが渋い顔で何かを答えた。二人のやり取りは、志真にはさっぱり分からない。

非常に悔しく、やり切れない。

ここで日本語を話せるのはウイガーだけだなんて悲劇だ。悲劇と

しか言いようがない。何故神様は、もつと優しくて気の利く素敵な紳士を、日本語習得者に選んでくれなかったんだ！

「志真」

「……何よ」

「部屋は気に入ったか、だそうだ」

「そうそう、部屋。」

「ああっ！そうだよ、部屋！あの……っ」

異常に可愛らしい、志真にはどうしても似合わない部屋。志真は息を吸い込んだまま、天使みたいな笑顔でこちらを見上げるリアラを見つめた。

期待に満ちた瞳。穢れのない瞳って、こういうのを言うのかもしれない。分かる、分かるぞ。言葉が通じなくても、彼女が何を期待しているのか。

「あの、あの……」

正直に言うべきか、大人になるべきか。志真は。ちらり、と横に立つウィガーを見上げれば、相変わらず険しい顔でこちらを見ている。その目は何かを促しているように見えた。気のせいかもしれないけど。

「えー、そうですね。大変可愛らしい部屋だと思います。でも！私が住むにはちよつと立派すぎて心苦しいです。できればもう少し普通の……じゃなくて、狭くても暗くてもこの際汚くても掃除しますから！できれば身分相応の部屋に代えてください」

よし。

しおらしく、断りの文句を述べる事に成功……と思ったのだが。

ウィガーの通訳に、何故かリアラは歓声を上げ志真の手を握ってきた。え、何か反応が。

「ウィガー？」

「……気に入ってくれて嬉しいと」

「ウィガー！？」

何を言ってくれちゃってるのだ！

部屋は結局変えてもらえなかった。

この件で、すっかりウイガーへの不信を強めた志真だったが、結局のところ言葉が通じる相手は彼しかいない。腹が立つが、どうする事もできなかった。

まあ、住むところがあるだけありがたいのは確かだ。諦めよう。この宿屋の住み込み従業員は後3名。まず、ウイガーの異母妹でリアラの娘のフィオーネ。焦げ茶色の長髪の、背の高いお姉さん。きりつとした感じの落ち着いた人で、どちらかというとウイガーに似ている。彼女は主に宿屋の受付にいて、財務関係を引き受けているとか。

ちなみにウイガーは警備を担当（意外と物騒なのか）しているんだそうだ。

酒場件、食堂にいるのがカオロン、ミーチェ夫妻。

まずカオロンが酒場を担当している大柄な男性で、声が大きくていつも笑っているような陽気な人。もじゃもじゃ髭だし、眉毛も凄くて怖い人かと思ったが、優しい人だった。ウイガーに教わった挨拶をすると、にやっと笑って頭をがしがしと撫でてくれた。正直ちよっとくらくらした。その後には飴玉をいくつか渡された。もしかして、子供だと思われている？

次に、調理を担当しているミーチェ婦人。カオロンの奥さんでやはり大柄、物凄く太った肌の綺麗な女性だ。年はカオロンより二つ下の58歳だそうだけど、皺があんまり無くてもっと若く見える。ミーチェも優しくて明るい人で、やっぱり頭を撫でられた。彼女がくれた何かの实のパイっぱいものは、物凄く美味しかった。

宿屋の住人はこれで終わり。

後は、通いの従業員が3名いる。

掃除や洗濯、ベッドメイキングなどをしているアンナ。背の高い

細身の女性で、そばかすの浮いた白い肌に金髪碧眼。忙しそうにしながらも、鼻歌交じりで何だか楽しそうに仕事をする、随分気さくそうな人だ。

次に給仕を担当しているルーミケラウス。褐色の肌に、縮れた黒髪、濡れたような黒い瞳の随分色っぽいお姉さん。豊満な胸にくびれた腰、きゅっと上がったお尻とか大変羨ましい体型。ゆったりした喋り方で、やたらとスキンシップを図ってくるので、ちょっと困ってしまう。私は女です、女！と必死で念じていたけど、あっちは分かっているからかかっていたらしい。

あわあわしている志真が、面白かったそうだ。

最後に調理を手伝っている、ラクト。25歳、男性。彼についての話は、まだ対面する前に聞かされていた。

フリッパという種族であること。成人しても130cm程の身長で、耳が平たく尖っていること、尻尾があること、肌の色が青みがかっていること。

この世界には色々な姿形の人がいるという事は、教えられていた。大多数の人間は、志真とそんなに変わらないが、鱗があったり毛むくじらだったり。

「ラクトは繊細だ、失礼な態度を取るなよ」

そうウィガーがしつこく念を押すものだから、余計な緊張を強いられた。ラクトの事はまだ良く分からない。挨拶した時もぺこりと頭を下げるくらいで、会話は何もなかった。

嫌われたのかなと不安になったけど、ラクトは元々無口なのだそう。働き者で素直な良い子というのがミーチェの批評。どうせなら、仲良くやっていきたいな。

「こんなところ、かな」

シャープペンシルを机において、出来上がった『宿屋の住人表』を眺める。皆の名前を覚える為に作ったものだ。

似顔絵に年齢、特徴などを書き出してある。絵はあまり得意じゃないが、自分が分かれば良いのだから問題は無い。

「そろそろ、寝よ」

夕飯も済んだし、お風呂も入った。今日は志真のする仕事の説明（掃除とベッドメイキング、それから給仕）を受けた上、ウィガーから厳しく言葉を教えられて疲れていた。

おかげで挨拶と名乗り方は覚えた。「これいくらですか」と「迷子になりました、宿屋ファツダラまでの道のりを教えてください」も。

フィオーネと二人で買い物に行く事になっていた。言葉が通じないのが不安だが、ウィガーは忙しいというので、仕方が無い。

まあ、何とかなるよね。

ベッドに入って目を閉じる。ふつかふかの感触に、感動を覚える。シートはさらっと心地よく、花みたいな香りがした。

そのままあつという間に眠ってしまった志真は、暗闇の中でそつと動くそれには気がつかない。

独りではばら、と捲れるノート。持ち上がるシャープペンシル。そして、書き足される文字。

宿屋に住まう、もう一人の存在に志真はまだ気が付いていなかった。

### 志真と宿屋一室、曰く付き 3

朝食の後、志真は眉間に皺をくつきり刻んだウィガーと顔を突き合わせ、言葉の勉強をさせられるという苦行を強いられていた。

聞きなれない言葉を懸命に聞き取ってメモを取り、口に出してみる。ダメだしが入りもう一度。片言でも意味は通じるからと、まず単語を覚えさせられているが、いい加減頭がこんがらがってきた。

「ちよつと休憩！」

「それは俺が決める事だ。ほら、続ける」

有無を言わせぬウィガーの態度に、志真は大きな溜息を吐いた。勿論、必死にならなければならぬ状況なのは分かっている。仕事をすることも学校に行くにも、言葉が分からなければ始まらない。

しかしこのウィガーのいかにも迷惑そうな態度は如何なものか。志真だって、好きで迷惑かけているわけではない。

「志真」

促されて、渋々口を開く。結局のところ、どんなにむかつく相手でも、唯一言葉が通じる相手なのだ。志真はウィガーに頼るしかない。この世界の言葉を覚えるまでは。

（早く覚えてやる！）

やる気を出したのは良いが、結局のところ平凡な頭脳を有する志真なので、暫くはこの勉強会は終わりそうになかった。

昼。疲れきった志真は、もそもそと昼食を取っていた。暫しの休憩時間。宿屋は忙しいから、皆で食事を取るのには朝くらい。後は皆がそれぞれ順番に暇を見つけて食事を取る事になっている、とウィガーから聞いている。そのウィガーも、店の方へ行っただけ帰って

こない。

はあ。食べながら思わず溜息が出る。食べ物が不味いわけではない。ちょっと癖のあるスープ以外は、とても美味しい。

ほんのり甘い茶色のパンに、チーズとハーブのスパイスのきいた炙った鶏肉と菜っ葉を挟んだ、サンドイッチ。酸味のある具沢山の野菜スープに、黄色いプリンみたいなもの。美味しいのだが、一人で食べる何となく味気ない。

(…かといって、ウイガーにいて欲しいわけじゃないけど)

あのしかめっ面を見ていたら、気が休まらないし食欲も無くなりそうだ。

時間が惜しいとか言って、食事中にも単語を覚えさせられるに違いない。戻ってきたら、再びあの悪夢のような勉強会が始まるのだと思うと、自然と溜息が出てしまう。

面倒くさい…けど、このままじゃ困るのは志真なのだ。それは分かっている。

「頑張る…頑張ろう」

気合を入れて、志真はサンドイッチを口へ押し込んだ。

食事を終えて暫くしても、ウイガーは戻ってこなかった。暇なので、先ほど覚えた単語の書き取りでもしてみる。こういうのは、繰返しが大切なのだ。多分。暫く真面目にやってみたが、すぐに飽きてしまった。

「ウイガー、遅い」

テーブルにうつ伏せになって目を閉じる。すぐに心地よいまどろみがやってきた。勉強疲れと、お腹が膨れたせいだろう。

うとうとする志真の耳は、くすくすと笑う女性の声を拾い上げていた。誰かがどこかで笑っている。押し殺すみたいなの、笑い声。良いな、楽しそうで…。

楽しくなんかいわ

声はすぐ耳元で聞こえた。志真はがばりと起き上がって、慌てて辺りを見渡した。誰もいない事を確認して、未だに寒気の残る首筋に手を置く。

気のせい、か？

ばくばくと心臓が音をたてていた。間髪置かずドアをノックする音が響いた為、志真は飛び上がった。

「…！な、何よ今度は」

「シマ？」

はつきりとしたやや低めの女性の声が、志真の名を呼ぶ。この声は確か…。

「フィオーネ、さん？」

小さな音をたてて、そつとドアが開く。顔を覗かせたのは、ウィガーに似た顔立ちをした彼の妹フィオーネだ。

どんな人なのかまだ良く分からない、その上言葉が通じない相手だ。嫌でも緊張してしまう。今は、通訳となるウィガーもいないのだ。緊張気味の志真に対して、フィオーネはにこりと笑いかけた。兄と違って愛想の良い、爽やかな感じの笑顔だ。

「こんにちは、シマ」

「え…！あ…こ、こんにちは！」

ゆっくりとどこかぎこちない発音の日本語の挨拶だった。たったの一言だったが、何だか嬉しい。穏やかな雰囲気を纏ったフィオーネに、自然と志真の緊張も解れた。

「えっと、用、何か？」

先ほど覚えた単語を必死でひねり出して、口にしてみる。フィオーネは少し驚いたように目を丸くした後、笑みを深めた。

「兄貴に頼まれたの。貴方を買った物に連れて行って、必要なものを揃えるようにって」



志真に分かりやすくゆつくりと話してくれている、のは分かるのだが。聞き取れたのは兄という単語と、買い物くらいのものであった。兄って、ウィガーの事だよな、と志真は頭を悩ませる。買い物…って、ウィガーは買い物に出かけたとかそういう事だろうか。

フィオーネは、悩む志真の手を引いた。

「来て。私と一緒に、買い物に行こう」

今度のは、もう少し分かった。来てと、行こう。つまり、買い物に二人で行こうという事だ。多分。

志真の持ち物は少ない。簡単な日用雑貨から、服に下着と揃えるものは沢山あった。身の回りのものを揃える為の支度金は用意されていたから、お金の心配は暫くはしなくて良い。

賑やかな大きな道に面した衣料品店を何件か周り、服を買った。

フィオーネとの買い物は楽しかった。言葉は殆ど分からなかったが、何となく言いたい事は伝わってきた。

可愛い小物やアクセサリーを見たり、互いに服を試着して見せ合ったり。楽しく買い物しながら、フィオーネは志真に新しい言葉や、買い物の仕方を教えてくれた。更に、宿屋周辺の店の場所なども志真は覚えた。

きつと、店で働くようになった時に、必要になる事なのだろう。

無愛想な兄と違って、愛想よく明るいフィオーネは、何処へいっても声をかけられる。笑顔で挨拶する彼女の隣で、志真も真似て挨拶しにこにこ笑ってみせた。近所付き合いは大切だ。特に商売やっているとこなんかは。

一通りの店を回った後で、フィオーネは志真の顔を見下ろした。

志真は162cm、低い方では無いのだが、フィオーネは更に背が高い。

「シマ、疲れたでしょう。そろそろ帰ろうか。もうすぐ夕飯の時間だし、私も手伝いに行かなくちゃ」

殆ど聞き取れなかったが、帰ろうと言われているのだなとは何となく分かった。大分疲れていたので、志真としても助かった。

宿屋の入り口では、客商売向けではない顔のウィガーが仁王立ちで待っていた。第一声はお帰りではなく、遅かったなである。嫌になるな、この男。

「フィオーネ、食堂で人手が足りなくて困っているから早く行ってやれ」

「うん、すぐ行くわ」

「悪かったな」

「良いのよ。私も楽しかったし」

入り込めない兄妹の会話。というか、入り込もうにも何と云っているのか分からない。「またね、シマ」と笑顔を向けたフィオーネが去っていくのを見て、志真は慌てて声を出した。

「フィオーネさん、ありがとう！」

これも今日覚えた言葉だ。フィオーネは振り返って微笑むと、小さく手を振って駆けて行った。

「随分仲良くなったようだな」

「うん。……フィオーネさんって、ウィガーと全然似てないから」

「どういう意味だ、それは」

ウィガーはぎろりと志真を睨みつけた後、小さく溜息を吐いた。その様子に、あれ、と思う。

「どうしたの、ウィガー。何か疲れてない？」

「……いや」

声に覇気が無い。何かあったのだろうか。志真に言葉を教えている時は、もっと元気があったような気がする。今日の午後、ウィガーは来なかった。最初の予定では、午後志真に言葉を教える事になっていた筈だ。解放された嬉しさで気にしていなかったけど。

気がついてしまうと、気になってくる。

じっと見上げる志真を、ウィガーはどこか物憂げに見下ろす。

「何なのよ」

「……関わりたくなかった。だから、俺は日本語を選んだんだ」

「ウイガー？」

「流されてくる数が少ないのを選んだ筈なのに、全く」

ついてない、とウイガーは疲れたように額に手をやった。何があったのか分からないが、打ちひしがれている。

「ついてないのはこっちだよ。いきなり訳分かんない…異世界だとか、もう自分の世界には帰れないと言われてさ。何でこんな事になっちゃうんだろ」

ウイガーは空色の目で、じつと志真を見下ろした。

「……何で、か」

「ん？」

「いや。……何でもない。部屋に戻れ、後で勉強の続きだ」

「まだやるの!？」

思わず声を大きくした志真に向って、ウイガーは薄く笑って見せた。

この日、ウイガーがどこで誰と何をしていたのか。志真が知るの  
は大分先の事となる。

## 志真と宿屋一室、曰く付き 4

夕食後4時間ほど自主勉強をさせられ、勉強の成果を確認した後、漸く志真は自由時間を与えられた。頭がパンクしそうで、よろよろとベッドに倒れてから、あ、そうだと起き上がる。

日記がまだだった。

まだ真新しいノートを開き、ちらりと昨日書いた分に目を走らせる。

「え」

そこに、自分が書いた覚えの無い一文を見つけて、志真の目は丸くなった。というか日本語じゃない、今勉強中のこの国の言葉だ。絶対に志真が書いたものではないと断言できる。なんて書いてあるのかまでは、読めない。達筆すぎて。

一体誰が何を書いたのだ。人の日記帳に！

志真は眉間に皺を寄せて唸った。人の日記を読むなんて…って、読めないのか？ウィガーなら読めるかも知れない…。ウィガーならウィガーじゃなかったら、読めないから当然何て書いてあるかわからずに、日記だとも気がつかないかも。そして、最後の一文。

何て書いてあるんだろうか。非常に気になる。

むくむくと好奇心が湧いてきた。誰が何を思って書いたのか。聞けそうな相手は、不本意ながらウィガーくらいしかいなかった。

酒場にいたウィガーは、まずやってきた志真に顔を顰めて立ち上がった。有無を言わせず志真を部屋へと連れて行く。お前、あそこはこんな夜更けに子供が来るようなところじゃ…との説教を聞き流し、ノートの一文を突きつける。

「何だ…？」

訝しげに、ちょっと面倒そうにそれを目にしたウィガーの顔色が、さっと変わる。いつもより更に険しい顔で、ウィガーは志真を睨んだ。

「お前、これを誰から聞いた」

「……誰なのかは、私が知りたいんだけど。ちゃんと話聞いてた？これ、私の日記帳に勝手に何か書いてった人がいるみたいで、私としては誰が何を書いたのか知りたいんだけど」

「……確かに、お前の字はもつところ、ミミズがのた打ち回ったかのような字だったな。これは綺麗過ぎる」

「そこまで酷くない！多分。……で、これなんて書いてあるの？」

わくわくとした志真の様子とは逆に、ウィガーの表情は渋い。彼が怒るような事が書いてある、という事だけは間違いない。

「他の人に見せてみた方が良い？」

「よせ」

ウィガーは苦虫を潰したような顔で、低く唸るような声を出した。「知らない方が良い事もあると、俺は思うが。どうしても聞きたいか？」

「だって、気になるよ」

「……忠告はしたからな。読み上げるぞ……『私はラスカウル。ここで殺された女』そう、書いてある」

それは1年と半年ほど前の事だ。

むっと湿った空気が纏わりつくような、息苦しい夜。草木も眠る丑三つ時。夜の静寂を引き裂くような、けたたましい女の笑い声が

……

「悲鳴じゃなくて？」

「……笑い声だったらしい。けたけたと甲高いな」

それはそれで怖い、ような。いや、それよりも。

「らしい、って。実際ウィガーが体験した話じゃ無いんだ」

「……ああ。俺はその時はまだ、騎士だったからな。そもそもここにいなかった」

という事は、ウィガーが宿屋で働き始めたのは最近の事なのか。

「それで？」

「笑い声の主は、この部屋の当時の泊り客、ラスカウル嬢だった。酒を飲み、あろう事が男を4、5人連れ込んで大騒ぎだ。名のある貴族のご令嬢とはとても思えぬ行動だったそうだ」

「ふーん、で、追い出したの？」

「……いや。だが、注意はしたらしい。連れ込んだ男は帰らせて、静かにすると約束をさせた。その日はそれで収まった。……だが、次の日」

ウイガーの声が、地を這うほど低くなる。自然と志真も首を竦めた。

「ラスカウル嬢は刺殺死体で発見された」

「え！」

意外と物騒な世界だな、と志真は顔を引きつらせた。

「連れ込んでいた男達の内、一人が帰ったと見せかけて潜んでいたらしい。金品目的で、抵抗したラスカウル嬢は無残にも刺し殺されたというわけだ。犯人はすぐに捕まったが……客足は遠のいた」

「幽霊が出た、とか？」

「いや。そんな噂もあったが、何より客の安全を守れない店だと世間に認識された、その事が問題だ」

「え、でもその、ラ、ラ、ら……なんとかさんが、自分で連れ込んだ人だったんでしょ？可哀想だけど、自業自得っていうか……」

「金を貰い客を預かる。それは客の安全も預かるという事だ。例えば客が自ら蒔いた種でも関係なく、宿屋で客が襲われたならそれは宿屋の責任になる」

そういうものなのか。何となく納得いかない気もするが、それがこの世界の常識なのだから仕方無い。

「この辺りでの宿屋では、人が死んだ部屋は3年閉めておく……客を入れないのが普通だ。この部屋は家の一等部屋の一つだからな、迷惑な話だ」

「……って、私は？」

「お前は客じゃない」

まあ、そう言うとは思っていたけど。いわくつきの部屋だと知っていたけど、ちゃんとした話を聞くとやっぱり気持ち悪い。ここで人が殺されたんだ。

「……で、それは良いけど、結局これ書いたの誰なわけ」

「俺が知るか」

さもどうでも良さそうな言い方だった。その事に、志真は少々むっとした。

「ちょっとは真面目に考えてよ、怖いじゃん。こういう陰湿な嫌がらせとかされるの」

「…お前、何か嫌がらせされるような事をしたのか？」

「そんなの分かんないよ。だって、言葉だって殆ど分かんないのに。あ、異世界人差別とかそういうの？」

ウィガーは一瞬押し黙った。何かあるのか。軽い気持ちで言っただけだったのに、ぎくりとしてしまう。ウィガーは気難しい顔をしたまま、ゆっくりと口を開く。

「はっきり言えば、そういう意識はある。この際、忠告しておくが、中には相当の悪意と嫌悪感を持つ者達もいる。そういう輩は何をするか分からないからな。お前も注意しておけよ。だが、これはそれとは別だろう」

あるんだ、やっぱり。日記に書かれた謎の言葉の事など、霞んでしまう程度にはショックだった。割りと優しくしてもらっていたから、安心していただけなのに。

「これはどちらかというと、この宿屋に対する中傷だから……おい、聞いているのか？」

私だって、好きでこんなところ来たわけじゃないのに。

「志真？」

「もう良い。今日は寝る！何か疲れた」

驚いたように目を見張るウィガーに背を向けて、志真は部屋へと歩き出した。あれ以上ウィガーと話していたら、八つ当たりをしてしまう。良くも悪くも、彼ただけだから。ちゃんと話ができるのは。

「何だよ、何だよ、もう」

志真は柔らかすぎるベッドにもぐりこみ、枕をばふばふと叩いた。考えないように、見ないようにしていた不安が頭をもたげる。

こんなところで、本当にやっていけるんだろうか。

右も左も分からない、知り合いの一人もいない、言葉すら通じない、たった一人で。

「帰りたいたいよう」

言葉にしてしまうと余計に苦しくなった。何でこんな事になっちゃったんだろう。何がいけなかったの。考えたって分からない。

ずるずると落ちていきそうな思考に蓋をして、志真は眠る事にした。

寂しかったの

色々な人がいてくれたけど、本当に私をみてくれる人はいなかった私を、本当に必要としてくれる人

47

俯いた顔は、長い黒髪に隠されてよく見えない。体にぴったりした黄色のドレスの袖から、病的に白くて細い腕が伸びていた。陰気な女だ。

か細い溜息が聞こえた。

一人で良かったの

たった一人でも、私の事を見てくれるなら、必要としてくれるなら。それだけだったのに

寂しい。

その思いに、志真の想いが重なる。寂しくて、寂しくて、辛い。

俯いていた女が、ゆっくりと顔を上げた。痩せすぎてこけた頬へ髪が流れ、大きくぎよろりと血走った緑の目が現れた。



「怖っ！」

志真は跳ね起きた。心臓が煩く音をたてている。見知らぬ女の姿が、未だ脳裏にはつきりと焼きついていた。多分、ウィガーから聞いた話のせいで、こんな夢を見てしまったんだろう。

「……聞かなきゃ良かった、かな」

何も知らないでいるのも気持ち悪いけれど。志真は少しだけ後悔していた。夜だから当たり前の暗闇が、静けさが、今は不気味なものに感じられる。部屋の隅やらカーテンの影やらに、何かが潜んでいるような。

やめ、やめ。志真はシーツを手繰り寄せて、もう一度ベッドに潜り込んだ。さっさと寝てしまおう。

## 菊乃の奮闘 1

菊乃がこの妙な世界に来てしまったから、一月と10日が経過していた。

保護施設と呼ばれるこの場所から出る事は禁じられ、殆ど軟禁生活だ。食事は三度きちんと出るし、入室禁止と説明された部屋以外と、中庭に出る事はできるから、それほど悪い待遇ではない。

最も、外へ出れば他の施設職員と顔を合わせる事になるから、あまり外へ出かける気にはなれなかった。

リザレット・クラウラ以外の人間は、日本語を話す事ができないというのは真実らしかった。聞きなれない言葉をかけられても、何と反応して良いのが困る。一人で過ごしたいと思っても、菊乃はどういうわけか怪しまれているのだ。いつ何処へ行っても、必ず誰かが菊乃の後をついて来た。勿論偶然ではなく、見張られているわけだが。

見られているのだと思うと、息が詰まる。

だから菊乃は一日の大半を部屋で過ごした。動かないとなるとお腹も空かず、食事を残すようになった。運動不足を解消する為に、時々腹筋や腕立て、足踏みなんかを試みるが、そんなに長くは続かない。

リザレットが言葉を教えると言い出したのは、20日が過ぎた頃だ。

暇を持て余している菊乃を見かねたのか、最初からそういう予定だったのかは分からない。だが、この世界でこの先も生きていかなくてはならないのなら、言葉を覚える事は必須課題だ。ありがたい申し出だった。

必死になって勉強を始めて14日目、菊乃は酷い熱を出して寝込むはめになった。

体中が軋むように痛んで寝ることもできなくて、何度も吐いた。正直、あの時は死ぬかと思った。駆けつけた職員達が手当てしてくれた事は、おぼろげに覚えている。途中で意識を失ったらしく、次に目が覚めたのは3日後だった。

今まで大した病気もしなかったし、持病も無い。もしかしたら、異世界特有の未知なる病原体にでもやられたのだろうか……と不安になったが、多分ストレスから出た症状だろうと説明された。

慣れない異世界生活は、考えていた以上に菊乃の体と心を蝕んでいたようだ。

「調子はどうだ、キクノ」

貸し出された絵本を見ていた菊乃は顔を上げ、部屋に入ってきた人物を見上げた。長身痩躯、焦げ茶色の短い髪をした青年は、いつもながら気難しげな顔をしている。またリザレットと言い合いでもしたのであろうか。

彼の名はウイガー・ハルベルト。

この国において数少ない日本語習得者の一人で、リザレットと共に菊乃に言葉を教えてくれている人だ。いつもは一人で来るのだが、今日は違った。

背の高い彼の背後に、金髪でショートボブの少年が控えていた。綺麗な女の子みたいな顔をしているが、体つきから見て多分男だろう。誰だろう、気になるがとりあえず菊乃は。

「こんにちは、調子、は、大丈夫」

教えられた言葉を思い出しながら答える。ウイガーは浮かぬ顔のまま、重々しく「そうか」と返した。いつもより、何だか疲れてい

るようだ。

「何か、ある？」

「……ああ、お前に人を紹介しなくてはいけないんだが。正直気はすずまん。というか、何で俺がこんな事を……」

ウィガールの言葉は日本語だったから聞き取れるが、半分は独り言の愚痴のようだった。

「うしろ？」

「ああ、そつだ。彼は」

言いかけたウィガーを押しつけるようにして、少年が前へ出た。ふわりと風に乗って、何やら甘い匂いが届く。香水だろうか。菊乃を値踏みする透き通った緑の目は、美しいがどこか冷たい。薄い桃の唇に浮かんでいる笑みも、友好的なものには見えなかった。

ふむ、と少年はにこりとした。

「女というには子どもだな。これならお前の心配は余計だよ。少なくとも後5、6年は育たないと食指が動かない。最も、育っても俺の好みになる可能性は期待できないな。ジェレミーのヤツは物好きだから分らないが」

少年の言葉に、ウィガーが苦い顔をする。菊乃には彼が何を言ったのか、よく分からなかった。女、と子ども。ちゃんと聞き取れたのはそこだけだ。

多分、菊乃の事を言ったのだろう。

あんまり良い事は言われてないのは雰囲気で分かる。

「ユーイ・ユーイだ。よろしく」

次の言葉は菊乃に向けられていた。

「坂巻、菊乃です。以後お見知りおきを」

「堅いな」

リザレットに教えられた挨拶をすると、少年…ユーイ・ユーイは眉を顰めた。何か間違っていただろうか。

「せめてもう少しにこやかに言えば可愛げがあるのに」

「きちんとした挨拶です。妙な文句はよしてください」

「ああ。お前とリザレットが教えてるなら、こうなつて当然か。ま、どんな言葉でも、日常会話で困らない程度に話せれば良いが。きちんと説明しておけよ、ウィガー。一週間後にまた来る」

相変わらず渋い顔のウィガーに何やら告げて、ユーイは再び菊乃に目を向けた。

「じゃあ、またね。キクノ。後はよろしく、ウィガー」

軽く手を振つて少年は部屋を出て行った。一体何だったのだろうか。困惑する菊乃を見下ろすウィガーの表情は、どこか億劫そうだった。「なに」

「さっきのは、お前の身元引受人だ。一週間後にお前はここを出て、ユーイのところで暮らす事になる。お前が一人で暮らしていけるようになるまでは、あいつが保護者だ」

日本語でされた説明に、菊乃は目を丸くした。

「私の、保護者？」

「ユーイはあれで俺より年上だ。確か、今年で31になる筈だ」

「……………」

びつくりだ。どう見ても20を越えているようには見えなかった。ウィガーよりも年上だったなんて。……年は兎も角として、あの人を保護者として頼つても良いものだろうか。あまり良い印象は受けなかったし、それは多分向こうも同じだろう。

それに。

「ここを出ても構わないんですか？」

「ああ。これはリザレット達が話し合つて決めた事だ」

「それなら、私の疑いは晴れたんですね？」

ウィガーが言葉に詰まる。という事は、菊乃はまだ疑われているのだ。施設を出ていける事は、前進だろうか、それとも後退なのだろうか。

ユーイはきつと、新たな菊乃の監視役なのだ。

「ここから出たら、私はどうなるのですか？」

「この世界で働き、生きていく為の知恵や術を身につける。その方法はユーイが決めるだろう。普通はどこかで働きながら、学校に通うが。菊乃の場合は、そうはならないかもしれない」

「学校に通えるんですか？」

「普通はな。異世界人達がこの世界の成り立ちや歴史、その他もろもろの常識なんかを学ぶところだ。言語以外は大体そこで学べる」  
「そんなところがあるのか。」

「行ってみたいか？」

「はい」

「学ぶ事は生きる為に重要な事だ。それにそこには、菊乃と同じ状況の者達がいる。」

「分かった。一応ユーイに話しておこう。ユーイは中々人の意見を聞かないから、どうなるかは分からないが」

「ユーイさんは、どんな人なんですか？」

「……異世界同調現象研究の専門家だ。少々特殊な……学者というくくりで良いか。性格はともかくとして、研究者としては優秀な男だ」

「異世界同調現象研究……。もしかして、菊乃を引き取るのは研究目的なのだろうか。」

「正直に言えば不安だったが、今からあれこれ思い悩んでも仕方が無い。今、できる事はとりあえず言葉を少しでも覚える事。そう思っ  
つて、菊乃は必死で言葉を覚えた。」

ユーイ・ユーイはそれから菊乃を引き取る日まで、1度も来なかった。  
った。

忙しいのか、興味が無いのか、忘れられているのか。

少なくとも菊乃にとって、その1週間は短かった。言葉の聞き取りも、話すほうも、読み書きも自信が無い。ユーイ・ユーイのところに、日本語を理解する人がいないというし、リザレットもウィガーも今のように教える事はできなくなると言っていた。

今の内に、少しでも多くの言葉を覚えなければ。

菊乃はすぐに辞書を作ることを思いついた。ウィガーとリザレットに協力してもらい、日常会話に必要な挨拶や使える言い回しを、まずこちらの文字で書いてもらう。その下にカタカナで発音を書き、更に意味を付け加える。思いつく限りのものをとにかく書いていった。まとめるのは、後でもできる。

それから単語。こちらはこの世界の子供用の辞書を一つ貰い受け、そこに直接意味と発音を書き込んだ。絵つきだから、分かりやすい。毎日ひたすら聞いて書いて書いて書いて書いて書いて。どうにか施設を出る日に間に合わせる事ができた。

やりとげた。

そんな清しい気持ちで、出立の朝を迎える。菊乃は見送りに出た。くれたリザレットとウィガーの二人に深々とお辞儀をした。

「おかげさまで、完成です。ほんとうにありがとうございます。」

お二人、には、とても感謝しています」

ほんの少しつかえながら、早速練習した言葉を述べる。

今日も何か悩み事を抱えているような様子のウィガーだったが、菊乃の言葉に笑顔を見せた。それにちよっと吃驚する。ウィガーはいつも難しそうな、困ったような顔をしている事が多くて、笑った顔はとても貴重な。

「いや、そこまで感謝されるほどの事はしていない。それが完成したのは、お前が頑張ったからだ」

「お二人がたくさん、助けしてくれました」

「仕事ですから」

リザレットは素っ気無く言うと、ほんの少しだけ笑った。

「貴方の頑張りは認めます。ここを出た後も大変でしょうが、その調子で頑張ってください」

「ありがとうございます。がんばります」

少しでも感謝の気持ちが伝わるように、菊乃は深々と二人に頭を下げた。

「何をしているのですか？」

ウィガーでもリザレットでもない、耳障りの良い低音の男性の声に、菊乃は頭を上げた。声の主は、菊乃達から数歩離れた位置で彼らを不思議そうに眺めていた。

「ジェレミー、お前が来たのか」

「家の先生が出向くわけないでしょう。妙齢の女性が相手ならともかく」

そう言っって肩を竦めるのは、温和そうでありながら、非常に色気のある男性だった。

長身で、すらつと足が長く、均整の取れた体つきをしている。鮮やかな金髪の長さは顎にかかるくらい。前髪は右に流し、残りを耳の後ろにかけている。その為露になった左耳に赤いピアスが光っていた。くっきりとした二重で、目の色は灰がかった青。程よく肉厚の唇の左端に黒子があった。

視線を感じたのか、ウィガーの方に向いていた灰青の瞳が、菊乃に向けられる。

「彼女、ですね」

「ああ…名前は」



ウイガーを制して、青年は菊乃に一步近寄った。

「僕はジェレミー・ニス・ホークと言います。ユーイの使いで、貴方をお迎えに上がりました。貴方のお名前を伺ってもよろしいですか？」

「……私は、キクノ・サカマキといいます。よろしくお願いします」  
頭を下げると、ジェレミーは目を丸くした。

「彼女の国の挨拶だ。そうやって礼を示す」

「ああ、なるほど。さっきのあれもそういうわけですか。僕はつきりウイガー達がいいたいけな少女を虐めているところに遭遇したのかと、焦りましたよ」

「お前達と一緒にするな」

打ち解けた様子でやり取りする二人を、菊乃は黙ってみていた。

早い口調で聞き取りは難しいが、頭を下げるという行為が一般的でないという事は分かった。これからは気をつけよう。

「さて、あまり遅くなるとうちの先生が煩いですから、そろそろ行きましょうか」

「はい」

菊乃が持っていた二つの鞆のうち、制服や、こちらで揃えた衣服、本などが入った大きな鞆をジェレミーが持った。そちらは、ともう一方の鞆も持とうかと訊ねられたが、菊乃は丁寧に断った。これは、あちらから持ってきた教科書の入った学校指定の鞆だ。

「キクノ、あまり無理はするなよ。体には気をつけておけ。元気でな」

先にウイガーが。

「自分の身の上を忘れず、慎重に行動をするように。それでは、お元気で。幸運を祈ります」

次にリザレットが別れの言葉を日本語で述べる。

「今までお世話になりました。さようなら、お元気で」

やはり、慣れた言葉の方がちゃんと気持ちが入められる。それが、別れの挨拶となった。二人に見送られて、菊乃はジェレミーについ

て歩き出した。

施設の外を歩くのは、勿論初めてのことだった。中にいる時は景色を楽しむ余裕も無かったから、町をちゃんと眺める事も今が初めてだ。

全体的に暖色系…それが最初の印象だった。

オレンジや、ピンク系統の屋根が目立つ。壁の色は白よりモクリム色や、薄いレモンの色が多いようだ。舗装された道はアスファルトではなく、敷き詰められた赤褐色のタイルのようなもので、継ぎ目の引っ掛かりがなかった。

道は広めに設計されていて、歩道と車道に分かれている。車道の真ん中に一本オレンジ色の細い道が通っていて、車道自体も二つに分かれているらしかった。その上を行きかうのは馬や馬車といったものから、大きなトカゲのような生き物。更には少し宙に浮いたボードのようなものまで。とりあえず車は無いようだ。

一番驚いたのは魔法の絨毯のように、上の方を飛んでいる長方形の板に乗った人々だった。

「…ついつい見上げてしまう菊乃を、ジエレミーは笑った。

「あんまり上に気を取られていると、転んでしまうよ」

「…なに、ですか？」

「転ぶから、危ないよって言ったんですよ。うーん、分からないかな？ああ、そうだからこうすれば良い」

ジエレミーはにこりと笑うと、空いている方の手で菊乃の左手を捕まえた。

「…！」

「これなら、はぐれないし、転ばない。安心ですね」

「そこでようやく、菊乃はジエレミーの言いたい事を理解した。

「だ、大丈夫です。気をつけます。手、いりません」

「遠慮はしないでください。あ、後、妙な下心などはありませんのでご安心を。ただ、君に何かあったら大変ですから」

手を繋いだまま歩き出すジェレミーに、菊乃は困惑した。何を考えているのだろう。ジェレミーは最初から菊乃に友好的で、その事が菊乃の頭を混乱させる。

菊乃は異世界人だ。

それも、只の異世界人ではなく、何だかよくは分からないが、この世界にとって良くないかもしれない異世界人なのだ。

最後は色々と良くしてくれたウィガーも、最初は必要以上に関わらないようにしていたし、リザレットなどは最後まで菊乃の様子を見極めようとしていた。施設の職員も、菊乃に近寄ろうともしなかった。

それなのに、このジェレミーという人は……。

単に人が好いのだろうか。

初対面で気に入られたのだと思えるほど、菊乃は自惚れていなかった。際立って美しいわけでも、可愛いわけでも無いし、性格も愛想が無いとか愛嬌がないとか良く言われたものだ。

「俯いていないで、今の内に良く見ておくと良いですよ」

考え込んでいた菊乃は、ジェレミーの顔を見上げた。

彼は相変わらず柔らかい笑顔を菊乃に向けている。そこに、更に菊乃を困惑させるものがあった。

「屋敷についてしまったら、きつと貴方は暫く自由に外へ出してもられないでしょうから。下手をすれば、一生こんな風に外を歩けないかもしれない」

彼の言葉は生憎と菊乃には通じなかったが、哀しげな、哀れむようなジェレミーの目は、これからの事を予感させるのに十分なものだった。

菊乃を気遣ってか、ゆっくり1時間ほどかけて、ジェレミーは目

的地に彼女を案内した。

ユーイ・ユーイの家は街の中心部より少し外れた、小高い丘の上にあった。立派な門と赤茶の高い壁に囲まれた広大な敷地。遠くから見たら四角い箱にしか見えなかった。

門の前に立っていた、鈍い色の鎧みたいなものを身につけていた男が、ジェレミーを見つけて頭を下げる。

「お帰りなさいませ、ジェレミー様」

「ただいま。この子がユーイが言っていた例の女の子です。覚えておいてください」

大きくがっしりした体軀はいかにも強そうだ。四角ばった顔に、鋭い三白眼、引き結ばれた唇は大きい。

「菊乃・坂巻です。よろしく、おねがいします」

下げそつになつた頭を何とか押し留める。返事は無かった。門番はジェレミーの方へ向き直り、了解しましたとだけ短く告げた。

「キクノ、おいで」

ジェレミーに促されるまま、菊乃は敷地の中に足を踏み入れた。

これからいったい、どうなるのだろう。

魔女の屋敷にうっかり足を踏み入れてしまったような心境だった。

### 菊乃の奮闘 3

広い玄関ホールで待ち構えていたのは、白いブラウスに、紺色のロングスカートに白いエプロン姿の年配の女性だった。痩せており、いかにも厳しい雰囲気を漂わせる女性で、菊乃は自然と背筋を伸ばした。

「随分と遅かったですね、ジエレミーさん」

細い目が冷ややかにジエレミーを見つめる。

「お待たせしてしまい、申し訳ありません。お叱りは後できっちり頂戴します。とりあえず、彼女の紹介を。キクノ」

怒っているらしい女性に対して、ジエレミーは動じない。促されるまま、菊乃は挨拶を繰り返す。

「菊乃、坂巻です。よろしくお願いします」

冷やかな視線が菊乃に移った。長い鼻の下にある薄い唇の口角が、思い切り下がっている。不機嫌そうに鼻を鳴らして、女性は口を開いた。

「少しは話せるようなのは結構です。私はマーサ。この屋敷の家事全般の一切を任されており、ユイ様が書庫にて貴方を待っていらつしゃいます。ジエレミー、すぐにお連れしなさい」

「はい。承りました。さあ、行こう、キクノ」

入って右側の3番目の扉は長い廊下へと続いていた。かつかつと歩きたびに足音が響く。床は落ち着いた焦げ茶色の木で、良く磨かれているのかつるつると光っていた。

左右に並ぶいくつものドア。この広い屋敷を掃除するのは、とても大変そうだ。

やがて一つのドアの前で、ジエレミーが足を止めた。

両開きの木のドアで、百合に似た花の彫り物が施してあった。ジエレミーがノックをする前に、中から声がする。

「さっさと入れ」

聞き覚えのある声だ。ジエレミーが扉を開け、中に入るように促す。菊乃は躊躇いながら中へ入った。

「しつれい、します」

一面の壁は本で隙間無く埋まっていた。中央に頑丈そうな作りの木の机が一つ置かれていて、そこにユーイは座っていた。読んでいたらしい本を机に置いて、立ち上がる。

「随分遅かったな」

「マーサにも叱られましたよ」

ジエレミーが苦笑する。

ユーイは何だか凄い服を着ていた。フリフリだ。袖口と襟元が白い大き目のフリルになっていて、腕の辺りが大きく膨らんだブラウスに、左右にボタンが3つづつ並んだ、赤いぴちつとした感じのズボン。先の尖ったロングブーツ。

それが、何故か似あってしまったのが凄い。

「ようこそ、キクノ。歓迎する」

ちっとも歓迎する気がないような態度だった。

「あ、はい。しばらくお世話になります。よろしくお願いします」

「お世話はしない。だから、自分の事は自分でするように。ああ、食事と洗濯はマーサがやるが。面倒事は起こすなよ」

にっこりと、笑顔でユーイ・ユーイは言う。聞き取りやすい口調と速さで話してくれたおかげで、何となく理解する事ができた。

世話はしないから、自分の事は自分です、それから…食事と洗濯は、マーサという人がやってくれる。

「理解できたか？」

「はい」

「良いだろう。後、いくつか注意しておく。勝手に門の外に出る事は許さない…、自由にしているのは敷地内の中だけだ。赤いドアノブがついているドアは開けるな。来客中は部屋から出るな、特に客が女の場合は絶対に出て来るな。屋敷の中のを勝手に動かす事も許さない」

矢継ぎ早に禁止事項を言い渡されて、菊乃は固まってしまった。驚いたわけではなくて、何とか理解しようと頭をフル回転させていたからだ。

それでも、半分くらいは聞き逃してしまった。

「あの……」

「文句は聞かない。それから後の注意事項とかもまとめて書いておいたから、ちゃんと読むように」

そう言って赤い表紙のノートを手渡された。

「ジエレミー、キクノを部屋に案内しろ」

「はい。では、行きましようかキクノ。ついて来てください」

「は、はい。おねがいします。しつれいします」

嵐のようなユーイとの面会は数分で終了した。菊乃達が部屋を出る際には既に、ユーイは本を読み始めていた。

「部屋は2階になります。階段は屋敷の両端とホールにあります。基本的にはホールの方から上がってください」

ゆっくり歩くジエレミーの半歩後を、菊乃は大人しくついていく。階段を上がり、右側の廊下。階段側から3番目が菊乃に与えられた部屋だった。

一人で住むには充分すぎる広さがあった。正面の左端にシンプルなデザインの木のベッドと、サイドテーブル。大きな窓を挟んで机と椅子、空の本棚。右側の壁に姿見、クローゼット付きのタンスと化粧台。壁には腰板が張っており、壁紙はごく薄い緑色に白い草花模様だ。

左側の壁にはドアが二つついており、一つはトイレ、もう一つは

お風呂だった。

「服は一通り揃えておきました。気に入ってもらえると良いですが」  
ジェレミーがクローゼットを開けて見せる。可愛らしいワンピースや、少し大人っぽいフォーマルなワンピースなどが6着ほど。それからタンスの引き出しの中にもシャツやブラウス、スカートが。靴や靴下まであるようだ。

「他に必要なものはありますか？」

「あ、の」

菊乃は冷や汗をかいていた。

朝から戸惑ってばかりだ。この良すぎる対応が一番怖い。何かを試されているのだろうか、それとも何かの実験なのか。

「私、お金は……」

「ああ、お金の心配はいりませんよ。異世界人には支度金と、独り立ちするまでの数年間は補助金が……ああ、つまり簡単に言うと、キクノを預かることで、その分のお金はもらっています、と。分かりますか？」

そういえば、以前にリザレットがそんな話をしていた。だが、そんなに沢山お金が支給されるものなのか。

「そんなわけですので、必要な物があれば遠慮なく、僕に言ってください」

「ジェレミーさん、に？」

「はい。僕がキクノの代わりに買ってきますから。ちなみに僕の部屋はこの部屋の隣です」

外へ出てはいけない。だから、だ。充分すぎるほど物が揃えてあるのも、その為なのだろう。菊乃は変に納得した。

食事の時間に呼びに来ますと言って、ジェレミーは菊乃を残し部屋を出て行った。肩の力を抜き、ほっと息を吐く。ジェレミーは親切なのだが、その親切を素直に受け取れない自分が何だか嫌だった。広すぎる部屋を一度見渡してから、持ってきた荷物をもくもくと



片付け始める。

それが終わると机の前に座り、自作の辞書を片手にユーイから渡された注意書きの解読に取り掛かった。全部で20ページもある。1行読むのも難しい。ここにはいつものように教えてくれるウィガ―もリザレットもないのだ。

しかし、菊乃は嬉しかった。やる事が何も無いよりは、熱中できる事がある方が良い。

そうすれば、余計な事を考えずにすむ。

丁度、マーサが置いていった茶に手を出しているところに、ジェレミーが戻って来た。ユーイは入ってきたジェレミーを見ること無く、本に視線を落としていた。

「どんな様子だ？」

「戸惑ってはいますが、思ったよりも落ち着いた感じでしたね。大人しいし、従順で、少し可哀想になります。ああいう子は何ていうか、庇護欲をそそられますよ」

「ジェレミー。分かっているとは思うが、悪い癖は出すなよ」

「冗談ですよ。半分は」

ジェレミーはおかしそうに笑う。ユーイは溜息をついた。

「相変わらず、変な趣味だな。“敵対者”である可能性がある女を」  
「だからこそ面白いと思うんですよ。あんなにか弱くて、大人しい只の少女を、皆が警戒し恐れているところも含めて」

「姿形は関係ない。キクノはあの異世界人に助けられなければ『事故死』していた筈だ」

「こちらの世界に落ちた途端、不慮の事故……溺れたり、崖から落ちたり、獣に襲われたりして命を落とす異世界人は少なくない。確か今回も一人死んだと聞いている。」

「だが、キクノは幸運にも生き延びた。敵対者には奇跡が纏わり付く。その上、彼女を助けたのがよりにもよって異世界人となれば、警戒されて当然だろう。おまけに、当の本人が妙に落ち着いているし」

ユーイは面白く無さそうに鼻を鳴らす。

「泣いたり喚いたりすれば、少しは周りの人間も安心しただろうに。知ってるか、ジェレミー。キクノはこちらへ来てまだ一度も泣いていない」

「意外ですね。泣き喚く女は鬱陶しい、といつもは言っているじゃないですか」

「時と場合に依るだろう。世界と、家族やら友達やら、今までの人生の全てと切り離されたんだぞ。普通は、ウィガーのどこにいる娘のように泣き喚くとか、まだ保護施設にいる男のように現実を受け入れられずに寝込むとかなるだろう。特にキクノみたいな若い女は」

控えめなキクノの様子を思い出す。懸命にジェレミーの言葉を理解しようとしていたキクノに、ジェレミーは好感を持った。そこには言葉も何も分からない場所で家族や友人と切り離され、辛さや不安を抱えているだろうに、という推測が前提にある。

「なるほど。通常泣き喚くべき場面で、泣かず、取り乱さないから逆に怪しまれた、というわけですか」

「そういう事だ。実際、キクノが何を思っているのかはどうでも良い。それが見えないから周りの者は不安になる」

厄介なんだ、そういうヤツは。

ユーイは物憂げに溜息を吐いた。

## 菊乃の奮闘 4

好きな事をしていて良い

菊乃はペンを握り締めたまま、その文字を凝視していた。

4日、いや丁度日付が変わる頃だから、5日目。部屋に籠りきつてユーイに渡されたノートの訳がようやく終わった。最後の短い文を訳し終えた達成感も感じられないまま、菊乃はその言葉の意味を考える。

「……好きな事をしていて良い？何それ」

注意事項に触れない事なら、という事なのだろうが、そう言われなくても。途方にくれてしまう。

この家で一番偉いのはユーイだ。

だが、ジェレミーもマーサも遠慮なく彼に文句を言う。気安い関係のようだ。マーサはきつちりとした性格で、食事は常に決まった時間に用意をする。だが、そこに全員がそろつ事は無かった。大抵はユーイが、時々ジェレミーの姿が無い。

ユーイはどうやら低血圧で、朝食にはまず来ない。太陽が大分昇りきってからようやく、起き出して来るのだ。

その日も例外ではなくて、食卓にユーイの姿は無かった。

彩り豊かな大盛りの野菜サラダに、ミルクの入った大きなオムレツ、切り分けたハム、それから野菜や果物を甘辛く煮込んでペースト状にしたもの（これはパンにつけて食べる）、ハチミツ入りのミルクが、今日の朝食のメニューだった。

「ユーイ様は、昨晚も随分遅かったようですが」

ちらり、とどこか冷たい視線をジェレミーに向けて、マーサは慎重にサラダを取り分ける。

「また、悪い遊びに精を出しているわけでは無いでしょうね」

「マーサさんのご心配には及びませんよ。今度のはお仕事の一環ですから。少しばかり、趣味も担っているようですが、少なくともマーサさんの懸念するような事はありませんよ」

小さなパンにペーストをつけ、ちまちま食べていた菊乃の前に、大盛りサラダと分厚いハムが2切れものった皿をジェレミーは置いた。

食べるということだろうか。

見上げると、今日も完璧な笑顔があった。寝癖などない綺麗にセツトされた髪に、一分の乱れもない服装。それがとても自然である事に、菊乃はいつも感心している。

「キクノはもう少し食べないと、大きくなれませんよ」

小さい子に向けるような事を言われた気がする。

日本人は若く見られることが多いらしいが、それはこちらの世界でも通じる事なのだろうか。出会った直後から不思議な程親切にしてくれるのは、もしかしたら年齢よりも大分幼く見られているせいなのかもしれない。

口の中のパンを飲み込んで、菊乃は隣のジェレミーを見上げた。

「私、じゅうしちです」

自己紹介に必要そうなものは、既に全部覚えている菊乃だった。

ジェレミーは一瞬きょとんとした後、おかしそうに笑う。

「知ってますよ。資料にありましたから。さっきのは、ちょっとからかっただけです」

そうなんだ、と菊乃は納得する。よく考えたらそういうものかもしれない。ここで預かる以上は、菊乃がどういうものか、知っておく必要はあるだろう。

「ああ、ちなみに僕は25です」

大体予想通りの年齢だ。

ユーイの方が余程若く見えるが、ジェレミーがふけているわけではない。ユーイが若すぎるのだ。どう見ても31歳には見えない。菊乃より2つ3つ上くらいと言っても、充分通じる若々しい外見をしている。

この家から出られない菊乃が顔を合わせるのは、ユーイとジェレミー、マーサの3人だけだ。その中で唯一好意的に接してくれるのがジェレミーだった。

ユーイは殆ど無関心で、時折一方的に部屋へ来ては、何をしているのか確認してから去っていく。義務的な応答は、多分定期的にやらなくてはならない類のものなのだろう。

そして、マーサは多分菊乃の事を嫌っている。

自分を嫌っていると分かっている相手と話をするのは、結構疲れる。

しかし、菊乃にはどうしてもマーサと話をする必要があった。

いつものように空になった食器を手に、厨房へ入る。白いエプロンをかけ、せっせと洗い物をするマーサの姿がそこにあった。

「あの」

思い切って、その細い背中に声をかける。マーサは水を止めると、不審そうな顔で菊乃を振り返った。

「手伝い、します」

マーサの細い眉がぴくりと動く。

「結構です」

「……お願い、します。何か、何でも良いです」

「何故ですか。もしかして、ユーイ様からの言いつけですか？」

私はそんな事聞いていませんが、とマーサは不機嫌そうに呟く。

疎ましがられている事は分かっていたが、ここで引き下がりがりたくな

い。

「あの、食べるなら、働く。働いてないなら、食べることは、できない」

働かざるもの食うべからず、と本当は言いたかった。多分通じなかつたのだろう。マーサは不可解そうな顔で、首を横に振った。

「貴方は働く必要はありません。貴方をどうするか、その方針は全てユーイ様が決定する事です。ユーイ様が貴方に働けと言ったわけでは無いのですから」

「でも」

「お話がそれだけならもう良ろしいでしょうか。私は暇ではありません」

背を向けて洗い物を再開するマーサに、菊乃は何も言えなかつた。言葉が出てこないのがもどかしい。もう少し自分の気持ちや考えを伝えられるように、整理してくれば良かった。

戦略ミスだ。

「おじゃま、しました」

これ以上ここにいても、仕方が無い。諦めて厨房を出た菊乃を、ジエレミーが待っていた。

「働きたいんですか、キクノは」

話を聞いていたらしい。面白がるような笑みが浮かんでいる。

「だったら、ユーイ様に直接頼んでみたらどうですか？」

それは、最もな助言だった。

菊乃とて、最初はそうしようと思っていた。だが、ユーイときたら、同じ屋敷にいるにも関わらず、どこにいるのか分からないのだ。まず、彼の特定の部屋というものがない。空いている部屋は全部彼のものという感覚らしく、毎日気分が向いた時に好きな部屋を自分の部屋にしている。

晩に必ず一度、菊乃の様子を見に来るものの、一方的な質問をした後さっさと部屋を出て行ってしまふ。

何とか引き止めて用件を言おうとはしたが、『発音がおかしい、言いなおせ』『そこは違う』『文法が変だ』『意味が繋がらない』『それで、結局何が言いたいんだ？』と、手厳しく。

「ユーイさん、むずかしい」

無表情で菊乃がぼつりと漏らすと、ジェレミーは大笑いした。

「中々の確な表現だ。でも、それなら余計に、今日はチャンスだと思えますよ。応接室に、ウィガーさんが来ていますから」

最後に別れた日から、まだ1週間程度しか経っていないが、物凄く懐かしい名前を聞いた気がした。もう滅多に会えないだろうと、勝手に思い込んでいたからだろうか。

まだ寝ているらしいユーイを待つウィガーは、応接室にいた。

いつも通り気難しげに眉間に皺を寄せ、四角いソファに座り腕を組んでいる。入ってきた菊乃達に気がつくと、一瞬だけ驚いたように目を見張り立ち上がった。

「こんにちは、ごぶさたです、ウィガーさん」

「ああ、久しぶりだな、キクノ。元気だったか？」

交わされる挨拶は日本語では無いが、懐かしい。菊乃はこくりと頷いた。

「お前はすっかりしているし、心配はないだろうが。ここで暮らすのは大変だろう。色々」と

「おや、人聞きの悪い。他よりは、この上なく安全だと思いますが」  
「……………違う意味で安全じゃないだろう。その手が既に疚しい」

ジェレミーの腕はごく自然な感じで、菊乃の肩にまわされていた。最初の日こそ、手を繋がれたりしたものの、ここへ来てからは一定の節度を保ってジェレミーは菊乃と接している。多分、これはウィガーをからかっているのだろう。

冷静に分析中の菊乃に対して、ウィガーは深く溜息を吐いた。

「お前はお前で、手のかかる」

「？」

次の言葉は日本語で。

「その男はこう見えてかなり節操が無いからな。外見と外面が良いから寄ってくる女が多いのも事実だが、それにしても、だ。寄ってくる者は多少えり好みするようだが、基本的に拒まない。おまけに珍しいものに目が無いから、お前は特に」

「僕に分らないように、悪口を吹き込むのはやめてください」

ウィガールの言葉を遮るように、ジェレミーは菊乃の耳を両手で塞いだ。ぼわん、とした音が鳴る。

「全く。前から言っています、噂の半分以上は事実じゃありませんよ。付き合った女性の数が少なくなかったのは認めますけど」

「少なくなかったどころじゃないだろ。お前と、ユーイは」

「というか、ウィガーが堅すぎると思うんですが」

「俺は普通だ」

「いい加減不毛な片思いに見切りをつけて、新しい恋でもした方が良いでしょう。見ていて痛々しい…、あ、これはユーイ様が言っていたことですから」

「俺のいないところで何を話しているんだ、お前達は！」

ウィガーは苦りきった表情でジェレミーを睨みつける。耳を塞がれている上、早口過ぎて、菊乃には二人のやりとりが全く聞き取れない。

ただぼんやりと、気安いやり取りを眺めるだけだ。

「例の新居候の女の子とのやりとりが面白いとか、何だかんだ言いつつ気が合いそうだ、とかですかね。最近は」

「他人事だと思って無責任に面白がるな。というか、あいつはそれでこここのところ毎日、毎日来ていたのか！」

「ウィガーさんにもようやく新しい春が来たようで、良かったですね」

「やめてくれ。俺にも相手を選ぶ権利はある」

耳を塞ぐジェレミーの両手がそっと緩む。隙間から、はつきりと



した音が耳に届いた。

「良いじゃないですか、異世界人でも。そんなに嫌いなんですか？」

「嫌いというか、苦手だな。何を考えているか、理解できん」

キクノは相変わらずぼんやりとしていた。本当は驚いて、どう反応して良いのか分からずに、固まっていただけだったが。

問題は、異世界人が苦手だというウィガールの言葉ではなく、意図的に聞かせたとしか思えないジエレミーの行動だ。

## 伊吹、翻訳機を切望する 1

人と話す事を煩わしいと思ってきた伊吹だったが、ここにきて言葉の素晴らしさを実感している。意思疎通を図り、知らなければ知らない事を知る為に、言葉は必要不可欠なものだ。

どうせなら、通訳する便利な機械や魔法なんてものがあれば良いのに。

リザレットに聞いたところ、そんな便利なものはありませんとの事だった。まあ、そうだろうとは思っていた。そうでなければ、わざわざ異世界語を習得しておく人間なんて必要ない。それでも、思う。こちらの世界の生活水準は中々高く、伊吹の知らぬ未知の技術がたくさん存在しているようだ。その上、魔法のようなファンタジー小説やゲームでしかお目にかかれないようなものまで存在している。らしい。

その技術や不可思議な力を使って、翻訳機くらい作れないかな、と思うのだ。

いや、むしろ作ってくれますぐに。

言語を習得するに相応しい期間は、大体10代前半くらいまでだったと伊吹は記憶している。頭はそこそこ悪くないつもりだが、年齢的には敵しそうな23歳。

何より今更新しい言葉を覚えるとか、正直言って面倒くさい。

しかし、いつまでもそんな事は言っていられないのだった。

気分が悪い、体調が……とのりりくりり病人生活を続けて早一月とちょっと。確か38日目毎日一度は訊ねてくるリザレットにも、どこか苛立った様子が垣間見られるようになった。そろそろ、限界

だろう。

情報を集める為にも、言葉が必要だ。

そう結論付けて、伊吹は言葉を覚える事にした。

保護施設の中での生活は、非常に規則正しい。毎日決まった時間に、三度の食事が出される。おやつなんかは出ないが、運動量を考えれば出ないほうが良い。太るだけだ。毎朝ほぼ同じ時間に起き、同じ時間に眠る。する事が無いから、夜更かしなどしようもない。

これまで外出は控えていたが、許可された場所までは自由に行き来ができる。図書室や、食堂、医療室、プールに、室内用の運動ルームなど。後はやたら広い庭だろうか。

金かかってるなあ、というのが伊吹の感想だった。

この世界で異世界人はかなり手厚く保護されているようだ。何か理由があるのだろうか、保護して一体どんなメリットが、などと伊吹は考えてしまう。異世界の技術確保か？とにかく何か裏でもあるんじゃないか、と。

「あ、こんにちは、イブキ」

住居施設と専用施設を繋ぐ連絡通路にて。透明な硝子越しに庭の景色を楽しんでいるところへ、通りかかった女性が伊吹に気付いて声をかける。

いつも食事を運んで来てくれる施設の職員だ。

明るい橙色の髪を3つのお団子にしている、小柄な女性だ。笑うとえくぼのできる、美人というよりは愛嬌のある顔で、人懐っこい。他の施設職員と比べて、積極的に声をかけてきてくれる。

「こんにちは、リチルさん」

「うん、中々良くなったわ。発音もキレイ。イブキは覚えが良いわね」

リチルは満足そうに目を細めた。

イブキが言葉を勉強していると聞いてから、彼女は前以上に話しかけてくるようになった。そして、発音や言葉遣いの訂正をしていく。

「でも、本当に良かった。イブキが元気になってくれて」

まだ簡単な単語しか理解できないが、その辺りは雰囲気だ。

「ありがとう？」

「私は何にもしてないわ。それにしてもイブキは良い子ね、異世界人が皆イブキみたいだと助かるんだけど」

笑顔を少しだけ翳らせて、リチルは言う。何を言っただろう。異世界人の事を言っていたようだが。

「あ、いけない。メニュー変更を報せてこないと、ごめんね、イブキ、もう行かなくちゃ。後で食事を持っていくから、部屋にいてね！」

短いスカートを翻し、リチルは慌てた様子で去っていった。最後の方は早口過ぎて、何を言っているのかさっぱりだったが。

（何を言っていたんだ？）

言葉をきちんと理解できないのが悔しい。もしかしたら、何か重要な事を言っていたのかもしれないのに。

「考えても仕方ないけど」

伊吹は軽く溜息を吐いて、再び外へ目をやった。

異世界人保護施設。

異世界からやってきた人間を保護する事を目的とする施設であり、その為に異世界の言語を始めとする文化などを研究する機関でもある。

と、リザレットから説明を受けている。

変だと思うのは、性格が捻くれているせいなのか。異世界人保護、随分人道的な対応だと思う。博愛精神に満ちた民族性、文化なのか、勝手にやってきた違う世界の人間など、迫害の対象になってもおかしくないような気がするのだが。

それにそもそも、異世界人が落ちてくるのは稀だという説明があった。数年に一人、二人程度。何年も来ない時もあるとか。それにしては。

施設、広すぎだろ。

働いている職員の数も多いようだし、部屋数も多い。

もう一つの疑念の種は、立ち入りを禁止されている区画の存在だ。住居施設の左に位置する部分は、繋がっているのに壁で仕切られており、中から行き来する事ができないようになっていて。別に入り口が存在していて、そこには常に監視の目があった。更に外から見分かったのだが、左側の窓は青っぽい色をしていて、中を覗く事が出来ないようにしてあるのだ。

あからさまに、怪しい。

自分の警戒は当然のものだと伊吹は思う。何も分からない世界で、頼れるのは自分だけだ。

散々優しい顔で騙しておいて、安心したところでガブリ…は、無気味な感じが、何かの生贄とか実験などに使われる事はあるかもしれない。そんなのは、ごめん。

昼食の時間が終わり、1時間ほどするとリザレットがやって来た。伊吹に言葉を教える為だ。もう一人、ウィガーという無愛想な男がいるのだが、最近忙しいらしく滅多に現れない。

家業だという宿屋が繁盛しているのだろうか。

「イブキ、何か変わりはありませんか」

「特にありません。ちょっと食べ過ぎて、胸焼けがするくらいで」

最初の会話はいつも大体こんな感じだった。実に事務的なやりとりとなったのだが、一時期はこれだけではすまなかった。

体におかしいところはないか、異常な匂いを感じた事は無いか、いつもと違う職員を見なかったか、その他少しでも違和感を感じた事があつたら言うように、と。こんな調子だった。

何だっただんだろうな、あれ。

色々と考えつく事はあるが、どれも推測の域を出ない。分かるのは、多分伊吹は何者かに危害を加えられる可能性があつた、という事だけだ。その事に気がついた為、伊吹は一時期食事を採らなかつた。何か入れられているのかもしれない、そう考えたら気持ち悪くなつてしまつたのだ。

結局は食欲には勝てなかつたが。

「文字も覚えたいとこの間言っていましたね。だから今日は、私が参考にした単語帳と、子供向け絵本、それからこれをもってきました」

丸められたA3サイズくらいの紙が広げられる。あいっえお表みたいなのが手書きで丁寧に書いてあつた。こちらの文字と、それから発音がひらがなで記されている。

「これは、私の知人が勉強に使っていたものを参考に、作成させたものです」

「…ありがとう。凄く分かりやすい」  
小学生の時にこんな見たな、と思いつつ、ありがたくもらつておく。

「言葉の勉強の方はどうですか」

「まだまだですね。簡単な挨拶くらいしか…やっぱり、この年で新しい言葉を覚えるのは難しいですね」

「貴方はまだ23歳だ…充分若いと思いますが」

最初に保護された時の質問で、伊吹の情報はリザレットに知られ

ている。

身長、体重の測定に加え、身体検査、体力検査。病歴、学歴に家族構成、犯罪歴の有無、子どもの頃から今までの事をこと細かく聞きだされている。大学入試で一度失敗している事、更に出席日数が足りず留年している事まで。

別に、知られて困るという程のことでは無いが、あまり気分の良いものでもなかった。

最もしつこく聞かれたのは、この世界に来てしまった瞬間のことだ。

どんな風に起こり、どんな気分、思いを感じたか。何度も何度も繰返し訊ねられた。

世界喪失現象の研究の為だろうか。

「リザレットさんは、おいくつなんですか？」

細い目が更に細くなる。

「三十路、というやつです」

意外なような気もしたし、そうでもないような気もした。あっさりとした、特徴の無い顔立ち。皺が少ないつるりとした肌をしており、表情も薄い。老けているようにも、若いようにも見える不思議な顔だ。

「私が日本語を習得したのは25歳の頃でした」

涼しい顔でリザレットが言うので、

「……頑張ります」

と言う他無い。

最も、異世界人と伊吹とでは、脳や成長に差があるのかもしれないという考えが浮かんだが、口にするのは止めた。

## 伊吹、翻訳機を切望する 2

伊吹は元々体が丈夫な方ではない。少しの事で体調を崩すし、熱が出る。

それはこちらの世界に来てからも変わる事無く、病弱な青年というイメージは保護施設の職員にも既に広まっていた。本来なら、この世界に馴染み生きていく為に、時期を見て異世界人は施設を出されることになるらしいのだが、伊吹の出所時期は幸い未定のままだ。体の弱さを良かったと思えたのは、初めてのことかもしれない。外でやっていく自信など無かったし、何よりこの施設や異世界人の扱いに対する疑問の答えを、まだ出せていない。

「イブキ、具合はどう?」

熱で腫れぼったい瞼を押し上げると、リチルの心配そうな顔があった。

「何か食べられそうですか?」

日本語、はリチルの後ろにいるリザレットから。一瞬、リチルが喋ったのかと驚いた。

「今は、ちよっと……」

「そうですか。水分だけは小まめにとってください。後で何か消化のよいものを持ってこさせる」

「すみません」

「これも仕事ですから」

リザレットはいつも通り素っ気無く答える。伊吹が病人だからといって、労わるうという気はあまり無いようだ。リチルは布団の上から伊吹の胸の辺りをそっと撫で、優しく声をかけた。

「はやく、良くなってね」



思いやりに満ちた声。その声音はどこか懐かしく、母親を思い出させるもので、伊吹は固く目を閉じた。

もう、会えないのか。

病気の時は只でさえ酷く気弱になる。普段は意図的に触れないようにしている事実につっかかり触れてしまい、泣きたいような気持ちになった。父も母も、問題はまるで無かったとは言えないが、良い人たちだった。口うるさい、鬱陶しいと思う時もあったのに、今はその小言すら懐かしい。

もう二度と会えない。それどころか、伊吹の家族は伊吹の事を覚えてもいないのだ。吹雪のことも。吹雪の事を知っているのも、彼が死んだ事を知っているのも、今は伊吹だけなのだ。

嫌だ。

強く伊吹は思う。あんな風に死にたくない。誰にも省みられない死を迎えたくない。あんな、哀れで寂しい存在に成り下がるのだけは、嫌だった。

絶対に。

生きる為に、死なない為に、伊吹は自分の弱さを最大限に利用した。体の弱さもそうだったし、言葉についてもそうだった。実際よりも言語習得が遅れているように見せかけていた。言葉が理解できないと思っている相手には、自然と口が軽くなる。

伊吹は分からぬような顔をして耳をすまし、分からない言葉は記憶して、後でメモに残した。誰かが見ても分からないように日本語で、日記の中に紛れ込ませる。

「おはよう、イブキ。今日は良い天気よ！」

「おはよう、リチルさん」

食事を運んでくるリチルを笑顔で向かえ、伊吹は椅子から立ち上がる。メモを整理する間に誰かが来ても、伊吹は慌てる事はなかった。読まれたとしても、普通の日記にしか見えないようになっていく。

縦読み万歳。

「何をしていたの？」

リチルが首を傾けて、机を指差す。伊吹は分からないふりをして、首を傾けた。

「えっと…何か、書いてた？勉強かな…」

何かを書くような真似をしたり、本を読む真似をしたりして、リチルは何とか言いたい事を伝えようと頑張る。そこで初めて、伊吹は分かったような顔をした。

「につき」

「日記かぁ。毎日書いてるの？イブキは小まめに書きそうね…、変わった文字。イブキの世界の文字ね…ちょっと可愛い。イブキは偉いわね、私はいつも1週間も続かないの。日誌を毎日書くのも大変なのに」

今のところ、リチルが一番イブキに親しく接してくれる。その場で思いついた事を述べる彼女は、あまり重要な情報は言わない。

それでも、イブキは慎重に彼女の言葉を吟味する。

(文字…可愛い……偉い、日誌…、日誌って何だ)

初めて聞く言葉だ。毎日書くものだという事と、日記から連想されるもの。大変だけど、やらなくてはいけないのだろう。仕事に関する事だ。毎日、仕事の内容を書き留めている、多分伊吹に関する事も。

「今日はね、伊吹の好きな白身の魚よ。香辛料がちょっときついかもしれないけど、美味しいからね」

リチルは伊吹に話しかけながら、部屋の中心にあるテーブルに、運んできた料理を手際よく並べていく。

「お待たせ、さ、こっちに来て。無理しないで、ゆっくり食べてね。また後で片付けに来るから」

いつも聞く言葉を繰返し、リチルは部屋を後にする。静かになった部屋で、伊吹は黙って椅子に座った。

湯気が上がるオレンジ色のどろりとしたスープ。焼いた白身魚が二切れ、濃い緑の野菜の炒め物に、柔らかく煮込んだリゾットのようなもの。それらを前に、伊吹は両手を合わせた。

「いただきます」

むこうでは然程気にしなかった挨拶を、こちらではきちんとするようになった。

何故だろう。

家に、家族と暮らしていた時でも、一人で食事をとる事は珍しくなかった。一人だろうが何だろうが、食事はとれる。寂しいとも思わない。慣れている。そもそも、大勢で食べると美味しいね、という感性は伊吹には無かった。

それでも、極力人を避けていたあの頃とは考えられないくらい、伊吹は社交的になったと思う。

見かけた人にはこちらの言葉で挨拶をし、話しかけられたら分からない顔をしながらも、頑張っって聞き、答えようと努力する。疲れるが、必要な事だと思えばやれ無い事はない。それに、少し楽しくなってきたもいた。

伊吹の本質は何も変わっていない。

あちらにいた時も、こちらに来てからも。人を避けるのも、人と話そうとするのも、結局は他人を信用する事ができないからだ。

異世界、なんて、得体が知れない。

伊吹がそう思っているように、あちらも恐らくそう思っている事だろう。同じ世界の人間ですら、互いを受け入れることは難しいのだ。

(本当に、面倒な事になったな)

然程食欲が湧かぬまま、何とか半分ほど食べきったところで、伊吹はフォークを皿の上に置いた。

食べた後、リチルが食器を取りに来る前に、伊吹は散歩に出た。外へ出る際にも許可はいらぬ。自由に行き来が許されている。ただし、何が事情があつて部屋にいて欲しい時は、ドアが開かない事もある。つまり、ドアが開く時は自由に動いて良い時なのだ。

部屋の中に監視カメラの存在は確認できなかったが、自分の行動は全て知られているだろうと伊吹は考えていた。許可を取らずに歩き回れるのは、その為だろう。

伊吹がどこで何をしているのか、常に把握できている、から。

「イブキ」

だから、散歩中にリザレットが現れても、伊吹は驚かなかつた。

「あ、こんにちは、リザレットさん」

「今日は具合、良いようですね。何よりだ」

「はは…ありがとうございます」

リザレットの日本語は完璧だが、素っ気無い。敬語に男のような物言いが時々混ざる、独特な喋り方だ。

「何を見ていたのですか？」

「いや、この建物、随分大きいなと」

伊吹もお世話になっている、保護施設を眺めながら、伊吹は言う。

世間話のように、軽く。

「異世界人って、そんなにたくさん来るものなんですか？」

「時には」

リザレットの言葉は簡潔だった。与える事を許されている情報。

だが、聞かぬ限りは教えられないもの。

「以前に話したと思います。場所によります。大勢の人がいるところで、大規模なものが発生した場合は。そうですね、歴史上最大規模のものでは、一度で85人という事がありました。既に118年ほど前の事になります。保護法はその20年後に作られました。その件があつた為に、大人数を保護する事のできる建物が造られたのです」

「85人」

「そんな事は、滅多に起こらないが。近年では、11年前に16人という事故がありましたね」

気のせいか、リザレットの能面のような顔に、一瞬悲しみのようなものが見えた気がした。

「…大変ですね」

「ええ、お互いに」

リザレットの、温度のない鉱石のような瞳が伊吹に注がれる。その目が、伊吹は少々苦手だった。心の奥を見透かされているようで。

「他に質問は？」

迷ってから、結局聞くことにした。

「今回は、僕達だけですか？結構、人が周りにたくさんいたんですか」

「いいえ」

その答えに驚く。自分達以外にいた事よりも、それをリザレットが隠さなかつた事に。

「いる、んですか」

「ええ。…その内に会えると思いますよ。貴方がここを出る事になれば、必ず。既にここを出て、町で暮らしながら異世界人の学校へ

通っていますから」

なんだったて

あまりの事実にちょっとばかり混乱した。

朝起きて手早く身支度を済ませてから、台所に用意された簡単な朝食を取る。ここではパン類が主食らしく、朝は大抵パンにチーズやハム、レタスを挟んだようなものが出る。いわゆるサンドイッチだ。そろそろご飯と味噌汁が恋しい。

それからクリーム色に青の縞が入ったエプロンを身につけて、宿屋周り、廊下や開いている部屋の清掃に入る。それが済んだら徐々に忙しくなってくる台所で、野菜の皮むきや皿洗いを手伝う。働き始めて1週間、言葉でまごつく事もあるものの、何とか慣れ初めてきていた。

「シマ」

日記の件で凹みはしたが、あれから特に嫌がらせも無く、宿屋の人達も親切にしてくれている。(ウィガー以外は)

「シマ?」

熱心に、一心不乱に、志真はサラダに使う黄色い小ぶりのキャベツみたいなものを剥いていた。とうもろこしのような風味の美味しい野菜だ。

「シマつてば!」

うわぁ、吃驚した!

夢中になりすぎていた志真は、はっと顔を上げた。いつの間にか台所に来ていたフィオーネが、呆れた面持ちで志真を見下ろしている。

「シマつたら、すぐに夢中になるのね。でも、忘れてない?」

正直に言おう。肝心の言葉の勉強の方は、あんまり捗っていない。

何となく聞き取れたりもするのだが、今も忘れるという単語しか分からなかった。

フィオーネの感じから、何か聞かれている事は分かる。忘れる、疑問……分かった！忘れてないか聞かれているのだ、多分。

「えー、なに？」

「今日から学校よ。そろそろ支度しないと」

学校という単語ははっきりと聞き取れた。

「忘れてた！」

いや、できれば忘れていたかった。思わず口から出てしまった日本語に、フィオーネが首を傾げる。

「何て言ったの？」

「ありがと、フィオーネ。カオロンさん、ミーチェさん、ラクトさん、あの、えっと、私、学校」

学校へ行かなくてはならないという事を何とか伝えようと焦る。

そんな志真をカオロンとミーチェはニコニコと、ラクトはいつも通り無表情の横目で見守る。

「シマ、学校へ行ってきます、よ」

「学校へ行ってきます！」

フィオーネに助けられて、無事告げる事ができた。

「行ってらっしゃい、シマ」

「行ってらっしゃい、気を付けてね、シマ」

「行ってきます！」

元気良く、大きく手を振って、志真は急いで部屋に向った。エプロンを脱ぎ、髪を整えて、既に用意してあった鞆を肩から斜め掛けにする。まだノートと筆記用具くらいしか入っていないから、軽いものだ。

学校に制服は無い。悩むほど服を持っていないので、いつも通り。今日は薄手の長袖のシャツの上にゆったりした厚手の半そでシャツ、短パンという動きやすい格好だ。



階段を駆け下り裏口へ向うと、既にフィオーネが待っていた。初日である今日だけは、フィオーネが学校まで一緒に行って案内してくれるのだ。

「シマ、忘れ物は無い？」

「んー、ない、きつと」

「そう？じゃあ、行こうか」

「うん。お願い。ありがとう」

学校までは徒歩30分程度。結構歩くが、運動不足解消には良い距離かもしれない。この世界にもある自転車が欲しい所だが、贅沢を言えるような立場ではない。

道自体は単純なものだ。最初に右へ曲がってからずっと真っ直ぐ進むと学園地区に辿り着く。全部で142もの学校が集まっているところだそうだ。どういう学校なのかは、門に掲げられた旗の色で分かるようになってる。例えば医学専門の学校は水色に葉っぱのマークとか、そういう感じで。

志真が通う異世界人用の学校は一校のみで、地区の一番北にぽつんと離れて建っているから分かりやすい、と聞いている。

旗の色は山吹色で、真ん中辺りにに黒い竜みたいな図柄が書き込まれている。西洋風の竜で、背中に羽みたいなものがあつた。事前に渡された腕章も同じデザインだ。

この腕章はどこの生徒か見分けるもので、これがないと学校に入ってもらえないらしい。身分証みたいなものだろうか。同じ方向へ向う人達の中にも、ちらほら腕章をつけた人が目につきだす。中には制服らしきものを着た集団もいる。

志真の腕章は鞆の中だ。

入り口で見せた後付けければ良い、そうウイガーから言われている。  
(正直、複雑だなあ)

この腕章は異世界人の学校へ通っているものの証。多種多様な人種が入り混じったこの世界で、志真は問題なく混じる事ができそうだ。だが、この腕章をつければ一発ではれる。異世界人、なのだ。

ウィガーは、だからあんな事を言ったのだろう。

異世界人とわざわざ知らしめ、波風を立てるような事は無い。それは分かる。でも、なんだかそれでは。

(異世界人が悪いみたい)

異世界人である事を、何故隠さなくてはいけないのだろう。志真達は、好きでこんなところに来たわけではない。偶然、思いもしない『事故』で来てしまっただけなのだ。

(責められる覚えは無いんだけどなあ)

「シマ？ぼうつとしてると、危ないよ」

「うん」

気の入ってない生返事をしたすぐ後だった。

「シマ！」

「へっ？」

フィオーネの慌てたような大声に我に返った時には遅かった。いきなりぬっと目の前に現れた壁にぶつかって、志真はよろめいた。

「わ、わ、わ」

足が纏れる。転びそうになったところを、誰かが腕を引つ張り止めてくれた。反動で、その誰かの胸辺りに突っ込む形になる。

「おーい、大丈夫か？」

どこか笑いを含んだ男の声は、頭のすぐ上から聞こえてきた。ほっと息をついていた志真は即座に顔を上げた。真っ先に目に入ったのは、こちらを見下ろす3つの緑の目。3つの、目！？

ぼかんとする志真を、男はにやにやと面白そうに見ている。

ウィガーと同じか、少し下くらいだろうか。褐色の肌に、少し先の尖った耳。日本人とはかけ離れた彫が深い顔立ちで、結構かっこいいのかもしれないが、どうにも胡散臭い感じが否めない。

「シマ」

フィオーネに呼ばれて、三つ目の男に見入っていた志真は我に返

り、慌てて男から離れた。

「わ、あー、えっと、ありがと？」

どうにか出てきたお礼の言葉を述べながら、まだ近い男から距離を取る為一步下がる。するともう一つ、志真を驚かせるものが目に入った。

「あ！」

男の右腕に嵌った腕章に、志真の目は釘付けになった。山吹色に黒い竜のような模様。それは、志真の持つものと全く同じ、異世界人である事を示す腕章だ。

「ふい、フィオーネ、この人！」

「シマ、指を差すのは失礼よ」

「この人、私とおなじ！」

興奮する志真に、フィオーネは少し困ったような顔になった。

この時間、学校が集まるこの地区は、登校する学生達で賑わっている。騒ぐ志真の様子は、行きかう学生たちの注目を存分に集めていた。

やってしまった…！

じろじろと無遠慮な視線にようやく気が付いた志真は、青くなり、次に赤くなった。

「へー、お前、俺のお仲間なのか」

男の低く張りのある声は、無駄に良く通る。にやにやと愉しげに、男は志真を見下ろした。

「俺はニトロ。ま、同じ異世界人同士仲良くしてくれよ、シマ」

あんまり仲良くできる気がしない。それがニトロに対する最初に印象だった。

フィオーネは何となく後ろ髪引かれる思いで、一人歩いていた。学校まで送るつもりだったのだが、あの二ト口という異世界人に押し切られてしまった。

やっぱりちゃんとしていけば良かった。

こんな風に気になるのは、中途半端に引き下がってしまったからだ。

大丈夫かな、シマ。

知り合って間もない異世界の少女の事を思う。年よりも更に子供に思える、無邪気な子だ。世間知らずなのは仕方ないとして、言葉だつてまだ簡単な単語くらいしか覚えていない。必死で覚えようと頑張っているようだ、まだまだ道のりは遠いようだ。

シマは頑張っている。

最初は口ごもる事が多かったが、今は積極的に言葉を発して宿屋の従業員達とも打ち解けようとしているし、店の手伝いも必死でやっている。そんな、頑張っているシマを見ると、何とかしてあげたい気持ちになってくるのだ。

普段明るく元気に振舞っているシマだが、ふとした瞬間迷子の子供のように不安な顔をするのに、フィオーネは気が付いていた。

「そりゃ、寂しいよね」

シマはもう、家族や友達と一生会えないのだ。フィオーネは、シマにできるだけの事をしてあげようと思っていた。辛い目や、悲しい目になるべくあわないように、守ろうと思っている。

だけど結局は、異世界人の気持ちは同じ異世界人にしか分からないのかもしれない。

あの二ト口という異世界人の男に会った時のシマの興奮を思い出して、フィオーネは少しだけ寂しい気持ちになっていた。

## 志真と異世界人学校 2

小さい！

それが、学校を見た志真の感想だった。

長く高い赤褐色の塀に囲まれた敷地内は結構広く、小さな森やら大きな池やら、畑らしきものもある。塗装されていない砂利道の先に、長方形の一階建て建物が二つ、大きな木を挟んで建っていた。

壁の色は両方とも薄いレモン色で、窓枠とドアの色が空色だ。どちらも普通の民家よりも少し大きいか、というくらいの大きさで、学校としては見たことも無いほど小さかった。

「こつちに授業を受ける教室があつて、あつちは先生方の部屋とか休憩室とか」

二ト口が指を差しながら適当な説明をしてくれる。右が普通の教室、左が先生…職員室？なのだろうと、志真も何となく理解した。

「ちいさい」

「異世界人なんて、そういないからな。今だつて全部で7人。ああ、お前合わせると8人になるか。とにかく全部でそれだけだ」

二ト口は少し早口だったが、手を使って数を示してくれたので何を言いたいのかは分かった。

全校生徒が8人か。それだけしかないのなら、確かに大きな校舎も必要ないかもしれない、と志真は納得した。

学校の中に入って、志真は再び驚いた。柱のみで壁のしきりが一切無い。広い空間のあちこちに椅子やら机やらが固まっておいてあって、外側の壁際に、本棚が挟まっていた。真ん中辺りの柱をぐるりと回るように丸いテーブルが収まっていて、その周りにも丸椅子が並んでいた。

「荷物はここに預ける」

固まる志真の肩を二トロがつつく。彼が示す方向を見ると、カウンターのようなものがあり、やけに目付きの鋭い初老の男が一人、座っていた。彼の背後に、蓋のついた木の棚が20ほど並んでいる。

「新入りか」

がらがらに掠れた、低い声が重々しく響く。見るからに筋肉質で、左目の横と右頬に傷がある鷲鼻の男は、どう見ても堅気ではない。学校ではなく、戦場あたりに居る方がしっくりくるようなやばい雰囲気纏っている。

そんな強面の男にも、二トロは馴れ馴れしく。

「この怖い顔のじーさんが、この学校の警備員だ。名前はジャイル、通称ジャーさん」

黒目を一層小さくして志真を見るジャイル。人すら殺せそうな眼光である。とてもジャーさんなんて呼べる雰囲気ではない。

「名前は」

「は、はいたに…じゃなくて、志真、灰谷！」

「18世界出身…国は『ニホン』で間違いないな」

「はい！」

「『ニホン』の『コツキ』は何だ」

「コツキ…、こ…あ、国旗か！日の丸です！」

「よし。では、これに手を乗せろ」

カウンターの上に登場するのは、拳サイズの白濁した丸い石。濁った水晶玉みたいだ、と思いつつも志真は言われるがまま手をのせた。ひんやりした感触が伝わった瞬間、石の色が変化した。濁った白から、鮮やかな緑へ。

「うわ、何これ。」

「確認終了だ。二トロ、次はお前だ」

「はいはい」

よ、と二トロが呆然とする志真の手をどけて、石に自分の手を置

く。一瞬白に戻った石は、再び鮮やかな緑に変化した。

「必要なものを出して、荷物をここへ置いていけ。必要な時、帰る時には俺に言え」

「えー！」

日本語だった。志真は驚いてジャイルの顔をまじまじと見た。この人はもしかして日本語を話せるのか。期待に胸を膨らませる志真に、ニトロが否定の言葉を告げる。

「違っつて、シマ。ジャーさんが話せるのは今の『説明』だけだ」

「違っつ？」

「せつめい、だけっつてこと。分かるか？」

ああ、そういう事か。志真は頷いた。

「最初の説明が通じないとややこしいだろ。だからそれだけ覚えてる」

なるほど。

ジャイルに荷物を預けて、ニトロは窓際に佇む男に声をかけた。

「よう、ハル。珍しいな、朝一でお前がいるとは」

「お前もな」

「思ったより早く保護施設を出られて良かったな。お前にしてはうかつな行動をしたって聞いたぜ」

「……………」

癖のある黒髪がもさつと顔の半分程まで覆っていた。ニトロよりも更に長身で、やや筋肉質な体つき。髪の下から覗く鼻先と、引き結んだ薄い唇と、それからしゅつとした頬から顎のライン。それだけでは、どんな顔なのか良く分からない。

年齢もさっぱり分からなかった。

年上だとは思っ。

じつと、髪に隠れて見えない目からの視線を感じた。あれで、見えるのだろうか。謎だ。

「それが？」

「ああ、こいつが新しい俺達のお仲間だ。名前はシマ…ハイツ二だっけか？かなり早く施設を出られたらしくて、まだあまり言葉が分からない」

「……………」

「シマ、こいつはハルラック。仲間の中ではまあ、頼りになるヤツだ」

「志真です。よろしく」

「よろしく」

ハルラックは素っ気無い挨拶をすると、視線を志真から外した。

「期待はずれ、か？」

「……………分かっていてそういう事を言うな」

「相変わらずお人よしだな、ハル。そんな事だから保護施設に入るはめになるんだぜ？お前はできる事をした、それで終わりにしておけば良い。それ以上関わる事は、お前にとっても、そいつにとっても危険だ」

二人が何を話しているのか、志真にはさっぱり分からなかった。

が、なんだか真面目そうな話をしている事だけは分かる。だから、大人しく黙っていた。

「しかし、今回は何人流れてきたんだろうな。随分役人達が借り出されていたみたいだが」

「さあな」

志真が真面目に聞いていれば、またはもう少し言葉が分かっただらこの時知ることが出来た事実。自分の他にもあの時日本からこの世界へ着てしまった人間がいる事を、志真はまだ知らない。

二人が話している間、志真は他の事に気を取られていた。

まず、一向に授業が開始される様子がないこと。

次に、窓際の机に顔を伏せ、眠っているらしい緑色の物体……………多分、人？うねる緑の髪の毛が、微かに揺れている。赤いキャミソ―



ルのようなワンピースからのぞく細い腕や足までもが、透き通るような黄緑色をしていた。

「ん？ああ、あれはアルジャラーだ」

志真の視線を辿ったニトロ口が言う。

「ある……？」

「アルジャラー。同じく異世界人仲間。大抵ああやって眠ってるやつだ。寝てるところを起こすと癩癩を起こして煩いから、紹介はまた後だな」

「あるじゃ、アルジャラー、アルジャラー、アルジャラー、ね」

忘れないように繰り返す。あんまり覚える自信は無い。

「来い、シマ。後一人紹介してやる」

ニトロ口が志真の手を引いた。

部屋の中心部分の大きな柱の影に、もう一人いた。

白くて細い、少年だ。青みがかかった銀髪と、目を覆い隠す布地が印象的過ぎる。あれでは目が見えないと思う。布地には丸に傾いた十字が大きく書かれていた。

何、何かの宗教？修行？それともただのファッション？異世界の感性は、志真にはちよつと理解できない。

「モク」

ニトロ口の声に、少年が小さく首を傾げる。耳の後ろ部分から首の辺りにかけて、きらきらと光って見えた。何だろう。思わずじつと見入ってしまう。

（……鱗？）

透明の鱗が産毛のように薄っすらと、首筋の辺りを這うように覆っているのだ。

（何か、綺麗）

不思議と不気味には見えなかった。

「シマを紹介する。シマ・ハイタニ。新しい異世界人仲間だ。まだ

何にも知らないようだから、お前も手助けしてやってくれ」

モクはただ一つ頷いて見せた。

「シマ。こいつはモク。見ての通り変わったヤツだが良い奴だ。仲良くしろよ」

「えっと、シマです。よろしく」

志真はとりあえずお決まりの挨拶をした。通った鼻の下の薄い唇が、緩やかに綻ぶ。こくりと頷く動作がやけに綺麗だ。

ニトロはそのままモクの隣に座った。志真もニトロに促されて、その隣に腰を下ろす。

「さて、暇だし。自己紹介でもするか」

「ん？」

「シマ、お前年いくつだ？ちなみに俺は19歳」

俺、と指差した後ニトロは両手を使って19を示した。

それが年齢の事だと気がついて、志真は驚いた。思ったよりも相当若い。てつきりウイガーと同じくらいの年だと思っていたのだが。

「わかい」

「まあな。で、お前は？」

「私は」

16、と同じように両手を使って答える。

「見た目どおりの年だな」

「モクは？」

「モクの年はモクにも分からないんだよ。結構生きてるみたいだね」

ニトロの向こうで、モクは静かに笑っている。うーん、実に謎めいている。異世界人なのだから、当たり前なのかもしれないけど。彼らはどんな世界からやってきたのだろうか。

「ちなみにハルは27歳、アルジャラーは14歳で、この学校では一番若い」

「上、は？」

「リキキとキリリだな。まだ来てないが、双子で…双子って分から

ないか？ま、後で分かるか。そいつらは、200歳以上……ま、俺らよりずっと上だ。とにかく。で、次がじい」

「じい？」

「そう、じいさんだからじい」

にしても、とニトロが三つの目を閉じる。

「シマ、お前のその言語習得率じゃ、午後の授業についていけないぞ。話すにも話せないし……仕方無い。午前は俺たちでシマの語学勉強を手伝ってやるか」

「？」

午前中は自習の時間であり、生徒は好きな事を勉強して良い。分からない事は仲間内で教えあったり、隣の校舎に待機している先生に聞きに行く。

そういう時間の為、午前は学校に来ない者も多いのだと、志真が理解するのは3日後の事だった。

### 志真と異世界人学校 3

「ただいまー」

午後の授業を終え、志真は宿屋へ帰った。宿屋の周りを掃除していたフィオーネが、箒を手に駆け寄ってくる。

「おかえりなさい、シマ。どうだった？」

「たいへん」

体も、頭も、ついでに心もくたくただ。

特に午後のテストには参った。志真の学習状態を見るためにという名目だったが、まず字が殆ど読めなかった。その為、志真は暫くは文字の読み方を習う事になった。午後の授業も皆が同じ事を習うわけではなくて、それぞれが出された課題をこなしていく形になっている。

卒業基準は卒業試験に合格する事と面接のみで、出席日数などは問われない。つまり、今すぐに卒業する事だって可能だったりするのだ！まあ、無理だけど。

そんなわけで、学校に通っている年数もかなりバラバラで、モクはまだ半年、ニトロとハルラックは2年ほど、アルジャラーに至っては既に5年目に突入しているのだとか。

まあ、殆ど寝ているのだから当たり前だ。

「まあ、そうよね。志真は言葉も文字も勉強しなくちゃいけないから」

そうなのだ。読み書きを1から習う志真にとっては、道のりは果てしなく遠い。くじけそうだ。

「うん。でも、たのしい。友達できた」

「そつか。良かったね」

「うん」

フィオーネが嬉しそうに笑うので、志真も何だか嬉しくなった。どこかの厳しい兄と違って、フィオーネは優しい。理想のお姉さんである。

そんなほのぼのとした空気を、ぶち壊したのは案の定というか、  
「フィオーネ、まだ掃除が終わらないのか。そろそろ店の準備を…  
…シマ、帰ってきたのか。こんなところで何してる、帰ったらすぐに手伝いに入れ。これから忙しくなる時間だ」

戸をあけて顔を覗かせたウィガーのしかめっ面。思わず志真も不機嫌な顔をしてしまう。「ごめんなさい、すぐ行くわ」と嫌な顔一つせずにさっと動けるフィオーネを、志真は本当に尊敬する。

「お前も早く行け」

「いきなり出てきてきてそれ！？せめて、おかえりの一言くらいあつてしかるべきじゃない？学校初日どうだったー、とかさ」

嫌々かもしれないが、ウィガーは志真の保護者なのだ。

「そんな時間は無い。後、シマ」

「何よ」

「これからは、どうしても分からない時や、説明が必要な時、または緊急時以外での日本語は禁止だ」

「ええっ!？」

「それ以外で日本語を話した時は……そうだな。こちらが指定した本を10ページづつ書き写してもらおう」

「10ページって多くない!？」

「お前の場合、それくらいいしなければ、いつまで経っても言葉を習得できなさそうだ」

「反論できない……」。

言葉に詰まる志真を見て、ウィガーはにやりと笑った。

「あーもう！本当にムカつく！ウイガーの陰険、ムツツリ、鬼！苛々したせいでお皿一枚割っちゃうし、食べ過ぎて胸やけが酷くて寝れなかつたし、寝不足だし、寝坊するし、とにかく最悪だー！」

思い切り日本語でウイガーの悪口を叫んだ事で、ほんの少しすつきりした。

「大丈夫か、お前」

隣にいた二トロ口が引いている。

「ごめん。ちょっと…なんだっけ、不満？が多くて」

「何かあったのか」

「あつた！ウイガーが、私の言葉、ダメって。話すと……」  
罰、ペナルティー、って何て言うのか。

首を捻っていると、ずっと黙っていたモクがすらすらと何かを書き出した。目隠し状態で、良く書けるなと感心する。何を書いたのかは読めないが、それを見ていた二トロ口がなるほどと頷いた。

「シマの国の言葉を話す事を禁止されて、更にうっかり話すと罰則がつくって事か。それで、シマは苛々している」

「なんだか分からないが通じている！凄い。志真は目をまるくして、二トロ口とモクを交互に眺めた。

「俺じゃなくて、モクだ。けど、説明は難しいな。シマがもうちょっと言葉を理解できてたら良いんだが。シマは怒ってるみたいだけど、ウイガーってヤツのやり方は悪くないんじゃないか？」

二トロ口は分かりやすいように、ゆっくりと区切って話してくれる。それでも、うまく聞き取れないところが多い。それでもウイガーの肩を持っているのは、何となく分かった。雰囲気です。

思わずむっとした志真に、二トロ口は噴出した。

「がんばれ、シマ。俺やモクも協力してやるから」

「だあれ？」

「え」

どこかざらざらとした少女の声がすぐ近くで響いた。

振り返った志真の目の前に、緑色の女の子が立っていた。椅子に座った志真と同じ目線の高さに、少女の頭がある。殆ど白目のない大きな瞳、透き通った宝石のような緑色に、志真の驚いた顔が映りこんでいた。

「アルジャラー、起きたのか」

昨日は結局起きなかった彼女とは、これが初体面となる。

こうして見ると手も足も本当に細くて小さい。黄緑色の肌の下に、血管が透けて見える。ばさつと広がった長い髪がふわふわと、少女の体を柔らかく包み込んでいた。

「だあれ？」

間延びした口調で、アルジャラーはもう一度聞いた。はっと、志真は我に返る。

「私、シマ、シマ・ハイタニ。貴方と同じ、異世界人。よろしく」  
アルジャラーは大きな目を瞬かせた。

「そうなのー」

間延びした調子で言い、ゆっくりと振り返る。

「ですってー」

彼女が見たのは学校の出入り口。

朝に荷物を預けるカウンターのところに、いつの間にか二人の子供が立っていた。

全く同じ背丈で、雪のように白い髪、赤い瞳、顔の形までそっくり同じ。一人は腰まである長い髪をしていて、赤と黒の派手なふりふりしたドレスを身につけている。もう一人は、シヨートカット。横わけて片目が隠れており、黒のタキシードを着込んでいた。

「昼間からお出ましとは珍しいな」

「だれ」

「昨日、話したたる。異世界人の双子。リキキとキリリ。この学校の夜間部の奴ら。って言っても二人だけだが」

「…やかんぶ？」

「夜に、学校に来る生徒」

なるほど。言われて見れば、すんなり納得できる。二人ともいかにも太陽に弱そうというか、夜行性っぽい感じがする。

志真が二ト口に説明を受けている間に、双子の内少女の方がモクの隣へ移動していた。そして。

「モク様…、会いたかったです」

「！」

少女は何か盛り上がった様子で、椅子に座ったままのモクの胸にひし、と抱きつこうとした。が、どこかぼんやりした普段の彼からは考えられない素早い動きで、モクが少女を避ける。勢い余った少女はそのまま地面へと飛び込むことに。

……………。

かなり痛そうな音がした。

モクは倒れた少女の事を助ける事はせず、そろそろと距離を取ると、志真の背後に収まった。

「も、モク…？あれ、助けなくて良いの？」

二ト口はともかくとして、優しい、穏やかというイメージのモクが、倒れた女の子を助けられないなんて。モクは困ったように首を傾けた後、ふるふると首を横に振った。

「ふ、ふふふふふふふ」

倒れていた少女が、不気味な笑い声を上げる。がばつと体を起こすと、打ち付けたいらしい白い額が、気の毒なほど赤くなっていた。「相変わらずつれないお方！素敵です！」

怖っ！



何やら興奮した様子で、目を輝かせている少女。言っている意味は分からなかったが、なんだか怖い。

モクを見ていた少女の目が、その前に立つ志真へと向けられる。

「！」

少女の目からすつと光が消えた。

「何ですか、貴方は」

地の底を這うような、どすの利いた声だった。一睨みで人が殺せそうな、殺意の籠った視線。背筋に冷たいものが走る。

何が一体、どうなっているのか。

少女は志真を上から下まで眺めてから、ふつと唇の端を上げた。

勝ち誇ったような笑みは、訳が分からなくても苛立ちが募るものだった。怒りという感情は、時に恐怖を凌駕するのだ。志真は実に単純な性格をしていた。

売られた喧嘩は買う主義だ。

「何よ、何か文句があるならはつきり言え！」

「何です？訳の分からない言葉を怒鳴って…それに何だか下品な響きです」

「そうやって人のことバカにするみたいに笑えるほど、あんたは偉いのかー！美人でも性格悪かったら、宝の持ち腐れだぞー！」

「モク様、そんな女からは離れた方が良いでしょう、絶対。モク様に悪い影響が出てしまいます」

かみ合わない二人の言い合いを、二トロとキリリは少し距離を取って眺めていた。

「リキキが新しく来た異世界人の女の子の話を気にしてさ」

「それで、つきあい？」

「僕は昼間から外歩きたくなんかなかったんだけどねー。体弱いし」  
「言うほど弱くないだろ」

二トロのツッコミをキリリは聞かなかった事にした。

「新しい異世界人の子…、シマ、だっけ？何だか貧相な名前だね、

可哀想に。僕だったら耐えられないな……。あ、とにかくそのシマがね、モクと仲良くしてるって聞いて

「誰から？」

「じいさん」

「……昨日、じいさんいなかったぞ」

ついでに今日も姿が見えない。今日はハルラックも休みのようだ。

「ハルが話したんじゃない？」

「あいつがわざわざそんな話を誰かにするとは思えねーが」

「人って奥深い生き物だからね。意外に思えてもそうでもなかったり。ま、とにかくどうでも良いんじゃない？誰が言ったとかそういうのは」

「そうだろうか。ニトロは考えるが、この場で考えても答えは出ない。」

シマとリキキの囁みあわない口論は、午前いっぱい続いた。

## 志真と異世界人学校 4

朝起きて、学校に行くまでの1時間。それから学校から戻ってからの10時までの4時間。合わせて5時間、志真は宿屋の手伝いをする。その後夕飯を食べ、風呂に入りその後は疲れて寝てしまうのだが、その日は違った。

志真は机の上にノートや本を広げ、真剣な顔で奇妙な文字と向かい合っていた。

「何としても、覚えてやる……」

いきなりやる気を出した動機は単純なものだ。

ウィガーと、それからあの後『まあ、絵本も読めないのですか。それは大変です。見た目どおり頭も悪いなんて可哀想です』とか志真を馬鹿にしたりキキを見返してやりたい。リキキの言葉の半分もまともに聞き取れなかったが、馬鹿にされた事だけは間違いないと確信している。とにかく、二人への怒りと反抗心がまず一つ。

もう一つは、モクだ。

昨日と今日一緒に過ごす間、モクは一言も喋らなかった。筆談で会話を成立させている。こちらの声は聞こえているし、志真の日本語すら何故か理解しているようなのだが、どうやら話す事はできないらしい。もしかしたら声が出ないのかもしれない。

そんなわけで、モクが何を言っているか理解する為には、どうしても文字が必要になるのだ。

「……………」  
「……………」

「……………うあー！覚えられないよこんなの！」

開始20分ほどで、志真は机に顔を伏せていた。あまり特徴の無いシンプルな文字が特に覚えにくい。音として読めるようになっても、単語の意味が思い出せない。出掛かってはいるのだが。

「何でこんな目に……」

行き詰るとつい溜息が出てしまう。

地道に覚えていくしかないのは分かっているつもりだが、道のりの長さを思うとくじけそうになる。志真は元々根気がある方ではなかった。頭よりも体を動かす事の方が得意だし、あちらにいた時だって、殆ど本は読まなかった。

だからテストの前はいつもこんな感じで煮詰まって。そうすると『一緒に勉強しよう?』と、梢が……。

しまった

と、思った時には遅かった。いつもは、意識的に思い出さないようにしていた向こうのこと。

(だって、思い出したってどうしようもないのに。寂しいだけ、辛くなるだけ)

じわ、と目の奥が熱くなった。強烈な郷愁が胸に湧く。寂しい、帰りたい、帰りたい、寂しい。

さびしいよ

ひよりは辛い、寂しいの

びく、と志真は身を震わせた。自分のものではない、誰かの心を感じた気がした。背筋がひやりとし、涙が引つ込む。

そういえば、ここって、いわゆる事故物件だったっけ。

思わず顔を上げて、室内を見渡す。

電気ではなく、天井全体から降り注ぐ柔らかい橙の光に照らされた明るい部屋。可愛らしく整えられた広い自室を見渡すが、特に変

わった事は無い。

ほっと気を緩めた時だった。

『貴方も、寂しいのね。私と同じ……』

今度ははつきりと聞こえた。暗く籠るような女の声だ。全身から血の気が引く。ぞくぞくと身を震わせて、志真は固まった。

(な、何、今の何！？聞こえたよね、絶対、嘘でしょ！？ユーレイとか本当にいるわけ？異世界だからそういうのもアリなわけ！？寂しいってやっぱり……って、あれ！？)

志真は驚くべき事実気がついた。

「何で？日本語喋ってる……？」

思わず立ち上がった。幽霊らしきものに対する恐怖が綺麗に吹き飛んだ。それよりも、今は。

「ね、ちよつといえるの？まだいる？幽霊さん、えーつと名前……ら、らら……」

『ラスカウル』

返事があった！志真はきよろきよろと辺りを見渡したが、相変わらず誰もいない。

「見えないけど、いるんだよね？私の幻聴と違ってオチじゃないよね？」

『いるわ。貴方に見えないだけで』

「やっぱり分かる！ねえ、聞きたいんだけど、何で貴方日本語を話せるの？もしかして、日本人……じゃないよね？」

『……話してるわけじゃないと思うわ、多分……』

籠ったような幽霊の声は、音量が無く力も無い。他の音に紛れてしまいそうなそれに、志真は必死で耳を傾ける。怖いという気持ちよりも湧いてこなかった。それよりも、こうして普通に会話ができ

る事の方が大切だ。

『私がこんなだから……魂だけの状態だから、声を出して話せないの。だから、音じゃなくて、私の思い……思念をそのまま貴方に伝えられているの』

「え、えーつとつまり何？テレパシーみたいなの？」

『……そんな感じなのかしら。普通はね、弱い魂だけの声なんて聞こえないものなのよ。ただ今は、貴方の魂と私の魂が、ちょっとだけ繋がってるから……』

「……………」

何だか今、凄い事を言われた気がする。

『つまりね、私……今、貴方にちょっとだけとり憑いている状態なの……』と、とり憑いてるって……』

『貴方と私、随分波長があっちゃうみたいで……。貴方の傍は何ていうか、心地良いの……それでつい。あ、大丈夫よ。とり殺すとかそういう真似はしないから……。約束する』

その約束は信じて良いのだろうか。

ウィガーの話によると、ラスカウルは殺されているわけで、大抵そういう死に方をした者は恨みを持ってこの世に残る。いわゆる悪霊とか怨霊とかそういうものになるものらしい。よくは知らないが、「本当に？生きてる者が憎い」とか、復讐で呪い殺してやる」とか、思っていない？」

『そりゃあ、生きてる人を羨む気持ちはあるわ。でも、それで殺そうとかは思わない。私が死んだ事だって、勿論犯人に対して思うところはああるけれど、私にも責任があるって事は分かっているの。私が自分でこの運命を引寄せたようなものだもの、仕方が無い事だわ』  
あっさりしている。

志真だったら、そこまで割り切れるだろうか。

「でも、だったら何でまだここに残ってるの？納得してるなら、そ

の…成仏とかできそうな気がするんだけど」  
『心残りがあるの…』

幽霊は恥ずかしそうに言った。

『私、ちゃんとした恋をしたことがなくて。一生に一度、この人だ  
という人を見つけて恋をする、そう決めていたのにできなかったか  
ら』

幽霊は乙女だった。

「そっか。そうなんだ、うん…恋かー」

志真にも縁遠い言葉だ。嬉しそうだった梢の姿が思い出される。

あの二人、仲良くやっているだろうか。

『志真』

幽霊は真剣な声で告げる。

『協力してほしいの』

そうそう、志真にとってはいつまで経っても悪ガキのあの幼馴染  
も、何故かもてて。それでよく協力を要請されたものだ。その度に  
志真は、世の女性たちの趣味の悪さに首を捻ったものだった。

『暫くで良いから、私の恋の手助けをしてくれない？……って、聞  
いてるの？』

「……聞いている、けど。あのさ、悪いけど流石に幽霊達の恋愛事情  
までは、守備範囲外というか」

死んでからも恋をするんだなー、と志真は妙なところに感心して  
いた。幽霊同士でも恋人になったり、別れたりするのだろうか。先  
ほどから幽霊に対するイメージが壊され捲くついている。

『違うの、志真。私の好きな相手は生きている人間なの』

「えっ」

『ウィガー・ハルベルト様。私、あの人の事が好きなの』

「ええー!？」

あんなヤツのどこが気に入ったのか。ついでに様付けもつつこみたい。

「ちよつと待って、ウイガー? よりもよってウイガー……。待って、待ってね……。でもさ、やっぱり駄目。私だってあいつの事は気に入らないところもあるけどね、流石に幽霊にとり殺される手伝いはできなから!」

『そ、そんな物騒な事は考えてないわよ』

「でも幽霊と生きてる人の恋の成就って言ったらさ、行き着くところはそこじゃないの?」

『恋をするだけで良いの……。傍で見てときめいたり、声を聞いたり、意外な一面にドキドキしたり、偶には手が触れちゃったりして……。きやつ』

触れるのだろうか。志真がどこか冷めた疑問を抱いているとも知らず、ラスカウルは話し続ける。

『恋を叶えたいなんて思っていないわ。ただ小説みたいに甘く苦しい思いを味わってみたい。でも、私この部屋から出られないし、ウイガー様は中々この部屋にやって来ないから。だから、志真に協力してほしいの』

「協力って言われても」

『簡単な事なの。ずっととは言わないから、暫く貴方にこうしてとり憑かせてほしいの。その間、私は貴方と一緒に移動できるから』  
そうすれば、自然とウイガーと接触する機会も増えるというわけだ。ウイガーは一応志真の保護者だから、確かに嫌でも会う機会は多い。

「うーん、でもさ……。とり憑いた状態で、私は大丈夫なわけ? 弱って死んじゃったりとかしない?」

『ちよつと、疲れやすくなるかもしれない……。でも、聞いて。これは貴方にも良い話なのよ』



それは悪魔の囁きならぬ、幽霊の囁き。

大変魅力のある囁きに、志真は抗う事はできなかつた。

朝の厨房は忙しい。

泊まった客への食事の用意、それから宿の一階にある食堂で出す食事の用意。泊り客だけではなく、外からも客が入るのだが、ミーチエの腕が良い為に、食事時には結構混み合うのだ。

一時、泊り客の足が遠のいた時も、ここの稼ぎで何とか凌いでいたらしい。

そんなわけで猫の手もかりたいくらいに忙しい時間帯。志真も新米従業員の一人としてきりきり働かなければならない。

「シマ、洗い物がたまってきたから、先にそつちを片付けてくれ」「はい！」

元気良く返事をして腕を捲くり、早速荒いものに取り掛かる。シマも大分慣れた、とカオロンは微笑む。元気が良く、良く働く良い娘だが、言葉が分からないために戸惑ったり、失敗も多かった。だが、今日の彼女は一味違う。

こちらのいう事を完璧に理解して動いているようだ。

そう、志真は彼らの言葉を理解していた。

『シマ、3番目のテーブルを片付けてきて欲しいって』  
「はい」

ラスカウルの通訳によって。

彼女が志真に言ったメリットとは、この通訳の事だった。これにより、志真が言葉を話す事はできなくても、相手が何を言っているか理解する事はできる。

誰が何を言っているのか、分かるだけでも世界が広がった気がする

る。その上、ラスカウルは志真が読めない文字を読み上げ、その意味まで教えてくれるから、一人で勉強するよりも早く文字を覚える事ができそうだ。

つくづく、ラスカウルに感謝だ。

学校に向う足取りも軽くなるというもので、いつもよりも早く学校に着いた。早速カウンターにて石を触る。その時少しだけ変化があったのだが、志真は気がつかなかった。

石の色がいつもよりもほんの少し濃い、青を混ぜたような緑に変化していた。それを見たジャイルの鋭い瞳が、すっと細くなつた事にもまるで気がつかなかったし、ジャイルの方もそれ以上の事はせず、いつものように無愛想に荷物を受け取った為、志真はついに何も気がつかないままだった。

広々とした教室の中はがらんと静まり返っていた。誰もいない。今日はどうやら一番乗りのようだった。

きよろきよろと辺りを見渡してから、いつものように中央の柱を囲む丸テーブルのところに座る。

その時だった。

「見ない顔じゃのー、お二人とも」

「ひ!?!」

唐突に話しかけられて、志真は飛び上がった。

先ほど確認した時には、確かに誰もいなかった筈だ。

それなのに、いつの間にか二つ空いた椅子の向こうに、真っ白な髭のお爺さんが座っていた。目元は白く長い眉に覆われているが、顔はこちらを向いている。深緑のずるずるとしたローブを身につけた姿は、物語にでてくる魔法使いのようだった。

誰、このおじいさん…あ！確か二トロが言っていた……、

「じいさん!?!」

うむうむ、とじいさんが頷く。っていうか、本当にそのままじゃ

ないか。

「で、お前さん達は誰なんじゃ？」

「あー、あの、私はシマ。シマ・ハイタニです」

『志真……この人、達って言ったわ。それに最初の時も二人って』

そつと、ラスカウルが囁く。いつもよりも小さい、頼りない声を拾って、志真は目を丸くした。

「え、それって……」

『この人、私の事が見えるみたい』

ごくりと志真は息を飲む。

どこかのほほんとした空気を纏い、椅子に納まっている小柄なお爺さんが、急に偉大な人物に見えてくる。この人は、霊能者か何かなのだろうか。それとも見た目どおりに魔法使い、とかなのだろうか。

どうしよう、何を言われるんだろう。

志真は自分がこの幽霊を利用している事を、ラスカウルは人にとり憑いている事で、それぞれ後ろめたい気持ちになっていた。

「あ、あの、あのですね、じいさん？」

「んん？おお、忘れておった」

じいさんは驚いたように声を上げると、いそいそとローブの裾から何かを取り出した。出てきたのは丸いメガネだ。

「どうも視界がぶれる筈じゃのー」

「へ」

垂れ下がる眉毛をかきわけ、眼鏡をかけて、じいさんは笑う。

『眼鏡をかけ忘れてて、視界がぶれるのはそのせいだって言ってるわ。もしかして……』

「年をとるといかなのー、シマさん、じゃったかな。あらためて、よろしく頼みます」

「は、はは……よ、よろしく」

志真は引きつりながらも何とか笑う。

朝からひやひやさせられた。別に、悪い事はしていないと思うのだが。ウィガーとかにばれると、どうなるかは想像できる為に、できれば内緒にしておきたい。

「おはよーですのー」

ふらふらとアルジャラーがやってきた。その後ろにモクも続く。

「おはよう、アルジャラー、おはよう、モク」

こくり、とモクが頷く。

「あ、じいさん、ひさしぶりですのー」

「おー、アルちゃん、今日も目に優しい緑じゃのー」

「照れますのー」

ほのぼのしてるが、変な会話だ。照れるところなのか？

ラスカウルの翻訳に耳を傾けていた志真は、モクの視線に気がつき顔を上げた。最も、モクはいつものように目隠しをしている為、本当に見ているわけではないのだろうが。とにかく注意を向けられている、と感じる。

「モク？なに？」

モクが小さく首を傾げる。それから一度、首を横に振って、手にしていたメモ帳を開くと何かを書き付けた。次にそれを志真に見せる。

『シマ、大丈夫？何か困った事は無いか、だつて』

「モク……」

文字が読めない、ふりをする気にはなれなかった。昨日までは殆ど読めなかったのだ。（今だつてそうなのだが）ラスカウルの事を隠したいなら、分からないふりをした方が良い事くらい志真にも分かる。でも、自分を心配してくれる人を欺きたくなかった。

「うん、大丈夫だよ。ありがとう、モク」

志真が笑うと、モクも穏やかに口元を緩める。それを見て志真は、読めないふりをしなくて良かったと思つた。

やっぱり、隠し事は良くないもんね…。

ラスカウルの事も話そうと決意した志真が口を開く前に、モクが再び何かを書き始めた。先程よりも長い文だ。

『文字や言葉を理解できる事は、秘密にした方が良い。僕も誰にも言わない』

「え…」

驚いている志真を他所に、モクは更にペンを動かす。

『いつか、きつと、それが志真の切り札になる……』  
『…』  
『…』  
『…』

「分かんない…けど、秘密にした方が私のためって事？」

思わず日本語で呟いた言葉に、モクはこくりと頷いた。不思議だが、モクには志真の言葉が分かるのだ。

「秘密…それって、二ト口にも？」

モクは頷く。

どうしてそうした方が良いのか、志真には全く分からなかった。

けれど、何故か、モクの言う通りにした方が良いような気がしたのだ。モクはきつと、本当の事を言っている。暫く考えてから、志真は頷いた。

「分かった。秘密にする」

そう言うと、モクは微笑んだ。

それから他の生徒が来るまでの間二人は話していたが、モクはメモを使わなかった。今までどおり、首を振ったり、傾けたり。大した会話はできないが、何となく昨日より打ち解ける事ができた気がした。

しかし、そのほのぼのとした癒しの時間は長くは続かない。

「つくづく気に入らない虫けらです。鬱陶しい発情期の猫です。消

し去りたい生ゴミリストの一位です」

現れるなりどすの利いた声でそう言ったのは、リキキだった。昨日は何を言われたのか分からなかったが、今日はラスカウルが訳してくれる。それが良いのか悪いのか、志真には分からなかった。

『結構酷い事言ってるわね、この子』

「結構どころかかなり酷いよ！誰が生ゴミよ！」

「かくなる上は、実力行使あるのみです。気に入りませんが下僕にします」

「うわ！ちよつと待ってよりキキ！常識を持って冷静に行動してくれないと困るって、いつも言ってるのにどうして分からないかな。一時の過ちが、後々までっていうか、僕にまでとばっちり来るんだから」

志真に向って飛びかかろうとしたリキキを、慌てた様子のキリリが後ろから飛びついて押さえ込む。同時にモクが隣から志真の正面に移動していた。

「煩いですが、黙りなさい。モク様！そこをどいてください！」

「いた、ちよつと暴れないで、大人しくして。僕、体弱いんだから両腕を押さえられたまま、リキキはじたばたと暴れている。その様子を、志真は呆気に取りられて眺めていた。リキキは見た目に似合わず、中々凶暴な性格のようだ。

「危なかつたですよー」

アルジャラーがやってきて、うとうとと首を左右に傾けながら呟く。眠いのだろうか。

「血を吸われたら、下僕ですよー」

え？

それだけ言って、こてんともたれかかって来たアルジャラーを志真は凝視した。

今、何て言った？

翻訳したラスカウルの間違いでなかったら。何やら物騒な事を言っていないか？聞いただそうにもアルジャラーは既に眠っているよ  
うだ。

血を吸って下僕って、それってまさか。

「……………」

クラスメイトが吸血鬼って、どうなんだろう。志真は今後に大きな不安を感じるのだった。



## 菊乃の反抗 1

保護され、住むところがあって、食べ物ももらえる。それだけでも、十分恵まれているのだと思う。

例えば、と菊乃は考える。

あちら……地球の日本に普通に暮らしていて、突然言葉が全く通じない姿もどこか異なった新人類みたいなのが現れたらどうなるか……どうなるんだろう、実際。あちらに異世界があるなんて認識は無かったから、少しややこしい事になるかもしれない。

宇宙人だ、と勘違いされる事の方がありそうだ。

どこの国に落ちるかでも、命運は分かれる。

いきなり戦争に巻き込まれるかもしれないし、アフリカあたりでライオンの餌になる事もあるかもしれない。うまく保護されたとしても、最終的には色々調べられて、人間と違う存在だとなかって、研究対象に、とかそんなところだろうか……。

異世界は、沢山あるらしいから、ここではなく、もっと未開の地みたいなところに落ちていた可能性もある。そこで、獣や全然姿の違う異世界人の食料になっていたかもしれない。

と、菊乃はぼんやりと考えていた。

だから今の窮屈な生活はかなり恵まれているのだ、と自分に言い聞かせる。

菊乃は疲れていた。

今の安定した生活は仮初に過ぎず、いつ打ち切られてもおかしくない。

菊乃はこの世界の人間にとって歓迎しがたい異世界人、であるかもしれない。(それがどうという基準によるものなのか、曖昧だが)万が一そうだという事になってしまった場合、どうなるのか。菊乃には分からなかった。

閉じ込められるか、最悪殺されてもおかしくない。  
それは嫌だから、菊乃は考える。溶け込む努力する。慎重になる。  
人に不快を与えないよう、気を配る。

しか、今のところ何も変わらない。どうすれば良いのかまるで分  
からなかった。

気晴らしに庭に出てみると、どこからか、子どもの泣き声が生  
いた。

菊乃はぶらぶらと木々の間を歩きながら、何となくその声のする  
方へと足を向けた。する事が無く暇なのだ。ウィガールの通訳で、働  
きたいという意味を伝えてもらったが、ユーイから許可はおりな  
かった。

ユーイが駄目だと言った以上、どうする事もできない。この家で  
はユーイが王様だ。

何一つ変わらないまま、時間ばかりが過ぎていく。

ぐすぐすと、しゃくりあげる声が近い。この壁の向こう辺りにい  
るのだろう。どうしよう。暫く躊躇っていたが、思い切って声をか  
ける事にした。

「どうしたの？」

一瞬、泣き声が止んだ。少しの沈黙の後、ずずつと鼻をすする音  
が聞こえた。

「だ、誰…？」

怯えたような幼い子どもの声は、泣き続けたせいかわれてきた。  
迷った末、菊乃は答える。

「菊乃」

「……キク、ノ？それ、名前？」

「うん。貴方は、どうして、泣く？」

再び沈黙。言葉の発音が悪く、通じないのかもしれない。何と言

えば、良いだろうか。菊乃は考え、口を開く。

「助け、いる？」

「……靴、が」

しゃくりあげ、ひっくり返った声が答えた。

「い、いじわる、されて、く、くつが。僕の、くつ……そっち、塀の向こうに投げられて、くつ、無くしたら、怒られる」

しゃくりあげる度に途切れる声は切れ切れで、非常に聞き取りにくかった。だが、繰り返される靴という単語と、塀という単語は聞き取る事ができた。

くつを無くして泣いているのだろうか。それで、塀の向こうで探しに行く事も無く、泣いているという事は。

(こつちに、あるのかな)

何となく辺りを見渡した菊乃は、すぐにそれを見つけた。木の根元でひっくり返った、茶色の小さな革靴だ。きっとこれの事だろう。それを拾い、辺りを見渡すと木の反対側にもう一つ。

「あつた」

「！……ほ、本当？」

「いま、なげる。取って」

一度声をかけてから、菊乃は靴を一つづつ思い切って投げた。薦の這う2メートル程の壁の上を、革靴は飛んでいく。それはうまくひっかかることなく、向こう側へ落ちた。

「僕のくつ！あ、ありがとう！えっと、キクノ！」

「ううん」

じわり、と胸の中に暖かいものが広がる。こちらへ来て、こんな風に誰かに感謝をされたのは、初めてだ。

「本当にありがとう！もう駄目だって思って、諦めてたんだ。だって、食べられちゃったりするよりは、まだお母さんに叱られた方が良いもん。けど、お母さん怖いし……くつを見つけてくれて、あり

がとつ。……あ、でも、キクノはどうしてそこにいるの？危なくない？」

「あぶない？」

「だって、皆言ってるよ。今、ここには悪い異世界人がいるんだって。だから近づいちゃいけないって。掴まると、食べられちゃうんだよ。もしかして、キクノは掴まっちゃったの？」

心配そうに子どもの声が騒る。わるい、異世界人。その言葉が菊乃を凍りつかせていた。それは菊乃の事に違いなかった。

ああ、そっか。

ずっと、心が冷えていく。子どもが靴を取りにいけずに泣いていたのは、この家にいる悪い異世界人が怖いからなのだ。この子が普通に菊乃と話してくれるのも、感謝してくれるのも、菊乃が異世界人だと気付いていないから。

「……………」

「どうしたの？」

心配そうな声に、菊乃は少しだけ迷う。どうせもう会う事もないだろうし、わざわざ言っただけで怖がらせる必要は無い。自分が何者であるかなんて言っただけで、どうなるというのだろう。

でも、分かってもらいたい。

誰でも良い、誰かに。悪い異世界人じゃないと、認めてもらいたい。

「私、異世界人です」

口にした途端、決意は後悔に変わる。壁の向こうから、小さく息を飲む音が聞こえた。それから、一目散に走り去っていく小さな足音。

行ってしまった。

こうなるだろうと分かっていたのに。菊乃は冷たい塀にもたれ、ぺたりとその場に座り込んだ。

「悪い、異世界人って」

何なのだろう。少なくとも、菊乃は人を食べたりはしないが。意外に噂は広まっているようだ。「良い子にしてないと　　が来るわよ！」と、自分がその空白に当てはめられるような存在になる時が来るとは、思いもなかった。

海で溺れて、死に掛けた時。助けしてくれた『異世界人』の事を思う。

そもそもあれが始まりだったのは分かっている。菊乃の命を助けた幸運、奇跡的な巡り合わせ。それがいけなかったのだとしても、菊乃は自分を助けてくれたというその人に、感謝している。

誰なのかも分からない、その自分を助けてくれた異世界人は、今の菊乃の支えになっていた。そういう意味でも、恩人だ。

いつか会ってちゃんと、お礼を言いたい。

菊乃を助けた事で、その人が何らかの不利益を被っていないと良いと心から思う。

せめて、その恩をちゃんと返すまでは、

「キクノ……」

小さな、息を詰めたようなその声は、菊乃をはっと我に返させた。

「キクノ、まだいる？」

さっきの、子どもの声だ。戻って来た事に、菊乃は驚いた。

「どうしたの？」

「！」

ひ、とも、い、とも付かぬ悲鳴のような声を飲み込む音が聞こえた。

怖がっている。

子どもの好奇心は旺盛だ、怖いもの見たさで戻って来たのだろうか。恐怖よりも好奇心が勝ってしまう。それは、時として非常に危険な事だけれども。

ここで注意するのも変な話だ。別に菊乃人が言うような危険な存在ではない、筈だ。

どこか緊張した沈黙が数十秒続く。菊乃ただ黙って、相手の言葉を待ち続けた。やがて。

「……………」  
「ごめんなさい」

「え？」

子どもの口から出た謝罪の言葉に、菊乃は驚く。謝られるとは思っていなかった。

「ごめんね、キクノ。キクノは僕の靴を取ってくれたのに、優しくしてくれたのに、急に逃げちゃって…………ごめんなさい。お、怒ってる?」

「いいの。ふつう、と思う」

寧ろ謝る為に、わざわざ戻ってきてくれた事の方が、凄いと思う。凄く怯えて、怖がっていたのに。

「キクノは、あの、ほ、本当に異世界人、なの？」

「うん」

「わ、悪い事するの?人、食べるって本当に?」

「ううん、しない」

菊乃は普段よりもはっきりと声を出した。

「食べないの?」

「うん」

再び扉の向こうが静かになる。ここからでは顔も見えないから、彼が何を思っているのか菊乃には想像する事も難しかった。それは多分、向こうも同じだろう。

「……………」  
「また、来ても良い?」

彼がどんな気持ちで、何を考えてこう言ったのかも、菊乃には分からなかった。

## 菊乃の反抗 2

キリアン

それが、菊乃にできた初めての友達の名前だ。

年は10歳になったばかりで、素直でちよつと怖がりな男の子。壁越して話しているため、姿は分からないが、何となく育ちが良さそうな感じがしていた。

午後の3時、菊乃は殆ど毎日庭に出る。キリアンが靴を落とした壁の辺りで1時間ばかりぼうつと過ごす。キリアンは毎日来るわけではない。週に3、4回程やって来ては、おそろおそろ菊乃の名前を呼ぶ。

最初の頃は緊張した様子だったキリアンも、最近は慣れたのか屈託無く話すようになった。時々、くすくすと楽しげに笑ったりもする。

キリアンの話の内容は様々で、学校の事、友達や、家族の事、勉強の事、読んだ本の事などだ。あまり話す相手がいないのか、飽きることなく話は続く。

それに対して菊乃は短く相槌をうち、続きを促す。退屈だとは思わなかった。人の話を聞くのは好きだし、勉強にもなる。

やがて話し終わると、キリアンが菊乃に質問を始める。菊乃の姿の事や、家族の事、世界の事。

ぼつぼつと、思い出すまま菊乃は話す。

もう2度と戻らない菊乃の思い出を語るのは、ほんの少しの痛みを伴う行為だ。慣れない言葉であるために、ゆっくりとしか話せ無いが、キリアンは急かさない。それどころか、時々キリアンが先生になって、菊乃の発音を直してくれたりする事もあった、

それは菊乃にとって、唯一安らげる穏やかな時間だった。



「最近ね、お母さんが煩いんだ。危ないから、早く帰って来いって」  
「悪い異世界人、いるし？」

「違うよ、キクノの事は内緒にしてあるから。そうじゃなくてね、最近物騒なんだって。誘拐事件が起きてて、死体で見つかった子もいるって。同じ学校の子にもね、誘拐されそうになった子がいるらしいんだ。走って逃げたって、本当かどうかは知らないけど」

それは本当に物騒な話だ。菊乃は眉を顰めた。

「キリアン、平気？少し、来るの止めるのが良いと思う」

「大丈夫だよ！僕はね、えーっと、ちゃんと気をつけてるし安全だから……とにかく！心配しなくて良いんだ。それよりね、明日良いものを持ってくるから、絶対待っててね」

「でも」

「大丈夫！ね、約束。良いでしょ？」

押し切られるように約束を交わしたが。翌日、キリアンは現れなかった。

風が雨の匂いを含んでいた。

今にも振り出しそうな灰色の空の下、菊乃はそつと溜息を吐く。家に戻った方が良いと分かっていたが、気が進まなかった。昨日帰り際に、キリアンが残していった言葉が引っかかっていた。

明日、良いものを持ってくるから、絶対待っててね。

そう言ったのに。

(何かあって、来れないのかもしれない)

キリアンは約束を破るような子供ではない。

病気や事故、もしかしたら家で不幸があったとか。思い浮かぶのはどれも不吉な理由ばかりで、菊乃は落ち着かない気持ちになる。近頃多発しているという誘拐事件に巻き込まれていたら、どうしよう。離れがたい。いつまでもそこにいたところで、何かが分かるわけでもないのに。

菊乃は手を伸ばし、茶色の石の壁に触れてみた。微かに暖かい、

ざらざらとした感触。

それが、菊乃と世界とを隔てる壁だった。

心配だから様子を見に行く。そんな簡単な行為も、許されていない。ぽつ、と手の甲にぬるい雨の粒が落ちる。ついに降って来た、これ以上は待てないし、もうキリアンも来ないだろう。そう思うのに、足は動かなかった。

ぽつぽつと降っていた雨はやがて大降りになった。勢い良く降ってきた雨の粒が、あつという間に菊乃を濡らす。

着ていた緑色のワンピースが、雨を吸って皮膚に張り付く。髪を伝い、顔や首筋に流れていくぬるついた水の感触も、まるで気にならなかった。今、菊乃の心を占めているのは、キリアンの身の心配だけである。

余計な心配だと、良いけど。

どれくらいそうしていたのだろう。雨の音に混じって、ばしゃばしゃと水を撥ねる足音が近づいていた。

「キクノ」

頬に当たる雨が消える。

「探しましたよ。こんな雨の中、何をやっているんですか」

この世界にも傘はある。紺色の大きな傘を差し出しながら、ジェレミーがほつとしたような顔で菊乃を見下ろしていた。

「家に入ってください。風邪を引きます」

さあ、と腕を引かれるのに、逆らう気は起きない。

ここで菊乃が何をしていたのか、ジェレミー達は知っているのだろうか。知らぬ筈は無いと思いつつも、直接確かめるのは怖かった。誰かと話す事は禁じられてはいないが、ユーイは簡単に菊乃の行動を制限する事ができる。

彼らは何も言わない。もし知っていて黙っているなら、それは何を意味するのだろうか。

もう、キリアンはここには来ないのかもしれない。

漠然とそう思った。

元々、そう楽観的な方では無いが、ここに来てからの菊乃は常々悲観的な物の見方をするようになった。常に悪い事を想定するのはいざという時になるべくショックを受けたくないという、保身からでもある。

信じたことを裏切られるのは辛いし、信じた人に裏切られるのも怖い。

菊乃は弱くて臆病だった。

いつも自分に逃げ道を用意していた。

傷つかぬように、後で悲しまなくても良いように。キリアンは子供だから、その内菊乃に飽きて、来なくなるかもしれないし、ユーイに止められるかもしれない。キリアンと菊乃の繋がりはとても不安定なものだ。本当は友達とすら、言えるのかも怪しい。

こんな日がいつか来ると覚悟していた。だけど。

待っててね、とキリアンは言った。あの子は、約束を破るような子ではない。だから、菊乃は不安から抜け出す事ができなかった。

次の日、菊乃はジェレミーに外へ出る事を禁じられた。

昨日雨に濡れて体を冷やしたせいで、熱を出したからだ。熱といっても、ほんの微熱程度だったが。

「いけませんよ」

ベッドから起き上がろうとする菊乃を、ジェレミーは押し留める。「今日は大事を取って寝ていてください。ユーイ様がない時に責

方にもしもの事があれば、僕が叱られます」

3日ほど前から、ユーイは家に帰っていないらしい。

理由は知らないが、とにかくあのユーイが、菊乃が病気になったところでジエレミーを叱るとは思えなかった。ユーイにとって、菊乃は特に意味の無い存在だ。むしろ厄介者だと思われるかもしれない。

大体、ほんの少し熱があるくらいで。

「キクノ」

菊乃の気持ちを看透かしたかのようなタイミングで、ジエレミーは諷めるように菊乃の名前を呼ぶ。

影が落ち、息を飲む。

上から覆いかぶさるように、顔を覗き込まれた菊乃は固まるしかなかった。顔が近い。近すぎる。灰がかった青の瞳に落ちる睫の影までが確認できてしまう。彫の深い綺麗な顔は、さぞかしもてるのだろうと推測できるし、本人も女性の扱いに手馴れている様子だった。

流石にうるたえ赤くなる菊乃に、ジエレミーは微笑んだ。

「良い子だから、大人しくしてください」

囁くような甘い声に、何も言えなくなってしまう。黙っているのを肯定と取ったのか、ジエレミーは離れていく。わけの分からない緊張から解放され、ようやくまともに息ができる。

「後でまた様子を見に来ますから。それまでゆっくり休んでいてください」

念を押すように告げて、ジエレミーは部屋を出て行った。

心臓が早鐘を打っている。

(一体、何)

吃驚しすぎて、何も言えなかった。ジエレミーは元からスキンシップが多い人だが、今日のは流石にやりすぎだと思う。

(何か、誤魔化そうとしてた?)

菊乃は勘が良い方だ。特に嫌な予感によく当たる。

何かあったのだ。熱を理由に、菊乃を部屋に押しとどめたという事は、多分菊乃に関係する事だから。それも、菊乃に報せたくないような事。昨日の、今日で。どうしても結びつけてしまうのは、昨日現れなかったキリアンの事だ。

どうしよう。

思わずシーツを握る手に力が入る。

キリアンに何かあったら。ここに来ていた事で、何か問題があったのかもしれない。胸に湧くのは後悔だ。やっぱり、話しかけたりするべきでなかった。

勿論、まだ本当にキリアンに何かあったと決まったわけではないが、不安は膨らむ一方だ。

確かめないと、とても寝ていられる気分ではない。

部屋を抜け出す言い訳を考えて、菊乃は部屋をぐるりと見渡した。目に付いたのは、ベッド脇にあるサイドテーブルに置かれた、水差しだ。

「……………」

迷った末にそれに手を伸ばした後、更に思い悩む。

水を飲もうとして、中身をベッドに零してしまったという事にしたらどうだろう。シーツの替えは部屋には無いから、貰いに行く事ができる。だが、わざとマーサの仕事を増やすような真似をするのは、悪い気がした。

菊乃は溜息を吐いて、水差しを元の場所に戻した。

ここは正直に話そう。誰かにこれ以上迷惑をかけるよりは、自分が怒られた方が気が楽だ。

菊乃はそっと立ち上がり、裸足に皮の靴を履いた。寝ていたために、薄い布地の夜着のままだったので、緑色のレース網のケープを

羽織る。首元に白いリボンのついた夜着は、足首までの長さがあるワンピースで、菊乃の感覚からすればこのまま外に出る事に、それほど違和感を感じないものだった。

確認、するだけだから。

今まで、ユーイヤジェレミーの言いつけに従わなかった事は無い。危うい立場にいる菊乃としては、そうするのが一番だと分かっていた。

(でも)

菊乃は小さく息を飲んでから、こっそりと部屋を抜け出した。

### 菊乃の反抗 3

足音を忍ばせて歩く。丁度来客があつたようで、階下から声がしていた。ジエレミーが対応しているようだ。

これで言いつけを破つた事に加え、来客中は部屋にいる事という決まりも守らなかつた事になる。本当ならすぐに部屋に戻るべきだ。ここに菊乃の安全を保障してくれるものは何も無く、だからなるべく彼らの機嫌を損ねないようにしておくべきだ。

だが菊乃は部屋に戻らなかつた。

緊張しながら、階下へと続く階段がある吹き抜けへと近づく。客の女性は随分と興奮しているようで、上ずつた声が反響していた。それをジエレミーが宥めているようだ。

壁にはりついた状態で、菊乃は耳を濟ませる。

「でも、絶対に、ここに来ている筈なんです！」

「落ち着いて下さい、奥様。先ほどから何度も申し上げている通り、昨日は誰もここへ訪ねて来ていません。確かに、これまでに何度かいらつしゃつているようですが、昨日は来ていない。これは確かです」

「そんな筈ありません！だって、あの子は私がここへ来ては駄目だつて叱つたから、飛び出して行つたんですよ。こちらへ向うのを見た人もいます！」

「叱られて、態と家に帰らないでいるのでは無いですか？友達の家にでも匿ってもらっていないか、そちらを探すのが先ではないでしょうか」

「心当たりは全部当たりました。後は、ここくらいなんです」

女性は誰かを探しているようだ。ここへ来ている筈だと主張している。菊乃は壁に背を押し付けたまま、青褪めた顔で固まっていた。

「一度、中を探させてください。自分の目で確認しなければ、納得できません」

「ここが誰の家だか、ご存知ですね？」

「……ええ」

強張った女性の声が一旦途切れる。

「ここに今、影憑きの異世界人がいることも知っています」

どきり、と心臓が跳ね上がる。一部聞きなれぬ言葉があったが、その他は聞き取れた。異世界人とは勿論、菊乃の事だ。

「情報が独り歩きしているようですね。確かに今、異世界人を一人預かっていますが、影憑きかどうかは不明です。滅多な事は言わないでください」

「ならば会わせてもらえますか」

「何故です」

「息子はその異世界人と会っていたのです。何か知っているかもしれない」

「残念ながら、その希望に沿う事はできません。誰にも会わせるな、というのが只今不在の主からの言いつけなので。それに、あの子は何も知りませんよ」

そう、確かに菊乃は何も知らない。

「我々は、貴方の息子さんと異世界人のやりとりを、全て把握しています。預かっている者の務めはきっちり果たしているのですね。そういう理由で、昨日、貴方の息子さんがここへ来なかった事も、家の異世界人と接触しなかった事も間違い無いとはつきり言えます」

想像していた事だったが、それでもやはりショックだった。辺りに誰もいないと思っていたが、隠れて聞いていたのだろうか。

「…そんな、でも」

「どうしても納得できないというなら、管理委員会にでも、騎士団



にでも訴えてくださってかまいません。我々としては、後ろ暗いところはありませんから、お好きなように」

ジェレミーの話し方はいつも通り、柔らかく丁寧なものだ。だがそこには、どこか突き放すような冷たさを感じられた。菊乃は急に怖くなって、立ち聞きを止め部屋に戻る事にした。

知りたかった事は、知れたと思う。

足に力が入らない。菊乃はベッドに腰を下ろした。冷えた指先を握り締めて俯く。

(やっぱり、キリアンに何かあったんだ)

優しくて少し臆病で、真面目なキリアン。

親に叱られて帰りにくいからと言って、無断外泊なんてするだろうか。あの日、靴が取れなくて泣いていた日のように、帰りたいのに帰れないでいるのかもしれない。

(……やっぱり、誘拐)

どうしよう。

キリアンの行方が分からなくなっている、その事を知ったところで菊乃には何もできない。外へ行く事は禁じられて、右も左も分からないようなところでどうやってキリアンを探し出せば良いのかも分からなかった。何より、菊乃はキリアンの姿すら知らないのだ。

できる事なんて無い。

菊乃は自分の事で精一杯なのだ。

立場の危うい異世界人で、頼れる人もいない。友達とは言っても、顔すら知らない子ども。一応、来ない方が良いと忠告もした。だから。

誘拐されて、死体で見つかった子もいる。

「あー、もう！」

菊乃は立ち上がった。

こんな状態で、じっとしている事など無理だ。

キリアンは菊乃の為に一人でここまで来ていた。親に叱られ、家を飛び出したのも菊乃のことが原因だ。昨日、暫く来ては駄目だと強く言えば良かった。そうすれば、こんな事にはならなかったかもしれない。

私のせいだ。

屋敷を抜け出す事はそれほど難しくは無かった。勝手に外に出るなどとは言われていても、ドアの外に見張りがついているわけではない。この屋敷の住人は菊乃を除けば3名で、ユーイがいない今はたったの2名だ。

今まで、大人しくしていた事も、幸いしていたかもしれない。

それでもいつまでも部屋にいない事がばれないとは思えず、菊乃は急いだ。門のところには警備員がいる為、塀を乗り越える必要があった。茂みに身を隠すようにして、塀まで向う。

塀は真っ直ぐで取っ掛かりが無く、2 m程の高さがある。これをよじ登るのは無理そうだが、幸い近くに丈夫そうな木が生えている場所がいくつかあった。

逃げ出そうとか考えた事は無かったつもりだが、無意識にかその場所を覚えていた。

曲がった幹にしがみ付き、太い枝に手を伸ばしてよじ登る。赤茶の木の皮が少し削れて、ぱらぱらと落ちた。枝に登ると、更に次の枝へと手を伸ばす。よじ登る時に少し足がすべり、冷や汗が出た。下は見ないようにして、更に上へと向う。細くなってきた枝が、みしみしと揺れた。

これ以上は無理かもしれない。細い枝を見上げ、次にまだ少し届かない塀へと目を向ける。だが、これくらいの距離なら、思い切って飛ばせば届くかもしれない。

考えるのは一瞬。

菊乃は枝を踏み切って、腕を伸ばした。塀にぶつかるようにして、必死で伸ばした手で塀の天辺にしがみ付く。そこから、体を持ち上げるのが一苦労だった。

全身汗だくになりながら、何とか塀の上に体を乗せる。なだらかな緑の斜面と、暗い森が塀の向こうに広がっていた。

達成感に浸っている暇は無い。菊乃は首を振って、見惚れていた景色から目を離した。

まずは付近に人がいないことを確認してから…と、下を見た菊乃は固まった。

人がいる。

何故すぐに気がつかなかったのか、混乱するほど近く、真下よりも右に三步ほど離れた位置だ。壁に凭れたその男は、鋭く冷たい目で菊乃を見つめていた。

宝石のような紫色の瞳を見つめたまま、菊乃は身動き一つ取れない。

動いたら、殺される。

肌を刺すような予感に、背筋が震えた。

褐色の肌に抜けたような白金の髪、彫刻のように整った顔をした男は、今にも切りかかって来そうな威圧感を放っている。獲物を前にした虎、そんな男に対して成す術は無い。

誰……

ここにいるという事は、ユーイの屋敷の関係者だろうか。

黒いハイネックのシャツに、白地に青と金の刺繍が肩から胸に入ったかつちりした高そうな上着を適当に羽織、下腹の辺りで太い革ベルトで斜めにとめている。そのベルトから下がっている長細いものは、多分剣だろう。黒いズボンの裾にも青と金で刺繍が施されて

いる。

私服、というよりは何かの制服のような。

「いつまでそうしているつもりだ」

不意に、男が口を開いた。淡々とした低い声だ。

「外へ下りるか、大人しく戻るか速やかに決めろ」

男の瞳がすつと細くなる。背筋が寒くなるような、冷えた視線だった。外へ出た場合は無事ではすまないだろう。捕まえられて、刑務所のようなところに入れられる。最悪は殺されるかもしれない。

男の右手は剣の柄に添えられていた。それを確認して、菊乃はごくりと息を飲む。

ここで菊乃が死んだところで、困る者はいない。理不尽を訴えてくれる家族もいなければ、友もない。菊乃の命は軽いのだ、とても。

(分からない)

自分に見張りがつかなかった意味も、この屋敷の警備が全く薄かった理由も。多分、菊乃がいつかこうして逃げ出すのを見越しての事だった。規則を破って逃げた菊乃を、男が始末する、そういう手筈なのだろうか。

(分からない……、何でそんなに回りくどいやり方をするの)

無駄に与えられた時間が、機会が、一体どんな意味を持つのか、菊乃には分からなかった。

この与えられた生活全てに、何か意味があるのだとしたら。

ここで、キリアンと知り合った事も、彼と友達になった事も只の偶然では無かったとしたら。それは菊乃にとっては辛い事実となるが。

(でも、知りたい)

(どうしてこんな事になるの、この世界は何なの、影憑きの異世界人って何、私を助けてくれた人はどこにいるの、キリアンは無事なの)

動かなければ、何も変わらない。

死にたくない。

でも、いつもと同じことを繰り返しては、何も分からない。

例えその行動の答えが、菊乃の死であるとしても。

## 菊乃の反抗 4

一度は覚悟を決めたつもりだったが、すぐに行動に移す事はできなかった。

下りた途端斬り付けられたらどうしよう。

死ぬのは嫌だし、斬りつけられるのは怖すぎる。きつと、凄く痛いはずだ。

進むことも引く事もできないまま、壁の上に踏み止まる菊乃。そんな彼女を見つめる男の瞳は容赦なく鋭いが、濁りの無い美しい色をしていた。意外に暖かい色合いの紫。少しの嘘も誤魔化しても通用しなさそうな、真っ直ぐな眼差しが、身動きできない菊乃を射抜く。

「死にたいなら下りて来い。その望みを叶えるのは容易い」

顔色一つ変えることなく、恐ろしい事を言われた。菊乃はぶんぶんとうつを横に振る。そうか、と男は目を細めた。

「ならば、戻れ」

後ろは不自由だが、安全な場所。だが、戻る事もできない。キリアンの事がまだ解決していなかった。屋敷の周囲には何も無い。遠くの森と、そこに続いたただただ広い草原。生える真っ直ぐな草の背丈はそれほど高くなって、身を隠すには心もとない。ぽつぽつと生える木も幹が細い。この屋敷に近づく者を見つけるのは容易いだろ

う。

考える……、落ち着いて、考えないと。

ジェレミーはキリアンの事を知っていた。

ここへ、何をしに来ていたのかも。キリアンが菊乃と言葉を交わ

す事は黙認されていた、という事だ。

ここでの生活に神経質になっている菊乃は、辺りに誰もいなかった事を知っている。知っていたつもりだったが、壁の向こうはどうだったのか。誰か、いたんじゃないかな、と菊乃は考える。キリアンと、他の誰か。

例えば、この人、とか。

「ずっと、ここにいました？」

自分の身の振り方を決める前に、菊乃は問いかけた。まだまだ不自由な言葉であるのが、もどかしいと思う。聞きたい事は山ほどあるのに。

「いつもここに。キリアンが、来ていた時も？」

男はただじつと菊乃を見ている。

「貴方は、キリアンを知っていますか？」

「その質問で、お前は何を得る」

「え…える…のは。あの、私は、キリアンの無事が知りたい」

取り敢えずはそれだけで良い。

ほんの僅かに、男の左の眉が上がったように見えた。気のせいかもしれない。驚くほど表情に変化の無い男だった。だから、菊乃には彼が何を考えているのか、思っているのか少しも想像できなかった。

分かるのは、あまり好ましく思われていないだろうということ。

(ううん、多分、もつと悪い)

夜が来る前の空のような紫の目にあるのは、憎悪だ。菊乃の存在をひたすらに憎んでいるような。

「知りたいなら」

「え」

「外へ出る。諦めるならさっさと戻れ」

諦める……何を？

キリアンの、事を？

分からないこと。誰も頼れないこと。たった一人であること。その全てが、じわじわと菊乃を追い詰めていく。負けないように強く心を保とうとして、いつもどこかで失敗していた。

関係ないというには、関わりすぎてしまった。

この状況がユイ達の手によって作り出されているものなら、キリアンは無事な筈だ。でも、もしも違ったら。本当に誘拐されていたら。

そうだとしても仕方が無い。例えここで菊乃が動いたとしても、何も出来ない。だって、外へ出たらきつと唯で済むはずが無い。どうしようもないのだ。無茶をすれば、ただ自分の身が危なくなるだけ。

「死ぬのは、嫌」

小さく呟いて、菊乃は決めた。一呼吸おき、高い壁から一気に飛び降りた。

地面に降り立って、剣を抜き間合いを詰めて来る男の紫の瞳を見据える。みっともなくともなくても、足の震えを抑える事はできなかった。今にも叫んで逃げ出したい気持ちが湧き上がり、ぎゅっと両手を握り締める。

「なら、どうしてこちらへ下りた」

眼前の剣先をなるべく見ないように、ひたすらに男の顔に意識を向ける。一切の柔らかさをそぎ落としたような硬質な美しさは、彼の持つ刃物を思わせた。

熱の無い瞳には、ただ殺意だけがある。

彼は、菊乃がこの世界で会った誰よりも、分かりやすかった。むき出しの嫌悪を、隠そうともしていない。向けられているのは殺意



だというのに、不思議とそれに安堵した。悩まなくても良い、疑わなくても良い。ただ、それだけで。

菊乃は笑う事ができた。

我慢する必要も、取り繕う必要も無かった。嫌われる心配をしなくても良い。何故なら最初からどうする事も出来ないほど、憎まれている。

相変わらず手足は震えていたが、呼吸は楽になっていた。

逃げよう

その思考は読まれていた。

一瞬瞳に浮かんだ怪訝な色を掻き消して、男は走り出そうと身を捻った菊乃の背後に回り、腕をねじり上げた。そのままうつ伏せに菊乃は地面に押し付けられる。痛い。擦りむいた手足よりも、未だ抜けそうなほど引つ張られている腕が。

背中を膝で押さえられているため全く身動きがとれない。

首筋に冷たい刃物が押し当てられて、青褪める。本当に、死ぬ。殺される。覚悟なんてできるわけがなかった。自分が、こんな風に殺されるなんて。

どうして。

酷いと思う。何もしてないのに。

ヤケになった自分の行動を後悔する。助けて、誰か。誰も助けてくれるわけがないと分かっているにも、止められない。助けて、助けて、

お母さん！

「やりすぎです！ハイネス！」

鋭い声を、麻痺した思考の外で聞いた。

「まだ確認できていない」

「これ以上何をする気ですか。キクノに怪我をさせることまでは、許していません」

「……影憑きは、追い詰められた時にその正体を現す」

「充分、追い詰めたでしょう」

男と誰かが会話している。聞き覚えのある声だ。

(誰……? ジエレミー……?)

どうやら助かったらしい、という安堵から全身の力が抜けていく。同時に、意識の方も闇へと滑り落ちていった。

元々微熱があったのだ。無理をした事で熱が上がり、その後2日ほど寝込むはめになった。2日目の朝、起きると部屋にユーイ・ユーイの姿があった。

顔を見るのは何日ぶりだろうか。

派手な刺繍の入った濃い緑色のジャケットと、同色のズボン。袖口からシャツのフリルを覗かせたユーイはまるで、どこぞの王子様のような。ベッドの脇にある椅子で足を組み、ふんぞり返っていた彼は、菊乃の目が覚めた事に気がつく、小さな顎をつんと上向けた。

「何か言う事はあるか」

謝罪を求められているのだろうか。今回、菊乃は彼の言いつけをいくつか破っている。そう、仕向けられていたようにも思うが。

それでも、約束を破ったのは菊乃だ。

だが、菊乃の口から出たのは、謝罪の言葉ではなかった。

「キリアンに、言ってほしい。もう、会いません」

ユーイはほんの僅かに眉の端を動かした。緑の瞳は平静を保ち、相変わらず観察するように菊乃を見ている。

「そうか。伝えておく。他には」

「ありがとう、と。キリアンに。それだけ、良いです」

「了解した」

ユーイは立ち上がった。そのまま部屋を出て行くかと思っただけ、暫くそこで菊乃を見下ろし目を細めた。

「賢しいな、サカマキ・キクノ」

口角を上げ、冷笑する。

「苛めがいはありそうだが、可愛げが無い。愛らしさは女の武器だぞ。だが、面白い。少し遊んでやるから覚悟しておけ」

良く分らないが、可愛くないといわれているようだった。妙に背筋が寒くなる。また、熱が上がってきているのかもしれない。

ユーイはそのまま部屋を出て行こうとドアを開けてから、振り返った。

「キリアンは無事だ」

それだけ告げて、今度こそ部屋を出て行った。

残された菊乃は溜息をついて、目を閉じた。

キリアンは、無事だ。

壁の外にいた男のこと。現れなかったキリアンのこと。彼らを探しにきた女性のこと。殺されそうになった時に止めに入ったジェレミーのこと。

タイミングが良すぎた。

本当なら、助かるわけが無い。あの剣を持った男なら、容易く菊乃を斬り捨てられた筈だ。全部が仕組まれていたというのなら、キリアンがいなくなったというのも、嘘なのかもしれない。

そうだと良いと思った。

ユーイに直接聞いても答えをくれないだろう。だから、全部知っ

ているような態度で、キリアンへの伝言を頼んだのだ。繋がっているのなら、了承してくれる筈だと思って。

良かった。

無事だった。

例え、全部が仕組まれた上の仮初の『友達』だったとしても、菊  
乃は彼を憎めなかった。

助けは来ない。

だからもう、誰かにこの心を預ける事はできない。

## 伊吹、異世界人と知り合う 1

あの日、日本の商店街から姿を消したのは4人。自分たち兄弟の他に2人もいたとは驚きだ。いや、良く考えればあれだけ人がいたのだから、当然考えられる結果だった。

むしろ、今まで何故考え付かなかったのか。

リザレット・クラウラの話によれば、2人とも既に施設を離れ、町で暮らしているらしい。

その時のリザレットの伊吹に対する意味ありげな微笑みには、気がつかなかったことにした。笑っていない目の奥が何を語っているのか、敢えて考えまい。

昨今の女性は全く遅しい。決して自分がひ弱なわけではない。

対人スキルが低い伊吹は特に女性が苦手だった。特に若い女性は鬼門である。

よりにもよって2人とも女子高生だと聞いた時には、思わず心の中で呟いていた。

最悪だ。

ひきこもり気味の伊吹にとって、女子高生というのは恐るべき未知なる生き物である。理解のできなささにおいては、異世界人と変わらない。

奴らはいつとも徒党を組み、何故か世界で自分が一番だというような顔をして道を譲らず、口を開けばうざいきもいしんじやえばいいのに、等という死の呪文を容赦なくぶつけてくるのだ。特に、伊吹のような（彼女たち曰く）いけてない男には。

電車に乗れば痴漢を見るような目で見られ、夜道ですれ違えば足

早に距離を取られる。

伊吹はいつも言ってるやりにあつた。

何でそんなに自意識過剰なんだ、こつちだつてお前達に一切興味は無い！

勿論口に出せた試しは無い。

言つたら最後どんな酷い目にあつか、考えるだけで寒気がする。女性が弱いなんて幻想だ。寧ろ強い、強すぎる。

よりもよつてその女子高生。

異世界で唯一互いの不幸を分かり合えるかもしれない相手……、だというのに、さつぱり分かり合える気がしなかつた。現実とはとことんまで無常なものらしい。

その女子高生の内の一人は、伊吹の言語習得に協力してくれている男の家にいると聞いた。

ウィガー・ハルベルト。

彼の家は宿屋を営んでおり、余つた部屋の一室を使つてもらつているらしい。宿屋の仕事を手伝いながら、学校へ通つているところだとか。

午後1時。ウィガーは週に3度、伊吹に言葉を教えにやつて来る。いつものように2時間勉強した後、茶を飲みながら雑談する。その時に、その女子高生がどんな奴なのかを訊ねた。ウィガーは疲れきつた胡乱な眼差しを、遠くへ向けて溜息を混じりに答えた。

「煩い。とにかく騒がしい」

諦める、ウィガー・ハルベルト。日本の女子高生とはそういうものだ。大体は。

「泣く、怒る、喚く、笑う。その辺りの感情の変化が激しすぎて、正直扱いに困る。だが、妹とは気が合うようでうまくやっているし、明るく人懐っこいから、他の従業員にも可愛がられているようだ」  
「ウィガーとは？」

軽い気持ちで訊ねたのだが、何故か疲れたような顔をされた。

「どうかしました？」

「いや。……別に、特に何も無い。そこそこだ」

何も無い、というのが逆に怪しい。思わせぶりだ。

伊吹は改めて、斜め前に座り茶を飲むウィガーの姿を見た。

長身で、筋肉質だがすっきりとした体型。細マッチョとかいうやつだ。日に焼けた彫の深い顔は少しばかり厳しい感じだが、悪くない。寧ろ良い。

日頃気苦労が多いのか、やたらふけて見えるウィガーだが、伊吹からすれば羨ましい男前である事は間違いない。女子高生からしたら、かなりの優良物件では無いだろうか。

「惚れられたとか？」

「有り得ん」

驚くほど素早い回答だった。

「そういう勘繰りが多いから正直うんざりしているだけだ」

はあ、とウィガーは溜息を吐いた。

うんざりしているように見えるが、そう周りから言われるという事は、それなりに良い感じに見えるという事ではないだろうか。

(しかし、その女子高生は異世界人だろうか……良いのか?)

果たして恋愛対象になるのか。ウィガーが迷惑そうなのは、相手が異世界人だからだというなら納得できる。そういえば、結婚等の事情はどうなっているのだろう。そもそも禁止されているのか。疑

問はつきない。

「どうした？」

考え込んでいた伊吹に気がつき、ウィガーが訊ねた。

「いや。ふと疑問に思っただんですが。……異世界人との結婚は禁止されたりしていないのか、とか」

一瞬、驚いたように目を見張られた。何故だ。

「ああ……いや、特にされていない。むしろ、そうだな。こちらの世界の者と結婚することで、早く国民権を得る者もいる。保障が打ち切られる代わりに、この世界の者として正式に認められるから定期審査、移動制限などが無くなるからな」

へえ、何かそれ目当てで結婚するのもいそうだな、と伊吹は単純な感想を持つ。

「心配しなくても、結婚は自由だ。その事で悩む必要は無いからな」

「……は？」

一瞬、思わず素になってしまった。

質問した時のウィガーの驚いたような顔と、その励ましのようない言葉を照らし合わせて理解する。どうやら、伊吹がこちらの世界の人間を好きになったと、そんな勘違いをされたようだ。

「ああ、えっと、はい」

あえて否定はせず、曖昧に笑っておいた。

もしかしたら、この勘違いを利用できる事もあるかもしれない。

伊吹はどこまでも打算的だった。

「俺は兎も角、その女子高生の方はどうなんですか？町で暮らしていれば、それなりに出会いも多いだろうし」

「さあな。俺はそういう事は分からん」

見るからに朴念仁という感じだしな、と伊吹は心の中で思う。

「……だが」

気になることでもあるのか、ウィガーが眉間に皺を寄せた。



「はい？」

「ああ……、どうも、何か引つかかるんだが。あれの態度、何か隠し事をしているとしか思えない。偶に、こちらの言葉を全部分かっているようにしか思えない時があるかと思えば、全く話にならん時もある」

ぶつぶつと、ウィガーは独り言のように呟いている。内心、少しどきりとした。

「……わざと、分からないふりをしているという事ですか？」

「いや。そういう意味じゃない。基本的に馬鹿で単純な奴だ。そういう器用な事をやるタイプでは無いんだが」

「……………」

だとしたら、何なんだ。ウィガーの話だけでは、良く分からない。

器用なタイプ、か。

外にそう見られているようならば、既に下手を打っているのだろう。自分は果たして、どう見られているのだろうか。流石にそれを直接聞く勇氣は無い。

根暗、おたく、弱虫、卑怯者、狡賢い。

言われた事のある悪口を頭の中で並べる。他人が何を言おうと関係ない。彼らに、伊吹のことがどれだけ理解できるといつのだろう。確かに現在、伊吹は卑怯な真似をしている。言葉が分からないふりをして、ここの世界の人間を欺いている。

だがそれは、生きていく為の知恵だ。

誰だってそうする。しなければ、惨めな最期を迎えるかもしれない。吹雪のようにな。

俺は、生きてやる。絶対に。

「イブキ、また具合悪いの？」

出された食事を半分残しているのを見て、片付けに来たりチルが心配そうな顔になった。頻繁に寝込んでいるせいか、向こうも色々気遣ってくれる。

「いや、平気」

「そう？うん、まあ顔色はそんなに悪くないみたいだけど。最近、あんまり元気ないみたいね。何かあったの？」

曖昧に笑うと、リチルはふっくらした頬に手を当てて、不満そうに口を尖らせた。

「やっぱり言葉がちゃんと通じないのって不便ね。私もちょっとはイブキの言葉を覚えた方が良いのかな」

それは困る。

笑顔を崩さないまま、伊吹は焦っていた。実のところ、必死の勉強のしかけがあつてか、聞き取りは大分できるようになっていた。やはり、習うより慣れる。柄にも無く、色々な人と交流をもった甲斐があつたというものだ。

情報を得る為、外に出たくないからなどという理由から、未だ言葉が分からないふりを続けていたが、そろそろ潮時だろうか。

「リチル」

「なあに？」

「外、出る。良い？」

絵に書いたような片言で告げると、リチルは笑顔で頷いた。

「そうね。今日は天気も良いし、気晴らしに散歩してくると良いわ。今日の午後は特に何も予定が無いし、ゆっくりしてきても大丈夫よ。いつてらっしゃい」

恐らく同年代だと思われるリチルに、子どもを送り出すような笑

顔で見送られ、少々複雑な気持ちになった。

その日、いつもよりも遠くへ足を伸ばした伊吹は、恐ろしいものを見ることになる。

## 伊吹、異世界人と知り合う 2

朝食を終えると、一応職員に外出しても良いか確認をしてから、図書室に向う。

そこで子供向けの簡単な本などの解読に勤しみ、昼になったら部屋へと戻り昼食を取る。1時間ほどのんびりした後、特に予定の無い日は庭へと散歩に出る。

そんな生活パターンができていた。

行ける所は粗方行き尽くしている。最近、庭の東にある果樹園と畑まで足を伸ばし、ちよつとした仕事を手伝ったりもしていた。寡黙で穏やかな老人が管理責任者であるが、伊吹は初めて彼の姿を目にした時には、迷わず逃げ出した。

やばいものがある。

一気に部屋へ駆け込んで、それでも恐怖は治まらなかった。今にもそれが、追いかけてくるのではないかと気が気では無く。知らない間にホラー映画の世界にでも迷い込んだのか、それとも今度こそ夢なのかと、混乱する頭で考えた。

畑をうろついていた老人は、枯れ木の化物にしか見えなかった。

身長2メートル弱。皮膚の色が赤茶けており、手が地面につくほど長かった。長細い頭部には、風にたなびく黄緑の髪。顔は固そうながたがたした皮膚に覆われ、ひび割れのような皺の間に落ち窪んだ目があった。垂れ下がった長い鼻の下に、やけに小さな口が見えた。

そのインパクトは凄まじく、暫く夢に魘される程だったのだ。

彼の名はシエンゾ。

伊吹と同じく異世界人だと教えてくれたのはリザレットだ。貴方

のいたところとは別の世界の出身です、と付け足してくれたのだが、そんなのは言われなくても分かっている。

彼女は時々マジメな顔で妙な事を言うのだが、冗談なのか判断ができないため、笑えたためしがない。

「いつ、こつちへ来たんですか？」

「そうですね。確か40年ほど前だったと記憶しています」

「は？」

それなのに、まだ保護施設から出ていないのか。リザレットは、伊吹の疑問を敏感に察知し答えをくれた。

「彼はここで働いている。見たでしょう、畑。あれが彼の仕事というわけです」

「農業、ですか」

「正確に言えば、こちらへ持ち込まれた異世界の植物の栽培、研究ですね。そういえば、貴方もいくつか持ち込んでくださっていますね」

正直、本当に何の事か分からなかった。

既に引き渡してしまったジーパンのポケットに入っていたもの。そう言われても、すぐには思い出せないほど、伊吹にとってはどうでも良いものだった。

あの日、伊吹は商店街にいた。

妹の仏壇に供える花を頼まれたからで、花屋へ寄ったのだ。適当に、仏壇用として用意されている花を買った。その時に貰ったのだ。花屋の宣伝チラシと共に、小さなビニール袋に入れられた種をいくつか。ひまわりと朝顔と、きゅうりだった。

「どうします？」

リザレットは無表情に、伊吹に訊ねた。

「お譲りしてくださるなら、相応の謝礼を支払いますが」

「え」

「草花の類ならばそうですね、そちらのお金に換算して……200万程度。食料になるものなら、1000万程度……ただし、完全な新種の場合ですが」

売った！

即引き渡して調べてもらったところ、きゅうりに近い種があったとかで、きゅうりは320万という値に落ち着いた。それでも全部あわせたら720万円。もっと貰っておけば良かったと思ってしまう、人の欲。

しかし人道的だ。

荷物を全部取り上げられても、文句を言えない圧倒的弱者の身としては、有難すぎる措置だった。リザレットが言うには、過去それで酷く揉めたことがあるらしく、交渉し契約するという今の形に落ち着いたらしい。

その揉めたという人の勇氣ある行動には、心より敬意を表したい。植物の種等は持ち込まれる事が少ない上に、実用化すれば売れるという事で、それなりの値がつくのだそうだ。そう考えると安い、ような気もしてしまった為、とりあえず一つは手元に残しておくことにした。

選んだのは向日葵の種だ。

得た520万はこの世界でいう銀行に口座をつくり、入れてもらった。ついでに種も預けておいた。

伊吹の持ってきた朝顔ときゅうりは、まずは施設で栽培するとの事で、それを任されることになるのが、例の枯れ木のお化けのようなシエンゾだった。

広い畑の一角で、シエンゾは今日もせっせと土を弄っている。引き渡した朝顔ときゅうりの様子を見に行く内に、自然とその仕事を

手伝つようになつていた。

ここでは異世界から持ち込まれた様々な植物が栽培されている。色とりどり、形も様々な植物を見るのは単純に面白かつたし、後々何かの役に立つかもしれないという打算もあつた。しかし一番の目的は、この世界に迷い込んだ異世界人の先輩の話を書く事、である。

「イブキ、まだ出られない、のか」

第一声はいつもそれだ。小さな口から出るのは、くぐもつて聞き取りにくい太い声だが、口調はゆっくりなので聞き取る事は充分にできた。

「出る日、は、決まつている、のか」

そう問いかける彼の眼差しは、大変心配そうに見えた。固い皮膚のせい、あまり表情が変わらない彼だが、何となく感情は伝わってくる、気がする。

「ない」

伊吹自身は出たいとも思っていないのだが、シエンゾは早く出た方が良くと思つている様だ。

「なぜ。イブキ、は、問題ない。隔離、必要ない、筈だ」

しゃがみ、堆肥を土に混ぜ込みながらシエンゾは呟く。伊吹はそれを手伝いながら、黙つて彼の呟きに耳を傾けていた。

彼が頻繁に出す隔離という言葉の意味はもう知つている。

間違つていない筈だが、あまりぴんと来ない言葉だ。隔離、というよりは保護されている。その認識が間違つているのだろうか。

「スイ、のように、エーデの、ように、彼、のようにならない、なつては、いけない」

誰だ。

「誰？ともだち？」

聞いてみると、何故かエンゾは沈黙した。彼が動きを止めてしまつと、服を着た枯れ木のように見える。

「知らぬ、人。だが、見て来た。記憶を、継いで」

難解だ。難解すぎてよく分からない。

彼のわさわさと揺れる黄緑の髪を見上げて、伊吹は遠い目になった。いつ見ても目に優しい色である。

「落ちる者は、みんな、寂しい。恐れて、いる。生きるのは、苦しい、辛い、時には。囚われる」

彼の人生哲学だろうか、あるいは人生論？年を取った人間は、色々と語りたがるものだ。彼の年齢は確か120を超えていると聞いている。

「なあ、イブキ」

呼びかけられて、伊吹は顔を上げた。しかし、彼の高い位置にある顔は、ぼんやりと空を見上げている。

「今なら、分かる。わし、の世界、は、故郷は、とても美しい。満たされる、緑、花の色、輝く、光は、もつと優しい。ここも、悪くはない、が。根が育たぬ、子は、育てられぬ」

帰りたい、なあ。

シエンゾが言う。その言葉に込められた寂しさは、伊吹の心にも響くものがあつた。

特にあの世界に未練は無い、つもりでいた。

面白くも無い退屈な人生。社会人になるのが億劫で、特にやりたいたい事も見つからなくて。いつそもう世の中がひっくり返るような事があれば良いとか、どこかで思っていた。

結局、ひっくり返ったのは自分だったわけだが。

帰りたい。

何の苦勞もせず大金を手にして浮かれていたが、先の苦勞を思えば途端に不安が沸き起こる。右も左も分からぬ異世界、頼れる身内



はいない。

こちらでも生かせるような特技、あるいは知識があれば良かったが、生憎何も無かった。

結局世界が変わっても、必要なのは手に職か。言葉ももつと覚えなくてはいけないし、何やら問題事もありそうだななんて面倒すぎる。

「帰りたい……」

気がつけば伊吹も呟いていた。

しかし、帰ることはできないのだ。だから、面倒でもしなければいけない事は山ほどあった。

## 志真と天敵 1

冷たいものが背筋から首の辺りに抜けていく。志真には見えぬそれに向って、必死で懇願を続ける。

(やめて、待ってよ、行かないで！)

今や志真の話し相手であり相談相手であり、通訳でもある彼女に向って心の中で叫ぶ。

(ラスー！)

しかし、ラスカウルは戻ってこなかった。姿を見る事はできなくても、気配くらいは感じられるようになった今日この頃。逃げてしまった姿無き友人の事を思って、志真はがつく肩を落とす。

便利だからって、頼りきりになっていたのがいけなかった。喋る事ができなくても、相手の言いたい事を理解できれば、何とかなるなってしまふ。そんなわけでラスカウルに頼りきり、言葉の勉強を怠っていた為、肝心の彼女がいなくなってしまうと。

「シマ。お客さんよ」

……分らない。

情けない顔で拭き掛けの皿を握り締めている志真を、フィオーネは不思議そうに見つめた。

「どうかした？」

仕事中であるために、長い髪を二つにわけて結んでいるフィオーネは、いつもよりも幼く見える。白いシャツと黒い膝丈のスカート、黄色のエプロンというシンプルな格好は志真とお揃いにも関わらず、何だか様になっていた。

体型の差だろうか。

フィオーネは手にしていた箒を棚の隣に立てかけて、青い顔をしている志真の頭を撫でた。

「どうしたの？気分でも悪い？」

「ふい、フィオーネ……」

「ああ、そつか。そんなに怯えなくても大丈夫よシマ。異世界人の素行観察をしに来てるっていうのは建前で、単に遊びに来てるのよ、あの人。昔っから兄貴と仲良かったし、多分：シマの事も気に入ってるんじゃないかな」

優しく笑う笑顔は変わらないのに、言葉が分からない為に不安は晴れない。

「さ、行きましょ。そんなに不安なら一緒についててあげるから」  
彼女がどこに志真を連れて行こうとしているのかも、そこで誰が待っているのかも、志真には分かっていた。

しかし、拒否する権利は志真には無い。理不尽！だとは思うが。これは必要な事なのだと、ウィガーからも煩いくらいに言い聞かせられている。町で働く異世界人が、ちゃんとそこでの生活をこなせているか、問題は無いか。そういう事を調査する役人がいるのだそう。

異世界人の人権を守る為でもあるとか何とか言っていたけど、絶対『建前』だ。

どうせ異世界人が何か問題を起こしていないか、見張っているだけなのだ。

フィオーネに連れられてやってきたのは、宿屋の一室だ。志真に与えられている部屋よりも小さいが、この宿屋では一番高い上等な部屋だ。おちついた深緑の絨毯や、カーテン、ベッドやソファードの家具も全て、一目で高いものと分かる代物。キレイな風景画や、ぴかぴかに磨かれた花瓶なんかも飾ってある。志真が掃除を任せられない部屋だ。

大人が寝そべるのに充分なふかふかした長椅子に偉そうに座るのは、どこも撥ねていない金髪ショートボブの綺麗な頭をした少年、の皮を被った男。

ユーイ・ユーイというふざけた名前の男だ。

「悪いね、フィオーネ。わざわざ連れてきてもらって」

「構わないですよ。仕事も一段落したところですし、兄がいない時は、私がシマの事を任されていますから」

「折角来たのにウイガーがいないのはつまらないな」

「直に戻ると思います。買出しに出ただけですから」

ぶすつとした顔の志真には目を向けず、ユーイはフィオーネと会話を続ける。何を話しているのやら。せめてラスカウルがいれば分かるのだが。

理由は分からないが、ラスカウルはユーイを苦手としている。その為彼が来るとすぐにどこかへ逃げてしまうのだ。

早く帰ればいいのに。そう思うが、おそらくこの部屋にいるという事は今日は泊まるつもりなのだろう。迷惑な話である。じと目で睨んでいると、ユーイがちりりとこちらを見た。目があった!と思つた瞬間、嘲るような笑みが口元に浮かぶ。

「!」

何だその顔!憤慨する志真を他所に、ユーイはフィオーネに視線を戻す。

「最近のシマの様子はどうか?何か変わった事は?」

「そうですね、特に何も。いつも通り元気に働いて、学校に行つて頑張っていますよ。兄とも相変わらず喧嘩ばかりで」

「あはは、良いね。楽しそうだな」

「良くないですよ。もう少し仲良くしてくれると良いと思うくらいで」

「あれで、ウイガーはシマを気に入っているんだよ」

「……そうですか?」

一体何を話しているのだろう。自分の話題だろうと思うだけに、気になった。特に、ユーイのどこか悪巧みするような笑みが。

「ウイガーは昔から好きな相手に素直になれずに、つい意地悪してしまうようなところがあつたからな。全く、仕方の無いヤツだ」

「……え、それってまさか、実は兄さんがシマの事を好きって事ですか」

「異世界人との恋愛は禁止されていないが、一応保護者の立場だからな。ウィガーも葛藤しているのかもしれない」

「ええええ……、あ、兄さんってばそんな……そうだったなんて」  
いや、本当に何を話しているんだ。フィオーネがどこか赤い顔で、ちらちらと志真を見るのに、本格的に不安が募る。

「ウィガーの友人の俺としては、是非応援してやりたい」

「そうですね、私もできれば兄さんにも幸せになっってもらいたいですし、勿論シマにも」

その時だった。部屋の扉が勢いよく開いたかと思ったら、不機嫌と怒りとを緋い交ぜにしたような顔のウィガーが、荒々しい足音を立てて乗り込んできた。

「お前、ユーイ！妙なデタラメをべらべらと広めようとするな！」

「おかえり、ウィガー。邪魔させてもらってる」

「週に何度も来るな、この暇人が！こいつの素行調査なら週に1度で良い筈だ！」

「二人の時間を邪魔するなって？」

「それ以上不愉快な事を抜かすとたたき斬る」

よほどの事を言われたのか、ウィガーの顔が怒りのあまりか無表情に変わる。

「あ、兄さん、ちょっと落ち着いて。宿屋で流血沙汰はまずいよ、

それに、一応ユーイさんはお客様だから」

「客？」

「そう、今日ここに泊まるからよろしく」

「お前な……！」

彼の事はいけ好かないと思っているが、ユーイが相手だと素直に応援したい気持ちになるから不思議だ。敵の敵は味方、というやつだ。

「ウィガー、がんばれ！」

何を言い合っているのかは謎だが。

志真は両手を握り締めてとりあえず応援してみた、のだが。

何故かウィガーはこの世の終わりのような沈痛な表情になり、ユーイが満面の笑みになった。

「あははは、何だ、やっぱり仲良いじゃないか」

「…………シマ！」

ウィガーの怒りの矛先は、何故かシマに向けられた。

「お前、言葉が分からなくてもせめて空気を読んで黙っている！」

「何その言い方！人が折角珍しく応援してやるうって気になったってのに！」

「お前の応援など無い方がマシだ」

きっぱりとウィガーは言い切る。何て嫌なヤツだ。2度と、例え何があってもウィガーの味方になんてやらない。そう志真は誓った。

ラスカウルには悪いが、志真に彼の良さはやはり理解できない。

フィオーネが仕事に戻ると言っただけで出て行った後、志真はユーイの正面に座らされた。隣には機嫌の悪いウィガーが座り、非常に居心地が悪い。

「で、一体何の用だ？」

「暇つぶしに、というのは勿論冗談だが。まだ極秘の情報だが、昨夜一人の異世界人が行方不明になった」

苛々していたウィガーの雰囲気が一転する。何か深刻そうな雰囲気だ。何を言われたのか興味を惹かれるが、生憎ラスカウルはここにいない。

「誰が」

「ああ……キクノじゃない。20年前に7から落ちてきたやつだ。仕事の帰りに行方が分からなくなった。目撃者の話によると、黒いフードの集団が辺りをうろついていたらしいが、関与は不明」

「排除派の奴らか、それともシユターク教派の？」

「その辺も含めて調査中だ。手がかりが殆ど無いから難しい、ま、次があれば」

志真はすっかり除け者にされている。暇だ。ソファーに置かれていた弾力のあるクッションを膝の上に置き、叩いてみる。

「次、がある可能性があるから、一応その異世界人にも外出を控えるようにという注意を与えておけ」

「禁止ではないのか」

「ああ。学校も休校にはならないしな。ただ、何かあった場合に不味いから、注意はしておかなければならない」

「困る気がする」

「相手の出方が分からなければ、対策も取れないというだけの話だ。

……それより、それ止めさせる。いい加減煩い」

ウィガーは顔を顰めると、志真が暇つぶしに叩いていたクッションを横から掠め取った。

「ウィガー、バカ！すけべ！まぬけ！よわむし！やくたたず！」  
それだけ言つて、志真は宿屋を飛び出した。ウィガーが何かを言う前に、全速力で走り去る。短い髪を振り乱し、大きく腕を振って走る様は少女というより少年にしか見えない。分厚い生成りの生地  
の半そでシャツに、濃い緑の短パンにブーツという格好のせいもある。

「こちらの世界では、子ども、しかも男がする格好だ。」

髪は短いし、顔も中性的、手足が長く胸が無い。性格だつてがさつで、色気は皆無、それである格好なのだから。

『お前、本当に女か？』

と、ユーイの持つ疑問は最もだ。だが、その後の行動は頂けなかった。志真が答えないからといって（無視したわけではなく、聞かれた意味を理解しなかった為だ）、何故そこで胸を触る必要がある。一応女である志真が異性に胸を触られたのだ、怒るのも最もだと思つ。

「が、ユーイでなく自分が責められる理由は全くもって理解できなかった。」

「あんな言葉ばかり覚えが良いというのも問題だ」

「控えめなのは胸くらいだな、シマは」

「お前は少しは反省しろ」

朝から疲れ気味のウィガーとは正反対に、ユーイは涼しげな顔をしている。自分の言葉などで、彼が反省する事など有り得ない。

怒りに任せて走つた為に、いつもより速く学校へついてしまった。学校は今や、家である宿屋よりも落ち着ける場所だ。ユーイが宿屋



にいついてからもう3日。志真のストレスもたまりまくっている。ラスカウルは戻ってこないし、ユーイは志真の神経を逆なでするような事ばかりする。例えば、今朝のような！

「何あれ、スケベ親父か！セクハラで訴えてやる！」

多分無理だけど。志真は肩身の狭い異世界人だし、言葉も分からないし、訴え方だつて分からない。不幸すぎる。

教室の片隅に座り、志真は顔を机の上に伏せた。

「あいつ、いつまでいるんだろ」

早く帰れば良いのに。このままでは、ストレスで胃に穴が開くかもしれない。つていうか、何故帰らないのだろう。家出か？もしかしたら家を追い出されたのかもしれない。性格悪そうだし。

隣に誰かが座る気配がした。続いて、とんとんと軽く机を叩く音がする。顔だけ上げて確認すると、思った通り目隠し姿のモクがいた。

「モク、おはよ」

応えるようにモクは頷く。モクは喋らない。いつもは筆談で話すが、ラスカウルがいない為にそれもできない。目隠しをしていて表情も分からないが、志真を心配してくれているのだという事だけは、感じる事ができた。

「ちよつと家に嫌なヤツが来ててさ」

ぼつり、と口から毀れるのは日本語だ。だが、不思議な事にモクはそれを理解する。

「何言ってるのか分からないけど、馬鹿にされてるのは何となく分かるし、人が仕事してるところに出てきて邪魔だし。言葉、分からないのはやっぱり不安…これは、ま、私が悪いのかもしれないけど、勉強をさぼっていたつけど。モクや二ト口が折角手伝ってくれていたのに。そう思い当たつて、後ろめたい気持ちになる。」

「……言葉、ちゃんと覚えようかな」

モクの口元に浮かんだ笑みに後押しされて、志真は決意を固めた。「うん、ちゃんと覚えるよ。やっぱり自分で話したいし、皆が何を

言っているのか知りたいし」

励ますように、モクは頷いた。

物静かで穏やかなモクの周りには、常に優しい空気が流れている。モクは不思議だ。首筋にある鱗だとか、目隠しだとか、一言も話さない事、そういう事がいつの間にか気にならなくなっていた。モクはモクだ。そう思える。

好きだなあ

空気とか、雰囲気とか、優しいところとか。

「わ！」

「！」

「ひっ!？」

突然の大声に志真は飛び上がった。滅多に驚かないモクもびくりと体を揺らしている。そんな二人を見て上体を反らし大口を開けて大笑いしているのは、三つ目の青年ニトロだ。

「もー!なし！」

「なし、じゃなくてやめろ、だな。っていつか、モクが気付かないのも珍しいな。何やってたんだ、お前ら」

「……………」

にやにやとニトロが二人の顔を見比べる。

「ニトロ、おはよう」

「…おう、おはよ。シマ、お前さ…早く言葉覚えような。つまらん何故か呆れたように溜息をつかれた。挨拶は間違っていないかった筈だ。多分。」

ニトロは志真の正面に座った。4人が向かい合って座れる形の机と椅子。空いた残り一つの椅子に、緑色の女の子が座る。

「おはようですー」

眠たげに目をこすりながら、間延びした声で挨拶をしたかと思うと、こてりとその小さな頭を机に横たえた。長くうねる緑色の髪が、呼吸に合わせてゆっくりと波打つ。

「おはよう…おやすみ?」

アルジャラーは既に眠っているようで、小さな寝息が聞こえてきた。本当に良く眠る少女だ。

今やすっかり日常となった、いつもと変わらぬ平和な光景だ。三つ目だとか、肌の色だとか、もう奇妙に感じなくなってきた。

「お、今日はちゃんと勉強するのか」

ノートと絵本、それからもらい物の単語帳を取り出した志真を見て、二トロが身を乗り出す。

「えらいぞ。分からないところがあったら遠慮なく聞けよ。…って、既にこれが分からないか」

一人でぶつぶつ言っている二トロは放っておいて、志真は絵本を開いた。

これはフィオーネが買って来てくれたものだ。何でも子供が文字を覚える為のものだとかで、色々なもの。例えば色や食べ物、道具何かが一つのページに可愛いイラストでいくつも描かれていて、その下に名前が書かれている。大変分かりやすいものだ。

志真は文字を読むこともできない。二トロ達に読んでもらい、文字の下にカタカナで発音を書き込んだ。

一時期は真面目にやっていたのだが。

やっぱり続けてないと駄目ようだ。結構忘れている。志真は溜息をついてから、イラストに目を向けた。可愛い男の子と女の子の絵が書かれている。

「えっと、おとこ、おんな」

二度ほど繰り返し、何かが引っかかった。(ん…)志真は眉を顰める。今朝方の不快な出来事が蘇った。あの憎たらしい金髪の男は、あるう事が志真の胸を触ったのだ。信じられない。

確か、その時に。

『お前、本当に女か?』と。女…、女と言ったような気がする。お前というのは志真の事だろう。それで胸を触る…?

「!」

閃いたのは、今まで何度と無く経験してきた事だからだ。物心付

いてからずっと、何度も何度も。近所のおばさん方を始め、先生や  
ら友達の親達に。酷い時には先輩や同級生にまで。男と間違えられ  
てきたという屈辱的な体験をしてきたのだ。

「あの野郎」

怒りのあまり声が低くなる。

「絶対許さん。絶対何かぎゃふんと言わせる！」

その時になって泣いて謝ったって遅いのだ。

とは言っても、志真にできる事など限られている。給仕をする時  
に、こつそり料理に何か入れる…、いや、流石に仕事中にそんな事  
をするのは不味いだろうし、何より料理を作っているミーチエ婦人  
に悪い。

同じ理由で、部屋に何か悪戯を仕掛けるのも却下だ。宿屋の評判  
が落ちたら、リアラさんやフィオーネに申し訳ない。

（つて、できる事本当に無いし！）

難しい…物理的な仕返しは無理のようだ。となると、精神的な仕  
返し…。

それでも男？とかだろうか。いやユーイは確かに綺麗な顔立ちを  
してはいるが、女には見えない。纏っている空気が雄雄しいせいだ  
ろうか。この若作り！とかは逆に威張られそうである。あれで30  
越えているとか有り得ない。スケベ親父！とか…そもそもそういう  
悪口を、鼻で笑って流しそうだ。

良い方法がちつとも浮かんでこない。

ここが異世界でなかったら、セクハラで訴えてやるのに！

「シマ、掃除終わった…？…？どうしたの、雑巾握り締めて」

廊下の隅で蹲っていた志真の只ならぬ様子に、フィオーネは慌て  
て駆け寄って来た。

「目が赤い、泣いていたの？大丈夫？」

「フィオーネ！」

己の無力さに打ちのめされていた志真は、優しく声をかけてくれ  
るフィオーネに思わず抱きついた。言葉がちゃんと喋れるなら、彼

女に相談する事も出来たのに。

「ど、どうしたの、本当に。何があつたの!？」

「うう、ユーイが、ユーイが酷いんだよー!」

「ユーイ様?まさか、ユーイ様に何かされたの?」

心配そうなフィオーネの声に、志真はユーイに復讐する方法を閃いてしまった。

ユーイ・ユーイ。志真にとっては大嫌いな男であるが、何かやたら偉い身分の人間らしい。

貴族とかそういうヤツだろうか。日本人である志真にとってはあまりぴんと来ない。苦労知らずの坊ちゃんめ！と余計に反感を持つたくらいだ。給仕を任されている志真には分かるが、彼はかなり良いものを飲み食いし、その上残す。自分で注文したんだから全部食べる！作った人と食材に謝れ！と言いたいのをいつも我慢している。信じられないのはそれだけじゃない。

ユーイが宿屋に滞在してまだ3日しか経っていないが、毎日美人でグラマーなお姉さま方が何人も、彼を尋ねてやって来ているのだ。うちは健全な宿で、イカガワシイ宿では無いのに。

色っぽい女性をはべらせたユーイが食堂にやってくると、それだけで何か雰囲気ピンクな感じに変わってしまう。恋人だということならまだ仕方ないと思えるが、相手がいつも違っていてどういう事だ。

あれは間違いなく女の敵である！

床を掃くのに、つい力が入ってしまう。毎日掃除しているにも関わらず、溜まった砂埃が舞った。やっぱり靴を脱ぐ文化を取り入れるべきだと思う。掃除の為に。

「掃除機とかあれば楽なのに」

「あらあら、ご機嫌斜めねえ、シマちゃん」

深みのある女性の声と共に、くらっとするような甘い香りが鼻を擽る。顔を上げると、艶っぽい顔の美女が、入り口からふらりと部屋に入ってくる場所だった。

「ルーさん」

ルーミケラウス、という名前は呼びにくいのでそう省略。

彼女は魅惑的な笑みを浮かべると、背後から志真の肩に手を回す。彼女の過剰なスキンシップにも大分慣れた今日この頃。っん、と指

先で顎を持ち上げられ、間近で瞳を覗きこまれても平気になった。まあ、同姓だし。

それにしても綺麗な人だ。近くで見ても染みの無いすべすべの褐色の肌に、大きなアーモンドの形をした艶々の黒い瞳。羨ましいほど色気たっぷり美人である。半分でもその色気を分けて欲しい。

「聞いたわよ、ユーイ様のこと。彼を誘惑するなんて、シマちゃんも中々やるわねえ」

ユーイという名前に、志真は反応する。着々と噂は広まっているようだ。ふっふっふ。

「嬉しそうねえ、守備は上々といったところ？シマちゃんがユーイ様みたいなのがタイプだなんて、ちよつと意外だけど」

不幸なのは、彼女の誤解に気付く程の翻訳能力を、志真が持つていなかった事。話が妙な方向に転がっている事に気がつけない志真は、一人ほくそ笑んでいた。

「どうやらうまくいっているようだ、と。」

ユーイが志真の胸を触ったセクハラ野郎だという事を、皆に知らしめる。それが志真が考えた復讐方法だ。いたいけな16歳の少女にセクハラをした変態として、白い目で見られるが良い。ついでにこの宿屋に居辛くなって出て行ってくれとなお良い。

「頑張つて、ユーイ様を落としてね。うまく行けば玉の輿で将来安泰よ」

噂というものが、非常に不確かな広まり方をする事を、志真は忘れていた。

「でも、気をつけてねシマちゃん。彼の事狙ってるバカな女はたくさんいるけど、興味を持ってもらえる人は少ないの。何とか気を惹こうと躍起になったり、ライバルの足を引っ張ったり。どろどろした女の世界は恐いわよ」

なでなでと、頭を撫でながらルーミケラウスが優しく諭すが、志真には当然伝わらない。

きつと、慰めてくれていているんだろうな。優しいな、ルーさんは。

そんな勘違いをしていた。

「ま、何かあったらお姉さんに相談なさい。力になってあげるわ」

「ルーさん、ありがとう」

「良いのよ」

結局、ルーミケラウスの忠告は、全く志真には伝わらなかった。

おかしい

どうも故意に誰かに嫌がらせを受けている気がする、そう気が付いたのは。食堂での給仕中に5回、女性の足に引っかけたり背後からぶつかられたりして料理を駄目にし、掃除中に泥の付いた靴で磨いた床を通られたり、掃いた落ち葉を撒き散らされたり、ついでに何故か油が毀れていた階段で足を滑らせたりした後の事。

晴れているにも関わらず、上から落ちてきた水で全身びしょ濡れになったまま、志真は考え込んでいた。

何か変じゃないか。

と、今更になって思う。足元に出来てしまった水溜りは、何とかした方が良いだろう。まだ宿屋周りの掃除も完全に終わっていないし、着替えなくてはいけない。今日は学校に遅れるかも。

ぼたり、と短い髪の毛の先から水が落ちる。

「シマ！」

ぎよっとしたような声に顔を上げる。裏口から出てきたフィオーネが、慌てた様子で駆けて来た。

「ちよっと、どうしたのこれ！大丈夫？」

「うん、だいじょうぶ」

「このままじゃ風邪をひくわ。もうすぐ学校に行く時間だし、とりあえず着替えよう？ちよっと待ってて、すぐにタオルだけでも持ってくるから」

慌しく宿屋に入ったフィオーネは、すぐに戻って来た。乾いたバスタオルを頭から被り、濡れた靴を新しいのに履き替えて、志真は



部屋に戻った。着替えを済ませ、頭が半乾きのまま学校に送り出される。

しかし、その30分後には新しい服も汚れる運命にあった。

「ぜ、絶対おかしい、何これ、呪い？」

やっとの思いで学校に辿り着いた志真を見て、二ト口が目を丸くする。

「どうしたんだ、お前。何があったらそんな格好になるんだ？」

ぐしゃぐしゃになった髪に葉っぱを撒き散らし、あちこち擦りむき、泥がいたるところにこびり付いた志真の目は据わっていた。馬鹿みたいにでかい犬に追いかけられるわ、どこからか泥団子をぶつけられるわ、押されて川に落ちかけたり、危うく馬に踏まれそうになるわで散々だった。

特に最後のは命の危険を感じた。

洒落にならない。

志真はよろよろと窓際の椅子に座り込んだ。もう今日は何もしたくないくらいに疲れてしまった。肉体的にも、精神的にも。

「おーい、大丈夫か？」

「大丈夫なわけないし」

「一体何があったんだよ」

隣に座った二ト口へ向き直り、志真は口を開いた。とにかく誰かに話したい気分だった。

「階段に油が塗ってあるとか、突き落とされそうになるとか普通に起こる事じゃないよね？今更だけど、これってイジメだよな？つていうか、私もしかして命とか狙われちゃってたりしない！？誰かに保険金殺人とか狙われちゃってるのかって勘ぐっちゃうくらい、有り得ないんだけど！」

「何て言ってるんだ？」

「……………」

二ト口に訊ねられたモクが、すらすらといつものように何かを書く。それを読み、二ト口は首を傾けた。

「何だか分からないが、何か嫌がらせても受けてるのか？何でまた何で、と理由を訊ねられているのは分かったが、そんなもの。」

「こっちが聞きたい！」

思い当たる節と言ったら。

「異世界人イジメ、とか？」

否定するように、モクが首を横に振った。

「そりゃ、違うだろ。差別やら嫌がらせやらが全く無いとは言わないが、そこまで酷いのは無い。それに異世界人を差別したり、傷つけたりするような行為も法律で禁じられているからな。刑罰対象だ。そんなの気にしない、過激な奴らもいるにはいるが、その場合は確実に殺しに来るからな」

さらりと恐ろしい事実を口にしたが、幸い志真には分からなかった。何だか、二トロも否定しているようだ。異世界人だからでは無いとすると、じゃあ、何なのだろう。

「個人的な恨み、つてこと？私、何かしたっけ……」

真っ先に浮かんだのは、今日は姿を見ていない吸血鬼らしいの少女だ。

初対面の時から難癖をつけてきて、今もねちねち嫌味を言ってくる（何を言っているのかは分からないけど、多分そう）嫌なヤツだ。

「リキキ？」

「違うと思うぜ。あいつは基本的に体を動かすのが嫌いだからな。」

特に日中は……ああ、信者にやらせるっていう手もあるが、モクが怒る事はしないだろ」

二トロが否定し、モクもその意見に賛同を示すように頷いた。

「ちがう……じゃあ、後は」

ウィガーとはもう根本的に反りが合わないし、常に言い合っているが。それも何か違う気がする。彼は嫌味で意地が悪いけど、嫌がらせとかそついう姑息な真似はしなさそうだ。何せ元騎士だし。

後は……。

「あ」

ぱっと脳裏に閃いたのは、あのやたらと偉そうな金髪おかつぱ。

グー・グー・グー。

相応の覚悟をした帰り道だったが、拍子抜けするほど何も無かった。朝からの嫌がらせの数々は一体何だったのだろう、というくらいに。

宿屋の門の前で、ウィガーが志真の帰りを待っていた。

「ウィガー！ちよつとユーイに話があるんだけど、まだいる？」

挨拶も忘れて詰め寄る志真に、ウィガーは溜息を吐いた。

「ついてこい。こつちもお前に話がある」

すんなり話を通った事に、志真は一抹の不安を覚える。いつもなら、まず挨拶をしろと口やかましく言うはずだ。それから、少しはこちらの言葉で話す努力をしろとか、くどくど説教が振ってくる筈なのだが。

何か変、と思いつつ。志真はウィガーの後を大人しくついていった。

何処へ行くかと思つたら、地下の貯蔵庫だ。日持ちする食品やら酒やらが置いてある場所で、志真も何度か入ったことがある。ひんやりしていて薄暗い。ウィガーは先にランプに火を入れてから、木製のドアを閉めた。

密室で男と2人、という状況だが特に危機感もときめきも覚ええないのは、相手がウィガーだから。そんな事よりも。

「ちよつと、ウィガー、ユーイは？いないの？」

「奴なら所用で家へ帰った。……お前は、てつきりあいつの事は嫌っているとばかり思っていたんだがな」

「嫌いに決まつてるじゃん！はつきり言つと、ウィガーより気に入らない」

「比較対象に俺を持つてくるな」

疲れた様子で、ウィガーが溜息を吐いた。いつにも増して、辛気

臭い顔をしている。

「どしたの？」

「妙な噂を聞いた」

ユーイが変態という噂だろうか。噂じゃなくて、真実だけど。

「お前がユーイに言い寄っているという噂だ」

「はあ！？」

志真は思わず腹の底から声を出していた。何だそれ、有り得ない。有り得なさ過ぎる。屈辱的だ！

「無い、無い無い！あーりーえーない！誰がそんな馬鹿な事言ってるの！？」

「誰がというか、かなり広まっているらしいな。ついでに、ユーイがまんざらでもないとか、ついに身を固める決心をしたとか。2人は既にできている、とも」

「できてない！」

できてたまるか！志真は真っ赤な顔で叫んだ。そんな風に言われているなんて、全く気がつかなかった。いや、何となくユーイの名前が会話に出てたり、何か言われている事は分かっていたのだが。つきりユーイがセクハラをしてくる変態だという事が広まっているのだと思っていた。

「ユーイにしても、猿は守備範囲外だそうだから安心しろ」

「その猿ってまさか私の事？」

「他に誰が……ああ、言ったのはユーイだからな」

「あの野郎」

「何故そんな噂が広まったかなどは最早どうでも良いが、噂が広まった事は問題だ」

本当に大問題だ。木箱の上に座り込んだ志真を、ウィガーは渋い顔で見下ろした。

「お前は暫く外出禁止だ」

「え、何それ！」

「噂が沈静化するまでは、その方が良い。ユーイはあれで、かなり

もてるからな」

意味が分からない。それに、あんなのがもてるなんて理解できないと志真は思う。確かに顔は可愛いけど、年を考えたら童顔過ぎる。派手すぎる衣服は似合っていると言えなくも無いが、趣味を疑う。何かお金持ちっぽいけれども、あの性格は無い。

「この世界の人の趣味とは分かり合えないって事は分かったけど。それで何で私が外出禁止になるのかは、全然分かん」

「それだけ色々被害にあっておいて、何故分からない」

「は？」

「ユーイの信者は色々……過激なんだ」

頭を過ぎるのは、少し前から続いていた奇妙な嫌がらせ。特に酷かった今日のこと、だ。

「ま、まさか」

「今日は朝から水を被っていたらしいな。フィオーネが心配していた」

と、いう事は。ユーイが噂に怒って何か嫌がらせをしている、という予想は間違っていたが、彼が原因である事は当たっていたわけだ。ユーイとできている女（誤解だけ）に対する嫌がらせ。下手したら大怪我どころじゃ済まなかった可能性もあるような嫌がらせだ。

思い出して、志真は身震いした。

怖っ！

「心配するな。事態に気がついたユーイが既に手を打っている。外出禁止は念の為だ。3、4日大人しくしていれば良い」

「本当に大丈夫なの？」

「ああ……特に過激な事をしでかした奴らは、法に基づき処罰される。ユーイがきちんと噂を否定したから、他もそれ以上動かないだろう」

最後にウイガーは志真に釘を刺す。

「だからお前もこれ以上余計な事はしないで大人しくしてろ」

何だそれ。

かちんときたが、言い返すのは止めた。とにかく今日は、色々と疲れきっている。これ以上無駄な体力を使いたくない。

今日は仕事も休んでいいと言われたので、志真は大人しく部屋へ戻った。ドアを開け中に入ると、懐かしい声が聞こえた。

『志真』

弱々しく、消え入りそうな女の声に、志真は目を剥いた。相変わらず姿は見えないが、確かに彼女の気配を感じる。

「ラス！ちよつとラスいるの！？あんた何処へ行つてたのよ！」

『ごめんなさい、志真。私あの人苦手で……だから、隠れてたの』  
「あの人って、ユーイだよね？苦手って何で？何かされたの？」

『そういうわけじゃ無いんだけど。あの人、魔法使いだもの。私の事見えちゃうんだもの』

恥じ入るようにラスカウルは言う。ツツコミどころは色々あった。魔法使いというのも気になるし、何で見えると駄目なのかも分からない。

「え、ユーイが魔法使い？っていうか魔法使いつて、あの？」

『志真の世界には魔法使いはいなかったのね。魔法使いというのは、自分の魔力と呼ばれる特殊な力を元に、自然界のあらゆる物に働きかけて色々な現象を引き起こす者達のこと。魔法使いになれる者はほんの一握りしかないのよ。ユーイ・ユーイはその中でも特に優秀な魔法使いだって言われてる』

「はー、何だか想像できない」

本当に何でもある世界だ。志真は疲れた足を引きずるようにしてベッドに行き、腰掛けた。そのまま仰向けに倒れて手足を伸ばす。

「で、魔法使いにはあんたの姿が見えるんだ？」

『そうよ』

「見られたくないの？」

答えは無かったが、張り詰めたような空気が感じられた。ような気がした。何でだろう、と志真は首を捻る。

『……魔法使いは、私を消す事もできるし』

「御被いができるって事？」

『こちらでは討魔と言つものよ。だから、私は魔法使いが苦手。いつまでもここに居る訳にもいかないって分かってるけど、今はまだここにいたいし』

志真としても、まだまだラスカウルにいて欲しい。でも、幽霊である彼女がずっとここにいるても良いのかも分からない。複雑だ。

「ラスが生きてたら良かったのに」

くすり、と笑う声が聞こえた。

『でもそうしたら、志真とこんな風に話す事も無かったと思うわ』

「まー、それはそうなんだけどね」

何だか不思議だ。

「ね、ラス。私ラスに会えて良かったよ！」

ふるり、と柔らかく空気が揺れる。

『ありがとう……シマ。私、そんな事言われたの初めてよ』

「あはは、何かちょっと照れちゃうけどさ。これからも、よろしくね」

ラスカウルは答えなかった。沈黙が不安になった菊乃が呼びかける直前に、彼女の声が聞こえた。

『ねえ、シマ。私がシマに言葉を教えてあげる』

「え、うん。これからもよろしくね、頼りにしてるよ」

『そうじゃなくて』

くすり、とラスカウルが笑う。

『シマが言葉を覚えるの。やっぱりその方が良いでしょう。また、あ



の人は来るだろうし……」

「げえ、と志真は思わず口を歪めた。

「もう来て欲しく無いんだけど」

「おかしそうにラスカウルが笑う。以前よりもずっと、明るくなつたみたいだ。つられて志真も笑ってしまふ。」

「うん、勉強はしてみても良いかな、と志真は思った。

「言葉は大切だと思う。フィオーネや宿屋の人達、モクや、ニトロ達ともちゃんと話せるようになりたい。」

「ユーイ・ユーイとは2度と会いたくないけども。」

## 菊乃の困惑 1

さて、この世界に迷い込んでから2ヶ月近く。様々なことがあった。菊乃は菊乃なりにできる事を懸命にこなしてきたつもりだが、世間の風当たりは驚くほど冷たかった。

ようやく出来たかと思っただ壁越しの友達も失い、菊乃は改めて思ったのだ。

もう、いいや。

期待するから、しんどいのだ。もうすっぱり諦めて、必要最低限にしか人と関わらず生きていこうと、後ろ向きな覚悟を決めた矢先の事だ。

5日ほど姿を見せなかったユーイ・ユーイが、いきなり菊乃の部屋へやって来た。相も変わらず派手な色の、中世の貴族みたいな（詳しくは知らないが）服装のユーイは、突然の来訪に驚く菊乃にこう告げた。

「仕事をやる。暫く俺の下僕として使ってやるわ」

下僕、って何だっけ？

と、その時菊乃は考えていた。仕事を貰えるというのは嬉しいけれど、何でいきなり。戸惑いをどう取ったのか、ユーイは意地悪そうな笑みを浮かべた。

「どうした、働きたいんだろ」

「はい」

気を変えられても困る。そう思っただ返事を、後で悔やむ事になるとは思わなかった。

以来、菊乃はユーイに良い様に使われている。

「これを着て仕事しろ」と手渡されたのは、地味な感じの仕事着だった。

くすんだ灰色の上下で、七部丈のずぼんの裾がほつれていたり、つぎはぎがしてあった。かなり使い古された感じの古着だが、洗濯はしてあるようだったので、特に文句は無い。菊乃の持っている服はまだ新しく、どれも仕事には向かなさそうなものばかりだった。だからそれを用意してくれたのだろう。

意外と気を使ってくれているんだなど、感謝の気持ちすらあったのに、実際着て行ったら何故かつまらんと文句を言われた。

全くわけが分からない。

その日から、延々とわけの分からない事ばかりさせられている。

今日の仕事は、ユーイの仕事部屋の一室で、床に散らばった白い豆と黒い豆をより分けて、それぞれの壺に入れるという作業だ。

大体毎日こんな感じで、全く意味の無さそうな事ばかりをやるように言いつけられる。

こんなの仕事じゃない。

と、思わないでもなかったが、雇い主らしいユーイの言いつけならば仕事になってしまふ。嫌がらせなんだろうか、やっぱり。白い豆をひたすらより分けていると、開いていたドアの方から声がかかった。

「キクノ、入るよ」

返事の前にジェレミーは既に部屋に入ってきていた。急いできたのか、彼にしては珍しい事に若干髪が乱れている。しかし、風に流れ、頬にかかるほつれた髪の一房がまた絵になってしまふのだから、美形はお得だ。

「ジェレミーさん、こんにちは」

朝食時に彼はいなかったので、今日会うのは初めてだった。

「こんにちは」

ジェレミーはにこりと笑ってから、床にしゃがんでいた菊乃の目の前に膝をついた。間近で合わさる灰青の瞳が、やけに楽しそうに見えた。

「さあ、キクノ」

手にしていた四角い箱を差し出しながら、彼は言う。

「こちらの服に着替えてきてください」

「はい？」

「大丈夫ですよ、ユーイ様に許可を取っていますから。安心してください。今度のは私が選んだちゃんとした専用の仕事着です」

ジェレミーの言う事も、相変わらず良く分からない。

外で待っていますから、そう言ってジェレミーは出て行ってしまった。仕方がない、着替えるしかなさそうだ。白い箱の蓋を開け、丁寧に折りたたまれた服を広げた菊乃は、目を丸くした。

最近、ユーイは悩んでいた。

悩みの種は、彼が預かっている異世界人についてである。

キクノは見た目の頼りなさの割りに、中々しぶとい人間だった。

最初は軽く苛めておけば、泣いて逃げ出すだろうと思っていたのに、一向に動かない。仕方なく、逃げ出すように仕向けたものの、結局大した成果は得られなかった。

過度のストレス、生命の危険、苦悩……それは、絶望と共に現れる。

ユーイ達が警戒する『侵入者』は、世界喪失者が世界をくぐる段階で、その体にとり憑きやってくる。見えない敵だ。

それが、キクノの体に眠っているのかは、まだはつきりしていない。彼女の体の中に、確かに何かの揺らぎを感じる事があるのだが、見極めがつかなかった。

疑わしいからと言って、殺すわけにはいかない。

血に濡れた悲劇を繰り返して、時代は変わったのだ。歴史の負い目が仕事をやりにくくしている。逸脱した暴力行為、脅迫等、禁止されている事項は多い。

面倒な事ばかりだ。

精神的に追い詰める、というのみな。

ユーイは正直手を焼いていた。異世界に落ちた時点で、既に追い詰められている筈なのだ。頭が弱いわけでは無い筈だが、嫌味を言っても平然としているし、突き放しても堪えていない。殺されかけても、裏切られていたと理解しても涙一つ零さない。

キリアンは、菊乃にとって大した存在ではなかったのか。

壁越しに偽っていたのは、こちらだけでは無かったのだろうか。

菊乃は恐らく気がついていないだろうが、この世に彼女の友達だった『キリアン』は存在しない。

壁の向こうで話していたのは、ユーイだ。風で拾い集めた子ども声を組み合わせ、話をさせていた。家族の話なんかは適当に作り上げたものだ。子どもがいなくなったと迫真の演技を見せた女は、部下の一人。

色々面倒な事を行ったが、全部無駄に終わってしまった。

直々に反応を見ようと手元に置いて見ているが。

若い女なら嫌がりそうな汚らしい古着を平然と着こなし、ユーイの嫌がらせにも文句一つ言わず従順に従う。

シマだったら、殴りかかってくるな、確実に

ウィガーが面倒を見ている異世界人を思い出す。あれは実に簡単そうだった。馬鹿だしな、と彼女が知ったらそれこそ怒りそうな事を考えながら、ユーイは次の作戦を練っていた。

「ユーイ様、入りますよ」

ノックの音と共に現れたのは、ジェレミーだった。

「何だ、今忙しい……」

ユーイの視線がやたら女受けの良い男の甘い笑みを通り越し、彼の背後で所在無さそうに立つ少女を捉えた。誰かと思えば、菊乃だった。

何故か屋敷や城の侍女が着るような服を着ている。黒いシンプルなワンピースに、フリルの白い前掛け。通常のものとは違い、スカートは膝丈となっている。黒のストッキングに黒の革靴。

露出部分は少ないが、ワンピースの上部分がシンプルな分、妙に体の線が分かるデザインとなっていた。その為か、菊乃はひたすら恥ずかしそうに俯いている。耳や頬が赤く染まり、指先をぎゅっと握り締めて立つ姿は大変に。

「まずい……可愛い」

どこかうつとりと、満足そうなジェレミーには呆れる。有能なのだが、こういう『悪い癖』があるのが玉に瑕だ。割合気分にむらがある男なので、然程心配は無いとは思うが。

どこかで釘を刺しておかなくてはならないだろう。

それは兎も角として。

「……ジェレミー、お前は天才だ。ある意味な」

不安そうな少女の様子を眺め、ユーイはにやりと笑った。

## 菊乃の困惑 2

ジエレミーが用意してくれたという仕事着は、どうみてもメイド服に見えた。菊乃が知るものよりもずっとシンプルで、スカートの短さも許容範囲内であったが、やはり着るのは抵抗がある。

特に、ワンピースの上半分。布の素材が伸縮性のあるものだったため、体の線がはつきり出てしまうのが居た堪れなかった。何故かエプロンは腰下の物だし、スカートはやたらと軽く広がりやすい。

こういうのはもっととスタイルに自信がある人が着るべきだ。何よりこんなを着てたら、仕事に集中できない。

前の服で良いという願いは、あっさり却下された。

菊乃を困惑させ続けているのは、その仕事着の問題だけではない。いや、一番の問題は。

「キクノ、顔色があまり良くないな、大丈夫か？」

出た。

言われた通り、客室の掃除をしていた菊乃は、びくりと体を震わせた。顔を上げたくない。いつそのまま気がつかなかったふりをする……のは流石に無理がある。

諦めて顔を上げると、開いたドアのところにユーイが立っていた。目があった途端、優しげに微笑まれて緊張が走る。ほんの数日前までは、彼がそんな風に笑えるなんて知らなかった。特に知りたくも無かった。

「だ、大丈夫、です」

だから、そのまま出て行って欲しい、というかなり切実な願いは叶わない。

「無理するな」

今までとは別人のような、甘くとろけるような笑みを浮かべたユーイは、どうも違和感がある。怖い。菊乃は思わず身を引いた。それでもなお熱っぽく見つめられ、まともに顔を見られない。

「疲れているなら、休んで良い。お前は色々と頑張りすぎだ」

今までが、今までなだけに、優しい言葉が胡散臭い。

例えば、初対面からこの態度だったら、うかつにもどきどきしたかもしれない。

だが菊乃は、横暴で口が結構悪くて厳しく容赦の無いユーイ・ユーイを知っているのだ。今のこの状態も何かの嫌がらせとしか受け取れない。もしかしたら、新しい『遊び』の一環なのかもしれない。るくに恋愛経験の無い、男友達すらいなかったような女をからかって面白がっているのに違いなかった。

悔しいが、効果は覲面だ。

事の起こりは昨日の夜のユーイの発言だ。

『お前の疑いは晴れた。今まで色々悪かったな。非礼の謝罪にはならないかもしれないが、できるだけだけの事はする』

他に一切の説明はされず、ただユーイの態度だけががらりと変わった。

それを、信じられるほど、菊乃は能天気ではない。

棚を拭いた布を胸元で握り締めたまま、菊乃はじりじりと後ろへ下がっていた。ゆっくりと、ユーイ・ユーイが間を詰めて来る。物凄く愉しげな顔で。

(やっぱり、遊ばれてる)

そうは思うものの、どうしようもできない。

最近まで、母と2人暮らしだった。

3歳の頃に出て行った父親の記憶は殆ど無い。遅くまで働く看護



師の母のため、家の仕事は菊乃がやるようになっていた。遊ぶ時間は無い。男友達どころか、女友達すらろくにいなかった。社交性は全く無い。

「どうした菊乃、何で逃げる？」

艶っぽい笑み、射すくめるような熱い視線、近づく距離。何もかもが限界だった。

菊乃は全速力でその場から逃げ出した。

職場放棄をして逃げ出した菊乃を見送って、ユーイは噴出していった。

思った以上に慣れていない。

どんなに酷い対応をしてもじっと耐えていたあの菊乃が、おろおろとする様子は面白かった。追い詰められた小動物を連想させる不安そうな顔には、嗜虐心が慥られる。

「……ご機嫌ですね、ユーイ様」

部屋に入ってきたジェレミーは、やれやれとばかりに肩を竦める。呆れたような眼差しに、非難の色があった。

「酷いですね。僕には適度な距離を保て、とか言っておいて」

「俺は仕事に私情はいれないからな。お前と違って」

「趣味は入っているみたいですけどね」

口の減らない男だ。

「まあ、ユーイ様が迫った女に逃げられるという、中々貴重な場面を見させてもらって、僕も笑わせていただきましたよ」

びくり、とユーイのこめかみが動く。

「あのな。俺はあくまでキクノを追い詰める為にやってるだけで、本気じゃ無いんだ」

「本気だったら違うとでも？」

「当たり前だ。あんな初心のガキの1人や2人」

「相変わらずの自信家ですね、ユーイ様は」

やけにつっかかる、とユーイは部下の顔を見上げた。特に変わった様子は見受けられない。人当たりも良く融通の利く優秀な男だ。

彼らは2人揃って女好きの遊び人のように言われているが、仕方無い話だ。顔が良く、地位も金もあるとなれば寄ってくる人間は多い。

ユーイが基本的に好みの（美人でスタイルが良くついでに気が利く大人の女）女性しか相手にしなかったのに対して、ジエレミーは興味と気が向けば誰とでも遊んだ。と言っても、ウイガーが誤解しているように、実際に深い仲になった相手は少ない。

文字通り、遊んでいたのだ。（この辺りがユーイには理解できないが）

「まさか、お前」

ジエレミーの趣味は昔から理解できない上、一貫性が無い。

キクノは容姿は悪くないが、まるきり子どもで色気に欠ける。性格も大人しい割りに頑固で可愛げがなく、その上真面目、慎重と面白みもない。普段冷静な分、動揺し怯える様は確かに可愛かったが、「本気じゃないだろうな」

「キクノは可愛いじゃないですか」

言外に信じられないという思いを滲ませたのに対して、ジエレミーは苦笑する。

「良い子だと思いますしね。それはともかく、僕が言いたい事はそういう事ではなく」

「何だ」

「相手がキクノであろうと無かろうと、女性に対してああいうやり方はどうかと思います。マーサさんからその内苦情が来ますよ」

多少、悪乗りが過ぎていた事は認める。ユーイは肩を竦めた。

「確かに、それは困るな。自重する」

菊乃はどうやら逆境に強い。今までのひたすら追い詰めるようなやり方では、あまり効果が得られなかった。もう少し緩急をつけていくべきだ。

優しくして油断を誘う。

褒められたり、優しくされたりすることに、菊乃は慣れていないようだった。あからさまに警戒する様は、人馴れしていない子猫のようだ。

酷い事をしていと思う。

だが、止めてやるわけにはいかない。菊乃の正体を見極めるまでは。

「さて、じゃあ僕はそろそろ行きます」

「何処へだ？」

「キクノを探しにですよ。どうも外へ行ったようですから」

外、と行っても庭だろう。そこから先へ行く事はまだ許していない。わざわざ探しに行く必要があるとはユーイには思えなかった。

「ジェレミー」

「何です？」

「お前な、あまり入り込むなよ。キクノがもし本当に『敵対者』だったら、辛くなるだけだぞ」

そういう例を知っている。

親切心で忠告するユーイに対して、ジェレミーは笑みを深めた。

「その時は、その時ですね」

分かっているなら、勝手にすれば良い。呆れた思いで、ユーイは彼を見送った。

### 菊乃の困惑 3

青い空、葉っぱの緑、あ、虫がいる。

未だ落ち着かない気分を鎮めようと、ひたすら景色を見て歩く。仕事途中だった事が引っかけたが、またユーイに会うかもしれないと思うと戻る気になれない。

いちいちこんな風に動揺するから、からかわれるのだ。分かってはいるが、どうしようもない。

よいしょ、と木の根をまたぐ。無意識に歩いていたら、見慣れた場所に出た。少し前までキリアンと話をしていた場所だ。

もう、彼は来ない。

「……………」

菊乃はいつか登った木へ目を向けた。少し考えてから自分の格好を見下ろす。以前の古い仕事服だったら良かったのだが、生憎メイド服っぽいスカートだ。

躊躇ったが、結局登る事にした。周囲に人影が無い事を確かめてから、木の枝に手をかけ足を幹に置く。以前のように急ぐ理由はないから、慎重にゆっくり登ってみた。

前と同じ枝まで行って、踏み切って飛ぶ。

壁に体当たりするような勢いでぶつかりながらも、何とかしがみつ়く事ができた。力を入れて、上半身を持ち上げて、壁の上に身を乗り出す。

なだらかに下っていく緑の丘に、こんもりした森。それから、ぐるりと辺りを見渡すと、見覚えのある男の姿を見つけた。

やっぱり、いた

褐色の肌の青年は、前と同じ白の上着に黒のズボンを身に付け、腰から剣をぶら下げている。菊乃を真つ直ぐに見る紫の瞳も相変わらず冴え冴えと冷たく、睨まれているにも関わらずほっとしてしま

った。

良かった。

やっぱり違う。

一人で納得していたら、男が僅かに眉を顰めた。

「今度は何だ」

話しかけられるとは思わなかった。

「あ、大丈夫です。逃げる気は、無いです」

「……………」

「すみません、邪魔しました。あの、ユーイさんが、変な話するのを本当か確かめたいと思って」

目は口ほどにものを言う。男は最初の言葉以外、一切口を開いていない。だが鋭い眼光に、何故だか続きを促されているような気がして喋り続けてしまう。

「私の、疑いは晴れたから、謝るって……………」

紫の瞳の温度が更に3度ほど下がったように見えた。

「謝罪を求めに来たのか」

菊乃はうろたえた。

「ち、違います！違って、ただ本当か信じるのが無理で、嘘だと思っ、思っ？ああ、あの、ごめんなさい。うまく、話すの駄目で」

焦るために余計に言葉が出てこない。少しは喋れるようになって

いるのだが。情けない、何をやっているのだろう。こんな格好で壁

によじ登ってまで。

戻ろう。

もう一度謝ってから、と決めた菊乃が口を開く前に、男が言った。

「お前の疑いが晴れたという情報は、ケラスの方には上がっていない

い

「え？」

ケラス？

知らない言葉だった。だが、内容は分かる。菊乃の『良くないかもしれない異世界人』という疑惑はまだ晴れていない、という事だ。戻ろうと思った事も忘れ、菊乃は男を凝視した。聞きたいと思っていたことを、教えられるとは思いもしなかった。ユーイは何か思惑があつてそう言ったのだろうし、彼もそれに気がついていている筈だ。彼はユーイと協力関係にある、と思っていたが違ふのだろうか。

「キクノ」

考え込んでいた菊乃は、突然名前を呼ばれてはつとした。

慌てて振り返ろうとして、体を支えていた腕を浮かせてしまう。

あ、と思つた時には遅かった。がくと体が傾いて、ふわつとした浮遊感に総毛だつ。

「キクノ！」

落ちる。

ゆつくりと景色が反転する。中途半端に伸ばした指が、固い壁に弾かれる。成す術も無く地面に落ちた。頭を庇う為丸めた肩と腕が痛みで痺れるようだった。手や腕のあちこちからも、じりじりと焼けるみたいな痛みが伝わってくる。

い、生きてる。

死ぬような高さではないが、打ち所が悪かったら死ぬ場合もある。早鐘を打つ心臓を落ち着かせながら、菊乃はゆつくりと起き上がった。

「何をやっている」

目の前に立つ男の姿に、菊乃は一瞬痛みを忘れた。

(な、何でこんな近くに……)  
外だ。

態とではないが、外に出てしまっていると気がつき青褪める。先ほどまではもう少し離れた場所にいた彼は、固まった菊乃を助けるでも無くただ冷ややかに見下ろした。以前突きつけられた剣は、今も彼の腰元に収まっている。

小さく息を飲む。

「キクノ、大丈夫ですか？」

軽く地面を叩くような音が背後で響いた。ジェレミーの声だ。ぼんやりと思うものの、菊乃は動けなかった。蛇に睨まれた蛙のように硬直した菊乃の前に、何かが立つ。ジェレミーだった。

ジェレミーは小さく息を吐いてから、地面にへたり込んでいた菊乃の前に、膝をついた。

「怪我を見せてください」

言って、手やら腕やらをひっくり返された。動くたびに、あちこちに痛みが走る。

「頭は打っていませんね？どこか酷く痛むところはありませんか？」  
ストッキングが伝線し、擦りむいた足がむき出しになっていた。白いエプロンが茶色く汚れ、落ちる途中で引っ掛けたのか、スカート裾がほつれていた。

「……ごめんなさい」

笑顔を消したジェレミーの顔を見上げ、菊乃は小さく頭を下げた。  
「貰った服、こんな風に駄目にして、ごめんなさい」

灰青の瞳が、呆気に取られたように丸くなった。

「そこ？……正直に言っつて、一番どうでも良いところだ」

深い溜息を吐いてから、ジェレミーは苦い顔で菊乃を見つめた。  
「服はどうでも良い。外へ出てしまった事は、不可抗力だったと言えるしそこも良しとする。僕が声をかけて驚いたから落ちたのだから、僕にも責任があります。何をしようとしていたかは知りません

が、壁に上るのは危ないのでもうやめて……これも先生に話して禁止事項に付け加えてもらいましょうか。ただ、僕が一番気に入らないのは」

ちらり、と一瞬背後に視線を向ける。

「君が彼と話していたという事実です」

ジェレミーは心底腹を立てていた。どんな時にも浮かんでいた柔らかな笑みが、今は無い。

「は、話したら、駄目だと知らなくて」

「駄目とかそういう問題ではありません。彼は危険だ」

ハynes・ユーゴ

「彼は、異世界人対策本部ケラスの治安維持部隊の特務隊員です。

何かあった時に異世界人を始末する為に動く。特に彼は、異世界人を憎んでいる。キクノ、なるべく彼には近づかないでください」

真剣な面持ちのジェレミーを、菊乃はじっと見つめた。

分からない言葉が多すぎて、半分も分からなかった。ただ、彼がハynes・ユーゴという名前で、異世界人を憎んでいて、菊乃は近づかない方が良い、と。その辺りだけは辛うじて理解できた。

「キクノ」

促されるように名前を呼ばれ、菊乃は小さく頷いた。そこで漸く、ジェレミーが固い表情を緩めた。

「ここで、僕を頼って欲しいと言えるくらいなんですけどね」

笑顔ではない、苦笑だ。

「僕は先生に逆らえる立場では無いし、ハynesが動くような事態になった時は、僕も君の味方にはなれません」

ふと伸ばされたジェレミーの綺麗な指が、菊乃の髪を梳く。距離が近い。どきりと心臓がはねて、菊乃は身を引いた。

「せめて、そうならない事を祈ってますよ」

笑みを深めて、ジェレミーは囁くように言った。



ジェレミーの肩越しに、背を向けて歩き去ろうとするハイネスが見えた。銀の髪を揺らし、顔の半分だけが振り返る。射るような眼差しが、菊乃を捕らえた。

疎まれている、とその目を見るだけで確信できる。

だから、さっきのはやっぱり気のせいなのだろう。落ちる時に、彼がこちらへ駆け寄ってきた姿を見たような気がしたのは。

菊乃はそっと、逃げるように目を伏せた。

## 伊吹、現実に打ちのめされる 1

のらりくらりと逃げていたが、ついにその日はやって来た。

この保護施設を出て異世界の社会という未知すぎる場所へ踏み出す日だ。能面のように表情を固めたりザレットに『5日後に』と告げられて流石に嫌とは言えなかった。自分よりも遥かに年下の少女が、既に外で生活をしていると聞いてしまったら尚更だ。

告げられた日、伊吹は眠ることができなかった。

不安はつきない。色々と勉強もしたし、言葉も大分覚えてきている。日常生活で困る事は無いだろう。支度金はあるし、種を売った金もある、住むところも決まっている。

知り合いでもあるウィガー・ハルベルトの実家である宿屋だ。

ついでに例の同郷の女子高生がいるところ。

はあ、と伊吹は溜息をついた。

外へ出ても大丈夫なんだろうか。

昔から、異世界人が多く迷い込んでいたというこの国、アティカ。長い歴史の中で争う事も多かったが、最終的に共存という道を選び、保護という形を取るようになった。現在では異世界人との混血も珍しくないところまで、人々の意識は変わってきている。

心配ありません、とりザレットは能面顔で伊吹に語った。

うそ臭いことこの上ない。

アティカは、5つある大陸の1つ全てを領土としている大国らしい。大きく13のエリアに分かれていて、それぞれの場所を王から任命をつけた人が管理している。

伊吹が今いるこのエリアはノウラナハーンとかいう名前らしい。世界で唯一、異世界を観測できる場所であり、この国に落ちてきた

異世界人を保護する場所にもなっている。

伊吹が最初に来たあの砂漠は、エクアとかいうエリアの端で、ここから大分離れた場所だったらしい。その為、保護するのに時間がかかってしまったのだ。散々な目にあっただが、生き延びられただけ、運が良い。迷い込み、命を落とす者は珍しく無い。吹雪のように。

まあ確かに運が良かったとは思う。

食われなかったし、助けられた（危なかったが）、その上予期せぬ収入も得た。

（しかし、どつかに落とし穴がありそうな気がするんだよね……）  
呑気に喜ぶよりも、不測の事態に備えたい。何せここは異世界。何があるか想像もつかない。

「顔色が悪いですね」

部屋を訪ねてきたリザレットは、書いたような眉を顰めてベッドの上の伊吹を見下ろした。

「昼間から怠惰に眠っているのは、感心できない」

「ちよつと、具合が悪いので」

「食事を殆ど食べず、ろくに睡眠を取っていないければ、誰だって具合が悪くなります」

睡眠時間まで知られているのか、やはりこの部屋には監視カメラのようなものが存在するようだ。どんなに探しても分からなかったが。

「目の下の隈、酷い事になっていきますよ」  
隈のせいか。

「そこまでここから出て行くことを嫌がる人も珍しいですね。何が不安なんですか？」

「何がって、全部ですかね。言葉もまだ充分じゃないし……。どう

しても、外に出ないと駄目なんですか？」

「そういう決まりになっていません」

物凄く面倒そうに、事務的な言葉を返された。

「自分で生活できるように、って意味があるのなら、ここでエンゾさんの仕事を手伝って、農業をやってみるといいのは」

「本当にそれがしたいのであれば、それも良いかもしれません」

ですが、とりザレットは喜びかけた伊吹の気持ちにトドメを刺す。一度は町に出てもらいます。町で決まった保護者の下で、この国の人々と混じって暮らすこと、働くこと、そして異世界人の学校を卒業すること。その結果、永住権が認められ、正式にこの国の国民として受け入れられて初めて、住居、職業、移動等の自由が得られるのです」

結構色々面倒くさい。

感情が顔に出ていたのか、リザレットは目を細めた。愛想の無い顔に、笑顔のようなものが浮かぶ。但し、微笑とかではなく嘲笑めいたものだった。

「異世界人の学校は、資格があるのならその日の内に卒業することも可能です」

「……………どういう事だ？」

「手続きを済ませ、卒業試験を受ければ良いのです。筆記、面接のテスト双方で基準点を満たせば晴れて合格、となります。貴方の努力次第ですよ」

努力……………、嫌な言葉だ。

「流石にその日の内に卒業した者はいませんが。最短が2ヶ月と2日目の卒業です。その気なら、是非記録更新を目指してみたらどうでしょうか」

頑張ってください、なんて言っているが、物凄く棒読みだ。眼鏡の奥の瞳が明らかに、お前には無理だろうけどな、と告げていた。リザレットが出て行った後で、伊吹は再びベッドに寝転がった。

苛々していた。

(くそ！そこまで優秀じゃないってのは、分かってるって)

分かっている。嫌というほど。

子供の頃は良かった。賢い、頭良い、天才だとかもてはやされて、けど気がつけば普通の奴になっていた。一生懸命勉強してようやく上位に入るくらい。1番どころか、2番、3番にもなれない。まるで勉強していなさそうな奴があっさり上にいたりする。

不公平だ。

要領よくて、明るくて、友達も多くて。

爽やかで充実した顔をしているクラスメイトが、伊吹は大嫌いだった。

あいつなら、きつともっと、うまくやるんだろう。どうせ。大した努力もしないで、卒業試験にもあっさり合格する。その上、異世界人の女にももてて、恋人なんかも作ってしまうに違いない。

……馬鹿馬鹿しい。

あいつはここにはいないのだ。

ありもしない想像をして苛立つなんて不毛だ。自分は自分で、何とかやるしかない。

考えるべき事は、もっと他のことだ。

少し前向きな気持ちが出てきた伊吹は、ベッドから起き上がり部屋を出た。とりあえず、適当に色んな人に話を聞いておこう。どうせ、当たり前障りの無い話や、良い事しか言わないのだろうが、参考にはなる。

丁度、廊下の端にリチルを見つけた。両手に抱えているのはシー

ツだろうか。ここは手伝っておこう。駆け寄ろうと走り出した途端、くらりと目の前の景色が歪んだ。全身から力が抜ける。手の先から冷えていき、目の前が真っ暗になった。

貧血だ。

意識を失っていたのは、数分くらいだろう。

気がついた時、伊吹はまだ廊下に寝たままで、取り乱した様子のリチルと、もう一人の職員との話を聞いていた。

「医者がすぐに来るそうだ。頭を打っている可能性があるから、動かすなよ」

確かに何だか頭が痛い。目を開くのも、声を出すのも億劫だ。体が重く、吐き気もする。最近食事を減らしていた上、睡眠もろくに取れていなかったせいだろう。

「どうしよう、イブキも毒を盛られたのだったら」

「落ち着いてリチル。そんな筈ないよ、あの時の関係者は全部辞めさせられてる」

切羽詰ったやりとりに、咄嗟に開きかけた目を閉じる。

毒？その言葉がやけに引っかかる。まだ知らない言葉だ、覚えておいて調べる必要があるそうだ。

「犯人は分からなかったのよ」

犯人……一体、何の話をしているのか。

「だから、毒を入れる事のできる可能性があった人が全員、辞めなきゃいけないかった。でも、もしかしたらまだ別にいたのかも」

「リチル、落ち着くん。例えそうだとしても、あの子が殺されかけたのは、『影憑き』の可能性があったからだ」

「本当にそうだって言える？……イブキは、大丈夫だって？そんなの嘘よ。異世界人である以上は……」

何の話をしている。

背中が冷たいのは、廊下に寝ているせいばかりではないだろう。

「よりもよって保護施設内で、あんな事があるなんて」  
思い出す。

一時期、やたらと体調のことを聞かれていたことを。職員の様子や、食事に違和感が無かったか、そういう質問を繰返し受けた。

その頃伊吹が疑っていた事が、正しかったのだと直感的に悟った。保護されていた異世界人がこの保護施設内で、何者かに危害を加えられた。食事や、体調のことをしつこく聞かれたという事は、毒でも盛られたのだろうか。  
吐き気がした。

その異世界人とは誰なのだろう。時期的に言えば、同じ世界の間であるように思える。既に外で暮らしているという女子高生は、何か違うような気がした。

生きている、のか？  
浮かんだ疑問にぞっとする。

今までここで食べてきたもの全部、吐き出してしまいたい。

## 伊吹、現実に打ちのめされる 2

「伊吹、具合はどうですか？」

「問題ないです」

朝、様子を見に来た医者の方に、伊吹は笑顔を滲ませて爽やかに（自分なりに）に答える。

貧血を起こした後だ。大した事は無かったので部屋に戻されたが、退所を控えている時期でもあるから、伊吹の体調は慎重に調べられる。元々、体が弱いと認知されているから余計に。いつもなら、体感の3割り増し程具合が悪いふりをするところだ。逆を装ったのは初めてである。

気持ち悪い、胃が痛い、食欲が無い、頭が痛い。

しかし、ここで体調を崩してしまえば、下手をすると退所延期になる恐れがある。

それは、嫌だ。

施設内で殺されかけた異世界人がいる、という事実は大いに伊吹を動揺させた。一晩で3回ほど自分が殺される夢を見たし、色々悩んだりもした。

既に実行犯はいないのかもしれないが、まだ隠れている可能性も否定できない。ここではそのレベルだという事は、一体外とはどんな恐ろしい事になっているのか。それでも、1度外へ出てみようかと決めた。

百聞は一見にしかず。

虎穴に入らずんば虎児を得ず。

良いだろう、色々とその目で確かめてやろうじゃないか、と。伊吹にしては前向きな姿勢になっている。



ついでに、もう一つ。

同じ立場にある筈の異世界人達に会っておきたかった。自分よりも長くここに居る者達ならば、もう少し色々知っているかもしれない。

「明日、だな、イブキ」

「ああ、明日だ」

出所前日も、伊吹はシエンゾの農園を手伝っていた。すっかり入り浸っている為、随分懐いたのねとリチルに笑われているが、実際のところ、彼だけがこの施設内で唯一信頼できる相手だっただけに過ぎない。

ずっと良くしてくれているリチルのことすら、完全に信じきることができなかった。

リチルはあの時、気がついていたんじゃないだろうか。伊吹が既に意識を戻している事を知っていて、わざと動揺させるようなことを言ったのではないか。笑顔の裏に、別の顔を隠しているのではないか。疑い出すときりが無い。

馬鹿げているとも思う。だが一方で、そんな筈がないと言い切ることもできなかった。

「イブキ」

枯れ木のような長い腕が伸びて、固い指の先が伊吹の額を宥めるように撫でる。

「頑張れ。必ず、道は、見つかる」

「……ああ」

彼には聞きたいことが山ほどあった。

シエンゾは異世界人であり、既に40年という長い時間をここで

過しているのだ。

ここにいる事を、シエンゾは隔離と言った。

彼はここに隔離されているのだろうか。外に出る事を望んでいるのだろうか。スイとエーデとは一体誰のことで、その人達はどのようなのか。

しかし、殆ど聞いていない。この農園にいるのは彼らだけではないし、どこかで話を聞かれている可能性もある。下手をすれば、彼の立場まで悪くなってしまう。結局当たり障りのない話をするしかなかった。

心残りではあるが、危険は冒せない。

「シエンゾも、元気だな」

また来るから、とかいう言葉は何となく死亡フラグになりそうな気がしたので、止めておいた。十中八九、死ぬのは伊吹の方だろう。

翌日、予定通り施設を出る事となった。

簡単な診察を受け、必要な荷物を受け取り、世話になった職員に挨拶して門へと向う。見送りには、リザレットとリチルが来てくれた。

「イブキが行っちゃうと寂しくなっちゃうわ」

眉毛を八の字にして、リチルが言う。リザレットから3歩ほど後ろを、2人は並んで歩いていた。いつもは纏めているオレンジ色の髪を、今日はふわりと流している。サイドの髪をゆるく編んで後ろで結んだりチルは、いつもと違った雰囲気に見えた。

清楚なお嬢様風。

しかし、口を開けばいつもと同じ、明るく潑刺としたりチルだっ

た。

「ご飯はちゃんと食べてね。イブキはちょっと食が細すぎるから、前みたいに倒れちゃったりするのよ。あの時、本当に心臓が止まるくらい吃驚しちゃったんだからね。ここを出たら、もう私も見てあげることできなくなるし、心配だわ」

「大丈夫。ちゃんとやります」

「本当に？」

首を傾けて、伊吹を見上げる。疑わしそうな目を向けられた。

「イブキは真面目だと思うけど、どこか信用できないのよね」  
ぎくりとした。

冷たいものが首筋から下へ抜けていく。

信用、できない？

何か疑われるような事をしたか？心当たりが有りすぎて困る。動揺する伊吹に対して、リチルは唇を尖らせた。

「不養生だし、頑張りすぎるし。もうちょっと自分の体を労わってあげないと」

何を言われるかと身構えていた伊吹は、軽く目を瞬いた。

「え……」

「ちゃんと聞いている？それとも、聞き取れなかった？まだまだ言葉の方も不安なのよね。本当に大丈夫なのかしら」

ぶつぶつと、最後は独り言のような呟きまで、伊吹はしっかりと聞き取っていた。多少の罪悪感が湧く。彼女が考えているよりも遙かに、伊吹は言葉を理解していた。

「2人とも」

気がつけば、大分先に進んでしまっていたリザレットが、こちらへ冷ややかな視線を送っている。2人は顔を見合わせると、慌てて駆け出した。

広い敷地の終わりに、背の高い門があった。正面ではなく、裏門だ。いつもは閉じられている鉄柵が、今日は開かれていた。

先に出たりザレットに続き、伊吹も門をくぐった。おかしな程緊張していたが、特に何かあるわけでもなく。あっさりと。

裏門の前は公園のようになっていた。広々とした芝生と、合間を縫う平らな道がどこまでも続いていて、どこまでも見渡せる。遠くに緑の森が見えた。施設と公園の間に通る道は赤茶のタイル。きらきらと光っているのは、何かを混ぜているせいだ。一見滑りやすそうだが、足に吸い付くような感触でその不安は無さそうだった。

「まだ来ていないようですね」  
リザレットが固い声で呟く。迎えにはウィガーが来る事になっていた。

「まあ、まだ約束の時間まで20分ほどありますが」  
きつちりしているようで、意外といい加減な女だ。

「大丈夫よ、イブキ。来るまでいてあげるから」

「リチル、仕事の方は良いのですか？」

「今日はお休みなんです」  
なるほど。

だからいつもと格好が違うのか。髪型だけでなく、ふわりとした長めのスカートや、花の飾りがついた明るい色のシヨールなど。女性らしい、しかし動きにくそうな服装だ。

「ねえ、イブキ」

再び伊吹を見上げたりリチルが、何か言いかけた時だった。

耳に不快な警報音が鳴り響く。伊吹達は一斉に、音の聞こえる方へ顔を向けた。真っ先に目に付いたものは、煙だ。施設の、壁の傍で何かが燃えている。

何だ？

激しくゆらめく赤い炎に、すっかり気を取られていた。風を切る音を耳が拾うと同時に、肩に焼け付くような痛みが走る。間をおかず、次は足に。

「イブキ！」

苦痛に呻きながら倒れこむ伊吹の耳に、リチルの悲鳴が聞こえた。柔らかく、暖かい何かが、倒れこんだ自分に覆いかぶさってくる。力の抜けた白い指先が、だらりと目の前の地面に投げ出されていた。

そこから先のことは良く覚えていない。

ただ、怒鳴りあう声が響く騒然とした中で、良く知っている人間が、伊吹の名を呼ぶのを聞いた気がした。

## 志真と外出禁止令 1

昔に見たドラマで、こんな場面があった。

やけに深刻な顔をした親に不安を覚える。一体どうしたの、と心配する娘にどこか哀しげな顔で衝撃の事実を打ち明ける父親。

「実は、お前には生き別れとなった実の兄がいるんだ！」

何ですって！聞いていないよ！

みたいな、気分だった。正に。

自分の他に、あの時この世界に迷い込んでしまった人間がいたこと。それを知らされたのは、つい昨日のことだ。こちらへ来て既に3ヶ月近く経っている。

騙された、と腹を立てるのは無理ない話だと思う。しかし。

「騙していない。敢えて言わなかったただけだ」

ウィガーは一欠けらも悪びれず、いつもと同じ陰気くさい口調で開き直る。余計に腹が立った。

「大人つてすぐそういうずるいい言い方するんだ！汚い！最低！嘘つき！」

「お前は……なんでそういう言葉ばかり覚えるんだ」

悪口のみ、こちらの言葉で言つてやると、ウィガーは更に苦い顔になった。そんなの勿論、嫌がらせに決まっている。

「何で言ってくれなかったわけ。私がこっちでどんだけ寂しい思いしたか分かる？言ってくれば、少しは。うん、結構心強かったと思う」

「そうやって、甘えが出ることを危惧して、だ」

一旦言葉を切つて、ウィガーは志真を見下ろした。『きゃー、ウィガー様素敵……』と、ラスカウルのテンション上がった黄色い声

にはちつとも同調できない。

「特にお前はな」

「何が言いたいわけ」

「同じ世界の者同士が支えあうのは結構だが、その分この世界に馴染むのが遅くなる。言葉にしても、生活にしても。だから通常、一区切りがつくまでは、別々の場所で生活してもらうことになる。特別な場合……親子であるとか、夫婦であるとか、そういう時を除くは」

勝手すぎる！

確かに、話の分かる人が一緒にいれば、志真は甘えてしまっただろう。（今だつて、現にラスカウルに甘えてしまっている）けど、やっぱり納得できない。

腹を立てている志真を見て、ウィガーは溜息を吐いた。

「とにかく、様子を見て、もう良いだろうと判断がされた。明日からもう一人、お前の世界の人間が家へ入る」

「え！？ここに来るの！？」

「ああ。良かったな」

滅茶苦茶どうでも良さそうに言い、部屋を出て行くこととするウィガーを志真は引き止めた。勿論、もう一人の世界から落ちこちたという日本人について、色々質問する為だ。

どうせ明日来るんだから良いだろう、と渋るウィガーを質問攻めにした。

各務伊吹、男、23歳、大学生。

痩せていて、背は普通で、あんまり印象に残らない顔らしい。顔色が悪く、不健康そうな感じ。大人しく、暗い。頭は良さそうで、礼儀正しいが、何を考えているのか分からない奴である、と。

特記事項はとにかく病弱。

「……………」

まあ、あれだよな。ウィガーの印象なんて偏見が入っているに決まってる。人間、実際に会ってみないとどんなもんか分かんないよ。散々聞いておいて、志真はその結論に達した。

「男の方なのね。シマ、もしかしたらシマの運命の相手かも。右も左も分からない異世界で、頼れるのはお互いだけ……………、素敵だわ！」

何やら盛り上がっているラスカウルの妄想にはついていけないが、それでも志真も楽しみにしていたのだ。

互いの境遇を分かり合える相手と会えることを。

だが、

「来ないって、何で!？」

翌日。

昼前に出て行ったウィガーが帰ってきたのは、日が落ちた後だった。各務伊吹を迎えに行った筈なのに、一人で戻って来た彼は、出迎えた志真にこう告げた。

予定が変わった、イブキは来ない

ここで騒ぐなとウィガーが煩い為、昨日と同じく志真の部屋にて改めて。

「来ないってどういう事?何かあったの?」

「来れなくなっただからだ」

「何それ」

全然分らない。

椅子を借りる、と言って腰を下ろすウィガーは、普段より更に疲れしているように見えた。年よりも老けて見える洪面が、更に年齢を上げている。



それにしても、可愛らしく華奢なピンクと白の椅子に座り込む姿……は。

（視覚の暴力！）

『素敵だわ……。私の部屋に今日もウィガー様が来てくれるなんて』

（いや、どつちかかっていうと私の部屋なんだけど！）

ファンシーな部屋から浮いているという点では、志真も人の事は言えない。溜息をついて、ウィガーの向いの椅子に座る。

「ちゃんと説明してよ」

「……説明はする。色々と、お前にも注意しておかなければいけないからな」

億劫そうに、ウィガーは半眼になった。そうすると、益々目付きが悪くなる。またお説教かなんかだろうかと、志真は身構えた。

「何？私注意されるようなことした覚えはないけど」

「そういう意味じゃない。イブキが襲撃に遭い、怪我をした。犯人は追っているが、逃走中で何者かは不明」

しゅっげき？

「襲撃！？何それなんで！？」

「だから、犯人も理由もまだ不明だ。騒ぐな、落ち着け」

「お、落ち着けて言われても無理だよ！だって、だ、大丈夫なの？怪我は？」

「保護施設前だったから、すぐに支援が入った。怪我の手当ても受けて容態は安定している。幸い、肩の傷は掠っただけだった。間に合った職員の方が重傷だ」

力が抜ける。

「その人、助かる？」

「ああ。重傷だが、命に別状は無い」

良かった。と思ったら、ますます力が抜けた。ぐったりと、椅子

にもたれかかる。

襲われたのは伊吹という人の方なんだろう。だとしたら、理由は、「異世界人、だからなわけ？」

答えを聞くまでも無く、志真は確信していた。  
衝撃だった。

この宿屋にいる人は、みんな志真に優しい。ウィガーは違っけど、でも気は合わないけど嫌われているわけではないことは分かるし、異世界人だから憎いとかそういうのは無いと思う。店にくる客の中には、あからさまに嫌な態度を取る人もいたけど、暴力を奮われる事は一度も無かった。

ユーイのことで、変な嫌がらせは受けただけ。

町へ買い物に行った時も、学校の行き帰りにも、そんな危ない目にあつた事は無い。

差別つて言つても、大したものじゃないと思つていた。

「志真」

黙りこんでしまった志真を気遣つてか、ウィガーの声は心なしか優しい。弱っている時に優しくするのはずるい。嫌な奴だと思つていても、何だか良い奴のように思えてくるし、うっかり間違つて好きに、

「そついうわけで、暫く外出禁止だ。学校も休め」

なるわけないな。ウィガーだし。

出てきたのは慰めの言葉ではなく、戒めの言葉だった。思わず睨んでしまつても、仕方が無いと思う。

「仕方が無いだろう。お前にいちいち付いてまわるわけにもいかな  
いからな。死にたいなら勝手にしろ……」と言いたところだが、保  
護者となっている以上はそうもいかん。諦めて大人しくしている」  
分かつている。

平和な日本で安穩と暮らしてきた志真なので、物騒なところわざわざ出かけて行きたいわけでもない。

だが何故だろうか。

ウィガーに言われると逆らいたくなくなってしまふのは。おそらく、物言いのせいだろう。

「いつまで？」

「犯人が捕まり、安全が確認できるまでだろうな」

「それって結局いつなわけ」

「神にでも聞け」

つまり、いつまでになるかは全く分からないのだった。

明日かもしれないし、1年後かもしれないとか。そういういい加減な外出禁止令を、志真は出されてしまった。

泣きたい。

## 志真と外出禁止令 2

外出禁止令が下って3日。

なるべく人のいるところに出ないようにと言われてしまった為、仕事も厨房限定になってしまった。ミーチェやカロン達が気を使い、色々お菓子をくれるので、新たな危機感を覚えている。多分、確実に太ったと思う。

つい先ほども、羨ましくびれたウエストを維持するルーミケラウスに『あらシマ、最近色艶が良いわね』と言われてしまった。ぷにぷに、と頬を指でつつかれて、深く、深く落ち込んだ。

せめて、運動したいところだが、室内ではたばたするわけにもいかず、慎ましく筋トレをするに留めている。

「29つ、さん、じゅうつ」

腕立てを50、背筋を50、その後腹筋を行う。折り曲げた足を、ベッドの足に引っ掛けて、半身を交互に捻りながら起き上がる。

流石にきつい。

『シマって、遅いわね』

感心しているのか、呆れているのか、ラスカウルがか細い声で呟いた。

「っていつか、ごちゃごちゃっ、考えるよりっ、体動かすほうがっ、得意なの」

起き上がる合間に答える。

元々、体を動かす方が好きだし、何よりストレス発散にもなる。本当なら思い切り体を動かしたいものだけ。それは流石に無理だろっ。

早く犯人捕まんないかなー、と志真はごろりと床に寝転んだ。

額にかいた汗を手の甲で拭いながら、見えない友人に呼びかける。

「ねー、ラス」

「なあに？」

「ラスは幽霊だし、何か分かったりしないの？その、犯人が誰かとか」

「分からないわ。基本的に私はずっとここにいたし、今はシマにとり憑いているから」

改めて、変な状態になっちゃっていると自覚する。

大丈夫なんだよね、本当に。誰にも聞けないから困る。今のところ特に体が不調とかそういうのは無いから、平気だろうと思うけど。暫く床でごろごろしているところへ、ノックの音が響いた。

ぱっと起き上がって、自分の格好を確認する。今日はもうバイトも終わっているし、出かける予定も無いからと、古着屋で買ったゆるい感じのミニワンピースとショートパンツだ。この間、ウィガーにそんな格好でうるつくなと叱られたばかりの部屋着である。

「誰？」

「私よ、シマ。ルーも一緒」

フィオーネの声だ。ルーミケラウスも一緒にいるらしい。まあ、2人とも女だし良い、筈。

「いいよ、はいって」

ドアが開いて、2人が入ってきた。

飲み物の入った瓶と、菓子の入った籠を掲げて、フィオーネが笑う。

「シマが暇なんじゃないかと思って」

「私は1時間くらいしかいられないけど、お姉さんとお話しましょ」  
色っぽく、片目を瞑るルーミケラウス。2人とも、何て良い人達なんだ！と思わず泣きそうになってしまった。精神的に凹んでいる時って、本当に人の優しさが身に染みる。男だったら、それこそ恋に落ちていたことだろう。

オレンジジュースと紅茶。それからビスケットに芋のケーキを床

に並べて、胡坐をかいてまったりと。一応下に絨毯は敷いてあるものの、こんなところをウイガーが見たら大変だ。

そう思っ、ちゃんと鍵はかけてある。

「兄さんももうちよつと融通が利くと良いんだけど。頑固だから」

「フィオーネちゃんも、大変よねえ」

赤い唇をにんまりと吊り上げて、ルーミケラウスがフィオーネの方へ体を傾ける。つい、と顔を近づける仕草がいちいち色っぽい。

「口うるさいお兄さんがいちゃ、恋人を作ろうにも男がしり込みしちゃうものねえ」

「恋人ができないのは、流石に兄さんのせいにはできないわ。私がかさつで可愛げが無いから」

「あら、そんな事無いわよ。フィオーネちゃんは美人だし、可愛いわ。ね、シマ」

「うん！フィオーネはキレイ、優しいし」

力いっぱい肯定する。フィオーネは顔を赤くして、照れたように笑った。いや、本当に可愛いと思う。

「好きな人はいないの？」

「残念ながら。ほんと、そういう話には縁遠くて」

「そお？でも私、この間見ちゃったわよ？お客さんに言い寄られてたでしょ」

「あ、あれはお客さん酔ってたし……っっていうか、ルーこそ！」

今やトマトのように真っ赤になったフィオーネが、にやにや笑うルーミケラウスに反撃を試みる。志真は興味しんと、2人のやりとりを眺めていた。ラスカウルも先程からわくわくしているのが伝わってくる。

「いっつも言い寄られてるじゃない」

「あれくらい、当然よ」

認めた！

豊かな黒髪をかきあげて胸を反らすルーミケラウス。ぱんと張りのある谷間が服の間から覗いていて、思わず志真は自分の胸を見た。

哀しいほど、何も無い。

「大丈夫よ、シマ」

慈愛に満ちた表情を浮かべ、ルーミケラウスは言った。

「人の好みは千差万別なんだから」

それは慰めになっていない。

「ルーさんは、恋人いるの？」

「今はいないわ。中々良い男がいなくて」

選ぶ立場での発言だ。そんな風に言ってみたい。あれ、でもとフイオーネが首を傾げた。

「時々訊ねてくる人いるじゃない。あの人は違うの？ルーと同じ褐色の肌の、背が高くてちよつと怖い雰囲気だけど綺麗な人」

「ああ、あれは弟」

え！と2人の声が揃った。

「ルーさん、弟いるの！」

「いるわよ。そんなに驚く事じゃないでしょ」

ルーミケラウスは苦笑する。確かに、別にいたっておかしくないのだが。

「改めて思えば、あんまりルーのこと知らないわね」

「働き始めてまだそんなに経っていないし、そう取り立てて話す事もないから。家族はもう弟だけなの。だから、これからも時々顔を見せるとおもうけど、よろしくね」

何か事情がありそうな雰囲気を感じ取った。でもきつと、簡単に聞いていい話じゃない。

「ルーさんの弟、私も会ってみたい」

無難な言葉を選んだつもりだった。だが、何故かルーミケラウスの笑顔が曇る。何故。

「ああ、えつと、そうね……そのうちにね」

あからさまに歯切れが悪い。

この態度と返答から得られる答えは簡単だ。会わせたくない、で

ある。でも何で。もしかして実は嫌われていたりするのか。弟を会  
わせたくないほど？

「シマに問題があるわけじゃないのよ。なんていうか、難しい子で  
物憂げにルーミケラウスは溜息を吐く。」

「ごめんなさいね」

「あ、良い。全然」

何が本当なのか分からなくても、そんな風に謝られたらもう聞け  
ない。結構問題児な弟なんだと納得しておこう。その方が精神衛生  
上にも良い。

「シマは？」

何となく落ちた沈黙を破ったのはフィオーネだった。

「何？」

「シマは気になる人とかいないの？」

「うーん」

正直、今はそれどころじゃないというのが本当だ。学校や、バイ  
ト。言葉をもっと覚えないと、会話だってままならない。最近は、  
ちよつとだけ余裕が出てきたが。

「学校の人とか」

最初にニトロの顔が浮かんで、次にモクの顔が浮かぶ。

「あ、兄さんとか」

「無い」

ぱつとウィガーの渋い顔が浮かび、反射的に即答してしまった。  
あ、と思う。妹であるフィオーネの前だった。思わず顔を見ると、  
笑っていたのでほつとする。

「兄さん、見た目は悪くないんだけど、口うるさいし無愛想だし頑  
固だから」

「その上堅物だし？でも、そこが良いところだと思うわ」



うふふ、と優しく笑いながら言うルーミケラウスに、志真とフィオーネは思わず顔を見合わせた。今、何かぴんと来た。気のせいかもしれないけど、何となく。

「えーっと、ルー、もしかして」

「内緒」

人差し指を唇にあてて、ルーミケラウスは片目を瞑る。意味深過ぎる。何だか分からないけど、うわあ、と思った。うわあ。人事なのに、何か胸がどきどきした。

背後でラスカウルが嫉妬の炎を燃やしていたせいもある。

そのまま悪霊にクラスチェンジするのはやめてくれ、と志真は祈っていた。

### 志真と外出禁止令 3

外出できない、仕事も制限される、となれば当然暇を持て余す。

元々志真は活動的な方だし、あまりじつとしていられない性質だ。時間があるなら勉強しようとか、そういうことは一切思いつかない。思いついてもやる気はおきない。

同じ異世界人が襲われたと聞いて怖かった気持ちも、日が経つほどに薄れていった。基本的に単純なのだ。しかも、だ。

じめじめとした空気が部屋の中で淀んでいる。

開け放した窓からは、爽やかな風が吹き込んでくるのに、その暗い空気の塊を何とかすることはできないようだ。志真は小さく溜息を吐いた。

「ちよつと、ラス！いい加減元気出してよ」

姿は見えないが空気は重いし、時折しくしくとすすり泣きが聞こえてくるし、湿っぽくてしょうがない。最近はず明らくなってきていたのに。

志真は爽やかな空気を求めて、窓の縁に手をつけて顔を外に突き出した。若干雲が多いけど、空は青くて気持ちが良い。

ラスカウルの落ち込みの原因は、ルーミケラウスがウィガーにどうも気があるんじゃないか、という疑惑である。

ルーミケラウスが本気かどうかも分からなければ、ウィガーが果たしてどう応えるかすら分からない。別に恋人になったという事実も無いのに、ラスカウルはひたすら失恋気分浸っているのだ。

馬鹿馬鹿しい、とは思うけどそんな事は流石に言えない。

ラスカウルは繊細なのだ。

「ね、ラス。ルーは本気じゃないと思うよ。美人だし、よりどりみ

どりだもん」

『……ウィガー様くらい素敵な人なんて、中々いないわよ』

恋は盲目だ。

「いや、そう、仮にさルーが本気だったとしても、ウィガーのタイプじゃないかもしれなし」

そもそも、ウィガーはリアラさんに複雑な思いを抱えていると、志真は推測している。可憐で愛らしい感じの女性がタイプだとすると、妖艶で色っぽいルーミケラウスにはあんまり惹かれないかもしれない。

「どっちかっていうと、ほら、まだラスみたいな控えめな感じが好きな気がするんだよね」

『……でも、私には体がないもの』

はっとする。

『勝ち目なんか無いわ。絶対に』

確かにそうだった。最初から出場資格が無いのだ、ラスカウルには。悲しみが漣のように伝わってくる。

「ラス。でも、それは最初から分かってたことじゃないの？ 見るだけで良いつて、恋を味わってみただけだつて」

『そう……思っていたんだけど。駄目だわ。好きになればなるほど、苦しくて』

すすり泣くラスカウルに、かける慰めの言葉はついに見つけられなかった。

どうすれば良いんだ？

ラスカウルはどうやら、恋敵が現れたことにより、自分の立場を思い知らされてしまい、その事に落ち込んでいるようだ。叶わない

恋なのだという事は、最初っからはつきりしていたのだが、最近はその事を忘れていたっぽい。志真もその辺はあんまり深く考えていなかった。

恋がしてみたいって、ただそんな軽いのりだと思ってたけど、何か違う気がする。

この落ち込みっぷりは、本気だ。

ラスカウルは本気でウィガーに惚れてしまったらしい。

どうなんの、これ。

幽霊と生身の人間の恋愛なんて、どこにも行き先が無い気がする。せめて、ウィガーに姿が見えるならともかく、どうやら奴は靈感0だ。これでは始まるものも始まらない。

無理なのだ、とすっぱり諦められるのなら、ラスカウルもこんなにとんよりしていないだろう。だったら、どうする？どうしようって、どうしようもない。思い余ってウィガーを呪い殺されても困るし、体に乗っ取られたりするのも困る。

可哀想だけどラスカウルには諦めてもらうしかない。

よし、暫くウィガーとはなるべく顔を合わさないようにしよう。

出来るだけ接触を減らして、それでもって、他にラスカウルも気晴らしになるようなことを見つけて気を逸らそう。

よし。

『……全部、筒抜けよ。シマ』

「えっ!?!」

ひやりとした空気が耳の後ろから背中へ滑った直後、金縛りになった。

「ちょ、ちょっと何!?!」

口と目は動くが、他が全然動かない。ぎぎぎ、と音が出る程歯を食いしばって力を込めても、指の先が微かに震えるくらいしか動かせなかった。

「ごめんね、シマ」

今度は勝手に口が動いた。気持ち悪！と震えていると、次に手が窓枠から離れ、上半身がぐるっと回り、足が軽やかに歩を進める。

な、な、何！？

パニックに陥っている志真を置いて、体は部屋の中を進みドアの方へと歩いていく。どうやら、外に出ようとしているらしい。

(ちよ、ちよっとラス！何やってんの！？)

ついには声まで出せなくなっている。とにかく気持ちが悪くて、吐きそうな気分だった。今、この体を動かしているのはラスカウルだと、志真は確信していた。やばい、マジで最悪なことに。焦るものの、何も出来ない。

「ごめんね、シマ。怖がらないで、ちよっとの間で良いから……叶わなくても、せめて思い出が欲しいの。だから、体があればきくと……」

熱に浮かされたような言葉が聞こえる。ラスカウルが何を言いたいのがよく分からない。

だが、全身で志真は叫んでいた。

ダメだ！何だか分かんないけど絶対にイヤ！今すぐに私の体を返して！お願い、ラス！

見てるだけで良いと言ったラスカウル。だが、それだけでは物足りなくなってしまうた。今もちよっとだけとか言ってるけど、その

内に足りなくなってしまうたら、  
体に乗っ取られたら、

そんなの、嫌だ

恐怖で目の前が暗くなった。自分が消えてしまったようなこの感覚が、耐えられない。怖い、ちっとも話を聞いてくれないラスカウルが。

いつの間にか部屋の外にいた。階段を下りて、何かを探すように彷徨う。流れ込んでくる景色は、自分の目で見ていとは思えないほどぼんやりとしている。

やめてよ、ラス

弱い訴えが聞こえているのか、いないのか。ラスカウルは止まらない。

誰か、助けて！

「シマ？どうしたの？」

フィオーネ。

こげ茶色の髪を一つに結んだフィオーネが、不思議そうにこつちを見ている。

「あの、ウイガー……見なかった？」

「兄さん？兄さんなら裏で薪割りしてたけど」

「ありがとう」

にこりと笑って、踵を返す。志真の助けを呼ぶ声は届かないまま、フィオーネの訝しげな顔が視界から消えた。

こうやって誰にも、気がついてもらえなかったりしたら、もう本当はどうしようもない。大声を上げて泣き出したい気持ちなのに、涙すら流れなかった。

ドアを開けると、柔らかい風が額を撫でた。かん、と木を割る乾いた音が耳に届く。こうやって世界を感じることはできるのに。

「シマ？」

現れた志真に気がついたウィガーが、手を止める。斧を地面につき、額の汗を手で拭いながら洗面になった。

「何の用だ？あまり外をうるつくなと言っておいた筈だが」  
いきなり小言だ。

こつちがどんなに大変なことになっているか知らないくせに、と罵りたいのに口から出るのは全然違う言葉だった。

「ウィガー様」

様はやめて。

ウィガーの目が点になっている。

「さ、ま？」

「ずっと、ずっと見ておりました」

熱に浮かされたような声で話しながら、じりじりと固まったウィガーに歩み寄るのは志真ではなく、あくまでラスカウル。しかし傍目から見たら志真なのだという。全く笑えない。

「大丈夫か？お前何か……気持ち悪いぞ」

酷い暴言だったが、生憎志真も同感だ。

しかし、ラスカウルは止まらない。

「どうか聞いてください、ウィガー様。私の思いを受け止めて」

本当にもうやめてくれー！と志真は絶叫していた。心の中で。

## 志真と外出禁止令 4

志真の初恋は、小学校の教頭先生だった。

白髪交じりの初老の男性で、年齢は知らないが60代くらいと思われる。優しく、穏やかで、紳士的なとても素敵なお人だった。後に友達にそれを話すと「あんたそれは違う」「お菓子くれたから懐いたんでしょ」とか散々否定されたが、あれが初恋じゃなかったら、志真は未だに人を好きになったことが無いということになる。

恋もまだなら、当然告白とかした事もないし、生憎されたことも無い。

さて、今志真の体を動かしているのはラスカウルかもしれないが、実際はどうか外から見たら志真でしかなく。

(その場合、どうなの!? っていうか、人生初告白がこれになっちゃうわけ!?)

嫌過ぎる。

羞恥と混乱にのた打ち回っている志真を無視して、ラスカウルは口を開く。

「ウィガー様の凜々しいところも、厳しくみえて本当はとても優しく、繊細なところも、不器用でいつも苦勞を背負い込んでしまうお人よしなところも。私は全部」

青い顔で硬直しているウィガーを、ラスカウルは熱っぽく見つめる。うわぁ、本当に気がついて! こいつ気でも狂ったかどんびきされている。しかも、気が狂ったのではと疑われるのは、志真なのだ。

「す、」



嫌だー！

その瞬間、何か冷たいものが顔にかかった。ねばねばとした森林のような匂いを発するものが顔から首へと滴り落ちる。

「!？」

目に入るのを防ごうと目を瞑り、手で拭おうとしたのを誰かが止める。冷たい掌が、そつと顔を鷲掴みにしていた。

「……ごめんね、遅くなって」

聞いた覚えの無い声がすぐ近くで聞こえた。ウィガーじゃない。少し低くて、透き通ったとても優しい男の人の声だ。

「シマ、戻って」

名前を呼ばれたという事は、知っている人なのか。誰？それよりも、

「あ」

声が出た。ちゃんと自分の意思で出た声だ。ゆっくりと手を握ってみる、開く。

「うごく」

声が掠れた。それを聞いて、志真の顔を掴んでいた手がゆっくりと離れていった。慌ててべとべとしたものを、手の甲で拭い顔を上げる。最初に目に飛び込んできた色は、白だった。白いシャツから伸びる華奢な腕、少し顔を上げれば少年の顔があった。

「モク！」

薄い唇が小さく笑みの形をつくる。

円に十字の目隠しがあるせいで、モクの表情はそこしか分らないが、優しく笑っているのが雰囲気伝わってきて、志真はとてつもなく安堵した。

すたん、と何かが心の中に嵌りこむ。

「モク」

何だか分からないが、泣きそうだ。本当に怖かったし、もう駄目

かと思った。誰も気がついてくれず、ずっとこのままだったらどうしようと思ったのに、モクが来てくれた。

モク、が？

「え、ってというか何で、モクがここにいるの？それにさっきの」  
声は、

「モク、喋れるの!？」

驚きのあまり日本語になっていたが、問題は無かった。モクはこくりと、どこか困ったように頷く。

「な、何で……」

分からないことがあり過ぎて、どこから聞けば良いのか分からない。馬鹿みたいに呆ける志真の肩を誰かが掴んだ。

「一体何なんだ。そいつは、異世界人だな？知り合いなのか？」

未だ青い顔をしたままのウィガーだった。

「説明してもらおうぞ」

ウィガーの手の甲に鳥肌が立っているのをみてしまった志真は、流石にやさぐれた気持ちになった。

裏庭とはいえ、外だ。客の出入りはなくても、従業員が通りかかるかもしれない。そんなわけで、ウィガーの説教と尋問は志真の部屋で行われた。華奢なデザインの椅子に座り、重々しい雰囲気を負って腕を組むウィガーの背後で、レースとピンクのカーテンが揺れる。

その正面で、志真とモクは床に正座させられていた。(モクは自主的に志真につきあってくれたただだが)その様子を、ベッドの上で見守る白兎と黒兎のぬいぐるみ。

なんだか今一、空気が締まらないが、今回のウィガーは心底怒っている。

本気で、どうしよう。

一難去ってまた一難。最近、本当についていない気がするのだけど、呪われているのだろうか。やっぱりラスカウルとはいえ、幽霊にとり憑かれていたせいで、運氣とか吸い取られちゃっていたのだろうか。

「さっさと説明しろ」

正座させられた足がそろそろ痺れてきたところで、ウィガーが地の底を這うような低い声で言った。

「言葉、まだうまく、よくない。説明、ムリ！」

「遠慮するな。日本語で言えばだよな。」

仕方無い、ここは覚悟を決める。

「えーっと、でもさ、私にもよく分かんないっていうか」  
誤魔化す方向で。

「急に体が動かなくなったと思ったら、勝手に動いたり、喋ったりしだして……、で、気がついたらウィガーのところにはいたけど、何かあんまり覚えてないし」

「ちらり、と様子を伺ってみる。ウィガーは笑っていた。怖い。こめかみをびくびくさせながら、座った目で引きつった笑い浮かべる姿に、志真は震え上がった。」

「ごめん！ほ、本当は覚えてる！実はラス……、ほら、あの例のことで死んだっていう女の子の幽霊と友達になっただけけど、その子が変わった趣味でウィガーのこと好きになっちゃってて、私にとり憑いてたんだ。何か最初は見るだけで良かったのが、段々我慢できなくなったらしくて、本格的に告白とかしたくなって私の体に乗っ取っちゃった……みたいな感じ？」

「……お前は、本気で俺を怒らせるのが上手いな」

「いや、それほどでも。っていうか、本当の事を言ったのにより腹を立てている。説明が下手だという事もあるが、そういえばウィガ

「は幽霊とか信じない人だった。打つ手なし。」

幽霊がいる事を証明するところから始めなければいけないなんて頼みの綱のラスカウルは、さつきから応答しない。一体どうなっているのか、志真にはさっぱり分からなかった。

モクが何かしたのだろうとは思うが。

ちらりと隣のモクを見してみる。視線に気がついたのか、彼はちょっとだけこちらへ顔を向けて微笑んだ。

「そいつは、どこの誰だ？」

「モク？モクは学校の友達だよ」

「学生、という事は未だ永住権も市民権も得ていないという事だな」何故か、ぴりつと緊張した空気がウィガーから発せられている。

厳しい目は、今はモクに向けられていて、志真は焦った。

「ちよつと待つて、ウィガー！何だか良く分かんないけど、モクは全然関係ない、悪い事なんか何にもしてないよ！ただ私を助けに来てくれただけで」

「シマは黙ってる」

「黙ってられるか！」

「お前は全く何も分かっていない！」

怒鳴られるのには慣れている。ウィガーとはいつも言い合いになってしまうから、怒鳴りあう事も珍しく無い。だが今回のそれは、いつもと何かが違った。

こちらを責めるような目で見るウィガーに、志真は言葉を失った。一体、何。知らない内に何か取り返しのつかない事をしてしまったのか？不安な予感が湧き上がる。

「こいつはな」

その答えを話そうとしたウィガーを、モクが立ち上がる事で止めた。ふるふると、小さく首を横に振った後、白いシャツのゆったりした裾の部分から小さな紙の束とペンを取り出す。手の上で、すらすらと何かを書いた後、ウィガーに見せた。

「……だが、それでは」

何て書いてあるのか、志真には読めない。眉間に皺を寄せ、渋い顔になるウィガーに対して、モクは再び何かを書き付ける。

というか、さっき話してたのに、何でまた筆談？

分からないことだらけだ。

口を挟みたいのに、それをさせない張り詰めた空気がある。モクが書いた文章を読んでいたウィガーが、ゆっくりと顔を上げた。

「お前は……本当にそれで良いんだな」

こくり、とモクが頷いて、ウィガーは疲れた様な溜息を吐いた。

「シマ、お前はここで反省してる。部屋から出るなよ。俺はこいつを……送っていく」

「え、でも」

「良いから言う通りにしろ。これ以上俺の手を煩わせるな」

今回は自分が悪いし、ウィガーを怒らせているのも分かっている。だが、それでも黙っているのは嫌だった。よく分からないが、黙って行かせてはいけない気がした。

言い募るうとした志真の頭に、ぽんと誰かの手が乗った。

「モク」

見上げる志真を見下ろして、モクは口元に柔らかい笑みを浮かべる。大丈夫、とでも言うように、そつと頭を撫でられた。

離れていく手に、じわつと寂しい気持ち湧き上がる。

行っっちゃ駄目な気がする。止めないと、いけないような。

「モク！待って！……っう！」

立ち上がるうとした志真はそのまま床にダイブした。足に力が入れられない。痺れすぎて感覚がなく、ちょっと動かすだけでじんじんと痛みが這い上がる。

途中で足を崩しておけば良かった！

結局、私が悪い。

一人になった部屋で、ぐるぐる今までの事を反芻した後その結論に達した。

ウィガーが怒るのも無理は無いし、この事でモクが怒られるのは筋違いだ。それなのに、ちゃんとモクを弁護できなかった。

あの時、どうしてモクが来てくれたのか分からないが、多分志真を助けに来てくれたのだ。その上庇ってもらってしまっている。情けなくて哀しくなった。ずずっと、鼻をすすりながら考える。ラスカウルはどうなってしまったのだろう。さっきから呼びかけてみても、全く反応が無い。

お払いとか、除霊とかされちゃったんだろうか。

一気に色々なものを失ってしまった気がする。

暗い部屋で広いベッドにしがみ付き、志真は涙を堪えていた。寂しい。不安で胸が押しつぶされそうだ。

幽霊だったけど、一番の友達だと思っていたラスカウルは消えてしまった。

口煩いし嫌な奴だけど、それなりに気にかけてくれていたウィガーの信用も、益々無くなったことだろう。最初から無かったのに、マイナスになった気がする。

それに、モク。

モクだって呆れたに違いない。助けくれたのに、ありがとうも言っていない。

じわりと新たな涙が滲んできて、志真は唇を噛み締めた。

泣くな、馬鹿。泣いたってどうにもならないのに。

モク達が行ってしまったから、どれだけ時間が経ったのか分からない。気がつけば明かりの無い部屋の中は真つ暗になっていた。うとうとしていた志真の耳に、ノックの音が届いた。ばねのように飛び起きて、ドアまで走る。

「ウィガー！」

勢いよく開いたドアの向こうで、きよとんと大きな目を見開いていたのは、リアラだった。小柄で華奢なこの宿屋の女主人だ。

「あ、あの」

目を白黒させる志真を見上げて、リアラはにこりと笑みを零した。「こんばんは、シマ。少しお話をしたくて。中へ入れてくれる？」戸惑いながらも、志真はリアラを部屋に入れた。今まで、こんな風に彼女が訪ねて来た事は無い。時々会って、気遣いの言葉をかけてくれるくらいの相手だ。

「座って話しましょうね」

促されるまま椅子に座る。テーブルを挟んで向かい側に、リアラは腰を下ろした。

窓から差し込む星の微かな光で、ふわっと広がる長い髪が光って見える。白くて小さな顔は綺麗な人形のように、子どもを生んだ母親にはとても見えない。

「ウィガーに、少しだけ話を聞いたわ」

「少し……」

それは一体、どのくらいなのだろう。可笑しそうにリアラが笑った。

「あの子は昔から周りがやきもきするくらい秘密主義だから。何でも一人で抱え込むのは悪い癖ね」

ゆっくりとした口調でも、やはり分からない言葉が多い。ラスカウルがいないと駄目な自分に、志真は落ち込む。

「あ、ごめんなさい。まだ言葉があまり分からないのね……、どうしようかしら。でも、まあ良いわよね、今は貴方の話を聞きに来たのだもの。胸にね一人で抱え込んでいると、とても辛くなってしま



うものでしょう？私は何にもできないけど、話を聞く事くらいはできるわ」

リアラの言葉はどこまでも優しく、暖かい。例え、ちゃんと意味が分からなかったとしても、とても労わられていることだけは伝わった。

じわり、と涙が滲み、慌てて目を擦る。その手をそつと握られた。「駄目よ、シマ。擦ったら腫れてしまうわ。泣いてもいいから、我慢しないで。私は誰にも言わないし、笑ったりもしない。ね？」

手がとても、暖かった。

一旦流れ落ちた涙は、後から後からぼろぼろと溢れてきた。

「も、モクは……助けただけ、なのにっ」

きちんと見えなかった。聞いてもらえなかった。ウィガーが怖かった理由も分からなかった。

「ら、ラスがいなくなっちゃった！う、ウィガーが、な、何であるかに怒ってるのか、分かんないしっ、ちゃんとやってくれない、しっ……」

ずるずると鼻をすすりあげながら、しゃくりあげる。

「モク……、モクは、怒られて、ないかな。わ、私のこと、呆れて嫌にな、なったり」

皆がいなくなつて、部屋に一人取り残されて、見捨てられたような気持ちになった。また全部無くなつて、世界に一人ぼっちになつてしまったみたい。惨めで、寂しくてたまらない。

帰りたい、お母さんやお父さん、友達の事とか。考えないようにしてきたこと全部が浮かんできて、志真は暫く泣き続けた。

少し気持ちが落ち着いて、涙が収まってきた頃にリアラはそつと握っていた手を離して席を離れた。白いハンカチをテーブルに置き、ちよつと待っててね、と言い残し部屋を出て行く。

思い切り泣いてしまった。

べたべたする顔を渡されたハンカチで拭きながら、ほっと息を吐く。瞼が腫れぼったい。恥ずかしいが、気分は大分すっきりしていた。

間をおかず、リアラは戻って来た。持ってきた大き目のカップを、そっと志真の前に置く。ハチミツの匂いがする、暖めたミルクのようだった。

「泣いたら喉が渴いたでしょう？どうぞ」

勧められるまま、志真はカップに手を伸ばした。優しい甘さが心に染みる。

「ウィガーはちょっと言葉が足りないし、きつく当たりすぎるところがあるから、誤解されてしまうのだけど、本当はとても責任感が強くて優しい子なの」

穏やかな、母親の顔を志真に向けてリアラは語る。

「貴方達を守る為に、あの子はとても頑張っているわ。だから、心配しないで、信じてあげてね、シマ」

言えない事が、また一つ増えた。

ウィガーは胃が痛むのを感じながら、だらだらと歩いていた。宿屋の仕事があるものの、家に帰りたい気分ではない。志真と顔を合わせれば、確実に言い合いになるだろう。

まるで何も、分かっていないくせに。

苛立ちは、しかし彼女ばかりに向けるものではない。あまりにも多くのことを、彼ら異世界人の目から隠し続けている。その結果の無知を責めるのは、やはりフェアではない。

隠し通さなければ。

もし、あの次々と問題ばかり起こす異世界人がこの事を知ればどうなるか。考えるだけでぞっとする。目先のことしか考えず、感情で動く。結果がどうなるかなんて考えたことも無いだろうその向こう見ずなところを、少しだけ羨ましくも思った。

イブキの事も心配だが。

立ち寄った保護施設で、イブキの様子を確認しようと思ったが面会を拒否された。怪我の具合よりも、心に負ったダメージの方が重傷のようだ。

無理もない。

あの襲撃の犯人も、未だ捕まっていない。ユーイが何か対策をすると言っていたが。

キクノは、元気だろうか。

暫く顔を見ていない。3人の中では、1番しっかりしているように見えるが、何故か妙に危なっかしくも思えた。久しぶりに、ユーイのところへ寄っていくか。

余計なところにまで気を回してしまう為に、いらぬ苦勞を背負うのだと彼はまだ気がついていなかった。

## 菊乃の事件 1

ユーイ・ユーイの言葉はいつも唐突だ。  
その日もそうだった。

「外出を許可する」

昼食を終えた後、言いつけられた仕事をこなしていた時のことだった。

泥だらけの手を地面につけたまま、菊乃は開け放した窓の向こうから、仁王立ちでこちらを見下ろすユーイを見上げた。豪華な羽飾りのついたマントを斜めにかけてユーイは、どこかの王様のような気高さでもって、手も足も泥に塗れた菊乃を見下ろしている。

上から下まで、視線を行き来させた後、つい、と整った眉を跳ね上げて、鼻の頭に皺を寄せるのが見えた。

「何だお前、その格好は」

「花壇を、作るどころです」

「ふん、何でも良いが風呂に入って着替えて来いよ。服装は後でチェックするから、適当に見繕え。終わったら書斎に来い」

言いたい事だけ言って去っていく。

あの分では、窓の外が殺風景だから何か花でも植えておけと自分が言った言葉も、覚えていないに違いない。ブロックを積み、植物の育成の適していると思われる土を運びいれるという重労働が、とてつもなく無駄な事だったように思えてきた。

菊乃は溜息をついて立ち上がり、手袋を脱ぎにかかると。

最近では、ユーイに振り回されてばかりだ。

しかし、外出を許可するというのは何なのだろう。まるで菊乃が外出を求めたような言い方だったが、そんな事実はない。何だか嫌

な予感しかしないのは、気のせいだろうか。いや、絶対に当たっている。

どうしよう、凄く行きたくない。

気は向かないが、逆らえないので菊乃は大人しく部屋で風呂に入ることにした。

本の続き、読みたかったんだけどな。

仕事が終わった後に読むつもりだった本のが、心残りだ。ユーイの書棚から借り受けた、異世界人に関する法律等が記された本。内容が堅苦しく難しいから、中々読み進まない。最も、一向に読めないのはこうして頻繁に、ユーイの気まぐれに付き合わされるせいでもある。

髪を乾かした後、服を選ぶ。白色のワンピースと、青いカーディガンにした。

指定された2階の書斎に入った菊乃に対するユーイの第一声は「遅い」で、次が「地味だな」だった。黒に金の刺繍が入った上下揃いの衣装のユーイに比べれば、大抵の人が地味になるに違いない。というか、さつきと服装が違う。

「まあ、今日のところはそれでも良いか。ジェレミー」  
すぐさまドアが開いて、ジェレミーが現れる。部屋の外で待機していたのだろうか。ユーイと同じ、黒に金の刺繍が入った金ボタンつきのジャケットを羽織っている。下は白色のズボンと固そうな黒の皮のブーツを着用。腰のところまで深い緑色の布を斜めに巻きつけ、金の鎖で固定してあった。

前髪を上げ、後ろに流したジェレミーは、何だかいつもと感じが違って見えた。

ゆるい雰囲気が無くなって、近寄りがたい。ちょっと怖い。そう、菊乃が思っていると、彼は固く結んでいた唇を緩め、笑った。

「見違えました？中々、良いでしょうこれ。一応、仕事の制服なんですけどね」

途端に、いつものジェレミーだった。

「ジェレミー、真面目にやれ。遊びじゃないって事を忘れるな」

「はいはい、分かっていますよ」

遊びじゃないって、一体何。更なる不安が上乗せされた菊乃に、ユーイは真面目な顔を向けた。

「ジェレミーについていき、買い物に必要な店と道を覚えて来い。明日から日々の買出しをお前に任せる」

買い物という新たな仕事を任されただけの話だったら良いが、残念ながらそうは思えない。一人で外に出る許可がいきなり出たのだ。買い物というからには、お金も預けられるのだろう。見張りは……やっぱり、つくに決まっている。

何だろう、今度は。

まさか、通り魔の仕業に見せかけてばっさり、とか。そういうのは無いと信じたい。鞆の紐を握り締め、小さくなって歩く菊乃の緊張した顔を見て、ジェレミーは苦笑した。

「大丈夫ですよ。この辺りは割合治安が良いし、今は僕と一緒にいますしね」

今、は。

そうだった、明日からは菊乃一人で買い物に出なければならぬのだ。ちゃんと、道を覚えておかないと。

菊乃は俯かせていた顔を上げた。

道路を挟んで、様々な店が立ち並ぶ。賑やかな商店街のようなところだ。ひっきりなしに人々が行きかい、活気がある。懐かしいのと同時に、何だか心もとない気持ちになった。

これだけ沢山の人がいる中に出たのは、初めてだ。

姿形も様々なら、飛び交う言葉もまだまだ耳慣れない。何とか聞き取れるレベルにはなっているが。

「……………」

何だか、気のせいだろうか。きよるきよると視線を彷徨わせる時に、高確率で誰かと目が合うのは。あちこちから、視線を感じる、ような。

私、何かおかしい？

急に不安に駆られた。一目で異世界人だと分かってしまうのだろうか。

「キクノ」

呼ばれて傍らを見上げると、艶やかな笑顔がそこにあった。いつにも増して、きらきらと色っぽい。すっかり見慣れてしまったけど、ジエレミーは綺麗だ。

「怖いなら、いつでも手を貸しますよ」

からかうように手を差し出されて、菊乃は小さく首を横に振った。「気持ちだけ」

「残念。必要になったらいつでもどうぞ」

彼と辺りの人々とをこっさり見比べてみる。まず間違いなく、注目されているのは彼の方だろう。菊乃はほっと息をついた。

「では、まずユーイ様御用達の帽子屋から行きましようか。この右の路地にあるんですよ。手前の花屋を目印にすると良いかな」

「はい」

鞆からメモ帳を取り出して、菊乃はユーイの言葉を記しながら、その後を歩いて行った。

\*\*\*\*\*

ウィガーがユーイの家を訪ねた時、菊乃は外出中だった。思わず、暗い窓の外に目をやってしまう。既に夕飯に相応しい時間は過ぎて

いる。ジェレミーが一緒だとはいえ、いや、一緒だからこそ余計に。「心配するな」

まるでウイガーの胸の内を読んだかのようなタイミングで、ユーイが言った。

「偶にはキクノにも気晴らしが必要だろう。外で食べてくるように言っているが、もうすぐ帰るだろ。ジェレミーだって、お前が思うほど節操なしじゃない」

「どういってもりだ」

「何が」

分かっていくくせに、ユーイはすつ呆けている。にやにやと笑いながら、ウイガーの顔を眺めているのがまた気に障った。

「よりにもよって、この時期に」

伊吹が襲われた、今。それだけではない、行方不明になる異世界人の数は片手では足りないほどになっている。殺されたのか、連れ去られたのか、自らの意思で姿を隠したのか。

とにかく不穏な気配が漂っている、今だ。

「今度はキクノを囮に使うつもりか」

「適任だろう」

「ユーイ！」

「同時にキクノの中に潜む揺らぎを見極められるかもしれない。勿論、見張りもつける。それでも心配なら、お前も傍で見張ってる。ただし、キクノに気付かれないようにだ」

愉しげな笑みを引つ込めて、ユーイは鋭い顔をウイガーに向けた。異世界人対策本部の幹部としてのユーイがそこにいた。

気晴らしに寄った矢先で、更なる厄介ことになっているとは思わなかった。

今日は厄日か……。



ウィガーは、痛む頭を手で押さえた。

## 菊乃の事件 2

翌日からは、菊乃一人で買い物に出されるようになった。ユーイが仕立てを頼んでおいた服や、急に食べたくなくなったとかいう食べ物、それから買い忘れていた道具類。一度に言ってくれればいいのに、帰った後、頼まれた荷物を引き渡しているところで彼は言う。

「ああ、そういえばあれも忘れていた。明日の朝に使う卵が足りないらしい。それも頼む。悪いな、キクノ」

全然悪いとは思っていないくせに。

ソファーに寝そべり本を読みながら、というリラックスした姿勢での発言に、文句を言いたくなる気持ちを押しさえつけ、菊乃は言いつけに従う。

こうして、ユーイの気が済むまで何度も家と町とを往復させられるのだ、今日も。

彼はこの家の王様であって、菊乃の命運を握る保護者だ。その立場が鬱陶しいのか、それとも菊乃が気に入らないのか、あれこれ嫌なことを押し付けて根を上げさせようとしているのだと、最近気がついた。

だったら、絶対弱音なんか吐きたくない。

真っ向から立ち向かうのは怖いけど、こういう形でなら頑張れる。自分が案外負けず嫌いだということに気がついたのも最近だ。

ユーイの家は町から離れたところにある。商店街にたどり着くまでには、徒歩で1時間ばかりかかった。その上、小高い丘の上にあるから、斜面を上り下りするだけでも息が上がってしまう。

元々、体力には自信が無い。

初日は2往復した辺りで既にふらふらになっていたし、翌日は酷い筋肉痛に悩まされた。4日目の今日はというと、慣れてきたのか

筋肉痛も引いてきて、足も軽くなってきたように思う。息は少し、上がってしまっているが。

額の汗を拭い、菊乃はほっと息をつく。

今日は少し、暑い。

手をかざして、空を見上げる。雲ひとつ無い青い空で、太陽が白く輝いている。帽子を持って来れば良かったと、菊乃は少し後悔した。

広い畑や農場を過ぎて、少しづつ民家が増えていく。町の中心部は整然とした、似たような形の家が多いが、町外れの方に立ち並ぶ家々は、中々個性的で面白い。ピラミッド、ドーム型、五角形や六角形。

そういった家や、広い景色を見ながら歩くのは中々楽しかった。

家の中でずっと籠っているよりは、気晴らしになって良い。

町中に入ると、流石にのんびりと歩いてはいられなかった。特に、昼間でも人通りが多い商店街の辺りは。なるべく道の端っこを、人の妨げにならないように慎重に歩くようにしている。

店がある通りの道は、一般の乗り物は立ち入り禁止となっているらしい。一般の人は道の真ん中を行き来する路面電車を使うか、歩いて店を回る。時々空を飛んでいくジバに乗っているのは、犯罪を取り締まっている警備の人々らしい。

確か、と菊乃はウイガーから教えてもらった話を思い出す。

王様がいる城や国境を守るのが（セツツァー）騎士で、町の犯罪なんかを取り締まっている人達が（ヤツク）市街警備隊。町中にあるのは、市街警備隊の方の筈だ。

彼らを通るたび、影がそっと横切るので何となく落ち着かない気持ちになる。

気のせい、かな。

今日はやけに数が多く、忙しそうに動き回っているように見える。

「……………誘拐……………」

おしゃべりをしている女性達の会話から、その単語が耳に飛び込んできて、菊乃は思わず立ち止まりそうになった。

「……………が、いなくなつて、探してるらしいわ」

「だから、今日はヤツクの数が多いのね」

「ヤツクだけじゃないわ、ケラスもいるみたい」

「あ、本当だ……………じゃあ……………」

ゆっくりと歩いて遠ざかる。声はそこから聞き取れなくなった。

誘拐。キリアンが言っていた子供の誘拐事件を思い出す。死体で見つかった子どももいる、確かそう言っていた筈だ。

そんな事になってしまふ前に、早く、見つけてあげてほしい。

「……………え？」

ジジ、と何かの音が聞こえた気がして、菊乃は足を止めた。言葉のようには聞こえなかったのに、何故か呼ばれたような気がする。

振り返るが、特に何も無い。立ち止まった菊乃を、迷惑そうに歩行者が避けていく。

「あ、ごめんなさい」

菊乃も慌てて歩き出した。

気のせい、なのだろうか。

暫く、胸の奥がざわざわと落ち着かなかつた。

辿り着いた食料品を扱う店は、いつも客で賑わっている。それぞれの売り場に売り子がいて、彼らに欲しいものを言い、お金と交換すれば良いのだが、菊乃はこのやりとりが少し苦手だった。

我先に、と声を上げる客たちに押し負けてしまふからだ。次……………次こそ言おう。そう決めても、必ず遅れを取ってしまう。後から来た客がどんどん入れ替わり、結局いつも、客が途切れた一瞬でようやく欲しいものを言う事になる。

「あんたいつつも、要領が悪いねえ」

お釣りと品物を手渡しながら、可笑しそうに店員が笑う。土の粘土みたいな肌の色、かなり大きな体をした迫力のある中年の女性で、声も太くよく通る。いかにも元気で威勢の良い感じの人だ。

「小っこいし、細っこいし。途中で変な奴らに苛められないように気をつけて帰りなよ。あんたみたいなのは、格好の餌食になっちゃう。最近、変なのがいろいろみただしねえ」

「はい、気をつけます」

「そんなにかしこまらなくても良いんだよ。異世界人だからって」

「！」  
異世界人だと、ばれている。やっぱり分かってしまうのだろうか。凍りついた菊乃を見下ろして、店員はけらけらと声を上げて笑った。

「大きな目が落ちこちまうよ、そんなに吃驚すること無いだろ。何か雰囲気で分かるんだよ、あんたはやっぱりどっか違う。私と同じでね」

子どもでも見るような、暖かい眼差しを向けられて、菊乃は戸惑った。

「私もあんたと同じ、異世界人なのさ」

その言葉に、菊乃は再び目を見開く事となった。そこへ、次の客が来てしまったため、話はそれ以上続けられなかった。再び忙しく働き始める彼女を暫く見つめた後、お礼を言っつて菊乃は店を離れた。あんまり遅くなると、ユーイが煩い。

そう思うものの、その場を立ち去りがたい気持ちで足を重くさせていた。

異世界人……、私と、同じ。

胸がときどきといていた。

もしかしたら、色々話を聞けるかもしれない。話をしてみたい。

戻って、少しだけ……、振り返りかけた菊乃の前に立ち塞がる影があった。

背の高い、褐色の肌の怜悧な印象の男。

全身黒の衣装に身を包み、こちらを見下ろす姿は死神のようだ。透き通った紫の瞳に射すくめられ、菊乃は呼吸をするのも忘れた。

ハインス・ユーゴ。

彼に殺されかけた時の恐怖は、今も菊乃の体を縛り付ける。例えあれが全部、予定通りの芝居だったとしても、彼の殺気は本物だったし、菊乃の感じた恐怖も本物だった。

「何を話した」

身を竦めた菊乃に、ハインスは低い声音で問う。

「言え」

「……ど、どうして」

言わなければならぬのだろう。それに、何故このタイミングで現れるのだ。全部、見ていたのだろうか。誰かに見張られているだろうとは思っていたが、まさか彼だったなんて。

巻き込んでしまう。

先程の、朗らかな笑顔を思い出して、菊乃は苦しくなった。

自分と関わったせいで、迷惑をかけてしまう。そんなのは駄目だと思う。思うが、何が問題になるのかすら分からなくて口を閉ざす菊乃を、ハインスは冷ややかに見下ろした。怖いと思うのに、その目を反らす事ができない。

沈黙の後、ハインスが口を開いた。

「余計なことに関わるな」

背を向けて、立ち去りかけた足を止める。肩越しに再び視線を菊乃へ向けて。

「死にたくなければな」

歩き去るハインスの後姿を、菊乃は呆然と見送っていた。



### 菊乃の事件 3

余計な事を考えるな、そう言われても。

無理だった。あれは、忠告だったのだろうか、それとも単なる脅しなのだろうか。ハイネスの氷点下の眼差しを思い出すと、後者だったのだろうと思えてくる。悩むまでも無かった。

でも、どうしてあそこで菊乃の前に出てきたのだろう。質問に答えていないのにそのまま解放された理由は。異世界人と接触した事がまずかったのだろうか。思えばそもそも始まりも、異世界人だった。

命の恩人が異世界人だったからというのが理由で、疑われたのだ。何故それが理由になるのか、菊乃にはいま一つ理解できない。

分かるのは、あまり異世界人と関わらない方が良さそうだという事だ。

何も分からないまま不注意な行動を取れば、自分だけでなく相手に迷惑がかかる。菊乃の事で、あの店員も問い詰められているかもしれない。菊乃の命の恩人である、大きな黒い豹みたいな人も。

何も無いと良いけど

ぐるぐると考えながら歩いてたのがいけなかった。背後から走ってきた誰かにぶつかられ、胸に抱いていた紙袋を取り落としそうになる。たたらを踏んで、踏み止まりほっと息を吐こうとした菊乃の耳に、今度は女性の叫び声が飛び込んできた。

「誰か、その人捕まえて！泥棒よー！」

地面に倒れながら手を伸ばして叫ぶ女性と、菊乃にぶつかって走り去っていく小柄な男の後姿。逃げていく男を、見回っていたジバに乗ったヤック達が追う。

ひったくりのようだ。



菊乃は慌てて自分の鞆に目をやった。肩掛けの鞆はちゃんと前にあり、中身も無事に入っている。

その時再び、背後から男性の怒鳴り声が聞こえた。

「泥棒だ！そいつを捕まえてくれ！」

また？

今日は何だか騒がしい。

巻き込まれないように、気をつけて帰ろう。

しっかりと鞆と卵の入った紙袋を抱きしめて、再び歩き始める。

その時、菊乃の頭上に影が落ちた。またヤック……と最初は気にも留めなかったが、その影は動かなかった。

「？」

疑問に思い上を見上げた菊乃の目に、頭上に広がる網が映った。

避ける暇も無く、それはあつという間に菊乃の体を覆う。

逃亡防止の犯人捕獲用の網！だ。

聞いた事はあつたけれど、目にするのは初めてだった。初がまさ

か自分に対して投げられたものになるなんて、思いもしなかった。

いくら考えてみても、犯罪なんて犯した記憶は無い。

何で？

混乱する菊乃の手足に網が絡みつく。それだけで終わればまだ良かった。網を引っ張られた拍子に倒れた菊乃の足が浮く。その一瞬で体が攫われ、浮かび上がった。網に体を押し付けたせいで、間にあつた紙袋から卵が潰れる音が聞こえた。

ユーイの呆れ顔が浮かび、一瞬現実を忘れた。

買いなおさないと。これ以上遅くなつたら、また嫌味を言われる。

しかし、その事に気を取られている場合ではなかった。

網に捕らわれた魚のような格好で、菊乃は空へと引き上げられている。徐々に地面が遠くなるのが怖くて、思い切り網を握り締めた。ゆらゆらと揺れて、非常に心もとない。その上、網が皮膚に食

い込んできて痛かった。

何でこんな事に

引ったくりの犯人と間違われたのだろうか。それともこれもユーイの嫌がらせの一環？どちらにしても、成す術は無い。

今、暴れて落ちてしまったら、怪我どころではすまないだろう。すっかり小さくなってしまった建物を見下ろして、菊乃は震え上がる。

充分な高さまで浮いたところで、それは勢いよく走り出した。

「……………っ！」

怖くて声も出なかった。

急いでいるのか、かなりのスピードを出している。耳元で風がごうごうと音をたて、景色が風のように流れていく。まともに目を開けていられなかった。

まさか、途中で落とされたりは……

しなないと思いたい。

風で網が大きく揺れる度に、心臓が止まりそうな思いをした。長く感じたが、それほど時間は経っていないのだろう。

ユーイの屋敷がある方とは逆の町の外れ、深い森の入り口でジバは止まった。3メートルほど下の草むらに、人が数人待ち構えているのが見える。全員、草に紛れる緑色の服を着て、頭に赤い布を巻いているようだ。

その中の一人が、こちらへ向って大きく手を振る。

「さっさと落とせ！時間が無い」

落とせ、と確かに言った。思わず網を握る手に力が入る。次の瞬間背中の毛が逆立つような浮遊感の後、網ごと落とされていた。

悲鳴も出なかった。

あっという間に近づく地面。思わず目を瞑ってしまったが、覚悟していたような衝撃は無かった。代わりに何かどろりとした冷たい

ものに沈み込む感触がした。どうやら下は浅い泥沼になっていたようだ。全身泥だらけになってしまったが、怪我をするのに比べればどうという事は無い。

何とか這い上がり、未だ絡み付いている網を外そうともがく菊乃の耳に、草を踏む音が聞こえた。

「無事とは運の良い奴だ」

「っていうか……こんなところにこんな泥沼、あつたか？」

「あるじゃない」

「いや、だからさ……」

「うだうだ言っていないで、さっさと始末しちまおうぜ。警備隊の奴らが来ちまう」

男が5人に、女が2人。逃げ場を塞ぐように近寄ってくる。よく見れば、それぞれ剣やナイフのようなものを手にしていた。

「しかし小物だな」

「馬鹿、気をつけるよ、異世界人だ。外見で判断するな、何をするか分からねえからな」

異世界人だと知られている。ますます血の気が引いていく。彼らの顔や言葉から、異世界人に対する嫌悪や侮蔑が滲み出ている。ここに菊乃を連れてきたのは何の為か、など。問う必要も無さそうだった。

殺すつもりなのだ。

逃げないと。そう思うのに足が動かない。網が邪魔だった。それに、この人数を相手にとても逃げられるわけがない。無駄な気がした。ここがどこかも分からないし、町から随分離れている。例え、誰かが通りがかったとしても、菊乃を助けてくれるだろうか。

異世界人の菊乃を。

助けに来てくれる人の顔も浮かばない。思いつかない。誰も、菊  
乃が死んだとしても困らない、悲しまないに違いなかった。

その事が、一番哀しい。

## 菊乃の事件 4

高い笛の音が緊迫した空気を切り裂いた。菊乃を追い詰める彼の顔から余裕が消える。

「まずい、追っ手が来る」

一番近くにいた男が、菊乃を見た。その『物』を見るような乾いた瞳にぞっとする。思わず後ろへ逃げた足が、再び泥へ沈んだ。びちゃん、と泥が跳ねる音が合図になった。

すつと、男の目の色が変わる。

「早くしろ」

その言葉に答えるように、男は動いた。手にしていた弧の形に曲がった大きな剣を構え、勢いをつけて足を踏み出す。反射的に逃げた体が、バランスを崩してすとんと倒れる。泥の中に尻餅をついたまま、菊乃は顔を上げた。振り下ろされる刃に、光が反射する。自分の心臓の音が大きく早く響いて煩い。

逃げられない。体の全てがその場に縫いとめられたように、動けなかった。

頭の中が真っ白になる。

死はもう避けられないもののように思えた。だが。

それは、一瞬のことだった。

男が切りかかってくるそこへ、飛び込んできた黒い影があった。

菊乃の脇を通り抜けていった黒い風。

なに、あれ大きい……動物？

見覚えがある気がした。知っている、あれは、あれを最初菊乃は豹だと思ったのだ。

しなやかに体を躍らせて、男の体を踏み倒す大きな黒い豹は、次々に男の仲間を倒していく。武器を器用に避け、前足で突き倒す、

或いは強い顎で服を掴み投げ飛ばす。その『人』は、とても強かった。あつという間に、全員を倒してしまった。

菊乃は言葉も無く呆然と、その尻尾が地面を叩くのを見た。

あの人だ

最初に菊乃の命を救ってくれた、異世界人。

(また、助けられた)

これは、現実？それともまた夢でも見ているのだろうか。凄く自分に都合の良い夢。

琥珀の瞳が振り返って、そんな菊乃を見つめる。

静かな迎合は一瞬だった。

光る何かが黒豹の前足を貫く。菊乃には何が起こったのかまるで分からなかった。察知していたらしいその豹も、体を跳ね上げたものの避けきれぬ事はできなかった。撃たれた足から鮮血を流しながら、豹は大きな体を低くして唸る。

2番目の閃光が豹の肩の辺りを貫いた時、漸く菊乃は動く事を思い出した。

絡みつく網を何とか引つ張り、崩れるような無様な格好で、地面へ伏せる豹へと走り寄る。来るな、とでも言うように、牙をむき出し唸る豹に構わず、その体に手を伸ばした。そっと触れた体は温かく、指先が震えた。これは、現実だ。地面を塗らす赤い血に、悲しみと怒りが湧き上がる。

遠巻きに様子を見る人々へ視線を巡らせる。彼らが一体誰なのか、何故菊乃を殺そうとするのか、分からない。

「貴方達は、誰なの。どうしてこんな事をするの」

震える声は、徐々に力を取り戻す。

「私が気に入らないなら、私だけにして。他の誰も、傷つけないで。」

お願い。この人を殺さないで」

手を広げても、大きな『豹』の体は隠せないが、それでも出きるだけ手を伸ばして自分の体を盾にする。弱い菊乃にはこんな事くらいしかできない。すぐに来るだろうと覚悟していた閃光は中々やっつてこなかった。その事に、菊乃よりも襲って来た男たちの方が戸惑っている。

森と、菊乃達を見比べて、再び落ちた武器を拾う。それを目にした『豹』が低く唸った。手を伸ばした菊乃の肩へと顔を上げ、ぎらぎらとした目を男に向ける。

「だ、駄目！」

止めようとしたが、力で勝てる相手ではなかった。傷ついた体を引きずって、あっさり菊乃の体を飛び越えていつてしまふ。怪我のせいで先程よりも動きが悪い。それでも負けはしなかった。向かってきた3人を次々と倒していく。

固唾を飲んでその様子を見つめていた菊乃は、離れた場所で動く女に気がついた。弓に矢を番えて、狙いを定める。声を上げようとした時にはもう、矢は放たれていた。

「やめて！」

どくん、と大きく心臓が音をたてた。

胸の内でも暴れる熱い何かに、一瞬目の前が白くなる。

(何これ)

体の内部を焼ききられるような痛みが過ぎ去ると、全ての音が消えた。煩く聞こえていた心音も、風の音もしない。目の前の景色がゆっくりとコマ送りのように流れていく。青い空に舞う自分の黒い髪、投げ出される腕。それらを見て自分が仰向けに倒れていると気がついた。

背中当たる地面は、柔らかく菊乃の体を迎え入れる。沈む……、そこで、それが地面ではなく水である事にきがついた。青い空に飛

び散る水飛沫、ぶわっと広がる沢山の白い泡が徐々に消え、歪んだ景色が見えた。水の中、だから……、

水？

疑問を感じた瞬間に、消えていた感覚の全てが戻っていた。

途端に水を思い切り飲み込んでしまい、苦しくなってもがく。何か覚えがある場面だ。だが今度は溺れる事は無かった。足がすぐに地面についたからだ。水面から顔を出して、菊乃は暫くむせていた。荒い息を落ち着けながら、顔を上げる。

「……………」

先程まで平地だったところが、何故か広い湖になっていた。場所が変わったわけではないようだ。離れた場所で、やはり呆然とする赤い布を被った男たちがいる。そして、いつの間にか黒い豹が菊乃のすぐ近くにまで来ていた。

1メートルほどの距離を開けて止まり、こちらを伺うように見上げる。

菊乃を見上げる蜂蜜のような色の瞳は、静かで穏やかな色をしていた。口を開きかけたところで、四角い影がさつと横切つていった。ヤツクだ。

反射的に緊張し、見上げると四角い板のような乗り物がゆっくりと高度を下げていた。乗っていた人物の姿を確認して、菊乃は思わず声を上げる。

「ハインス、さん？」

薄い金髪に褐色の肌の男は、菊乃を一瞥した後に行った。

「全員、動くな」

特に大声を出したわけでもないのに、その声は重く響いた。動けば殺す、そんな意思を受け取って、菊乃は硬直した。



遅れて飛んできたヤック達が、次々と犯人捕獲用の網で赤い布の男たちを捕らえていく。勿論、今度は菊乃に向って投げられる事は無かった。

「俺は異世界人対策本部ケラスの治安維持部隊所属、ハイネス・ユ  
ーゴ」

凍て付くような鋭い眼光が、その場の全ての者へと向けられる。

「異世界人の誘拐、及び襲撃の現行犯。更にここ最近の異世界人殺傷事件についての容疑でお前達の身柄を拘束する」

被害者の立場である筈の菊乃まで、睨まれているのは気のせいだろうか。

「お前はよくよく面倒を起こす」

気のせいではなかった。

問答無用で謝りたくなるような冷ややかな空気が漂ってくる。

「ごめんなさい、あの、ありがとうございます」

反射的に頭を下げる。下げて気がつくのは、こちらの世界では頭を下げるという行動は一般的ではないらしいということ。忘れていた。気まずく視線を落としたまま、言うべき言葉を搜す。

視線を下げた事で、濡れて光る黒い毛並みが目に入った。肩まで水に浸かった状態で見えないが、彼は怪我をしているのだ。

(そんなこと、今頃思い出すなんて)

慌てて菊乃はハイネスを見上げた。

「この人が、私を助けてくれて、その時に怪我を」

「ハルラック・エジだな」

途中で言葉を遮られた。

ハイネスの視線は菊乃を通り越し、背後の黒い豹へと向けられている。ハルラック・エジと呼ばれた黒豹も、同じようにハイネスを見ていた。知り合いなのだろうか。だがなんというか、知り合いというには寒々とした緊張感が漂っている。

次の言葉は、菊乃の予想しないものだった。

「保護法により、永住の権利を与えられていない保護期間中に、異種の力を行使する事は禁じられている。規定により、お前の身柄を拘束する」

## 菊乃の事件 5

世の中は理不尽な事だらけだ。

ただ少し遠回りをして帰っただけで、異世界に落っこちてしまった。そこで何とか生きていこうと努力しても、何故か返って来るのは奇異なものを見るような眼差し。挙句の果てには悪い異世界人というレッテルを貼られ、見張られ、何だか良いように遊ばれている。それでも菊乃は我慢した。

文句を言っただって、どうにもならない事だと分かっていたから。泣いたって誰も助けしてくれない。自分で何とかするしかないのだと分かっていた。だから、できる努力を続けてきたつもりだ。今までと同じように。

抗わず、諦めて。

しかし、例え自分でどうにもできない事だと分かっていたても、諦めることの出来ない問題もある。

「どうして！やめて、駄目！」

以前にハイネスが着ていたのと同じ、白と黒の制服のようなものを着た男達が、次々に黒い豹……ハルラックの傍へ降り立つ。ばしやばしやと水しぶきが上がる中、ハルラックは大人しくしている。

ハイネスの言葉の前半部分は、何を言っているのか分からなかった。ただ拘束という単語と、それから取り囲まれていくハルラックを見れば、何が起こっているのか予想はつく。

嫌な予感に走り出そうとする菊乃の腕を、背後から誰かが掴んだ。その腕の持ち主を振り返って、凍りつく。

ハイネス・ユーゴだった。

「動くな」

鋭い眼光と、有無を言わせぬ口調に怯みそうになるが、怖気づいている場合ではない。

「その人は違う！私を助けてくれただけです！」

菊乃は必死で訴えるが、ハイネスはほんの僅かに眉を動かしたただけだった。通じていない？それとも、最初から聞く気が無いのか。彫像のように無表情を貼り付けたハイネスに歯噛みする。何を言っても、通じないような気がした。

その間にも、制服の男たちは冷静な顔でハルラツクの体を押さえ、その首に金属製の分厚い首輪のようなものはめ込んだ。がちり、とした音が無常に響く。菊乃は体を震わせた。

「やめて」

身を擦るが、ハイネスの腕は離れない。

「動くなと言っている」

決して大きな声は出していないのに、ハイネスの低い声は切れ味の良い刃物のような威力を発揮する。怖い。それでも、菊乃はハイネスに対する抵抗を止めなかった。

助けなくてはいけない。

自分を二度も助けてくれた人を、助けなくては。気持ちが悪くないように、ただ捕らえられた黒い豹だけを見つめて、己を奮い立てる。

そんな菊乃を、ハルラツクは静かに見ていた。蜂蜜を溶かしたような色合いの瞳が、ゆっくりと閉じられる。

「俺に構うな」

深く低い声音が響く。誰の言葉なのか、最初は分からなかった。再び開いた瞳が、闇夜に浮かぶ月のように輝く。豹の、ハルラツクの口が動いた。

「お前が暴れば、俺の立場も悪くなる。構わないでくれ」

それは、どんな言葉よりも、それは菊乃の心に突き刺さる。  
命の恩人の、拒絶。

指先から力が抜けていく。

指の先が冷たい、寒い。ずっと、恐れていた事が現実となって、目の前にある。自分を助けてくれた異世界人に、ずっと会いたいと思っていた。お礼を言って話をしてみたい。もしかしたら、その人なら菊乃の事を受け入れてくれるかもしれない、と。

一方で怖かった。

菊乃を助けた事で何か迷惑がかかっていて、やっぱり助けなければ良かったと後悔しているかもしれない。

もう、関わりたくない拒絶される、ことが。

「ごめんなさい」

言っ、頭を下げる。それ以上何も見ていられなくて、菊乃は頭を上げる事ができなかった。

\*\*\*\*\*

守備は上々、だったが。

新たな問題が浮上した。ユーイは渋い顔で、長椅子に足を投げ出して考え込んでいた。

菊乃は見事に囷の役目を果たしてくれた。若者を中心とする、反異世界人の過激派グループ。市街警備隊のヤツクがその一員だったというのは頭の痛い問題だ。だが、一応は片付いたと言って良い。

ただ、彼らは異世界人の誘拐については関わっていないと証言している。そちらは、そちらで心当たりがないわけではないから、調

査を続けていけば良い。

菊乃に宿る揺らぎの正体も大体分かった。

恐らく影憑きではない。

もつと清浄で、神聖なもの。精霊のようなものだろう。落ちてくる段階で、どこか別の世界を潜り抜けて引っかけてきたに違いない。菊乃の故郷である11世界にそういったものはいなかった。

その力は水を呼ぶ。

11世界の人間は戦力になるような力は持たない。だが、菊乃は。

「厄介だな」

戻って来た時の菊乃の姿を思い出して、ユーイは顔を顰めた。

茶色く薄汚れた湿った衣服、半乾きの髪はぼさぼさで、靴の片方が無くなったらしくはだしだった。白い手足にかすり傷が無数にあつて、痛々しい姿だった。

流石に罪悪感が湧いた。

事情を話して、謝罪しようと思っただものの、俯いていた顔が上がった時、ユーイは何も言えなくなった。

元々固い表情ばかりを見せる娘だった。

不安そうにしたり、何かを堪えていたり。笑ったところも、泣いたところも見つた事はない。だが、その時のように何かが抜け落ちてしまったような、空ろな顔を見せる事も無かった。眼差しから、強い意志のようなものが消えていた。

感情を閉ざした暗い瞳。

ユーイを見ているようで、どこか別のところを見ている目。

「ごめんなさい、と菊乃は謝った。

卵を割ってしまいました、と。ユーイは彼女に卵を買ってくるように言いつけていた事を、その時に初めて思い出した。

殴られるよりも、詰られるよりも、声高に非難されるよりも、余程、堪える。

いっその事、怒鳴り散らしてくれば良い。

だが、そう思うのはユーイの甘えなのだろう。溜息を吐いて、目を閉じる。そうすると、抜け殻みたいになってしまった菊乃の姿ばかりが浮かぶ。

今度こそ、本当に疑いが晴れたのだ。

菊乃の待遇は改善される。異世界人の学校に通い、今よりもずっと自由に過ごす事ができる。優しくする事も、甘やかすことも、エレミーが率先してやるだろう。

今ならば、エレミーの気持ちがいさだけ理解できるような気がした。

傷ついた小動物がいれば、いくらユーイだって放っておく事はできない。問題は、その傷をつけたのが自分だという事だった。

## 伊吹、壁を迂回する 1

もう駄目だ。

暗闇の中で何度も寝返りを打ちながら、どんなに振り払っても纏いついて来る不安に飲み込まれそうになっていた。もう駄目だ、無理だ。動くたびに鈍く脈打つ痛みもどうでもよく思える。実際、肩の方は掠っただけで大した怪我ではなかった。足の方は貫通していて、酷かったらしいが今はもう殆ど塞がっている。

こちらの医療技術は進んでいる、というか伊吹の知るものとは大分違う技術が用いられて最初は不安だったが、今のところ問題は無い。

伊吹よりも余程重傷だったりチルの方も一命を取りとめ、順調に回復していると聞いた。ただ、まだ意識が戻らないらしく、未だ見舞いにもいけていない。

起きたら、行かなくてはいけないだろう。

その事を考えると気が重い。

助けられた。まさか、あんな風に身を盾にして守ってくれるような人が、この世界にいるとは思わなかった。明るく親切にしてくれた彼女を完全に信じられず、上辺だけで接してきた今までを思い返して苦しくなる。

疑い深くて、卑怯で臆病な自分を守る価値なんてないのに。

そこまでされてもなお、伊吹はどこかで考えてしまう。

全部が何かの筋書きなのではないか、と。伊吹にリチルを、異世界人を信じさせるための。流石にその考えは酷いと自分でも呆れる。だが、



(あれは、間違いなく吹雪の声だった)

伊吹、と自分を呼ぶ男の声。混乱の最中、意識が朦朧としていたが、その声だけははつきりと記憶に残っている。幻聴だったのか、それとも本当に聞いたのか。自分でも怪しいとは思うが、可能性を捨てきれない。

あの時、あの場に吹雪がいたとしたら。  
有り得ない。

即座にその考えを否定する。吹雪は死んだ。確かに、伊吹の目の前で大きな怪物に飲み込まれていったのだ。あれで生きていられる筈が無い。

だが、ここは異世界だ。伊吹の常識は通用しないのかもしれない。例えば何度も言われていた。お兄さんの行方はまだ分かりませんが、搜索は続いています、と。もう死んだものだと思っていたし、あれでは死体も見つからないだろうと思っていたから、聞き流していた。当然、探しているのは死体だと思い込んでいた。だが違ったのだとしたら。

吹雪が生きている。

ずん、と胃が重くなる。

化物の胃の中から救出されて保護されていた、その可能性はあるのか。もしそうだったとしたら、何故知らされていないのか。いくら考えても答えは出ない。

ただ疑念が渦のように伊吹の中を回っていた。

吹雪が生きていた。

そして、伊吹が殺されかけたあの現場に、何故かいた。

確証は何処にも無い。だが、その不気味な妄想から逃れる事はできなかつた。

「相変わらず、あまり眠れていないようですね」

翌朝、部屋に様子を見に來たりザレットは、伊吹の顔を見てそう言った。労わりの欠片も無い素っ気無い口調に、1? 足りとも動かない見事な能面顔だ。

「食事の支度をします」

そう言つて、てきぱきとベッドの横に机を引き出し食事の支度を整える。

「傷はまだ痛みますか? あれから1週間も経っていますから、大分落ち着いてきた頃だと思ひますが」

言外に、落ち着いても良い頃だろ、軟弱な男めと言われている気がするの、被害妄想だろうか。

「……すみません。向こうでは、あんな風に殺されかけるような物騒な事が無かつたもので」

こちらの世界の治安の悪さを遠まわしに非難する。気を悪くするかも思つたが、リザレットは顔色一つ変えなかつた。

「では慣れてください」

「は?」

「身をもつて学習されたように、こちらの世界は必ずしも異世界人に対して安全なところではありません。我々は精一杯努力を続けていますが、未だ不安の種は多い。それでもここで生きていくしかないのであれば、貴方もそれに慣れるしか道はありません」

しかも、肯定された。

「本当は、貴方はそれほど弱くないだろう」

呆氣に取られた伊吹を見て、リザレットは薄く笑つた。その笑みは人を安堵させるような友好的なものではなくて、むしろ悪役が敵を餌に嵌めてしてやつたり、と笑っているようなものだ。

「……どういう、意味ですかね」

「態と実際よりも大げさに弱者を装っている、という意味です。言語の方も、もう殆ど理解しているのに、態と分からないふりをしているでしょう。中々堂に入った役者ぶりですが、目の動き、呼吸の仕方は誤魔化せていない」

そんなところで見破るとか、何処の武術の達人だ。恐ろしい。この期に及んで、違うともそうだとも言えず、伊吹は黙り込んだ。

「非難しているわけでは無いので、お気になさらず。私も貴方と同じようなものです」

「……は？」

「そうそう、今回の襲撃犯は無事に全員捕らえられたようです」

強引に話題を切り替えられた気がする。しかも、無視できない内容だ。犯人はどういう者達で、何故伊吹を狙ったのかは勿論知っておきたい。

そして、出来れば吹雪のことも。

「犯人は何故、俺を？」

「貴方、というよりは、異世界人を狙っているのです。反異世界人思想、異世界人を排除しようという過激な思想を持った若者たちのグループです」

「だが、外には異世界人が何人もいるんだろう？そいつらも、襲われているのか？」

「町中では、案外襲いにくいもののようなですね。人の目もあり、警備が厳しい上、中には異世界人自身が手強い場合もあります」

今回は、トリザレットは不快そうに目を細めた。

「徹底的に伏せられていた筈の貴方の出所情報が、何故か漏れていたという事実が、由々しき問題です」

「つまり」

「そう、つまり、この施設に内通者がいる可能性がある」

伊吹は頭を抱えなくなった。

横目で、用意された朝食を見やる。腹は減っているが、食べる気にはなれない。そんな心情を読み取ったのか、リザレットはしれっとした顔で告げた。

「ですから、こうして私自らわざわざ朝食の用意をしているというわけです。面倒なことこの上ありませんが仕方無い」

そうは言うが。

伊吹はリザレットの事だつて、完全に信じているわけでもない。

「イブキ。一つ忠告しておきます。ここで生きていくのなら、誰かを信じて頼るしか道は無い。一人で生きていくのは難しい、特に貴方のような異世界人は」

完全に見透かされている。

信じる、誰を？

向こうの世界にいた時ですら、友達の一人もいなかった。それなのに、こんなわけの分からない異世界で。内心、鼻で笑ってしまう。「信じたい、という気持ちはあるが」

目の動き？呼吸の仕方？そんなもの、普段どうやっていたかなど、覚えているわけがない。だから、伊吹は伊吹のまま。

「正直に言つて信じられない。色々、隠されている今の状態じゃ」

「なるほど。何か気になつている事があるか？」

駆け引きを開始する。

必要な情報を手に入れる為に。

## 伊吹、壁を迂回する 2

「奇遇ですね」

リザレットは例の、悪役染みた笑みを見せる。

「私も貴方に聞きたいことがあります」

いきなりの、反撃だった。全く、やり辛いことこの上ない女だ。顔を顰めた伊吹を無視して、リザレットは続ける。

「あの時、襲撃にあつた時に貴方の名を呼んだのは誰ですか」

その言葉に、伊吹は目を見開いた。

伊吹！と。あの声が蘇る。

あれは幻聴ではなかったのか。だとしたら、やはり。

「声は、外から聞こえたように思えます。職員の誰の者とも一致しない。ですが、貴方に外の知り合いがいる筈はありません。砂漠で保護された後、一步も外に出ていない貴方に、そんな知り合いができる筈はない。それなのに、外に貴方を知る者がいた」

リザレットの目が、じつと探るように伊吹を見つめる。

「あれは、誰ですか」

疑いを向けられているのだと、伊吹は勘付いていた。何かまずい事になりそうな予感があった。

また、あいつのせいだ。

思えばいつだって、2つ年上の兄、吹雪は伊吹の前に立ち塞がる壁だった。

幼い頃、伊吹が頭の良さで持て囃されていた時、吹雪は仲間を引き連れ『冒険』と称し町中を駆けずり回って騒ぎを起こす悪ガキだった。人様の家の柿を盗ったり、冬の川で泳いだり、夜中に家を抜け出してカブトムシを捕まえに行ったり、学校をさぼって駄菓子屋で遊んでいたりした。

あちこちで騒ぎを起こすたびに、奔走する両親。

伊吹はその度に、残された妹達の世話をするはめになった。中学生になるともつと手に負えなくなつて、喧嘩はするわ、教師と揉めるわ、深夜徘徊、無断外泊を何日も続けて、親が学校に呼び出される事も珍しく無く。

中学の時は本当に悪夢のような日々だった。

髪の毛を茶色く染めて、制服を着崩した兄の友達共に「似てねー」だの「優等生くん」だのからかわれ、更に兄に恨みを持った不良共に憂さ晴らしに殴られる始末。そのせいで、とばかりを恐れたクラスメイトが、伊吹と距離をおくようになったのだった。くそう、今思い出しても腹が立つ。

何処までも付き纏う各務吹雪の弟という鬱陶しい称号。

高校は、家から少し離れた進学校を選択した。他県という手もあったが、家から離れるのは嫌だった。あの頃はまだ、こよりがいた。

あの厄介者と、ようやく離れられたと思つたのに。

何の因果か一緒に異世界に来てしまつたが、吹雪は怪物に食われるという運の無い最期を迎えた、筈だった。

だが。

伊吹の耳の奥で、自分の名を呼んだ吹雪の声が木霊する。

「イブキ？」

「あんた達じゃないのかよ」

「何がですか」

「幻聴じゃないんなら、あれが本当に吹雪の声だつて言うなら、何であいつが生きているんだ。普通、死ぬだろう。なのに、生きているっていうなら、誰かが助けたとしか考えられない。そんな事するやつ、あんた達以外に誰がいるんだ」

「フブキ……貴方の兄の声、ですか」

リザレットは全くペースを崩さない。吹雪の生存に関わりは無いように見える。表面上は。

「フブキが生きている、となると。少しばかり厄介な問題になってきますね」

「生きてたらマズイのか？」

伊吹は大いに困るが、何故彼らまでもが問題視するのだろうか。

「その状態で生きているとなれば、奇跡です。何らかの力が働いたとしか思えません」

だとすれば、とりザレットは一度言葉を止めた。その間が怖い。一体何だと言うのだ。

「イブキ、貴方の兄は『影憑き』である可能性が高い」

「影憑き……？」

「世界を渡る段階で、世界を破壊する意思に寄生された者です。それは宿主の中でゆっくり根を張り、やがてとてつもない力を発芽させる。この世界を破壊する『敵対者』となり、混乱と破滅を呼ぶ者となる」

大層な言葉が並べられた。何だかゲームのラスボスのようだな、と伊吹は思う。正直あまりぴんとこない。

「来てください、イブキ。貴方に見せたいものがあります」

と、リザレットが言ったので、伊吹は朝食をとる機会を失うこととなった。

何故いきなり様々な情報を開示してくれる気になったのか、伊吹には分からない。何か裏があるように思いながらも、リザレットに従う。

行き先は、地下だった。

普通の壁にしか見えなかったところに、リザレットが手を当てるのと、丁度ドアの大きさに壁が薄く光り出した。

「こちらです」

「え」

戸惑っているのと強引に肩を押し込まれた。薄い緑の壁をすりりと通り抜け、暗い通路に出る。すぐ先が階段になっていて、危つく落ちそうになった。

「危っ……」

踏み止まってほっとする間もなく、更に背中を押された。

ひやりとした。リザレットが自分を殺そうとしていたのか！意外なようで、そうでもないような……。

ところで、階段を落ちる浮遊感も衝撃も何もこない。咄嗟に瞑っていた目を開けると、広い通路のようなところにいる。

「な、何なんだ一体」

いい加減、頭がおかしくなりそうだ。

「あんなに長い階段をいちいち行き来できないでしょう、普通は。空間を弄ってあるだけです。さあ、来てください」

弄ってあるだけ。もうあまり深く考えるのは止めておこう。異世界に伊吹の常識は通用しないのだ。

通路の両脇に並ぶ、いくつものドアを通り過ぎ、奥へと向う。赤いランプのついたドアの前で、リザレットは足を止めた。細い指でドアに触れると、組み木のようにドアが分解され無作為に動き始める。

止まったところで、いくつかに分かれたドアのパネルを順に触っていくリザレット。最後の一つに触れた時、ドアが横へスライドした。

外へと冷気が流れ出す。

「どうぞ」

リザレットの吐き出す息が白い。

部屋の中は、氷付けと言って良い状態になっていた。中央に大きな氷の塊があって、それが天井やら床にまで広がっている。銀の鎖に縛られて、更に何か札のようなものが取り囲むように幾重にも配置されていた。



何だ、あれ。

入り口のところから、伊吹は動く事ができなかった。

氷の中に何かいる。生き物なのだと思う。大きく広がった赤黒い塊に、ひらひらと伸びる何か……触手のようなもの。よく見れば大きな塊は頭部と胴体の2つに分かれているようだ。頭部らしき部分に、瞼の無い眼球のようなものがくっついていてる。

ひ、と息を飲んで伊吹は後ずさる。

目が動いた。

氷の中で、それは確かに伊吹達を見ている。生きているのだ。気がついた瞬間、ぞっとした。

「な、何だよこれ」

「先程話しました敵対者の成れの果てです」

その空気と同じくらい冷ややかな声で、リザレットが答える。

「最初は、普通の異世界人でしたよ、彼も」

それは、どういう事かというと、つまり。徐々に伊吹にも事態が見えてくる。

「……冗談だろ」

もしくは悪い夢。

こんな現実是有り得ない。いくら、無茶苦茶に迷惑なあのだとしても。

吹雪はいつだって、伊吹の前に立ちはだかる。壁だ。

途方も無い、壁。

全力で、逃げようと伊吹は決意した。

## 志真と波乱の幕開け 1

その1週間は、志真にとって苦しいものだった。

ラスカウルは相変わらず戻って来ない。その上、頼みの綱のウィガーまで顔を見せなくなつたのだ。殆ど外出していて、帰ってきても夜中頃。早朝には出て行ってしまつたため、志真が会いに行く事もできなかつた。

その為、モクの事も聞けず仕舞い。

怒っているための報復かと思つたが、どうも何か違つみたいだ。ウィガーはウィガーで忙しかつたらしい。何をしていたのかは知らないけど。

7日ぶりに姿を見せたウィガーを見て、納得した。

元々痩せ気味だったのが、何だかげつそりとやつれて見えた。目の下の隈も酷いし、顔つきもかなりシャープになっている。もしかしたら白髪もあるかも、と志真は何気なくウィガーの焦げ茶の髪に目をやった。

次に顔を合わせたら、説教されるだろうと覚悟していたのに、それも無かつた。若干の気まずい空気の中、志真も何を言えば良いのか分からなくなる。おかえりとか、お疲れだね、とか。軽く言つたらまた怒らせそうだし、下手にこの前はごめんなさいとか言つてしまえば、ウィガーの説教魂に火をつけてしまつかもしれない。

ここはしおらしく、黙つていよう。

志真の部屋を訪ねてきたウィガーは、数秒の沈黙の後ぼそりと告げた。

「外出禁止は今日までだ。明日からは普通の生活に戻れるぞ」

「え！」

嬉しい。

「本当？えーっと、つていう事は、伊吹って人を襲つた犯人は捕まつたんだ」

「……ああ」

良い事の筈なのに、ウィガーの表情は晴れない。それに、志真は不安になった。

「何？まだ何かあるの？あ、もしかして伊吹の怪我が悪化して……とか」

「いや。お前には関係の無い話だ。気にするな」

じゃあ、そんないかにも何かありましたみたいな顔するな！と。言いたいところをぐつと堪えた。言い方は気に入らないが、ウィガーは大変に疲れているようだし、と自分を抑える。色々と反省したところだし、それに何より今は嬉しい。

やっと明日から学校へ行ける。

これでモクに会えるのだ。

嬉しいニユースに浮かれていた為、モクがどうなったのか聞くのを忘れていたと気がついた時には、ウィガーは部屋から去っていた。  
(でも、まあ良いか)

どうせ明日学校で会えるのだから、直接モクに聞けば良いのだ。うん。その方が良い。ウィガーは意地悪だし、また何かいらぬ嫌味を言われそうだ。自分に都合の悪い事は話してくれなさそうだし。  
(モク、本当は喋れるんだよね)

まだ耳に残っている、凄く優しい、透き通るような声。シマ、とあんなに優しく呼ばれたのは初めてだ。志真の頭を撫でた手も、そつと劣るみたいなの優しいさに満ちていた。

思い出すと、何だかむずがゆいような気持ちになる。

「うっ」

何これ。

意味も無く、顔が笑ってしまう。我ながら浮かれすぎ、と思いつつも嬉しい気持ちは抑えられない。

(いや、でも仕方無いよね。何せ久しぶりの自由なんだし！)  
開き直って、笑っている事にした。

志真は、基本的にどこまでも楽天家な性格にできている。

外出禁止が解除になったので、自動的に宿屋のバイトも復活した。今まで台所限定になっていたのが、給仕の方にも入れるようになった。前は、言葉が喋れなくて嫌だったその仕事も、今は楽しくこなせる。

ラスカウルがいなくても、何とかなっていた。

「お待たせしましたー！キノコと鶏肉のやつと、それから……お粥？です」

てきぱきと料理をテーブルに並べ、空いたテーブルを片付け、新しい客を席に案内し、注文を取って厨房に伝える。会計だけは、任されないが。もう大体の事はできる。

出入り口のドアには小さな鈴がついていて、客の来訪を教えにくれるようになっていた。夜は酒も出す食事処には、宿屋の客が入ってくるドアと、外からの客が入ってくるドアの2つがあって、鈴の音色はそれぞれ違う。

しゃんしゃん、と可愛らしく響くのが宿屋側で、からから、と軽やかに響くのが外側だ。

からから、と響いた音に志真は外へ続くドアを振り返りながら元気良く声を出す。

「いらっしやいませ！」

入ってきた人物を視界に収めて、志真の笑顔は凍りついた。

何であんたがここに来るわけ。

胡乱な目付きをした小柄な美少女は、志真の天敵第三号ともいえるクラスメイトのリキキだった。濃い紫のドレス姿で、いつもながらどこかのお姫様のようなと思う。袖口や裾を飾る黒レースが、何だか妖しい雰囲気、お姫様はお姫様でも清楚な感じとは程遠い。

いかにも夜つていう感じだと、志真は思う。

陽だまりみたいなのこの宿屋の雰囲気には、似合わない。浮いている……酷く目立つ客の姿に、食事中の客たちもちらちらと視線を向けていた。

そんな中、リキキは赤く小さな唇をゆっくりと開いた。

「あなた」

そこから出たのは凍りつきそうなほど冷ややかな声だった。

「一体、何をしましたの」

赤い瞳が爛々と怒りで煌いている。

顔を突き合わせるたびに喧嘩になる彼女達であったが、今日は何かいつもと違う。本気で腹を立てているらしいリキキは、逃げ出さなくなるような迫力があつた。

しかし、リキキを怒らせるようなことをした覚えは無い。

理不尽な怒りをぶつけられるのは我慢できないし、逃げ出すなんでもっと嫌だ。だから、志真は負けじと睨み返した。いつもなら、とつくに言い返しているところだけど、ここは店の中。人目もあるし、仕事の邪魔になってもいけない。

ただでさえ、迷惑をかけているのだ。

「何か分からない。けど、話す。ここ仕事、迷惑。部屋、行く」  
リキキはじつと志真を睨んでいる。反論なし、つまり良いつて事だよ。と解釈した志真は、傍で心配そうな顔をしていたフィオーネに笑いかけた。

「ごめん、学校の人。少し、良い？」

「それは勿論。もうすぐ上がる時間だし、今日はここまでで良いんだけど。でも、シマ……」

少し言い難そうにフィオーネは声を落とした。

そつと、志真にだけ聞こえるように。

「その人と2人で大丈夫？何か、怒ってるみたいだし。心配なら兄さんでも呼ぶけど」

「大丈夫」

心配するフィオーネに、志真は無理やり笑って見せた。

血を吸われたら下僕ですのー

という、アルジャラーの言葉がぐるぐると回る。実際、この怒れる吸血鬼と2人きりで話す事に、若干の不安を感じないでもなかった。

しかし、一体何をしに来たんだろう。

志真のことがとにかく気に入らないらしくて、顔を合わせるたびに喧嘩を売ってくるリキキだったけど、流石にこんな風にわざわざ家を訪ねてきてまで文句を言いに来た事は無い。

よっぽどの事だとは思うものの。

部屋へ続く階段を上りながら、志真は首を捻った。

全く心当たりが無い。

そもそも、ここ最近はずっと外出できなかつたし、リキキに会う機会だつて無かつたのだ。

大体、どうせ明日学校に行けば会うのに。

基本的に夜間部に顔を出しているらしいリキキだったが、ここ暫く……志真にとっては迷惑な話だが、リキキは昼に学校へ来るようになっていた。

その理由だつて、志真は知らない。

別に、興味だつて無い、けど。

じりじりと、後頭部が焼けるような視線を感じる。振り返れないし、下手に喋りかけられない。何だか爆弾を連れて歩いているみたいな気分だ。

目、だけはなるべく見ないようにしよう。

下僕にされるのはごめんだ。

## 志真と波乱の幕開け 2

部屋へリキキを入れる、という事は、あの志真に似合わない夢見る乙女チックな部屋を彼女に見られる、という事でもあった。

それに気がついたのは、部屋のドアを開けるためにドアノブを握った時だ。

うわ、凄く嫌だ。絶対、馬鹿にされる。

思ったものの、後の祭りだ。どこかの開いている部屋でも借りれば良かった、と思いつつ志真はドアノブをまわした。

先に入って、部屋に入るリキキを眺める。

何を言われたって気にしないでおこう。この部屋は志真の責任では無いし、どうしようも無い事なのだ。内装なんかは目を瞑ると、条件の良すぎる物件なのだし。

何を言うかと思守っていたが、予想に反してリキキは何も言わなかった。ゆっくりと目を閉じて、僅かに顎を引いて俯く。

くる、と巻いた睫の長さに感心する。白いから、あんまり目立たないけれど。くん、と小さく尖った鼻が動く。

もしかして臭い？

変なものは置いていないし、臭くない筈だとは思うが不安になる。

「モク様の匂い」

部屋に入つての第一声に、志真は思わず口が半開きになった。

モクの、においつて。

拍子抜けしているところへ、かっとりキキが目を見開いた。険しい顔で睨まれる。悔しげに噛み締めた唇の間から、尖った牙が覗いていて怖い。

「ここへ、モク様 came たんですの？」

「な、何」



確かにモクはこの部屋に来たことがある。でもそれは、1週間以上前の話だ。匂いなんて残っている筈が無い。

あ、でも、と志真は思う。

吸血鬼だから、匂いとかにも敏感だったりするのだろうか。それともモクの匂いがきついとか。そんな覚えは無いが……、モクの匂いってどんなのだっけ、と志真が思い返していると、リキキが足を踏み鳴らした。

「来・た・ん・で・す・の？」

どうなんです、と更に詰め寄られて志真は思わず視線を泳がせた。何でこんなに追い詰められなくちゃいけないんだ。

「き、来た、でも」

別に遊びに来たわけじゃ無いし、2人きりでもなかった！と、何が言い訳みたくない言葉が浮かぶ。友達なんだし、遊びに来たって別に変な話ではないのに。

「では、やっぱり貴方が原因なのです」

怒りに満ちた低い声に、背筋が冷えた。

「なに？」

「貴方みたいな無知な女のせいで、モク様が不遇な目に遭うなんて許されません。何の力も無い役立たずの上、人に迷惑をかけるなんて本当に許しがたい愚か者ですわ！モク様の優しさに付け込んでいい気になってへらへらとだらしなく笑ってるだけで、何にもできないくせに！何にもできない、何も知らない、だからモク様は貴方に優しいんです。そうですね、それなのに勘違いしないで欲しいです！」

堰を切ったようにまくし立てられる。

口を挟む隙間も無い。いや、あったところで何を言われているのか分からないから、挟みようも無いのだが。

興奮の為か、いつもよりも早口の上、声が高くて聞き取りにくい。ラスカウルがないから、さっぱり分からないが、きつと、また酷い悪口を言われているのだろう。

気になるのは、合間に出て来るモクの名前だ。2、3回出てきたように思う。

いつもがそうであるように、今回も彼女はモク絡みで怒っているようだ。

(あ)

もしかして、部屋にモクが来たことを怒っているのか。

そうかもしれない。

(つまり、ヤキモチ……?)

リキキはモクのこと好きらしい、というのは見ていれば分かる。だから、モクと仲良くしている志真のことが気に入らないのだろう。

でも、友達……だし。

リキキが怒るようなことは何も無い、と思う。

「……………」

未だ捲くし立てているリキキの様子をぼんやりと眺める。いつもは血の気の無い頬が、怒りのためかほんのり赤く染まっている。

可愛い、よね。

性格は兎も角として、外見は人形みたいな美少女だ。

何だか胸がざわざわと落ち着かない。

モクは、どうなんだろう。

ぼん、と頭に浮かんだ疑問が離れない。いつも、逃げている感じだけど、本心ではどうなんだろうか。あんな可愛い子に好かれていたら、普通、好みじゃなくても嬉しいのでは。嬉しいとまでいかなくても、悪い気はしない、よね。

好きって言われると好きになっちゃう事もある、と友人が語っていた余計な事まで思い出してしまった。

モクもそうだったりして……。

う、わ。

いきなり胸がずしりと重くなった。もやもやする。面白くない。この感じ、覚えがある。

これって、ヤキモチだ。

梢と将太が付き合つと聞いた時にも、ちょっとだけ感じたもやもや感。今回ののはその時よりももっと重く、ずっしりくる。何故。

まさか、私つてばモクの事を

「聞いてるんです!？」

はつと、志真は我に返つた。いつの間にか、至近距離でリキキに睨みつけられている。しまった!思い切り目を見てしまった。慌てて視線を反らす。セーフ、だよね。心臓がばくばく音をたてていた。「な、なに、ごめん」

さっぱり聞いてなかったので、腹を立てているのだろう。

リキキの赤い瞳に浮かぶ怒りに、軽蔑がプラスされた。

「……呆れかえるんです。貴方、モク様のこと心配もしないなんて、無能な上に薄情ですわ。もう良いです。必要な事だけ喋りなさい。モク様に貴方が何をしたのか、ここで何があつたのか、モク様が何をしたのか。さあ、きりきり白状するのです」

「ごめん、言葉、分からない」

何を言いたいんだか、さっぱり。

いつもならば、もう少しマシだと思うけど、今は言葉に集中できない。最早リキキは虫けらを蔑むかのような目で志真を見ている。

「……帰る」

くるりと背を向けて、リキキが部屋を出て行く。

「え、ちよつと、リキキ？」

結局何しに来たの。

リキキは振り返りもせず、ただ低い声で言った。

「貴方に私の名前を呼ぶ資格なんて無いです。もう2度と、口もききたくないですの」

「え、えーっと、何か、ごめん。言葉、勉強する」

「……………」

流石に悪いと思ってかけた言葉に、リキキは無言で部屋を出て行った。本当に、言葉が分からないというのは不便だ。彼女が何を言っていたのか、物凄く気になる。モクについての事だった筈だ。

単に、モクがこの部屋へ来た事を怒っているようには見えなかった。

ラスがいれば。

消えてしまった友人の事を思って、志真は溜息を吐いた。ラスカウルは消えてしまったんだろうか。それとも単に志真から離れていっただけ？あの時モクは何をしたんだろうか。

ラスカウルのことを知っているのはモクだけだ。他に誰に聞けば良いのか、分からない。

明日、モクに会ったら相談してみよう。

モクに会えば、不安も心細さも解消されるような気がした。

やっぱり私、モクの事好き……………なのかも。

その辺りの曖昧な気持ちも、モクに会えばはっきりするだろう。

### 志真と波乱の幕開け 3

モクのことを好きなのかもしれない。

そう自覚した途端、落ち着かない気持ちになった。本日2枚目の皿を割った志真は、これでは駄目だ！と何とか気持ちを切り替えようと頑張ろうとしているのだが、中々うまくいかない。最初のあれ、小学生の時の淡い初恋が初恋で無かったなら、これが初めての恋ということになる。

気を抜くと乙女チックな方向へ思考が行ってしまうから、気が抜けない。

我に返って赤面しては、周囲の人間を困惑させている。

恥ずかしい、っていうか自分が気持ち悪い。

「シマ、やっぱり熱でもあるんじゃないの？」

「ない！平気」

ミーチェ夫人の気遣いに満ちた問いかけに、首を横に振るのは何度目だろうか。志真はほてった顔を手で仰いだ。

でもこれって本当に恋なんだろうか。

タイミングよく現れて、助けてくれたから勘違いしてしまったわけではなくて？

いくら考えても分からない。

好きか嫌いか聞かれたなら、間違いなく好きなのだけど。

モクは優しく、柔らかい空気を持っていて、物静かな青年だ。全然喋らなくて、いつもほんわりと笑顔を浮かべて皆を見守っている。穏やかな雰囲気がとても好き。

言葉が無くても、言いたい事をちゃんと分かってくれるのは、何か不思議だ。本当に謎なんだけど、モクだからなあって納得してしまふ。

未だ、一度も外されたことのない目隠しは、何のためにあるのだ

ろう。

そういえば、志真はモクの顔も知らないのだ。

「行ってきます！」

いつもより少し早い時間に、志真は学校に向った。バイトの時間はいつも通り、支度が早く終わったのだ。

学校が楽しみになるなんて、吃驚だ。

常々遠いと思っていた距離も気にならない。空は気持ちよく晴れていた。

意気揚々と学校の門をくぐり、カウンターに渋い顔で座っているジャイルさんに笑顔で挨拶する。無愛想な挨拶も懐かしい。

どうやら1番のりのようだ。

広い教室の中には誰もいない。念の為、柱の影の辺りも確認してみた。

何だ。

モクはいつも早いから、来ているかと思ったのに。

中央の円柱を囲む丸いテーブルに、ノートと辞書と絵本を置いて座る。誰か来るまで勉強でもしてるか、と。今日は何となくそんな気分にもなれた。

絵本はまだ半分くらいまでしか読んでいない。

竜とお姫様のお話。

可愛らしい絵柄の御伽噺で、児童向けの絵本とはいえ少し長めになっている。絵があるから、文字が読めなくても想像できて分かりやすい。何より面白くて、続きが気になっていた。

これは、モクが選んでくれたものだ。

以前にニトロとモクが志真の勉強のために、簡単な絵本を持ってきてくれたことがあった。この1冊は他のよりも長くて難しそうだったから、後回しにしていたのだ。しかし、読んでみると中々はまる。

魔女の呪いにかかった婚約者の王子を助ける為に、暗い森を抜け

魔女の屋敷を訪ねるお姫様。呪いを解いて欲しければ、竜の鱗を持ち帰るように言われたお姫様は、竜が住むと言われている谷へと一人で向う。

今読んでいるのは、狼に襲われたお姫様が、一匹の優しい竜に助けられたところだ。

「シマ？早いな」

いつの間にか熱中していた志真は、その声にはっと顔を上げた。

いつの間にか隣に誰がいる。面白がるような、にやりとした笑みを浮かべた三つ目の男の姿を確認して、志真は笑顔になった。

「ニトロ！おはよ」

「おう、何だ相変わらず元気そうだな」

「うん元気。ニトロは？」

「まあ、普通だな」

話しながら、教室の中を見てみると、いつの間にか他にも生徒が来ていた。いつものように、窓際で眠っている緑色の少女。その正面で、うとうととしている真っ白な髭のおじいさん。アルジャーラーとじいだ。

殆ど姿を見せないハルラックは兎も角として。

「ね、ニトロ。モク、まだ？」

いつもは早い時間に来るのに。志真が聞くと、ニトロは面喰らったような顔になった。

「お前、まさか知らないのか？」

信じられないものを見たって感じの顔を向けられている。

「なに？」

「けど、シマもその場にいたんだろ？ああ……でも、もしかするとアレか。シマには必要無いから警告もされていないって事か。となると、何か面倒な感じだな」

ぶつぶつと、思案しつつ独り言を言うニトロ。一体何なんだ。気

になる。

「一人でずるい！教えて！」

「……シマ、じゃあ今日は法律の勉強でもしとくか。説明役がいな  
いから、ちよつとばかり手古摺りそうだが。ま、何とかなるだろ。  
但し、俺の勉強料は高いぞ」

良いか？と聞かれて、志真は大きく頷いた。勉強料は高いという  
部分は、当然翻訳できていない。勉強をする、説明という部分は分  
かったから、モクのことを教えてくれるのだろうと解釈している。

だから、二トロが本棚から分厚い辞書みたいなものを持ってきた  
時には、ぎよつとした。

あれ、何でモクのこと教えてくれるのに、辞書なんかいるわけ。  
というか、良く考えたら勉強って単語が出て来るのも何か変だ。

悩みだす志真を他所に、二トロは辞書を開き薄い紙を捲っていく。  
「異世界人保護法、第32。異世界人の保有する能力、技術につい  
て。その5、代理人の庇護下にあり、未だ国民としての権利を得て  
いない者は、自発的にその能力や技術を使用することを禁止する。

特例の場合、または施行する権利を持った者からの許可があった場  
合を除き、これに反した者には然るべき処置を講じるものとする」

読み上げながら、紙にすらすらとペンを走らせる二トロ。当然志  
真には、何を言っているのか分からない。難しすぎて、何がなにや  
ら。

「これ、後で訳しとけ」

メモした紙を渡されて、志真は眉を寄せた。後で、訳せて今言  
われた？何だそれ、宿題っていうことが。

「嫌そうな顔すんな。いちいち説明してたら1日かかっちゃう。そ  
れに、俺も面倒な事はなるべくしたくない」

捨てるなよ、と言いおきしてから二トロは言った。

「モクは暫く来ない。来ないっつーか、来られない。ついでにハル  
ラックも」

来られない？



「何で」

「保護法違反で保護施設行きだ。簡単に言えば、異世界人保護施設で監禁……捕まってる状態だから」

異世界人保護施設、捕まっている、とゆっくり分かる単語を拾っていく。

違反って、確か何か悪い事をするっていう意味だった気がする。

「異世界人保護施設、捕まる？」

言葉にしてみても、志真は目を見開いた。

「捕まるって何で!？」

思わず口から出て来る日本語。

「ちよつと、えつと、今、言った、間違いない？モク、悪い事した、異世界人保護施設、捕まる」

「悪い事っつーか。でもまあ、そうだな」

頷いた！

「な、何で、嘘でしょ、モクがそんな……」

あの穏やかなモクが。それにさっきハルラックの名前も出ていたような。

何かの間違いとしか思えない。何か誤解されているとしか。一体何があつたんだろう。

「知りたかつたら、それを訳せ」

ちよん、と二ト口は手渡したメモを指で差す。

これを読めば分かるっていうのか。

それなら、頑張って読むしかない。

捕まっちゃっていつのことだろう。何だか嫌な予感がしていた。あの時、ウィガーは怖い顔をしていた。送っていくって言うだけけど、本当は違っていたのかもしれない。

(私の馬鹿！何でちゃんと話聞いとかなかったの！)  
いつも、いつも、こんな後悔ばかりしている気がした。

## 志真と波乱の幕開け 4

広いテーブルいっぱい、辞書やら紙やらを散らかして、志真は唸っていた。

何でこんなややこしい言葉ばかりなんだろう。本当に嫌になる。以前にウィガーから貰った辞書は分かりやすいけど充分ではなくて、そこに無い単語もいくつもあった。

異世界人の特有の、力？それを使ってはいけないとか、大体そんな事が書いてあるのは分かった。力って何。良く分からないが、やっぱりあの時の事のような気がする。

志真を助けてくれたのは、モクだった。

モクが何をしたのか、分からないが、もしそれが、ここに書いてあるような異世界人の力とかいう奴だったら。

私のせいだ。

志真を助ける為に、モクは。

指の先から力が抜けていく。

どうしよう。

呼吸が速くなる。心臓がぎゅっと掴まれたように苦しい。

モクが学校に来ないのも、保護施設に捕まってしまったのも、自分のせいにしか思えなかった。能天気な自分を殴りたい。どうして気がつかなかったんだろう。

昨日、リキキが言っていたのも、きっとその事だったのだ。分からなかった。

モクは志真を助けてくれたのに、志真はモクがそんな目にあっている事も知らないで、能天気にごしてきてしまった。不自由な生活に文句を言って、ラスがいなくて不安だとか、ウィガーが帰って

来ないから何も分からないだとか、言いながら。

私の馬鹿！

何でもっと真剣に考えなかったんだらう。

どうする、どうしよう？異世界人保護施設の場所は分かるし、行ってみようか。違う、それよりもウィガーにまず話を聞かないと。今度こそちゃんと、モクがどうなっているのか。

今すぐに。

志真は立ち上がった。

拍子に座っていた椅子が、がたりと音をたてる。

「おう、やっと終わったのか」

少し離れた場所で机に顔を伏せ、居眠りしていたニトロ口が顔を上げた。

「帰る」

「は？」

驚きに目を丸くしたニトロ口を置いて、志真は走り出そうとした。慌てたニトロ口が素早く志真の右手を掴む。反動でのけぞった。

「離して！」

「こら、落ち着け。大丈夫だから、な」

ニトロ口の力は強い。右手を引つ張り、志真の体を自分の正面へ向けさせると、もう片方の腕も掴まれた。動けない。

「ニトロ口！」

「お前一体、どこへ何しに行くつもりだよ」

「……ウィガーに、聞く」

「ウィガーって誰だ？ああ……お前の保護者か。馬鹿だな、お前。聞いて教えてもらえるとも思ってたのか？それに、もし聞けたとして、その後どうするんだ。何かできるのか。変えられんのか？」

「離して」

ニトロ口が何を言っているのか、何となく分かった。泣きそうになつて眉間に力を入れる。悔しかった。

この世界で、志真の知らない事は沢山ある。  
何から聞けば良いのかも分からない。何を知っておかなくてはいけないのかも。それでも何とかなるって思っていた。

駄目なんだ。

それじゃ、駄目だった。

今だってモクを助けたいと思うのに、何をすれば良いのかさっぱり分からない。

モクがした事がどういう罪になるのか。自分のせいだからと証言したら、許されないかな。どこの、誰の言えばいいのか。知りたいことも、聞きたいことも、沢山あるのに分からない。

「だから、落ち着けて」

小さい子どもにするように、頭をぼんぼんと撫でられる。

「モクなら大丈夫だ。ハルも。頼むから短気を起こすな。お前まで保護施設送りになったら、モクが悲しむだろ」

低く囁くような声は、歌のように心地よく響く。二ト口の鋭い3つの目から、目が離せなくなる。綺麗な色。緑色と、光っているみたいな黄色。

黄色？

ふと覚えた違和感も、ぼんやりとした思考に沈んでいく。

何だろう、たくさん考えなくちゃいけないのに。何も考えられない。

ウィガーに聞かなくちゃ。何を聞くんだけ。モク。

モクを……。

「心配すんな。悪いようにはしねえから」

最後の二ト口の呟きを、志真は聞く事ができなかった。

\*\*\*

胸騒ぎがした。

背筋を這う悪寒に身を震わせて、ウイガーは顔を顰めた。一体何なのだろう。最近のつきの無さは異常だ。面倒事ばかり押し付けられているような気がするの、絶対に間違いない。

長年の友人であり、腐れ縁でもあるユーイの顔が頭に浮かんだ。

あいつと縁を切るべきだろうか。

真剣に悩むところである。

菊乃は大丈夫だろうか。彼女のお陰で、ここ最近、異世界人を襲撃していたグループを捕まえる事はできた。

だが、やはり止めるべきだったのだ。

最後に見た菊乃は酷く青い顔をしていた。目を伏せじつと息を纏め、何かに怯えるように小さくなっていった。きっと、怖かったのだろう。かける言葉も見つからなくて、そのまま会わずに帰ってきた。宿屋の仕事を休業して、知らされないまま囿にされている菊乃の様子を、遠くから見守っていた。一応、何かあった時に対処できる距離にいたつもりだ。

だが、まさかヤツクに紛れ、空から来るとは。

あの日、妙に騒ぎが多かったのも、敵の策の一つだった。

空へ連れ去られてしまえば、ウイガーに追う事はできない。すぐにユーイに連絡を入れ、救援を送ってもらった。

正直、間に合わないだろうと感じていた。

多分あのハルラックという獣人がいなければ、菊乃は死んでいた筈だ。

止めるべきだった。

ユーイは、異世界人の周りで起こる事件に対しては、酷く神経質になる傾向にある。捕まえる為には手段を選ばない。その執着は、異世界人ではなく、そこに現れる者に対して向けられているものだ。ウィガーは気がついていていた。

まだ、忘れられないのか。

生きていくかどうかすら、分からないのに。

「ただいま」

裏庭で箒を手に考え込んでいたウィガーは、その声にはっと我に返った。

「……シマ」

学校から帰ってきたのか。

ウィガーが見た時は既に、志真は裏口から中へ入っていくところだった。

帰ってきたら、また一騒ぎあると思っていただけに、拍子抜けだ。モク、というあの風変わりな青年の事で。彼は今、保護施設にいる為学校に来ていない筈だ。その事を知れば、絶対に怒って暴れるだろうと覚悟していた。

まだ、知らないのか。

例えそうでも、いずれ知る。

結局厄介ごとが先延ばしにされたに過ぎないのだと、ウィガーは知っていた。

## 菊乃の一步 1

目が覚める。

部屋の中の闇は濃く、まだ夜明けまで時間がありそうだった。暫く眠れそうにも無かったが、目を閉じて眠る努力は続けてみる。少なくとも眠っている間は、嫌な事を考えなくても済むから。

菊乃を助けてくれたハルラックは、その為に異世界人対策本部ケラスに捕らえられた。罪状は、異世界人による能力の行使、だと思ふ。今菊乃が呼んでいる本にあつた異世界人に関する取り決めの中で、そんな事が書いてあつた。

こんな事になるなら、助けなくても良かったのに。

放っておいてくれれば良かったのだ。例え、無事ではすまなかつたとしても、自分のために誰かが傷つくのは嫌だ。そんなに重たいものを、菊乃は背負えない。

ハルラックはどうして、自分を助けてくれたのだろう。こうなる事を知らなかつたとは思えない。

お前が暴れば、俺の立場も悪くなる。構わないでくれ

あの言葉は、菊乃を巻き込まない為のものだったのか。それとも本当に、迷惑だと思つていたのか。分からない。ただ、あの時自分にできる事が何一つ無かつた事は、確かだった。

敵対者と呼ばれる異世界人である疑いは晴れた、と改めてユーイに宣言された。謝罪もされたがもうどうだって良い気がした。それは彼らの問題で、菊乃の問題では無い。

時期を見て、希望していた通りに学校にも通えることになった。

以前なら、もつと喜べたかもしれない。でも、今はそれすらどうでもよく思えてくる。

重症だ。

自分でも思う。やけになっている。冷静になれない。でも、それが何だつて言うんだろう。いつもいつも、周りの顔色ばかり伺って、小さくなって気を使って。本当に馬鹿みたいだ。そんな自分にうんざりする。

母と暮らしていた時もそうだった。

仕事に疲れている母に気を使い、学校では周りの友達に合わせて無理をして。それなのに気がつけばいつも、一人、輪の外にいた気がする。

寂しい。

結局、どこにいたって一人なのだ。

ノックの音が聞こえる。

重たい瞼をこじ開ける。部屋の中が明るい。いつの間にか寝ていたようだ。朝なのか、昼なのか部屋に時計が無いから判断できない。まだ眠い。

続いているノックの音を無視して、菊乃は再びベッドにもぐりこんだ。

今は誰にも会おう気になれない。

「そっとしておいてあげたいのは山々なんです」

すぐ上から声が降ってきた。吃驚して目を開けると、こちらを覗き込むジェレミーの顔が見えた。近い。反射的に体が逃げる。

「すみません」

僅かに苦笑を浮かべ、ジェレミーは申し訳無さそうに言った。

「先の事件の事でお話を伺いたいと、ハynes・ユーゴが来ていま



す。僕としては追い返したいところですが、ケラスをあんまり蔑ろにすると後で面倒なもので」

ハインス・ユーゴ。

その名に菊乃の心臓がどくりとはねる。彼がハルラックを拘束したのだ。殺されかけた事もある。助けられてもいるのだが、どちらかという悪い印象の方が強い。

顔色を悪くした菊乃を、ジェレミーは心配げに見下ろした。

「大丈夫ですか？」

菊乃は何も言えず、逃げるように視線をそらした。

会うのが怖い。ハルラックだけでなく、ユーイにもジェレミーにも会いたくなかった。

「……分かりました。体調不良と伝えて、少し時間を」

「そのままが良い」

第三者の鋭い声に、菊乃は凍りついた。ジェレミーが眉根を寄せ、振り返る。

「ハインス。何を勝手にここまで入って来ているんですか」

「出向いた方が早い」

「そういう問題ではありません。いくら権限を持っているとはいえ、それなりの配慮と心遣いは必要ですよ。特に女性相手には」

不快そうな声でジェレミーが言うが、ハインスは無視した。

「ハルラック・エジのことについて、2、3、聞きたいことがある」

ハルラック・エジ

その名を聞いて、菊乃はゆっくり顔を上げた。ジェレミーの肩越しに、ハインスと目があった。紫色の瞳を僅かに見開いて、ハインスは口を閉ざす。冴え冴えとした色の中に、困惑したような色が見えたような気がした。

微かなそれは、瞬きの間に消える。

気がつけば、何故か怒ったような顔で睨みつけられていた。

「5分待つ。着替えを済ませ降りて来い。下で待っている」

ぼんやりとした菊乃に代わり、ジェレミーが抗議の声を上げた。

「突然何を言いだすんですか」

「本部に連れて行く。そこで正式な取調べを行う」

「馬鹿なことを。見ての通り、キクノの体調は良くありません。大  
体、本部に連れて行く必要など無いでしょう」

「……こちらが、大きく譲歩していることを忘れていないか」

ジェレミーはその言葉を聞くと、不快そうに片目を細めた。

「本来なら、今すぐにでもこれの身柄を引き取ることも可能だ」

2人が何を言い合っているのか、菊乃には分からなかった。どう  
でも良い。そう思っているから、言葉が頭に入っていない。

暫くして、ジェレミーが折れた。日が暮れる前には必ず無事に帰  
すことを条件に、菊乃はハynesに本部へ連れて行かれる事となっ  
た。

何故そうなったのかわからない。だが菊乃はもう疑問を持つこと  
をやめていた。どうせ考えてもわからない。聞いたところで答えは  
得られないだろう。

ハynesについて、ただその背中を追うことだけを考えて歩いた。  
だから、どれくらい歩いたのかもわからない。どんな景色を通って  
きたのかも、まるで覚えていなかった。もしもここで置いていかれ  
たら、菊乃は自力で帰れないだろう。

帰る？

どこへ。

ユーイの屋敷は、菊乃にとって帰る場所なのだろうか。多分、違  
うと思う。この世界に、帰る場所などどこにも無いのだ。

おかえり

そう言って、暖かく迎えてくれる唯一の存在だった母親も、菊乃  
事を忘れてしまったのなら、もう本当にどこにも無い。

じやり、と足が砂に沈む。白い砂に足を取られて、転びそうになった。潮の香りがする。顔を上げると、青い色が視界いっぱい広がった。

海だ。

足を止めた菊乃の前に、ハイネスが立つ。背の高いハイネスの影に、菊乃はすっぽり隠れてしまう。

「溜め込むな」

見下ろしてくる紫の瞳は、静かだった。怒りも憎しみも、今は無い。

「吐き出せ」

何を。

「怒りや悲しみを、何故耐える。外に出せ。そうしなければ、お前は壊れる」

ゆつくりと、菊乃は瞬いた。分からない。ハイネスは何を言っているのだろう。それに、何故今、海にいるのかも。ケラスへ行くのではなかったか。

ぼんやりと見上げる菊乃の頬に、ハイネスが右手を添えた。無意識に、びくりと肩が揺れる。だが、ハイネスの手は考えられないほど暖かく、優しく、それ以上逃げる事ができない。

「お前は二度と、帰ることはできない」

暖かい手とは反対に、ハイネスの言葉は冷たかった。不意に呼吸が苦しくなる。

「どこにも、行けない。世界でたった一人取り残されている」

胸が痛い。

……そんな事、言われなくても知っている！

耳を塞ごうとした手を掴まれる。

「たった一人の母親は、お前の存在すら忘れて幸福に暮らしている。誰もお前を覚えていない。助けはこない」

「やめて」

「お前はたった一人でここにいる」

「知ってる！何でそんなこと、言っの！分かってる。嫌いだからって、酷い！」

掴まれた手を力任せに引っ張ると、意外なほどあっさり離された。高ぶった感情のまま、手が動く。波の音にまぎれて、皮膚を打つ短い音が響いた。

## 菊乃の一步 2

ばし、という高い音に菊乃ははっとした。

軽く痺れる右手を見下ろし、次に無表情に佇む男を見上げる。褐色の肌のため分かりにくいだが、ほんの少し左の頬が赤くなっている、ような気がした。

叩いた？今の私？

他に誰もいない。菊乃はうろたえた。

「あ、あの、ごめんなさい……私」

「……それで、終わりか？」

「え？」

土下座でもした方がよいのだろうか。

「俺はお前に刃を向けたことがある。恨まれても仕方は無い」

「恨み、は無いです。ハイネスさんは、仕事しただけ」

「仕事でなら殺されても良いのか、お前は」

そんな筈が無い。意地悪な言葉に、菊乃は言葉に詰まった。さっきから、何でそんな事を言われなくちゃならないんだろう。少し、腹がたつてくる。

「お前の命は軽い」

「分かっている、そんなの、わざわざ言わなくていい、意地悪！」

「軽くしているのはお前だ。弱さを理由に、逃げている。周りから気に入られるように、不満を押し殺して流され続ける」

だって、そんなの。

掴まれていた腕が離された。流れるような動きで、ハイネスは腰にぶら下げていた剣を抜く。白い刀身が陽によって眩しく光った。

「ここで俺がお前を殺しても、文句は無いな」

本気、なのか。つい、といつかのように刃先が菊乃の喉へと向けられる。逃げなきゃ、と思うのに足が縫いとめられたように動かない。

「どうして」

「……理由が必要か？理由があるなら、殺されても良いのか」

「違う」

「なら、どうして逃げない」

だって、逃げられるわけがない。戦う力なんて持っていない。奇跡的に逃げたって、どこへも行く場所なんか無いのに。

「哀れみを誘って、誰かの庇護を期待するのは止める。目障りだ」

は、と息が詰まった。顔に血が上り、菊乃は目の前の刃を忘れた。しゃがみ、砂を引つつかむとハインスに向ってぶつけていた。

「貴方になんて分からない！」  
分かるわけない。

「外国だつて行ったこと無かったのに、突然異世界だとか意味が分からないし！でもしょうがないじゃない、私だつて来たくて来たんじゃないよ！悪い異世界人だとか、やっぱり違うとか、何なのそれ！みんな勝手な事ばかり言っつて！どうしたら良いのか全然分からない」

そんな大声を上げたのは、人生で始めてかもしれない。喉が痛い。全身が痺れるように熱かった。力が抜けて、へたり込む。

「寂しい。……家に、帰りたいよ」

お母さんに会いたい。

あんなに居心地の悪かった、新しい家族のところに帰りたくて仕方が無かった。どうしてもっと馴染もうとしなかったのだろう。自分が邪魔者だと勝手に思い込んで、殻に閉じこもっていた。傷つくのが怖くて貼っていた予防線。

ああ、そっか。

今も同じなんだ。どうせ、って考えていた。世界が違って、価値

観も違う。自分の意見なんて受け入れられるわけが無いと、最初から諦めていた。文句や我侭の多い厄介な人間だっと思われることが怖くて、ずっと我慢してきた。

だって、斬り捨てられても行くところなんてない。

ハインスの言う通りだ。

心のどこかで、誰かの庇護を求めていた。嫌われたくない。だから他人の言葉に容易く折れる。折角友達になれるかもしれない。だからキリアンを諦め、捕まるハルラックをただ見ていることしかできなかった。

どうすれば良かったのだろう。

いつの間にか、ハインスは剣を収めていた。

座り込む菊乃を見下ろす顔は、相変わらず無表情だ。彼は一体何なのだろう。ジェレミーが言っていたことを思い出す。異世界人対策本部ケラスの治安維持部隊の特務隊員、異世界人を憎んでいる男。それなのに、どうしてだろう。

もう怖くない。

目にかかる白金の髪。その下に覗く、日が落ちた直後の空のような紫の瞳。肩に菊乃がぶつけた砂が残っている。

「他に言いたい事はないのか」  
どうして。

疑問は尽きない。頬を叩き、砂までかけてしまったのに、怒った様子は無い。静かな声が優しくすら感じられて、戸惑ってしまう。

ケラスで取り調べがある筈なのに、こんなところで時間を潰していても良いのだろうか。

酷い事を言われた。

何故あんな事を言ったのだろう。態と怒らせるような言い方をして。そういえば、と思い出す。溜め込むな、吐き出せ、そう言われたよつな気がする。

怒りや悲しみを、何故耐える。外に出せ。そうしなければ、お前は壊れる

思い出したハイネスの言葉に、菊乃は目を見開いた。もしかして心配されていた？まじまじと、その無駄の無い彫刻のような顔を見つめる。ふ、とハイネスが眉を顰めた。

「何だ」

いかにも機嫌の悪そうな声に、菊乃は反射的に首を横に振った。

「何でも、無いです」

すると、ますます視線が凍る。

「言え。溜めるなど言った筈だ」

「……あの、もしかして、私を心配して」

言い難い。何だか自意識過剰な気がして、恥ずかしくなる。ハイネスは目を細めた。

「代わりだ」

「……代わり？」

「以前にできずにいたことを、今ここでしただけだ」

誰かの代わり、という事だろうか。

「何かあれば、俺はお前を殺す。それを実行するのはこの世界や俺の理屈だ。それに、お前が納得する必要は無い」

菊乃に、というよりは、他の誰かに向かって言っているように感じられた。

「諦めず、抗え。それくらいの権利は、誰にでもある」

無駄だって分かっているも？それは、とても苦しくて、怖いことだ。

助けるとも、力になるとも言っていない。優しくない突き放した言葉。だが、菊乃の存在を認め、尊重してくれる言葉にも感じられた。

不思議だ。



「立て」

暫くの沈黙の後、ハイネスはいつもの無表情で告げた。

「時間を浪費した。本部へ戻り、取調べに入る」

砂に手を付き立ち上がる。菊乃が立ち上がったのを確認して、ハイネスは歩き始めた。何も言わずそれを追いかける。白い砂浜がきらきらと、眩しい。振り返った海は青く、深く。

綺麗。

その景色の美しさに、心の中に力が沸いてくるような気がした。頑張れる気がした。

まだ、あるのかな。

菊乃は考える。目の前の問題と真剣に向き合って、変えたいと思うことは何で、どうすれば良いのかを。

一番に最初に浮かぶのは、やはりハルラックのことだ。

自分を助ける為に捕まってしまったのだから、やはり見過ごす事はできない。迷惑だと言われても。勝手に助けておいて……いや、勿論助けてくれたのには感謝している。感謝しているから余計に。うまくやらないといけない。

本当にハルラックの立場が悪くならないように。その為にはまず、現状を知る必要がある。どこでどういう風な扱いを受けているのか。罪状はどんな感じになっているのか。法律の事もきちんと把握して先を歩くハイネスの背中を見失わないようにしながらも、菊乃は懸命に考えていた。

その様子を見られていることにも気がつかないほど真剣に。

後ろを歩く、小柄な異世界人を時折振り返りながら、ハイネスは進む。少女の白い顔に僅かに血の気が戻り、目には意志が宿っていた。

彼には関係のない娘だ。

むしろ、異世界人だというだけで、嫌悪の対象になっても良い。

だが、死人のような顔をした娘を見れば、放っておけなかった。

あの時、自分が気をつけておけば。その後悔は根深い。失敗を未だに取り戻せないでいる。出来た歪は、じわじわと真綿で首を絞められるように、いずれはハイネスを破滅させるだろう。

先は見えている。

だが、どうしようも無かった。

全ては、異世界人がいなければ始まらなかった話だ。

### 菊乃の一步 3

異世界人対策本部ケラスは、海とは離れた町中であつた。

黒っぽい材質の外壁、頑強そうな上存在感のある建物だつた。真ん中がドームのように丸く、左右に長方形が伸びたような形で、窓を見るにドーム部分は3階建て、長方形部分は2階建てのようだ。

広い敷地の真ん中に建物だけが建っており、他には何も無い。赤茶けた土があるだけで、植木や庭石など、目で愉しむようなものは何もなかった。

「何も無い、ですね」

思わず出た言葉に対して、ハイネスはちらりと視線を寄越した。

「侵入者を防ぐ為だ」

思いも付かないような物騒な理由だつた。障害物が無いから、さぞかし見つけやすいだろう。遠くまで見渡して、菊乃は納得した。ちらほらと、人が歩いているのが良く見える。一定区間を行つては戻り、行つては戻り。あれはきつと、見張りの人だ。

何だかどこかの軍施設みたいだ。

白いタイルが張られた道を通り、建物に辿り着く。黒光りする大きな真四角の前にハイネスは立つた。一体入り口はどこなんだろう。気になりつつ大人しくしていると、ハイネスはそこで壁に凭れた。

「尋問を開始する」

「え」

思わず口が開いてしまった。ここで？外なのに。

「施設内に一般人を入れるには面倒な手続きがある」

「……何で、ここに来たんですか」

「施設で取り調べると口にしたからだ」

確かにジェレミーにそう言って出てきたのだ。だからって。

「ここも施設の一部だ。問題は無い」

そうだろうか。何か違うような。これを知ったら、ジェレミーはまた怒りそうな気がした。内緒にしておいてあげようと、菊乃は思う。

「ハルラック・エジとはどういう関係だ」

「知らない、人です。この世界に来て、1番に助けてくれた人。後は、あの、この間また助けてくれたのが、2番目」

「その2度以外で顔を合わせた事はあるか」

「無い、です」

ずっと見張っていたはずだから、知っている筈なのに、何故わざわざ確かめるのだろう。

「会う以外の、接触の機会を持った事は？」

首を傾けた菊乃を見下ろして、ハイネスは言葉を重ねる。

「手紙、第三者を通して、又は、声だけを聞いた」

「……無い、です」

声だけって一体何だろう。携帯電話のようなものがあるのだろうか。それにしても、この質問の意図は何だろう。

「誤魔化してはいないか」

じつと、突き刺さるような鋭い視線を向けられる。その目は少し怖い、菊乃はしっぴかり見返した。後ろ暗いところなんて、何も無い。怖気づく必要は無いのだ。

例え、信じてもらえなくても。

「無いです」

「……では、あの時の誘拐された際、何か他に思い出したこと、気になる点はないか」

事件の後、菊乃は取調べを受けている。色々話している筈だが、どんなことを話したのかはあまり覚えていなかった。ハルラックが助けてくれ、その事だけは伝えた筈だ。

突然ジバに網で引き上げられて、その後も散々な目にあった。

異世界人だからという理由で殺されそうになって、そこをハルラ

ツクに助けられた。だがその彼も良く分からない光線によって怪我を負い……。

「あ」

「何だ」

「光る線みたいなのが、森のほうから。でも、途中から、無かったです」

「何でだろう。ずっと、不思議だったのだ。しかしハイネスは興味を惹かれなかったようだ。」

「……その事は良い。他には」

「そう言われても。懸命にあの日の記憶を辿る。ああ、そういえばもう一つ不思議な事があった。」

「何で、あの場所、突然あんな湖になったんでしょうか」

「物凄い謎である。しかしハイネスは、眉間に皺を寄せ溜息をはいた。」

「それもいい」

「どうして」

「あれはどうでも良いで済まされるレベルとは思えない。それともこの世界では、乾いたところに突然湖が出来る事は、珍しく無い自然現象なのだろうか。だったら、この国で家を建てるのは大変そうだ。」

「原因ははっきりしている」

「何ですか？」

「何故かうんざりしたような気配を感じる。顔は殆ど無表情のままだが。」

「気にするな。その内に分かる」

「どうして今では駄目なのだろう。その問いには答えてくれそうになかった。」

「じゃあ、次の質問です。ハルラックさんは、何の罪を疑われているのですか？」

「……何故お前が質問する。尋問しているのはこちらだ」

「言いたい事があるなら、言えと」

「言うのは自由だ。それに対して答える義務は無い」  
冷やかな声でハイネスは言った。

やっぱり少し意地悪だ。

外、ということもあって、いまひとつ緊張感に欠ける。今や、菊乃はすっかりハイネスの存在に慣れていた。怖いけど、何かそれだけじゃないような。

不思議な人だ。

ここにわざわざ来た意味があるとは思えない。だとしたら菊乃を連れ出したのは、ハイネスの心遣いなのだろう。屋敷を出た時よりずっと、心の中がすっきりしていた。

何でだろう。

前にいるハイネスの顔を見つめると、不意にその顔が強張った。

「ハイネちゃん、見つけ」

「!?!」

急に割り込んできた女性の声に、菊乃はびくつと肩を揺らした。ハイネスにつられて上を見ると、斜め上の窓が開かれていた。そこから身乗り出すようにして、女性が大きく手を振っている。

「はい、元氣ー？職場に女を連れ込むなんて、クールなふりしてやるじゃない」

小さな顔に似合わぬ大きな丸眼鏡をかけた、垂れ目の女性だ。長い茶色の髪を、無造作に頭に巻きつけるようにしてアップにしている。

「でもハイネちゃんがそんな子だったなんて、ちょっとショックー」  
「いい加減に黙れ」

「もう、ちょっとした冗談でしょー、そんな怒らないで。その子、

例の異世界人でしょ。症例38に該当すると思われる主導型融合タイプ」

「ジナス」

「やーね、名前で、ジャンナって呼んでよ、私と貴方の仲じゃない。っていうかね、折角好い男なんだし、怖い顔もしないでねー」

低い声に怯えたのは、菊乃だけだった。当の本人は離れた場所にいるからなのか、ごめーんと軽く謝りながら身をくねらせている。

「いい加減に黙れ」

「じゃあ、そつちの子と直接話そー。言葉大丈夫？症例38ちゃん、症例38ちゃんというのは、どうも菊乃の事らしい。何だろっ、その名前は。戸惑いながらも、菊乃は頷いた。

「あら、素直で可愛い感じの子ねー。扱い楽そうなのも花丸だわー。ちよつと検査と実験に協力してくれない？良いでしょー？ね？」

検査、実験？

にこにこ愛想の良い笑顔だが、不穏な言葉が口から飛び出している気がする。

「相手にするな」

ハインスが菊乃の腕を掴んだ。

「帰るぞ」

「え、あの、取調べは」

「もう良い」

あんなので？戸惑いながらもついていく菊乃の足は、次の言葉で止まった。

「ハルラック・エジを助けたくない？」

猫なで声の、甘い囁き。

「協力してくれるなら、何とかしてあげるけど？どうするー？」

悪魔は願いを叶える代償に、とんでもない代価を要求する。けれど、その囁きは魅力的で抗える者は少ない。

「無視しろ」

「ちよつとハイネちゃん邪魔しないでよー。大体、敵対者じゃないって判明して、能力持ちならうちの管轄でしょー。何でさっさと引き取ってこないのよー」

眼鏡の女性の声を背中に聞きながら、ハイネスに引きずられるようにして施設を後にする。ハルラックを助けるといふ言葉に後ろ髪がひかれる。彼女の話をもう少し聞きたかったが、足を止める事をハイネスは許さなかった。

抵抗をしなかったのは、菊乃を気遣つての行為のように思えたからだ。

ハルラックを助ける為なら、自分はどうなっても良い。

ほんの少し前まではそう思っていた。でも、今は少し違う。自分の身を犠牲にしても、ハルラックが嫌な思いをするような気がした。それではきつと、意味が無い。

探そう。

きつと、何か道がある筈だ。



## 伊吹、葛藤する

さて、異世界なんていう夢物語のような人生を歩むはめになった伊吹だったが、分かっている事が一つある。それは。

俺に勇者とかそういうのは無理。

ということだ。

単に落ちてきただけの普通の人間で、特殊な力も無ければ、特別な武器も無い。化物相手に戦う自信は皆無だ。例えば力や武器があったとしても、あんなのと戦うのはごめんだ。ゲームならばともかく、人生にリセットボタンは存在しない、とか誰の言葉か知らないが真理だ。

死んだら終わり、なのである。

だから伊吹は恐れるのであって、恐怖のあまり寝込んだりもする。今の伊吹の目標は、目指せこの国脱出だ。というか、あんな危ないものを何でこの施設で保管しているんだ。

文句を言った伊吹に対して、リザレットは涼しい顔で返した。

嚴重に対処し無力化してありますので、ご心配には及びません。未知なる敵の正体を知るための貴重な研究材料です。

有り得ない。いや、気持ちには分かるが、そういうのは大抵悪夢再びみたいな事態になってしまっのが、ホラー映画の決まりごと。誰かのうっかりミス、もしくは事態を軽く見ている人間の余計なちよっかいで。

しかも最悪なことに、伊吹の兄である厄介な男が生きていて、ラスボス化するかもしれないらしいのだ。

死ぬ。

世界が変わっても、相変わらず伊吹を厄介なことに巻き込むところだけは変わらないらしい。「冗談じゃない。もう、本当に色々と限界がきていた。」

「イブキ、大丈夫？」

椅子の上で伊吹ははっと我に返った。

「ああ、えっと。大丈夫……」

一瞬ここが何処だったか分からなくて、辺りを見渡しながら伊吹は答えた。

白い壁に囲まれた部屋。ベッドの上で身を起こし、心配そうに固まった伊吹を見つめるリチル。髪を下ろし、寝間着らしい水色の柔らかなネグリジエみたいなのを着た彼女は、いつもよりも幼く見えた。

ここはリチルの病室だ。

面会できるまでに回復したと聞いて、見舞いに来た。ベッドの脇のサイドテーブルの上にある黄色と赤の花は、シエンゾから譲りうけたもので、リチルはとても喜んだ。

「リチルこそ、怪我は」

「もう平気……とまでは流石にいかないけど、大丈夫よ。最近は、退屈で仕方がないくらい」

冗談っぽく笑いながら、リチルは肩を竦めた。あんな事があったのに、明るく振舞えるリチルには驚く。ここへ来る事を躊躇った自分が、後ろめたく思える。

伊吹を庇つての怪我だ。

感謝してもしきれない。だが、その借りを作ってしまったような状態が、まず嫌だった。傷や傷害が残ったら、後で恨まれるかもしれない。

そんな暗い予想すら立てていた。

「……ごめん」

言わずにはいられなかった。リチルはきよとんとした顔になった後、笑う。

「イブキのせいではないわ。だから、気にしないで」  
何でそんな風に笑えるんだ。

伊吹には分からない。

「謝るのは私たちの方。もう少し注意するべきだった。貴方を危険な目に遭わせてしまったのは、私たちの責任よ。でも、心配しないで。もう二度とあんな事が起こらないように、皆頑張っているから」  
心から言ってくれているのは分かる。だが、そんなもの気休めの言葉に過ぎない。

「元気出してね、イブキ」

笑い返そうとして、失敗する。この状況で笑える筈が無かった。外には異世界人を疎み排除したいと考える人間がいて、中にはあの化物がいる。何とかして帰る事はできないのだろうか。

無理だと説明されているが、まだ方法が見つかっていないだけで、何かあるんじゃないのか。来て、帰れないというのは納得できない。

結局、再び考え込んでしまい、リチルに心配させる事になった。見舞いに来たのにも関わらず、逆に「元気出して」と励まされながら病室を後にした。

あいつは、吹雪は今どこにいるのだろうか。

何故あの状況で生き延びる事が出来たんだ。いくら丈夫だからといても限度がある。やっぱり彼が生きているとは思えない。

時間が経つにつれ、はつきりと耳に残っていた吹雪の声も、本当に聞いたのか自信が無くなってくるほど曖昧になってくる。誰かの声を聞き間違えた。あるいは、幻聴？第三者の証言もあるが、何か別の単語を誤認した可能性だって否定はできない。むしろ、そうで

あってくれ。

しかし、伊吹はどこかで確信していた。

吹雪は間違いなく生きている。そして、いつか自分の前に現れるだろう、と。

異世界人を、この国が保護する理由のひとつは、彼らの言う敵対者の存在だ。落ちてくる異世界人に紛れ込みやってくる、侵略者。

完全に寄生した体に馴染むまでには10ヶ月から1年ほどかかるという事で、その間に対処する必要があるらしい。意識混濁は、3ヶ月頃から始まるというから、吹雪がそうならそろそろだろう。

まだ時間はある。

伊吹にその事情が伝えられたのは、吹雪を良く知るたった一人の身内だからだ。

協力はする、勿論。

躊躇いを覚える必要なんか無い筈だ。吹雪は運が悪かった。もうどうしようもない。少なくとも伊吹には何もできない。

喧嘩しないで、仲良くして

幼い頃から反りが合わず、喧嘩ばかりしていた2人の間で、いつも泣きそうな顔で怒っていた少女の声が蘇る。

子どもの頃に病気で死んでしまった、妹のこよりだ。

記憶の中で薄れていく、成長しない子供の姿。彼女の姿はいつだって、伊吹の弱さを責めている。

見捨てないであげて、家族でしょう

吹雪が敵対者だったとして、ここで捕まえた後どうなるのか、伊吹は詳しく聞いていない。これからも、聞く必要は無い。聞かなくても、大体は想像がついていた。

俺は知らない、何も知らなかった。  
だから、吹雪を。

伊吹が知っている吹雪の情報は全て話した。兄弟とはいえ、不仲だったから知らないことも多い。自分の目を通した兄は、暴力的で短絡、どうしようも無い男だったが、友人や仲間は多かった。

伊吹とは正反対に、社交的。

家に友人を呼ぶ事も多くて、それが伊吹は嫌だった。吹雪の友人達は、それこそ別世界の人種だった。煩いし馴れ馴れしく、揃って粗野で。オタクだの優等生だの散々からかわれた。

類は友を呼ぶ、という諺は正しいようだ。

どこに行っても、変わらない。

伊吹はベッドに寝転がると、昨夜のリザレットとのやりとりを思い返した。

「各務吹雪、26歳。身長183cm、推定体重71kg。性別男性。健康体。異世界観測地より、喪失の直前映像記録から映像を作成」

掌サイズの薄い板の上に、見知った男の姿が登場する。ミニサイズだが、良く出来ている。

「現在この映像を元に行方を捜していますが、未だ目撃証言も得られていません」

淡々とリザレットが報告した。

「おそらく、協力者がいるのでしょうか」

伊吹と違ってきちんと保護されなかったにも関わらず、吹雪は誰かと共にいる。危険を知っているのか、いないのか。少なくとも見つかからないように気遣っている何者かがいるのだ。

「何だよそれ」

暗い部屋で、呻く。

世界が変わっても、変わらない。ただ一つ、変わったのは吹雪が  
人類の敵という、笑えるような立場にいること。

間違いの無い正義が、伊吹の側にあるのだ。

志真は嘘が苦手である。

いつも挙動が不審になったり、うつかり余計な事を言ったりして、大抵ばれる。だからなるべく顔を合わせないようにし、口数を減らし、常に違う事を考えているようにした。

仕事中は目の前の仕事の事だけに専念する。

おかげで皆に褒められて、豪華なおやつをもらえたりした。

真剣に勉強すると宣言して、部屋に閉じこもる。

おかげで言葉も大分上達した！多分。

しかし、ウイガー。肝心の時にはいなくせに、会いたくない時に限って現れるのは、何なのだろうか。

部屋の中で志真は煩悶する。ドアの外ではウイガーが待っている。着替えているから！ととりあえず待たせてしまったのだが。

落ち着け！

大丈夫、別に何も慌てることない。今のところ、へまはしてないし、普段どおりに話せばいいだけだ。そうそう、普段通りに……っというか、普段ってどうやって喋ってたっけ？顔は、笑ってた？しかめっ面？さっぱり分からないぞ。

志真は混乱の真っ只中にいた。考えれば考えるほど分からなくなる。普通って何。

あんまり待たせると、それこそ不審に思われるかもしれない。

いいや、もう、何とかなる！志真は思い切ってドアを開けた。相変わらず不景気な顔をしたウイガーが、立っていた。

(えっと……)

あんまり愛想の良い対応はしていない筈だ。

「何か用？」

こんな、感じ？顔の筋肉が動かないように力を入れているため、必要以上にしかめっ面になっている。ウィガールのこげ茶の瞳が、志真を見下ろす。何だか怪訝な顔をされている。

「何かあったのか？」

「え!？」

思わず大きな声になってしまった。

「なに、べ、別に何も無いけど」

その上台詞をかんでしまう。ウィガールの不審そうな目付きが痛い。「本当だろうな？」

「いや、本当に別に普通だし。言いがかりつけるのやめてよ。っていつかなんで急にそんな事聞くの？わざわざ、部屋に来てまで聞く事じゃないし、吃驚するよ。あ、何か急ぎの用が別でもある？」

「いや……」

「じゃ、もう良い？勉強やってるから、さ!」

おやすみー、とひらひら手を振って。ばたんと、ドアを閉める。

セーフ。

やった、自然に誤魔化せた。

「お前、何か企んでないか」

うおっ、と変な声が出た。油断大敵だ。敵はまだドアの向こうにいる。ピンチはまだ去っていなかった。

「な、何かって何」

「……俺が知るか。だが、お前。俺に……」

「何？」

「……いや、何でもない」

何だそれは。意味ありげに言葉を切らないで欲しい。言いかけたら最後まで言ってくれないと、気になるじゃないか。しかし、今は下手に引き止めるべきじゃない。ウィガールに……いや、誰にも知られてはいけないのだ。



邪魔したな、そう言って、ウイガーが去っていく。  
遠ざかる足音を確認しながら、志真は大きく息を吐き出した。ほんと、焦った。

誤魔化せたようで良かったが、何かウイガーの様子も変だった気がする。いつもなら、もつとしつこく問い詰めてくる筈だ。口調もそんなにきつくなかったし。

ちょっと気になったが、まあ良い。

今はウイガーを気にしている時ではない。早く支度を済ませて、明日に備えて早めに寝なければならなかった。

明日、志真は保護施設に潜り込む計画を立てていた。どういう方法も思いつかず、考え続けて、3日が過ぎた。二ト口から聞いた話だと、モクとハルラックが捕らえられている場所は、志真が暮らしていた保護施設とは少し違うところだという。狭い部屋で、ほぼ軟禁状態。退屈で、不自由な生活を強いられる。

まるで罪人扱いだ。

モクに対するその扱いは、納得できない。何にも悪いことなんかしていないのに。

どこに文句を言えば良いのか分からなかった。二ト口に聞いてみたが、無駄だと言われた。

「モクは要注意人物なんだ」

そう言った時の二ト口の笑みは、悪巧みをする悪役のようだった。あの穏やかで優しいモクなんかよりもずっと、こつちを注意しておいた方が良いんじゃないかと志真は思う。

とにかく、どこに訴えても無駄だというのが二ト口の意見。一番いいのは、大人しくしていること。もどかしかった。いつ出してくれるかも分からないのに、ただ待っているだけなんてできない。

そもそも、志真のせいなのだ。

「いつ、出る？」

「さあな。短くて1週間、長引けば一ヶ月、二ヶ月はかかるかもないっかげつ……一ヶ月！？」

「長い！」

「俺に怒っても仕方無えだろ。大体、どんくらいになるかも、ただの予想で」

「誰に、聞くといい？」

「誰も教えてはくれねえつて。そういうのは、伏せられる情報……秘密なんだ」

「何で!？」

「だから俺に怒るなつて」

「ますますもやもやした気持ちになる。」

「モクに会う、無理？」

「面会とかできないのだろうか。刑事ドラマとかでは、そういう場面があったような。せめて会って話ができれば、と思ったのだが。」

「無理だろうな。異世界人じゃ、まず許可は出ねー」

「異世界人だから？」

「何だそれ、怒りを通り過ぎて虚しい気持ちになってきた。扱い悪すぎだ。本当にモクは大丈夫なんだろうか。酷い目にあつてたりしたら。」

「暗い気持ちになった志真を見下ろして、二ト口は言った。」

「じゃあ、差し入れでも持って忍び込むか」  
「忍び込む？」

「志真は戸惑った。ばれたら只ではすまないだろう。保護施設というとぴんとこないが、警察みたいな役割も持っている場所だ。そこへ忍び込むとか、どう考えてもやばい気がする。」

「危ない、見つかる、モクも」

そのせいで、モクの立場がますます悪くなったりしたら、嫌だ。

「そうそう。分かっているじゃねーか。悩んでもしょうがねーだろ、俺達に出来る事なんて何も無えよ」

「でも」

「本当に役立たずの虫けらですわね」

突然口を挟んできたのは、リキキだった。

「モク様に迷惑をかけておいて、自分は何もしないなんて、恩知らずも良いとこです。自分の身が大事なら、お家で良い子にしているといいですわ。私はモク様の為なら、どんなことでもやる覚悟してるのです」

割り込んできたリキキの挑発に、志真は。

「私だつて!」

と、対抗した。

「口先だけなら、何とでも言えます」

ふん、と馬鹿にしたように鼻を鳴らされ、かなりかちんときた。

志真だつて、別に自分の身が可愛くてしり込みしていたわけじゃない。いや、ちょっとはそういう気持ちもあるが、一番はモクや他の人間に迷惑をかけないかという事だった。

変な事考えるなよ、と二ト口には釘を刺されていたが、志真はもう決めていた。

誰も巻き込まないで、一人で……出ければ誤魔化せそうな感じで会う、と。

モクの事があってから、もっと慎重に堅実になろうと決めていた。だが、既に大きく道を踏み出し始めている気がする。リキキのせいで。

あそこでリキキが出てこなかったら、志真は覚悟を決められただ

ろうか。

(つていか、リキキ、いつからいたんだろ)

急に出てきたような気がする。教室には二トロと、じい、アルジヤラーしかいなかった。ああもタイミング良く登場されると、どこかに隠れていたのではと怪しんでしまう。

あの教室、人が隠れられそうなところって無いけど。  
謎だ。

まあ、リキキの行動の謎なんて今は良い。問題は明日のこと。既に後には引けなくなっている。覚悟を決めてやるしかないのだ。

志真が捕まってしまったら、モクにも迷惑がかかる。だから、失敗は許されない。

「行つてきます！」

いつもよりも早い時間に、志真は宿屋を飛び出した。調理場で働く仲間たちに声をかけ、裏手側から外に出る。今日は早いからね、とか、気をつけて行けよなんて声が聞こえたが、振り返って答える余裕は無い。

今日する事を考えると、手が震える。

緊張じゃなくて、武者震いだ！と思い込んでみる。

今日はこのまま学校ではなく、保護施設に向うつもりだ。この宿屋で暮らすようになって以来、一度も行っていない。だから場所もいまいち覚えていなかったが、ちゃんと下調べをしておいた。

妙な事考えるなよと怪しみながらも、二ト口は場所を分かりやすく教えてくれた。持つべきものは、話の分かる友人だ。

モクへの面会はできなくても、保護施設に行く事はできる、とヒントをくれたのも二ト口だった。生活の上での相談や、要望なんかを聞く窓口としての場所にもなっているらしいのだ。全然知らなかったけど。

志真の場合は、リザレットが担当だから、彼女を訪ねていけばいい。

あの人か……。丁寧な口調とは裏腹に、面倒だという雰囲気を感じていた。悪い人では無いと思うが、ちょっととつつきにくい感じの人だ。

お金に余裕も無いから徒歩で。ひたすら歩くこと2時間強。志真は無事懐かしい保護施設に辿りつく事ができた。

どこまでも続きそうな高い壁。入り口はどこだ。壁伝いに歩けばいずれたどり着く、等。

無駄に広大な敷地だ。いい加減足が疲れてきた頃、門らしきもの

が見えてきた。頑丈そうな金属で封鎖された入り口の前に、片手で林檎を潰しそうなマツチヨな警備員が2人。

一瞬、怯む。

でも別に遠慮することは無い筈。リザレットを訊ねるといふ目的自体は、疚しくないし、咎められるものでもない。

一歩、踏み出した途端、三角につりあがった目が志真をぎろりと睨みつけた。

怖っ！

「何者だ。名と目的は」

「ひ、え、えっとシマです。シマ・ハイタニ。こんにちは！おつかれです、異世界人保護施設に用……あの、リザレットさんに、相談いい？」

あまりの怖さにしどろもどろになる。用意してきた言葉も、半分以上飛んでしまった。これで通じるのだろうか。

日に焼けたマツチヨなおじさんは、縮み上がった志真を見下ろし低い声で告げた。

「異世界人か」

「は、はい！」

びし、と思わず敬礼してしまう。

「場所を間違っている。保護施設は、向こう。反対側の方だ」

と、固そうな指が差すのは堀の中。

「ここは異世界人対策本部ケラス。保護施設と隣接している為、間違えるものが多いが……聞いているか？」

「へ、け、ケラス……？」

って、何。

ここは保護施設じゃ無いっていうこと？

いまいち理解できないでいる志真を見下ろして、男は溜息を吐いた。

「新参だな。まだ言葉の理解も浅いのか、厄介な……。おい、ジェス。ちよつとこれを保護施設に送り届けに行く。良いな」

反対側にいた赤い髪の派手な男に呼びかけると、日に焼けたおじさんは志真を手招いた。

「案内してやるからついてこい」

連れて行ってくれるらしい。見かけは怖いが、意外と良い人のようだ。

大人しくついていくと、何故か説教されてしまった。

「あんまり知らない奴に簡単についていくのは危険だ。気をつける。俺はケラスの人間だから、まあ信頼しても良いとして。嬢ちゃんみたいな物の分らない異世界人は、騙しやすいからな。あつという間に珍しいペットとして売られちまうぞ」

だから、ケラスって何なんだろう。

雰囲気的に叱られているのは分かるから、志真は大人しく聞いていた。暫く歩いて、見覚えのある場所にたどり着いた。いつか志真が出てきた保護施設の裏門だ。

どうやら、違う建物が背中合わせに建っていて、その周りを塀が囲っているらしい。外から見ると全部同じ敷地に見えるけど、一応真ん中で仕切られているようだ。

志真は何度もお礼を言っつて、気の良いケラス(?)の警備員と別れた。

いよいよ、本番だ。

よし、と気合を入れて志真は保護施設の警備員に声をかけた。

何だか懐かしい3畳ほどの狭い部屋。

明るいライトグリーンの床と、同色の机と椅子。壁や天井は白く、壁の上方四隅に四角いライトがついてて。そうそう、こんな感じだった。一番最初に通された部屋だ。

暫く待つと、細身で神経質そうな女性がやって来た。

リザレット・クラウラだ。その愛想の欠片も見えない感じが非常

に懐かしい。2人分のお茶が載ったトレイを机の上に置き、椅子に座る。

細い目がいかにも迷惑そうに志真を眺めた。

「お久しぶりです。今日はまた、何の用ですか」

「お久しぶりです。えっと、その、何かリザレットさんにも大分会ってなかったし、どうしてるかなって」

「……帰られます?」

「い、いえ、用もある、ちゃんとあります!」

いきなり帰されそうになった。相変わらずのつれなさだ。最後に見た笑顔が幻だったんじゃないかと思えてくる。

「ちよつと、色々聞きたいことがあります」

「ウィガーには聞けないようなことですか?」

「い、いや、そういうわけじゃ。でも何ていうかウィガーはいつつも面倒がるし、怒るし、喧嘩になっちゃうから聞きにくいっていうか」

ふう、とりザレットが溜息を吐く。

こつちも同じくらい聞き難い相手である。やりにくい。

「モクという異世界人の事ですか」

「え!?!」

いきなり先制攻撃を受けた。

「な、何で……」

「ウィガーからも相談を受けましたから」

志真は真つ青になった。既に先手を打たれていたとは。というか、まさか見抜かれているなんて思わなかった。あのウィガーに。

「モクが保護施設入りになったと知った筈なのに、何も聞いてこない。普段のシマなら、黙っていない筈だ」と

「だ、だって、その、ウィガーに言っても仕方無いって思ったし。

どうせ、本当の事なんか教えてくれなくて、反省しろって言うの目に見えてる……から」

「ウィガーを信用できなくなりましたか?」



「え」

思わぬ言葉に、志真は目を見張った。

「異世界人の相談で最も多いのが、保護者との不和です。信頼関係が築けない、信用できない、変えて欲しい、そういう要望は案外多い」

貴方はどうですか、トリザレットは無表情のまま聞いた。

何か、思わぬ方向へ話が進んでいるような。

確かにウイガーには色々と思うところもある。堅物で、融通が利かなくて、煩くて。でも、まあそんなに悪い奴ではないと思う。最近はその思えるようになってきたところだ。

ここで嫌だと言ってしまったら、どうなるのだろう。

違う人のところへ預けられるのだとしたら、結構困る。宿屋での生活にも慣れてきていたし、フィオーネやリアラ、従業員の皆と離れるのは辛い。

「い、嫌ってほどじゃないよ。時々むかつくけど、ウイガーが怒るのも仕方無い……って、思うこともあるし」

「そうですね」

「……ちよっと、好奇心で聞きたいんだけど、どうしても駄目ってなったらどうなるの？」

「審査をし、続行が適当で無いと判断された場合は、一旦保護施設へ戻り、改めて次の保護者を決めます」

「そうなんだ」

「ちなみに恐らく、次の候補者はユーイ・ユーイのところでしょうね」

「げ」

思わぬ名前が挙がり、志真は顔をしかめた。

それは絶対に嫌！だ。

「良いです、ほんと。今のところで我慢します」

その方が面倒かからなくて良いですから、是非そうしてください、  
とりザレットも無表情に賛同した。

### 志真と秘密の面会騒ぎ 3

一生懸命に考えたつもりだったが、所詮志真の頭で考えた計画なので、大したものではない。施設でリザレットに会って話を聞く。次に帰るふりをして施設に残り、こっそりモクのところへ行く。

モクの居場所も分からないが、何とかなると思っていた。保護施設の半分側、壁で区切られた方には聞いているし、入り口の場所も聞いた。3階の部分にだけ、ドアが存在しているらしい。二トコの言葉が正しければ。

志真はあまり内部を見ることがなく外に出てしまったので、3階に行ったことすらない。寝起きしていた部屋と、この取調室みたいなところと、食堂くらい？

こんな事になるんだったら、もつといろいろ見ておくんだった。うまく部屋を抜け出せたとしても、無事に辿り付けるか不安だ。

志真は何とかこの場を切り抜ける手立てを考えつつ、3杯目のお茶を飲み干そうとしていた。

「結局、ウィガーにはここへ来る事は話していないわけですか」

「……はい。その、できれば内緒にしておいてほしい、です」

くれないだろうな、と。リザレットの形ばかりの微笑を見て思う。別に良いけど。ウィガーに怒られるのは慣れている。

お茶ばかり飲んでいたせいか、トイレに行きたくなってきた。

(あ、これ良いかも)

嘘では無いし、自然だ。志真はお腹に手をあてて、リザレットを見た。

「あの、すみません。何かちょっとお茶を飲みすぎたみたいで。トイレ、借りても良いですか？」

「……まあ、良いですよ」

いかにも仕方無いといった感じで、OKが出た。やった！と飛び跳ねたい気持ちを隠して、足元に置いてあった鞆に手をのばす。その時。

「荷物は持つていく必要ないでしょう」

「え、あ、でもそろそろ帰ろうかと」

「話はまだ途中でしたが？それに、異世界人が施設を訪ねた時は報告書を提出することになっています」

何それ面倒くさい。

「勿論、『日本語』ではなく、こちらの文字で」

リザレットがにやりと笑う。

「うわ、私、まだ文字とかよく分からないんですけど」

「辞書を用意してありますので、書けるまで頑張ってください」

それは書けるまで居残りっていうこと？全然手伝わってくれそうにないどころか、妙に愉しげな感じに顔がひきつる。

（前から思ってたけど、リザレットさんってちょっとSっ気があるよね）

ともかく、この流れで自然に鞆を持つて出て行くことは無理そう。だ。ちよつと良い言い訳を考え付かない。

鞆の中には、モクのために持つてきた差し入れ一式が入っていた。保存の効きそうな菓子や飲み物。それから本とか念の為に毛布とか。渡せないのは残念すぎるけど、あまり渋っても疑われるかもしれない。諦めよう。

志真は鞆を諦めて、立ち上がった。

「じゃ、ちよつとトイレだけ」

一人で外へ行こうと思ったのだが、何故かりザレットもついてきた。思わず、何でって目で見てしまふ。すると、冷めた目を向けられた。

「貴方を一人で行かせたら、迷子になりそうですから」

「だ、大丈夫です、トイレくらい。子供じゃないんだし」

「私も行きたいような気になってきましたので」  
にこり、と口元だけで笑う。突き刺すような視線に、頑張っても引きつった笑いしか返せなかった。あんまり強情になれば、疑われてしまう。いや、もしかしなくても既に疑われているような気が。

リザレットを振り切れないまま、トイレに向かう。

どうしよう、このままじゃ何にもできない。焦りのあまり、掌に汗が滲んできた。

何か考えないと、何か……ダメだ！全然思いつかない。

結局何も良い手立てが浮かばないまま、トイレの個室で考える。

窓は無い。リザレットが入っている内に、出て行くとか、と考えた時に隣のドアが開く音が聞こえてきた。

早っ！

どうしよう、あんまり遅くても変に……おなかを壊したことにして、先へ行つて貰う？

よし、ダメもとで言ってみよう。

覚悟を決めて、口を開きかけた時だった。

ビーツ、という耳障りな電子音が鳴り響いた。

「ふへっ!？」

思わず変な声が出る。聞いているだけで不安になってくるような甲高い音は、一定の強弱をつけながらなり続けていた。

「な、何、何なのこれ」

「警報音……確認の信号も送られてきている。シマ」

リザレットの声は、若干緊張しているように聞こえた。

「そこにいなさい。後で迎えをよこします」

「え!？」

がちやり、と何か嫌な音が聞こえた。思わずドアに手をかけると、開かない。

「ちよつと、リザレットさん!？」

返事は無い。ただ走り去る音が遠ざかっていった。びーびー音は

鳴っているし、閉じ込められるし、正直この展開は不安すぎる。一人になった今がチャンス、と前向きに考えるのは無理だった。

火事とかだったら、死ぬかも。

不安になって、志真はどんとどんとドアを叩いた。

「ちよつと、誰かいませんかー！開けてー！」

いつもなら、赤いパネルの部分に手を当てれば、それだけでしゅつとドアがスライドするのに、今は全く無反応だ。外から鍵がかけられるなんて、聞いていない。

警報音は鳴り続け、外からは慌しく走り回る音や、怒鳴り声、時折悲鳴みたいなものまで聞こえてくる。一体何が起こっているんだ。怖すぎる。

「あーけーてーよー！」

諦めずドアを叩き続けていると、誰かの足音が聞こえた。慎重に、すり足で近づいてくる音が、近くで止まる。

「あ、あの、リザレットさん？」

「……違う」

答えたのは男の声だった。ちよつと無愛想な感じの、低い声。

「あ、あの、誰か……ここ、開けて」

出来れば丁寧な、どなたか存じませんが、ここを開けてくださいませんかとか、言いたいところだが、今はこれが精一杯。

ドアの向こうの男は、暫く黙り込んでいた。通じていないのだからうか。

「……誰だ」

「え、あ。はい、シマです」

「シマ……？灰谷志真？」

ものすごく滑らかに、本名を呼ばれた。っていうか、何で苗字まで分かるの！？驚きつつも、嬉しかった。もしかしたら、リザレットがよこした迎えなのかもしれない。

「そう、それです！」

主張すると、何故かため息が聞こえてきた。

「やっぱり、さっきのは聞き間違えじゃなかったか」

え、と思わず言葉を失う。

聞こえてきた言葉が分かる。というか、日本語だ。

「日本語で騒いでいる奴がいると思ったら」

「ええ、え、だ、誰!？」

「こんなところで何をやっているんだ。まさか、騒ぎを起こしたのはお前じゃないだろうな」

「ち、違うし!」

何かものすごく横柄なような。あんまり性格良くなさそう。どうしてこの世界で会う、日本語を喋る人は皆、性格に問題があるんだろうか。

むかつときたこと、それから相手が言葉が通じるという安心感も手伝って、志真の気持ちも大きくなった。

「誰かって聞いているんだけど!私だってちゃんと名乗ったんだし、そっちも名乗ってよ!」

再び聞こえてくるため息。

やっぱり嫌な奴だ。

ちょっと、と声を上げかけた時、目の前のドアがしゅっと横にスライドした。

こちらに手を伸ばした形で、痩せた男が立っている。

黒髪に黒い瞳。切れ長の細い目をした薄い顔。青白いけど黄色人種と分かる肌。ものすごく、何か安心できる姿だ。

「あ?」

「……………」

けれど、やっぱり意地悪そう。妙に偉そうな雰囲気、じろじろとした視線に晒されて、志真は一度唇を噛んだ。

しかし、助けてもらったことは確か。

「……あ、りがと」

ふん、と男は鼻を鳴らす。

「えーっと、で、誰？」

「各務、伊吹」

かがみ、いぶき？

何か聞いた事あるような。

間をおいて、志真はあつと声を上げた。同じ時にここに迷い込んできた上に、何者かに襲われて、怪我をしたっていうあの。各務伊吹だ。



## 志真と秘密の面会騒ぎ 4

自分と同じ境遇の相手。

会えたらもつところ何かあると思ったが、普通だ。感激とか、感動？は違うか。とにかくこう同じ不運な目にあつた同士として、苦労を分かち合つたり、慰めあつたり、盛り上がるんじゃないかと想像していた。

しかし現実には、ごくあっさり、ちょっと余所余所しい感じの空気が流れている。

何って言うか、とっつきにくい。

陽に当たって無さそうな肌は、志真よりも白い。腕やら足やら、骨か！ってほど細くて、これもまた志真よりも……、この人絶対インドアタイプだ、と志真は確信した。運動とか苦手で、でも、頭は良さそうな感じ。年上だけど、あんまり頼りには出来なさそう。仲良くなれる自信は、はっきり言って無い。

「で」

何と切り出して言いか迷っていたところに、伊吹が声をかけた。

「ここで何しているんだ」

「何かリザレットさんに閉じ込められて……っていうか、こんな事してる場合じゃなかった！」

衝撃の出会いですっかりするべき事を忘れていた。ここへ来たのは、そもそもモクに会うためで、今のリザレットがない上に外に出られたこの状態は、物凄いチャンスといえる。

「出してくれて、ありがとう。えっと、伊吹さん、私ちょっと急いでるから、また今度！元気になってよかったね！じゃあね！」

警報音が鳴り響く中、志真は伊吹に別れを言って、トイレから外へ飛び出した。幸い、職員の影は無い。何かがあつて、そっちへ集まっているのかも。もしかしたらこれは、職員を集める為のものなのかもしれない。

ありがとう！警報音！

確か、出て右の端に階段があつたはず。

「おい、ちよつと待て！」

走る志真の後を、伊吹が追ってくる。待て、と言われても止まらない。走りながら、顔だけ少し後ろへ向けた。

「何？急いでるんだけど！」

「どこへ、行く気だ！そして目的、は」

少し走っただけなのに、伊吹はもう息を切らしていた。やっぱり、見た目通り体力は無いらしい。放っておいてくれれば良いのに。

「伊吹さんに関係ないと思うけど」

「ある、だろ！お前が何か、したら、俺まで巻き込まれる」

「何で」

「同じ日本人、だろ。印象っ、悪くするな……、トイレから、出したのも俺だし」

階段を上るところで、伊吹は一層顔色を無くした。一步、一步、確実に離れていく。

「もしかして、どこが悪い？」

言っと思い出した。まだ怪我が治りきっていないのかもしれない。心配になったが、だからと言って止まれない。どうしても、モクのところへ行きたかった。

「ごめん、行くね。伊吹さんは無理しないで休んでた方がいいよ。後でちゃんと、伊吹さんが止めようとしたってことは、言っておくからさ」

待て、とかなにやら言っている伊吹の声を振り切って、志真は一

段とスピードを上げた。

3階、廊下。一応覗いてみるが、やはり人の姿は見えない。ちょっと、何かおかしくないか。上手く行き過ぎているような。違和感を感じたが、志真はそのまま進むことに決めた。

3階に来るのは初めてだ。何となく、暗い雰囲気。多分窓が小さいせいだろう。志真はできる限り足音を抑えて、奥へと向う。ドアを通り過ぎる度に、そこから人が出てくるんじゃないかと、不安で心臓が破れそうだった。

立ち塞がる壁にたどり着いた時には、嬉しさのあまり飛び跳ねそうになったが。

「え、でもドアとか無いんだけど！」

場所を間違えた？

志真は青くなった。どんなに注意して見ても、ぺたぺた壁に手をつけて探っても、それはただの灰色の壁にしかみえない。入り口らしきところなんて、どこにも。

「……おい」

「うひよあえ！」

志真は悲鳴を上げて飛び上がった。振り向けば、伊吹の唾然とした顔が見えた。

「脅かさないですよ！」

「こつちの台詞だ。何だ今の……悲鳴か？女の、っていうより、人間の口から出たとは思えない声だったぞ」

「余計なお世話！」

吃驚したのだから仕方無い。志真が顔を赤くするのを、伊吹は冷めた目で見た。

「お前、ここで何する気だ」

「だから、別にあんたに関係ない事だつてば！あっち行ってよ！」

「お前、頭悪いだろ」

「なっ！」

「あ？」

音が止んだ。

鳴り響いていた警報音が切れ、同時に廊下を照らしていた明かりも消えた。昼間だから、真っ暗にはならないが、薄暗い。

「何、どうなったの？」

「俺に聞くな」

頼りにならないな、と不満に思いつつ、志真は辺りを見渡した。

「あ！」

「何だ？」

「通路が」

先程までであった壁が消えている。こちらよりも更に暗い通路が、ずっと奥まで続いていた。

「……………なんだここ」

伊吹が不審げに呟き、後ずさった。志真は、恐る恐る中へと足を踏み入れる。

「おい、不用意に動くなよ」

その声は、志真の耳には入らなかった。

3階のこの場所に、通路がある。モクがいるのはこの先だ。そう思うと、怖さを忘れられる気がした。行こう。志真は迷いを捨てて歩き出した。

「おい！」

伊吹の呼ぶ声が遠くなる。

廊下。左手側に、小さな窓が並び、右手側にドアが並んでいる。

この部屋のどこかにモクがいるのだろうか。

「……………どこにいるんだろ」

それさえも知らない。

何とかなるような気がしていたが、実際来てみると大変な事に思

えてくる。部屋にネームプレートでもついていたれば良いのに。

一つ一つノックして確かめていくしか無いようだ。中にどんな人がいるか分からないから、怖いけど。もう警報音は止んでいる。いつリザレットが探しに来てしまうかも分からない。迷っている暇は無かった。

意を決して、ドアの一つに歩み寄り、思い切って叩こうとした。上げた手を、誰かに後ろから掴まれる。

誰かっていうか、伊吹だ。

「お前、何しようとしてるんだ」

妙に焦ったような、何かに怯えたような小声と早口だった。きよるきよると、注意に視線を送っている。その様子はただ事ではなくて、不安が志真にも伝播する。

「何って、ただ友達に会いに来ただけだって」

「友達？」

「モクっていうの。ちよつと色々あつて施設に戻されちゃってさ。」

……ほぼ、私のせいなんだけど」

「ここに？」

「いるって聞いた。一度問題を起こした異世界人は、こっこの部屋で隔離されて、いつ出られるか分からないって」

伊吹が、呆れたような顔になった。

「なるほど、自分のせいって言ったな。罪悪感か。それでここまで忍び込むとか……馬鹿じゃないのか？」

「うるさい！」

「会ってどうするつもりなんだ。それで事態が好転すんのか？ ばれたら逆に後退するぞ。一言謝ったところで、お前が満足するだけだ。お前がしようとしてるのは、何の助けにもならない自己満足だ」

ばつさりと、志真の行動を斬り捨てられる。言い返したい。けど、何も言い返せなかった。悔しい。志真は唇を噛んで俯く。

「でも、だって、じゃあどうすれば良いわけ」

「……どうもしなければ一番良いんじゃないか？」

「できないよ！モクは何も悪く無いのに、悪かったのは私で、なにこんなの変だよ！」

「騒ぐな」

鼻の奥がつんとした。

誰かに教えて欲しかった。どうすれば良いのか。どうすれば、モクを助けられるのか。

「とにかく、ここはまずい。早く出るぞ」

「やだ！」

「良いから来い」

引つ張られるが、志真は足に力を入れて抵抗した。見た目どおり、伊吹は非力のようなだった。女子にしては力のある志真は、対抗できるくらいの力だ。

ぎりぎりど、暫く無言の引つ張り合いが続く。

「分かった」

先に折れたのは伊吹だった。

「一緒に何か手立てを考えてやるから、今は来い」

「適当に誤魔化すつもりでしょ」

「いや、約束してやっても良い。俺もちょっと、知りたいことがある」

信じていいものか、一瞬悩む。が、志真は従う事にした。同じ言葉を話す、同じ国の人の存在は、やはり何か安心感がある。例え性格が悪そうであっても。

灰谷志真。

自分と同じ、妙な世界に来てしまった不幸な日本人。よりにもよって女子高生。想像する女子高生像とは違ったが、それでも厄介そうな人間に思えた。

何と言っても馬鹿だ。

友達に会うために、ほいほい封鎖区域に足を踏み入れるような女だ。多分、その意味を志真は分かかっていない。

何故その区域が区切られているのかというと、危険だからだ。

危険な力を持つ異世界人、そして、敵対者。

そこに志真の言う友人がいるとするなら、そのどちらかなのだらう。

問題は、壁が消えたことだ。

建物を隔てるあの壁。あそこが入り口になっている事も知らなかったが、あのタイミングで入り口が開いたことも気になる。志真がやったとも思えなかった。あの警報音と何か関係があるのか。

大体、職員の誰も駆けつけてこないのもおかしい。

一体、何が起こっているんだ。

伊吹は不安だった。今にも地下から、あの化物が這い出てきそう。志真に構っている場合ではなかったかもしれない。

逃げた方が良い、か？

考え込みながら歩く伊吹の後ろを、すっかり元気を無くした志真が歩いていった。

もうちょっとだったのに、モクに会う事すらできなかつた。これじゃ、リキキに罵られても仕方が無い。情けなくて哀しくなる。今から引き返そうかと、何度も考えた。でも、例え伊吹を振り切つて、引き返したところでモクの居場所が分かるわけでも無い。うるうるして、誰かに見つかるのがオチだ。

結局、自分一人じゃ何もできない。

消沈しつつ、階段を下りていた時だった。階下から、悲鳴が聞こえた。子どもの、多分少年のものだろうか。ただ事ではない絶叫に、2人は思わず足を止めた。

「な、何」

「……分からない。けど、何かやばそうだ」

甲高い叫び声は、何を言っているのか聞き取れないが、助けを求めているように聞こえた。子どもが何か危ない目にあっているのだ。志真は堅い表情で黙り込んでいる伊吹を見上げた。

「行こうよ」

「……行って、どうしようもない事態だったらどうする」

「どうするって、だつて行って見ないと分かんないじゃん。大体、子どもが助けを求めているんだよ！フツー行くでしょ！」

「普通って何だ。大体、二次災害の危険があるから素人が手を出す方が迷惑なんだ」

それらしい事を言う伊吹を、志真は冷めた目で見た。偉そうな態度を取つておいて、結局は。

「怖いだけでしょ。男の大人の癖に情け無い」

「煩い。大人だから慎重になるんだ」

「弱虫！」

これ以上付き合つてられない。

悲鳴は途切れ途切れに続いている。志真は、伊吹を追い越し走り



出した。2階の廊下に降り立って、声のする方向を確認する。すぐに怪しい黒フードの人物達を発見した。人数は全部で3人。手に大きな斧みたいなものを持って、ドアを壊そうとしている。

がつつと、ドアが攻撃されるたびに、中から少女の悲鳴が上がっていた。多勢に無勢、その上相手は刃物を持っている。早く助けなきゃ、と思うのに、足が動かない。

どうしようもない事態だったら、という伊吹の声が蘇る。弱虫、と罵ってしまったが。

(怖くなって当たり前だ。だって、ここは日本じゃない)

何があるか分からない、予測のできないところなのだ。志真は普通の女子高生で、多少運動神経には自信があるものの、喧嘩なんかしたこともない。

そもそも、あれは喧嘩のレベルを超えていそうな相手だ。

(助けるなんて無理。……でも、多分)

ちよつとくらい、時間を稼いだりはできるかもしれない。そうしたら、誰か。今は何処にいるか分からない施設の職員とかが、来てくれるんじゃないだろうか。既に全員殺されているとか、そういう事態でなければ。

(いやいや、まさかそんな)

嫌な想像を振り切るために、軽く頭を振る。

これだけの事態だ。警察、とかそういうところにも、通報が行っているかもしれない。いや、待て。窓を開けて大声で叫べば、相手の注意も引けるうえ、外に助けを呼べるかも。

よし、と志真は大きく息を吸い込んだ。一番手近にあった窓を思い切り押し開く。そして。

「火事だー！じゃ…なくて、大変！子ども、死ぬ！助けてー！」

最初にうっかり出てきたのは、何かあったらこう叫べと言われて

いた言葉だった。勿論、異世界では通用しない。こちらで火事って何ていうのだろう。知らないから、とにかく知っている中で緊急性が伝えられそうな言葉を喚く。

ドアに向かっていた黒フードの男達が、一斉にこちらを見た。

「ひ!？」

思わず悲鳴が上がりかけた。物凄く趣味の悪い事に、全員獣の骸骨を被っている。何それ、ファッション? 流行っているの?

おそらく顔を隠すためというのが正解だろう。鼻の下まで覆われて、口元くらいしか分からない。怖すぎる、志真はごくりと息を飲んだ。

「異世界人か」

いきなり襲い掛かれるような事は無かったのは、意外だった。

その問いになんて答えれば良いのかわからない。異世界人かどうか確かめて、どうするんだろう。もしかしてこの人達が、ウィガールの言っていた過激な異世界人排斥者たちなのだろうか。

正直に言った途端、殺されたりして。笑えない想像が頭を過ぎる。ウィガールの嘘つき! と志真は心の中で罵った。犯人は全員捕まっただって言っていたのに。

「どうした。まだ言葉が分からないのか」

「……異世界人だったら、何!？」

ヤケになって叫び、志真は身構えた。いつでも逃げられるように。しかし。

「神の導きにより、この世界の導き手として降臨された異世界の客人よ。我らの仲間の愚かな行いを代わってお詫び申し上げます」

「……は?」

何だって。小難しい言葉ばかりで、さっぱり分からない。でも、

何か様子がおかしい。襲ってくる気は無いようだ。それとも、油断を誘っていきなり、とかそういう手なのか。

「この迎合は、我ら神の思し召し。神の意思は確かに我らの手に！」  
白い掌を掲げ、高らかに叫ぶ。

さっぱり分からなくとも、何だかヤバイ雰囲気だけはばつちり伝わってくる。例え言葉が通じてても、意志の疎通を図れるかどうか。

びん、といきなり、耳に幕が張ったみたいになった。

次の瞬間、展開についていけない志真と、黒ローブの男たちの間にあつた窓ガラスが、音を立てて砕け散った。細かい硝子片が、キラキラと舞う。風と共に飛び込んでくる人影が、身を翻して逃げていく黒フードの男たちを追いかけていく。

ただ一人、志真だけが動けなかった。

割れた窓から、次々と男達が入り込んでくる。皆同じ、白に金の刺繍が入った服を着ているから、何かの制服なのかもしれない。警察とか、軍隊とか、そういうのだろうか。

助かった、のか？

制服の一人が、こちらに近づいてきた。随分と険しい顔をしている。

「お前は何者だ。何故ここにいる」

私も何か疑われている！

「わ、私は、シマ、ハイタニ。異世界人で、えーっと」

「異世界人？……保護者は誰だ」

反射的に志真は答えていた。

「ウイガー・ハルベルト！」

今すぐどこかに逃げ出したい。

張り詰めた空気の中、志真は椅子の上でひたすら小さくなっていた。正面には、世にも恐ろしい顔をしたウィガー・ハルベルトと、冷やかな眼差しを向けてくるリザレット・クラウラがいる。隣では、巻き込まれた形の各務伊吹が洗面を作っていた。

窓も無い、5畳ほどの狭い部屋だ。皆が座っている椅子と、間にあるテーブルの他には何も無い。

「何故こんな真似を？」

リザレットが溜息を吐きながら聞く。すっかり呆れられている。

「……ごめんなさい。ただ、どうしてもモクに会って、話したかったから」

見つかったら怒られるだろうとは思っていたが、まさかこんな大事になるなんて思っていなかった。選ぶ日を間違えたかもしれない。

「短絡的ですね。それで、今回の計画は誰と？」

「短絡的……。ぐさりと刺さる言葉だった。しかし言い返せない。

項垂れつつ、後半の言葉に首を傾げる。

「誰と？いや、私一人で考えて」

「誰にも相談はしなかったのですか？唆されたりはしていない、と」

「してないよ！どっちかっていうと、無茶はするなどが止められてて……」

リキキには挑発されたけど。ここで名前を出すと余計にややこしい事になるのは、志真にも分かる。

「一人で」

何故か、リザレットは納得できないといった顔で、志真を見ている。

「本当に私だけだよ。良くない事だっていうのは、分かってた。だから、また他の誰かを巻き込むのは駄目だって思ったし。なるべく、誰にも迷惑はかけないようにしたかったから」

「……充分、迷惑をかけられているが」

そこで初めて、ウィガーが口を挟んだ。胡乱な眼差しを受けて、志真は首を竦めた。

「ごめん、つい名前言っちゃって」

「そういう問題じゃない。黙っていたところで、すぐに分かる事だ」「そうだけど。でも、今回の事は私がウィガーにもばれないようにして気をつけてたことだし。大丈夫、どんな処分でも受けるから」  
覚悟はした。

そう言うのと、ウィガーが更に眉根を寄せた。眉間に深く刻み込まれた皺が、彼の怒りの深さを表しているようだ。

「お前は何も分かっていない」

低く静かな声だった。

「どんな処分でも受ける、だと。馬鹿か。そういう態度が偉いとも思っているのか。しでかした事の責任も取れないガキの癖に大口を叩くな。未成年で、滞在期間が1年に満たないお前が何かした場合、一番責任を問われるのは保護者だ」

それは、つまりウィガー・ハルベルト。

志真は軽く目を見張った。

「え、そうなの」

「そうなっています」

リザレットが素っ気無く肯定した。それは、何とというか。流石の志真も申し訳ない気持ちになってきた。

「ご、ごめん、ウィガー。私、知らなくて」

「一応、施設を出る前に教えましたがね」

「え！？嘘、全然記憶に無いんだけど」

「……馬鹿」

伊吹が追い討ちをかける。

3者から、馬鹿を見る目つきで見られている。もう何も言えない。だが。施設を出る前の短い期間で、あんなに一気に説明されても、覚えきれぬわけが無いのだ。

とは思うものの、口には出せない。

知らなかったではすまない。

どんなに言い訳をしたところで、ウィガーに迷惑をかけてしまう現実是不変なのだ。

どうしよう。

志真は青くなった。

「ごめん、本当にごめんなさい。謝って済む話じゃないけど。あの

……処罰と違って、どうなるの」

ウィガーもどこかに捕まってしまうのだろうか。保釈金とか、そういうのがいるなら、ちょっとは志真も協力できる。本当に、微々たるものだけだ。

リザレットが口を開くのを、志真は固唾を飲んで見守った。

「今回は幸いにも、処分はありません」

予想外の返答に、一瞬反応が遅れた。

「え？」

無い？無いって言ったのか、今。とても信じられなかった。

「嚴重注意で釈放です」

「……な、何で？何それ」

ここまで大事だという雰囲気をもし出しておいて？良かったし、嬉しいけど、納得できない。そんなに大したことない件で、皆から

責められていたのだろうか。

(そりゃ、悪かったのは私だけ)

むくむくと、志真の心に湧いてきた不満。それを見抜いたかのように、リザレットが鋭い目で志真を見る。

「言っておきますが、今回は特別です。本来なら相応の処分が下されるのですが、今回は色々な問題が重なったこと。更に、貴方が助けたお方の温情があったこと。運が良かったのだということをお忘れないように」

「あ、私が助けたって、部屋にいた子どもだよ？大丈夫だったんだ」

「……ええ。おかげさまで」

人助けをした事が、結果的に志真の……ウィガーの身を助けることになったようだ。

良かった。

自分の行動を反省するばかりだったが、それでも一つ、誇りに思える行動ができた。

下手をしたら、死んでいたかもしれないけど。見捨てなくて本当に良かった。

「でも、あの変な動物の骸骨とか被った人達って、何だったの？」

一瞬間を置いて、リザレットは言った。

「調査中です」

\*\*\*

きな臭い。

今日一日で起きたことを考えれば、志真の件も無関係とは言い切れなかった。しかし、敢えて追求することなく、リザレットは彼女

を解放した。

「……良いのか？」

ウィガーの問いに、リザレットは頷く。

「どうせ大した事は知らないでしょう。それに」

ほんの少し目を細めて、溜息を吐く。

「王家の意向でもある。仕方ありません」

黙って聞いていた伊吹だったが、思わず声を上げてしまった。

「王家？」

「ええ。……今日は、ユリウス殿下による定例視察会の日でした。

今回はそれに、チャタレイ殿下が同行していたのです。やんちゃな方で、一人で姿をくらませた後にあの騒ぎに」

という事は、あの悲鳴の主は王子だったのか。

志真の無茶な行動が、王家に恩を売る結果に繋がったようだ。運の良い奴である。

この国での一番の権力者である王を始め、身分の高い貴族達は首都ブラスタに住んでいる。ブラスタは、空に浮かぶ小さな島らしい言葉の通りに、雲の上の住人。知り合う機会などまず無いと言って良い。

しかし、その王家の人間が定期的に視察に来ているとは、初めて知った。

「じゃあ、今回の騒ぎは王子を狙ったものなのか？」

「シユターク教派の者達は、そうでしょうね。彼らは異界から持ち込まれた宗教と神に心酔しています。異世界人を神の遣いとして特別視し、その為管理している王家を排除すべき悪として考えている」

「神の遣い……」

ひく。

元々、信仰心の薄い伊吹には、宗教は厄介で怪しいものという偏見があった。その上、子どもを襲ったり、妙な格好をしていると聞いてしまえば、もうまともな人達だとは思えない。



神の遣いとして扱われるなら、待遇は良さそうだが、あんまり係わり合いになりたくない相手だ。

「……者達、は、って。他にもいるのか？」

「一部システムをダウンさせたのは、異世界人排斥派の過激派です。彼らの目的は、保護施設内にいる異世界人の殺害」

「前、捕まえた奴らとは別か？」

「ウイガーの問いにリザレットは頷く。

「最近、何故か増えているようですね」

若者の間でブームとなつていようです、という文句が何故か頭に浮かんだ。物凄く、迷惑な話だった。

「それに、門のところではいつもの異世界人の人権を守るデモもありました。途中から、反異世界人グループと乱闘になる騒ぎで。まあ、こちらはいつも通り」

恒例なのか。

もしかして、裏口から出されたのはそういう理由なのだろうか。

「結局、吸血蜘蛛を施設に逃がした者が誰かは不明」

「吸血蜘蛛？」

「洞窟等に生息する攻撃性の高い生物です。小さいですが、大群で襲い掛かる。主食が血液で、人も襲います」

ぞつとした。ただでさえ、蜘蛛はあまり好きになれない伊吹だったが、もう見るだけで嫌いになりそうだ。

「……っていうか、何かおかしくないか」

一日で、色々起こりすぎだ。

「おかしいですよ。この騒ぎに紛れて、地下に侵入した者がいる形跡があります」

「地下って」

あの化物がいるところだ。

「……大丈夫なのか」

「非常事態です」

その言つりザレットの顔は、いつも通り熊面のようだった。

## 菊乃の衝撃 1

長く鳴り響いていた警報音が鳴り止んで、菊乃はほっと息を吐いた。

一体、何が起こっているのだろう。

ぱっと思い浮かぶのは火事だった。後は、泥棒が入ったとか、そういうことくらいしか思いつかない。

気になるが、確認する手立ては無い。現在菊乃は、異世界人保護法、第32条違反で保護施設に隔離されている。トイレと風呂付の狭い部屋で暮らし、1日4時間の検査以外は外にも行けない。

本は持ち込みが可能だったから、何とか退屈を紛らわし、疑問に対する答えを導き出そうと努力していた。食事は出るし、体罰のよくな事も無い。想像したよりはずっと、マシな環境である。

馬鹿かお前は

引き絞るような声だった。

いつもみたいに嫌味やかからかいを交えることなく、真正面から怒りをぶつけられたのは、あれが初めてだ。

一言罵った後、背を向けたユーイを、ジェレミーが何とか取り成そうとしてくれたが、その怒りは治まらなかった。

「お前みたいな馬鹿の面倒は見切れねえよ。希望通り、保護施設に入ってる」

そう、自分が希望した通り、菊乃は今ここにいる。

いつ出られるかも分からない。あれだけユーイを怒らせてしまったのだ。例え施設を出ても、行き先が無いかもしれない。確かに馬鹿な事をしたと思う。だが、良く考えた上で決めた事だ。

症例38。

それが何なのか知った時に、決意した。

落ちてくる異世界人の中には時折、身体に異変をきたす者が現れる。

『敵対者』と呼ばれるものも、その一つだと考えられているらしい。

単純に、外見に変化が出る者が最も多くて、目の色、髪の色が変化したり、若返ったり年を取ったりするような例が報告されている。若返るのはともかく、いきなり年を取ってしまうのは、結構辛いものがあると思う。

それから、知的、精神的に何らかの影響を受ける者。こちらは深刻で、記憶喪失、言語障害をはじめ、動物のようになってしまったり、人格変化、それに多重人格になる場合もあるとか。当初は、異世界に渡ったショックから引き起こされると考えられていたが、別に原因があるようだ。

そして最後が、能力付加だ。それまで持ち得なかった力が身に付くというもので、こちらは他2つに比べて発症例は少ないらしい。単純な身体能力の向上から、いわゆる超能力みたいなものまで。菊乃はこの3番に該当する。

能力付加。

あの日、ハルラックのピンチの際、辺りが突然湖に変化したのは、菊乃がやったことだったのだ。

(信じられない)

異世界に來た事よりも、衝撃だった。

あの時の事を振り返ってみると、確かに、何か妙な感覚があった記憶はある。

(でも、まさか)

その事と辺りが湖になった事を結び付けては考えない。そんな超常現象を、自分が引き起こしたなんて。菊乃の常識からしたら有り

得ない話だ。例え、ここが異世界だとしても。

ユーイ達はそれを見抜いて、菊乃の疑いを晴らしたのだ。

症例38。

異世界へ渡る際に、精霊や、神と呼ばれる力の塊と接触、融合を果たした者の内、肉体、人格変化を起こさなかったケース。

能力付加があつた場合、人格変化や身体変化を伴うケースが非常に多いらしい。

運が良かったのだ。

一歩間違えれば、菊乃が敵対者になつていてもおかしくなかつた。敵対者とは、3つの症例全部を引きおこし、反社会的な行爲を行う者。尋常ではない力で、あらゆるものを破壊し、殺す。

敵対者は他と違い、その変化はゆっくりと現れる。だからこそ、彼らは菊乃の扱いに慎重になつていたので。見ただけでは分からない。ただ、ユーイが言うには、何だか分からないが揺らぎが感じられるのだそうだ。

揺らぎ。

菊乃は俯き、胸の辺りに右手を添えた。あの時確かに感じた。ここで暴れる、何かを。

こん、という微かな音に、菊乃ははつと顔を上げた。分厚いドアは、内側からは開かないようになっていて、多少の物音は遮断してしまう。勿論、隣の部屋の音も聞こえない。

同じ音がもう一度、ドアの向こうで鳴った。

外に誰かがいる。菊乃は小さく息を飲んだ。職員なら、名乗つてドアを開ける筈。こんな風に、周囲を伺うようなノックはしない。

「……誰？」

恐る恐る呼びかけてみる。大きな声は出せなかったから、もしかしたら聞こえなかったかもしれない。暫くして、返事があった。

「誰でもない」

ふざけた返答だった。からかっているのか、それとも何かの謎かけなのか。声の主は若い男のようだった。低く、くぐもって聞こえるのは、ドアのせいだろうか。判別しにくいだが、知っている声では無い気がした。

「あなたはキクノ・サカマキだろ」

「知ってるの？」

「ああ、ちよつとな。知人から聞いている。それで、少し興味が出た」  
知人とは誰のことだろう。菊乃の知り合いはそんなに多くない。

「何故、こんなところにいるんだ？」

「……保護法違反」

「反異世界人過激派の奴らに殺されそうになった時の事か？自覚以前のものは、その数に入らない筈だけど」

何故そんな事まで知っているのだろう。

「誰なの」

「自分からここに入ったって噂だが、本当なのか？」

噂って、何。

本当にそんな噂になっているのだろうか。

菊乃は眉根を寄せて黙り込む。大体、何でそんな事を知りたがるのだろう。誰なのかも、言わないし、怪しいことこの上ない。黙っている、更に質問が来た。

「何が目的だ？」

まるで、尋問のようだ。あんまり気分の良いものではなく、菊乃は眉根を寄せた。

誰かも分からない相手に答える義理は無い、と思う。

「どうしてそんな事聞くの？」

「知りたいから」

実にシンプルな答えだった。知りたい。その答えに、菊乃は共感

を覚える。軽い苛立ちと反感に目と瞋り、菊乃は答える気になった。別に、大した理由ではない。

「私もそう」

「うん？」

「知りたかった。いろいろなこと。保護施設のことも。ハルラックさんが、私を助けたことでどうなっているのか。全部、ちゃんと私の目で見て知っていききたい」

それに。

ハルラックと同じように力を使ったらしい自分が、保護施設に隔離されないでいるというのも、何となくすつきりしなかった。勿論、これがただの自己満足に過ぎないという事は分かっている。ハルラックが知ったら怒るかもしれない。でも。

自分のやりたいようにする、とそう決めたから、折れなかった。お陰でユーイの怒りを買ってしまったが。

「あんた達は平和な世界から来たんだな」

小さな溜息とともに、男が言った。

「気に入る答えじゃなかったが、素直に答えてくれた礼はするよ。俺の名は『チフセ』、仕事は世界に病気をばらまくこと」

「…え？」

「この時期に、あんたみたいなのが現れると、俺でも少しばかり考えちゃう」

男が何を言いたいのか、分からない。だが、妙な胸騒ぎがして、菊乃は後ずさった。狭い部屋で、すぐに壁についてしまう。

「運命……っという、馬鹿らしいものをさ」

先程消えた警報音が、頭の中で鳴り響いていた。

瞬きも出来ず、見つめる中、ドアがゆっくりと、横に開く。



## 菊乃の衝撃 2

ユーイ・ユーイという人は、気まぐれで自己中心的である為に敵を作りやすい。周囲から扱いにくい人だと思われているが、ジェレミーからしたら中々分かりやすく面白い人だった。短気で素直じゃ無い為、誤解されがちだが、ユーイはそれなりに親切で面倒見が良い。

そうでなかったら、自分はここにいないだろう。

11年前、誰からも背を向けられ、風前の灯となっていたジェレミーの命を拾ったのは、ユーイ・ユーイ。周囲の反対を押し切って自分の弟子に迎え入れてくれた。

ジェレミーはその時14歳。ユーイもまだ20歳になったばかりの若造だった。

1度、情を移してしまえば、切る事はできなくなる。

だから、ユーイは必要以上に菊乃にきつく当たり、遠ざけた。そう話したら、菊乃は信じるだろうか。そもそも、ユーイが菊乃を引き取る決意をしたのは、彼女が保護施設で毒を盛られたからだを知ったら。

自分が殺されかけたことすら、彼女は気が付いていないだろう。

身元確認を徹底しているものの、多数の職員が入りする保護施設にいれば、菊乃の安全を保障する事はできない。だからこそ、ユーイが彼女の保護者として名乗りを上げた。敵対者であるか否か、その判断をするという名目のもと。

その時点で、充分肩入れしているとジェレミーは思うのだが。

「何とかありませんか、その天邪鬼」

苦笑しつつ、不機嫌な上司に声をかけると、棘のある視線が返っ

てきた。

長椅子にうつ伏せに寝そべり、すっかり不貞腐れている。だらりと床に伸ばされた手に、空のグラス。テーブルの上では倒れた酒瓶が、2本。その内の1本は倒れ、絨毯に赤黒い染みを作っていた。あれはもう駄目だろう。酒臭い。ジェレミーは鼻の下に手を当てた。酒は好きだが、酔っ払いも充満する酒の匂いも嫌いだ。

「そっやってヤケになるくらいなら、何で許可出したんですか」  
「るせえ」

低い声で唸った後、ユーイは顔を背けた。

すっかり不貞腐れている。

ジェレミーは肩を竦めた。原因である菊乃は、今は保護施設に収容されている。その事が、彼女の希望でユーイの不機嫌の理由だ。

(あの子も案外頑固で、不器用だ)

そういうところも可愛いと思うが、そのせいでここから出て行ってしまう事になり、ジェレミーとしても寂しい思いをしている。

大人しくて、従順なようで、中々懐かない臆病な小動物みたいだった。

びくびくする様が可愛くて、ついからかい過ぎてしまったような気がする。優しくしようと思うのに、気が付けばつい。

女性には優しく、紳士的な対応を心がけていた筈。それが、菊乃には生かされていない。どころか、結構反応を見て楽しんでしまったような。

由々しき事態だ。

「……最近、ユーイ様の天邪鬼が移ってきたような」

「ああ？」

「いえ、何でもありません。とにかく一刻でも早くキクノを迎えに行きましょう」

「……退所時期を決めんのは、俺じゃ無え」

「そんな事言って、いくらでも無理を通せる立場でしょうが。変な

意地を張らないでください」

「絶対に嫌だ。あいつが俺に頭下げて泣きついてくるまでは、絶対に助けてなんかやらん！この家にも入れない！」

ユーイは真つ赤な顔で怒鳴ると、手にしていたグラスを投げつけた。幸い、毛足の長い絨毯の上に落ち、割れる事は無い。

ごろりと転がったそれを目で追って、ジェレミーは深く溜息を吐いた。

誰も彼も、困った人達だ。

菊乃の思考は、良く分からない。だが、何故か保護施設へ入ることを希望した。保護法違反者として、保護ではなく、収監されることを望んだ。

ユーイはそれを、こんな家にいるくらいなら、社会不適合者として施設で監視される方が良いという意味だと受け取った。そう思ってしまうくらいの、後ろめたい事情がある。真摯に（ユーイなりに）謝罪して、その意思を曲げようと説得を試みたが。

駄目だった。それどころか。

『では、改めて、やります』

菊乃は真剣な眼差しで、ユーイを見つめた。

『ここで、力を使う。そうしたら、次は保護法違反、なりますね？』  
菊乃は本気だった。その意思是固く、とても変えられるものではない。

結局彼女がそれを実行する前に、ユーイが切れて、菊乃は希望通り保護施設に収容された。そして、ユーイは今も不貞腐れている。

これだけ腐っているのは、いつかの出来事に重なってしまったか

らか。ユーイ・ユーイの心に、今もお消えない影を落とす過去の事件。あれもまた、異世界人に関わるものだった。すれ違い、最後には怒りの言葉をぶつけて、自分たちの前から姿を消した友人。

あの時の事を、ジエレミーもまた忘れていない。

（あの人は、今も生きているのだろうか）

出きれば同じ過ちは、繰り返したくなかった。

ジエレミーは、こちらに背を向けて寝転がるユーイを横目に見る。さて、どうやって言いくるめようか。機嫌を取るには、どうしたら一度菊乃に会いに行つて、向こうの意思を確かめた方が良くもしれない。機嫌の悪い男の酔っ払いを相手にするよりは、可愛い女の子と話す方が絶対に楽しい。

あれから5日が経っている。そろそろ菊乃の顔も見たい。そんな事をぼんやりと考えている時だった。

慌しい足音が聞こえた。いかにも慌てているような足音に、顔を上げる。ノックも無しにドアが開いた。そこに立っていたのは、彼らの古い友人、ウィガーだった。

不器用の上お人よしで、いつも要らぬ苦勞を背負い込む男は、今日も何か問題を抱えている様だ。

「どうしたんですか、ウィガー。今日もお忙しそうで」

ぎろり、と殆ど白目を向けられた。目が血走っている。

「悠長な事を言っている場合か！ユーイ！何故通信に出ない！」

「うるさいな。今日は休暇日だ」

「緊急時にそんなものは無い！」

「おや、本当に大変そうですね」

ぎりぎりと、歯が欠けるような音が聞こえる。余程のことだと、渋々ユーイが体を起こした。

「何だよ」

「色々あるが、重大な事項は2つ。1つ目、地下研究所に押し入り、検体の1部を持ち出したものがある」

さつと、ユーイの顔つきが変わる。  
ジェレミーも、口を挟むことを止めた。

地下研究所に保管されているものは、どれも異世界から持ち込まれ、危険であると判断されたものだ。病原体や、有害な細菌、植物、動物、鉱物。その最たるものが『敵対者』だ。

「持ち出されたのは、ウィルドの炎」

ユーイの目が見開かれる。ウィルド、とは、保管されていた敵対者の1人の名だ。完全に機能を停止していたにも関わらず、その心臓で燃え続けている核、それがウィルドの炎。

「一体、何やってやがった！ケラスの奴らは？昼寝でもしてたつて  
いのか」

「お前が寝ている間に、色々あつたんだ」

ユーイは苛立った顔をしながらも、身支度を整え始めた。皺のよつたシャツを脱ぎ、新たなシャツを引っ張り出しながら、怒鳴る。

「重大な事項のもう一つは何だよ」

流石に、これ以上に悪い事は無いだろう。そう、思っていたが。  
ウィガーは陰鬱な顔になった。

「キクノが消えた」

その言葉に、ユーイもジェレミーも動きを止めた。

「何だと？」

「ドアが外から壊された形跡があり、室内には争った痕跡もあった。  
何者かに連れ去られた可能性が高い」

「何者の仕業か、見当はくらはいつているのですか？」

「まだだ。ただ、部屋に血痕が残っていた。それがキクノのものと  
一致した事から、キクノは怪我を……それも、結構深い傷を負って

いると見られている」

思いの他、ユーイは落ち着いているように見えた。

「生死は？」

「不明」

「そうか」

菊乃が連れ攫われた。生死不明。

思いの他、衝撃を受けていたのはジェレミーの方だ。

当然の事ながら、施設内は大騒ぎになっていた。

警備が増強された為に、物々しい雰囲気も漂っている。伊吹からしてみれば、今更と白い目で見たくなるような感じだ。何せ、盗られたものはもう戻って来ない。異世界人を敵対者へと変貌させたとかいう核と呼ばれるもの、ウィルドの炎。

研究の為だとはいえ、あんたものをいつまでも保管しておくから悪いのだ。そう言つと、リザレットは静かに反論した。

「簡単に破壊できるものなら、とつくにやっています」  
そして、一冊の本を伊吹に手渡した。

ウィルドの悲劇、と題名がついた記録書だった。ウィルドという異世界人が、敵対者と成り果てるまでを、聞き取り調査により記したもの。

そこには伊吹を更なる恐怖に陥らせるような、とんでもない事実が書いてあった。

ウィルドは当初、敵対者ではなかったらしい。

最初に敵対者として変貌を遂げたのは、共にこの世界に紛れ込んだ、彼の妹ミネルバだった。ウィルドは何とか彼女を救おうと手を尽くし、人を敵対者に変える核を物質化し取り出すことに成功。しかし、直後にそれはウィルドの体に寄生した。

助かった筈のミネルバも、目覚めることなく死に至り、絶望した彼は自らの体を献体として差し出す。

今からほんの6年前の出来事だ。

「最近じゃねーか」

その近さに吃驚だ。ちなみに、伊吹がリザレットに見せられたあの化物は、ウィルドでは無いらしい。

あれは50年ほど前に現れたもので、そちらは特に手出しをされ

ていなかったようだ。2体もいたのか。恐ろしい事に、他の場所に後3体保管されいてるらしい。

げんなりする。

今回忍び込んだ者が何者なのかは不明だが、相当の知識と技術を持った者だ。ウィルドと同じように、その人物は人を敵対者に変えた核を持ち去る事が出来たのだから。最も、既にそいつが、寄生されている可能性は高い。

伊吹の身を脅かすものが、増えた。

逃げよう。

どこか遠く、安全なところへ。

しかし、その安全なところがどこなのか、さっぱり分からない。

保護施設が安全でない事ははつきりしていた。いつ何時同じような事が起こるとも限らない。例え、警備を増強したって。そんなもの今更信用できなかつた。未だに、吹雪を見つけることも出来ないような奴らだ。

早く、この国を出てやる。

それにはまず、異世界人学校を卒業する必要があつた。伊吹は決意した。

「お世話になりました」

今度こそ。迎えに来たウイガーと共に、伊吹はリザレットに別れを告げた。

「くれぐれも気をつけてください」

「なるべく、優秀な人をお願いします」

伊吹には、数名の護衛がつく事になっている。中々の好待遇だ。勿論、見張りという意味合いがあるのも分かっていた。おそらく、



吹雪が接触してくる事を狙つての、餌でもある。それでも、少しでも安全に暮らせる可能性が高くなるなら、大歓迎だ。

「これを持って行ってください」

徐に、リザレットが持つていた布袋を手渡してきた。受け取った瞬間、伊吹は思わず声をあげ、それを手放しそうになった。

掌サイズの布袋の中で、柔らかい何かがぐにぐにと動いている。

「……なんですか、これ」

きいきいと、鳴き声まで聞こえてきた。

「護衛代わりに育ててみてください」

「育ててって」

布袋の口から、によきつと灰色のものが顔を出す。エミラルドグリンの丸い目が、伊吹を見上げた。イタチに似ている。灰色の毛の下に、鱗みたいなのが見えなければ。小さな生き物は伊吹を見上げ、愛らしい仕草で首を傾けた。

「いりません。動物は苦手なので」

にゆうつと、首を伸ばした灰色の小動物は、袋を持つ伊吹の指にがぶりと噛み付いた。痛い、が、子どものためか、手加減されているのか、耐えられる痛みだった。

「ついでに見ての通り、動物にも嫌われるタイプです」

「ご心配なく。多少賢くとも小動物、数回餌を与えれば貴方に懐くでしょう、多分。ちなみに肉食で、特に内臓系を好みます」

えぐい。

益々もっていらぬ。そう思ったが、そこでウィガーが口を挟んだ。

「貰っておけ」

いたのか。時々影が薄くなる男だ。

「宿屋で動物を飼っても良いのか？」

衛生的にもどうなんだ。

「お前達の世界では、犬を番犬にするだろう。こちらでは、これを飼う。ウィーダ、小竜。嘘か本当かは知らないが、異世界から来た竜の末裔。小さくとも優秀だ」

竜の末裔、だと？

伊吹は未だ指を齧っているイタチもどきに、疑わしげな視線を向けた。途端に、牙が指に突き刺さる。

「って！」

血が出た。絶対にいらん、そう言おうとしたが。

「ここまではつきり鱗が出ているものは相当高値がつくはずだぞ」というウィガーの助言により、留まった。ありがたく貰っておく事にする。その内お金に困った時にでも売り払ってしまえば良い。

「そろそろ行くぞ」

「ああ。それじゃ」

「ええ」

リザレットは薄く微笑んだ。

「また明日」

これから伊吹はウィガーの家で暮らすことになる。正式な授業は午後からだというので、午前中は働く事にした。

職場は異世界人保護施設。シエンゾの元で、植物栽培に勤しむことになっている。国を出て自活していく為にも、何らかの職を身につけておいた方が良い。

手元に残したひまわりの種をいつか役立てる為にも、シエンゾから学ぶのが一番のような気がした。農業という柄じゃないのだが。

こんな事にならなかつたら、考えもしなかつただろう。

あの日、何も起こらなかつたら。

ふと伊吹は考える。自分は何になっていただろうか。就職は、できていただろうか。日本は不景気の真っ只中だった。あちらもこちらも、現実には厳しい。

暫く物思いにふけりつつ、ウイガーの後をついていくと、不意に彼が振り返った。

「名前は何にするんだ？」

「は？」

名前って何だ。訝しげな顔をする伊吹に、ウイガーが指を差しながら言う。

「ウイーダだ」

ウイガーの爪の先は、伊吹の頭にへばりついていている小動物に向けられていた。途中で暴れ、袋から抜け出した後、そこに落ち着いた引き摺り下ろそうとすると噛み付くし、まあ逃げないだけマシなのでそのままにしてある。

「名前……」

「飼うならいるだろ」

さも当然のように言う。いるか？

正直に言っ、あまりネーミングセンスに自信は無い。何か、漫画やゲームに出てきた名前をつける……いや、それは恥ずかしい気がする。志真辺りに突っ込まれたら笑えない。

「ぼち、いやタマとか？」

適当な名前で良いだろうと、日本では一般的な名前を並べてみる。途端に、頭皮に爪を立てられた。

「つたい、ぞ、この馬鹿」

「適当につけようとしたから、怒ってるんじゃないか」

ははは、ウイガーでも冗談を言えるんだな。そう思った伊吹だったが、柔らかな眼差しをウイータに向け微笑む彼の姿に沈黙した。

まさか、本気か？

「……ひよつとして、ウイガーさん、動物好きなんですか」

「……何故、ひよつとしてなんだ。好きで悪いのか」

「いや、悪くは無いです」

意外なだけで。

だから、飼う事をあっさり了承したのか。納得だ。

しかし名前か。全く何も思い浮かばない。ペットなど飼ったこともなかったし。いや、一度、屋台で掬った金魚を飼っていたことがあった。一匹だけ長生きして、それに名前をつけていた。確か。

「小鉄？」

こよりと同じ、『こ』のつく名前が良いと、こよりが主張したからだ。大層な名前の金魚だった。黒の出目金。

自分だけ、名前の最後が『き』じゃないと、いつも気にしていた少女。

頭の上の小動物は、今度は噛み付かなかった。どうやら、その名前前で決まりのようだ。

## 伊吹、避難する 2

宿屋まで徒歩で2時間ばかりかかるといっているので、即、路面を走る電車に乗ることを選択した。形は電車に似ているが、良く見ると車輪も無く、微妙に浮いているそれはイグロブスという名前の乗り物らしい。

ウイガーは渋ったが、金を出す事を提案して黙らせる。外見通り苦労人の彼は、相当の儉約家であるようだ。

伊吹としても、彼のそんな部分には大いに共感できる。分かるとも。無駄な金は1銭たりとも使いたくない。だが、これから毎日徒歩で2時間もかけることこそ無駄である。時間は金よりも尊い。どんなに支払っても戻ってこないからだ！

……………。

イグロブスは2階だての6両編成。1階の部分は椅子が4列前向きに並び、その間に人が立てるようになっていて。2階の部分は聞くところによると、完全個室空間らしい。1両につき6個。その為、切符（正確には切符ではなかったが）の値段が全然違う。2階は下の約10倍の値段だ。

当然伊吹は1階を選択した。

幸い、ペットの持ち込みは可能だったが、その分料金が取られた事は忘れない。

殆ど揺れない快適な車内空間を楽しむこと、25分。

宿屋のある区域で2人は電車を下りた。明日からは1人（護衛はつくが、あくまで伊吹にも知られないように見張るらしい）である為、道を覚える必要があった。曲がる度に、目印になりそうなものを頭に入れる。

ウイガーの宿屋がある場所は、人通りの多い道から少し外れた、落ち着いた雰囲気のある通りであった。派手さは無いが落ち着いた、重

厚感のある石造り。渋い赤茶けた石壁の4階建てだ。中々雰囲気は良さそうだ。

従業員や、家族の出入りは裏口から。

野菜を育てる小さな畑に、数本の木、それから小さな小屋と井戸がある狭い庭を通って、中に入る。狭い廊下を通りながら、調理場、食堂、それから宿屋に通じる場所を教えられ、1番奥の階段へ。

宿屋の部分と従業員、ウイガールの家族が住む場所は、ほぼ完全に区切られているようだ。1つのドアと、調理場部分だけが宿屋と繋がっているらしい。

階段を上がった場所、2階部分に従業員専用……というか、カオロンとミーチェという人の良さそうな中年夫婦が使っている。家、というかマンション3LDK的な？1つの部屋だけは、通いの従業員が必要な時に寝泊りできるように空けてあるんだとか。

3階はハルベルト一家の住まいだ。

下とほぼ同じ間取りで、若干天井が高くなっている。ここで、ウイガーとその妹、母親の3人が暮らしているらしい。

特に説明する事も、聞く事も無い。伊吹は4階へと案内された。

一階は食堂件酒場になっていた。丁度昼ご飯の時間、中々人が入っているようで、志真は挨拶もそこそこに裏口から4階へと上がらされた。

4階部分が自分の住む場所になるだろうとは想像できる。

正直に、階段を上り下りするのが面倒だな、と思うが贅沢は言っていない。何せ、家賃はただなのだ。しかし。

「屋根裏……あからさまに物置ですね、ここ」

「すまん。他に部屋がなくてな。一応掃除は済ませてある」

広々とした部屋だ。伊吹の頭から飛び降りたこてつが、早速床を

走り回っている。宴会できそうなくらいに広い。但し天井は低い。手を伸ばせば天井につくくらいだ。3階部分の天井が高かった事から、何となくこういう気はしていた。

部屋の丁度半分の場所に衝立が置いてあって、その向こうに古そうなたンスやら布やらが積まれているのが見える。その無造作かつ無茶な詰め込み方には、いかにも急いで片付けた感が出ていた。

広々とした部屋に、ベッド、タンス、サイドテーブル、長方形のテーブル、椅子が4脚、何も置いていない棚が大小1つづつ置いてある。どれも年季の入った古臭いものだが、悪くはない。配置が適當すぎるが。

「足りないものがあつたら言ってくれ。トイレと風呂は1階にある共同のものを使ってくれ。風呂の時間は男は10時半以降だ。間違えるなよ。それと、洗濯は朝の7時までに籠に入れて外へ出しておいてくれ。食事は朝と晩は用意しておくようにするから、好きな時間に調理場へ行つて声をかけると良い。いらぬ時は、早めに伝えておけ」

一通りの説明を終えたところで、一旦言葉を区切った。他に何か言い忘れが無いか、思案するように上を見た後、視線を戻す。

「他に何か質問は？」

「質問は無いが、頼みがある」

ウィガールの力を借りて、部屋の家具の配置換えを行う。非力な伊吹1人では、机1つ動かす事も難しい。四苦八苦しながら20分。何とか納得のいく位置に家具を収めることができた。

横幅のある窓際に設置したベッドの上で、長い体を丸めて昼寝を始めるこてつ。その姿を見たウィガールが、若干疲れた顔を緩めた。

「こてつの餌の事があつたな」

「何か余り物で良いだろ」

「ヴィーダはケラの肉と内臓を好む。そちらは肉屋に頼みにいけば、取り置いてももらえる筈だ。小型の保存庫が必要だな。そこに入れて

おけば一ヶ月は持つ。それから、消化をよくする為のヤドリの葉、チヂコリの実も好んで食べる。この2つは近くに薬草を取り扱う専門店があるから、そこで買うと良い」

もつお前が飼えよ。

ついそう思ってしまうくらい、ウィガーの話は止まらない。というか、こんなに生き生きと話す彼を見たのは初めてだ。

「後、巢は高いところに作るから、上に板を置いて巢を作ってやれ。水浴びも好むから、1日に1度は専用の石鹸で洗ってやると虫も付かない。爪とぎ用の木もあった方が良く、後遊ぶのが好きだから何か玩具も。トイレ用に木屑も用意した方が良く、よし、今から行くぞ」

適当に済ませる事は、許されないようだ。

疲れているにも関わらず、再び出かける事になった。面倒すぎる。眠っていた筈のこてつも、ドアを開ける音がした途端飛び起きて、再び伊吹の頭の上ってきた。どうやらそこが定位置になってしまうようだ。嫌過ぎる。

無理に下ろそうとすれば、爪と噛み付き攻撃だ。

傷だらけの手を見下ろして、ついでに医療品も買っておこうと伊吹は溜息を吐いた。

1番金がかかったのが、こてつを飼う為の一揃いだった、というのが聊か納得いかないものの、ついでに生活に必要な衣料品も手に買えたので良しとする。同じように儉約家であるウィガーのお陰で物が良く安いという穴場の店も知ることができた。

あちこち店を周っている内に、昼の時間を過ぎていた。

こてつを連れて食事できる場所は流石に無く、出店で簡単なものを買ってベンチで食べる事にする。

紙のカップに入った赤い色のスープと、薄い卵焼きのような色合



いの皮に包まれた、具沢山の丸い食べ物。中身は甘辛いソースで味付けした、千切り野菜と鶏肉っぽいもの。それから、塩胡椒で味付けしたシンプルな赤身の肉の串焼き。焼き加減はレアだった。伊吹は少し顔をしかめた。

基本、生肉は苦手だ。焼肉でもステーキでも、しつかり過ぎるほど火を通したい派である。そうしないと、腹の具合が悪くなりそうな気がするのだ。

しかし、金を払って買ったものを残すというのは、もっと嫌だった。

いざとなったら、ウィガーに押し付けよう。

食べている最中、こてつが手元に下りてきて興味深そうに鼻をすんすんと鳴らした。

その姿に、ぴんとくる。こいつも、これなら食べられそうだ。丁度、苦手な焼き加減のものだし、物は試しに。

「食べるのか？」

肉の串焼きを1つ、外したところでウィガーから待てという言葉がかかった。

「そのままやるな」

徐に、ズボンのポケットから小さなナイフを取り出すと、伊吹の手から肉を奪い去った。そして、周りの焼けた部分……塩胡椒のかかった部分をあつという間にそぎ落とす。

「これで良い」

満足げに差し出されたのは、赤身の肉のレアな部分。

そこへ、こてつが飛びついた。くわ、と口を開けて小さな牙で肉にかぶりつく。美味しいのか、きゅうきゅう鳴きながら一心不乱に食べる姿に、ウィガーは再び顔を緩めていた。

そんな感じで昼食を済ませた後で、彼らは宿屋へと帰った。

### 伊吹、避難する 3

荷物を抱え宿屋に戻ると、2人の少女が庭に出ていた。その内の1人には見覚えがある。同じ時期、同じ日本からやってきた、世界喪失者。灰谷志真だ。

女子にしては背が高く、しっかりした骨格にショートカット。日に焼けた肌に顔立ちも凛々しく、ぱっと見少年のようにも見える。きりつとした濃い眉と、多少眦が上がっているせいだ。

隣に立つ長い髪を後ろでポニーテールにした女性は、知らない。だが、誰なのか大体見当が付く。すらりとした長身の彼女は、ウィガーに良く似た顔立ちをしていた。彼女がウィガーの妹なのだろう。凜とした雰囲気美人だ。

帰ってきた伊吹達に先に気が付いたのは、彼女の方だった。一瞬目を丸くした後、笑う。

「お帰りなさい」

「もう、待ってたのに、遅い！」

笑顔で迎える女性の隣で、志真が口を尖らせる。

「待て、何故お前が今ここにいるんだ。まだ学校の時間の筈だが」「今日は特別。先輩として、色々いっさんに教えてあげようと思っ  
て」

と、偉そうに無い胸を張る灰谷志真。

「……っていうか『いっさん』って何だよ。まさか俺のことか？」

「そうそう。伊吹さん、って言うとか堅いし、偉そうだし。でも呼び捨てだと怒るでしょ、絶対」

拒否する雰囲気前面に押し出していったにも関わらず、余裕でスルーされた。流石わが道に行く女子高生なだけはある。呼び捨てられるのもごめんだが、いっさんっていうのもどうなんだ。

「ね、ね、それよりさ、いっさんの頭に乗ってるの何！？すっごい

可愛いんだけど！」

悩む伊吹の元へ、志真がにじり寄ってくる。目がきらきらと輝いている。ここにも動物好きがいたか。

「グイーダね？飼うの？」

「ああ、伊吹がな。名前はこてつだ」

「こてつ？うわー、良いなー、可愛いー！私も飼いたい。ちょっと触らせてー」

うきうきと志真が手を伸ばした途端、こてつはするりと背中へ下りた。

「こてつ」

そのまま背中へへばりつかれる。しがみつく為にたてられた爪はシャツを突き破り、肌へ容赦なく突き刺さった。

「あつ、大丈夫だから、逃げないで」

諦めない志真が背後に回ると、背中をよじ登って肩へ。胸から腹、また背後、更に頭。人の体を犠牲にした追いかっこ。ちくちくと爪が刺さるたびに、鋭い痛みが駆け抜ける。

「いい加減に諦める！」

と、伊吹が切れるまでにそう時間はかからなかった。

「えーっと、じゃあ改めて。私はフィオーネ・ハルベルト。ウィガーの妹です。これからよろしくね」

結局触れず不貞腐れた志真を宥めながら、少女が伊吹にそう挨拶した。ウィガーよりも濃い青の瞳が、真っ直ぐに向けられて、伊吹は僅かに怯んだ。

目を見て話す、というのは苦手だ。未だに。

「……俺は、各務伊吹です。これから暫くお世話になります。よろしく」

「凄い、もうかなり喋れるんですね」

「いや、結構時間経ってますから、このくらいは」

「何それ凄い嫌味」

日本語で不満げに漏らす志真へ、伊吹は白い目を向けた。

「そう聞こえるっていう事は、自分の至らなさを分かってはいるんだな」

「いちいち日本語で嫌味言ってるじゃないでよ、嫌な奴！」

「面倒だから、いちいち喧嘩をするな」

と、ウィガーが口を挟む。

「今の内に、従業員の紹介も済ませておく。来い、イブキ」

家族以外の従業員は5名。思った以上に少人数で回しているらしい。どうも、最近どうにか客が増えつつあるが、一時期は本当に暇だった事が原因のようだ。

だから、ウィガーも貧乏性の儉約家になったのだろう。

「で、こちら、ルーミケラウスさん、ルーさんね。美人、色っぽい、素敵！男、いっぱい、もてる」

「ふふ、ありがとうシマ」

肉厚な唇をほころばせ、いかにも色っぽく微笑む美女。志真の説明の後半部分、恐らく男の人にもてもてだと言いたかったのだろう。納得だ。

「で、この人が、イブキ・カガミよ。私と、同じ、日本人！ひ弱、頭マシだって」

何なんだその紹介の仕方は！

文句を言いかけたが、ルーミケラウスに遮られる。

「ルーミケラウスよ、よろしくね」

濡れたような黒い瞳をとろんとさせ、気だるげに流し目を送られて、伊吹はたじろいだ。

視線と一緒に、フェロモンのなまでのまで送られている気がする。

「ど……どうも。イブキ、カガミです。よろしくお願いします」

「ふふふ、可愛いわねえ」

凹凸のはつきりした、豊満な体型。つい、胸の谷間や大胆なスリットの間から覗く足に目がいくのは仕方無い事といえる、筈だ。

「いっさん、やらしい目でどこ見てんの」

にやにやと、肘でつついてくる志真の頭を軽くはたいた。

「っていうか、何でお前までついて来てるんだ」

「だから、先輩としてだって」

迷惑過ぎる気遣いだ。ウィガーが何も言わないため、志真の私見に満ちた偏りのある紹介を受けながら、結局全員に挨拶して回る羽目になった。

調理場の、カオロン・ミーチェ夫妻に、ラクト。ラクトはフリッパと呼ばれる希少な種族で、恐ろしく無口だった。そして、逆に物凄くおしゃべりなアンナという痩せた女性が、掃除や洗濯などを担当しているとか。志真はそれらの手伝いを、仕事としているようだ。最後にこの宿屋の女主人であり、ウィガーの義理の母でもあるリアラ。彼女は何でも買出しで出かけているらしく、戻るのは明日の朝になるらしい。

リアラを除く全員の紹介が終わったところで、ウィガーは仕事に戻っていった。

志真は。

「いっさんの部屋ってどこ？ちょっと見せてよ」

どこまでも図々しい。

「断る」

「良いじゃない、けち。後で私の部屋も見せて……ま、それはおいおい。とにかく、今日は荷物の片付けとか手伝うから」

「生憎、手伝ってもらうほどの量は無い」

「いいから、いいから、遠慮しない。困った時はお互い様ってね」

むしろ親切の押し売りに困らされている場合はどうしたら。

空気を読まない女子高生を阻むものは何も無い。与えられたばかりの自室へ、無理やり案内させられた。

「天井低……埃っぽい」

広い部屋の真ん中で、きよるきよると物珍しげに視線を巡らせて、志真は感想を述べた。大きなお世話だ。

「窓開けよ、窓！」

せつせと勝手に換気を始める。伊吹は無視して、買ってきた荷物の整理を始めた。頭から下りてこないこてつが本当に邪魔だが、まだ大人しくしているだけマシだ。

きつちり服を畳み、タンスにしまう。

「良いなあ、この部屋」

勝手にベッドに座った志真が、羨ましそうな声を上げた。

「すごい良い。私もここが良かったー。屋根裏とか昔から憧れてたんだ、そういうえば。何か秘密の基地って感じで」

何故親しくも無い男の部屋で、こうもくつろげるのだろうか。神経が鉄でできているのか、存在していないのか。警戒心も遠慮も忘れたこの態度はどうなんだ。

最も、変に意識されて警戒されても、それはそれでイラっとするものがあるかもしれない。夜道を歩いていた時に、前を歩いていた女性が、異常に早歩きになっていった事を思い出してしまった。忌々しい思い出の1つだ。

「気が済んだら帰れよ」

「気は済んだけど、用はまだ済んでないよ」

「用？」

志真は切れ長の瞳を、真っ直ぐに伊吹へと向けた。意思の強さを感じさせるその眼差しが、苦手だ。伊吹の弱さ、卑怯さを見透かし、

非難しているようで。

「約束したじゃん」

「約束？」

「一緒に考えてくれるって言った。どうしたらモクを助け出せるか」  
不満そうに言葉を並べられて、徐々に思い出してきた。確かにそんな事を言った。封鎖されていた奥へ、志真が進もうとするのを止める為に。

そう、止める為にだ。

「迷ったけど、信じたんだよ」

声音から、どこか強引な明るさが消える。不安な胸の内を滲み出させて、志真は言う。

「同じところからきた人なんだし、やっぱ信じたたって」

しかし、右も左も分からない、無力な迷子が2人になったからと言って、一体何ができるといふのだ。

## 伊吹、避難する 4

実際に力を貸すかどうかは別にして、話を聞くのは無駄ではない。志真がどんな風にこの世界に迷い込み、どんな対応を受け外に出たのか。明日から通う学校の事も知っておきたいし、志真の目にはこの世界がどんな風に見えるのかというのもまあ興味が無い事も無い。

「この世界に来た時の事？」

一瞬、志真は顔をしかめた。

「あんまり覚えてないけどさ。商店街にいたんだよね。学校から帰る途中で、友達と一緒にだったんだ。でも、何か私だけ。気が付いたら……に、いて」

「何だった？」

「……………男湯にいたの！」

顔を真っ赤にして、志真が怒鳴る。

男湯。そこが、志真の落下地点だったのだ。笑える。遠慮なくにやにやする伊吹を、志真は睨みつけた。

「しょうがないじゃん、事故なんだから！こっちだって吃驚したよ！っていうか、絶対夢だって思ったし」

「まあな」

「そっちはどうなの」

「俺も商店街にいた。あの、キタノっていう花屋の傍」

「あ、私もその辺歩いてたかも。確か、2軒となりの本屋の辺り」

「亀井書店」

「そうそう」

古い小さな書店だった。漫画の数は少ないが、文房具や参考書などの品揃えは良かったから、伊吹もよく利用していた。



不思議だ。

何となく沈黙が落ちる。

部屋の隅に置いた丸木で、こてつが爪を磨ぐ音がかりかりと響く。何となく間の抜けるBGMだが妙にしんみりとした空気になった。

あの時、あの場所ですれ違っていたかもしれない。もしも、こんな事にならなかつたら、知り合うこともなかつただろう。全く人生というのは分からない。分からなさすぎる。

「いっぱい、人いたよね」

「……まあ、それなりにな」

「何で」

自分たちだけが。その先は声にならない。誰に言っても、どうしようも無い事だ。志真もその事は分かっているようで、誤魔化すように質問を変えた。

「えっと、いっさんは何処だったの？こっちへ出た時」

「砂漠」

「さばく？」

「お陰で危うく死にかけた」

ベッドの上で胡坐をかいた志真が、へえー、と感心したような声を上げる。

「それこそ夢だと思った。有り得ないし……」

咄嗟に出かけた吹雪の名を飲み込む。彼の事を、志真に話す気は無かった。面倒な事になるのは目に見えている。幸い、不自然に途切れた言葉を、志真は然程気につけなかった。

「いっさんって、いかにも頭固そうだもんね、神経質で細かそう」  
大きなお世話だ。

「で、施設に保護された後は？」

「えーつとね」

だらだらと志真の話が続く。これを現実だと受け止める気になった途端、施設から追い出されるようにして宿屋へきたこと。ウィガーへの不満。宿屋で働いている事。学校での話、同じ異世界人である友人の話。

例のモクという少年の話もあった。優しく物静かな人物らしい、話が聞く限り、随分風変わりな印象を受ける。主に格好とかが他にも三つ目、双子の吸血鬼、緑色の少女など、かなり個性豊かなクラスメイト達のようにだ。まずい。全然馴染める気がしない。騙されていても気づかなさそうな志真等よりも、余程確かな情報源となるだろうに。

「で、ちよつと色々あってどうしようも無くなった時に、モクが来て助けてくれたんだ」

「……って、おい」

「何」

「色々はしよりすぎだろう。全く分からなかったぞ。どうしようも無いって、具体的に何があったんだよ」

それは、と志真は言葉を濁らせた。

気まずそうに上目遣いで、伊吹の表情を窺う。同情するくらいに、そういう仕草が似合わない女だ。

「なんていうか、さっきも言ったけど、いっさんって頭固そうだからなー」

「だから何だよ」

いい加減苛々してきた。生来の性格は短気な伊吹だ。志真相手に猫を被る必要性も感じない。思い切り下に見ている。

「いっさん、幽霊とか信じる人？」

「……………」

黙り込む伊吹に、志真が慌てたように手を左右に振った。

「あ、私だってどっちかっていうと、信じないほうだったんだよ！

全然そういうの見た事無かつたし、あ、今も別に見えるわけじゃ無いんだけど。でも何か、声だけ聞こえるようになって。ラス……ラスカウルっていう、この宿屋で……なんか私の部屋で殺された女の人なんだけど」

「へえ」

「信じてない！本当なんだってば！ウイガーも事故物件だつていうのは認めたし。それに私、大分ラスに助けてもらったから！言葉の通訳とかしてくれて、そういう取引だったんだけど」

「現実から逃げたくなくなる気持ちは分からないでも無い」

「そんなんじゃないって！」

「良いから聞け。お前は病気だ。心の」

「違うんだってばー！」

神も幽霊も、伊吹は信じていない。死んだら終わりだ。その先は無い。そうでなかったら……。

異世界の存在も、そこへ来てしまったことも充分非現実的な話ではあるが、だからと言って幽霊がいると主張されても困る。妹が死んだ後、その手の話では散々嫌な思いをしてきたから余計にだ。

幽霊とか、亡霊とか、そういうものは全部心の中にあるのだろう。人の弱さや後ろめたさが、幽霊という幻を作り出す。

「石頭。だから言いたくなかったのに」

「早く現実を見るよ。幽霊のお陰で言葉が分かるようになっていた、っていう思い込みが無くなったら、案外すぐに言葉の壁は乗り越えられるかもしれないしな」

志真の殆ど使われていない脳細胞が、奇跡を起こすかもしれない。そう、励ましたつもりだったが、志真は頂垂れていた。

「だから、本当に違うんだって」

この様子では、奇跡が起こるのは当分先のような。

結局、意見が食い違ったまま、志真は宿屋の手伝いに行った。ようやく静かになった部屋で、伊吹はベッドのシーツについた皺を伸ばした。

今日からここで、新生活が始まる。

考えてみれば、1人暮らしというのは初めてだ。大学を卒業したら、出ないといけないだろうなどは考えていたが、まさかこんな形で家を離れる事になるとは思わなかった。

条件は悪くない。

与えられた部屋は古いが、十分な広さがあつた。

広すぎるくらいだ。

「……………」

事故物件。

伊吹の頭に嫌な言葉が浮かんだ。幽霊など信じていない。だが、それでも人が死んだ部屋だというのは気持ちが悪い。ウィガーが認めたというならば、志真が住んでいる部屋で人が殺されたという部分は、少なくとも真実であるようだ。

よくそんなところに住めるな。

伊吹だったら断固拒否する。そういう凶太さ……神経の強さは尊敬に値する、かもしれない。

そんなところに住んでいるから、幽霊の声が聞こえた気になっってしまったんだろう。

架空の友達を作り出す、子どもならば良くある事だ。女子高生が子どもの範疇に入るかは兎も角、異常な現実に耐え切れなかったのだらうと推測できる。

寂しかったのだ。

その気持ちは、少し分かる。

ベッドに座った伊吹の隣に、こてつがよじ登ってくる。長い体を丸めて、毛づくろいを始めた。

「……………」

まさか、寂しさを紛らわせようと、これを飼わせたわけじゃないだろうな。ふと、そんな疑念が浮かび上がった。

リザレットがそんな気を回すとも思えない。しかし、言葉どおり番犬として使えるようにも見えなかった。

一体、どういつつもりで……。

ひょっとして、体に何か盗聴器的なものが仕掛けられているとか。

思い付きを確認する為、こてつの胴体を掴み調べようとしたところ、がぶりと指に噛み付かれる。当然の反撃だった。しかし、見たところ何も変わったものはない。

離してやると、ベッドを飛び降り部屋の隅へと逃げて行った。

後ろ足で立ち上がり、首を伸ばしてぎー、と低い声で鳴く。どうやら怒っているようだ。咄嗟に悪い、と謝りそうになったが留まらなかった。

危ない。

もう少しで動物に話しかける寂しい奴になるところだった、と。動物を家族として可愛がる人間に喧嘩を売るようなことを考えていた。

## 志真と宿屋の一大事 1

各務伊吹。顔色が悪くて、根暗な感じの大学生。年は志真の6個上の23歳。大学は留年してるらしい。同じ日本人の誼で、あんまり気は合わなさそうだけでも、ちよつとはうまくやっていきたい。少なくとも志真はそう思っているのだが。

絶対、頭おかしい奴って思われてる。

由々しき事態だ。志真が睨んだ通り、伊吹は幽霊なんて鼻で笑っちゃうぜこの妄想壁女、というような態度を取った。むかつく。せめてラスカウルがまだいたなら、何とか認めさせる手立てがありそうなのに。

もうずっと、彼女の声は聞こえない。

あれで最後なのかな。

そんなのは寂しい。体が勝手に動く状態は本当に怖かったけど、でも出来たらもう1回ちゃんとラスカウルと話したい。また体に乗っ取られるのは困るけど。

(好きな人、できたんだよ)

聞いてばかりじゃなく、話す事もできたのに。

(……モク)

結局彼を助ける手立ても見つけられないままだ。肝心の伊吹も頼りにはなりそうに無い。

二ト口も放っておけというし、ウィガーはまだ怒ってるし。その上、何だか陰鬱な空気を纏っているため、話しかけ辛い。

志真のように保護を受けている異世界人が何かしたら、それは保護者の責任になる。ウィガーが怒るのも無理ないし、謝りたいと思

っているが、未だちゃんと話す事すらできていない。  
それに、そんなことを知ってしまったら、もう前みたいな無茶はできない。志真はこの宿屋の人達が好きだし、これ以上迷惑はかけられなかった。

本当に、何一つ上手く行かない。

客が去った席を片付けつつ、志真は小さく溜息を吐いた。

袋いっぱいになったゴミを外に出す為、裏口へ向う。いつからか、霧のような雨が降っていた。裏庭には明かりが何も無いから、とても暗い。今日のように、空に星が見えない日は特に。だから、すぐには気づかなかった。

「おい」

「いつひ!？」

誰もいないと思っていたところへ、急に声をかけられたら誰でも驚く。志真は飛び上がったと思わずゴミ袋を手放してしまった。幸い口は結んであるから大した被害は無い。

志真は声のした方角、裏庭の門の方へと首を回した。

闇に溶け込むような、人影があった。

黒い服を着ているから、余計に分からなかったのだ。高い位置に顔があった。褐色の肌に、白っぽい髪の男だ。顔は良く見えない。

「な、な何、です？」

未だ心臓が落ち着かない為か、噛んでしまった。

「ルーミケラウスは来ているか」

「え、ルーさん？」

彼女を訊ねてきたのだろうか。美人で豊満なスタイルの色気溢れる大人の女性であるルーミケラウス。彼女を訪ねてくる男は珍しく無い。ただ、こんな風に裏口からこっそり来るのはいなかった。

「いる、よ」

裏口から来るなんて、何かこそこそして嫌な感じだ。何か後ろめたいところのある人だったりして。

もしかしたら、ストーカー？

その言葉にようやく思い至る。あれだけの美人だ。そういう危ないファンがいたっておかしくない。

「何か、用？」

つい、警戒心を露に対応してしまう。いつでも中へ逃げ込めるように、さりげなくすり足で後ろへ下がる。

「いや。来ているなら良い」

あっさりと、男は引き下がった。くるりと背を向けて去っていく。拍子抜けの展開に、志真は肩の力を抜いた。もしかしてかなり失礼な勘違いをしてしまったのだろうか。いや、でも怪しかったし。いることだけを確認して、去っていくなんて。

何か危ない事を企んでいるのかも。

とにかく、ルーミケラウスに言っておいた方がいいかもしれない。しかし夕飯時という事もあって、志真が働く食堂は目の回るような忙しさだった。給仕をするルーミケラウスと話す暇などある筈もない。後で言おうと思っていたが、結局機会を得られないまま、志真はその事を忘れた。

思い出したのは、翌日。

ベッドでうつらうつらしていた時だ。

昨日のあの人は怪しかったな……やっぱ、ルーさんのストーカーかもしれない……。

志真は、勢い良く起き上がった。

「忘れてた！」

志真と違い、ルーミケラウスは営業時間の深夜2時まで働いている。もっと遅くなる時もあるから、そういう時は用意されている従業員用の部屋に泊まるらしい。



2時でも充分遅いよ！

毎日泊まっただけなのに、そういうわけにもいかないらしい。ともかく昨日、ルーミケラウスが帰っていて、夜道であの怪しい男に待ち伏せとかされていたら……。

どうしよう。

志真は一気に青褪めた。

着替える時間も惜しくて、寝間着のまま外へ飛び出す。どたばたと慌しく階段を駆け下りて、1階のドアを開け放つ。調理場や、ウイガー達が暮らすところへ続く唯一のドアだ。

まだ日が昇りきらない時刻ではあるが、調理場には既に人がいる。せつせと朝食の仕込をしていたのは、ラクトとアンナだった。

ラクトは料理人見習いの、小柄な若者。無口で繊細な人らしい。まだあんまり打ち解けてないから、良く分からないけど。

アンナは掃除や洗濯担当の元気の良いお姉さん。背が高く痩せていて、いつもにこにこ元気に良く働く、見ていて気持ちの良い人だ。何か珍しい組み合わせ。

「あら、シマおはよう」

「あ、おはようございます」

予想外の人物がいたことと、アンナの明るい笑顔とで、一瞬こへ来た理由を忘れた。

「今日は随分と早いねえ」

「はあ……あ！そうだ、大変！ルーさん、昨日帰った？ここ、いる！？」

「ルーミケラウス？」

野菜を切る手を止めて、アンナは首を傾けた。鍋で何か作っているラクトも、目の端でこちらを見ている。

「昨日は帰った筈よ。ねえ、ラクト」

「こくり、とラクトは頷いた。

「最近はずっと、いそいそ帰って行ってるのよルーったら。いい人でも出来たのかもねえ、

羨ましいなー」

楽しそうなアンナの言葉は、志真の耳には入らなかった。

どうしよう。

その事ばかりが頭を回る。別に何かあったと決まったわけじゃ無い。でも、無事も確認できていないから、安心できなかった。

全身黒尽くめの、いかにも陰気そうな男だった。時間が立つにつれ、男への印象はどんどん下方修正されていつている。見てもいない、にやりと薄気味悪く笑う男の顔まで、見たような気がしてきた。「どうしよう、ルーさんが！私、変な男の話、するの忘れた！」

「ええ！？なあに、シマ。変な男って」

「昨日、夜、裏口にいた。黒くて、大きい、変な人！ルーさんがいる、確かめて帰ったよ」

「えーっと」

必死な志真の言葉を、アンナは整理する。考える時に鼻の頭に人差し指を当てるのが、アンナの癖らしかった。

「分かった！昨日誰かルーを訪ねて来たのね。場所は裏口。その人は黒くて大きくてちよつと変わった人で、いるかどうか確認してから帰っていった。で、シマはその人の事を、ルーに言うのを忘れちゃってた、ってこと？」

うんうん、その通りだ！

首を何度も振るシマを見下ろして、アンナはうーんと細い首を傾けた。白い肌の下、青い血管が透けて見える。

「ねえ、シマ。その人ってどんな人だった？」

「え…っと、暗くて、見にくい。うーん、背が大きい、で、細いたぶん。後、肌茶色で髪が白……みたい。不気味」

深刻な顔で、何とか思い出そうと頑張る。が、アンナはあはつと笑い出した。

「シマ、その人は多分ルーの弟さんよう」

「え？」

弟って、何だっけ。一瞬分からなくなる。ああ、弟、弟ね。確かにルーミケラウスも言っていた気がする。

「背が高くて、肌の色はルーと同じで褐色ね。で、髪は白っぽく見えるけど、薄い金髪。暗かったから不気味に見えたかもしれないけど、本当はすつごく男前よ」

男前？だっただっけ？

そんな印象はまるでない。確かに顔は殆ど見えなかったが。

「時々ルーを訪ねて来るのよ。ね、ラクト？」

既に話題に興味をなくし、魚を捌く作業に熱中していたラクトが、こちらを見ないまま頷く。どうやら彼も、この件を心配する必要は無いという意見らしい。

「弟、さん」

「そうそう。だからシマ、ルーのことは心配しなくても大丈夫！」「ぼん、と肩を叩かれた。

安心したら、大騒ぎした自分が恥ずかしくなってきた。うわあ、何でいつもこうなんだろう。早とちりして、突っ走って。

「すみません、手伝う、する」

「ありがとうシマ。でもその前に、着替えた方が良いと思うよ」「最もなご忠告。寝乱れた寝間着姿で、志真は赤面した。

## 志真と宿屋の一大事 2

その早朝の出来事は、すぐに皆に知られることになった。朝早くから調理場を手伝っていた志真の行動や、朝早くどたばたと煩くしてしまったことからばれた。どうしたんだ、と聞かれて良い誤魔化しも浮かばなかったし、アンナさんの口を塞ぐわけにもいかない。そんな理由で、志真は朝から「シマはそういうところあるよなー」的な生暖かい笑みに耐えねばならなかった。うつつ、恥ずかしすぎる。

「全く、朝から人騒がせで迷惑な奴」

と、冷めた視線でばっさり言い放つ伊吹。その上から目線がイラつくるので、志真は彼の頭にへばりつくこてつに視線を固定させた。

「どこの世界でも小さな動物は可愛い。癒される。」

「……まだ、分かんないし。ひよっとしたらそれこそ人違いで、弟に似た別人って可能性だつて」

まだある、と思う。あくまで志真が見たのは弟だろ、つて流れになっただけで、確認があるわけではない。ルーミケラウスの無事だつて、まだ確認されていないのだ。

「なるほど。ルーミケラウスがその男に襲われてたら、お前の面目は立つわけだ」

「そんな事言つてない！」

伊吹の言葉に、志真はむくれた。何ですぐにそういう嫌な事を言うんだらう。性格悪い。志真相手にはこんなんだが、リアラを始め宿屋の皆には礼儀正しく気の付く青年みたいな顔をするから余計にむかつく。

「で、何でお前までついてくるんだ」

半歩先を、知った道を歩くように進んでいく伊吹が、今更そんな

事を言う。学校初日くらいは、一緒に行ってあげようと思っていたのに、行き先は学校ではないようだ。

「学校行かないの？今日からでしょ」

「午前中はバイト」

「え、どこで？」

一瞬、伊吹は嫌そうな顔をした。

「……異世界人保護施設」

「え！」

「ついてくるなよ」

そんな事言われなくても勿論。

ついていくに決まっていた。

元々、午前中の授業は自習なのだ。行っても一人っという時だけであるし、モクがない以上その可能性は高い。アルジャーはいたとしても寝ているし、二ト口は気まぐれだ。

うん。

迷惑がる伊吹にくつついて、志真は初めて電車にも乗った。

電車ではなくイグロースという名前の乗り物だが、覚える事を早々に放棄した志真は、堂々とそれを電車と呼ぶ。

これがまた感動した。すーいつて感じで進むのだ。全然揺れないし、早い。つり革とかなくても全然大丈夫だった。停車駅付近になると、窓ガラスに文字がぱつと浮かぶのも面白い。

大きな建物の中を通ったり、湖の上を走ったり。外の景色も楽しめた。ちなみに、切符みたいなものは無く、親指の腹にぼんとスタンプみたいなものを押された。バーコードみたいな緑の線。それが1日乗車券の役割を果たすらしい。1日で消える。

伊吹は既に3ヶ月分購入しているのだが、色が違うくらいでマークは同じに見えた。

自分の親指についたそれを、ついじつと眺めてしまう。

「これってさ、すぐ消えちゃいそうじゃない？」

擦ったり、水で洗ったりしたら消えたりして。折角お金を払っているのに、勿体無い。1日分しか購入していない志真はともかく、3ヶ月分も払った伊吹は悲惨だ。

「インクでつけてるわけじゃないらしいからな。平気だろ。呪印、っていう手法だ」

「何それ」

「書いているのではなく、肌の色を一部変色させている、らしい。あまり深く考えない方が良さぞ。どうせ分からないからな」

「……良く分かんないけど、体に悪そう」

本当に消えるんだろうな。

今度は逆の不安が出てきた。

程なくして、電車は目的地についた。

駅から徒歩20分ほど。人ごみからどんどん離れて歩いていくと、異世界人保護施設にたどり着く。先の見えない白い壁。本当に、ここまで広くなくても良いんじゃないかっていうくらい広い。

門のところで強面の警備員に身元確認をされた後、無事に敷地内に入ることができた。要注意人物として登録されていたらどうしよう、と密かに心配していたので、ほっとする。

思えば志真は、あまり施設内を見回ることなく外へ出てしまった。こうやってちゃんとゆっくり風景を楽しむ機会を持ったのは初めてだ。目に鮮やかな緑の森林や、なだらかに続く芝生。流れる小さな小川に、水辺に咲く可愛らしい花のどかだ。

こういふところで、のんびりできる時間がモクにもあれば良いのだが。

(外に出してもらえないわけじゃないよね……)

何せ、モクは保護施設に捕まっている状態なのだ。本当に何とか

ならないだろうか。

「妙な事は企むなよ」

「企んでないよ！ただ綺麗な景色に心癒されてただけで」

後、ちよつと、モクの心配をしたただけだ。伊吹は疑わしげな視線を志真へ向けた。全く信用ないようだ。気まずい。

「えーつと、そうだ、いつさんの職場つてどこ？」

「……まさかお前、そこまでついて来るつもりか」  
「だって気になるし」

ここまで来て、何を今更。絶対行くぞ、という志真の意気込みが伝わったのか、伊吹は溜息を吐いただけで何も言わなかった。

暫く歩くと、開けた場所に出た。沢山の畑と、その向こうに温室みたいな建物がいくつつか。

「うわ、すつごい。こんな所もあつたんだ」

施設で出す食事は、自家栽培だったのか。色々な種類の野菜や植物を育てているらしく、その内のいくつかはこっちの店や調理場なんかでも、見たことがあつた。

「おはよう、イブキ」

罅割れたような、くぐもつた声が突然聞こえた。え、どこから！？と飛び上がる志真を無視して、伊吹が答える。

「おはようございます。今日からよろしくお願いします」

と、軽く頭を下げた先にいたのは、一本の枯れ木……ではなく、何と人のようだった。

すっかり風景に溶け込んでいたから、気が付かなかった。というか、気が付いた今も木に見える。固く節くれだった茶色の肌、頭部からわさつと伸びる黄緑の芝生のような髪の毛。物凄く大きくて、手足も長く枝のようだ。

口を開け、間抜けな顔で眺めていると、落ち窪んだ小さな目が志真の方を見た。

「そちらの、可愛い、お客さんは？」

その問いかけに、沈黙が落ちた。

誰が可愛いって？

そういつ目つきになった伊吹の背中を押して、志真は笑顔になった。

「私、シマ・ハイタニです。えーっと、いっさん……イブキさんと同じ、世界の人です。よろしく！」

「わし、はシエンゾ。こちらこそ、よろしく」

見た目はちよつとばかり怖いのが、良い人だ、と志真は思った。可愛いなんて、本当に滅多に言われた事無い。

シエンゾも、別の世界から来たという異世界人の1人だった。保護施設で、異世界の植物なんかを栽培研究している人で、ここで働く事になった伊吹の上司なのだという。

「へー、いっさんが農業か」

黒っぽい厚手のシャツと、裾が細くなっただずぼんに着替えた伊吹を眺める。

「いっさんが農業」

「2回も言うな」

「だって、何か意外だ。似合わない、ってどうか」

「うるさい」

流石にあんまり仕事の邪魔はできないので、志真は畑の隅っこで見学している事にした。伊吹の頭から下りたこてつも、あちこち走り回れて楽しそうだ。

広い畑では、彼らの他にも幾人か作業しているのが見えた。伊吹は主に温室の中で作業をしているらしかった。研究所も兼ねているため、一般の人は入れないことになっているとかで、志真も立ち入



することはできなかった。

凄いな。

やっぱり、志真よりも長く生きているからだろうか。伊吹はもう、この世界でちゃんと生きていく為の土台を作り始めている。

（私なんて、まだ全然……将来とか、どうしよう）

言葉で大きく躓いているのに、先の事までなんてとても考えられない。

まあ、何とかなるよね。

基本的に楽天家の志真だった。遠い将来のことは棚上げし、当面の問題がやっぱり気になる。どうやったらモクを助けられるか。せめて、何とか話ができないものだろうか。

あんまりに暇だと、ろくな方向へ思考が働かない。

仕方ない、ちよつとでも手伝おうと志真は立ち上がった。猫の額くらいの庭しかなかった志真の家では、野菜なんて育ててなかった。サボテンですら枯らしてしまう、ものぐさな母親を持ったせいでもある。

でも確か、小学生の時に朝顔とか育てたような。

あれ、結局咲いたんだっけ。不確かな記憶を遡りながら、志真は畑の隅で雑草を抜き始めた。庭の草取りはよくやらされたし、これくらいなら失敗無くこなせる……筈だったが。

いくつか草を抜いたところで、手元に影が落ちた。

顔を上げると、太陽を背に頂垂れる大きな枯れ木……ではなく、シエンゾがいた。

「すまない、シマ。それは『雑草』では、ない。抜いては、困る」

「えーわ、ごめんなさい！」

慌てて抜いたものを土に埋めてみる。……大丈夫かな、もう駄目だろうか。

「そこなら、他の、育てる植物の邪魔に、ならない。そのまま、そこに生きていても良い」

何て言ってるんだろう。シエンゾの言葉はちよつと癖があるから、余計に聞き取りが難しい。淡々としているから、物凄く怒っているわけではない感じだが。

暫くして、シエンゾが膝を折った。ぱきぱきと聞こえる音は何だろうか。皮膚とかが割れる音じゃないよね。

「シマ。何か、悩みがあるのか。元気が、無い」

優しい労わりの言葉だった。シエンゾの雰囲気は、何となく田舎のお祖父ちゃんを彷彿させる。促されるまま、シマはモクのことを話した。

話を聞いてもらえるだけで良い、そんな感じで話したのだが。一通り志真の話を聞いたシエンゾは、ゆっくりとした口調である事を教えた。

「手紙、ね」

携帯のメールでやりとりするのが当たり前だった志真は、そんな事も思いつかなかった。手紙のやりとりは禁じられていない。ただ、どうしても検閲は入ってしまうらしいけど、でも別に構わなかった。ちよつとでも、モクの様子分かるなら。早速手紙を書こう！とはりきっている志真を、伊吹は冷めた目で眺めている。

「しかし、お前。こっちの文字は書けるのか？」  
はつとする。

会話にすら苦勞している現在、文字を書くなんてできるわけがなかった。ハードルが高すぎる。だが、ここで諦めるわけには。

「いつさん、協力して！」

「そんな義理は無い」

「そんな冷たい事いわないでよー！同じ日本人の仲じゃない」

「ここで騒ぐな。迷惑だ」

うんざりしたような顔で、声を潜めて伊吹が苦言を呈す。う、と志真は言葉に詰まった。何気なく見渡すと、迷惑そうにこちらを見る人の顔がちらほら。志真と伊吹は再び電車に乗っていた。向う先は、学校だ。

伊吹は今日が初登校ということ、色々分からない事もあるだろう。学校への道順や、手順など必要な事は教えてあげようと思っていた。先に世に出た先輩として！

しかし、だ。

抜かりなく下調べをしてきた伊吹に、手を差し伸べる隙はなかった。

（大体、良く考えれば電車でなんか通った事無いし）

むしろ、伊吹がいなければ学校へたどり着けないのは志真の方だ

った。門番に腕章を見せるのも、ジャイルと簡単な受け答えをするのも、その後荷物を預けたり硝子玉に触ったりするのも全部、伊吹が1人でこなした。説明する隙がまるで無い。

うとう、何か色々負けてる気分……、志真は部屋の隅で机に頭を乗せて頂垂れていた。

恨めしげな視線の先には、伊吹と二ト口、更にはアルジャラーの打ち解けた姿がある。

(動物使うとか、ずるい！)

可愛いですー、とうつとりしているアルジャラーは、伊吹のペットがお気に召したらしく、珍しくちゃんと起きています。志真からしてみれば、既にぺらぺらの域に達している伊吹の語学力のお陰か、二ト口との会話も盛り上がっているようだ。

「で、施設で働いているのか。中々思い切った事するな、アンタ」

「何だかんだ言つて、あそこが一番馴染みやすいことは間違いない。それに給料も悪くないから」

「まあそれは確かに」

「可愛いですー」

……なんか、寂しいんだけど。

いやいや、あんなの新人生が物珍しいだけですよ。いい気になっていられるのも、今の内だって。心の中でそんな悪態をつきながら、志真はペンを握った。

気を取り直して、モクに手紙を書くこうと思う。

最初はやっぱり、こんにちはからだろうか。拝啓……とか、そういう手紙の書き方とか全然知らない。異世界にもそういうものはあるんだろうか。なくても、モクは気にしないだろうけど。

元気でいるのかとか、ごめんなさい、ありがとうとか。

伝えたい事は沢山あるのに、中々言葉に表せない。そうこうする内に、先生がやってきて授業が始まってしまった。広い教室はがら

んとしている。じいは休み、モクもハルラックも施設にいるため、今日の出席人数は4人だ。

入学時期にも授業の進み具合にも差があるため、授業は一人ひとり、個別の課題をあたえられる形で進む。今現在、志真に与えられている課題は文字の読み書き。モクに手紙を書くという目標ができたので、やりがいもある。

今日が初日の伊吹は、学習状態を見るためのテストを受けている。部屋の隅の席で、教師に見守られながらテストを行う伊吹の姿を、志真はつつい気にしてしまう。口頭でよどみなく受け答え、紙面にすらすらと書き付ける。

余裕たっぷりといった感じの各務伊吹。

何、この差……。

再び志真は、落ち込まずにはいられなくなった。完璧じゃないか。言葉も上手だし、仕事も自分で選んでこなしている。その上、学校でも順調とか。

羨ましいを通り越して、妬ましい！

「シマ、お前まだ落ち込んでるのか」

隣の席に座りながら、二トロがこそつと耳元で囁く。

「言っただろ。モクのことなら心配するな。言っただろ、モクは目を付けられている、要注意人物だって。こういうのは、よくある事なんだ」

モクの事で落ち込んでいるわけではなかったが、二トロの言葉は気になった。

「前も、それ言った。ようちゅういじんぶつ、って？」

「この世界にとって、都合が悪い存在って事だ」

二つの目を三日月に細めて、二トロが笑う。額にある三つめの目だけは見開かれていて、じっと遠くを見つめているようだった。そ

の顔は、何とか悪巧みをする悪者にしか見えない。

「つごう、悪いって何？」

妙な不安が胸を過ぎって、聞かずにはいられなかった。そんな、不安そうな顔になった志真を見て、二ト口はにっと顔を崩した。

手を伸ばし、乱暴に頭を撫でられる。

「ちよつと、二ト口っ」

「シマ。お前はここへ来る時、何か聞いたか？」

「はあ？」

「呼ぶ声……、自然と引寄せられるような、自分を呼ぶ声を。この世界に迷い込む前に聞いかなかったか？」

自分を呼ぶ、声？

二ト口の言葉の意味が分からない。その真意が知りたくて、志真は彼の緑の目を見つめた。この世界に來た時の事は、今もはっきり記憶している。自分を呼ぶ声、そんなものは聞かなかった。けれど、それとモクと何か関係があるのだろうか。

「二ト口？」

「……いいや、何でもなし。そういえばお前、モクに会うために施設に忍び込んだんだろ。良く無事だったな」

あからさまな方向転換で、消化不良だ。

「二ト口、ちゃんと話す！」

「お前はやつぱりお姫様って柄じゃないな、どっちかっていうと王子様とか、ヒーローとかそういうの向きだ」

「うるさい！」

「褒めてるんだぜ」

「絶対、嘘！」

授業中という事をすっかり忘れていた志真は、その後先生にすっかり叱られる羽目になった。

結局、はぐらかされるし。

二トロが結局のところ何を言いたかったのか、志真には全く分からなかった。

## 志真と宿屋の一大事 4

結局、モクへの手紙は一行しか書けなかった。多分、激しく汚いんだろう、歪んだ文字で書かれたのは、元気ですか、大丈夫ですか、という二つの言葉。もっと色々、例えば……、

この間は助けてくれてありがとう、モクが来てくれて本当に嬉しかった。でも、そのことでモクが捕まってるって今まで気がつかなくて、ごめん。本当に、ごめんね。私にできること、何か無いかな？何でも良い。何でもするから。

(……………あれ、ちよつとなんか恥ずかしいかも)

伊吹やウイガーに協力してもらおうと、最初は考えていた。だが、よくよく考えてみたら、それはかなり恥ずかしい事ではないかと思えてくる。やつぱり、時間が掛かっても自分一人で書き上げた方がいいかもしれない。

夜まではバイトの時間になるから、手紙を書くのはその後だ。

「よし、いつさん帰ろ！」

身支度を整えた後、未だ座って本を読む伊吹に声をかける。その本の分厚さにまず吃驚する。手作りっぽい辞書を手に置いているとはいえ、あんなに字が細かいものをよく読もうという気になるものだ。

「先、帰れ。俺はもうちよつといる」

本から視線を外さないまま、伊吹は言った。隣ではアルジャラーとこてつが居眠り中。二ト口は授業が終わるとさっさと帰っていった。ちよつと迷うが、志真に寄り道している時間は無い。

「分かった。じゃ、先帰るね」

ひらひらと手を振ってみるが、反応なし。愛想のかけらも無い。志真はちよつと口を尖らせて、学校を後にした。



「ただいま！」

いつものように裏口から入り、志真は調理場を覗いた。そこはいつも活気に満ち溢れていて、カオロンとミーチェの明るい笑顔がある筈のだが。今日はしんと静まり返っていた。くつくつと鍋で野菜が煮える音が響く中、ラクトが静かに野菜を洗っている。

「あれ、ラクトさん、ひとり？」

ちらり、と視線を寄越して、ラクトはこくりと頷いた。

「えーっと、どうして？カオロンさんと、ミーチェさんは？」

ラクトは黙ったまま、人差し指を上に向けた。相変わらず無口！これは多分、上にいるっていう事だろうか。この上は確か、カオロン達の住居になっていた筈。

しかし、この時間になっても調理場に下りてこないなんておかしい。いつもなら、とっくに料理の準備をしている頃だ。2人の内どちらかが休みという事はあっても、2人ともいないなんて今までなかった。

気になる。

本来なら部屋で着替えて手伝いに入るところだが。迷っているところへ、フィオーネが下りてきた。

「あ、シマ。帰ってたのね、お帰り」

「ただいま」

心なしか、フィオーネも若干疲れているような。顔色もちよっと悪い。

「大丈夫？具合、悪い？」

「ああ、カオロンさんのこと聞いたのね？大丈夫よ。怪我って言うてもちよっと手首を捻っただけなの。念の為、安静にしてもらってるだけで。ミーチェさんも血圧が上がって、ちよっと眩暈がするよ。うだから休んでいるけど、大丈夫」

「カオロンさん、怪我！？なんで!？」

「あ、あれ？聞いてなかった？」

困ったように、フィオーネが苦笑する。

「だからね、暫く食堂の方はお休みすることになったの。宿泊しているお客様にだけ、食事を用意することにして。だから、シマも暫くは仕事をお休みして良いよ」  
「でも」

「大丈夫。今は泊まりのお客様も10組だけだし、私たちだけで充分だから」

じゃ、これからラクトを手伝うから、といそいそ調理場に入っていくフィオーネの様子は、明らかにおかしかった。

何かちよつと、隠し事をされているような気がする。その上、微妙に避けられている、ような。何で!? 朝は普通だったのに、その間に何かしただろうか。いくら考えても答えは出ない。カオロンの怪我、ミーチエが体調を崩したこと。そして、食堂を休業すること。とりあえず荷物をおいてこようと、部屋への階段を上りながら疑問を整理する。

志真の部屋は4階の、1番上等な客室だ。4階には他に3つ部屋があるが、そこを利用する客は殆どいない。2階と3階にはそれぞれ4人部屋が5部屋と、2人部屋が10部屋用意されている。1階には2人部屋が6部屋と、ベッドのみの個室が6部屋。

全部で、

(えーつと……45部屋あつて)

それでたつたの10組つて少なすぎないだろうか。前はもうちよつとお客さんがいた気がする。宿泊客が少ない時でもこのお店がやってこられたのは、食堂の料理が美味しかったから。その食堂が閉じてしまったら。

(大変、じゃない?)

フィオーネの疲れたような顔を思い出して、志真は不安になった。

この宿屋、やっていけるのだろうか。

勿論、今日がたまたまお客さんが少ない日、というなら問題は無い。でも、妙に胸騒ぎがした。カオロンの怪我の原因や、ミーチェの血圧が上がった原因も知りたい。

（やっぱり、おかしいよ。朝まではあんなに元気だったのに）

いてもたってもいらなくなって、志真は部屋に鞆を投げ入れると、再び調理場へ急いだ。やっぱりちゃんと話を聞きたい。

石頭のウィガーならともかく、フィオーネならちゃんと答えをくれる筈。

「フィオーネ！」

勢い良くドアを開けた。だが、そこにフィオーネの姿は無かった。ラクトが1人、野菜をリズミカルに刻んでいる。

「あ、あれ…？フィオーネは？」

ちらり、とラクトが視線を超越す。何となく、デジャヴなやりとりだ。ラクトは人差し指を外へと向けた。出かけた、という事だろうか。

「あ、買い物、かな」

「……………」

じつと、黒い目が志真を見つめる。何だか気まずい。小柄で青みがかった肌と尖った耳が特徴的な青年は、いつも無表情で無口だ。未だにその心の機微は読めない。

130cmに満たない小柄な体躯に錯覚してしまうが、相手は立派な成人男性。

皆で一緒にいる時は良いが、こうして2人きりだと少し気まずい。何を話したら良いか分からなくて。

「あー、あの、邪魔、ごめんなさい」

料理の邪魔をした事をとりあえず謝ると、ラクトは静かに首を横に振った。薄い唇が小さく開く。お、と思い見ていると。

「邪魔なのは俺も一緒だ」

と、言った。思いの他、低い。でも透き通った声なのだ。

ラクトが喋った！

他の人と話すところを見た事は何度かあるが、自分にむかって喋ってくれたのは、今が初めてだった。目を丸くする志真に、ラクトは語りかける。

「姿が違う俺達のような少数民族を、嫌う人は多い。異世界人も同じだ」

「……………うん」

「そのせいで、客が減る」

「……………え！？」

志真は凍りついた。まさか、この宿屋の客が少ないのって、私たちのせいなのか？

異世界人がいるから……………？

ラクトの目がイエスと言っている。言葉にしなくても、通じ合えたみたいだが、全く嬉しくない。内容的に。

「……………どうしよう」

例えそうだとしても、志真には他に行くところがない。いや、リザレットが言っていたっけ。必要と理由があれば、保護者を変えることも出来る、と。

その場合は、確か。

ユーイ・ユーイのところだった筈。

「…………………………」

どうしよう。本気で嫌なんだけど。でも、だからってこの宿屋に迷惑をかけるのも嫌だ。このまま客足が遠のいて、この宿屋が潰れてしまったら。

駄目だ、そんなの！

早急にどうにかしなくちゃいけない事が、また1つ増えた。

結果の原因が分かっているのなら、対応はしやすい。原因を取り除けばいいのだ。しかし、問題は、原因が志真達……異世界人にあるということ。

（出て行けば、問題解決するんだろうけど）

途端に嫌味なユー・ユーのにやりとした顔が浮かぶ。恐ろしい。あんな男と一つ屋根の下とかが有り得ない。ぞっとする。青ざめ鳥肌が立った腕を擦り志真は唸った。

（出来たらそつちは避ける方向で！）

しかし一人で考えてみても、良い策は浮かばない。原因が自分達にあるっぽいから、フィオーネ達にも言い出しづらい。

結果。

「で」

斜めやや上から冷ややかに見下ろす各務伊吹。とりあえず彼は同じ立場の人間。だからこそ、真剣に考えてくれる筈だと思っていた。その反応の悪さは想像していなかったから、志真は戸惑う。

「でって、大変じゃん。何でそんなに……フツーなの」

「大変って言っても、俺は別にこの宿屋の従業員でもないしな。失業はしない。保護期間中は最低限の衣食住は保障されることになつてるから、ここが潰れてもどうにかしてくれるだろ。勿論、お前もな」

「なっに、それ！」

伊吹の言葉に、志真は憤慨した。

確かに伊吹はここに来てまだ2日目。宿屋の人達ともあまり打ち解けてないかもしれない。親身になって考えろって言っても、無理だろう。だが、この宿屋の危機の原因は自分たちにあるのだ。それ

なのに、何とも思わないのだろうか。

「信じられない。ちょっとでも良心が痛んだりしないわけ！？何とか力になりたいって思わない！？いっさんってば薄情すぎるよ！」

大体、ベッドに足を投げ出して、なにやら分厚い本にメモを挟む作業をしながらという、その態度も酷い。

「俺が良心を痛めたところで何か解決するのか？」

「そうじゃなくて！何か良い方法思いつかないかって相談してるんだって。何か考えてよ」

「……ガキ」

苦々しい溜息を吐いて、伊吹が言う。

「あのな、俺らに考え付いて実行して解決できるレベルなら、とっくにウィガー達がやってるよ。異世界人の俺らが、価値観も考え方も何にも分かってないのに、良い方法なんて思いつけると思うか？大体だ、お前の捕まったお友達はどうなったんだよ。どうせ、未だにどうにもできてないんだろ。じたばたしたところで、無理なんだよ。俺らは所詮余所者だ。何とかこっちの世界にあわせて生きてくしかない。それくらい分かれ。そして俺の足を引っ張るな」

モクのことを言われると、心臓がぎゅっと握られたみたいに痛くなる。

志真のせいで、捕まってしまったモク。あの時、志真は何も知らなくて、モクを助ける事が出来なかった。ずっと、後悔している。

そして今、また志真のせいで、異世界人のせいでこの宿屋が潰れそうになっているのだ。

「じたばたするよ。当たり前じゃん」

じつと、してなんかいられない。何もできないって、見てみぬふりではできないし、諦めたくはなかった。

「諦めたら本当に何も変わらないよ。そんなの、私は嫌だ。いっさんは、本当にそれで良いの？そりゃ、ここが潰れても私達は生活に

困らないかもしれないけど、私が嫌だって思うのはそんな理由じゃなくて」

宿屋の皆は、志真を受け入れてくれている。笑顔で暖かく迎えてくれて、心配したり、優しい言葉をかけてくれたり。ただいま、つて言う事が当たり前になつていた事に気がつく。ここはもう、志真の居場所、家なのだ。

なくなつたら、困る。

ここの人達が皆ばらばらになつてしまつのも、嫌だ。すごく、凄く嫌だ。

しかもそれが、自分のせいなんて。

じわり、と目の奥が熱くなつてきた。

「お願いだからいっさんも何か考えてよ。頭良いんでしょ」

「俺はお前に俺の頭は良いとか言つたことは無い」

「言つて無いけど、思つてるんでしょ、どうせ」

「……まあ、お前よりはな」

「だったら、何か考えてよ。私、何でもするから！」

力仕事でも、きつい仕事でも。何でもこいだ。頭を使う事は不得意だが、体力と運動神経には少しばかり自信がある。

そんな志真を、伊吹は何故か半眼で眺めた。

「言う人間によつては、健気で胸を打たれる台詞になりそうなんだがな」

「残念そうに言うな！」

「残念なのはお前の頭だ。この宿屋を救う方法なんて簡単だろ。俺達が出て行けばそれで済む話だろ」

「そんなの私だって分かつてる！それでもできれば避けたいから、困つてんじゃない」

「あれも嫌、これも嫌。本当に子供だな」

再び本に視線を戻して、伊吹は言う。呆れきつた口調だった。事実ではあるのだが、そんな言い方されると反抗したくなる。

「だって」



「幼見的万能感。子供の頃は誰だって自分が何でも出来るって思ってる。でも普通はすぐに現実に気がつく。世界は自分が思っている通りになんて動かない。甘えんな」

伊吹の言葉はどこまでも厳しい。

志真だって、別に世界の全てが思い通りにいくなんて、思っていない。ただ、変だと思うことをそのままにしたいだけだ。モクの不遇や、この宿屋の現状。そんなのおかしいって思うのに、諦めなくちゃいけないのだろうか。

そういうのが、大人の考えっていうやつなのか。

志真は俯き、ぎゅっと唇を噛んだ。

「心配しなくても、背に腹は変えられない。この宿屋が本格的にやばくなるようなら、向こうがこつちを追い出す筈だ。言語習得も進んでいるし、保護者が日本語習得者じゃなくてもそれ程問題無いだろうし。宿屋の心配より、自分の先行きを心配したほうが良い」

もしかしたらそれは、伊吹なりの気遣いから出た言葉なのかもしれない。遠まわしすぎる『気に病むな』という言葉にも聞こえなくもなかった。しかし、見当はずれも良い所だ。

「いっさんは、全然分かってない！」

この宿屋の人達を知らないのだ。来てまだ2日しか経っていない。殆ど関わっていないのだから当たり前だ。

「リアラさん達は、私達を追い出したりしないよ。宿屋にお客が全然来なくなっても、絶対」

「……その根拠は？」

「凄く優しくして良い人達だから！」

言い切ると、伊吹は心底呆れたような顔になった。

「お目出度い奴だな」

「だって、本当にそうなんだから仕方無いじゃん」

「倉廩（そうりん） 実ちて 則（すなわ） ち礼節

を知り、衣食足りて則ち 栄辱（えいじよく）を知る」  
「はあ？」

突然何か難しい事を言われた。日本語なのに、あまり分からなかった。礼節とか衣食とかくらいは分かったが。

「余裕の無い人間は、人に気を使う余裕も無い。第一に守るべきなのは家族だろ。その家族の中にお前は入ってない。確実に」  
う、と志真は言葉に詰まる。

胸を抉られるような言葉だった。何故彼は、いつもいつもこういう酷いことを言うのだろう。

「自分がよそ者だって事を忘れるな」  
何せ世界すら違う。

くそう。

容赦の無い言葉の暴力。

しかし志真はどちらかというと、凹むよりも。

「分かった。いっさんはそう思ってくれば良い。でも私はリアラさん達の事信じる」

闘志に燃えるタイプだった。

「良いよもう、そうやってずっと一人で暗く閉じこもってれば！いっさんなんか頼った私が馬鹿だった。宿屋の事は私が何とかする」  
言い捨てて、志真は伊吹の部屋を出た。あんまり腹が立っていたので、思わず強くドアを閉めてしまった。

実際何も考えは無い。

只の勢いで発言。しかし、絶対に何とかしようと言う気持ちだけはあある。

そうだよ、だって何とかしなきゃ。

志真はまた家族を失うことになるのだ。

## 菊乃の不在

何でこんな事になったのだろう。

熱で朦朧とする意識の中、ぼんやりと菊乃は考える。苦しくて、痛くて、考えが纏まらない。怪我をしたのだ。どうして、理由ははっきりと思いつけない。どうしよう、苦しい。頭が重くて目を開けることも出来ない。かなりの重傷のようだ。

事故にでもあったのだろうか。

どうしよう、帰らないと、お母さんが心配するの。

一人で台所に立つ母の後姿が浮かんだ。痩せた小さな背中だ。また、迷惑をかけてしまう。

ごめんなさい、と呟いて、菊乃は再び意識を失った。

\*\*\*

菊乃が攫われて5日が経っていた。未だに手がかりは見つけられていない。ジエレミーやウイガーは青い顔をしていたが、態々攫っていたのだ。生きている可能性は高い。

ただ、無事とはいえないだろうが、とユーイは憂鬱な気分になった。

怪我の具合も心配だが、それよりももっと憂慮すべき問題がある。菊乃を攫った犯人が、敵対者の核を持ち出した可能性が高いのだ。

敵対者である疑いが晴れたばかりだというのに、今度こそ本当に敵対者の苗床にされてしまっているかもしれない。どこまでも運が無い。流石のユーイも同情を覚える。ここにいたなら、そんな事態にはならなかっただろうに。

自業自得だ。

そう思う気持ちもあるが、一方で罪悪感も沸く。意地を張らずに、助けてやればよかったのだ。そうすれば、少なくともこんなややこしい事態にはなっていなかった筈。

ジェレミーの無言の責めや、ウィガールの小言も鬱陶しいが、一番苛々するのは過去の失敗を思い出すことだ。あの時も意地を張って、彼女は姿を消した。ユーイの前から、何も言わず、何も残さず。菊乃とは違って、自らの意思で。

2人はまるで似ていない。

姿も性質も。それなのに、時々重なる部分があった。頑ななところとか、不器用なところとか。だから余計に、菊乃を見ると複雑な気持ちになった。

優しくするのは難しい。

元々、捻くれた性質のユーイには。

「黄昏ているのも良いが、そろそろ状況を報せてくれ。分かっているところまで構わない」

一人でいた部屋の静寂を、唐突に他者の声が破る。瞬きの間に、音も無く目の前のソファーに白い衣装に身を包んだ、背の高い男が現れる。長い足を優雅に組み、その上で指を重ねた。

銅色の髪に、緑に金を混ぜたような不思議な色合いの瞳。凡庸な顔立ちであるのに、何故か人を惹きつけるものがある男だった。王家の血、という奴だろうか。

ユリウス・フィナス・ノア・アティカ。

この籠の大陸アティカを統べる王家の第二王子。異世界人対策の指揮を執る者の一人だ。

「せめて、ドアから入ってくれといつも言っているだろう」

「騒ぎになると、面倒だ」

「どの道騒ぎになってるんだろうが。お前、ここに来ることを誰かにちゃんと伝えてきたんだろうな」

ユリウスはうつすらと微笑んだ。

これは絶対に間違いなく、無断で来たに違いない。後で小言を言われるのはユーイの方だ。全く、世の中は不条理すぎる。

「ユーイ・ユーイ」

促すように名前を呼ばれ、ユーイはため息を吐いた。

「目新しい情報はない。前に報せた通り、あれから状況は何も変わっていない」

「私は」

ゆっくりと目を細めて、ユリウスは静かな声を発する。

「情報ではなく、貴殿の考えを聞きにきたのだ」

「不確かなことは言いたくない」

「構わない。ただ、確かめておきたいだけだ」

しつこい。誤魔化すことはできない相手だった。身分よりも何よ

りも、彼はユーイの数少ない友人の一人だ。

ユーイはゆっくりと口を開いた。

「敵対者は何者かによって、意図的に送り込まれている可能性がある」

\*\*\*

裏庭の出口の向こうに見知った顔を見つけて、ウィガーは足を向けた。暗がりには溶け込むように気配を消して、ひっそりと立つ男。鋭い紫色の瞳は真っ直ぐに近づくウィガーを捉えている。折角美形なのに、愛想が無くてダメだとぼやいていたのは、彼の姉のルーミケラウスだった。

ハインス・ユーゴ。

異世界人対策本部ケラスに所属する特務隊員で、騎士であった頃も何度か顔を合わせている。

「どうした、ハインス。ルーミケラウスに用事か？」

「夜分にすまない。来ているか？」

「いや、今日は……」

ルーミケラウスは休みだった。それも、あまり他人に言いふらしたくない事情で。だが、ハインスは口の堅い男だし、従業員の内内でもある。

「実は、こここのところ宿屋の客が減っていてな。うちの従業員が客と言い争いになり、体調を崩してしまったこともあって、暫く食堂の方も閉めることになったんだ。それで、ルーミケラウスが気を使ってくれて、自分も丁度休みが欲しかったから、暫く休むと」

暫くがどのくらいになるのかは、ウィガーにも分からなかった。

何故急に、客足が遠のいたのかも。少しばかり、不審に思っていた。

ハインスは押し黙っている。

いつものように無表情ながら、全身から険しい威圧感を漂わせていた。その様子に、ウィガーは眉を顰めた。

「どうした？何か問題でもあったのか？」

「いや」

短く否定した後、それ以上の追求を避けるかのようにハインスは踵を返した。

「邪魔をした」

待て、と声を掛ける間もなく、ハインスの姿が闇に溶け込むように見えなくなる。

一体、何なんだ。

妙な胸騒ぎがした。ルーミケラウスに何かあったのだろうか。ま

だ10代前半の頃から、ハイネスは無口で無表情で、動じない男だった。度胸もあり、普通ならしり込みするような戦いの場においても、怯むことなく普段どおりに切り込んでいく。

その彼が、あれほどの緊張感を漂わせることなど、滅多に無い。

「兄さん？」

暫く考え込んでいたウイガーは、はっと顔を上げた。裏口から顔を覗かせ、こちらを伺っているのはフィオーネだ。

「そんなところでどうしたの？」

「……いや、今」

ハイネスの事を言おうとしてやめる。今はそれでなくても、問題が多い。これ以上心配の種を増やすことも無いだろう。

「何か良い案は無いかと考えていたところだ」

「そんなところで？」

眉根を上げて、フィオーネがからかうように笑う。

「あんまり一人で背負い込まないでね。皆で一緒に考えれば、絶対に良い方法が見つかるから。あの時だって大変だったけど、結局は今もこうしてやっていけているわけだし。きつと何とかなるわよ」

「そうだな」

明るく話すフィオーネに頷きながら、ウイガーの頭には別のことがあった。ハイネスやルーミケラウス、それから未だに行方の分からない菊乃の事。

他の異世界人に比べて、大人しくいつも自分を抑えているような少女だった。真面目に努力していたのに、不運な目にはかり遭い、今は生死すら分からない。

菊乃が消えたことは、ウイガーの中に後ろめたい思いを残した。結局、何もしてやれなかった。言葉を教えるだけ、それ以上の関わりも、情も持たないと決めていたが、言葉を交わしてしまえばそんな事は不可能だった。

志真にしても、伊吹にしても。  
今更放り出すことはできない。簡単に自分には関係ないと言ってしまえるなら、ウィガーの苦勞も減るだろう。

だが、それは無理だ。

明るく元気に騒ぎを起こしている志真も、一歩引いたところから距離を測っているような伊吹も、異世界に一人放り出されたことを苦しんでいる。悩み、恐れ、怯えていると知っているから、ウィガーは彼らを今更放り出せない。

日本語なんて選ばなければ。

ウィガーは深くため息を吐いた。



## 伊吹、巻き込まれる 1

頬を滑るすつとした筆のような感触がした後、胸元の辺りに置いていた手に鈍い痛みが走る。手加減はされているようだが、痛いものは痛い。伊吹はうんざりと眉根を寄せながら、渋々目を開いた。ぼやけた視界にもぞもぞと毛並みを整える小動物の姿が映る。

一仕事終えたとばかりに、人の胸の上で毛づくろいをするイタチもどき。こてつだ。ウイガーの助言に従い、折角梁に板を置いて巣を作ってやったというのに、何故かこいつは伊吹の枕元を定位置として眠る。更に、朝早くにこうして起こしてくるのだった。

昨日は遅くまで本を読んでいたため、まだ眠い。

堪えきれない欠伸をしながら、伊吹は背筋を伸ばし、首を左右に傾けて筋肉をほぐした。

「朝食にするか」

賛成するように、こてつがきいと鳴く。

伊吹が食事に行く前に、こてつの餌を用意してやる必要があるようだった。

いつものように小さな保存庫を開き、こてつの餌となる紫がかった得体の知れない肉を取り出す。保存庫は小型の冷蔵庫くらいの大きさで、形も四角く良く似ている。違うのは、特に冷えているわけでは無いということ。

これでなんで腐らないのかが良く分からない。異世界から持ち込まれた技術らしかったが、ウイガーも詳しくは知らなかった。

取り出した肉を、適当な大きさに千切ってやり、乾燥させたヤドリの葉を混ぜ平たい皿にのせる。チヂコリの実という爪先ほどの平たい種みたいなのを添えて、床に置いてやると、こてつが嬉しそうに食事を始めた。

その間に伊吹は、汚れた手をタオルで拭いて着替えを始める。

正直言つて、ファッションとかいうものは伊吹には分からない。異世界となれば尚更。だから大体いつも同じような格好をしている。薄手のシャツに、飾り気の無いごわごわした少し厚めのシャツを重ね、丈夫そうな生地にくせに肌触りの良い黒いズボン。ジャージもジーンズも無い世界で見つけた、楽な格好だ。

シャツの色も大抵白か黒か生成り、偶に緑か紺という無難な色。ゲームの世界でしか見ないようなマントやら、派手な装飾品やら、腰布やら服やらは、例え異世界で普通に着られていようと、手を出す気にはなれなかった。

大体着替えが終わる頃には、こてつの食事も済んでいる。そろそろこつちも朝食にするか。

そう思つてドアを開けると、するするとした走りてこてつが来て、足から背中を登つていき、最後に頭にぺたりと張り付いてくる。もう大分慣れたが、人の頭の上でげっぷをするのは心底止めて欲しい。

階段を下りて厨房に向う途中で、フィオーネにあつた。こちらが声をかける前に、笑顔で「おはようイブキさん」と挨拶される。

「おはようございます、フィオーネさん」

「丁寧なんですね、イブキさんは。私の方が年下だし、呼び捨てで良いつて言っているのに、きつと育ちが良いんですね」

明るくはきはきと喋りながら、フィオーネの視線は伊吹の頭上に向う。

「おはよう、こてつ」

きゅんと、こてつが小さく鳴いた。

長身の彼女と身長に恵まれなかつた伊吹の視線は割と近い位置にある。ほんの5cmばかりだが、伊吹の方が高い筈だ。多分。

可愛いと頬を緩ませている彼女だが、目元が僅かに赤く目も充血していた。疲れているだけでなく、泣いたのかもしれない。何となく気まずい気分になって、目を逸らす。彼女の悩みの原因はこの宿屋の客足が減っている事だろう。そして、その元凶は志真や伊吹だ。

だから、内心、迷惑に思っている筈だ。

出て行けと言ってしまったえば良いのだ。ここの住み心地は中々良い惜しくもあるが、気を使ったり気まずい思いをして過ごすのは嫌だ。

言い出し難いなら、こちらから切り出してみようか。どうやって切り出そうか考えているうちに、向こうが話しかけてきた。

「イブキさん、多分、宿の事とか色々聞いていると思いますけど、あまり、気にしないでくださいね」

先に話を切り出された伊吹は、一瞬言葉に詰まった。フィオーネは、そんな伊吹を見上げたまま笑う。ウィガーに良く似ているが、男と間違う事は無い女性らしい顔立ち。はっきりした顔立ちの美人だ。そんな相手に真っ直ぐ見つめられて、伊吹は居た堪れない気分になる。

元々、人の目を見て話すというのが苦手だ。

それが異性で、年が近くて、美人となれば余計に。

「いや、ですが、あまり迷惑をかけるのは……、こっちも心苦しいわけで」

「迷惑なんて思ってないです」

きつぱりと、フィオーネは言った。

「シマもイブキさんも何も悪い事はしていないのだし、気にする事無いんですよ。ただ異世界人だからって、どうこう言ってくる方が変なんです」

口調に、怒りが混じっている。

しかしその怒りは、どうも伊吹達にはなく、他へ向けられているようだ。真っ直ぐで、正義感が強いタイプなのか。志真に少し似ているかもしれない。こちらの方が余程落ち着いていて、思慮深そうではあるが。

苦境でも己を貫く強さを持っていて、正しい事を口にする。

そのあり方が、伊吹の弱さを責めているように感じられた。本人にそんな気はまるで無いのだろうが。いや、彼女が彼らを庇って

れているのは分かる。只の被害妄想だ。だが。

「……異世界人を恐れるのは、そんなに変な事ですか」  
「え？」

「俺には分かりますよ。全然違う世界で生まれて育って、価値観も常識も違う、姿も似ているけどどこか違って。そういうのが突然隣に住んでいたら、怖いと思いませんか？何を考えているのかも分からない。同じ人間でも、そういう怖さがあるのに、異世界人だったら尚更」

逆の立場だったら、伊吹は急に現れた異世界人を快く受け入れることなんて、できない。分からないものを恐れるのは、当然の防衛本能だ。それを变だの冷たいだのと責められたくない。

「だから、まあこういう事態になっても無理は無いかなと」

フィオーネは驚いたように目を丸くしたまま、伊吹を見つめている。つい本音を言ってしまった。失敗した、と思いつつ。出てしまった言葉は戻らない。

「……もしかして」

気まずく視線を逸らした伊吹に、フィオーネが問う。

「イブキさんも、私たちの事が怖い？」

「……………正直に言えば」

誤魔化す事も考えたが、結局素直に答えていた。何か色々面倒だ。ここに長くいる事も無いだろうし、多少気ままずくなったところで構わない。

「そう、なんだ」

呆然としたように、フィオーネが呟く。

「そうなんです。もしかして、シマもそうだったのかな。……私、ただ家族と二度と会えなくて、一人ぼっちで、心細いだろうって事しか想像してませんでした。でも、良く考えてみればそうですね。全然知らないところで、全然知らない人達の間で暮らすのって、きつと凄く怖い」

「……まあ」

そういう事もある、が。何故嬉しそうなのだ。そっかー、等と感心しながら頷いているフィオーネの姿に、今度は伊吹が戸惑う番だった。

「ありがとうございます。素直に打ち明けてくださって」「  
はあ？」

何故お礼を言われるのか分からない。しっかりしているようで、少しずれているのか。

「分からないなら、お互い話し合うしかないんですよ。人の気持ちなんて、その人にしか分からないし。今度、シマともちゃんと話してみます。イブキさんも、またこうして話してくださいね」

話すつて、何を。

「引き止めてしまつてごめんなさい。朝食、もう準備して有りますから、どうぞ。じゃあ、また後で」

急に元気になつて歩き去るフィオーネを、伊吹は困惑したまま見送った。

「何だつたんだ」

その問いに答えるのは、頭の上の小動物だけで。疑問が解消される事はなかった。

## 伊吹、巻き込まれる 2

厨房には今日もラクト1人の姿だけがあった。

カオロンの怪我の具合が思ったよりも悪く、ミーチェも一緒に休んでいるのだ。幸いというか何とかというか、食堂は閉めているし、宿屋の客も多くない。ラクト1人でも充分にやっていけていた。

偶にアンナやフィオーネなどが、手が空いた時に手伝いに来ている。

「おはようございます」

返事は無く、視線だけが返される。

嫌われているわけではない。ラクトが極端に無口なだけだ。気にする事も無く、伊吹は静かに手を合わせ、食事に手をつけた。

細いんだから、ちゃんと食べよ！

そう言っただけで無理やり肉をおかわりさせてくるカオロンも、一緒になつて甘い菓子を押し付けてくれるミーチェもない。寂しい、とは思わないが、静けさが気にはなつた。

食器のあたる音や、自分が食べ物を噛む音まで良く響く。

もくもくと食事をしながら、ここ最近の事をぼんやりと考えた。

カオロンが怪我をし、ミーチェが倒れた理由というのを、伊吹は志真よりも詳しく知っている。話好きなアンナから直接聞いたのだ。

「ちょっと変な客が来たのよ」

と、何があつたのか聞いた伊吹に、アンナは話し始めた。

「若いけど、暗くて黴が生えてそんな陰気な男と態度ばかり偉そうな女と脳みそまで筋肉で出来てそんな男の客ね」

アンナは意外と口が悪い。

「その人がね、フィオーネを呼びつけて、ここは異世界人を匿っているだけでなく、働かせているらしいじゃないか、どういうつもりだとか何とか。どうもこうもないって話じゃない。店員を呼びつけたらちゃんど料理を注文しなくちゃ。ああ、考えてみたらあれは客じゃなかったわねー、何にも食べていかなかったし」

喋り続けながらも、アンナの手は休まず窓を磨いている。隣で窓拭きを手伝いながら、伊吹は話の続きを待った。

「それでねえ、フィオーネも気が強いし、言い返したのね。異世界人だろうと何だろうと、家の大事な仲間です。変な言いがかりをつけるなら帰ってください、って。堂々としたものだったけど、相手の人も余計に頭に血が上っちゃって。暴力はなかったけど、わあわあ喚いて煩いし、コップの水をフィオーネにかけるし最悪だったわあ、ほんと。他のお客さんもみーんな引いちゃうし。絶対あれで来なくなつた人も多いわよ、酷い営業妨害よねえ」

多分その通り、営業妨害だったのだろう。

そいつらの目的は最初から、異世界人がいる事を理由に文句をつけること。そうして騒ぎを起こせば、普通の客も近づきにくくなる。「その内、騒ぎを聞きつけたカオロンさんが出てきちゃって。カオロンさんも案外短気だから、水かけられたフィオーネを見て大激怒したのね。で、無理やり追い出そうとしたんだけど、例の筋肉男が跳ね除けて、投げ飛ばされたカオロンさんはテーブルごとひっくり返っちゃったのよ。その時倒れたテーブルに、カオロンさんの腕が下敷きになって大怪我。一部始終を見ていたミーチェさんはショックで倒れちゃったってわけ。ついでにテーブルも脚が折れて壊れちゃってたわ」

弁償くらいして欲しいわよねえ、とアンナはぼやく。カオロンを投げ飛ばした後すぐに、彼らは逃げて行ったらしい。運悪く、というか狙っていたのか、その時ウィガーは外出中だった。帰ってきたのは騒ぎのあつた1時間ほど後。

もしも、伊吹や志真がいる時間帯だったら、まだ手の打ちようがあっただろう。2人には、警護の人間がついている、筈。確認できていないからいまひとつ不安だったが、今のところ襲われたりはしていないから、大丈夫なのだろう。

一応被害届を出して調べてもらっているが、今のところ犯人は捕まっていない。だが、多分彼らは異世界人排斥派の者達だろう。

面倒だな。

直接暴力を振るうよりも、効果的な方法に思えた。宿屋の客を減らし、経営状態を悪化させる。あれから店に来ていないが、どこかで悪評をばら撒いているだろう。

本格的に、この宿屋は潰れるかもしれない。

真実がどうだろうと、一度失った信頼を取り戻す事は難しい。どの段階でここを出て行く事になっても良い様に、準備しておいた方が良いかもしれない。

冷静に、伊吹は考える。

薄情すぎるよ！

そんな風に罵った志真の声が蘇った。薄情だろうが何だろうが、人の心配をしている余裕など、伊吹には無い。

助ける義理だつて無い。

伊吹は、ただ一時ここに居候させてもらっているだけの、他人だ。

空になった皿を見下ろし、伊吹は無言で手を合わせた。ご馳走様、と心の中で呟いて立ち上がる。自分で使った食器は、自分で洗うことになっていた。流しまで持って行く途中で、ラクトと目があった。今日の下ごしらえは終わったのか、皿を拭きつつこちらをじっと見上げている。



極端に低い、子どものような身長ながら彼はこれで大人だ。青みがかかった肌、平たい耳、服の中に隠れているらしい尻尾。彼を見るたび、ここは異世界だと実感できる。正直最初は戸惑ったし、何となく目を合わせ辛かった。つい、好奇の目でみてしまいそうで。(それも仕方無いとは思う)

ラクトの方も人見知りなのか、興味が無いのか、伊吹に目を向けることはなかった。

だから、こうしてちゃんと目を合わせるのは初めてかもしれない。

無言で見つめあうこと数十秒。気まずい。

一体、何なんだ。

一向に何も言っていないが、特に用があるというわけではないのか。だが、このまま何事も無かったかのように立ち去る事も出来ない。心情的に。

「あー、あの、食事ありがとうございました。美味しかったです」  
無難に、食事の礼を試みる。しかし、聞こえているのかいないのか、ラクトは僅かに瞬きをただけだった。

その態度に若干の苛立ちを覚える。

だが、まあ良い。一応言葉はかけたのだから、これで立ち去ろう。そう思っ、彼の脇を通り過ぎようとした時だった。

「食べる前と、食べた後。シマもそうやって手を合わせる」

「は？」

「イタダキマス、ゴチソウサマ」

片言の外国人みたいな発音に、無意識に身構えていた伊吹の緊張が抜ける。

唐突に、何かと思えば。

「ああ……何ていうか、食事の挨拶です。うちの国……、世界の」

「ここでは、手を組み合わせて額にあて感謝を表す。……俺達の故郷では、天と地に向かい感謝の祈りを捧げる」

「この世界の食事の挨拶事情だろうか。もしかして、そうするのがマナーだと注意を受けているのだろうか。思わず顔をしかめてしまった。」

面倒な。

「適当に「これからそうします」とでも返事をしてあげれば良いかと捻くれた思考をめぐらせていた伊吹に、ラクトは続けた。」

「国や、世界が違ってても、同じことはある」

「淡々とした声だったが、奥に何か強い思いのようなものを感じた。「どれだけ違ってても、分かり合えるところが存在する。いつか、時間が掛かっても見つけられる。自分にとって、大切な相手が。信じられる相手が。この世界でも必ず」

「……………」

「分かるうとしてくれる相手を、見逃すな。どこにでもいるわけじゃない」

「宗教の勧誘でも受けているような気分になってきた。何となく、言いたい事は分かった。今までリザレット等にも言われてきた事と同じだ。」

人を信じろ、と。言われているのだ。

しかも、ラクトの場合はもっと具体的に。この宿屋の人間を信じろと言っている。

（何なんだ、いきなり）

「そう言われて、はい信じますとはいかないだろう。適当に頷いてやり過ぎすか。さっさと食器を片付けて出て行きたい。そろそろ、出かける準備もしなければならなかった。」

「この宿屋を守って欲しい」

「?」

再び唐突な言葉をかけられて、伊吹は戸惑う。ラクトの静かな目はじつとそんな伊吹を観察していた。

守る、とか。伊吹にそんな事を求められても困る。

「いや、それを俺に言われても」

「窮地を救う切り札を持つのはイブキ・カガミ。そう、予言は下された」

やばい、と伊吹は今すぐ逃げ去りたい気持ちになっていた。ラクトは電波的な人だったようだ。

### 伊吹、巻き込まれる 3

部屋に来ては伊吹の冷静な判断を、恨みがましく責め立てる志真。明るく振舞うものの、どこか疲れた様子のフィオーネの様子。

更にいきなり伊吹に宿屋を救えと、どこかの王様が勇者に頼むかのごとく言ってきたラクト。

彼らのせいで、伊吹の日常は居心地の悪いものとなりつつあった。困った時は保護施設へ。というわけで、シエンゾの元で働いた後、伊吹はリザレットのところを訪ねた。

先だつての不祥事、前代未聞の窃盗事件のせいで忙しいらしいリザレットは、更にシャープに研ぎ澄まされた雰囲気纏って伊吹の前に現れた。いかにも迷惑ですという表情を顔に貼り付け「本日のご用件は？」と愛想の欠片も無い声で聞く。

挨拶なんか交わしている余裕も無い。そんな様子を見た伊吹も、率直に簡潔に本日の相談を告げた。

「異世界人の悪評のせいで宿屋が潰れそうだ。保護先の変更を頼みたい」

細い柳眉をついつと吊り上げて、リザレットは目を細めた。

「ウィガーからそんな話は出ていませんが」

「向こうからは言い難い話だろ。だから、俺の方から提案する」

「……宿屋での騒ぎも、その後の客足が減っていることも報告は受けています。だが、まだすぐにどうこうなる話ではない、とも聞いていますが。宿屋の方には助成金も出ていますし、暫くは何とかやっつけていけるでしょう。少々先走りすぎでは」

「解決するには、元凶を取り除くしかない。この場合は異世界人だ。2人もいるから、標的にされたとも考えられる」

「だから、出て行くと？」

取り敢えずは、伊吹だけでも。

そうすれば、もしかしたら多少状況が改善されるかもしれない。志真はすっかりあそこの人間に懐いているし、出て行く気は無いだろう。伊吹は然程愛着も無い。それに面倒事はごめんだ。

「また何か問題が起きる前に出て行った方が、互いの為だと思う。今は良くても、ずっとこんな状態が続けば、余裕が無くなる。行き場の無い怒りや苛立ちは、原因となった異世界人に向くだろう。だったら、その前に。」

出て行く。

煩わしい事は嫌いだ。信じた相手に、裏切られるのも。優しい顔を見せていた人間に、掌を返されるのも。信じず、そうなるだろうと予測していたって、いざその場面に遭遇すればきつと多少なりとも傷つくのだ。

伊吹は弱い。

だから人を信じたりできない。

暫く黙って考え込んでいたりザレットだったが、伊吹を見つめて頷いた。

「分かりました。ただ、すぐに保護先を見つける事はできません。知つての通り、こちらはこちらで忙しい。とりあえず、2週間の猶予を頂きます。2週間後、またいらしてください」

2週間後。

とはいえ、一応希望は受け入れられた。もつと説得に時間がかかると思っていただけに、拍子抜けだ。単に、向こうが忙しくてこんな事に構っていられなかったからかもしれない。

その辺りの事情はどうでもいい。とにかくこれである宿屋の事で振り回されずに済む。迷惑をかけるからという理由で出て行くなら、角も立たないだろう。

伊吹は満足した気持ちで、保護施設を後にした。

イググローブスに乗って、学校へ向った。ほんの少しばかり遅刻になるが、幸いペナルティは無い。そんな風に、学校というには随分規則が緩い為か、生徒の方も好き勝手にやっている。

広々とした教室を見渡して、伊吹は呆れた気持ちになった。

学校に居るのは、アルジャーラーただ1人だ。その唯一人の生徒も、緑色の髪を波打たせながら、安らかな眠りを貪っている。

ずっと伊吹の頭にへばりついてたこてつが、ひよいつと飛び降りると、机の隅で遊び始めた。あまり遠くに行く事は無いから、放っておく。

隣では、眼鏡をかけた冴えない感じの中年が、困ったような顔をしていた。

今日の授業の教師、ベンジャウル・コスタウス。

「遅れました、すみません」

「ああ、大丈夫。構わないよ、うん。来てくれただけでも良かったよ」

もしかっとした眉を掻きながら、ベンジャウルは情けい笑顔を浮かべた。

「どうも、一般常識・教養の授業は欠席が多いんだよねえ。結構大事だと思っただけどねえ」

「……そうですね」

と、ここは同意しておく。大事だろうとなかつと、この欠席率はない。人生を舐めているとしか思えない。

っていつか、志真はどうした。

病気になった様子も無く、ぴんぴんしていたが。あの口煩いウィガーが理由も無い欠席を許すとは思えなかった。何かトラブルがあったのか……、いや、おそらくはサボりだろう。

宿屋が大変な時に学校なんて行ってられないよ！とか何とか。

騒いでいる志真の姿が目に見えようだった。

何故だろう。どうも嫌な予感がする。

「今日はこれだけみたいだから、始めようか。分からない事や、知りたいことがあったら、どんどん質問していいよ。今日は他に生徒もいないし、君に合わせて進めよう」

アルジャーラーの事は数に入っていないらしい。

まあ、常に眠っているから、無理もなかった。折角なので、伊吹はこの時間を有効に活用させてもらうことにした。

内容は、この国での商売の始め方。商品の売り方。特許申請について等だ。

有意義な時間を過ごし、伊吹は気分良く学校を後にした。今日は色々上手く行っている気がする。

少し、順調すぎるような気がした。

こういう時は大抵、どこかに落とし穴があるものだ。伊吹はどこまでもネガティブ思考だった。

いつものように宿屋の裏庭から中へ入る。裏口のドアに手をかけようとした途端、それは内側から開かれた。外に開くようになっていたドアに、危うくぶつかりそうになる。

危な、と思わず上半身を引いた伊吹の目に、ひらひらしたものが飛び込んできた。

「お帰りなさいませ、お客様！」

そんな、どつかで聞いたようなフレーズを口にするのは、ひらひらしたブラウスに黒のタイ、黒のジャケットに、サスペンダー付きの七部丈の黒のズボンと、どこかのウェイターみたいな格好をした志真だ。

満面の笑みの志真の隣では、恥ずかしそうに頬を染めたフィオーネがいた。

こちらは妙にぴったり短い黒のスカートをはき、長く形の良い脚を惜しげも無くさらしている。一応、黒のタイツは履いているが。袖が少し膨らんだ半そでの黒のシャツに、胸元が強調されるフリルのエプロン。

似合っている、似合ってはいるが直視できない。

視線をずらすと、志真のにやにや笑いが目に入った。

「どうどう？良いでしょ？」

何がだ。

伊吹は無言で志真の頭に拳を下ろした。容赦なく叩いたせいで、伊吹の手も結構なダメージを追う。この石頭が。

「いったーい！ちよっと、何するの！いきなり殴るとか最低！」

「この馬鹿！お前はどこのエロ親父だ！」

「エロ親父って、違ーう！別に私は楽しくてやってるわけじゃないよ！いや、ちよっとは楽しかったけど、何とかお客さんと呼ぶ方法を考えてただけなんだから！男の人とかって、こういうの好きですよ！」

「全員一纏めに語るな！誤解を招くだろ！」

「でもこういうの流行ってたじゃん！メイド喫茶とか！」

「一部だろ！変な文化をこっちに持ち込むな！変なイメージが付くだろうが！」

「こんな馬鹿のせいで、自分まで同じように見られたら。」

つい日本語で怒鳴りあう二人の傍で、フィオーネは困った顔をしていた。

「やっぱり、私にはちよっと似合わないよね。折角、シマが考えてくれたけど」

「そんなことない！似合う！きれい！」

「でも……」

そこで何故こちらを見る。フィオーネの視線を追って、志真も伊



吹を半眼で睨んでくる。

無言の圧力を感じた。

女子が可愛い格好をして現れたら、どんな言葉をかけるべきか。

そんな問題を出されているかのようにだった。しかし。伊吹は痛む頭を押さえつつ、苦々しい言葉を吐いた。

「似合う、似合わないじゃなくて。お前達はこの宿を一体どうしたいんだ」

色物、いかがわしい女子の色気を餌に宿で客を呼ぶつもりなのか。多分、それではまた違う問題が起こるだけだ。

## 伊吹、巻き込まれる 4

真剣に考えたという（馬鹿な）アイデアを駄目だしされた志真の機嫌は悪い。

しかし、馬鹿はお前だ、と伊吹は心の中で毒づいていた。

普通に考えて駄目だろう。確かに一部の客は呼べるかもしれない。だが、妙な下心を持った男ばかりを集めてどうする。益々普通の客足は遠くなる上、志真……は兎も角フィオーネはセクハラの餌食にされそうだ。

「そうやって文句を言うならさ、何か良い案考えてよ」

「自分で考えるとか啖呵をきっていないかったか」

悔しそうに唇を一字に結ぶ志真。

既に動きやすい楽な格好に着替えている。いつもながらのゆったりとしたシャツに、短パン姿で、伊吹の部屋のベッドを陣取っている。胡坐をかくため、ブーツは床に脱いでいる。その隣ではやはりいつもの服装に着替えたフィオーネが、安心した表情で座っていた。

何だこの状況。何でこうなっているのか、さっぱり分からない。

部屋に女が2人（片方はともかく）、妙に居心地が悪かった。自分の部屋だというのに、少しも寛げない。とりあえず椅子に座って、平静を装っているが内心結構緊張していた。

友達もろくにいなかった伊吹だ。異性と普通に話す機会は滅多に無く、勿論家になど呼んだことなどあるわけがない。そんな風に動揺している事を、絶対に悟られるわけにはいかなかった。特に志真には。

（何を言われるか分かったもんじゃない）

今のところ、気づいていないらしい志真は、ひたすら不満そうに口を尖らせている。

「そりゃ、自分で何とかするって言ったし、実際何とかしようと思つたよ。なのに、良い案考えて実行したら、いっさん、文句言うし」「まだ言うか。本当に良い案だったんなら、俺だって文句はつけない。まあ、上手く行きそうになくっても、俺には関係無いし何も言うつもりはないけど、あれは無い。言っておくが、ウイガーが知つたらもつと怒る筈だ。覚悟しておけよ」

げ、と志真が顔をゆがめる。

こここのところ、ウイガーは出かけている事が多い。今日も昼頃からどこかに行つて、未だ戻っていないようだ。多分、施設で起きた事件絡みで借り出されているのだろう。

「どうか、ウイガーには内密にお願いします」

顔の前で手を合わせて、志真が頭を下げる。それを伊吹は鼻で笑つた。

「言つに決まつてるだろ」

「何でそんなに意地が悪いわけ。人が頭下げて頼んでるのに」  
首に縄をつけてもらつたためだ。志真が暴走すれば碌なことにはならない。かといって、伊吹は係わり合いにならなくなかった。だから、ウイガーに託すのだ。

「えー……、フィオーネさん」

ついでに、と伊吹は志真の隣で寛いでいるフィオーネにも声をかけた。

「はい？」

「あまり志真の言う事、本気にしない方が良いですよ」

「え、ああ、でも」

困った様子で、フィオーネは苦笑する。

「シマはシマなりに一生懸命に私たちの事考えてくれてるみたいだから、あまり怒らないであげてください。出来たら兄さんにも秘密で」

……何とか人の良い。

しかし、そんな風に言われると、自分が余計な事をしたような気

がしてきた。別に放っておいても良かったのでは無いか。一切関わらないと決めていたのに、思わず口を挟んでしまった。

何故無視できなかつたんだ。

自分の行動が悔やまれる。だから一々、面倒な思いをする事になるのだ。

(今だつて)

「悪かつた」

「……え？」

突然の謝罪に、フィオーネは首を傾げる。志真も目を丸くして、伊吹を眺めた。

「どうしたの、いつさん」

「部外者なのに、余計な口を挟んだようだから」

そう、伊吹には関係の無い話なのだ。

「部外者つて、そんな。イブキさんもここに住んでいるんだし」

住んでいるだけだ。家族でもなければ、志真のような信頼関係も無い。そんなもの、面倒なだけだと思いつつ、伊吹は続けた。

「その事なんです、今日、保護施設の方へ行ってきました」

「え？」

「どうも、ここにいるとご迷惑がかかるようなので、別のところへ移れないか相談しました。2週間後には、ここを出ます」

「そんな！迷惑だなんて」

「異世界人が2人もいたら目立ちます。俺がいなくなれば、少しはマシになると。多分、絶対とは言えないですが」

最初から、分かりきったことだった。これが一番良い解決方法である事は明白だ。本当なら、志真も出て行く事が望ましいが、彼女はそれを望まないだろう。

とにかく、伊吹はここを出て行く。

後は彼らが勝手にすれば良い。

「ちょっと、何、何て言ったのいつさん!？」

未だこちらの言葉に慣れていない志真は、1人蚊帳の外だった。困惑した顔で黙り込むフィオーネを見て、伊吹を責めるような目で睨む。

「フィオーネに酷い事とか言わないでよ」

「言つて無い。ただ、ここを出て行く事を伝えただけだ」

志真の目が驚いたように丸くなる。ぽかんと、間抜けに口が開く。そこから、驚きの声があがるまで、一瞬の間があった。

「はぁー!?!？」

その大声に、テーブルの上でうとうととしていたこてつが、びくりと飛び上がった。慌てた様子で伊吹の腕に這い登り、ぴたりと頭上に待機する。

「何それ、ちょっと聞いてない!出て行くって何、何で!?!来たばかりなのに!」

ベッドから飛び降りて、喚きながら詰め寄ってくる。

その煩さと、警戒したこてつが頭の上で爪をたてる痛さに、伊吹は顔を顰めた。

「どうしようと俺の勝手だろ」

「勝手って、そうだけど勝手すぎる!」

何だそれ。

「普通は相談くらいするよ。こつちだって色々、いつさんの事心配して……あ、私っていうより、フィオーネとか、リアラさんとか。それなのに、何それ」

「いることで迷惑になるなら、出て行った方が良いだろ。俺もその方が気が楽だ」

「そんなのいつさんがそう思ってるだけだよ。いつさんが出て行った方が良いなんて、誰も思っていない」

「それは、お前がそう思いたいだけだろ」

志真も同じような立場だから。

伊吹の返した言葉に、志真は口を結んだ。怒っているのか、傷ついているのか分からない顔だ。

人の内心なんて、誰にも分からない。口先では何とでもいえるし、表情だつて取り繕える。相手の顔色を窺って、不安を抱えて過ごすのは辛い。信じている、そういつたところで、志真も不安を抱えているのだろう。異世界で一体何を信じていけば良いのか。

「逃げないで下さい」

静かな声の主はフィオーネだった。ベッドから立ち上がり、真っ直ぐに背筋を伸ばして伊吹を見つめる。

そのひたとした眼差しを受けて、伊吹は眉を潜めた。

「貴方がここから去ったら、相手が調子に乗るだけです。自分たちのした事が上手く行ったつて喜んで、次もまた同じことをする。今度はシマを追い出そうつて、もっと酷い事をしてくるかもしれない。違う異世界人がいるところで、同じような事をするかもしれない」

国はテロリストの脅しに屈してはいけない。

そんな言葉を思い出す。

確かにそうなる可能性はあった。

「そんなの、間違つてます」

きつぱりと言い切る。間違っている、とばつさり切られたのは宿屋に嫌がらせをしている者達だが、伊吹も巻き添えのダメージを受けていた。

他人がどう思おうが知るか、と思いつつも、実際真正面から言葉にされると動揺する。

フィオーネの気性の真つ直ぐさと、正義感の強さは、やはり伊吹には合わない。見ているだけで、後ろめたい気持ちにさせられる。

自分とは、正反対過ぎて。

逃げたいのに、逃げる事は許されそうにない。

どうにかこの現状を打破するには、宿屋を何とか建て直すしかなかった。

## 志真と空の上の住人 1

志真の中で、各務伊吹という男の印象はかなり悪い。

口が悪いし性格も悪いし、意地悪だし、捻くれている上に、頭の良さを鼻にかけている節がある。こう、いつもいつも人を小ばかにしたような目線で見ているのだ。それが、この世界で唯一の日本人仲間なのだから、本気で参る。彼のせいで、日本人のイメージが悪くなるかもしれない。

全く、由々しき事態だ。

それでも、そんな相手でも同じ立場の日本人。傍にるのは心強かった。何だかんだ言いつつ、頼りに思っていたのだ。

それが。

(いきなり出て行くとか、何それ)

今、思い出しても腹立たしい。むかむかする。フィオーネが何か言っただけで引き止めて、その後ウィガーまで間に入って、取りあえず保留という形に治まったみたいだが、志真の怒りは治まらなかった。

普通、相談くらいすると思う。

そりゃあ伊吹と志真は友達とは言えないし、家族でも無いが、同じ境遇の仲間みたいなものだと思っただけ。何かあったら助け合える相手だと、勝手に認定していた。

裏切られた、と思うのは間違っている。

志真が勝手に期待していただけだから、希望通りにいかなかったからと言って恨むのは筋違いだって、分かっているのだ。

でも、むかつく！

志真は怒りのまま、窓を拭く手に力を込めた。



ルーミケラウスが休暇を取っている為、彼女の分の仕事もしている。とは言っても、食堂を閉めている今それほどする事は無い。人が来なくても埃は溜まる。だから、掃除だけは毎日しているが、それでも時間が余るほどだった。

伊吹はいつも通りの時間に仕事に出て、日が暮れた今も戻らない学校で顔を合わせたか、言葉は一切交わさなかった。志真が怒って話しかけなかったからだ。

(……そういうのも、むかつく)

伊吹から、話しかけてはこなかった。あからさまに怒っている志真を見事にスルーして、普通に授業を受けていた。終わるとそのまま学校を出て、その後は知らない。

こんな時に、どこで何をやっているのか。

志真は溜息を吐いて、手を休め薄暗い食堂を見渡した。椅子の上から見る食堂は、がらんと静まり返っていていかにも寂しい。いつもあんなに賑やかだったのに。美味しい匂い、人々の笑い声が幸せだった。

一番哀しいのは、自分に何もできない事だ。

この宿屋の事も、それからモクの事も。

大切な人達が苦しんでいるというのに、何もできていない。何も出来ないまま、時だけが着実に進んでいく。

つん、と目の奥が熱くなった。

駄目だ！またうじうじしてしまう。泣いて落ち込んだって解決する事は何も無い。志真は首を横に何度も振って、汚れた雑巾を握り締めた。

「ゴミ捨て行って、次の仕事聞きにいこ」

椅子と雑巾を片付けて、隅に纏めておいたゴミの入った籠を手に、志真は外へ出た。ゴミは処理をする日にちが決まっただけで、その時までは裏庭の箱の中に溜めておく。裏口から外に出た志真は、裏戸

のところ、怪しい人影を見つけた。

何か前にもこんな事があったような。

デジャヴを感じつつ、人影を観察する。以前に見た人とは違うようだ。大分背が低い。子どもかもしれない、そう見て警戒心が少し薄れる。柵の向こうを行ったり来たり、うろつくと。どこか困った様子で移動している。

もしかして、迷子とか？

少し考えて、志真は声をかけてみることにした。近づけば、人の姿もはっきりしてくる。今日は夜でも星が明るい。白いフードで頭部をすっぽり覆い隠した子どもの姿を目にした志真は、ぴたりと足を止めた。

何か怪しい。

唯一見えているのは口元だけだ。子どもみたいだし、強盗という事は無いだろうが。

どうしよう。

迷っているうちに、子どもの方も志真の存在に気が付いた。足を止め、はっとしたようにこちらに注目している。緊張感が、志真のほうにも伝わってきた。

互いに見詰め合うこと数十秒。

こうしていても始まらないと、志真は口を開いた。

「なに？迷子？」

「……………」

「……、宿屋。わかる？」

「……………」

一向に答えない子どもに、志真は困惑する。もしかして、発音が酷すぎて聞き取れないのか。

「あー、えっと、どうしよう。……名前、は？保護者、近く、いる？……うわー、駄目だ。やっぱりフィオーネ呼んで来よう！……ち

よつと、待つ」

ゴミを地面に置き、志真は宿屋に戻ろうとした。その時。

「ま、待て！」

と、声が掛かった。まだ高さの残る、少年の声。「待て」と言っただけで、思わず振り返ると、フードの少年がこちらに身を乗り出していった。

「そなた、異世界人だな？12世界から来たシマ・ハイタニに間違いないか？」

妙に聞きなれない言葉な気がした。いや、全部聞きなれない言葉なのだ。ただ、異世界人という単語や、自分の名前が入っている事は流石に分かる。

「え、何。何で私の名前？」

「……？」

思わず素に返って日本語を話していたこと。

「えーつと、私、シマ・ハイタニ。知ってる？」

「間違いないのだな。私はそなたに助けられた。助けられた恩は、返さなければならぬ。何か願いがあれば申してみよ」

志真の胸ほどまでの高さまでしかない身長の子どもは、胸を張り、実にどうどうとした態度でそう言った。星の光で少年の被る白いフードが、きらきらと神秘的な光の波を作っていた。

何か、凄いことを言っているような気がする。

雰囲気だけは、言葉が無くとも伝わるものだ。しかし生憎、彼の言葉の内容までは志真翻訳してくれる事はなかった。

「ごめん。言葉、まだ弱い」

「！」

「人、呼ぶ、待ってて」

「だ、駄目だ！誰も呼ぶな！」

必死な様子の少年に、志真は首を傾けた。人を呼んで欲しくない

のだろうか。

(もしかして、家出少年?)

親とでも喧嘩して逃げてきたのだろうか。志真も2度ほど経験がある。家出先は友達の家と祖母の家だった。

日も暮れているし、親も心配しているだろう。だが、志真にはこの子どもの気持ちの方が分かる。だから、少しだけ時間を上げることにした。

「分かった。待つ。気持ち…嫌なこと、あった?話して?聞くよ」

「あ……ああ、いや」

「うん?」

「いや、そうではなくて。私の方がそなたに聞きたい。異世界人としてこの国で暮らすのは、大変だと聞く。何か、辛いこと、困っている事は無いのか」

どうもこの子どもの言葉は解読しにくいな、と思いつつ。志真は分かる言葉を繋げて何とか理解しようと試みる。辛いことや困っていることが無いかと、逆に聞かれているようだ。

「えーっとね」

ネタには困らないが、会ったばかりの子どもに対して話すことだろうか。

「たくさん、ある。でも」

「言ってみよ」

柵に手をかけて、身を乗り出してくる。

何か妙に食いつきが良い。人の苦労話を聞きたいなんて、変な子どもだ。でもまあ、それで気が済むなら良いか、と志真は思った。

「言葉、難しい。私、力ない。頭も悪い。好きな人達、助けられない」

「好きな人達とは?」

「この宿屋の人達。あと、学校の友達。モク」

「モク?」

「うん。異世界人。私、助けてくれた。でも、私にはできない」

思わず真面目に話してしまった。我に返って、志真は苦笑する。

「えーっとね、だから。いっぱいあるよ。でも頑張る。それしかない。だから、君も頑張る！」

子どもを励ますつもりで声をかけた。

だが、妙に重々しく、子どもは頷いた。

「そなたの願いは理解した。必ず私が叶えよう。チャタレイ・フィナス・イルド・アテイカの名にかけて誓う」

うんうん、と志真も頷く。

何て言っているかさっぱり分からない。

しかし、何か満足した様子であったので、問題は無いだろう。去っていく子どもを見送って、志真はゴミをきちんと片付けた。

その出会いが齎すものを、志真はまだ知らない。

## 志真と空の上の住人 2

翌日、いつものように支度をして調理場に向うと、カオロンとミーチェの姿があった。

「カオロンさん！ミーチェさん！」

「おや、おはようシマ！」

にこにここと、変わらぬ笑顔のカオロンとミーチェの姿に、志真はほっとした。2人がいるだけで、狭い調理場がぱっと明るくなるようだった。

「もう大丈夫？」

「いやあ、心配かけて悪かったなあ。腕はまだちょっと痛むんだが、あんまり休んじやいられないし、何より暇で暇で」

「そうそう、この人つたらずっと退屈だってそればかりでねえ。」

ま、働くのが何よりの薬になるんなら、そうした方が良いと思って、奥様にも頼んだんだよ。これから、またよろしく頼むね、シマ」

元気そうな2人の様子に、志真も自然と笑顔になる。調理場の隅で野菜を洗っているラクトも、心なしか嬉しそうだ。

本当に良かった。

後はこれで、客が戻ってくれば言う事無いが。

「……そうそう、うまくはいかないか」

テーブルを拭く手を止めて、志真は小さく溜息を吐いた。食堂内は閑散としている。今入っている客は3組のみ。その内の2組は泊り客。いつもなら夕飯のこの時間、待っている人もいるくらい混み合っていたのだが。

（まあ、今日はまだ再開した事を知らない人も多いのかもしれないけどさ）

それにしても、少なすぎる気がする。

視線を巡らせると、フィオーネが客の1人と話しているのが見え

た。話し相手の客は、25、6歳の真面目そうな感じの男の人で、何度もこの店に食事に来ている常連客だ。志真も何度か接客したことがある。ルーミケラウスが言うには、フィオーネに気があって、彼女目当てに店に来ていたんだとか。

(なに話してんだろう)

フィオーネの深刻そうな顔が気になった。不安そうな、でもちょっと怒つてもいる感じ。少なくとも告白とか、そういう雰囲気ではなさそうだ。

「すみません」

違う席の客が手を上げて、志真ははつと我に返った。

「はい、すぐ行きます！」

新しい注文を取って、調理場に伝えに行く。そうしている間に、常連客の男は帰っていた。いつもなら、結構遅くまで飲んでいくのだが。そういえば、いつもなら大抵2、3人の友人と一緒に来ていたような気がする。

今日は、1人だったから早く帰ったのだろうか。

「……………」

何か色々と気になってくる。志真は空いた席を片付けるフィオーネの傍へ行った。

「フィオーネ、手伝う」

「…ありがとう、シマ」

らしくなく、ぼんやりとした様子だ。

何だろう、やっぱり何か言われたのかも。それもあんまり良い事じゃないこと。まさか、別れ話……？いや、別に付き合ってるなんて話は聞いた事無いけど。

空いた皿を重ねて手に持ちながら、志真はフィオーネを見つめた。眉間に皺。少しだけ険しい表情を見ると、ウィガーと益々似て見える。

「あの、フィオーネ？」

「何？」

「今、さっきの人、何か言った？」

さっと、フィオーネの顔が強張った。何を言ったのか知らないが、フィオーネにこんな顔をさせるなんて。いい人そうだと思っていたけど、次に来たら何か報復しておくべきか。

「フィオーネ、元気出す。今度、私怒る」

「え？……あ、違うよ、シマ。あの人はただ心配してくれただけで、色々……」

色々？

フィオーネは少し迷うような様子で、言葉を続けた。

「良くない噂を聞いたみたいで。それを教えてくれたの」

「うわさ？」

うわさって、何だっけ。

まずそこで引っかかって、それ以上話を聞く事ができなかった。

店に付き纏う不穏な噂について志真が知ったのは、翌日、学校にて。

「うわさ……？噂だろ」

「噂かあ」

ラスカウルがいない今、こうして分からない単語は誰かに聞くしかない。誰かというか、伊吹かウィガーしかいないのだが。更に言えばウィガーが最近捕まらないから、聞く相手は伊吹になってしまっ。

未だ出て行くこうとした事を根に持っている志真にとっては、非常に悔しいこの状況。何だか情け無くなるが、背に腹は変えられない。ラスカウルがいれば、と何度も思った。本当に、彼女はとうなってしまったのだろうか。もう成仏しちゃったのだろうか。

「それが何だよ」

何やらノートに書き写しながら、伊吹が聞く。テーブルの上には、難しそうな辞書っぽいものが山のように積まれていた。小さな挿絵があるものの、細かい文字がびっしりで、志真にはとても解読できそうに無い。



挿絵は植物の絵ばかりだ。植物の辞書か何かだろうか。そういえば伊吹の仕事は、農業だった。つまり、これは仕事の勉強？

そういうところは素直に凄いというしかない。嫌なやつだけど、ちゃんとやるべき事はやっているのだ。

「何っていうか、私にも良く分からないんだけど」

「ちゃんと説明しろよ」

とか言って、辞書を見ている伊吹の体勢は、ちっとも人の話を聞くものじゃない。

まあ、良いや。

1つ分席を空けたところで、志真は机に頬杖をついた。

「昨日、食堂久しぶりに開いたでしょ。お客さんは殆ど来なかったけど、良く来る常連のお客さんが来ててさ、何かフィオーネと話してたんだ」

「で？」

「何つか、フィオーネの様子が変わったから、何か嫌なことあったのかと思って。心配で聞いてみたら、何か悪い噂があるとか何とか言われたって」

それは多分、異世界人のことなんだと思う。どんな噂なのか詳しくは知らないけど、宿屋の客が減っているのはその噂のせいでもある。

「異世界人が、宿屋の従業員に怪我を負わせた」

「へ？」

唐突な伊吹の言葉に、志真は目を丸くした。

「客も何人か、異世界人に暴力を奮われたらしい。食事に何か異物を混ぜているのを見た。それで不審な死を遂げた者がいる。従業員の一部が、口封じに脅され身の危険を感じて逃げた。異世界人の女が、他の異世界人に、この宿を襲わせようとした。宿屋は金をもらっているから、それらの事件を隠そうとしている」

「何、いきなり」

「だから、宿屋に纏わる最近の噂だ」

噂って。

理解するまでに数秒かった。

「はあ！？何それ！従業員に怪我を負わせたって、それこの前の客の方だし！」

「事実と違って関係なく、噂は広まるからな」

「だ、だって、いくらなんでも違いすぎる！」

「まあ、誰かが意図的にうまく事実を捻じ曲げて、噂を流しているんだろっな」

「誰かって、誰が！」

「俺に聞くな。でもどうせ、反異世界人組織のどれかだろ。多分、カオロン達に怪我をさせた奴らもグルで」

「な、何それ、本当にありえないんだけど！」

自分たちでカオロンにあんな怪我を負わせておいて、そんな噂を流すなんて、最低すぎる。許せない。

「商売やっているところには、噂の影響は大きいからな。噂だけで潰れた店もあれば、逆に儲けた店もある。目の付け所は悪くない」

「何褒めてんの！」

「別に褒めてない。ただ、客観的に見ただけだ」

そもそもなんでそんな冷静でいられるのだ。伊吹にとってはやっぱり、他人事でしかないのだろうか。

（ああ、余計にもやもやする！）

「けど、この噂何か引つかかるんだよな」

「何かっていうか、全部引つかかるよ！嘘ばかりだし！」

「そうでもないだろ。一部は正しい。正しいことが混じっているから、余計に信憑性が出ているんだよな」

後半は独り言のように、伊吹が呟く。

彼が何を気にしているのか、志真にはさっぱり分からなかった。

というか、どうでも良い。今、考えるべきなのは、その噂を何とか

する方法だ。

## 志真と空の上の住人 2 (後書き)

年末年始は実家に帰るため、一時更新をストップします。次の再開は1月10日頃を予定しています。今年ありがとうございます。来年もまたよろしくお願いします。

### 志真と空の上の住人 3

人の噂も49日?70日?とにかく時間が経てばいずれは消えるって意味だったと思う。けど、そんな悠長な事は言っていられない。そんなに長い間店に客が来ない状態が続いたら、商売上がったりだ。失礼ながらハルベルト家は、そんなにお金に余裕があるようには見えない。

異世界人を預かっている事で出るって言う支給金だって、流石に宿屋の経営を支えられるほどの額では無いと思う。

何とか噂がデマであるって皆に分かってもらう必要がある。

(けど、どうすれば良い?)

嘘だと訴えたところで、元凶である異世界人の志真の言う事を、信じてもらえるだろうか。

(もらえるわけない)

はぁ、と志真は溜息を吐いた。

箒を持つ手に力が入らない。何とか集めたゴミを纏めて、志真は裏庭に出た。日が落ちた後の紫色の空の下、生ぬるい風が頬を撫でていく。

2度ある事は3度ある。

志真は裏の戸の前に人影を見つけて、そんな諺を思い出した。見覚えのある小さな人影。いつかの家出少年である。また来たんだ、そんな事を思いながら近づいた。2度目ともなると、警戒心も湧かなかった。

名前は何だったか。物凄く長かったような気がする。ことしか思い出せない。

「また、家出?なにあった?」

声を掛けると、小さな人影はびくりと飛び上がった。頭をすっぱり覆うフードに隠れて、子どもの顔は殆ど見えない。前と同じだ。これが子どもじゃなかったら、不審者として警察に突き出したいよ

うな格好だ。

「……………」

子どもは驚いたのか、固まったまま何も言わない。

「なに？どうした？」

できるだけ、優しい声を出してみる。言葉は選べないから、雰囲気だけでも。

そんな思いやりが伝わったのかは分からない。子どもは小さく開いていた唇を、一度堅く結んだ。そして、意を決した様子で再び口を開いた。

「すまぬ！」

その勢いと大声に押されて、志真はうおっと仰け反った。何だいきなり、物凄くびっくりした。呆気にとられている志真に対して、子どもは必死な様子で訴える。

「すまぬ、誓っておきながら、そなたの願いを叶える事ができなかつた。私は愚かで身の丈を知らぬ子どもであった。名に誓うなど、100年早いと兄上にもお叱りを受けた。希望を持たせて、再びここでそなたを失望させてしまうことになるとは。本当にすまぬ！」  
戸に小さな手をしがみ付かせ、子どもは必死で何事かを訴えている。小さな顎を伝う涙がぼたぼたと落ちていく。

（何で泣きながら怒ってんの！？）

志真は驚愕した。子どもが何を言っているのか、さっぱり分からない。だが、鬼気迫る勢いから何かに対して怒っているのだと見て取れた。

ってどうか、私に怒ってる？

何でだ。

全く身の覚えは無い。会つのは二度目。何かあったとしたら、この前に会った時の筈。だけど、いくら考えてみても分からない。

「どのような誹りも受ける。恩人にこのような仇を返すとは、私は

…」

しゃくりあげる子どもに、志真は困り果てていた。外である。先程から、行きかう人々の視線が冷たい。

はつとする。

(つていうか、これじゃまた変な噂が広まる！)

「ちょ、ちよつとストップ！落ち着いて！」

「…？」

「あ、えーっと、その静かに。話、聞く。中入る」

通じるかかなり不安だったが、子どもはこくりと頷いた。

さて、と取りあえず裏口から宿屋へ子どもを入れてみたが。

(あれ、これって誘拐とか疑われたりしちゃう？)

10歳前後のどうみても未成年の子どもを、勝手に連れ去るのは犯罪……一応志真も未成年だが。この国の法律なんかはさっぱり分からないから、日本の法律で考え……。

(やばい。日本の法律もよく分かんない。けど、やっぱりまずいかも。……いや、でも家出した子を保護したんだし。そういう時って警察に連絡しなくちゃいけないんだっけ？)

悩みだす志真の横で、子どもは物珍しげにきよるきよると辺りを見ている。

(……なんか、良いところの子の気がするんだよね。常に誘拐とかに気を配ってそうなの)

歩き方、立ち振る舞い。一つ一つが様になっている。そういう部分が目につくたびに、志真の不安は増えていく。

(駄目。私だけじゃ何ともならない！)

巻き込んでええ。

志真は迷わず伊吹の部屋へ子どもを連れて行った。

「ふざけんな」

押しかけ、事情を説明した志真に対して、伊吹は冷ややかな視線を向けた。いつもの事なので慣れている。が。

「いっさん、そんな怖い顔やめて。この子が怯えてるじゃん」

僅かに志真に身を寄せてきた子どもの手を握り、志真は抗議した。思い切り眉間に皺を寄せた伊吹は、苦々しい顔で視線を反らした。

「どこの誰なんだその子ども」

「良く分かんないんだよね。近所の子では無さそうな感じがするけど。名前、何だっけ？」

最後は子どもに向けて聞く。

「私は……チャティ、という  
ん？」

そんな名前だったっけ。何かもつと長ったらしいものだったよう  
な。

「親は？」

「……………」

伊吹が聞くと、チャティは押し黙る。

いないのか、それとも言いたくないのか。なにやら複雑そうな匂い  
がする。

「家はどこだ？ここから近いのか？」

「……近くは無い。だが、別邸が近くに」

チャティの言葉を受けて、伊吹が呟く。

「金持ちだな」

「え？何？何だって？」

「近くに別邸があるそうだ。良いところの子どもらしい」

「やっぱりね、何か雰囲気あるよ」

うんうんと頷く志真を、伊吹は白い目で見やった。

「ちゃんと、言っ出てきたのか？」

「……………」

再びの無言。これは多分、黙って出て来たに違いない。まずい事  
になりそうな予感が一層高まる。



「……灰谷に何の用で来たんだ？」

「謝罪をする為」

「謝罪？」

謝罪？と志真も首を傾げる。単語の意味が分からなかったからだ。伊吹が問うような視線を向けてくるが、当然答えられる事は無い。

「何の謝罪だ？」

「願いを聞き、誓いながら果たせ無い事」

「願い？」

再び視線を向けられて、志真は首を傾げた。

「何？その子何て言ってるの？」

「お前の願いを叶えられないことを謝っているようだが。何を言っただんだ？」

「こんな子ども相手に。」

と、伊吹の目は責めていた。誤解だ！そんな子どもに頼みごとなんて……、いや、何か言ったような。あまり確かではない記憶を探る。

確か何か困っている事はないかとか聞かれたのだ。それで答えた、だけの筈。

「……思い出したか？」

「何その犯罪者を見るみたいな目！私はただ困ってる事は無いかって聞かれたから」

「聞かれたから？」

「も、モクのことをちよつと話したけど」

「……」

「で、でも何とかしてくれなんて頼んでない！ただお互い大変な事もあるけど、頑張ろうね！ってそういう気持ちでさ」

まさか、チャティが本気で何とかしようと考えてくれるなんて、思いもしなかった。普通、思わない。偶然出会ったばかりの相手、それも子どもだ。

何でだろう。

そこまでしてくれる理由が分からない。先程の必死な様子は、怒っているわけではなかったのか。泣いていたのは、志真の為？

理由が分からない。でも、何か胸の奥が暖かくなった。

「ちよつと、いっさん、通訳して！」

「はあ？」

「良いから、お願い」

志真はその場に膝を付き、チャティと視線を合わせた。チャティの目は相変わらずフードの中だが、気持ちだけ。

「ありがとう、チャティ。モクのこと助けようとしてくれて。それだけで嬉しいし、充分だよ。モクの事は私が何とかしなくちゃいけない事なんだ。だから、チャティが謝る必要は全然無い。本当に、ありがとうね」

少し遅れて、伊吹がこちらの言葉で繰り返している。（筈）透明な涙が、再びチャティの顎に流れてきた。

「す、すまぬ」

「良いつて、チャティは全然悪く無いから」

志真は立ち上がって、思い切りその頭を撫でた。顔を見られたくないようなので、フードが外れないように注意して。

その時。

何の前触れも無く、伊吹の部屋のドアが吹っ飛んだ。

志真と空の上の住人 3 (後書き)

あけましておめでとございます。  
本年もよろしくお願ひします。

## 志真と空の上の住人 4

映画なんかで、こんなシーンを見たことあるかも。

いきなり部屋に襲撃者がやってきて、ドアをすっ飛ばしてしまうのだ。流石に現実と映画は違った。大迫力だ。

衝撃的な光景を目前にして、志真はそんな事を思った。勢い良く吹っ飛んで行ったドアは、天井近くまで跳ね上がり奥に詰まれた家具の中へ落ちていく。思わず耳を塞ぎたくなるような凄い音がした。部屋の中を風がびゅうつと吹き抜けて、閉まった窓をがたがたと内側から揺さぶる。当然志真の髪も後ろに靡いていた。風が強くてまともに目が開けていられない。それでも薄目で確認すると、無くなったドアの向こうに人がいた。長身で、がっしりとした体躯。頭に派手な金属のヘルメット……じゃない、洋風の兜？みたいなものを被り、全身に金属の鎧を纏ったぴかぴかした男だ。その手に握られたものを見て、志真はごくりと息を飲む。

剣だ。

模造等には無い怪しげな輝き、あれは本物に違いない。カオロンさんが毎晩研いでいる包丁よりも、切れ味が良さそうだ。

武装した強盗だ！と志真は思った。

「いいいいっさん！」

「……………」

返事は無い。

伊吹は唾然とした様子で、ベッドに座ったまま固まっている。頭にへばりついたこてつが何か間抜けだ。その姿に何だかがっかりしてしまふ。

駄目だ。

頼りにならない。

「チャティ！」

チャテイも、凍りついたように立ち竦んでいる。先程の風のせいで被っていたフードが外れ、胴色の髪が靡いていた。青ざめた顔は思った通り幼い。ふつくらとした頬に大きな目。ぱつと見、女の子にも見える可愛い顔立ち。  
弱々しく、頼りない雰囲気心が動く。

（私が助けなきゃ）

そう思うと同時に、志真は動いていた。チャテイの腕を引いた。瞬間、鎧の男が剣を抜く。やばい。

「逃げよう！」

「動くな、灰谷」

そんな志真の動きを制したのは、伊吹だった。動かなかつたら、殺されちゃうのでは。しかし、咄嗟に足を止めてしまった志真達に對して、鎧の男も動きを止めた。いかつい兜の下で、鋭い緑色の瞳が油断無くこちらを眺めている。

う、動けない。

動いた途端に殺されそうな気がする。じわり、と手に嫌な汗が滲んできた。

「鎧の肩のところを見る」

こんな時に悠長な、と思いつつ志真の視線は素直に鎧男の肩を見た。ゆりの花みたいな模様が、金色で描かれている。外見に似合わず、中々可愛らしい趣味だ。けど、それが一体なんだというのだ。

「ステアの花の紋章。この国の王家の紋章だぞ」

「王家の、紋章？」

水戸黄門はピンチの際に印籠をつきつける。印籠に描かれているのは葵の紋だ。それでもつて、天皇家の御紋が菊。

「何、偉い人つて事？」

「……その程度の認識なのか。お前、もう面倒だからひざまずいて頭でも下げとけよ」

「何で！嫌だよ！」

印籠を見た一般人は確かにははーっとその場に土下座をし、頭を下げている。しかしあれはあくまで昔の話だ。現代人の志真としては、やはり抵抗がある。

第一、相手がどんなに偉い人だろうと、怯えている子供を見捨てるわけにはいかない。

(そうだよ…、もしかしたら、チャティは逃げてきたのかも)

偉い人〃良い人だとは限らない。

すつと、鎧男が動いた。部屋の中へ足を踏み入れる鎧男を、志真は警戒した面持ちで見つめる。剣を抜いたままだ。何か、変な事して来そうだったら、チャティを連れて逃げよう。

張り詰める緊張した空気に、酸欠になりそうだった。

静まり返った部屋の中で、かちりという音が大きく響き渡る。何の音か、確かめる暇も無かった。チャティのマントの裾から小さなボールが転がり出る。間髪入れずに、チャティはそれを鎧男に向けて蹴り上げた。

はつとした鎧男が顔を庇うように手を上げるが間に合わない。

脳みそを揺さぶるような轟音と、目が開けていられないくらいに閃光が広がる。耳の奥がぐわんぐわん痛むし、目の前が白くて何も見えない。何が何だか分からない状態で、チャティに腕を引っ張られた。

ちよつと待って！と、言っただつたが、果たしてちゃんと喋れていただろうか。チャティに手を引かれ、何度も転んだり落ちたりしながら、どこかへ進む。漸く目が見えるようになった時には、既に宿の外に出ていた。

「ここ何処」

知らない場所だ。

夜だから、というのもあるが、余り見覚えの無い場所だ。大きな

道からは少し外れた、余り人通りの無い裏通り。建物も転々と離れて建っていて、灯も少ない。

先程から余り人ともすれ違わない。振り返ってみるが、どうやら追手もないようだ。

(いっさん、大丈夫かな……)

結局置いてきてしまった。志真のせいではないと思うが、少し後ろめたい気持ちにもなる。鎧男の目的はチャティだろうし、伊吹が危害を加えられる事は無い……と、思いたい。

半歩先には、志真の手を引いて進むチャティの小さな背中がある。外れてしまったフードを、再びしっかり被っている。

「チャティ？」

呼びかけてみると、ぎくりとしたように肩が揺れた。

「……すまない」

恐れるように、怯えるように謝罪される。

「別に良いよ。でも、ここどこ？」

う、とチャティも言葉に詰まる。

「……分からないんだ」

「すまぬ」

消え入りそうな声でチャティは謝った。まあ、仕方無い。必死で逃げてきたのだし。でも、これは結構困った事態なのでは。

チャティは何故か追われている。敵は良く分からないけど偉い人らしい。その上、迷子。志真達だけでは、どうにもならない事態だ。誰かに助けを求めたいところだが、何処の誰に言えば良いのかも分からない。

しかし、ただ闇雲に歩き回ったところで、事態が好転するとは思えなかった。

「チャティ。ちょっと休む。良い？」

不思議そうにこちらを見上げるチャティに、志真は道の脇のなだらかな土手を指差した。小川に繋がる土手には、背の高い草が生い茂っている。その中に座ってしまえば、2人の姿は隠れてしまうだ

ろう。

「座る」

「……座る？」

何故か洩るチャティを引っ張って、志真は土手に腰を下ろした。がさがさ揺れる草の陰から、カラフルな虫がいくつも飛び去って、その度にチャティは小さな悲鳴を上げている。

ああ、と志真は納得した。

「虫、怖い？」

「怖くなど無い！……急だったから、少し驚いただけだ」

むきになるのがおかしくて笑いそうになるが、我慢する。

「……こんなところに座るのは、初めてだ」

何だか感慨深げに、周りの草むらを見渡している。しかし、残念ながらあんまりのんびりしている時間は無いと思う。鎧男に見つかるとはという不安もあるが、空がもうすっかり暗い。チャティの家の人達が心配しているのではないかと思うのだ。

「チャティ、家何処？」

聞くと、困ったように押し黙られた。

帰りたくないのかもしれない。まだ、家の人と喧嘩中なのだろうか。でも、そんな事言っている場合じゃ無い。

「送る」

「……シマ」

「帰る、良い。絶対」

帰れなくなってしまう前に。

志真だつて帰れるものなら帰りたい。時々思い出すと、無性に恋しくなってしまう。だから、なるべく考えないようにしていた。

お母さん……とか、感傷に浸っている場合じゃ無い。今は、とにかくチャティを無事に帰さなくちゃいけないのだ。志真はぐっと目の奥に力を入れる。



「家、何処？」

もう一度聞くと、チャティは無言で空を指差した。

一度星空を見上げてから、志真はできるだけ真面目な顔でチャティを見下ろした。

「あのね、チャティ。真面目に」

その瞬間。かっと眩しい光が頭上から降り注いで、志真達を照らし出した。やばい。見つかった！思わずチャティの手を掴み、逃げ出しそうになった志真の耳に聞き慣れた声が飛び込んできた。

「シマ、ハイタニ。大人しくしている。じゃないと、王子誘拐罪で箱送りにしてやるぞ」

言っている意味は分からないが、何だか嫌な予感がする。声の主が志真の天敵、ユーイ・ユーイだったから余計に。

## 志真と空の上の住人 5

チャタレイ・フィナス・イルド・アティカ。

この国の王子であり、本来なら空に浮かぶ島の城にいる筈の彼が、何故現在地上に降りてきているのか。その理由を聞いたウイガーは思わず痛む頭を押さえた。

命の恩人に恩を返したいから。

立派な心がけである。しかし、面倒なことこの上ない。その命の恩人というのがよりにもよって志真なのだ。本人は未だ知らない筈であるし、できればこの先もずっと秘密にしておきたい。でないと、調子に乗って色々やらかしそうな気がしてならない。

「本人はまだ気が付いて無いんだろ」

護衛を撤いて消えた王子搜索を手伝わされていたユーイは、かなり不機嫌そうな様子で、ソファーに寝転がったまま目を瞑っている。「だったらそのまま、伏せておけ」

無論、依存は無い。

なんて取り決めがされていたとは、全く知らない灰谷志真である。チャティはかなり良いところの、貴族の坊ちゃん。兄と喧嘩して家出していたところで、伊吹の部屋のドアをぶち破って現れた鎧男は、チャティを迎えに来た護衛。そう説明された事を疑ってもしなかった。

壊されたドアは、チャティの家が修理代を出してくれるらしい。良かった。ウイガーは何とか断ろうとしていたが、あれは鎧男が悪いのだから、遠慮せずどーんと出してもらえば良いのだ。

帰るといふチャティを見送る時に「また遊びに来て」と声を掛け

ると、何故かウィガーから凄い目で睨まれた。チャティ自身は喜んでいたので、心が狭い。確かにちよつとばかり下心はあったが。貴族でお金持ち。

チャティが家族と一緒に宿屋の常連客になってくれたら、宿屋も助かると思っただけなのだ。ほんの、ちよつとだけ。

勿論、チャティが寂しそうだったからってというのが、一番の理由だ。

(でも、流石に子どもに頼るってのは、情けないか)

モクのこと、宿屋のこと。志真が自分で何とかすべき問題だ。

「難しい顔して、何考えてんだ、シマ」

物思いにふけっていた志真は、その声にはっと顔を上げた。1つ分の席を空けた場所に座り、机に肘をつきこちらを見下ろす三つ目の男。にやけた顔も、何か懐かしく見える。

「ニトロ！」

「よ、久しぶりだな。元気だったか？」

ここ最近、彼はずっと学校を休んでいた。こうして顔を合わせるのは3日ぶり。

午前は伊吹も来ないから、広い学校に一人っていう日も珍しく無い。今日も先程までそうだったのだ。

「何、休む」

「あー？ああ、俺はこうみえて病弱でね」

「ん？」

「体が弱い」

「体が弱い……？」

志真は胡乱な目をニトロに向けた。確かに少し細身に見えるが、血色も良いし呼吸も普通。何よりにんまりと上がった口角が、嘘っぽい。

「真面目、少しはする」

「いや、ホント。これでも結構やばかったんだぜ。まあ、俺の話は良いとして、そっちはどうなんだ？また色々大変なんだろ。宿屋に客が来ないとか変わった客人が来たりとか」

ニトロは何でも知っている。

「お前も大変だな」

「うん」

全くだ。

そもそも、異世界になんて来てしまった辺りがもう。でもそれは、目の前のニトロも一緒なのだと思います。いっつも飄々としているし、にやけているから忘れてしまいそうになるけど。

「ニトロも大変。じゃない？」

「俺は結構この状況を楽しんでるよ。中々、退屈しないし、悪くないゲームもあるし」

「強い」

楽しいとか言えるなんて。別に強がって言っているわけでもなさそうだ。

「怖い、ない？家族とか、会えない」

「家族ねえ」

相変わらず、ニトロはにやにや笑っている。でも、ほんの少しだけ先程までの笑みとは違って見えた。何というか薄暗い感じだ。

「なあ、シマ。お前の世界は良いところだったんだろうなって、お前やイブキを見てると思うぜ。良い世界で、良い国で、家族にも恵まれて。だから、帰りたかって思えるんだろうな」

「ニトロ？」

「俺にとって、家族ってのは枷だった。自由に動けないようにする為の枷だ。親も親戚もいない、妹を生かしてやれるのは俺だけっていう状況が重くて、逃げ出したかった」

普段より低い声で淡々とニトロが言う。

何を言っているのか、さっぱり分からない。単に志真がこちらの言語に慣れていないせいではない。まるで、聞いた事のない言語だ

った。多分これは、二ト口の世界の、二ト口の言葉なのだ。

「分からない」

「ああ、悪い。ただの愚痴だ。気にするな」

スイッチ1つで切り替えるみたいに、二ト口はいつもの笑顔でそう言った。

何か、相変わらず良く分かんない人だ。

人懐っこいし世話好きみたいだし、何かと志真を構ってくれるが、本人の話は殆ど聞いた事がない。他の人の話は結構教えてくれる癖に、自身は秘密主義のようだ。

実はこれで、結構苦労しているのかもしれない。

「二ト口、何かあったら、言う」

「ああ？」

「私、助ける。いつものお礼。友達だ」

何か困った事があったら言うのだぞ、今度は私が助けるから。そう結構良い事を伝えたつもりだったが、何故か二ト口には爆笑された。

(むかつく)

まあ、確かに何ができるって言われたら困るのだが。志真には、何も無い。ピンチを乗り切る素晴らしい策を思いつく知恵も、力もお金も権力も無い。

けど何も、そこまで笑う事は無いじゃないか。

「まあ、そんな膨れるな」

「……………」

「気持ちがありがたく貰つとく。今まで俺にそんな事言った奴は2人目だからな」

2人目？

その言葉に反応すると、二ト口は目を細めた。

「1人目は、モクだ」

その名前にどきりとする。嬉しくなる。

「モク、優しい」

「ああ、残念なくらいに優しいな」

何が残念なんだ。二ト口のいう事は、相変わらず意味不明だ。

二ト口と話している内に、昼の時間になっていた。朝、ミーチェに用意してもらった弁当を取り出す。二ト口は来る途中に屋台で買ったというハンバーガーみたいな食べ物。

その時間になっても、他の生徒が来る気配は無い。

保護施設入りになっているモクとハルラックはいいとして。

「アルジャラーも来ないとか、珍しい」

「ああ、いつつもその辺で寝てるからな」

日当たりの良い席で、すやすやと安らかな寝息を立てている彼女がいないと、何か違和感がある。

「じいさんもいないし」

「じいさんはまた何か妙な研究でも始めたんだろ」

良く分らないが、忙しいのだろうか。後は。

「……リキキと、キリリは」

「あいつらは元々夜間の生徒だからな」

何故なら太陽が苦手な吸血鬼だから。それなのに青い顔でふらふらしながら昼間の学校へ来て、ぎゃあぎゃあ騒いでいたのだ。

理由は志真にだって分かる。

モクがいたから。

志真はぶんぶんと首を横に振った。駄目だ。気がつくど落ち込みそうになっている。いつまでもうじうじしてたって仕方無い、とにかく前向きに頑張ろうと決めたのだ。

「そ、そういえば……二ト口、相談ある」

「何だよ？」

「宿屋に、客呼ぶ方法」

「ああ」

事情を知っているらしいニトロは、パンを口に頬張りながら頷いた。

「そつちか。大分評判悪いからなあ、よっぽどの目玉でもない」と

「うんうん」

「すぐには思いつかねーな」

だよ。

「が、あの噂を流している奴らなら心当たりがある」

「……………」

へ？

と、思わず間抜けな顔になった志真を、ニトロはにやりと笑って見下ろした。

## 志真と空の上の住人 6

猪突猛進。

灰谷志真を一言で表わすならそんな感じ。

二ト口から噂の出所に心当たりがある、と爆弾発言をされた志真は、その場で学校を早退する事を決めた。即決だった。

「連れてって、行く！」

「は？今からか？」

「うん！」

「まあ、そう来るとは思ったが」

面倒そうにしながらも、二ト口は立ち上がってくれた。一緒に受付に向かい、ジャイルに預けていた荷物を受け取る。早退すると告げても特に何も言われない。この学校は本当にかなり自由だ。

「けど、確証は無いからな」

「ん？」

「あー、本当か、間違いか分からないって事だ」

「良い。確かめる」

「どうやって？」

「聞く」

その返答に、二ト口は片方の目を細めた。

「聞くって、お前。正直に認めると思うか？」

その顔は明らかに志真の頭を疑っている。もっと頭使えよ、って思っているに違いない。でも正直まどろっこしい事は苦手だ。聞いたところで本当の答えが聞けるとは、志真だっと思っていない。だけどきつと、どっかに動揺が表れるじゃないかと思うのだ。

人は嘘をつくとき瞳孔が大きくなるとか聞いた事がある。

異世界人にもこれが当てはまるかは知れない。

それに、志真はこれでも勘が良い方だ。きつと嘘を見抜けるはず。



そう自信を持つ志真の隣で、二ト口は呆れたように肩を竦めた。

「……分かった。予定を変更だ」

「なに？」

「良いから、ついてこい」

そう言って連れて行かれたのは、病院だった。

この国の病院は、白いドームのような形をしている。通学途中で初めて見かけた時は、てつきり競技場か何かだと思っていた。厳しい門の前ではためく緑色の旗に下へ短くなっていく三本線。それが病院のマークなんだとか。意味は知らない。

で、問題は二ト口が志真をここへ連れてきた理由である。

「喧嘩売ってるの？」

ここで頭を見てもらえ、と二ト口ならば言いかねない。志真は思わず日本語で二ト口に文句を言っていた。

「突然何怒ってるんだ？」

「……頭、平気」

睨みつける先で、二ト口は含み笑いをしている。

「ふ、そうくるか。っていうか、一応自覚はあるんだな……っと、違うから怒るな」

何を言われたのかは分からない。だが何となくイラっときて叩こうとしたが、残念ながら避けられた。中々反射神経が良さそうだ。

「会わせたい奴らがいるんだよ」

そう言って、にやりと笑う。

「……言っとくが、一応怪我人だからな。暴力はなしだ」

一体何を言っているのか。例えば、言葉が完璧に理解できたとしても、分からなかったに違いない。

二ト口は受付で話をした後、志真を連れて3階へ向った。病室のドアが内側にずらりと並ぶ。部屋のドアに触れると表面にぼんつと

文字が浮かぶが、当然志真には読めなかった。多分、そこに入っている人の名前だと思う。

その名前に触れると、ドアの上の方からぼわっとした女性の声が響いた。

「お名前をどうぞ」

「二ト口だ」

暫くの沈黙の後、再び声が響く。

「入出を許可されました」

そして、ドアが横にすっとスライドした。何か、ハイテクだ。慣れた様子で入っていく二ト口を追って、志真も病室に入る。正直言っ、気後れしていた。いくら志真でも、知らない人の病室に入るのは気が引ける。

部屋の中にはベッドが2つ並んでいた。それぞれのベッドに、男が1人づつ。窓際のベッドの男は、随分顔色の悪い痩せた男で、頭と腕に包帯を巻きベッドに腰掛けていた。ドア側のベッドの男は長身でプロレスラーみたいな体格の男で、こちらは正に満身創痍。体のいたるところにぐるぐると包帯を巻き、目の周りに大きな青あざをこしらえていた。

「またお前か」

二ト口の知り合いにしては、何だか歓迎されていない様子だ。

「今度は何だよ。そっちの女はなんだ？お前の連れって事は、異世界人か？」

プロレスラーみたいな男に凶悪な視線を向けられても、二ト口はにやにや笑いを崩さない。余裕な感じだ。うん、まあ、分かる。あの様子じゃどんなに凄んでみても何もできない。

「例の宿屋の居候だ」

そう言つと、何故か2人とも青くなった。

「何？」

「紹介してやる。シマ、この2人が宿屋で暴れた奴らだ。騒いで料理人を怪我させたって言う」

宿屋、暴れる、料理人、怪我。

単語を繋げて、意味を探る。勘違いでなかったら。

「この2人、犯人？悪い？」

「噂の方じゃ無い。宿屋にケチつけた異世界人差別の奴ら。ああ、まあ、1人足りないが」

やっぱり宿屋で暴れた人達だつて事で、良い様だ。志真はまじまじと、ベッドの上の2人を眺めた。彼らがカオロンに怪我をさせた奴らなのか。会ったらどうしてくれようと思っていたが、ここまで酷い有様では。

つていうか。

（一方的にカオロンさんがやられたんだって思ってたけど、違うわけ？）

新たな不安が生まれてしまう。

慰謝料とか請求されないだろうか。

「……怪我、何」

恐る恐る、二ト口に聞いてみる。すると、彼は更に笑みを深めた。「粛清」

初めて聞く言葉だった。ベッドの上でプロレスラーが唸る。「ふざけやがって」と凄んでみせるが、やはり何も出来ない。両足も両腕も、もしかして骨折しているのだろうか。

向こうのベッドの痩せた男は、顔を背けて小刻みに震えている。一体何なのだ。

「まあ、色々いるつて事だな。どこの世界にも色々な奴がいる。異世界人を嫌うのもいれば、熱狂的に支持する奴もいる。シユターク教派の奴らは、異世界人に危害を加えようとする奴らを許さない。……つまり、簡単に言うとな」

訳が分からない。

そんな顔をしている志真に気がついた二ト口は、一旦言葉を区切り。

「異世界人好きの変態に襲われたつて事だ」

その説明は、物凄く分かりやすかった。

異世界人好き、そんな人達もいるのか。嬉しいかは微妙だ。何せ、聞き取りが間違っていなかったら、その異世界人好きの人達が、この異世界人嫌いの2人をこんな無残な姿にしたという事になる。過激すぎる。

はつきり言つて、怖い。

ちっと、プロレスラーのような男が舌打ちをする。

「俺らはただ女に乗せられたただだけだ。大した手も出しちゃいねえ。

異世界人のいる店の中で、ちよつと騒いでやるうつて、それだけで

……あいつら、いかれてやがる」

「怪我だけで済んで良かったじゃねえか。俺が助けてやらなかったら、そんな文句も言えなかったかもな」

にやにやと笑う二ト口に、プロレスラーは顔を赤くして押し黙った。

どういう知り合いか知らないが、立場は二ト口の方が上らしい。

その力関係はかなり謎だ。

「とにかくな、シマ。こいつらは、店で騒ぎを起こした後、こうなった。ずっと怪我の治療中だ。大した金も無えから上級の治療は受けられない。噂はまた、別口だ」

噂を流したのは彼らじゃない。犯人は別にいる。

そう言われている事は理解できた。

「二ト口、知ってる」

「……知ってるわけじゃない。見当をつけているだけだ。犯人はこの2人を唆した女、それからシユターク教派。つまり、異世界人好きの変態共だ」

ああ、なるほど！

とか思えるわけなかった。  
異世界は、本当に訳が分からないところである。

## 菊乃の脱出 1

遠くから足音が近づいてくる。歩調はやや早め、規則正しくかつかつと響く音に菊乃は耳を澄ませていた。予想したとおり、足音は菊乃がいる部屋の前で止まる。ほぼ同時に、外側から鍵を回す音が聞こえ、ドアが開く。

「おはよう、もう目が覚めているようね」

明るく声を掛けてくる女性の声。

その姿を、菊乃は見ることができない。

ここで目が覚めたときから、菊乃は視力を失っていた。流石に動揺したが、一時的なものだと説明を受けて少し落ち着いた。それが本当かどうかは分からないが、信じるしかない。一向に見えるようになる兆しが出てこなくても。

深く考えると不安で押しつぶされそうになるから、なるべく考えないようにしていた。

「大丈夫？ぼうつとしてるけど、まだ傷が痛む？」

女性の声は優しく労わりに満ちていた。名前すら教えられていないが、親切にしてもらっている。

「大丈夫です」

やんわりと否定するが、本当は少し痛かった。

寝ている間に治療されていたらしく、傷口はほぼ塞がっている。

傷の箇所は、腹部の左当たりと鎖骨の右下当たり。多分、刺されたのだと思う。ドアが開くと同時に眩しい光を向けられて、咄嗟に目を瞑ってしまった。首筋にちくつとした小さな痛みを感じた後の事は、あまり覚えていない。

動けなかった事と、黒い布で顔を隠した男の姿。それから、床に仰向けになった状態で、上から2回剣で刺された事と、その時の気が遠くなるような痛み。

断片的には思い出せるが、はつきりもしない。

その時に何か会話をしたような気もする。いくら考えても思い出せなくて、その内に全部の記憶が本当にあった事なのか、分からなくなってくる。傷があるから、刺された事だけは確かなはず。でも、それならどうして生きているのだろうか。

そして、ここは何処なのだろう。

「朝食よ。食べられる？」

頷くと、光の中で暗い緑のような影が動く。ベッドに座る菊乃の手を、華奢で冷たい手が掴みひっくり返す。掌の上に柔らかいものが置かれた。丸い形をしていて、一部だけ冷たい。多分間に何か挟んだパンだ。こういうものなら、目が見えなくても簡単に食べる事ができる。

「いただきます」

パンを一口かじってみる。少し固めの、塩気のあるパンだ。挟んであるものは歯ごたえのある葉野菜に、ハム、チーズ。

「スープもあるわよ」

空いていた左の手に、マグカップを渡される。

「ありがとうございます」

こちらは細かく刻んだ野菜と鳥肉？のスープだった。温く暖められたミルク、食後に甘く煮た果物。いつも全部は食べられない。申し訳ないと思うのだが、無理に食べると吐いてしまうのだ。動いていないから食欲が出ないこともあるが、思った以上に体調も悪い。

食事が終わると、女性は簡単に部屋の片づけをして、出て行く。

外から鍵が掛けられる音がして、菊乃は小さく溜息を吐いた。

ここは一体どこなんだろう。

保護施設ではないと思う。まず部屋が違うようだし、何の説明もされないというのはおかしい。施設にいた時は、世話をする職員が決まっていた、きちんと名前を覚えてくれた。ここでは、誰の

名前も教えられていない。

勿論、ユーイ・ユーイの屋敷でもない。怪我をしたから病院に入られているというわけでもなさそうだった。

どこか知らない場所に、監禁されている。

多分それが正解なのだろうが、一体どうして。殺されるなら兎も角、こんな風に閉じ込められる理由が分からない。犯人は、あのチフセとかいう男なのだろうか。

彼は菊乃の事を知っていた。

名前だけでなく、色々な事を。普通は知らないようなことまで。

だが、チフセと名乗った男は、あれから一度も菊乃の前に現れていない。ここの人達の仲間ではないのだろうか。とにかく謎が多すぎる。

閉じ込められている事以外の待遇は、そこまで悪くない。食事は三食出るし、怪我の治療もしてくれている。拷問される事も無い。今のところ、入浴が2日に1度しかさせてもらえないことが不自由に感じるが、それだって監禁されている立場を思えば贅沢といえる。

彼らは、一体何がしたいんだろう。

全然分からない。

菊乃は溜息を吐いて、ベッドに仰向けに寝転んだ。目が覚めて、日数を数え始めてから既に12日が過ぎている。何も出来ず、何も起こらず過ぎていく日々を、菊乃は恐れていた。

ずっとこのままのはずがない。

次に何が起こるのか、何をされるのか。予想できないだけに恐ろしかった。部屋に近づく足音が聞こえるたびに、不安と緊張で気がおかしくなりそうだった。

できればすぐにでも、ここから逃げ出したい。だが、目が見えないこの状態では、逃げ出す事は難しかった。



頼みの綱は、外からの助けだけ。

しかしそちらも、菊乃は期待していなかった。

保護者だったユーイ・ユーイを怒らせてしまっている。彼はきつと菊乃を探したりしないだろう。ジェレミーは心配してくれてはいるかもしれないが、最後はユーイ・ユーイに従う筈だ。

2度も自分を助けてくれたハルラック。彼がもう一度自分を助けに来てくれるとは思えなかった。ハルラックは優しい人だ。だが例え助ける気があったとしても、今は保護施設から出る事はできない。

やっぱり、自分でも何とかしないと。

目が見えなくても、逃げ出す事はできるだろうか。手探りで部屋の様子を確認した限りでは、窓はなかった。ベッドと丸いサイドテーブル。椅子が一脚。棚の1つも無い。部屋の大きさは6畳くらいだろうか。トイレに続くドアと、外へ出入りする為のドアがある。ドアは重たい金属製で、上の方が四角く空いていて、鉄格子が嵌っていた。鍵は外から掛かっている。見張りは多分いないと思う。

もし、逃げ出すとしたら誰かがここへ食事を運んできた時。

あるいは、外にある風呂へ行っている時。それが菊乃が唯一この部屋の外へ出られる時だ。

風呂といっても、浴槽やシャワーがあるわけではない。

隙間が空いた木の板の床がある場所で、たらいのようなものにお湯をいれ、それで体を洗ったり髪を洗ったりする。手渡されているのは石鹸と、タオル。その場所がどんなところなのかまでは、分からない。

音の反響具合から、そんなに広い場所では無いと思う。

気を使われているのか、入浴に付き合うのは必ず女性で、最近は脱衣所の外で待っていてくれるようになった。

風呂に窓はあるのだろうか。

換気の為に作られているかもしれない。

少しだけ希望が見えてきた。次の入浴の時に、確認してみよう。不審に思われないよう、お湯を使っている音を出して……。そこで、菊乃は「あ」と小さく声を上げた。

水。

症例38。

そう告げたユーイ・ユーイの声が蘇る。実感はあまり無いが、菊乃は水と呼ぶことができるのだと彼は言った。異世界に来た際に起こった、能力付加。ハルラックのピンチにいきなり湖が出現した、あのとんでもない現象を引き起こせるなら、逃げ出す手助けになるかもしれない。

幸い、風呂場には水がある。

室内で試す事は危険だが、風呂場なら誤魔化せるかもしれない。何だかいけそうな気がしてきた。久しぶりに、気分が高揚してくる。

次の入浴は明日の夕方だ。

ばれないように、慎重にやらなければならない。落ち着かない気持ちは抑えるように、菊乃は目を閉じ深呼吸をした。

## 菊乃の脱出 2

いつの間にか眠っていたようだ。

頭が重く、気だるい。ここへ来てから寝すぎている。する事もないし、目が見えないせいだ。

知らない場所、知らない人々。

最初は警戒してとても眠れなかった。何も出来ないからじっと息を押し殺して、目が見えない分耳を済ませて。足音が近づいてくる度、ドアが開けられる度に恐怖と不安でおかしくなりそうだった。

今だって、状況は変わっていないが、菊乃の方がこの生活に慣れてしまっていた。

何時くらいなんだろう。

目が見えないから、時間は分からない。光を感じる事はできるから、室内の暗さや明るさで、昼なのか夜なのか判断をつけるしかなかった。後は、三度の食事だけが菊乃に時間の流れを教えてくれる。結構眠ってしまったような気がした。じきに昼食の時間だろうか。食欲は無い。今日もあまり食べられないだろう。

未だぼんやりとする頭を左右に振って、菊乃は起き上がった。米神の辺りが鈍く傷む。何かあまり体調が良くない。ベッドの上でぼうつとしたまま、菊乃は上を見た。今日は何か騒がしい。ばたばたと行きかう人の足音と、時折言い争うような声が聞こえる。何と言っているかまでは、残念ながら聞き取れないが何かあったのだろうか。

目が覚めたのは、この騒がしさのせいだろう。

その内に、この部屋に近づいてくる足音に気がついた。ひたひたと、音を殺すような静かな足音。気をつけていなければ、上の騒が

しさに紛れて聞き逃してしまいそうだ。

足音は部屋の前で止まった。

かちりと鍵が外されて、ドアが開く。

いつもと違う雰囲気を感じて、菊乃は身構えた。ドアを開けた人物は、そのままそこから動こうとしない。言葉もなく、ただ視線だけを送ってくる。どうしたら良いのか分からず、菊乃もただじっと息を殺すしかない。

居た堪れない沈黙を破ったのは、相手の方だった。

「ごめんなさい」

良く通る女性の声に、菊乃は目を見開いた。初めて聞くその声は、確かに日本語を喋っていた。

「出できれば貴方も連れて行ってあげたいんだけど、無理なのよ。こっちはもう1人で手一杯。あいつは捕まれば後が無いし、助けてあげられるのはあだし達だけ。だから、無茶はできないの」

違和感の無い日本語だった。この世界で話せる人はウィガーやりザレットくらいしかない筈。この人は一体何者だろう。混乱する菊乃を知ってから知らずか、女性は話を続けている。

「ほんとはもうちょっとこの町に留まるつもりだったけど、もう限界みたいね。ここのやつらが始めたことを止められなかったから。直に、酷い騒ぎになる。あんたもさっさと逃げて、保護してもらった方がよいよ。ごめんね。本当は外に出してあげたいけど、ここの奴らが許さないんだ。だから、せめて教えてあげようと思って」

時間があまり無いのか、早口で女性は言う。

「ここは表向きはイスルド神を祭る教会なんだけど、実際はシユターク教派の隠れ家なんだ。シユターク教派っていうのは異世界人を神の遣いとして歓迎してる奴ら。だから、あんたは大事にされてる。でも、やっぱり逃げた方がよい。3日後。イスルド神の聖誕祭がある。人が沢山来るその時なら、逃げやすいと思う」

かつん、と何かが床に置かれる音がした。

「差し入れ。その気があるなら使って。取り扱いには注意して。それじゃ、幸運を祈ってる」

別れの言葉に、菊乃ははっと息を飲んだ。

「ま、待って！」

漸く言葉が出た。聞きたいことが多すぎて、中々言葉が出てこない。しかし、考えている時間はなかった。

「あ、貴方は誰なんですか。どうして日本語を」

「……あたしは七海・ルルルイエ。祖父が日本人」

「え……」

「ごめんね、もう行かなきゃ。……あ、最後に1つだけ。嘘つきなこの国に、騙されて利用されないように。忠告しとくよ」

それじゃあね。

その言葉を最後に、ドアが閉まる音がした。外側から鍵が掛けられる。菊乃は思わず立ち上がったまま、暫くその場を動けなかった。

何だっただんだろう、今の人。

ななみ・るるるいえ？

祖父が日本人……、夢や幻で無く、現実の事だった？

恐る恐る立ち上がって、菊乃はドアに近づいた。彼女は部屋に何かを置いていったようだった。うろつろつと、手探りでそれを探す。

やがて、長く平たいものが手に当たった。どきりとした。何かがあるということとは、先程の女性は本当にいたのだ。

金属のような冷たい感触。長さは菊乃の手首から肘くらいまで。

取り扱いには注意して。

その言葉を思い出して、慎重に持ち上げてみる。結構な重さだ。片方が丁度掴み易い太さになっている。そちらを掴んだところでぴんときた。

これは剣だ。剣というか、短刀。柄を掴み、慎重に鞘だと思われ部分を引き張ると、やはり抜ける。

怖くなって、菊乃は鞘をすぐさま戻した。

これを、使えって。

無理だ。

ここから逃げたいと思うが、人を傷つける覚悟は無い。

武器を突きつけて脅す、それすらきつと無理だ。目が見えないこの状況では、何が起こるか分からない。

菊乃は溜息を吐いて、短刀をシーツに包んで隠した。

3日後なら風呂がある。しかし、夕方の時間では、もう遅いだろ  
うか。イスルド神の聖誕祭が一体どういうものなのかも分からな  
った。昼間だけのお祭りなら、夜になる前に逃げ出さなければなら  
ない。

もつと色々聞いておけば良かった。

しかし今更後悔したところで遅い。七海は随分急いでいたようだ  
し、あれ以上は無理だったのだろう。誰かを連れて逃げるような事  
を言っていた。どうして逃げる必要があるのか、それが誰なのかは  
分からない。その人の事が、少しだけ羨ましいような気がした。

七海は、その人の事をとても大切に思っているのだろう。短い会  
話だったが、そんな風に感じられた。

菊乃には、きつとそんな人はいない。

(自分で何とかしないと)

感傷に浸っている暇は無かった。

昼食の時間。

いつものように昼食を持って人が来た。持ってきたのは若い男性  
のようだった。朝の人では無い事に、まず違和感を覚えた。  
今まではずっと、朝と昼は同じ人が運んできていた筈だ。

「あの」

恐る恐る、菊乃は声を掛けた。

「どうかしましたか」

「何か、ありましたか？上の方が、少し騒がしかったです。朝の人は大丈夫ですか」

一瞬落ちた沈黙が怖い。ときどきする心臓を何とか沈めようとしながら、菊乃はぼんやりとした人影を見上げた。

「どうやら、いらぬ心配を掛けてしまったようですね。申し訳ありません」

「い、いいえ、そんな」

「大したことでは有りません。もうすぐ大切なお祭りがあるものですから、少し慌しくなります。朝の者は、その祭りの準備でここを離れております。代わりに手の空いた私が、ここへ」

「す、すみません……」

「謝る必要はありません。貴方のお世話をする事は、私共にとつてとても重要な務めであるのと同時に、光栄な事でもあります」

熱が込められた声に、背中がざわりとした。怖い。異世界人を神の使いと歓迎している。それは一体どういう事なのだろう。

「あ、あの……お祭りつて、どういうものなんですか」

「世界の歪みを正す為の祭りです。この世界を正しい有り方にする。貴方には随分長い間不自由な思いをさせてしまい、申し訳なく思っています。ですが、それも後暫くの辛抱。選定の月を過ぎるまでです」

「え……」

「直の解放を誓いましょう」

自由にすると、言われている。

それなのに、何故か酷く不吉な予感がしてならなかった。

### 菊乃の脱出 3

なんとしてもここから逃げよう。

七海と名乗った謎の女性と、親切だが何者なのか分からないこの人たち。

菊乃にとっては、七海の言葉の方が信じられるような気がした。単に同じ日本語を話していたから、という理由だけではない。目で見なくても、伝わってくる印象というのはあるのだと、この状態になつてから知つた事だ。

ここから逃げ出す方法としては、やはり風呂の時間が一番良い気がした。予定としては、3日後の祭りがあるという日にしたい。しかしその日、無事に風呂を使わせてもらえらるとは限らなかつた。祭りで忙しいからまた後日、なんて事にもなるかもしれない。

世の中は、菊乃の希望通りに動いてはくれないのだ。

だから、そうなつた時にはどうするか、しっかり考えておかなければならなかつた。

菊乃は立ち上がつて、手探りで今いる部屋の様子を探つてみた。今まで何度も行つた事だが、何か見落としがあるかもしれない。

床は頑丈そうな石畳。壁には木の板が張つてあるようだった。叩いたり、足踏みしたりして音を鳴らしてみるのが、どこかが空洞になつているとかいうことは、残念ながら無さそうだ。隙間風も無い。テーブルに乗って背伸びしてまで確かめたが、やはり窓は確認できない。少なくとも、手の届く位置には無さそうだった。光は感じるから、どこかに採光用の窓があると思うのだが。それより高い踏み台になりそうなものは無く、確かめようがなかつた。

第一、例え窓があつたとしても、そこまでよじ登る手段は無い。壁に耳を当ててみるが、静かなものだ。

何も脱出のヒントになりそうなものは見つからない。



「……………」  
必死に動き回ったせいか、少し疲れた。菊乃はそのまま壁に背中を凭れさせた。

ここは一体どういう場所なのだろう。

この場所は教会だと七海は言っていた。イスルド教の、でも実際はシユターク教派。ややこしい。

どちらの宗教も知らないから、イメージもしにくかった。

教会といわれると、どうしても日本で見たキリスト教の教会が思い浮かぶ。しかし、ここは異世界。余計な先入観は捨てた方がよい。建物はどんな感じなのだろう。大きいのだろうか。菊乃がいるこの場所は、建物のどの辺りになるのだろうか。鉄格子つきの鉄のドアから連想するのは牢屋である。人を閉じ込める為の部屋。容易には抜け出せない位置にあるのかもしれない。

見取り図が欲しい。

せめて目が見えれば。

……………ちゃんと、見えるようになるのだろうか。

考えたくない事ばかりが思い浮かぶ。目の事は、特に不安だった。一時的なものだと言われているが、そもそも何故見えなくなったのかも分からない。殺されかけたシヨックだろうか。

保護施設で起こったことを、菊乃は殆ど覚えていない。ドアが開くまでの会話は、ちゃんと思い出せるのに、その後があやふやだ。

それも、シヨックのせいだろうか。

菊乃は膝を抱えて、膝頭に額をくっつけた。

……………分からないことばかりだ。

そうして結局ここを逃げ出す有効な手立ては見つからないまま、時間だけが過ぎていった。

翌日の夕方。

待ちかねていた入浴の時間になった。いつもと同じように、女性が菊乃を迎えに来る。

「清めの時間です。さあ」

と言つて、目の見えない菊乃の手を引き連れて行く。彼女たちの言う「清めの時間」というのが何の事か、最初は分からなかった。何だか独特な言い回しだ。

「足元にお気をつけ下さい、少し段差がございます」

言われたとおり、小さな段差がつま先に当たった。それを踏み越えて歩く。

じれつたいほどゆっくりとした歩調で、丁寧に誘導する。菊乃は自由な方な手で壁を触り、更に風呂場までの歩数を数えてみた。およそ七八歩。いつも遠いと思っていたが、やはり結構な距離がある。ずっと壁を辿っていた指は、その間3度ドアのようなものに触れた。

脱衣所に入ると、女性がタオルと石鹸を菊乃に手渡した。そして、新しい服の入った籠の場所の前まで誘導される。

「では、ごゆっくり、身をお清めください」

そう言つて、女性の気配が遠ざかる。外へと足音が遠ざかり、ドアが閉まる音が響いた。出て行つた、のだろうか。本当に？確信が持てないから、妙な行動は取れない。

菊乃は着ていた服を脱ぎ、タオルを体に巻きつけた。そして、石鹸を持って風呂場に向う。

脱衣所は狭く、長細いつくりになっていた。棚があるのと逆側の壁に手摺がついているため、目が見えなくても然程苦勞せず風呂場へ行ける。いつものように風呂場に入った菊乃は、そこで手にしていた石鹸を床へと滑らせた。鈍い音を立てて床に落ちた石鹸がどこにあるのか、もう菊乃にも分からない。

これで、万が一誰かに見られたとしても言い訳はつく。

石鹸を探すふりをして、菊乃は風呂の様子を確かめ始めた。

床は木の板だ。

板と板の間に指先よりも細かい隙間が空いていて、そこへ水が落ちていくようになっていく。壁はタイルだろうか。つるつると滑る冷たい感触が指に触れた。時々、妙なひっかかりが指先に触れる。何か模様が彫つてあるのかもしれない。

そんな模様に用は無かった。必要なのは、ここから抜け出す為の何か。

壁に手を這わせて、端から端まで慎重に窓を探す。少しの見落としも無いように。

しかし、菊乃はついに目当てのものを見つける事ができなかった。風呂場に窓はない。

菊乃はため息をついた。

落胆しながら、途中で見つけて壁に寄せておいた石鹸を拾う。がっかりしている時間は無かった。もう大分時間が経っている。素早く体と髪を洗ってから、ふと手を止めた。

水……。

できるだろうか。不安を感じながら、胸の辺りに意識を持っていく。ざわざわとする何か、それをユークイは揺らぎと呼んだ。以前よりもはつきりと、その揺らぎを感じられる。

暖かいのに、冷たい、不思議な……、

「どうかされましたか」

「！」

外から声を掛けられて、菊乃ははっと息を飲んだ。どうやら、時間切れのようだ。菊乃は慌てて返事をした。

「すみません、石鹸を落としてしまいました。もう大丈夫です。行

きます」

残念だが仕方無い。

菊乃は石鹼とタオルを手に、風呂場を後にした。帰りの際は、行きと反対側の壁を辿った。窓らしきものも、ドアらしきものも確認する事はできなかった。

中々思うようにはいかない。

部屋に戻った菊乃は、再び溜息をついた。風呂場から逃げる事は無理そうだ。だとしたらやはり途中で女性を振り切って逃げるか、部屋に食事が運ばれる時に隙をついて逃げるしかない。

しかし、それを目の見えない状態で行うことは、至難の業だ。

七海に手渡された短刀のことが、頭の隅を過ぎる。無理だと思っものの、菊乃に残された道は少ない。

もし、実行するなら、女性が来た時にするべきだ。

相手は、菊乃が逃げ出すとは思っていない筈だ。今まで大人しくしてきたし、目が見えない状態に油断している事だろう。

だから。

菊乃は自分を励ますように、心の中で繰り返した。

大丈夫。絶対無理な事じゃない。

諦めたら駄目だ。理不尽な状態に屈したりしたら。

諦めず、抗え。そう耳の奥で声がしていた。菊乃を叱ったハイネスの声だ。その声を思い出すと、不思議と力が湧いてくるような気がした。

## 菊乃の脱出 4

結局、逃げ出す為の有効な手立てが考え付かないまま、3日目を迎えた。

それでも昨日は、出来ることは全て行った。まずは、食事を運んでくる人間の行動を探ること。音で判断するしかないため、非常に神経を使った。

運ばれる食事はトレイの上に載っている。足音以外に音は無い（例えば台車を押すような音など）から、彼らはそれを両手で持つて来るのだらう。部屋に入ってそれをテーブルに置くまでの時間は、少なくとも両手がふさがっている状態になっている筈。入ってすぐはダメだ。

ドアから離れてテーブルに料理を置く時。その時ならドアの前に行きやすいし、彼らの意識も菊乃から逸れているだらう。

チャンスは一瞬。

彼らが部屋にいる時に、ドアに鍵は掛けられない。それも昨日確認した。隙について、ドアから逃げる事ができるかもしれない。

菊乃は、ベッドからドアへ何度も往復して、その感覚を覚えようとした。いざ逃げ出す時に、見当違いの場所へ行ってしまうまいように。繰り返す内、うまくドアまで進めるようになった。落ち着いて、この感覚を忘れなければドアまではたどり着けるはず。

きっと、大丈夫。

そう言い聞かせて、不安に押しつぶされそうな気持ちを奮い立たせる。そうしなければ、動けなくなりそうだった。

今日のお祭りは、午前10時から始まって、午後6時頃まで行われるらしい。抜け出すのは昼食の時の良いだらう。

一つ気がかりなことがあった。

昨日食事を運んできた女性に、翌日の祭りのことを聞いたのだ。何かお祭りがあるらしいですね、と。すると彼女はやや興奮した様子で答えた。

「ええ、偽りでなく本物の祭事が行われるのです」

本物の祭事。

その意味するところが分からない。ただ機嫌を損ねないように彼女にあわせ、凄いですねと言ってみた。それが良かったのだと思う。彼女はすっかり気をよくして、色々詳しく教えてくれた。いつから始まるのか。集まるだろっつ人の数。その日にお披露目される新しい大聖堂の素晴らしさ。

熱っぽく語られる言葉を聞き取るだけで、精一杯だった。

「明日は約束された始まりの日。奇跡が起こる日なのです。やがて皆の目も覚めるでしょう」

約束とは、奇跡とは何のことなのか。

分からないが恐ろしかった。何か良くないことが起こるような、不吉な予感がする。ただの考えすぎならば良いが。

祭りの日という事もあってか、今日は随分騒がしい。上の階を通り過ぎる足音がひっきりなしに響き、人々の話し声がざわざわと響いてきていた。いつもが静かなだけに、何だか落ち着かない気持ちになる。

既に結構人が集まってきているようだ。

まだ、来ない。

菊乃はドアがある方向へ耳を傾けた。いつもなら、とつくに朝食が運ばれている頃だと思う。勿論時間を知ることはいかないから、ただ感覚でそう思うだけだが。

でも多分、いつもより遅れている。

待つうちにだんだんと不安になってきた。今日は祭りだ。忙しく

て夜まで来てくれなかったらどうしよう。空腹は問題ないが、逃げる切欠を逃してしまうのは困る。

もしかして、逃げようとしているのがばれたのだろうか。

こんな時は、嫌な考えばかりが浮かぶ。

じつと待つ菊乃の耳に、待ちかねていた足音が聞こえてきた。一瞬迷う。昼に逃げようと決めていたが、いつもより朝食の時間が遅れている事実が決意を鈍らせていた。遅れるだけならば良い。もしも、来なかったら。

菊乃は枕の下に隠した短剣に手を伸ばした。

ドアが開く。

「おはようございます。少しお待ちせしてしまい、申し訳ありません。すぐに朝食の用意をいたします」

息を殺して様子を伺う菊乃の耳に、絶望的な音が響いた。

がちり、という金属音。

それは鍵が閉まる音だった。

「今日は特別な日。色々と騒がしくなります。お一人で過ごすのは不安でしょう。今日は私が一日、お傍につきさせて頂く事になりました」

「……一日？」

「はい」

シヨックを受ける菊乃に気がついていないのか、女性は柔らかい声で告げる。

「さあ、まずは朝食にいたしましょう」

それとも、菊乃の行動などづくに見抜かれているのだろうか。よりもよって、今日一日。これでは見張りをつけられている様なものだ。

どうすることも出来ず、菊乃はそっと枕の下から手を抜いた。

朝食は殆ど食べられなかった。

心配して具合が悪いのかと聞く女性の言葉も、殆ど耳に入らない。今日この日を逃せば、後が無いような気がしていた。

まだチャンスはある、そう思いたいが。

暫くして、上の階から歌が聞こえている事に気がついた。初めて聞く音楽だ。不思議な曲調だが、心地よく響く。歌詞もまともに聞き取れないが、優しく暖かいと感ぜられる歌だった。

「始まったようですね」

呟いて、女性は菊乃の隣に腰を下ろした。膝の上においていた手を、そっと握られる。驚いたが、跳ね除けることはしなかった。

「ようやく、道が正されるのです」

「……何があるのですか」

聞かずにはいられなかった。彼女達の言葉の端々に、不吉なものが潜んでいる。それが、菊乃は恐ろしい。

答えは無かった。

ただ黙って、宥めるように手を撫でられる。優しく慈愛に満ちた柔らかな気配。それが何故こつも恐ろしく感ぜられるのか。

いつの間にか歌が止んでいた。

沈黙、いや、誰かが何かを話している。

菊乃はひたすら耳をすませた。それしか状況を知る方法が無い。

まだ話は続いているようだ。随分と長い。

その内にざわざわと、再び人々が話し出す。困惑が伝わってくるようだった。

次に聞こえてきた声は、最初何かの楽器の音のようだった。低音から徐々に高音にせり上がっていく「あー」という奇妙な声。女性なのか男性なのかも分からない。とにかく不気味な声だった。



続いて、何か重たいものが倒れるような大きな音が4度響く。  
やがて聞こえてきた悲鳴に、菊乃は立ち上がった。

「大丈夫です、落ち着いてください」

ひっきりなしに悲鳴や怒声、泣き叫ぶ声が聞こえてくるこの状況で、何故そんな穏やかな声が出せるのか。菊乃の手をそつと握る暖かさが恐ろしくなった。

「恐れる必要は無いのですよ」

「な、何が……」

「選定が始まったのだけのこと」

それ以上耐えることはできなかった。

菊乃は握られた手を振り払うと、枕の下へ手を突っ込んだ。指先に固い金属の感触が触ると、迷わずそれを掴んだ。柄を掴み、もう片方の手で鞘をベッドに押し付けて剣を抜く。

「何を」

困惑する声から逃げるように立ち上がって、ドアに向かった。ぶつかるとしてドアの取っ手を探り当て手をかけるが、やはり開くことは無い。

菊乃は振り返って剣を胸の前で構えた。

「何故そんなものを」

震える手を前に突き出す。

「ここを開けて」

怖くて怖くてたまらなかった。尋常ではない悲鳴が聞こえてくるたびに、足が震える。

「お願い」

「お止めください。そんな危険なものを振り回して、怪我をしたらどうするのですか」

その言葉にはっとした。

殆ど反射的に、菊乃は剣の向きを変えた。相手側にではなく、自分の方へ刃先を向ける。目の見えない状態では、かなり危険な行為だったが躊躇いは無かった。

はつと、息を呑む音が聞こえる。

「お止めください」

その声には、先程までとは違って緊張と焦りの色が混じっていた。

異世界人を神の遣いとして、

七海の言った通りだとしたら、彼女達にとって菊乃の存在は特別なものである筈だ。

「動かないで」

近づこうとしていた気配が、はつと動きを止める。光の中で黒く見える人影に向かって、菊乃は静かに告げた。

「ここから出して、駄目なら、死にます」

本気だった。

怖くはない、このままここにいる事に比べたら。何が起こっているのか分からない。ただひたすらに聞こえてくる大勢の人の悲鳴が、尋常ではない事態を伝えている。

「すぐに、出して」

剣の先を自分の胸に押し当てる。う、と息を呑む声が聞こえた。

「分かりました。ですから、お止めください」

言葉だけなら何とでも言える。鍵は彼女が持っていた。ドアを開けてもらうには、来てもらわなければならぬ。その時に隙をつかれては堪らない。

「私に近づかないで。ちょっとでも変なことしたら、死にます」

本気だというのは、分かってもらえたようだ。女性は大人しく鍵を開けてくれた。ドアから離れるよう促し、部屋の隅まで追いやってからドアに近づく。

「お待ちください。その状態で外へ出ることは危険です」

その言葉を無視して外に出る。

「ここにいて。追ってくるなら、死にます」

正直その脅しがどこまで通用するのか分からない。だが何も言わないよりはマシだ。

右手に短剣、左手を壁にそえて菊乃は走り出した。とにかく外へ出なければならぬ。そして誰かに助けを求めなければ。

左手が2つ目のドアを触った直後だった。菊乃は思い切り何かにぶつかって跳ね飛ばされた。衝撃で剣を取り落としてしまう。

(なに……?)

固く頑丈なものだ。起き上がり、恐る恐る手を伸ばす。何か廊下を塞いでいる。金属製の壁のようなものがそこにあった。

「なんで……」

思わず言葉に出していた。

今まで何度もここを通った筈だ。その時にこんなものは無かった。方向を間違えたのだろうか。いや、そんな筈はない。

どういう理由にしろ、この先には進めないようだ。それならば、と菊乃は先程手で触れたドアを開けてみることにした。部屋の中にならば、窓があるかもしれない。落とした剣を慎重に拾い上げ、菊乃はドアの取っ手を探した。

開かないかもしれない。

そんな不安も過ぎたが、幸いすんなりドアは開いた。

ひんやりとした空気が首筋を撫でる。同時に一層鮮明に悲鳴が響き、菊乃はその場に立ち尽くした。うめき声、泣き声、怒鳴りあう声が交じり合って落ちてくる。

一体何が起こっているのだろう。

足が竦む。

それでも逃げ出す道は、ここにしかない。菊乃は泣きそうな気持ちを堪えて、手探りでその部屋を探った。踏み出した足が段差に躓く。手をつくると、更に違う段差がそこにあった。

ここは部屋ではない。

階段だ。

上へ行くのは怖かった。しかし、ここからならば出られるかもしれない。菊乃は手で段差を確かめながら、這うようにして階段を上った。

上に近づくにつれ、混乱の音が大きく響く。逃げると誰かが叫んでいる。助けてと誰かが泣き叫んでいる。痛みに呻くような声、それから何か、獣のような叫び声。沢山の声や音が入り混じって耳が痛い程だ。

それに、この熱気は何なのだろう。部屋にいた時は肌寒いくらい

だったのに、ここは暑い。

見る事が出来なくても、何か恐ろしい事が起こっている事は分かった。

鼻が煙の匂いを嗅いだ。

思い切り吸い込んでしまつて、咽返る。

(火事：？)

浮かんだ答えに血の気が下がる。早く逃げなければならぬ。だが、どちらへ逃げれば良いのかすら分からないのだ。どうしよう、引き返したほうが良いのだろうか。

がくがくと手足が震えた。

怖い怖い、怖い。

どうしてこんな目に遭わなくちゃいけないの。

限界だった。

階段の途中で座り込み、菊乃は両手で耳を押さえた。手放してしまつた剣が滑り落ちていく音が響いたが、気にする余裕もなかつた。息ができない。苦しくて、恐ろしくて。

(助けて)

胸の奥が熱い。血液がそこで暴れまわっているかのようだった。体の中を焼ききられるような感覚にひたすら耐える。

過呼吸気味になつていているせい、頭や手足が痺れ、意識が朦朧としてきた。そんな菊乃の痺れた手の甲に、ぽつりと冷たいものが落ちる。

その心地の良い冷たさが、少しだけ菊乃の意識を引き戻した。続いて熱い頬や足に、冷たい水が当たる。いくつもいくつも。雨が降っている、菊乃はぼんやりと顔を上げた。

気のせいではない。雨だ。いつの間にか、外に出られていたのか。潰えかけていた希望が、再び湧き上がる。

進もう。

再び前へと手を伸ばしたその時、突然、床が揺れた。投げ出されそうになりながら、必死で階段にしがみ付く。断続的に地響きのよな音が聞こえ、その度にかくかくと揺れが走った。少しずつ、階段が横へ傾いていつているのが分かる。このままでは、落ちてしまう。それは分かっているがどうしようもなかった。

揺れの酷いこの状態では、動く事もままならない。

「キクノ！」

え？

その時一際大きな揺れが菊乃を襲った。ぐらりと階段が傾いて、耐え切れず転がり落ちる。一度何かにつかつかってから、菊乃は宙に投げ出された。落ちる。

落下し始めてすぐ、腕が何かに引つかかって止まった。勢いで、腕が抜けるんじゃないかと思うほどの衝撃があった。何かに引つかかったのではなく、誰かに腕を掴まれたのだと分かったのは、そのまま引つ張り上げられた時だ。

あつという間に硬い胸の中に抱き込まれ、背中を手で支えられる。「大丈夫か」

低く抑揚の無い声に、聞き覚えがあった。

咄嗟に顔を上げるが、そうしたところで姿を確かめる事はできない。

「……ハイネス、さん？」

「掴まっている。下へ降りる」

返事の代わりに告げられ、菊乃は慌てて服を手で掴んだ。その手を無言で外されて、背中へと誘導される。抱き合うような形に動揺

する暇はなかった。次の瞬間、男は菊乃を抱えたままその場から飛んだ。

下りる、というよりは、落ちると言った方が正しい。

驚いたが思ったほど高さは無かったのか、軽い着地音を立てて男は無事地面に降り立った。抱えられていた菊乃も、殆ど衝撃を感じなかったほどだ。結構長く落ちていたように思うが。

現実感が無い。

ゆっくりと離れていく体温が不安で、菊乃は思わず手を伸ばしていた。掴んだのは、彼の腕だ。そこに誰かがいる、それだけで酷く安堵する。

「……あの、ありがとうございます」

返事はやはりなかった。

代わりに、顔の前にゆっくりと影が落ちる。ゆらゆらと揺れる影が何なのか、菊乃には分からなかった。

「目が見えないのか」

「はい」

「……何故」

「分かりません。でも、今だけで。その内に治るみたいです」

沈黙に、不安が湧き上がる。

まだ終わったわけではなかった。何が起きているのか分からないが、混乱はまだ続いている。辺りは未だ騒然としており、逃げる人々の足音や叫び声が木霊していた。

この状況では、目の見えない菊乃は、確実に足手まといだ。

「……………」

離そうとした腕を、逆に掴まれる。

「……来い」

その言葉に泣き出しそうになった。ぐっと堪えて歩き出す。1人じゃない。その事が嬉しかった。

「……ありがとうございます」

「礼は必要ない。俺は……………」

言葉の続きを待ったが、聞く事はできなかった。  
ふとその足が止まる。

前方から何か柔らかいものを踏み潰すような音が聞こえた。ぐしやり、ぐしやり、と響くととも嫌な音だ。フーツという荒い呼吸音も聞こえる。生臭い匂いが鼻についた。

「逃げろ」

短く告げられて、腕が離される。戸惑う菊乃を急かすように、強く肩を押された。

「逃げ！ 這ってでもここから離れる！」

声が遠ざかる。

「ハインズさん！」

返事は無かった。

代わりに獣の唸り声と、金属音のようなものが離れた場所で響いた。彼が何かと戦っている。逃げろと言われた、その通りにするべきだと頭では分かっていた。それなのに、足が縫いとめられてしまったかのように、動かない。

怖かった。

ハインズがこのまま戻ってこないような予感がして。

この世界へ来て、何度も自分の無力さに打ちのめされてきた。何度も何度も嫌になるほど。

そして、今のこの瞬間も。

(私には何もできない)

ここにいれば戦っているだろうハインズの邪魔になる。だから、この場から逃げるべきだ。悔しくても、胸が痛んでも、恐ろしくても。

逃げるべきだ。



それが菊乃にできる唯一のこと。

(本当に?)

雨が降っていた。

落ちてきた雨粒が何度も何度も顔に当たる。ここはよほど水はけが悪いところらしく、足首まですっかり水に浸かっていた。

水、だ。

不思議と呼吸が落ち着いてくる。

どうすれば良いのか既に分かっていた。何故、という疑問は意識されることなく消えていく。知っている、分かっている、望んでいる。

だったら、後は実行するだけ。

菊乃はゆっくりと目を閉じた。

## 伊吹、この世の地獄を見る 1

灰谷志真。

それが伊吹にとつての疫病神の名前である。彼女がいなければ、もう少しスムーズにかつ安全に、暮らせていたのではないかと思う。

遡る事2日前。

事の起こりはやはり志真の言葉だった。

「ねー、いっさん。この世界のお祭りとかって興味無い？」

無い、と即答したにも関わらず、志真は話を続けた。こつこつ強引かつマイペースなところも鬱陶しく思う。

「何だっけ、この国で一番信者の多い宗教のお祭りが、明後日にあるんだって。あちこちの教会でタダでお菓子とか配られたりして、楽しいらしいよ。屋台も出るし、舞台みたいなのもあるんだって」

「興味ない」

「そんな事言わないで、気分転換に行こうよ」

「……なんでわざわざ俺を誘うんだ。別にお前だけで勝手に行けば良いだろ」

志真はうつと言葉に詰まった。

「いやー、でも何って言うかやっぱり一人じゃ不安だし。ここ異世界だし、私も一応女の子なわけで」

はつと、伊吹は鼻で笑った。

「安心しろ。お前じゃ心配するような事は何一つ起こらない」

「何それ！……大体、私だって別にそつちを心配してるわけじゃないし」

「は？」

「もう良い！いっさんなんか知らない！」

いつも通り、志真は勝手に腹を立て部屋を出て行った。その時から何か嫌な予感がしていたのだ。志真がまた何かろくでもない問題

を起こすんじゃないかと。

まあ、実際それは志真のせいで起こったわけではなかったが。

志真の言う「この国で一番信者が多い宗教」それはイスルド教だ。創世神話に出て来る最後に生まれた神であり、地上に残った唯一の神だ。今も人の世界を見守り律しているとか何とか。世界のあらゆるところに宿る精霊（本当にいるのかは怪しいが、この国の人間は信じているらしい）が、神の目となり手足となり働いているそうだ。

そのイスルドという神の生誕祭が、志真の言う明後日のお祭りである。

イスルド教の一大イベントだ。

祭日で学校も休校。

当然かなりの人出が予想される。そんな人ごみの多い中出掛けていく奴の気が知れない。大体、宿屋やモクとかいう男の事はもう良いのかと問い詰めたい。遊びに行く暇があったら、ちよっとは真面目に努力するべきだろう。……まあ、無駄だろうが。

とにかく伊吹は祭りに行く気など更々無かった。  
のだが。

「バイト？」

思わず聞き返してしまった。はい、と頷きながら、フィオーネは恥じいるように頬を赤くした。

「その日だけなんですけど、結構……かなり給金が良くて。今、宿屋の方も暇ですし」

「……………」

「気まずい。」

デザートサービス、割引券など。フィオーネ達が頭を悩ませ、何

とか客を呼び込もうと努力している事は知っていた。ついでに、全く効果が出ていないことも。

部外者の伊吹は、この宿屋の経営状態までは詳しく知らないが、外で働く事を始めるということから、かなり芳しくないと思いがつく。

「あ、いえ、あのですね。まだそこまで大変ってわけじゃなくて。ただ、いつまでこの状態が続くか分からないので、余裕がある内に少しでもできる事はしておこうって」

真実かどうかは分からないが、深く突っ込む気は無い。

問題は、何故フィオーネがバイトをする事をわざわざ伊吹に言うのか、という事だ。伊吹は別に彼女の親でも兄でも、恋人でも無い。「それで」

「あ、はい、それですね、良かったら伊吹さんも一緒にバイトやりませんか？」

何でだ。

疑問が顔に出ていたのだろう、フィオーネは苦笑した。

「伊吹さんがお金を溜めてるって話、兄さんから聞きました。割の良い仕事を探してるようだって」

その話はリザレットにしかしていない。(あの女)しらっとした顔して口が軽い。

「家、やっぱり出て行くんですね」  
ぎくりとした。

固まった伊吹を見て、フィオーネは笑う。

「良いんです。伊吹さんにいて欲しいっていうのは、私達の我儘だから。伊吹さんが出て行きたいなら、仕方無いです。ただ、それならそれで何か力になれることがあったら、したいと思って」

それで、条件の良いバイトの誘いなのか。

非常に断りにくいお誘いだった。

生憎その日は祭日で、保護施設の仕事も休みとなっている。1日

限定、交通費支給、給金も良い、資格は必要ない、となれば。特に断る理由も無かった。

確かに伊吹は金を必要としていた。フィオーネが言うように、ここを出て行くために必要な金である。貯金はあるが、できるだけ手をつけなくておきたい。この先何が起こるか分からないのだから。

祭日当日、空は雲ひとつ無い快晴だった。

朝からあちこちで音楽が鳴り響いていた。伊吹はフィオーネと共に早朝に家を出て、バイト先である教会に向った。

宿屋からも保護施設からも離れた区域にある教会だ。シャーリン区と呼ばれる場所にある教会だから、シャーリン教会。単純だ。規模としては割とでかい。居住区から少し離れた農業地帯にあるおかげで、かなりの広さの敷地が確保できたのだろう。

建物も立派だった。

空に向って聳え立つ2つの塔が並んで立っている。その2つを繋ぐ形で三角を3つ並べたみたいな屋根の建物があった。真ん中の三角が両側より1.5倍ほど大きい。そこは通常の参拝客が訪れる礼拝堂のようなところだ。

今回の祭事は、その更に奥にある聖殿と呼ばれる場所で行われる。最近建て直しが行われて、そのお披露目も兼ねているのだとか。

神様の鎮座する場所とされているせいか、聖殿がある場所は高くなっている。10段ほど階段を上った場所だ。これまた広い敷地がある。真ん中に生えている奇妙な建物。それが聖殿である。

生えている、というか埋まっているといった方がいいかもしれない。

見た目は大きな竜巻に襲われた卵、だろうか。斜め上に巻き上げるような形の塔の下に、罫割れのように模様が入った卵形の建物が鎮座している。上3分の1は真珠のようにきらきら輝く素材でできていて、下側は赤褐色で途中から卵を受け止める台のような形になっていた。

簡単に言えば長方形に楕円が乗っかっているような形だ。その長方形の両端からやけに長い土台のようなものが伸びていた。何と云うか。

「斬新な」

伊吹の言葉に、フィオーネは笑って肩を竦めた。

「有名なデザイナーに依頼したっていう噂があるらしいですよ」

それで良いのか、シャーリン教会。

「それでこんな妙な建物に」

「確かに変わった形ですね。でも、ちょっと面白いかな。イブキさんは、イスルドの創世神話読んだ事ありますか？」

「簡単な解説だけは」

「じゃあ、知らないですね。イスルドは2度生まれる、そういう逸話があるんです。1度目は他の神と同じように、混迷の地で意識を持つ。2度目は地上で、自らの意思で生まれなおした。その時、イスルドは卵から生まれただそうです」

部分的に、知らない言葉が出てきたが、意味は通じる。しかし、卵から孵った神というのは斬新だ。鶏か。建物の形の意味は理解できたが、イスルドの気持ちは理解できない。

伊吹達と同じようにバイトとして雇われた人間は、80名近くいた。建物のことといい、この教会はかなり金を持っているらしい。

着るようにと手渡された服は黒のフードつきローブだった。体型に自信が無い人間にも優しいゆったり仕様で、腰の辺りを紐で縛って長さを調節するようになっていた。袖口が大きく着物の袖のように垂れ下がっていて、非常に邪魔だ。

見た目としては、教会の人間っていうよりは、黒魔術系。

こんなんで良いのだろうか。

(俺としては助かるが)

腹の辺りでもぞもぞ動く小動物に、伊吹は小さく息を吐いた。流石に、動物は持ち込み禁止だろう。

## 伊吹、この世の地獄を見る 2

黒魔術を使いそうな妖しげな集団と化した伊吹達は、それぞれ仕事を割りふられた。仕事の内容の中には、チャルカと呼ばれるパイプオルガンのような楽器を演奏するというもの、更に聖歌隊として歌うもの30名、なんてものもあった。

こちらは元々そういう条件で募集が掛けてあり、誰がやるのか既に決まっていたようだ。

しかし問題はそこじゃない。

普通、そういうのは教会の人間がやるものなんじゃないだろうか。大体さつきから教会の人間らしき人を殆ど見かけていない。説明も案内もたった2人の人間がこなしているとか、どんだけ人が足りてないんだ。まさか、他に金を掛けすぎて、駐在の人間を雇う金がないうというオチか。

伊吹は白い目で新しい建物を眺めた。

「イブキさん、行きましょう」

竹箒を片手にフィオーネが呼ぶ。同じような黒ローブ姿であるのに、スタイルの良いフィオーネが着るとそれなりに様になってしまふのが不思議だ。

最初に与えられた仕事は建物周りの掃除だった。

白光するタイルの上に散らばる落ち葉や枝を竹箒でかき集める。掃除が大変なら、そのあたりの木を全部切っしまえよ、とこういう掃除をする度に思う。勿論、金を貰う以上はきっちり行うが。

「こら、大人しくしてろ」

腹から肩へと移動してきたこてつが、邪魔をしてくる。肩に軽く噛み付いてきたり、髪を引っ張ったり。普段は割合大人しくしているのに、今日は落ち着かない様子だ。



初めて来る場所だからだろうか。

「こてつ、気が立っているみたいですね」

「……無理にでも置いてくるんだった」

今更後悔したって遅い。

「終わりましたか？」

突然声を掛けられて、伊吹はぎくつと肩を震わせた。慌ててこてつをロープの中へと押し込んで、振り返る。先程仕事を指示した教会の人間の1人が、丸い顔に曖昧な笑顔を浮かべてこちらを見ていた。

青白い顔をした30代後半くらいと予想される男性だ。目が充血していて、隈が見える。大分疲れているようだ。やはり、人手不足で忙しいのだろう。

「あ、はい、後もう少しで」

周辺をざつと見渡し、男はゆつたりと頷いた。

「ああ、綺麗になりましたね。後は貴方に任せてもよろしいですか」と、これはフィオーネに向けて。はい、とフィオーネがきはきとした返事をする、男は再び伊吹へ目を向けた。

「では、来てください。貴方に1つ頼みたい仕事があるのです」

「はい」

もそもぞ動くこてつに肝を冷やしながら、伊吹は男の言葉に頷いた。

宗教というのは、伊吹には良く分からない。

家は一応仏教の浄土宗だったが、その内容すら詳しく知らないような程度である。仏壇があつて、偶に坊さんが拜みにきていたなど、思い出すのはそれくらい。後は葬式なんかの時くらいだろうか。

だから。

「貴方は神を信じていますか」

そうお決まりの台詞を聞いてきた男に対して、すぐさま返事が出来なかった。宗教で戦争になった国もある。日本ではともかく、海

外で無神論者を名乗ると顰蹙を買うこともあるのかなんとか。

ましてやここは異世界。

その上、教会。

何と答えるべきか、

「信じています」

暫しの沈黙を取り繕うべく、精一杯の愛想笑いを浮かべてそう答えた。それ以外に何と言えただろうか。例え内心で、もしも神なんてものが本当にいたところで、こんなわけの分からん世界に迷い込ませた奴なんて信じられるか！と思っていたとしても。

ああ、と男は感銘を受けたように、一瞬虚脱した表情を浮かべた。「ありがとうございます」

目を輝かせて礼を言われて、伊吹は思わず身を引いた。一体何だ。何だか分からないが、薄ら寒いものを感じる。

「やはり、……いえ、失礼致しました。どうぞこちらへ」

伊吹の困惑に気がついたのか、男は取り繕うように表情を消し、話を切り替えた。しかし、1度抱いてしまった気持ちの悪さは、簡単に消す事などできなかった。

次に言いつけられた仕事は、聖殿の周りに香油を撒くことだった。何でも魔よけの効果があるらしい。桶になみなみ入ったそれを、ざぶざぶと建物の土台辺りに撒いていく。

花の香りがかなりきついし、流れ出た香油で足元が滑るしで、中々大変な作業だった。

その作業を終えると、次は聖殿の中に案内された。

他の20名と共に、訪れる客に蠟燭を手渡し席へと誘導する事。それが次に与えられた仕事だ。20名の中にはフィオーネもいて、伊吹を見るとほっとしたような顔になった。

「イブキさん、良かった、一緒に」

口にしてから、照れたように苦笑する。

「って、子どもみたいですけど」

何と返していいか分からない。妙に頼りにされているような気がする。多分、他に知っている人がいないからだろう。

消去法だ。

聖殿の中は明るかった。

天井から上部の壁にかけての真珠色の素材は半透明で、外の光を良く通していた。中央が丸くくりぬかれたように三段ほど上がっている。そこを中心に、更に大きな楕円があつて、周辺を囲む形で木の椅子が等間隔に備え付けられている。一列毎、外側にいくにつれて一段づつ上がっていく形だ。

目玉焼きを舞台とした劇場、それが伊吹の第一印象だった。

中央部分の円の上、高い場所に壁からせり出す形で四角いテラスのようなものがあつた。通路の奥にドアがある。更にテラスへと伸びる二つの階段が中央の楕円の両端から伸びていた。その二つの階段は地下へと続いているようで、暗い穴の奥へと消えている。

入り口は3つあつた。

その内の2つは正面側にあつて、今日解放されるのはこちらの2つ。その内の東側のドアの前で、伊吹とフィオーネは待機していた。手にした籠には、陶器製の容器に入った掌サイズの平たい蠟燭が入っている。ぽつぽつと訪れ始めた参拝客に渡す為だ。

「神の手より祝福を」

と、声を掛けながら手渡すと、「人の手より祈りと感謝を」と言葉を返される。中々肅々としたムードが漂っているが、本当にこれで良いのだろうか。

伊吹はただのバイトだ。

それもイスルド教の信者どころか、異世界人。

……まあ、そこまで気にしてやる義理も無いが。

「ここ……」

開かれたドアの内側に彫られた見事な彫刻を観察していた伊吹は、フィオーネの掠れた声に顔を上げた。意思の強さを感じさせるようなはつきりとした眉を顰め、フィオーネは困惑の表情を浮かべている。

「何かちよつと変な気がします」

声を落としてフィオーネが言う。

「何が」

「だって、ここ……」

言いかけたところで邪魔が入った。

「あー！」

空気を読まない明るく無神経な大声は、哀しいかな聞き慣れたものだった。視線を向ければ、こちらへ向って人差し指を差す短い髪の少女の姿があった。

日に焼けた肌にどんぐり眼。いかにも快活そうなボーイッシュな少女は、残念ながら間違いなく灰谷志真だった。

「フィオーネ！に、いっさん！」

厳粛な雰囲気が出た。

周囲の人々が、何かと振り返っている。

「何でここにいるのー!？」

「ここで騒ぐな！」

ナイスウィガー、もっとやれ。

志真の頭を容赦なくはたいたウィガーに、伊吹は内心で声援を送った。どうやら志真は、ウィガーを連れ出す事に成功したようだ。それは良いとして、もう1人連れがいる。ふらふらといかにも危なっかしい足取りで歩いている小柄な少女。うねうねと髪を靡かせる目に優しい緑色の少女はクラスメイトのアルジャーだ。

外を歩いているところなど、初めて見た。

「だって、フィオーネといっさんが」

「2人はここでバイトしているだけだ。いちいち騒ぐな。ここをど

「こだ思っているんだ」

「バイトとか初めて聞いたんだけど」

志真は自分が知らされていなかった事を不満に思っているようで、口を尖らせている。

「いちいち面倒くさい奴だ。」

しかし、今はフィオーネも伊吹もバイト中。おまけにウィガーの「それ以上騒ぐなら引きずってでも帰る」との言葉が効いて、志真は大人しく聖殿の中へ入って行った。

「頑張れよ」

と声を掛けて、ウィガーもその後が続く。

ふらふらと歩いて来たアルジャラーは、ぴたりと伊吹の隣にはりついた。彼女の体温はいつも低く、ひんやりとしている。

「アルジャラー？」

彼女の行動はいつも訳が分からないが。

「……油の匂いをするのですー」

「油？」

「私も、皆も、火は苦手なのですー」

溜息交じりの、どこか哀しげな声だった。

### 伊吹、この世の地獄を見る 3

透き通った緑の目が閉じられそうになるのを見て、伊吹は少女の細い肩を揺さぶった。

「待て、アルジャラー。ここで寝るな」

「……ねむい、ですー」

全体重を持って凭れかかられても耐えられるほど少女は軽い。だが、その状態で仕事を続ける事は無理だ。

「灰谷と一緒に来たんだろ。そっちで寝た方が良い。椅子もあるし」

「はいたに？」

「……志真のことだ」

「イブキは？」

「ここで仕事してる」

そうですー、と力の無い声で言いながら、アルジャラーは何とか体を起こした。眠い目を擦りつつ、頭を傾ける。緑色の波打つ髪が、ふわふわと広がった。いつ見ても海中のワカメのようだ。

「お仕事頑張るですー」

「どうも」

「あと、注意すると良いですー」

「……ああ」

ふらふらと危なげな足取りで、アルジャラーは人ごみの中に紛れていった。大丈夫だろうか、あれ。一抹の不安が胸を過ぎる。無事に志真達と合流できるのだろうか。

広い聖殿の中は、参拝客で賑わっている。もう椅子の3分の2近く埋まっていた。結構な人出だ。今の時点で1000人は軽く超えている。最終的には2000人くらいになりそうな勢いだ。

(何か……)

やばいフラグが立っているような気がする。

あれだ。

ホラー映画やサスペンス映画でよくある事件フラグ、あるいは死亡フラグ。

まずはこてつの様子。

落ち着き無く暴れまわっていたかと思えば、今は伊吹の肩にしがみ付き息を殺してじっとしている。まるで、何かを警戒しているような様子だ。

次に先程の教会の人間の不審な態度。

伊吹が聖殿の周りに撒かされた香油も、変と言えば変だった。そういうものか、と思っていたが。

アルジャーラーが言った「油の匂い」でぴんとくる。

あれ、もしかして火をつけたら燃えるんじゃないだろうか。大体、香油を振りまくにしてもあれほどざぶざぶかける必要があったのか。しかし、分からない。新築したばかりの聖殿を態々燃やす必要性。

(ここまで金かけてそんな事する奴がいるか?)

時々変な奴はいる。終末思想を煽り金を集め、嘘だと糾弾される前に信者を殺害した、なんていう話も聞いた事がある。しかしそれはここには当てはまらない。今正に、恐らく信徒を増やす為にこの聖殿を新築したのだろう。

(なのにいきなり燃やしたりするか?)

やっぱり考えすぎだろうか。

参拝客に蠟燭を手渡しながら、伊吹は思い悩んでいた。既に大勢の人間が聖殿の中に入っている。その誰も、伊吹のような疑念を抱いていないようだ。

笑顔で役目を果たしているフィオーネに、そつと声をかける。

「さっきの話の続きを、話してくれませんかね」

「さっきの?」

「ここが変だつて、言っていましたよね」

他の人間に聞こえないように、伊吹はそつと声を下げた。ミステリー小説ならば、何か重要なことに気がついた人物は、誰かにそれを仄めかしつつも結局言えないまま殺される。しかし、ここでは邪魔は入らなかった。

「ああ、はい。聖殿なのに、イスルド様の像も絵も見当たらないから、不思議だなんて思ってたんですけど」

「……けど？」

「さつき分かりました。ここつて、卵の中なんですよ」

卵の中、その意味が一瞬分からず、彼女の頭を疑ってしまったが、すぐに思い出した。先程聞いた創世神話とやらを。

「ここはイスルド様の二度目の誕生、卵の中を模しているんです。

卵の中ということは生まれる前、だから中に神はいるけど、まだ形になっていない。きっと、そういう意味だと思う。姿はなくても神はここにいて、それを感じ取れるようにデザインされているのね」

生き生きと語るフィオーネの目が、心なしか輝いている。意外にも、神話好きなのか。それとも建築の方に興味があるのか。フィオーネは伊吹の視線に気がつくくと、ばつが悪そうな顔になった。

「あ、ごめんなさい。つい」

「好きなんです」

「えっと、まあ。好きなんです、謎を解くの」

そつちか。

しかし、フィオーネの意外な一面の発見は兎も角として、結局感じた嫌な予感のせいであったのだろうか。

(……考え過ぎ、か)

少々神経過敏になっている事は否定できない。異世界、敵対者と呼ばれる化物、そして未だ姿を現さない吹雪の事。厄介な事はいくらでもある。信じられるものは何も無い。



「神の手より祝福を」

そう、蠟燭を手渡ししながら信じてもない神の名を口にすることに、抵抗すら感じない。ただ、この教会の姿勢を疑うだけだ。

本当に神がいたとしても。

ここにはいまい。

伊吹は迷っていた。何か起きるような漠然とした不安。確信を得られず、かといって安心できるわけでもなく。もう一つ何か、決定的なものがあればと目を光らせる以外になかった。

何も信じる事ができない。

それは自分の事すら例外では無く。感じ取った予感を、違和感を最後の最後で疑った。

「ご苦労様です」

柔和な笑みを浮かべた老女が、伊吹達を労う。貴方も中で一緒に参加してくださいと、柔らかい言葉を掛けられる。

ぞわり、と何故か肌があわ立った。

一緒に働いていた者達が、連れ立って聖殿の中へと入っていく。

「イブキさん、行きましょう」

フィオーネが声を掛け、先に歩き出す。伊吹の足はその場から動こうとしなかった。動きたくない。中へ入りたくない、どうしても。只の勘だ。馬鹿げている、考え過ぎているだけなのだ。いつものように。

フィオーネの姿勢の良い細い背中が、遠ざかる。1つに結んだ茶色の髪を揺らして、ドアの中へ、

その時、肩の上にはいたこてつが爪をたてた。ちくりとした痛みに、緊張が緩む。

「フィオーネ！」

普段出さないような大声が出た。ドアをくぐろうとしていたフィオーネが、驚いた様子で振り返る。

「はい？」

「財布を落としたみたいだ。探すから、手伝ってほしい」

「え、はい、良いですけど」

戸惑いながらも了承し、フィオーネは身を翻した。

「もう始まりますよ」

ドアのところにいる老女の言葉に、伊吹は何とか笑顔を返した。

「すみません。大事なものも入っているので、すぐに見つけないんです。見つけたら、また来ます。途中から参加はできますか？」

「いいえ、残念ですが。祭事の最中は出入りすることはできません」

「それは残念です、本当に。フィオーネさん、つき合わせて悪いけど、行こう」

「え、ええ」

一刻も早くここを離れたい。老女は暫くこちらを物言いたげな顔で見えていたが、やがて中へ入りゆつくりとドアを閉じた。両開きの大きな扉が完全に閉じられるのを見て、漸く伊吹は肩の力を抜いた。背中に嫌な汗を掻いている。

「財布、本当に落としたんですか？」

階段を下りていた伊吹は、その言葉に足を止めた。やってしまった、そんな気分だった。ばつの悪い気持ちで、背後のフィオーネを振り返る。

「……色々、すみません」

フィオーネは苦笑している。怒ったり呆れたりはしていないようだ。

「良いですけど、ちょっと吃驚しました。どうしたんです？」

「一体何と言えば良いのだろう。」

嫌な予感がして？

それじゃ只の馬鹿である。じっと、青い目に見つめられて、伊吹

は渋面を作った。この目は苦手だ。やや視線を上にもずらし、言い訳を探す。

「……納得できない事が、いくつかあって」

「はい」

「そういうのが重なって、どうも、気になりだすと駄目なんです。考えすぎだとは、分かっている。何か悪い事が起こるような気がして」

伊吹は深く溜息を吐いた。

「つまり、何か嫌な予感がしたって事です」

フィオーネは笑わなかった。

「どころか、酷く真剣な顔になった。」

「話してください」

「は？」

「イブキさんが気になっていること。そう感じるには、きっと何か理由がある筈です。実は私もちょっと変だなんて思うことが、ついさっき」

「聖殿のイスルド像？」

「それじゃなく、あの人……」

話の途中で邪魔が入る。

それはホラー映画の鉄則だ。

伊吹とフィオーネは、同時にそれに気がついた。階段途中の二人に近づく、黒ローブの男達。それぞれ階段の下側から2人。背後の聖殿の方から3人。

「……勘、当たったかもしれませぬ」

フィオーネが言うが、正直に言って全く嬉しくは無い。

## 伊吹、この世の地獄を見る 4

黒ローブというのがやはり悪いのだと思う。

どう見たって悪魔とか信仰していそうに見える。余計な先入観を持ってしまっても仕方が無い。筈だ。そんな黒魔術系の男たちに囲まれたら、「消される」と思うだろう普通。

しかし彼らはこう言った。

「財布を落とされたそうですね。探すの手伝いますよ」

思わずぼかんとしてしまった。

今更財布なんて落としていないどころか、持って来てすらいらないとは言えない。

「見つかりませんね。後は、どの辺りに行きましたか」と親切に聞いてくる人達を無下にするわけにもいかず、伊吹とフィオーネは気まずい思いで、ありもしない財布を捜し続けるはめになっていた。何度かもう良いですと言ったのだが、聞き入れられない。無駄な親切心に心が痛い。

纏められた落ち葉を掻き分けながら、伊吹は溜息を吐いた。

もう帰りたい。

傍で同じような作業をしているフィオーネの苦笑を見るたび、埋まりたい気持ちになってくる。自己嫌悪で死にそうだ。しかし、伊吹はこういう思いには慣れていた。

いつだって、後悔ばかりしている。

限りなく続くかと思われた苦行の時間に終止符を打ったのは、遠くから響く笛の音らしきものだった。ひゅーと響く微かな音に、黒ローブ集団は顔を上げた。

「ああ、時間のようですね」

「そのようです。務めを果たさなければ」

何か仕事があるらしい。

「すみません、最後までお手伝いできず」

「いいえ、充分です。ありがとうございます」

助かった。そんな思いを胸に、伊吹は笑顔を取り繕い、去っていく3人を見送った。3人、だ。残りの2人は未だ伊吹とフィオーネの前に立っている。

疑問はすぐに解消された。

背の高い2人の男が、黒ローブの裾から大振りなナイフを取り出したからだ。果物を剥くにはどうみても不向きなぎざぎざの刃。肉を切るにはどうだろう……いかに痛そうだ。

安心させて突き落とすパターンかよ。

「何のつもり」

硬直する伊吹と違い、フィオーネは気丈に2人を睨みつけている。流石に年下の女性に庇われるのはどうかと思うが、動けない。

現在地は聖殿より離れた林の近く。林と言っても木々は細く、疎らに生えている為見晴らしは良い。黄色と白の花の咲く細長い花壇に囲まれた細い道を外れた芝生の中。近くに障害物になりそうなものはなかった。

他よりも高いこの場所からは、遠くまで見渡す事ができる。薄っすらとした山や、青く茂る畑に、疎らに立つ民家等。

空が青い。

残念ながら人気は無い。

いるのか？

疑いつつも、信じて時間を稼ぐしかなかった。

「何故？」

「……今日が試練の始まりの日。復活を止めるため、あらゆる障害

が振りかかる」

何のことだ。

額から髪が薄くなっている男が緊張した面持ちで、手にしたナイフを握りなおす。

「全ては聖典にある通りに」

「巨人の脅し、竜の吐き出す炎、水魔の起こす洪水、魔女の誘惑、それにピトリツアの虚言」

……まずい、良く分からない単語がそろい踏みだ。巨人に、水魔？ピトリツアってというのは何だ。

「何が言いたいのか分からないわ」

険しい顔でフィオーネが言う。どうやら、言葉の問題ではなかったようだ。

「クリオーセは仰られました。貴方方がピトリツアかどうかを確かめよ、と。財布を捜し、見つからなければ、それはピトリツアである証。虚言で惑わす敵を滅ぼせと」

相変わらず何を言いたいのか分からない。

しかし、1つ分かったこともある。つまりこうなった原因は、伊吹のついた嘘にあるのか。嘘つきは泥棒の始まりというが、この世界では嘘つきはピトリツアの始まりらしい。何だそれ。

ピトリツアが何かはこの際置いておくとして、嘘をついたから殺すというのはあまりに過激だ。

大体、

「根拠が弱い」

「何？」

「俺が嘘をついたという根拠だ。財布が見つからなかったから何なんだ。誰かが財布を拾っていたら？まだ探していない場所にあったとしたら？人一人を殺すのに、そんないい加減なことで良いのか」

「……黙れ、ピトリツアめ！」

激昂する黒ローブその2。痛いところを突かれると、人というのは大体怒る。これは異世界でも同じらしい。

とか、暢気に考察している場合ではなかった。黒ローブその2がそのまま勢いでナイフを振り回してきたのだ。

「！」

近くにいたのはフィオーネだ。

「フィオーネ！」

フィオーネは素早く動いた。振り下ろされたナイフからさっと身をかわし、体を捻って向きを変える。そして左足で踏み込み体勢を低くして、背後から男の足を右足で払った。倒れた男の背中に勢い良く飛び乗ると、男はぐえっと苦しげな声を上げた。

強い。

呆気にとられていた伊吹を見たフィオーネが、はっと表情を硬くした。

「イブキさん！」

それで、伊吹も漸く気がついた。もう1人の男が伊吹に向ってナイフを突き出し迫ってきていた。咄嗟によけようとするが、足が縛れる。

よろけながら、伊吹は空に煌く金属の光を見た。

ナイフが伊吹に届くよりも先に、落ちてきた網が黒ローブその1を捕らえる。正に間一髪のところだった。足元で、網に絡め取られてもがく男から、距離を取る。全身が強張っていた。早鐘を打つ心臓が治まらない。

一体、何なんだよ。

もう少しでその場に座り込みそうになるところを、何とか耐えていた。微かな風の音と共に、空を切り取ったような四角い板が降りてくる。この世界で見慣れた乗り物、ジバに乗っていたのは皮で出来た胸当てのようなものをした、黒い髭の男だった。

一言で言えばごつい。四角い顔に太い眉、目は黒目が小さい為か、やけに鋭く見える。黒い髪をオールバックのように後ろに撫で付けた姿は、堅気の人間とは思えない雰囲気があった。

知らない顔だが、何者かは見当がつく。

伊吹につけられた警護の者、の筈だ。

男は網で捕らえた黒ローブの背中を思い切り踏みつけて動きを封じると、鋭い目で伊吹を振り返った。

味方、だよな。

一瞬緊張が走った。

「いやあ、危ないところっしたねー」

鋭い容貌に似合わない軽い調子で声を掛けられ、思わず肩の力が抜けた。

「……………ずっと、いたんですよね」

そういう約束だった。助けるのが遅くないか、そういう意図を含めた言葉に気がついたうえで、男は分厚い肩を大げさに竦めた。その仕草がまた人をイラッとさせる。

「いましたよー、ちゃんとタイミング図って出ようってずっと見てました。相手が何者かも見極めてから動かないと、何せこっちは一人だし」

1人……………リザレットは数名とか言っていなかったか。眉を顰めた伊吹に、男はのんびりと伝えた。

「後の2人は聖殿の中にいるんすよ。てっきりそっちに留まると思ってたもんで。なのにアンタらぎりぎり出て来ちまうから、こっちは焦りましたよー、気づかれないように警護するってのは、結構大変なんっすよね」

「……………」

これは嫌味だな。

「で？こいつらは一体何っすか。上で話聞いてた限りじゃ、さっぱり分からなかった」

「それは、俺にも分かりません。話は、この人達に」

あ、とフィオーネの呆然とした声が聞こえた。そちらへ顔を向けると、青い顔をしたフィオーネが、押さえつけていた男から足をど



け、立ち上がるが見えた。その足元で、男は体を丸めるようにして、喉を掻きまわっている。顔色が赤紫色に変色し、口元から血の泡があふれ出した。

「おっと」

警護の男が押さえつけていた男の首を押さえ、銀色の輪のようなものを頭部に取り付けた。びくり、と黒ローブの男の手足が震え、その後弛緩した。目を開いたまま、ぐったりと動かなくなった男は一見死んでいるようにも見えた。

「ちよつと動けなくしたただけなんで、ご安心を。自殺されちゃ面倒すつから。ただこの状態にしちまうと、暫く話は聞けないのがまた面倒なんつすよね」

フィオーネの足元の男は、既に動かなくなっていた。敵に捕まった後情報を漏らさない為に自害したのか。この場合、第三者の手によって口封じされた可能性も考えられるが、一番近くにいたのはフィオーネだ。

……流石にそれは無いだろう。

「しかし、一体何が起こってるんですかねえ」

銀色のペンをかちかち鳴らしていた男が、首を横に振る。

「中にいる仲間に全く連絡つかないんすよ」

「どつやらペンではなく通信器具だったようだ。3人は、ほぼ同時に聖殿の方を見た。今まで気がつかなかったのが不思議なくらいだ。聖殿から火の手が上がっていた。」

## 伊吹、この世の地獄を見る 5

「ちくしょう！どことも連絡がつかない」

銀色のペンのような通信器具をかちかちやっていた男は、苛立たないように声を荒げる。聖殿の中にいる筈の仲間とも、外とも連絡がつかないようだ。そういえば、彼の名をまだ聞いていないが、勿論それどころでは無いので黙っておく。

聖殿は激しい炎に包まれていた。燃えにくい材質なのか、黒っぽく変色しながらも殆ど変わらない姿を保っている。しかし炎で、近づくと事ができそうになかった。

伊吹もフィオーネも警護の男も、ただ見ていることしかできない。中にはまだ、大勢の人がいるというのに。

「兄さん！シマ！」

泣きそうな声で必死に呼びかけるフィオーネの姿は、見ていられなかった。一体何が起きているのか。中から聞こえる悲鳴や怒声、助けを呼ぶ声が途絶えることなく響き、事態の悪さを伝えていた。

「……駄目だ、ここにいてもどうにもならない。俺は本部に報告に行く」

ジバを浮かせかけて、男は一旦伊吹達を振り返った。

「応援を呼んですぐに戻るつもりだ。だがここも安全とは言い切れない、できたらどこかに隠れて待っていてくれ」

真面目な口調に切り替わった男のいう事は正しいと思えた。伊吹は頷いたものの、座り込み泣いているフィオーネに声を掛けることができなかった。

聖殿は燃え続けている。

志真、ウイガー、アルジャラー。

次々と顔が浮かぶ。自分が蠟燭を手渡した人々。家族連れが多かった。老人や子どもの姿もあった。手が震え、呼吸が苦しくなる。

(俺のせいじゃない)

違う、違う、違う。

浮かびそうになる罪悪感を必死で否定する。激しい炎の勢いは、嫌でも自分が撒いた香油を思い出させた。それだけじゃない。伊吹はこうなるのでは、と予測もした。

根拠が無い、只の予感だ、考えすぎだと思っていた。

だが伊吹は、外にいる。巻き込まれず、逃げる事ができている。自分だけ、逃げた。

卑怯者。

吐き気がした。

違う、違う、いや、違わない。

だが、それなら伊吹に何ができたというのだ。あの時点で嫌な感じがするから逃げた方が良くても言えば良かったのか。そんな事言えるわけが無い。ちよつとおかしな奴がいると思われるのがオチだ。そしてすぐに教会の人間に連れ出されたに違いない。

(……結果は変わらない)

無力なのだ。伊吹はただの学生だった。多少成績が良かったくらの地味な学生。

いっさん、助けてよ

そう言っただけで簡単に頼ってくる志真が鬱陶しかった。助けを求める相手を間違えている。ただ同郷だというだけで、ただほんの少し長く生きていただけ。

(俺だって)

いっばい いっばいなのだ。誰かを支える事なんてできない。

「……畜生」

それでも、死ねば良いとは思っていなかった。当たり前だ。助けられるものなら、助きたい。

一緒に祭りに来ていたら、何か変わっていたのだろうか。

（そういえば、あいつ、何で……）

祭りの誘いに来た時の志真の言葉を思い出す。1人では不安だと言っていた。何かを心配しているような様子で、あれは何だったんだろう。

（偶然か？）

いかにも楽天主家そうな志真が何かを心配していたこと、数ある教会の中でよりにもよって、ここへ来たこと。そして、フィオーネがここをバイト先に選んだ事は、本当に偶然なのか？

「……あ！」

考え込んでいた伊吹は、フィオーネの小さな叫び声に顔を上げた。そして、目に入ってきた光景に啞然とする。

雨が降っていた。

聖殿の周りを覆う炎を消そうとするように、その周囲だけに水が落ちている。青空の下、それは異様な光景だった。

いや、もしかしてそういうシステムでもついていたのか。火事になった時の為に。それにしても、作動するのが遅すぎるような気がするが。考える間にも火は瞬く間に勢いを無くしていく。流れ出た水は離れた場所にいた伊吹達の足元にまで及んだ。

「……っ」

息を飲んで、フィオーネが立ち上がる。

「兄さん！シマ！」

無我夢中と言った様子で駆け寄ろうとするのを、伊吹は慌てて押し留めた。何とか腕を掴んだが、凄い力に引きずられる。

「待て、落ち着けフィオーネ！」

「離して！今なら中に」

「無理だ！見る、今ドアに触ったら手が」

火こそ消えたが、未だドアからは湯気のようなものが立ち上っている。触れてしまえば、火傷どころではすまないかもしれない。しかしそんな忠告も、冷静さを失ったフィオーネには届かなかった。何とか押し留めようとするが、伊吹は思わず舌打ちした。

殆ど、考えずに動いていた。

フィオーネよりも前に出て、超局地的雨の中、湯気を上げる大きなドアに手を伸ばす。触れた瞬間、じゅわと肉が焼ける音を聞いた気がした。

「つつ…！」

息を飲む。想像以上の痛みと熱さにまともな声が出なかった。赤く爛れた掌を雨に当て、激痛に耐えるべく手首をもう片方の手で押さえた。

は、とフィオーネが息を飲む。

「……無理だ」

そう告げると、フィオーネは泣きそうな顔をした。

「ごめんなさい」

「いい」

気持ちは分かる。

中にいるウィガーはフィオーネのたった一人の兄なのだ。大切な肉親。伊吹のところとは違い、彼らは仲が良いようだった。だから、今の彼女の気持ちは少しだけ分かる。

ドアの向こうからは、未だ大勢の人の声が聞こえている。フィオーネは苦しげに眉を寄せ、俯いた。

どれくらい時間が経ったのかわからない。とにかく長く感じた。そろそろ良いのではないかと思い、怪我をしていない方の手を触れない程度にまず伸ばしてみる。先程のような熱気は感じられない。思い切つて、指先で触れてみた。まだ暖かいが、怪我をするほどの熱は無い。

伊吹は変形し、殆ど解けてしまった突起を掴んで引っ張ってみた。全く動かない。気がついたフィオーネが加勢するが、ドアを開ける

ことはできなかつた。

このドアは2枚扉の大きなもので、屈強な男ですら苦勞して開け閉めしていたくらいだった。確かに伊吹は力が無い。それでも、ドアが開かないのが非力さのせいだけではないと気がついていていた。

鍵が掛かっている事も考えられるが、それ以前の問題に思えた。2枚の扉の間に、溶けた金属が流れ込み、それが冷えて固まっているのだ。まるで溶接されたかのように。

開けられないと悟ったフィオーネは、絶望に顔を歪ませた。

「兄さん！シマ！兄さん…っ！」

拳でドアを叩きながら叫ぶ。その姿から、伊吹は顔を背けた。

フィオーネの声が聞こえたのか、ドアが内側からも叩かれ始める。助けてくれ、出してくれ、そんな叫びを聞きながら何も出来ない。

最悪だ。

何でこんな事になっているんだ。頭は痛いし吐き気がする。いっそのこと倒れたいくらいだが、焼けた掌の痛みが邪魔をしていた。

（俺のせいじゃない、違う）

罪悪感を覚える必要なんて無い筈だ。伊吹は出来ることをした。決定的な何かがあれば、皆に忠告することもできたかもしれない。だが、あの時点では何も無かつた。

（まさかこんな事になるなんて想像できるか）

じんじんと脈打つような痛みに耐える伊吹の首元から、ひよこりとこてつが顔を出した。鼻を上に向け、くんと鳴らす。ぱくりと小さな口が開き、聞いた事もないような甲高い声で鳴いた。

「……………」

何だ。

動物のする事は分からない。そう思っていたが。暫くするとあちこちから同じような鳴き声が聞こえてきた。かと思えば、するりと

何か足元をすり抜ける。

「！」

いたち、ではなくヴィーダだ。1匹、2匹と目で追えたのは最初のうちだけだ。あつという間に数十匹、下手をしたら百を超える数が集まっている。小動物とはいえ、それ程の数が集まると不気味だ。何をするかと思つたら、ヴィーダ達は一斉にドアを齧り始めた。木のドアでは無い。何の素材か知らないが、硬そうな石っぽいやつだ。それを、がりがりと歯で削っている。

まさかとは思つが。

ドアを開けようとしているのか。

集まってきたのは、ヴィーダだけではなかった。風を切る音に顔を上げると、連なって飛ぶジバが見えた。その数の多さに驚く警護の男が呼んだ助けがようやく来たようだ。

真つ先に降りてきたジバに乗っていたのは、屈強なプロレスラーのような体つきの青黒い肌をした男だった。禿げているのか剃っているのか頭部に毛が無く、それがまた男を強面にさせていた。

白い生地に着と金の刺繍が入った上着に黒いずぼん、この制服は異世界人対策本部ケラスのものだ。

続いて降りてきたのは、まっすぐな金髪おかつぱの少年だった。子役にもなれそうな美少年だが、見るからに生意気そうな顔つきをしている。こちらは中世貴族のような格好をしていた。

緑の目が鋭く伊吹、フィオーネ、それから聖殿の方へと向かう。

「ヴィーダが集まっている」

目を細め、少年は言った。

「ってことは、中にいるのは敵対者か」

シマ

名前を呼ばれた気がして、志真は振り返った。周りには沢山の人がいる。老人から子供まで、男も女も。様々な色彩を纏い違う少しずつ形の違う人々の姿を見渡すが、知っている顔は見つけられない。ただ、後ろにいる渋い顔をした男以外は。

「急に立ち止まるな」

邪魔だろう、と相変わらず小言を呟くウィガーに、志真は目を向けた。

「今、呼んだ？」

「いいや」

まあ違うか。何だか女の人の声だったような気がする。

「……って、アルジャラーは!？」

気がつけば、一緒にいた筈の小柄な緑色の少女がいない。

「……俺に聞くな」

どうやらはぐれてしまったらしい。この人ごみでは探し出すのは無理だろう。常にぼうつと、ふらふらしている少女のことはかなり心配ではあるが。

(大丈夫、かな。でもあれ、アルジャラーの声じゃなかったような) もっと、大人の声だった。

「あ、もしかしてフィオーネかも」

先程この馬鹿でかい聖堂の前で会った友人の姿を思い出して、志真は上を見た。ドアは遠く、この人ごみでは声が届くとは思えないが。

「バイト、知ってた？」

「……ああ」

ふうん、そうか。



かなり面白くない気持ちだ。志真は全く知らなかった。フィオーネがバイトをする事も、一緒に伊吹がいる事も。

(別に良いけどさ)

「どうしよう、アルジャラー大丈夫かな」

「……これでするのは無理だぞ」

ため息混じりに言われてむっとする。確かにそうかもしれないけど、少し冷たくないか。アルジャラーの小柄な姿を思い出して、志真は後悔した。手を繋いでおけば良かったのだ。つい、聖堂の大きさに目を奪われてしまったのもいけなかった。

「とりあえず、ここに止まっても仕方が無い。どこかに座るぞ」  
心配だが、どうしようも無かった。

元々、偶然教会の前で出会っただけで、一緒に来たわけではない。それに、ここは仮にも宗教の場だ。そう思うと、かなり大丈夫な気がしてきた。何せイスルド教……というのは表向きで、本当はシユターク教派かもしれない場所なのだ。シユターク教派とは、異世界人がとても大切にされるといふかなり変わった宗教である。

二ト口の説明は結局よく分からなかった。分かったことをは次の2つ。

1つ、シユターク教派は異世界人を神の使いだと信じている

2つ、シユターク教派は異世界人を監視下においている者たちを神の敵だと思っている

だから、異世界人を『救う』為に、シユターク教派は宿屋の営業妨害を続けている、らしいのだ。うん、意味が分からない。

二ト口も確たる証拠は無いと言っていた。只の予想、でも。今はそれ以外に手がかりが無かった。それでとりあえずシユターク教派とやらに探りを入れてみようと思った、のだが。

シユターク教派はあまりに過激な思想や行動に走るものだから、今は取締りの対象となってしまうていたのだ。シユターク教派を名

乗れば捕まる。そんな状況でわざわざシユターク教派を名乗る人はいない。例え実際はシユターク教派を信仰していたって。

志真にしても、二ト口から忠告を受けた。

シユターク教派に自分から近づいた事が知られば、マズイ事になるぞ、と。やめておけと言われた。『お前の手には負えないから悔しいが、正しい。』

大体、近づこうにもその方法すら分からなかった。

そんな志真に、この教会の情報を持ってきたのは天敵ともいえる吸血鬼の少女、リキキだった。

午前中の学校。

窓際で、暖かい日差しを浴びながら眠るアルジャラーがいた。志真は解読中の絵本を開きながらも、他ごとを考えていた。宿屋の現状とシユターク教派のこと、それからモクのことを。

ぼんやりしていたために、背後から近づく密やかな足音に気がつかなかった。

「相変わらず無能な生ゴミですの」

唐突に吐きかけられた暴言で初めて、志真は彼女に気がついた。ちなみに、無能の意味は分からなかった。むつとしながら振り返ると、黒いドレスを身に纏った華奢な少女がいた。リキキ。病的なほど青白い肌に、大きな赤い瞳。人形のように整った美少女は、志真を蔑むような目で見下ろし、黒いレースの日傘をくるりと回した。

「ここは教室の中だ！」

と、言いたいけど言えない。

教室の中で、いや、彼女の姿を見るのは、彼女が宿屋にやって来て以来だった。その時のことを思い出して、少しだけ気まずい気持ちになる。

そんな志真の後ろめたさを見透かすかのように、リキキは赤い唇

の端を吊り上げた。

「あんまりに愚かで、哀れみすら感じるのです」

「……何よ。口、話すしないって言った」

「良く考えてみれば、虫に本気で怒るのも馬鹿馬鹿しい話ですの。あなた、探し物をしているでしょう？私がある場所、教えてあげます」

「なに？」

色々な意味で、不審だった。探しているものを、教えると言っているようだが、まずそれが何を指しているのかが分からない。そんな志真に、リキキはそつと顔を寄せた。耳元でそつと、微かな吐息を漏らす。

### シユターク教派

そう、確かに聞こえた。はつとする志真の手に、リキキはメモを手渡した。

「何で」

間近で、血のように赤い瞳が妖しく煌めく。

「この世にモク様を助けられる者がいるとしたら、彼らしかいないのです」

……何か勘違いが発生しているような気がする。

志真がシユターク教派を探している理由は、彼らと親しくなるためではないし、モクを助けてくれるように頼むためでもない。

確かにシユターク教派の考え方なら、モクのことを話せば味方になってくれそうな気がする。危険を冒して、手段を選ばずモクを自由にすることも出来ない。でも、それって何か違う。モクだってそんな事をされても、喜ばない気がする。

それに、宿屋に対する彼らのやり方は、絶対に許せるものではない。

「5日後、ここでお祭りがあります。参加すると良いのです」

それが、イスルド神の聖誕祭だった。

リキキから渡されたメモには地図と、シャーリン教会の名前が書かれていた。調べてみるとそこはイスルド教の教会。最初は「はあ？」と思った。またリキキの嫌がらせかと。無駄なことをさせてあげ笑う、それくらいの事はしそつであるし、されてもおかしくない。しかし、もしも本当だったら。

シユターク教派を堂々と名乗ることはできない。だから表向きはイスルド教を名乗っている。カモフラージュだ。ありえない話ではない。

現にドラマや映画でそういう話を見たことがある。枝を隠すには森の中、死体を隠すには……なんだっけ？

確かめる必要があった。

イスルド神の聖誕祭は確かに絶好の機会だった。何でも人が沢山集まると言うし、その時ならたとえ信者じゃなくても教会に行ったつておかしくない。

最初は伊吹を誘おうと思ったのだ。しかし何かにつけて志真を邪険に扱う伊吹は、今回もさも迷惑そつに断つた。事情を話そつとも思つたが。

（いつさんは絶対嫌がる。その上絶対邪魔してきそつ。それにまた嫌味とか小言とか山ほど言う、絶対言う！）

と言うことで、止めた。

最悪の場合は一人でいくしかない。ダメもとでウィガーにお祭りに行きたいと言ってみたら、何と了承してくれた。大分、渋々ではあつたが。

とにかく、今のところは順調だ。

後は、ここがシユターク教派の隠れ家であるかをつきとめるだけ！

……どうやって？

あれ。

椅子の列の中段で、志真は我に返った。しまった何も考えていない。

どうすれば。

必死で考える志真の耳に、再び声が聞こえた。今度のは、先程よりもはつきりと。

シマ！

懐かしい声に、志真は目を見開く。それは確かにラスカウルの声だった。

## 志真と悪夢の欠片たち 2

思わず立ち上がってしまった志真を、ウイガーは不審そうな目で見た。しかし、そんな事を気にしている余裕は無い。

ラスカウルだ、ラスカウルがいる！

志真はざわざわと煩い音の中から、もう一度彼女の声を聞こうとした。どんなに煩いところにも、それは難しいことじゃ無かった筈だ。ラスカウルの声はいつだって、頭に直接響いてくる感じではつきりと響いていた。

しかし、一向に聞こえない。気のせい？そんな事はないと思うのだが。

「おい、シマ。いい加減に座って大人しくしている」

うんざりした様子のウイガーに言われ、志真は渋々椅子に座った。この椅子、冷たくて固すぎると思う。座布団とか欲しいところだ。

それは兎も角ラスカウルだ。確かに聞いた「シマ！」と呼ぶ彼女の懐かしい声。幻聴と言う奴、なのだろうか。それともやっぱり単に誰かの声を聞き間違えただけ？分からない。

確かに少し、違和感を感じた。

聞こえているんだけど、どこか遠いところから響いているみたいな。ラスカウルの声だったら、もっとはつきり分かる筈。やっぱり、勘違いだったのだろうか。

時間が経つに連れて、自信がなくなってくる。

何だ

志真はがっかりした気持ちで椅子に深く沈みこんだ。自然に顔が上を向く。乳白色の天井はキラキラと輝いていて綺麗だけど、少しだけ眩しい。何の石だろう。何か模様が描かれているようだけど、天井が高すぎてよく分からない。

しかし本当に大きな教会だ。本日初公開の新築された聖堂は確かに立派で、集まった大勢のお客さんを興奮させている。芸術的っていうのだろうか。志真には何か良く分からないが、素晴らしいと喜んでる人もいるようなので、きつと凄いのだろうと思う。

例え、何か変な形、としか思えなくても。

それにしても、今日のお祭りってどういうものなんだろう。

下の方、真ん中辺りに舞台っぽいものがあるから、何か出し物があるのかもしれない。別に遊びに来ているわけじゃないのだが、わくわくする気持ちは抑えられなかった。

舞台の両端に丸い穴が開いていて、そこから白い階段が斜めに伸びている。あれも何か仕掛けがありそうだ。階段はずっと上の方、壁からせり出した縦長のベランダみたいところに繋がっていた。ベランダの奥にはドアが見える。

あそこから誰か出て来るのだ、きつと。

細長くせり出したベランダがある位置は、かなり高い。怖い気もするが、ちよつと上つてみたいとも思った。

それにしても凄い人だ。

先程よりも更に人が増え、もう席は殆ど埋まっている。上空に設置されたVIP専用みたいなボックス席にも人が入っていた。

あの人はシユターク教派なんだろうか。それとも単に騙されているだけ？ここにいて、大勢の人達はどっちなんだろう。

(そもそも、本当にここシユターク教派なわけ？)

リキキの持ってきた話だ。本気にするなんて馬鹿ですよ、とか言われてもおかしくない。想像するだけで、むかついてきた。

「……あのさ、ウィガー」

「何だ」

「ウィガーも、その、イスルド教信者っていうやつなの？」

「ああ。この国の殆どの人間はそうだ。とはいっても、それほど熱

心に信仰してるわけじゃないが」

「じゃ、ここの人達も大体そうなんだ？」

「まあ、そうなんじゃないか？」

どうでも良さそうにウィガーが言う。駄目だ。埒が明かない、もうちよつと踏み込んでみよう。

「イスルド教の人かどうかって、見分ける方法とか何か無い？」

ウィガーの濃い眉がぴくりと動く。しまった。踏み込みすぎたかもしれない。空色の瞳に疑念が宿った、ように見えて志真は焦る。

「いや、ほら例えば十字架とか！あー、えっと知らないかもしれないけど、うちの世界でキリスト教ってというのがあつて。その信者の人とかは十字架持ってたたりするんだけど。私は違うし、まー、良くは知らないけどさ」

「……お前、また妙な事考えているんじゃないだろうな」

「違うつて、ただの、えーっと、知的好奇心、つてやつ？」

「……………」

沈黙が痛い。くそう。完全に怪しまれている。全力でスルーだ。

「あ、家は仏教だったんだ。だから一応数珠は持ってたよ。お葬式くらいでしか持った事ないけど。後はお守り、かな。お正月に初詣に行つた神社で買ったやつ。全然ご利益なかったなー」

あはははは、と乾いた笑いが漏れる。

いや、考えてみたら本当に全然ご利益無くないか？最近の状況を振り返つて、思う。そういえば、神社つて仏教だったけ？いや、確か何か違つた気がする。仏教は、寺院だ。他宗教だったから駄目だったのだろうか。

うーん、と考え込む志真の隣で、ウィガーが疲れたように溜息を吐いた。

「そういう話がしたいんなら、ユーイにしる。あいつは異世界研究に熱心だからな。喜んで話を聞くんじゃないか？」

「絶対嫌」

全力でお断りだ。



結局、肝心の手がかりも、手がかりを見つげるための方法も分からないまま、開始の時間になった。志真の位置から正面左手側の階段から、真っ白な裾の長いつるんとした服を着た女の人が上ってくる。鈴のようなものを持つているようで、彼女が歩くたびにしゃりんしゃりん音を立てていた。

ざわついていた聖堂は、波が引くように静かになっていく。

真っ白な長い髪を靡かせて、女性は舞台の端へと移動する。ここからでは顔は良く見えないが、雰囲氣的に美人だ。続いて、階段の下からぞろぞろと、今度は黒い服の集団が現れた。男も女も同じ服。腰の辺りを紐で縛るワンピースみたいな格好だ。

ただし男の場合は、下にズボンを履いている。

伊吹もフィオーネも同じ格好だった。教会の制服にしては、何か胡散臭い感じの。でも誰も特に何も言わないから、あれが普通なのかもしれない。

出てきた数十人の男女は、舞台の上で輪になった。

指を組み合わせて、お腹にあてる。やがて聖堂に、パイプオルガンのような音が鳴り響いた。どこから？ 辺りを見渡すが、それらしきものは無い。ただ音だけが会場全体に響き渡っている。

舞台の上の男女が歌い始める。それにあわせて、客席の人々も歌い始めた。大合唱だ。勿論知らない歌だったので、志真は聞いていることしかできない。ゆつたりとした曲調の、ちょっと物悲しい雰囲気の歌だ。

歌詞の意味は分からない。

歌っているせいで、一層言葉が分かりにくくなっていった。私たち、光、雨、そんな言葉が辛うじて聞き取れた。歌にあわせて、白い髪の女性が舞台をくるくる回りながら踊っている。手首や足首で、きらきらと何かが光っていた。

歌が終わると、再び聖堂は静寂に包まれる。不思議な雰囲気がその場を支配していた。胸が圧迫されるような、息苦しさ。しかし不

思議と嫌ではない。興奮と、期待と、それから少しの不安。泣きたくなるような、安心感。

何、これ。

皆が同じような顔で、息を詰めていた。

上の、細長いベランダみたいところに、人が立った。遠くではつきり見えないが、白い服を着た男だ。多分、そんなに若くない。

「この良き日を皆様方と迎えられたことを、主に感謝します」

良い声だ。ちよつと枯れているけど、深みがあつて良く響く。

「遙かなる昔の今日この日、1人の神が意思と信念と使命を持ってこの地に生まれました。過ちを続ける人々に嘆き、救いを与える為、正しき道へと導く為。己の全てを投げ打つて、人々を救おうとした、その行動は今も尚私たちの胸に深く刻み込まれています」

声は良い、が。知らない単語が多すぎて、何と言っているかさっぱり分からなかった。

神とか人々とか、そういう単語が出て来ているから、きっと宗教について話しているのだろう。

こんなシーンと静まり返っているのは、ウィガーに聞くわけにもいかないし、大人しく椅子に座っているが、退屈で寝てしまいそうだった。

(何か朝礼の校長先生の話みたい)

あれも長く、退屈だった。時々貧血で倒れる人もいたっけ。ここではみんな椅子に座ってるから、まだマシなのかもしれない。

他ごとを考える間にも、長々と話は続いている。

「神が伝えようとしている事は何なのか、私達はそれに気がつかなければなりません。常に目を開き、耳を傾ける事こそが、過ちを犯さない為に必要な事なのです」

眠気を誤魔化す為に、志真は瞬きを繰り返した。

どうにも、眠い。

昨日、遅くまで起きていたせいだ。

シマ！

びく、と志真は体を揺らした。眠気が一気に吹き飛んだ。まただ。また聞こえた。今度は確かに、絶対に。

「……………ラス？」

そっと小声で呼んでみる。

今度はもっと、はっきりと声が聞こえた。

シマ、逃げて！

切羽詰ったような言葉に、志真は思わず立ち上がった。

志真と悪夢の欠片たち 3

「おい、志真！」

咎めるウイガーの硬い声と、周りのざわめきに志真ははっと我に返った。ベランダの男の話はまだ続いている。周囲の冷めた視線をちくちくと感じ、志真は慌てて椅子に座った。

「全く、何をやっているんだ」

ウイガーの小言には構ってられない。今、一番気にするべき事は、ラスカウルのことだ。逃げろってどういう事だろう。

(ラス？いるんでしょ？)

程なくして、『シマ』と答える声があった。やけに声が小さく聞こえるが、間違いなくラスカウルの声だ。

(良かった！ラス、心配したんだよ！どうしてたの)

聞きたい事はいっぱいある。だが、ラスカウルは問いには答えず、『すぐに逃げて』と真剣な声で繰り返す。

(逃げるって……)

男の話は続いており、周囲は静かにそれを聞き入っている。隣では、ウイガーが渋い顔で志真を見張っている。こっそり外へ出て行くにしても、ここは中段の列の真ん中付近。沢山の人の間を通っていかなければならない。

(無理だよ、今は)

この厳粛な雰囲気壊すのには気が引けた。ついさっき、壊したばかりだけど。

(ラス、ちゃんと説明して。逃げろって何で？何かあるの？)

長い沈黙の後に、ぽつりと言葉が返ってきた。

『…………… 敵対者、駄目、もう……………』

「え？」

聞きなれない言葉を最後に、ふっとラスカウルの気配が消える。

(ラス？)

呼びかけにも返事が無い。

「シマ、お前さつきから何をぶつぶつ言っているんだ」

眉間に深く皺を寄せ、ウイガーが小声で文句を言う。長い話に嫌気が差したのか、聖堂の中はざわつき始めていた。今なら、喋っても大丈夫そうだ。

「あのさ、ウイガー。『敵対者』って何？」

ウイガーなら知っているかも、そんな軽い気持ちで聞いた。はっと、見開かれた空色の瞳。何か信じられないものを見たという表情に、志真は焦りを覚えた。また何か、まずいことを言っちゃったかも。

「お前、それをどこから」

「え、いや、どこからっていつか……」

最後まで誤魔化す必要はなかった。

あー……、と不思議な声が響く。

自然と声のする方へ目が向いた。

その声の主は、舞台の上で踊っていた女性だ。膝を付き、大きく状態を反らして、声を出す。後ろへ反らされた白い首が、がくがくと揺れる。その異様な姿に、あたりは再び静まり返っていた。低音から高音へ。聞いているだけで、妙に不安になってくるような声だった。

声途切れるのとほぼ同時に、何かが碎けるような大きな音が響き、床が揺れた。拍子に椅子から落ちそうになったが、何とか肘掛にしがみ付き踏み止まる。

な、何！？

あちこちで混乱の声が聞こえる。一体何が起こったのか確かめる前に、もう一度衝撃が来た。さつきよりも近くで、耳がじんと痺れるような爆音と共に地面が揺れる。誰かの悲鳴と、叫ぶ声。もうも

うと舞う砂煙のせいで、視界が塞がれる。

げぼげぼと咳き込みながら、志真は身をかがめた。一体どうなっているんだらう。凄く怖い。逃げろと言ったラスカウルの声が今更蘇ってきた。

3度目の爆音が響いた時、誰かの腕が庇うように志真の肩に回された。ウィガーだ。志真はその腕にしがみ付いた。これで終わり…？そう思いかけたところに、もう一度凄いい音が響いて、泣きたくなる。

テロ、という言葉が頭を過ぎった。

こんなの絶対普通じゃない。お祭りの一環では勿論無いだらう。そうでなかったら、こんなに悲鳴や泣き声が聞こえてくるはずが無い。

「新たな神々は既にこの地に下りています。正しい秩序と道を我らの前に作るために！我らはここで正しく生まれ変わるのです！」

上にいた男がなにやら叫んでいた。多分、逃げるように指示しているのだらう。神に助けを求めているのかもしれない。

「シマ、立てるか」

「う、うん」

情け無く震える足で立ち上がる。何が起きているのかは分からない。多分、良くない事だ。人々は一斉にここから出ようとドアへと詰め掛けていた。そんな逃げようとする人々に押されて、うまく身動きが取れない。何とか倒れないようにするだけで精一杯だ。

慌てない、押さない、しゃべらない……、そんな避難で大切な項目を守っている人など誰もいない。

入り口の方には、フィオーネや伊吹がいた筈だ。アルジャラーもこの聖堂のどこかにいる。だが、大勢の人々の中から彼らの姿を探す事はできそうにない。

無事だよね？

祈るような気持ちで思う。

フィオーネはすっかりしているし、伊吹は相当ちゃっかりしている。アルジャーラーは。小さな頼りない姿を思い出して、志真は後悔した。やっぱり手を繋いでおけば良かった。無理してでも探しておけば。

「あれが落ちたのか」

ウィガールの声に顔を上げると、志真の目にもそれが映った。ボックス席だ。箱型の形を保ったまま、床にのめり込んでいる。中にいた人はどうなったのだろう。黒っぽい石を組み合わせて作られたそれは、何だか黒い棺桶のようにも見えた。

人の波に容赦なくぎゅうぎゅうと押されるが、一向にドアに近づかない。まるで、満員電車にのっているかのようだ。一向に流れが解消されない原因は、ドアが開かない為だった。

「これ以上押すな！」「開かないんだ！」「そんな馬鹿なことがあるか！」そんな怒鳴り声が聞こえてくる。

「押さないで、ドアが熱いの！」

「やめろ！」

怒鳴り声はやがて悲鳴へと変わった。何が起こったのか分からないが、尋常ではない叫び声に、志真は震えた。

「火事だ！」

と誰かが叫ぶ。

何処からか入り込んだ煙で、聖堂の中は白くくすんでいた。落ちたボックス席から、火の手が上がっている。1つではない。4つ全部だ。赤い炎はじわじわと客席の方にまで広がっていく。炎によって人々は、一層逃げ場を塞がれ、分断された。

更に一際大きな悲鳴が舞台の方から響いた。

他の人達と同じようにそちらを振り返った志真は、息を飲んだ。

なに、あれ。

驚きすぎて声にならない。ただ息だけが開いた口から漏れた。

白い舞台に広がる赤い色。あれは、血だ。その中心に、手足を投げ出し横たわった黒服の男がいた。ぴくりとも動かない体の上で、白いものが蠢いている。

な、何なの、あれ。

それは異様な形をしていた。異様に長く伸びた白い手足を蜘蛛のように折り曲げて、4つ足で立つ女。血に染まった白い髪、それは先程舞台上で踊っていた女性と同じものだが、形が違う。

舞台の上で歌っていた数十人の男女が、悲鳴を上げて逃げ惑っている。

女の手がにゅっと伸び、逃げ出そうと這っていた女性の足を捕まえた。まるで玩具の人形を拾うように軽々と、持ち上げて。引きずられる女性の、言葉にならない悲鳴に体が竦む。

(やだ！)

志真は思わず目を瞑った。絶叫と共に、恐ろしい音が響く。

「……っ」

がくがくと手足が震える。ウィガアの腕が無かったら、もう立っていらなかったかもしれない。

幽霊は…ラスカウルは怖くなかった。怖いけど、大丈夫。でも、あれは無理だ。だって、あれ、あんな化物がこの世界にいるなんて聞いていない。

「なに、何なの、これ」

夢？そうとしか思えない。

「……落ち着け、シマ」

視界が滲む。煙で……、涙で。ドアは相変わらず開かない。火の



手は確実に勢いを増して広がっている。逃げ場が無い。どうしてこんな事になっているのか分からない。でも。

「ご、ごめん、ウイガー。わ、私が来たと言って言った、言っちゃったから」

「……シマ。良いから落ち着け」

「な、何で、どうしよう、私……」

「シマ、落ち着くですー」

のんびりとした少女の声が聞こえた。ひんやりとした冷たいものが、志真の手を握る。目の端に映った緑色のものに焦点を合わせる。と、アルジャラーがにっこりと眠たげな笑顔を見せた。

「ようやく見つけましたー。心配したのですー」

「あ、アル、アルジャラー！」

ぶわ、と涙が毀れた。

「よ、良かった、良かったよ、無事で！」

「今のところは、無事ですのー」

「え？」

アルジャラーは、こてんと頭を志真の胸に凭れさせた。

「火はやっぱり嫌いですー」

くったりと少女の体から力が抜ける。

「ちよ、ちよっと、アルジャラー!？」

ウイガーが深く溜息を吐き、アルジャラーの体を抱え上げた。肩に頭を凭れさせ、立ち上がる。

「行くぞ」

ウイガーの言葉に、志真はしつかりと頷いた。今も怖い。それでも震えは大分治まっていた。怖がっている場合ではない。反省も謝罪も後だ。火の手がすぐ傍まで来ていた。

大丈夫、ウイガーもアルジャラーもいる。

1人じゃない。

## 志真と悪夢の欠片たち 4

ドアは開かない。まだ火の回っていない方へ逃げるしかなかった。しかし、舞台の方にはあの化物がいる。

ここは神がいる場所らしいのに、どこにもそんなものはいないように思えた。

混乱する人々に押されながら、思うように進むことができない。

ウィガー達とはぐれないようにするだけで精一杯だ。徐々に、舞台の方へ押し流されていると分かっていったが、どうしようもなかった。強く押された老女が倒されるのを見て、志真は慌てて駆け寄った。助け起こそうとする間にも、容赦なく人が押し寄せてくる。手を踏まれ、背中を蹴られた。頭にくるが、立ち上がる方が先決だ。

白髪の老女は、志真の手に寄りかかりながら何とか立ち上がった。「ありがとうございます。……そちらの方も」

その言葉に振り返ると、アルジャーを抱えたウィガーがいた。途中から、盾になってくれていたようだ。

「……ありがとうございます」  
「こんな時だ。仕方ないだろう」

皆、不安なのだ。

それは分かっている。

舞台の両脇には地下から伸びる階段があつたが、片方はいつの間にか壊されている。残った方の階段の傍では死体がいくつも転がっていた。その上、侵入を防ぐ為か周りに高い柵があり、それを上らなければならぬ。

その場所は舞台から近く、そんな無謀な試みをしようとする者はいないようだ。

何せ舞台の上では、蜘蛛のように足を曲げた女が待ち構えている。

炎に追い詰められ、近づいてくる人間を不気味な顔で眺めていた化物は、ぐるぐると喉を鳴らした後動いた。無造作ににゅっと伸びてきた腕から逃げ惑う人々。腕は、押されて転んだ幼い少女の足を捕らえた。

は、と息を飲む。

助けなきや。そう思つのに足が動かない。

子どもが泣き叫んでいるのに。

小さく舌打ちをしたウィガーが、アルジャラーを降ろし志真へと押し付けた。

「ここにいろ」

そう短く告げて、人ごみを押しのけて走り出す。

「ウィガー!!」

振り返らず進むウィガーは、真っ直ぐに舞台を目指していた。無理だ、間に合わない。それにあの化物に、ウィガーが勝てるのだからうか。

舞台の上では化物が、捕らえた子どもを引寄せてその体に食らいつこうとしている。

「やだ……やめて!!」

その牙が少女の首元に届く寸前に、舞台に白い影が飛び乗った。同時に銀色に煌くものが風を切り、化物の首元に突き刺さる。侵入者を排除しようと伸びた女の白い腕を、白いコートの男が長い剣で防いだ。

褐色の肌に銀の髪をした男は身軽に動く。

次々と襲い掛かる化物のの手足を難なくよけ、その体に切り込む。ぐにやりと歪む肉体は痛みを知らないのか、切り裂かれてもなお動きを止めない。その上、赤黒く開かれた傷跡も、あつという間に塞がってしまう。

銀髪の男が戦っている隙に、別の男が素早く舞台へ上がった。ウィガーだ。志真は小さく息を飲んだ。ウィガーは身を低くしながら、化物の傍に走りこむ。そして、その下に囚われている子どもものに

腕を回して引き抜いた。

すぐに気がついた化物が阻止しようとするが、銀髪の男の攻撃がそれを許さない。(強い)その男に僅かな希望を見出したのは、きつと志真だけでは無い筈だ。

ウィガーは子どもを舞台の下へ逃がした後、ゆっくりと化物の方へ向き直った。

(え?.....なんで)

心臓が大きく嫌な音を立てる。

「ウィガー!」

呼んだ声は、他のざわめきに掻き消されてしまう。

充滿した煙のせいで、視界が白く曇ってきていた。舞台の上のウィガーの姿がよく見えない。炎に追い詰められ、徐々に舞台へと人の輪が縮まっていく。

(どうなっちゃうの。ウィガーは.....)

怖い。怖くて仕方が無い、でも。

「あ、アルジャラー、私、行かなきゃ。ウィガーを連れてきたのは私なんだ、だから」

行つて連れて来ないと。ちゃんと一緒に帰らないと。

「私、行くよ。だから、ここで待ってて」

「シマ」

志真の腕の中で、半分ほど目を閉じていたアルジャラーが身じろぎをした。

「水、くるですのー」

どこか嬉しそうに、天井に向って指を伸ばす。

「へ？」

思わず上を向いた志真の頬に、ぽたりと冷たいものが当たった。

(え)

額に、手に、首に。次々と落ちてくるそれは、あつという間に雨に変わった。雨、だ。ここは室内なのに？中々の勢いで降る雨は正直ありがたいが、不思議でならない。ああ、もしかしたら、雨じゃなくてそういう装置なのだろうか。

煙を感知して水を撒く……名前は忘れたが、そんな機会なら志真の世界にもあつた。

広範囲で降る雨は、あつという間に炎を飲み込んでいく。正に恵の雨だった。火が消えたことで、人々は再び舞台から離れる為に動き出した。我先にと逃げ出そうとする人々に押されながら、志真はその場に踏み止まる。ウィガーを置いてはいけなかった。

舞台を振り返った志真は、長い階段の途中で動く影を見つけた。人、それも同じ年くらいの黒髪の少女だ。いつの間にそこに入ったのか。そして何故下ではなく上へ向かっているのか。

彼女に気がつかなかった理由は、煙で視界が悪くなっていたのと、舞台の上に注目していた為だ。それから、彼女がまるで身を隠すように階段を這って上っているから。両側の手摺とその土台にうまい具合に隠れていたのだろう。

次に彼女の存在に気がついたのは、よりもよって化物だった。銀髪の男に伸ばしていた腕を振り回して、細い階段に叩きつける。

「あつ……！」

大きく揺れた階段から、少女が転げ落ちそうになったのを見て、思わず声が出た。何とか踏み止まったが、女の腕は執拗に階段を狙う。

徐々に階段が傾き始めている。もう、見ていられなかった。アル

ジャラーの腕を離して、舞台へと駆け寄る。

「ウィガー！上に女の子がいる！」

その声が届いたのか、ウィガーは上を見た。そして、

「キクノ！」

驚愕したように声を上げた。

殆ど同時に、大きく振り上げた長い腕が、階段に決定的な一打を与える。折れ曲がり、傾いた階段から少女の小さな体が転がり落ちるのを見て、銀髪の男が地面を蹴った。何かを投げるような動きをした後、引っ張られるような勢いでぐんと高く飛ぶ。

手摺にぶつかり跳ね上がった少女の腕を掴み、引寄せながら辛うじてぶらさがる階段の残骸の上へ飛び乗った。

……良かった、と安堵している場合ではない。

「シマ！」

ウィガーの声にはっとする。目前に迫る白いものを見て、志真は咄嗟にその場を飛びのいた。ぴ、と頬を鋭い痛みが走る。何かが潰れるような嫌な音と、男の呻き声が聞こえた。

そちらに目を向けた志真の前にアルジャラーが立つ。

「こつちです」

いつになくはつきりとした口調で、志真の手を引く。同じように逃げ惑う人々に紛れて、志真は走った。外には出られない。だから、ずっとこうして走り回るしかない。

化物は舞台を下りていた。

止まない雨で溜まった水を掻き分けて、そうして逃げ惑う人々を無差別に襲っている。いつの間にか、白い指先が刃物のように尖っていた。切り裂き、突き刺す。恐ろしい光景に段々感覚が凍り付いていく。

まるで、鬼ごっこのようなだった。

だがこれは遊びではない。掴まれば、死ぬのだ。苦しかった。いつ終わるのか、本当に終わりはあるのか。助かるのか。

(……モク)

弱気な心は、救いの手を期待する。また、来てくれるのでは無いかと。都合の良い助けを夢見てしまふ。

志真はアルジャラーの手を強く握った。

そんなんじゃ、駄目だ。

こんな事にモクを巻き込むのは駄目だ。自分の事は、自分で……できなくてもせめて、思っていたい。

(ここにモクがいなくて良かった)

うん、そうだ。

(いなくて、良かったよ)

モクにこんな思いはして欲しくない。はぐれてしまったウィガーや、フィオーネ、それから伊吹。彼らの事が心配だった。きっと上手く逃げていると信じたい。そう信じて、志真も逃げる。

(アルジャラーを守らなきゃ)

見ないようにしていた化物の姿を探し、動きを追う。逃げる人々の動き、それから焼け焦げた椅子や、崩れた壁の残骸等をしっかりと視界に収め、志真は逃げ場を探した。

暫く無我夢中で逃げ回っていた。だから、一体いつあの化物の姿が見えなくなっていたのか、分からない。どこかに潜んでいるのか。こういう場合は助かった！と安心していたら、突然物陰から襲われちゃったりするのだ。安心できない。

志真は辛うじて形を残し椅子の影に隠れながら、注意深く辺りを見渡した。荒い呼吸を抑えながら、べったりと額に滲んだ汗を拭う。ずっと走り回っていたせいで、体が熱くだるかった。もうちよつと運動して体力つけとくべきだったと思う。

志真の肩にぐったりと凭れるアルジャラーは、既に息も絶え絶えだ。

「アルジャラー、大丈夫？」

波打つ緑色の髪の間隙から、力の無い声が聞こえた。

「眠い、ですのー」

駄目そうだ。

志真も、このままじゃ体が持たない。今ならちよつとだけ休んでも大丈夫だろうか。周囲を見渡せば、同じように休んでいる人々の姿が目に入った。怯えるように身を寄せ合う人や、怪我をしたのか苦しげに呻いている人。そして。

「た、助けてくれ……」

掠れるような声が瓦礫の下から聞こえた。乳白色の天井は、今やすっかり煤で汚れ黒くなっている。その為か、聖堂の中は薄暗かった。いつの間にか雨は止んでいたが、足元に溜まった水は足首の上まできている。

崩れた壁の残骸が、椅子をいくつか無残に埋めていた。助けを呼ぶ呻き声は、その下から聞こえてくる。

「誰か、助けてくれ……、こ、子どもがいるんだ。せめて、こいつだけでも……」



必死の声音に、心が揺さぶられる。

だが、立ち上がるのには勇気がいった。

普段だったら、すぐに駆けつける事ができたかもしれない。だが今は、異常な事件の最中だ。見えなくなった化物が、いつどこから襲い掛かってくるかも分からない。そんな状態で、無防備に動く事は怖かった。

瓦礫の残骸をどかすには、時間がかかりそうだ。もしもその間にあれが来たら？

(無理だよ。こっちが死んじゃう)

助けを求める声が聞こえている筈の他の人々も、誰も動こうとしない。みんな、自分の事で精一杯なのだ。こんな時だから。

怖いのだ。皆、怯えている。当たり前だ、誰だってあんな怖い思いをしたら。

「……………」

ぐるぐると思い悩んだ末、志真は顔を上げた。

「アルジャラー」

「……………行きますのー？」

「うん。だって、怖いけど」

怖いから。思うのだ。あれが自分だったら、ウィガーやアルジャラーだったら。大きな緑色の瞳が志真を見上げ、ふわりと笑んだ。

「じゃー、私も行きますのー」

思わず泣きそうになった。

2人して舞台近くの瓦礫の山に駆けつける。下の方に大きな板のようなものが倒れており、その上に長い金属の棒のようなものが数本と、どこかの柱のような角材。更に欠けた石の残骸が散らばっている。金属の棒はぴくりとも動かず、比較的小さな瓦礫からどかさしかなかった。

「大丈夫、助ける、頑張って」

必死で声を掛けながら、瓦礫をどかす。重いものは、アルジャラーと2人掛かりで。最初は化物の存在が気になっていたが、途中から夢中になって作業していた。

瓦礫の下から聞こえてくる「すまない」「ありがとう」「苦しい」そんな途切れ途切れの言葉が、すこしずつ苦しいものに変わっていくのに、胸が締め付けられる。「頑張つて」を繰り返しながら、泣きたくなつた。力には自信があつたのに、全然足りない。悔しかった。

「せーのっ！」

掛け声を掛けて、アルジャラーと大きな石の残骸を転がす。次の瓦礫へと手を伸ばした時、新たな手がそこに加わつた。

アルジャラーの緑の小さな手ではない。太く無骨な浅黒い大人の手の出現に、思わずびくつと手を引いてしまった。

「手伝おう」

短く言ったのは、口ひげを生やした40代くらいの男だつた。中肉中背、中々しっかりした体つきの厳しい顔をした男は、黙々と瓦礫を片付け始める。

「あ、ありがとう！」

その手助けは心強い。その男を皮切りに、他の人々も動いた。次々と瓦礫がどかされていく。大きなものは、数人掛かりで。きつと志真とアルジャラーだけでは無理だつた。最後の大きな板を動かすと、椅子と椅子の間に横たわる男と、その腕に守られる5歳くらいの男の子の姿が現れた。

子どもの方は気絶しているだけで、打撲と擦り傷くらいですんでいるようだ。重傷なのは男の方で、足に太い木の破片が突き刺さつており、自力で動く事はできないようだつた。数人がかりで体を持ち上げ、壁際に移動させる。

志真には怪我の治療はできない。

若い女性と白髪の老人が手馴れた様子で処置を始めた。助かるのだろうか。青い顔で震えている男を心配な気持ちで見ていると、遠

くから声がかかった。

「こつちにも手を貸してくれ」  
すぐにそちらの方へ向かい、救助に加わる。

いたるところに怪我人がいた。倒れた人の中には、全く動かない者もいる。明らかに死んでいると分かる者も。そんな中で、必死で生きた人を探した。救助活動は、ドアが開き外から助けが入るまで行われた。

ウィガールもファイオーネも伊吹も、無事だった。彼らの姿を確認した後、志真は心置きなく意識を失った。

限界だったのだ。

思えば日本は平和だった。校長先生が鬘かどうかなんて事が話題になるような、のんびりとした学校生活。テストで死ぬとか言っていた頃が懐かしい。テストごときで本当に死ぬわけがあるか、と昔の自分に言ってやりたかった。

幸せなんだぞ、と。

親とか口煩くて鬱陶しいなあと思った事もあったのに、今はただ懐かしくて恋しい。あの悪夢みたいな聖堂の中で「お父さん」「お母さん」と泣き叫ぶ子どもを何人見ただろう。同じように、子どもの名前を叫ぶ親の姿も。

目の前で、簡単に人が死ぬ。

そんな事が現実起こるなんて思わなかった。何であんな事が。シユターク教派とやらが関わっているのだろうか。人為的なもの？それとも事故？大体、あの化物は何なんだ。

ラスカウルは。

シマ、と呼ぶ声に目を開けた。

そこは不思議な場所だった。霧に包まれたかのようにはつきりと

しない、ふわふわしたところ。延々と続く紺色の空と、ドライアイスを焚いたような霧意外に何も見えない。

「ラス？」

呼びかけると、霧の中に人影が浮かんだ。

長い髪の華奢な人影。ラスカウルだ。ただぼんやりと浮かぶ灰色の影だったが、志真はそう確信した。

「シマ、ごめんなさいね」

ラスカウルの影が揺れる。いつもよりも鮮明に、声として聞こえる言葉が何だか新鮮に感じた。

「あんな事するつもりじゃなかったの。……でも、気がついたら」

「もういいよ、ラス。そりゃ、ちよつとは怖かったけど。でもラスがない方が寂しかった。どこに行ってたの」

「どこにも。ずっとシマのそばにいたわ」

「嘘、ほんとに？」

それなら、何故話しかけてくれなかったのだろう。

「最初は、ただ申し訳なくて。このまま一緒にいたら、また同じ事をしてしまっつて分かっていたから、距離を置こうと思ったの。でもその内に、すこしずつシマと遠くなるのが分かったわ。きつと、その内にシマは私の事を忘れるんだって」

「そんな事ないよ！私いっつも、ここにラスがいればって思ってたよ」

「ありがとう、シマ」

でも、と寂しげにラスカウルは言った。

「やっぱり私、死んでるのよ。今日のこと、踏ん切りがついたわ。もういなくなっちゃ」

いくつて、どこへ。やっぱりこの世界にもあの世とかそういうものがあるのだろうか。

「でも、何で急に。だって、ウイガーの事は！？もう良いの？」

「あのね、シマ。ウイガー様に恋するのは楽しかった、でも、それよりももっとシマと色々な話をする方が、最近楽しかったのよ」

「ラス、じゃあ」

ここにいてよ、そう言いかける志真をラスカウルは止めた。

「でももうここにはいられない……敵対者がいるから。敵対者は周りを変質させてしまうの。私みたいな死者の魂は、すぐに」

「その敵対者って、一体何なわけ。あの化物のこと？」

「そうよ、異界から落ちてくる人間にとり憑いてやってくる、この世界の敵。ねえ、シマ。気をつけて。敵対者は他にも……」

急にラスカウルの声が遠ざかった。黒い影も、全部白い光に飲み込まれる。

気がつくのと、志真はどこか見覚えのある部屋のベッドの上だった。無機質なベッドと机があるだけの簡素な部屋。ここは、保護施設だ。

## 菊乃の恩人 1

菊乃が目覚めたのは、事件が起こった日から5日が過ぎた頃だった。

昼間なのだろう。明るい日差しが白い部屋を柔らかく照らしている。白いシーツは花の香りがした。見覚えのある天井。ここは、保護施設だ。

何度か瞬きした後、ぼんやりと痛む頭で記憶を辿る。確か、どこか知らない場所に監禁されていた。

「あ……、目が」

見えるようになっていく。その事に、ようやく気がついた。良かった。心の底から安堵する。一生見えないままだったらどうしようと、いつも不安だった。保護施設にいるという事は、助かったのか。どうやって助けられたのだろうか。あの時は、確か。

一気に記憶が蘇ってくる。菊乃ははっと身を起こした。

何も見えない中、手探りで進むしかなかった時の恐怖。沢山の人々の悲鳴や、助けを呼ぶ声。煙に混じった血の匂い。それから。

「ハインズさん……」

彼は無事なのだろうか。

菊乃の手を離して、何かと戦っているようだった。菊乃に逃げるように言って、それから？……駄目だ。思い出せない。

いてもたってもいられなくなって、菊乃はベッドから立ち上がった。一瞬くらりと気が遠くなる。すつと血の気が下がる感覚と共に、目の前が暗くなった。ややして眩暈が治まると、じわじわと景色が戻ってくる。

菊乃は小さく息を吐いた。

だるい体を引きずって、ドアへと向う。思い切って開けようとする

るが、やはりというかドアは開かなかった。

「誰か、いませんか」

起きた事が分かれば、誰かが来るかもしれない。そう思い、呼びかける。

「すみません、誰か」

突然ドアは開いた。驚く菊乃の前に立ち塞がる人影がある。

「どこへ行くつもりだ？」

真っ直ぐな金髪の髪を肩の上で揺らす、整った顔の少年。形の良  
い細い眉を不機嫌に寄せ、口を一文字に結んだその顔はどう見ても  
『怒っている』

「……ユーイ、さん」

「起きる必要は無い。そのまま寝てろ」

有無を言わせぬ強い口調。しかし、菊乃は従わなかった。

「あの、ハイネスさんは無事ですか？他の、人達は」

そもそもあの場所で一体何が起こっていたのか。

「戻れって、言っているのが聞こえないのか？」

「教えてください」

折れない菊乃の様子にユーイは、さも不快そうに目を細めた。

菊乃と同じ、或いはもっと幼いような外見をしていながら、ユー

イの力は強かった。腕を掴み、強制的に菊乃をベッドへと押し込む。

或いは、菊乃の力が弱いだけかもしれないが、抵抗する事はできな  
かった。

「ハイネスは行方不明だ」

「え」

ひやりとするような冷たい声音でユーイは告げる。

「奴には今回の事件の首謀者シユターク教派の一員であるという容  
疑がかかっている。現在、容疑者として捜索中だ」

「……どうして」

容疑者、首謀者。耳慣れない言葉が並ぶ。ただニュアンスから、

ハインスが何かを疑われていること、それで追われていることは理解できた。シユターク教派、それは七海の話と一致する。確か、異世界人を神の遣いとしている宗教のことだ。

（ハインスさんが、その一員？）

何故そんな事になっているのだろうか。

「ハインスさんは、違います。私を助けてくれました」

「それはお前が異世界人だからだ」

きっぱりと、ユーイは断言した。

「シユターク教派は異世界人を重要視している。中でも、特にお前はシユターク教派の客人として招かれた『特別』だ。助けるのは、当然だな」

ユーイは皮肉げに口の端を吊り上げる。彼は苛立っているようだった。元々あまり良い感情を抱かれてはいない上、怒らせるような事ばかりしている自覚がある。だから、その態度は当然といえるかもしれないが。

「ハインスの事は忘れる。言っておくが、お前に、他人の心配をする余裕なんて無い。次から次へと厄介な事ばかり持ち込みやがって少しは自分の立場ってものを……」

「ユーイ、女性をそうやって脅かすのはどうかと思うが」

咎めるような声音がユーイの背後から聞こえた。途端にユーイの顔が盛大に顰められる。

「ドアから入れって言うてるだろうが！」

「彼女の目が覚めたらすぐに報せてくれる筈ではなかったか？」

振り返って怒鳴るユーイに、その人物は悠々とした態度を崩さない。かつ、と靴音を響かせて、その人物はユーイの肩越しに顔を覗かせた。知らない顔だ。

背が高く、細身。銅色の髪と緑に金を混ぜたような瞳の色が印象的な、温和そうな青年だ。親しみやすそうな笑顔を浮かべ菊乃を見下ろしている。

「すまないな。眠っている女性の部屋に入るのは、聊か礼儀に掛け



る行いではあるが許して欲しい。私はユリウスという。出会えた幸運に感謝を。キクノ・サカマキ」

丁寧な挨拶に戸惑う。起きて答えるべきだろうが、ユーイの手は未だ菊乃の肩を押さえたままだ。

「あの、はい、キクノです。よろしくお願いします」

「ああこちらこそ、よろしく」

微笑むと目じりに皺が浮かび、一層人懐っこい印象になった。ぎこちなく微笑み返しながら、ユリウスとユーイを見比べる。

何者だろうか。

あのユーイが、不満そうな顔をしながらも口を閉ざしていることに、菊乃は驚いていた。

「今回はこちらの力不足で恐ろしい思いをさせてしまい、すまなかつた」

「……いいえ、大丈夫です。あの」

「どうした、気になることがあるなら何でも言ってくれ」

励ますような笑顔に後押しされて、菊乃は思い切って口を開いた。

「ハインスさんは、本当に……」

その名前を出した途端、ユリウスの笑顔が曇る。菊乃の心にも暗澹としたものが漂ってきた。ハインスに何か良くない事が起こっているのは、確かなようだ。

「彼の事は残念でならない。優秀な男だと聞いていたが、まさかシユターク教派の一員だったとは」

「シユターク教派とは、悪いもの、ですか？」

「単に主義主張が違うというだけならば、問題は無い。だが、彼らは許されない行動を起こす。例えば、君を攫い視力を奪い監禁したのも彼らだ」

菊乃にはとても信じられなかった。

シユターク教派の事は分からない。おそらく、菊乃を閉じ込め世話をしていたのが彼らである事は間違いないのだろう。だが、ハイ

ネスがそれに荷担していたとは、どうしても思えないのだ。  
信じられない。

信じたくない。

ハインスは、異世界人を嫌っていた。憎んでいるようにさえ見えた。命令があれば、菊乃を殺すと言って、その癖2度も助けてくれた。その理由が異世界人を神の遣いだと思っっているから？……そうだとしたら、哀しい。それ以上にやはり信じられなかった。

記憶を辿って、かわした短い言葉を思い出す。

ハインスは菊乃の目の事を知らなかった。それでは根拠にならないだろうか。「礼は必要ない。俺は……」その言葉の続きは何だったのだろうか。

シユターク教派だ、そう続いてもおかしくはない。考えれば考えるほど、分からなくなってくる。一体、何を信じたら良いのか。

硬い表情で考え込む菊乃に対して、ユリウスは同情的な目を向けた。

「随分怖い思いをしたようだな。今回の事は私たちも大いに反省し、二度とこのようなことが起こらないように色々とな対策を立てているところだ。その一環として」

ユリウスは再び人懐っこい笑みを見せた。

「君に護衛をつけることとなった。彼ならば、君も安心できる筈だ」

「おい」

横からユーイが初めて口を挟んだ。

「まだ決定事項じゃないだろう」

「いや。先程手続きを済ませた。もう決定事項だ」

「お前……」

あのユーイが呆れている。穏やかそうに見えて、かなり癖のある人物なのかもしれない。

それにしても。

ユーイの渋るような態度が気にかかる。護衛ってまさか。そんな菊乃の視線に気がついたのか、ユーイが半眼になった。

「……安心しろ。俺じゃない」

言いながら、漸く菊乃の肩から手を離れた。

「ハルラック・エジだ」

思いも寄らぬ名前に、菊乃は目を見開いた。

## 菊乃の恩人 2

ハルラック・エジ。

菊乃の知る彼は、黒い獣の姿をしている。2度も菊乃を助けてくれた異世界『人』。恩人であり、自分のせいで迷惑を被っているという負い目がある相手だ。

そんな彼の名前が拳がったことには、心底驚いた。

菊乃の護衛になるという事は、具体的にどういう意味を持つのだろう。保護施設からの自由、それとも新たな重荷となるのだろうか。良い事なのか、悪い事なのか。それは菊乃に判断できるものではない。決められるのは、ハルラックだけ。

考えると、気が重い。

ユーイとユリウスが出て行き1人になった部屋で、菊乃は再び目を閉じた。体がだるく、鈍い頭痛がする。少し熱が出ているようだ。考えることが沢山あるのに、集中することができない。

シュターク教派。

彼らは一体何をしたのだろう。あの時に何が起こっていたのか、結局聞けていない。祭りだと言っていた。直に菊乃を自由にするとあれはそのまま元の場所へ返すとか、そういう意味合いではなかったような気がする。

きつと、もつと怖いこと。

逃げるように言ってくれた七海の言葉が蘇った。

『嘘つきなこの国に、騙されて利用されないように。忠告しとくよ。嘘とは、どういう事だろう。利用されると言っただって、菊乃にそんな価値があるのだろうか。そもそも七海の言葉は正しいのだろうか。確かに菊乃が逃げられたのは彼女のお陰だが、元々はシュターク教派と一緒に行動していた人だ。』

分からない。何を、誰を信じれば良いのか。

(でも、私は……)

小さなノックの音に、菊乃は目を開けた。いつの間にか、眠っていたようだ。ベッドの上で身を起こすと、ドアが開いた。見たことの無い青年が、食事を載せたトレイを片手に立っている。

背が高く、足が長い。精悍な顔立ちは、誰かを思い出させることではない、初めて見るものだ。だが、黒い癖のある髪の間から覗く黄金色の瞳には、見覚えがある。柔らかい蜂蜜のような色合いの瞳を、菊乃は不思議な気持ちで見つめた。

何か、懐かしい。

「……食事を持ってきたんだが」

菊乃は、はつと我に返った。ぶしつけに見入っていた自分に気がつき、気まずい気持ちになる。

「ごめんなさい。ありがとうございます」

「ベッドの上で食べるか？」

「あ、いえ。大丈夫です。起きます」

男は何も言わず、テーブルの上に食事を置いた。

「また後で取りにくる」

そう言っつて、男は部屋を出て行った。そのしなやかな背中を見送っつて、不思議に思う。

(あの人、足音しなかった)

一時目が見えない中で生活していたせいか、以前よりずっと音に敏感になっている。足音を立てずに歩くななんて事は、意識しないで出来ることではないと思う。

忍者とか、スパイ、とか？

ただの施設の職員には見えなかったが、警戒心は起こらなかつた。むしろ、妙な安心感すらあるくらいだ。何故だろうか。全く見覚え

はないのに、知っているような。

(声も、どこかで)

暫く思い出そうと頑張ってみたが、駄目だった。諦めて、食事をすることにする。漂ってくるクリームシチューのような匂いに、食欲が刺激された。

立ち上がると少しふらつくが、問題は無い。柔らかい布で出来た上履きを履き、テーブルについた。用意されていたのは、練った小麦粉と野菜のミルクスープと、赤色の飲み物だ。

ほのかに甘いスープは美味しかったが、半分も食べるとお腹がいっぱいになった。赤色の飲み物は甘酸っぱく、さっぱりとした味わいで、こちらは全部飲むことができた。

食事が終わって暫くすると、先程の青年が片付けに現れた。不必要な事は話さない男に対して、菊乃も自然と無口になる。沈黙を、気まずく感じないのが不思議だ。相変わらず足音は聞こえない。それだって、不自然な事なのに。

片づけをする青年をこっそり見ていたら、不意に視線がぶつかった。お互いに、息を飲む。

僅かに見開かれた、暖かい黄金色。

何だろう、やっぱり……。

頭の隅に引つかかった違和感の正体に、あと少しで手が届きそうなその時、不意に青年が視線を横へ動かした。顔だけをドアに向け、しなやかな動作で菊乃とドアの間に立つ。しゅっと、ドアが開く音がした。が、菊乃の位置からでは彼の背中しか見えない。

「はぁーい、症例38ちゃん元氣ー？って、あらあらー？どーして貴方がここにいるわけー？」

場違いなほど明るい女性の声が響く。『症例38ちゃん』という呼び方、それから高めの色っぽい声にも覚えがある。

それはこつちの台詞だ、とクールに答えている青年の後ろから、菊乃は顔を覗かせた。

女性らしい柔らかな体つきをした、赤い長めのワンピースを着た女性がいる。小さな顔に大きなまる眼鏡をかけた垂れ目……この人は確か。思い出す前に、菊乃に気がついた女性が糸の様に目を細めて笑った。

「ひっさしぶりねー、症例38ちゃんー。覚えてるー？ジャンナよー」

ひらひらと顔の横で手を振られ、菊乃は頷いた。

ハインスに連れられてケラスに行った際に出会った女性だ。

「嬉しいわー、無事で何より……って、ええ！あら！？どういう事ー！？」

目をまん丸に見開いて、ジャンナはいきなり詰め寄ってきた。その形相と勢いに菊乃は首を竦める。近づけないように腕を伸ばした青年に阻まれながらも、ジャンナは菊乃の方へと身を乗り出した。

「何その目の色ー？変化したわけー？いつ、どうして、何でー！？」

「……？目の、色？」

一体何を言っているのか。

「ええー？やだ、まだ気がついてないわけー？この部屋、鏡無いものねー、ちゃんと言っときなさいよー、保護施設の奴らっては何考えてるのよーもう」

ぶつぶつ言いつつ、ジャンナは腰に下がるベルトについた鞆から、平たいものを取り出した。キラキラとした石で飾られた折りたたみ式の鏡だった。

「ほーら、見てよー」

ぐい、と突き出されたそれに、菊乃の姿が映る。

「！」

鏡に映るのは、驚いたように目を見張る自分の姿。見慣れた顔の

中で、決定的に違ってしまっているものがあつた。大きく見開かれた目の色だ。黒に近い焦げ茶だった目の色が、今は極淡い水色になっている。

どうして。

一時、目が見えなかつたことと関係しているのだろうか。どちらにせよ、こんな風に目の色が変わってしまうなんて普通では無い。不安だ。また、目が見えなくなったりしたら。

「何が起こつたのか、オネエさんに話してくれないー？ そうしたら何か分かるかもしれないわよー」

鞆に手鏡をしまいながら、ジャンナは言う。

「ハイネちゃんがシユターク教派のスパイだつたつて事で、ケラスの方が締め出し食らつちやつてるのよー、信じられない全くと」

ハイネちゃんとは、ハイネス・ユーゴのことだ。ぶつぶつと文句らしき言葉を吐き出しながら、ジャンナは口を尖らせている。

「あ、あの、ハイネスさん、どうなつたか分かります？」

「んー？ どうつて、シユターク教派の起こした教会の事件の重要参考人として指名手配中でー」

小首を傾け、菊乃をじつと見つめる。その赤茶の瞳が急に輝いた、ように見えた。

「ハイネちゃんの詳しい情報、知りたーい？」

……何だか、前にもこんな事があつたような。

「じゃあー、条件としてーちよつと検査と実験にー」

「……………」

黙つてジャンナを抑えていた男が無言で彼女を睨みつけた。

「はー、やっぱり許されなみたいねー、まー、良いわー。ここは平和に情報交換つていう事でー、どう？」

「良いです」

「決まりねー、じゃあ、これ」



そう言って、ジャンナは菊乃に手を伸ばした。躊躇いつつも手を伸ばすと、小さな丸い輪つかを手渡された。小指にしか嵌らなさそうな小さな指輪だ。銀色で、やや厚め。3ミリほどの輪に赤く光る四角い石がついている。

「見つからないように持っててねー、通信機だからー。石のところを押すだけでいいわよー、後、ここは監視されてるから注意してねー。今はちよつと細工してあるけど、ずっとは無理だし。ま、音までは拾ってないから、シート被って寝たフリとかで誤魔化してー。症例38ちゃんの都合の良い時間でいいわー、大抵起きてるから」  
それじゃあねー、とジャンナは手を振ってドアへ向った。

「そろそろマズイから、もう行くわー。勿論、この事は内緒にしてくれるわよねー?」

最後の言葉は、黒髪の男へ。

にんまりとした笑みで、ジャンナは言った。

「ハルラック・エジ」

しゅ、とドアが閉まり、ジャンナの姿は見えなくなった。

### 菊乃の恩人 3

部屋に沈黙が落ちていた。

(えつと……?)

癖のある黒髪の青年は、ドアの方を向いたまま動こうとしない。

菊乃は若干混乱している。最後のジャンナの言葉、あれはどういう意味なのだ。

『ハルラック・エジ』って。

あれは呼びかけだったと思う。そこにいる人の名前を呼んだ。呼びかけられたのは、目の前にいる彼だ。

(え、でも、ハルラックさんは…)

他にいる。菊乃の知っているハルラック・エジは、黒い獣の姿をした異世界人だ。同姓同名?だとしたら、菊乃の護衛につくというハルラック・エジは、この人で。

でもそれだと話が繋がらない。

ユリウスという人は、菊乃の知り合いを護衛に回すと、そんな風な事を話していた筈だ。

(人、間違い?)

そう思う一方で、否定する心がある。青年が誰に似ているのか分かったからだ。彼の瞳や声は、あの黒い獣に似ている。菊乃の知るハルラック・エジに。

そんな、馬鹿な。

「あ、あの」

途方に暮れた気持ちで呼びかけると、青年の広い肩がぴくりと動いた。ややして、ゆっくりと振り返る。菊乃を見下ろす柔らかい蜂蜜のような色の瞳は、やはり同じだ。

「ハルラック、さん?」

静かに息を詰める青年の後ろで、ぱたりと下がる尻尾が見えるような気がした。有り得ないと思うのに、心のどこかで確信している。小さく、青年は溜息を吐いた。

「……ずっと、謝らなければと思っていた」

深く響くような低い声音も、確かにあの黒い獣と同じものだ。黄金色の瞳に、憂いが見えた。

「俺が手を出したせいで、厄介な事になったから」

「……あの、ハルラックさん、なんですか？」

「……………ハルラック・エジ。一応それが俺の名前」

「海で、溺れた時に助けてくれた…？それから、町で攫われた時にも来てくれた、あの黒い……………」

獣、という言い方は失礼な気がした。言葉が見つからず困る菊乃に、ハルラックは目を細めた。

「あれは俺のもう1つの姿。俺のいた世界ではありふれた人種の1つなんだが、ここでは違う。きっと、君の世界にもいなかっただろう。理解はし難いと思う」

素直に菊乃は頷いた。

動物に変身する人間なんて、漫画や小説にしか出てこない。何て非現実的なんだろう。だがそもそも、異世界にきていること事態が普通ではない。

「この場で変じて見せれば分かりやすいと思うが、規定に触れるんだ。他に証明する手段は……………悪いが思いつかない」

「でも、信じます。あの、ずっと知っている人のような気がして。分からなくて」

しかし一度受け入れてしまうと、そうとしか思えなくなっていた。

「助けてくれて、ありがとうございます」

いつか機会があったら言おうと思っていた言葉が、するりと口を

出た。言いたい事はまだまだある。

「海の時も、攫われた時も、ちゃんとお礼をできなくて、ごめんなさい。それから、迷惑をかけてごめんなさい」

「礼も謝罪も言わなくていい。そのせいで、君を厄介な立場に置く事になった」

その言葉で、ハルラックが何を気にしているのか分かった。異世界人に助けられた事、それが菊乃に掛けられた疑いの切欠の1つだ。菊乃の方も自分を助けたせいで、ハルラックが迷惑を被っているのではないか、そんな風にずっと不安で。

まさか同じように、ハルラックも気にしているとは思わなかった。だって。

「ハルラックさんがいなかったら、私は、生きていません」

最初の海で、死んでいた筈だ。何も分らないまま。

「辛い事、怖いこと、たくさんあります。でも、それだけじゃないです。助けてくれる人もいました。怖いけど、怒ってくれた人も。

……私は、生きていて良かったと思います」

菊乃はまっすぐにハルラックを見つめ、深々と頭を下げた。自分がどんなに感謝しているか、少しでも伝わると良いと思いつながら。

「ありがとうございます」

「ああ……うん」

驚いたような顔で目を瞬かせた後、ハルラックはゆっくりと口元を綻ばせた。笑顔というにはごく薄い笑みだったが、柔らかく優しい雰囲気になる。

「俺も君を助けられて良かった。ありがとう、キクノ」

助けた方がお礼をいうなんてちょっと変だが。菊乃は笑った。ずっと胸につつかえていたものが漸く取り除かれて、久しぶりにすっきりした気持ちになっていた。

しかし、まだ気になる事はある。

「でも、どうして急に、ハルラックさんが護衛なんですか？」

彼は保護施設で監視処分になっていた筈だ。その上、どんなに頼んでも、会わせてはもらえなかったのに。

菊乃の疑問に、ハルラックも再び表情を硬くした。

顔のつくりが整っているだけに、笑みを消すだけで迫力のある顔つきになる。

「俺にも分らない。だが、多分原因は君の方にあると思う」

「……私、に？」

菊乃は眉をひそめた。心当たりは無い、というか、分からない事が多すぎて判断ができない。目の色が変わってしまったことと、何か関係があるのだろうか。

何にせよ、もしそうなら、またハルラックの事を巻き込んでしまっていることになる。後ろめたい気持ちになった。

「連中の考えは分からないが。……心配しなくていい。君の事は俺が守る」

ハルラックは真顔で、柔らかな言葉を口にした。

君の事は守る、そんな物語のヒーローがヒロインに言うような台詞を、自分が聞く事になるとは。

そこに特別な意味や、甘い感情等含まれていないと分かっているも、反応に困る言葉だ。

第一、只でさえ助けられ、迷惑をかけているのに、この上頼るわけにはいかない。

「いえ、あの、私は大丈夫です。ハルラックさんが怪我とか……、そっちの方が困ります」

「なら怪我はしないように注意する」

「そういう事ではない。」

「キクノ」

不意に、ハルラックが動いた。4歩の距離を音も無く縮めて、菊乃の肩に手を置く。反応する暇なく引寄せられて、気がつけば彼の腕の中にいた。

「！」

堅く、熱い人の体温。間近で響く他人の心臓の音。

驚愕して身を離そうとするが、背中に回された腕はびくともしない。

（な、なに…!?!）

混乱と羞恥に、赤くなったり青くなったりしている菊乃の耳元に、そつとハルラックは口を寄せた。耳に熱い吐息を感じて、菊乃は息をのんだ。

（落ち着け。この部屋は監視されているから）

え……？

（反応するな、このまま。連中の考えは分からないが、1つ俺にも分かる事がある）

心臓の音に負けそうなほど微かな声音で告げた後、はっきりと言う。

「大丈夫だ、何も心配するな」

（連中は君と俺を接近させようとしている。理由は、分からないが）はつきりした声と、微かな声を交えてハルラックは話す。重要なのは勿論小声の方だ。

「俺に君を守らせて欲しい」

（探る時間が欲しい。だから暫くは我慢してくれ）

そういう事か。

ハルラックと菊乃を近づける理由を知るために、敢えてこうやって親しくなっている様子を演出しているわけで、この行為はただのカモフラージュ、深い意味はないのだから意識する必要は全く……

…、何とか冷静に考えを纏めようとするが、無理だった。降参する。「す、すみません、離してください、もう無理です」

恥ずかしさの余り死ねそうだ。

ゆつくりと、その腕から菊乃を解放したハルラックは、顔を真っ赤にした彼女を見て、気まずそうな顔をした。

「……すまない」

「い、いいえ、私……すみません」  
「恥ずかしい。」

ただの演技なのに、過剰に意識して。だが、無理だ。全く異性に免疫が無い菊乃に、先程のような密着状態はハードルが高すぎる。

未だ静まらない心臓を押さえて、菊乃は深く息を吐き出した。

「まともに顔を上げられない。」

「……あの、私も頑張ります」

「……ああ」

取りあえず気持ちを落ち着ける為に、深呼吸を繰り返した。

## 菊乃の恩人 4

最近本当にろくな目にあっていないというか、この異世界に来た日よりろくでもない目にはかりあってきたので、すっかり悲觀的になっっている自覚はある。

「だけどそれも仕方が無い。」

「ちょっとでも良いことがあったり、前向きな気持ちになると、倍返して悪いことが起こっている。正直、もう何を信じてどうすれば良いのか分からないくらいだ。」

「だから、ハルラックと会えた事や、彼が菊乃の護衛についた事は嬉しいが、素直に喜べる事でもなかった。菊乃を守れなかった事をただ悔やみ、護衛をつけるのだとしても、それをわざわざハルラックにする必要は無い。きつと、そこには何か意味があるのだ。」

「ハルラックが食器を持って部屋を出て行った後、暫くして再びユイが姿を見せた。一緒にやってきたのは、白い顔に無表情を貼り付けている女性、リザレット・クラウラだった。」

「施設から攫われた時の様子や、その後の事の調書をとりにきたのだ。」

「まだ目覚めたばかりで本調子で無い菊乃は、ベッドの上でクツションを背中に当てる身を起こしていた。丁度目線があう位置に、ユイ達は持ち込んだ木の椅子を置いて座った。」

「ところどころ、記憶がはっきりしないところもある上、目が見えなかった為に伝えられる情報は少ない。特に、菊乃を攫ったと思われるチフセと名乗った男については、しつこく聞かれた。」

「で、そいつは男で間違いないんだな？」

「男だと思っていたが、そう聞かれると。」

「……多分。はっきりとは、分かりません」

「と答えるしかなかった。」



あからさまに、役立たずめと言いたげな顔で、ユーイは溜息をつく。

「それくらい断言できないのか」

「…声は、男の人に聞こえました。でも、声変えられるかもしれないです。それに、姿は分からないから」

「ああ、そういう装置はありますね。確か、魔法にも」

「確かに、そういう可能性もあるが、それ言い出したらキリがないぞ。面倒だから男って事にしておけ」

ユーイの言葉を受けて、リザレットがなにやら書き付ける。調書のようなものだろうか。何かいい加減なものができそうな気がしてならない。

「大体、お前なんで顔くらい覚えて無いんだ」

「……すみません」

暗かったし、突然だったし。何より、怪我をしたショックからか、記憶が曖昧だ。

「チフセ、ねえ」

ユーイは目を伏せ、思案するように顎の下に手を置いた。

「今まで聞いた事の無い声だったんだな？」

「はい。えっと、声を変えてたら、分かりません」

「……そういうのは忘れておけ。で、監禁されていた時も、その声は聞いていない？」

「はい」

「珍しく自信あるようだな」

記憶は、時が経つにつれ曖昧になる。すこしづつ形を変えて、間違った思い込みをする時だってあると思う。

だが、あの目以外の情報に頼るしかなかった状況で、もしもチフセの声を聞いていたら気がつくと思うのだ。

「じゃあ、もしも。この後またチフセの声を聞く機会があったら、分かるな？」

真つ直ぐ、強い視線を向けられて、菊乃は怯んだ。分かる、と言いたいが。

「分かるな？」

再度、促されて菊乃は自信なく答える。

「多分」

「何で多分なんだ。こういう時は自信持って分かると言え。……リザレット、調書にはチフセの声を聞き分けられると自信を持って答えたって書いておけ」

「了解致しました」

偽造だ。

後で何か問題になったりしないだろうか。心配になる菊乃に対して、ユーイは馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

「こういうのには、はったりも必要なんだ」

何のことだかさっぱり分からない。ユーイと話していると、自分が物凄く馬鹿なのではないかと思えてくる。

「どういう事ですか？」

聞けば、ユーイは面倒そうに眉を吊り上げた。

「リザレット」

話を投げられたリザレットは、小さく息をつくと言を聞いた。

「イスルド教会はシュターク教派に乗っ取られていました。そして今回の祭事で人を集め、忌々しい事件を起こす。死亡者197人、負傷者は1255人、うち重傷者が471人。遺体の中にはシュターク教派と見られる者も数名含まれていましたが、恐らく全員では無いと見られている」

日本語での説明は、ありがたかった。まるでニュースキャスターのようにすらすと、歯切れ良い。

「そこにいたシュターク教派の多くは、事件が起こる前に逃げているのではないかと」

真つ先に浮かんだのは、七海のことだった。  
彼女はシユターク教派では無いと言っていたが、行動を共にし、何らかの事件が起こる事を予想していた。だからこそ、彼女がいた事は未だ話せずにいる。

「シユターク教派の一派はこの町に潜み、またこのような事件を起こす可能性もある。私達はそれを阻止しなければならぬ」

「そういう事だ、キクノ」

冷やかな緑の瞳に見つめられ、背筋が寒くなった。

見透かされている。

「ハインスのように面が割れている奴なら兎も角、それ以外の奴らを見つける事は難しい。お前の情報が必要なんだよ。何を隠しているか知らないが、さっさと話せ」

菊乃は小さく息を飲んだ。

この国を信じるな、と七海は言った。

彼女は菊乃を助けてくれた、恩人だ。

一方で、シユターク教派が何をするか知っていながら、その行動を見逃した人でもある。

(……ううん、違う。ナナミさんは……)

止めようとしたと、そう言っていた筈だ。でも、できなかったって。

沢山の人が死んだ。人々の悲鳴が、今も菊乃の耳から離れない。

また、あんな事が起こるのだろうか。

確かに七海なら、シユターク教派のしようとしている事を知っているかもしれない。だが、彼女はこういうわけか逃げなければならぬ事情があるようだった。表に出られない事情があるのだ。逃げたのは、きっとシユターク教派からだけではなくて。

(この、国から)

「何で黙ってる」

何を信じて良いのか、分からないから。  
何が正しくて、何が間違っているのか。

\*\*\*

画面に映し出された四角い部屋のベッドの上で、少女は眠っていた。白い顔を、時折苦しそうに歪め、その眠りは安らかなものとはいえないようだ。

薄暗い室内、全部で12の机が4つづつ、3列並ぶ。机の上は膨大な量の紙の束と、映像等の記録を収めた結晶と呼ばれる小指の爪ほどの四角い金属で埋め尽くされている。黙々と、情報の整理に追われる職員はたったの3名。

人手不足は、先の事件の為だった。

敵対者と接触した人間は、その後何らかの異常をきたす場合がある。その検査のために、一定期間隔離し経過を見る必要があった。

今回の事件に関わった人間の数はとにかく多い。結果、職員の仕事も恐ろしいほど増えているのだ。

更にもう1つ、厳重な監視下にある筈の保護施設から、異世界人が攫われたことも問題だった。後に、内部の者の手引きがあった事が判明している。その職員は事件の夜に自殺したが、その影響は大きかった。

更にはケラスの兵士、ハイネス・ユーゴだ。

両組織は、徹底的な職員の身元、思想調査等を再び行う事を余儀なくされた。結果、現在殆どの職員は、深部と呼ばれるこの場所への立ち入りを禁止されている。

(面倒なことばかり起きやがって)

と、つい愚痴りたくなるというものだ。

面倒事の原因を、画面の中に映される少女、菊乃に全て押し付けるのは間違っているかもしれない。だが、ユーイを煩わせることの多くは、彼女を中心に発生している。

繰返し、思い出す。

教会のドアの向こうには、無残な光景が広がっていた。転がる死体、あちこちで上がる苦痛の声。動ける人間が、雪崩のように外へと逃げ出して来たせいで、すぐに中に入る事はできなかった。

集まった数百匹のヴィーダ達が、合間を縫って中へと入る。ユーイはその後を追った。

焼け焦げた壁に、崩れた柱。溜まった水は黒く淀んだ色をしていた。倒れた柱が作る影の中に、白いものが浮かんでいる。ヴィーダの群れ。その中心に、菊乃がいた。

膝を付き、頭を垂れるような格好で、ぴくりとも動かない。

「キクノ！」

そう叫んだのは、多分ウィガーだったはず。返事はなかった。様子がおかしい。慌てて駆け寄れば、見開かれた瞳の色に自然と気がつく。黒かった筈の瞳が、薄く透き通るような水色に変わっていた。力を失った人形のように、ゆっくりと崩れ落ちる細い体。

菊乃は息をしていなかった。

何が起こったのか、菊乃は覚えていない。

だが、目撃者がいた。

腕や手が伸び、体を歪め人を無差別に襲っていった女の化物。それは、敵対者を思わせる姿をしていた。女ならば、各務吹雪ではない。盗まれたウィルドの炎のことが真つ先に頭を過ぎった。だが、敵対者として変化するには、あまりに時間が短過ぎる。

調べようにも、肝心の遺体が無い。

女の化物は、一欠けらの骨も残さず分解されたという。

水が化物を包んだ。

化物の体から、凄い泡が沢山出て。

見る見る、溶けるみたいに、体が小さくなって。

消えた。

目撃者は18人。

消えた化物の前には、菊乃がいた。

## 伊吹、調査を開始する 1

事件の後、3日間、伊吹は保護施設で隔離されていた。

伊吹だけではない。あの事件に巻き込まれた者は、例外なく全員が保護施設へ送られた。ただし、生きている者に限る。検査、治療、聞き取り調査ももろの為である。相当の数だった為、ケラス対策本部側の施設も使用されたと聞いた。

詳しい事は分からない。

直接教会に入らなかった伊吹とフィオーネは、3日で戻ってこられたが、志真やウィガー達は未だに保護施設の中だ。まだ暫くは戻れ無いらしい。

隔離という言葉どおり、面会もできない状態だ。その為か、現在施設は民間人の立ち入りを一切禁じてしまっている。異世界人である伊吹にしても、そのくくりは『民間人』だ。職場への立ち入りを禁止されるとか、何だそれ。

(これじゃあ、研究の方も滞る……最悪だ)

おまけに事件のあらましも、殆ど説明されなのままだった。一体、何があったのか。巻き込まれた身としては、説明してもらいたいものだが。

「伊吹さん」

声を掛けられ顔を上げる。施設の裏口から慌てた様子で出て来るのはフィオーネだ。たったの3日ぶり、だが。心なしか痩せたように見えた。

掛ける言葉に戸惑っていると、フィオーネが小さく笑んだ。その笑顔も、やはり心なしか力が無い。

「お待たせしました。行きましょう」

出所の日程が同じだという事で、一緒に帰るように言われている

のだ。伊吹は頷き、視線を下にやる。足元では、こてつがトカゲっぽい小さな生物にじゃれついていた。

遊んでいるだけなら良いが、その内本気で狩モードになられたら困る。いつか聞いた、猫が主人に獲物の内臓を見せに来るといいう話を思い出した。こてつは猫ではないが。そんな行動をされたら……売ってやる。

「こてつ、行くぞ」

声を掛けると首を持ち上げて伊吹を見てから、すぐに足からよじ登ってくる。頭にぺたりと張り付いたところで、伊吹は歩き出した。「イググローブス乗るつもりですけど、良いですか？」

「あ、はい」

徒歩では2時間もかかってしまう。最初から決めていたが、一応フィオーネの了承を得てからイググローブスの乗り場へと向った。何せフィオーネはあのウィガアの妹、あの儉約家の血を引いているのだ。

イググローブスは幸い空いていた。

席が空いていたので、2人並んで座ることになる。腕が触れ合う近さが落ち着かないが、なるべく意識しないように注意した。

視界の隅にちらちらと、鮮やかなブルーが映りこむ。フィオーネの着る服の色だ。裾が長めのシャツみたいな、ボタン付きのワンピース。白色の半端な丈のズボンに、焦げ茶のブーツ。あの事件があった日と同じ格好だ。嫌でも不安を掻き立てられる。

着替えを持つ暇も無く施設に入っただから、仕方が無いが。伊吹だって、あの日と同じ格好だ。繰り返しているようで、いい気はしない。

ただ少し違うのは、フィオーネが長い髪を下ろしているところだろうか。



「イブキさん」

硬い声で名前を呼ばれ、伊吹はぎくりとした。見すぎだったか。  
「今回は本当にすみませんでした」

「…は？」

てつきり、「じろじろ見るのやめてもらえます？」等、厳しい言葉が来ると身構えていた伊吹は、予想外の謝罪に戸惑った。

「私があんなバイトに誘ったから、イブキさんまで酷い目に」

「……いや、でもフィオーネさんも、まさかあんな事件が起こるとは予測できなかったでしょう。仕方ないですよ」

正直に言えば。

誘われなければ、と思ったりもした。だが、流石にフィオーネに怒るのは筋違いだと分かっている。彼女だって、巻き込まれた被害者だ。

「でも……、イブキさん、怪我までして。手、大丈夫ですか？」

フィオーネの視線は、伊吹の左手に向けられた。

怪我をした左手は、今は白いゴムのような手袋に包まれている。

ゆとりのある手袋の中には、よく分からないが治癒を促進するといふゼリー状の薬が入っていた。後2日は外すなと言われている為状態を見る事はできないが、少なくとも痛みは無い。

「大丈夫です。大した怪我でもなかったようですし」

「結構、酷く見えましたが……」

「見た目だけです。気にしないで下さい」

本当にまずい火傷の場合は、痛みを感じる神経まで焼けてしまい、痛みも感じない。そう聞いた覚えがある。

気づかったつもりはなかったが、フィオーネは申し訳なさそうな顔で笑った。

「ありがとうございます。イブキさん……優しいですね」

耳の後ろがぞわつとした。

優しいとか、言われたことは無い。それ以上に、自分は決して優しい人間なんかじゃない。嫌っていうほど知っている。

あの時だつてずっと逃げたいって思っていた。自分のせいじゃない、何で自分がこんな目にあうんだとか、そんな事ばかりで。肉親を失うかも知れず、取り乱したフィオーネに苛立ちさえ覚えていたのだ。

無理だつて言う事を、何とかして分からせたかった。

(少なくとも、礼を言われるような行動じゃない)

しかし、咄嗟のことだったとはいえ、無茶な事をした。下手をしたら、もっと酷い火傷を負っていたかもしれない。

(自分らしくない)

思い出すと、自分を埋めたいような気持ちになってきて困る。

(忘れよう)

必死な自分なんて、冷静に思い出すものではない。

会話が途切れたのを切欠に、伊吹は気になっている事について、考えを巡らせた。

伊吹は繊細な人間である、そう自負している。

一瞬見ただけの教会の中での光景が、未だ脳裏に焼きついていて気分が悪い。ほんの一瞬、ほんの一部。ドアの前で折り重なり、ぴくりとも動かない人々。(多分あれは死んでいた) そんな彼らを踏みつけて逃げ出す人々。(皆それぞれ酷い有様だった)

とても、それ以上中を見る気にはなれなかった。

勿論、例え中を見る気になっていたとしても、許されなかっただろう。伊吹はただの民間人だ。事件現場への立ち入りは許されない。気を揉むフィオーネと共に、大人しく外で待っていた。次々に運び出される怪我人。中には直視できないほどの怪我を負っている者もいた。やがて出てきた志真とアルジャラーは、殆ど無傷で元気そ

うだった。

何でも怪我人の救出を助けていたとか。

彼女のそういう悪運の強さと、行動力と気力には、正直敵わないと思っっている。抱きついて泣き出したフィオーネの背中を叩きながら、志真は力無く、それでも何とか笑おうとしていた。

「大丈夫、ウイガーも無事。人、探してる。泣かないで」

煤汚れた顔。笑おうとして失敗してひきつる頬。正直変な顔だったが、何なく男気溢れるもので。

思うに、彼女は生まれてくる性別を間違えたのではないだろうか。

暫くして、慌しく運び出される少女がいた。黒髪で色白の、華奢な少女はジバに乗せられ、多分病院に運ばれたのだろう。一緒に、金髪の少年ユーイが乗っていた。

「あれ、さっきの子だ」

少女の顔を見た志真が心配そうに言う。

「大丈夫かな……。何かウイガーの知り合いみたいんだけど」

「ウイガーの？」

「うん。確か……。きく……。なんとか……。キクノだったかな。そう呼んでたよ」

キクノ？

菊乃、坂巻菊乃か？

名前だけは聞いている。伊吹達と共にこの世界に落ちてきた不幸な日本人の、最後の1人だ。本人、なのか？

(何であんなところに)

伊吹は眉間に皺を寄せた。いくらなんでも、おかしくないか。この酷い事件が起こった場所に、偶然3人も日本人が居合わせた事になる。

(有り得ない)

偶然のわけがない。何だか非常に嫌な気分だった。

あの時に、伊吹は確かに聞いた。「ヴィーダが集まっている」「  
ってことは、中にいるのは敵対者か」そう、呟かれた言葉を。

敵対者、よりにもよって敵対者だ。

(どういふ事なんだ)

救出作業は順調に行われた。中に敵対者がいたなら、もっと酷い  
事になっていた筈。駆けつけたケラスの隊員が、戦闘した様子も無  
い。

ただの勘違いで、敵対者はいなかったのか。

そんな筈は無い。

我先に逃げ出してきた人々が口々に言っていたのだ。

中に、女の化物がいる、と。

それが、敵対者だったとしたら、そいつは何処へ行ったのだろうか。  
答えが出ないまま、イグロースは駅についた。

## 伊吹、調査を開始する 2

新聞、というものはこの世界にもある。

紙のものと、専用の受信機のようなものに、登録した最新の情報がリアルタイムで送られてくるものの2つ。後者は値段の関係で手に入れていないため、伊吹は普通の紙の新聞を駅で手に入れた。

教会の事件については、1面トップで大きく出ているようだが、詳しく読むには辞書が必要だ。言葉に比べて、文字の習得は少しばかり遅れている。

だがざっと見たところ、どこも確かな状況は掴めていないような感じた。調査中、確かではない、予想では、等。曖昧な言葉が目についた。

内容にはあまり期待できない。

宿屋では、リアラが2人を待っていた。相変わらず子どもを生んだとは信じがたい少女のような面差しに、ふわふわした笑顔で。

「お帰りなさい。良かった、2人ととも元気そうで安心したわ。待ってたのよお」

「ただいま母さん。……何かあったの？」

伊吹には全く分からなかったリアラの微妙な変化を、フィオーネは敏感に察したようだ。

「そうなの、大変なのよ、ルーがねえ、うちを辞めるって」

ルーとは、ルーミケラウスのことだ。

長期休暇を取っていた筈だが、戻って来たのか。リアラは頼に手を当てて、困ったわあどと呟いている。その様子は、全く困っているように見えない。

「ルーさんが？」

「そうなの。あの子も頑固よねえ」

「理由は聞いたの？」

「ええ」

リアラは1つ頷いた。大きな青い目で、フィオーネと伊吹を交互に見やって、苦笑する。

「こんなところですから話じゃないから、2人とも中に入って。ごめんなさいねえ、疲れているでしょうに、立ち話させちゃって」

ほらほら、と追い立てられるようにして、伊吹とフィオーネは食堂に入った。リアラは外見の割りに押しが強い。その辺りはいかにも母親という感じだ。

一時期営業を再開していた食堂は、再び閉めているらしい。分厚いカーテンで薄暗い食堂の中、カウンターに座り俯くルーミケラウスの姿があった。

いつもの彼女からは考えられないほど、憔悴した様子だ。すれ違つたたび愛想よく、時折人をからかつては楽しんでいた明るい大人の女性。それが伊吹の知るルーミケラウスだ。

揃えた膝の上で、硬く両手を握り締め目を伏せた様子は、気軽に声を掛けられない雰囲気があった。

少なくとも伊吹には無理だ。

ほつれた長くくねる黒髪が、むき出しの肩や首筋、それから盛り上がった胸の辺りに落ちていた。それが妙になまめかしく感じて、目のやり場に困る。大体、何であんなに露出が高い服を着ているんだ。

まあ、いつものことだが。

黒色のミニ、ワンピースで良いんだろうか。服の事は詳しく無い。胸のところを布を交差させて、首で結んでいるみたいな形状だ。ウエストの上をベルトで縛っているから、余計に胸が強調されているような。

いっさん！

ここにいない少女に白い目で見られるような気がして、伊吹はルーミケラウスから目をそらした。

「どうしたの、ルーさん」

心配げにフィオーネが声を掛ける。

「ごめんなさい。……私、貴方たちに謝らないと」

硬く押し殺すようなルーミケラウスの声。謝るって、一体何を。

分からないが、ただごとではない。

「それがねえ、ルーの弟のハインス・ユーゴさんが、シユターク教派の一員だったかもしれないんですって」

その雰囲気をぶち壊すリアラも、只者ではない……って。は？と伊吹は顔を上げた。

何か凄い爆弾発言を聞いたような。

「……かも、というか。もう。……私も少し、思い当たる事はあつて。でも、まさかあの子が……」

「そんな、ルーの弟さんが……？嘘」

「信じられないわよねえ。教会の事件の時に見た人がいるんですけど。それなのに、いなくなっちゃって、行方不明らしいの。心配ねえ」

ハインス・ユーゴ。

知らない人間である為、何とも反応しようがない。それにしても、弟か。憔悴しているルーミケラウスには同情する。兄弟のしたことなど、自分にはどうしようもない。好きで血が繋がっているわけでもない。それでも、世間は血の繋がりに注目するのだ。

あいつの弟がだの、あいつはあれの弟だから、だの。

(……嫌い)

思い出して嫌な気持ちになった。

「とにかく、この先私がいたらお店の迷惑になると思う。だから」

「そんな、ルーさんが悪いわけじゃないのに」

「だけどね……」

ルーミケラウスは、寂しげに笑った。

「あの子は私の弟なの。たった一人の家族だから。関係ないって訳にはいかないのよ」

たった一人の。

何でそんな風にいえるのか、伊吹には分からない。

ルーミケラウスが辞めるか否かは、とりあえず保留にして、時間を置こうという事になった。リアラもフィオーネも、彼女を辞めさせる気は無いようだ。実際、ハインス・ユーゴのことが知られれば、この宿屋の立場は一層悪くなるだろう。

異世界人に加え、シユターク教派の人間とは。体裁が悪すぎる。弟がそうなんだから、姉もきつと。そんな風に噂されるのは目に見えていた。

伊吹だったら、申し訳ないが辞めてもらう。

兄弟のことで責められるのは本意だろうと分かっただけでも、世間のことを考えたら辞めてもらった方がリスクが無い。人が良いのだとは思う。だが、商売には向いていない。

それにしても、こんな身近にシユターク教派の信者がいるとは。

マイナーな宗教だと認識していたが、意外に多いのだろうか。禁止されている為、表立って声を上げる事が無いだけで。

人は禁止されると余計にのめりこんだりするものだ。ぞっとする話だが。

伊吹はようやく戻った部屋で、買い込んだ新聞を広げた。買ったのは3紙。ざっと読み比べてみるが、内容は大体似たようなものだ。

イスルド教会で起きた事件のあらまし。閉じ込められ、火が付け



られたことや、建物が崩れ落ちたこと。化物、敵対者に関する記述は無い。その情報は伏せられているようだ。

犯人はシユターク教派の者と見られている。

最後に情報提供を呼びかける文面。

後は建物の構造や、シユターク教派の心理分析などで適当にお茶を濁している感じだ。

「シユターク教派……」

異世界の宗教と神に感化され、異世界人を神の遣いとして特別視している。彼らにとって、異世界人は讃えるべき存在だと聞いている。彼らにとつて、異世界人は讃えるべき存在だと聞いている。が。

伊吹は襲われた。

教会にはアルジャラーや志真だっていた。

彼らの企みに気がつきかけていた伊吹は兎も角、彼女達は。守るべき異世界人ではないのか。分からない。

ピトリツア。

彼らはそう伊吹の事を呼んでいた。竜がどうの、クリオーセがどうのとも言っていたが。

どうも、調べてみる必要があるそう。分からない事が多すぎる。再びこんな妙な事件に巻き込まれない為にも、判断材料が欲しい。

図書館か、本屋。

出かけることを決めて、伊吹は立ち上がった。ベッドに放り出していたシヨルダーバックを拾い、2、3歩歩いたところで違和感に足を止める。

「こてつ？」

いつもならば、出かけることを察知したこてつがすぐに纏わりついて来るところだが。顔を上げると、梁に通した板の上で、丸くなくて眠っているのが見えた。

珍しい。

「おい、こてつ」

もう一度呼んでみるが、ぴくりと小さな耳が動いただけで、起きる様子はまるでない。

まあ、良いか。

伊吹はこてつを置いて出かける事にした。頭が軽いが、妙に落ち着かない気分になったのは、気のせいだという事にしておく。

### 伊吹、調査を開始する 3

シユターク教派。

調査は出だしから大きく躓いた。

数々の問題を起こした為、信仰禁止となっていたシユターク教派。それに関する文献にも、閲覧制限が掛けられていたのだ。閲覧するにも、購入するにも身分証の提示が必要となる。シユターク教派に関する制限は、まず年齢20歳以上、国民登録のあるアテイカの間である事。異世界人の場合は、10年以上の在住歴も必要だ。

後者2つで引っかかる。

出向いた図書館でそう言われた伊吹は、その足で学校に向った。

広く静かな教室で、ぼつんと座る教師が1人。

窓際でうらかな日差しを浴びながら、読書する背中はどこか寂しい。頼り無さそうな撫で肩に哀愁が乗っている。

1人の生徒もいない学校で暇を持て余していた教師は、伊吹の登校を喜んだ。

「やあ、やあ、イブキ。良く来たねえ、大変だったらしいじゃないか」

くしゃくしゃの頭に、まる眼鏡。全体的にくたびれた感じの中年の男、ベンジャウル・コスタウスだ。

この異世界人学校の授業の中で、最も人気の無い講義を受け持っている。一般常識、教養、法学なんかも教えているが、こちらもやはり人気は無い。

「遅れてすみません」

「いや何の、出席してくれるだけでもありがたいよ」

いつ聞いても切ない台詞だ。

薄汚れたレンズの奥で、目じりに皺を寄せてベンジャウルは笑う。  
「それでイブキ。今回は何を聞きたいんだい？」

彼は中々、話が分かる人だ。

物事を順調に進めるためには、順序というものが重要になる。特に、達成が難しいだろうと予想される事柄を、成し遂げる時には。

伊吹はまず、今回の教会での出来事をベンジャウルに伝えた。シユターク教派の人間と交わした会話の内容、疑問。更に保護施設での不親切な対応、それから本を借りることができなかったこと。

シユターク教派について調べたい正統な理由がある事を主張する。決して興味本位ではなく、ましてや惹かれる気持ちは無い事をさり気なく強調して。

「シユターク教派かあ」

「巻き込まれた身としては、不安なんです。何故襲われかけたのか、理由がはつきりしないというのは」

「まあ、そうだろうねえ」

うーん、とベンジャウルは唸る。

「国がこうやって情報を制限するのはどうしてだと思っ？」

「思想に共感、感化される人間が出るのを防ぐ為、ですかね」

それとも、何か知られてはマズイ真実が隠されているのか。ベンジャウルはうんうんと頷き、目を閉じた。

「とんでもない内容の話でも、中にはそれを真実だと信じてしまう人もいるんだよねえ。シユターク教派は中々とんでもない部分もあるんだけど、一応それなりの根拠と説得力のある宗教でねえ。一期は信者が何万といたし、今もこう熱狂的な信者がいたりするわけなんだよ」

ベンジャウルは、伊吹を見上げへらりと笑った。

「まあ、長くなるから取りあえず座って」

何とか話してくれる気になってくれたようだ。内心の喜びを押し殺し、言われるまま、彼の正面に座り、机の上にノートを広げた。

「シユターク教派というのは、元々は宗教等ではなく、2人の学者

による学説だったんだよ。彼らはイスルド教に伝わる神話と、異世界の関わりについて調べていてねえ、異世界人や世界喪失現象についても大分詳しく調べていたらしいんだ。まあ、君なら予測はつくだろうと思うけど、彼らはイスルド教の創世神話に出て来る神とは、異世界人の事では無いかと考えていたわけだ」

神様は宇宙人である！みたいなものか。ピラミッドを作ったのは宇宙人だ！でも良いかもしれない。

「神はこの世界の人々に知恵を授け見守ったが、やがて失望し去っていく。これはそのまま、異世界から来た人々が再び異世界に帰っていたという事だとか、そういう事を真剣に考察していたんだよね。まあ、そういう研究は面白いよね。他の人には受けなかったみたいだけど、僕は割りと好きだなあ」

「受けなかったっていうのは、やっぱり宗教観念的に？」

「うん、まあ、教会が随分反発したっていうのもあるけど、やっぱり根拠だろうねえ。結局ああいうのは物的証拠が乏しいと、単なる言葉遊びみたいになっちゃうのが難しいところだよ」

ベンジャウルは饒舌に語る。基本的にオタク気質なのだ。好きなこと、興味を持ってしていることなんかを語りだすと止まらないタイプである。

「その内に、片方の研究者が自殺しちゃうんだ。これは一説には殺されたとも言われてるけど。で、残った片方は研究を続け……多分1人になっちゃったのが拙かったんだだろうねえ、暴走しても止める人間がいなかったし。色々な異世界人と会い、話を聞いて、影響されて、その内に意味を見出すようになった」

「何に対してですか？」

「自分が研究する全てのこと」

自分が研究を始めたこと。

片割れが死んだこと。

異世界人がこの世界にやってくること。

「そうなっちゃうと、もう駄目だよねえ。狂信者だよ。唯の事象や現象に人間的な意味を求めちゃうのはねえ。過程や原因はあっても、意味なんて無いよ」

「つまり、その人は異世界人は偶然この世界にやってくるのではないと、そう考えたって事ですか」

「そう、それがシユターク教派の言う神のご意思」

そんな意思なんて、冗談じゃない。

とは思うものの、何故シユターク教派に異世界人を近づけないようにしているのか、分かる気もした。

お前が来た事に特に意味は無い、と言われるよりは、意味があると言われる方が救われる。存在や価値を認められれば嬉しい。心細く、何も寄る術が無い不安定な状態なら、余計に。

「天啓を得た彼は宗教家に転職し、広く民間にその説を広めた。それでも当初は穏やかなものだったんだけど、色々あってね。神はもう一度この世界を作り直そうとしている、異世界人の手によって正しい方向へ。それを妨げる事は許されない、って感じの宗教になっちゃったわけだ」

出した結論が残念すぎる。

伊吹は小さく溜息を吐いた。イスルド教会で負った心の傷は、未だ深い。

「シユターク教派は異世界人を神の遣いとして見ているんですよ。なのに、何故俺は襲われたのでしょうか」

「ピトリツア、って言われたんだよね。それが答えだよ。ピトリツアとは、神の使いでありながら神の意思に背き墮落した、神の敵。

姿を変え、様々な妄言で人を欺こうとする黒いトカゲだよ。元々は

イスルド教の創世神話に出て来るんだけど」

トカゲ……。

やはり切欠は嘘だったのか。タイミング的に、彼らの祭りの邪魔になりそうだったのも、まずかったのだろうが。

「他にも教会には異世界人が来ていて、巻き込まれてますが」

「ああ、アルジャラーとシマも災難だったよねえ。怪我は大したことなく無いつて聞いているけど、大丈夫なのかい？」

「……さあ、事件直後は割りと元氣そうでしたが」

「そうか、なら安心かな。……で、巻き込まれた異世界人達について。これは僕にも良く分からないな。イブキみたいにピトリツアだと認定された者なら兎も角、普通、異世界人を傷つけるような事は避けると思うんだけどねえ」

ぐしゃぐしゃと、片手で髪を掻き混ぜながら、ベンジャウルは唸った。

「まあ、僕もシュターク教派の人間じゃないし、教えられるのはこれくらいだな」

伊吹は素直に礼を言った。

色々なところを上手く省かれていたような気がするが、話を聞けただけでもありがたい。

「一度、イスルド教の経典や創世神話なんかを読んでもみると良いよ。色々、下敷きにしてある部分もあるからね」

それは確かに良いアドバイスだった。

イスルド教に関する書物には、面倒な制限はついていない。伊吹は帰りにもう一度、図書館に寄る事に決めた。

## 伊吹、調査を開始する 4

ベンジャウルの助言に従い、伊吹はイスルド教に関する本を3冊借りた。解説付きの創世神話と、神の教えについて書かれた教典、それから子供向けに分かりやすく書かれた創世神話絵本だ。

神は新たな世界を作り出し、名前をつけました。

アーシャリアン………祝福の地、と。

神はそこへたくさんの方々の精霊を招き、その世界の成長を見守りました。

精霊の働きにより、様々な植物や、動物が生まれました。

しかしその世界に秩序はありません。

生まれた弱い動物達は、次々と上位の動物によって姿を消してしまします。

神は嘆きました。

そして、秩序を作り、守っていく存在として、その世界に人を招いたので。

「……招いたって」

どこから。

さらっと書いてあるが、その一文は捨て置けない。詳しくは書いていないが、生み出したでも、作り出したでもなく、招いたなのだ。どうしたって異世界の事が頭に浮かぶ。

本やら紙が散らばったテーブルに肘を付き、伊吹は絵本を捲った。

人々は世界に文化を作り出しました。

植物を育て、弱い動物達を守り、強い動物達を従えました。

繁栄していく世界を、神々は喜んで見守りました。

しかし、平和な時は長くは続きません。



人々の心の中には罪深い欲が植えつけられていたのです。

この辺りはありがちな展開だ。傲慢になった人間が、神の言葉に耳を貸さなくなり、失望した神々はこの人の世界を見捨て、去ってしまう。

神と精霊の去った世界は荒れ果てるが、ただ1人のお人よしな神が戻ってきて、世界を救った。それが、イスルド神。

異世界という認識が、昔からあった世界だからだろうか。言及はされていないが、あちこちに異世界の存在を仄めかすような文がある。

神とは異世界人のことでは無いか。

そんな風に言い出した学者がいたのも、無理はない。ベンジャウルの言った根拠や説得力というのも、この辺りのことがあるのだろう。

伊吹は顔を上げ、窓の外へ目をやった。外はすっかり暗い。ずっと本や辞書と向かい合っていたせいで、肩がこっていた。食欲が湧かないからと、夕飯を断っていたが、今更小腹が空いてきている。

調理場について、何か無いか聞いてみようか。もう誰もいないかもしれないが、その時はその時だ。耐えられないほどではないし、茶でも沸かして飲めば良い。

立ち上がり、ベッドの上を見る。

こてつは体を丸めて眠り、やはり起きる様子は無い。夕飯の時は起きて食事をしていたから、そんなに心配はしていないが、どこか具合でも悪いのだろうか。

何日も続くようなら、医者に行く事も考えた方がいいかもしれない。

動物の医療費は、高いんだろうか。

そんな事を考えながら、廊下へ出た。

調理場は薄暗く、人のいる気配は無かった。食堂を閉めているから、当然と言えば当然だ。小鍋で湯を沸かし、粉末を溶かして茶を入れる。茶、と呼んでいるが日本茶とも紅茶とも違つた変わった飲み物だ。

甘みがありながら、僅かに鼻につく、すっきりとするような刺激のある飲み物だ。

最初飲んだ時は、微妙すぎる味に閉口したが、何故か後で飲みたくなった。今では頻繁に飲んでいる。中毒性のある飲み物だ。

カップを片手に部屋へ戻ろうとした伊吹は、食堂に小さな明かりが灯っているのが付いた。誰かいるのか。気になったので、中を覗いてみた。

オレンジ色のほのかな光は、カウンター席の上で揺れている。

ゆっくりとしなやかな腕を伸ばし、透明なグラスを煽る人影。むき出しの肩に、乱れた波打つ黒髪が垂れている。頬杖をつき、物憂げに形の良い眉根を寄せて、熱く息を吐く。

ルーミケラウスだ。

一人で飲んでいるところのようだが、一体いつから飲んでいるのだろう。細長いテーブルに酒瓶が3本は確認できた。

橙の光を映しこんだ瞳は、とろんと潤んでいる。

相当、酔っ払っているようだ。

まあ、酔いたくもなるだろう。

彼女の話の思い出し、伊吹はそつと足を引いた。

そつとおこつ。

気づかい半分、係わり合いになりたくない気持ちが半分。しかし、伊吹が食堂を出る前に、ルーミケラウスの目が彼に気が付いた。

しまった、と思った。

アーモンドのような形をした、濃い紫の瞳が驚いたように瞠られている。

ん？

何か違和感を覚えて、伊吹はルーミケラウスをまじまじと眺めた。目の色、あんな色だったか？確か黒だったような。

「イブキ、ちよつとこつちで話さない？」

そんな疑問を持ってしまったせいで、完全に出て行く切欠を失ってしまった。

色っぽく微笑むルーミケラウスに、内心酷く気後れしつつ、かといって、断りを口にする事もできない。志真相手ならば遠慮無く言えるのだが。

「ほら、早く」

仕方無い。

腹をくくり、伊吹はカウンターに座った。

椅子を二つ間に挟んだ場所に。

「やあね、どうしてそんな離れて座るの。もしかして酔っ払いは嫌い？」

くすりと笑った後、ルーミケラウスは肩を押し出すようにして、こちらへ身を乗り出してきた。ほのかに香る甘い匂いに、嫌でも心臓が撥ねる。

濡れて半開きになった唇やら、強調された胸の谷間やら。薄暗い部屋で美女と2人きりという有り得ない状況に、動揺は隠せない。くそう、こういう時何でもないようにあしらえるスキルが欲しい。心の底から。

「……………飲みすぎでは」

現実の伊吹では、視線と意識を反らせてそう言うのが精一杯だった。

「売上に貢献してるのよ。イブキもどう？」

「結構です」

年齢的に、酒を飲む機会も幾度があった。が、残念ながら伊吹は酒に強くない。だらしないだの、情け無いだのはやし立てられ飲まされて、意識を失った最悪の記憶もあって、酒は嫌いだ。

「つれないわねえ」

寂しげに、ルーミケラウスは苦笑して、身を引いた。距離が出来た事に安堵する。心臓が徐々に落ち着きを取り戻し、頭に上つていた血が引いていく。

「うちの弟もそうだった。愛想なくて、可愛げなくて」

「……すみません」

「ああ、イブキは大丈夫。すごく可愛いわよ」

……そこは喜ぶところだろうか？

いや、絶対に違う。男が可愛いとか最悪だろう。めちゃくちゃ下に見られているという事だ。複雑すぎるが、つつこめない。

「もう2人っきりの姉弟なのに、どうして分かり合えないのかしらね」

細い指先が、氷の入ったグラスの縁をそつと撫でる。寂しげな横顔に、伊吹は疑問を飲み込んだ。

知りたい事は色々ある。彼女ならば、シュターク教派だったという弟が、何故そうなったのか語れるかもしれない。どう理由で、切欠で。

気になるが、流石の伊吹もそこまで無神経になれなかった。

だが、ルーミケラウスは、そんな伊吹の心の内を見透かすように、

口を開いた。

「うちの家族はねえ、もう誰もいないの。ハynes以外は……、うん、家族だけじゃないわ、親族も、友達も、仲間も。村1つ、丸ごとなくなっちゃったから」

「……あの、それはどういう」

「言葉通りよ。皆、死んじゃったって事。村なんて、人がいなくなったら終わりだものね」

戦争、事故、何かの事件に巻き込まれて？

「敵対者が出たの」

え

伊吹は一瞬呼吸すら忘れて、ルーミケラウスの横顔を凝視した。ぼんやりと、どこか遠くへ視線を彷徨わせて、彼女は自嘲気味に笑う。

「みーんな、無くなっちゃったわ」  
皆って。

ごくりと伊吹は息を飲んだ。村1つ、どれくらいの規模かは知らないが、相当の数の人間が死んだのだらうと予想できた。

それなのに、何で。

ルーミケラウスは熱い息を吐き出すと、テーブルに突っ伏した。  
「あの子は馬鹿だわ。もう何をしたらって変えることなんてできないの……」

切なげに、声が震える。

変えるって何を。

敵対者によって全てを失った男が、何故シユターク教派なんていうものに心酔するんだ。その辺りのことが、伊吹にはどうしても納得できない。

何か、裏があるんじゃないか。

見極める為にも詳しい話を聞きたいが、これ以上の会話は望めそうになかった。

伊吹の耳に、ルーミケラウスの寝息が届いていた。

どうやら眠ってしまっているようだ。声を掛けてみるものの、返事は無い。

寝入ってしまった彼女をどうするか、それが今のところ一番の難題だった。

目に眩しい青光が当たる。思わずしばしば瞬いていると、声が掛かった。

「はい、良いですよー」

両手を横に伸ばし、台の上で仰向けになっていた志真は起き上がった。

「……疲れたー」

「思わずそんな言葉が出てしまう。」

血を抜いたり、視力や聴覚の検査をしたり。健康診断みたいなことを一通り行った。それは、まあ良いのだ。

あんな事件があった後で、身体に影響が無いか丁寧に調べてくれるのは、ありがたいし安心できる。うん、それが1回だけのことだったら。

何故か事件が終わってから毎日毎日、同じ検査を繰り返されている。今日でもう5日目だ。何か病気とか見つかったのか!? って、2度目の検査の時はどきどきだった。だが、前の日と同じ検査をされた上「大丈夫ですね、問題ありません」って何だそれ。

意味分かんない。

聞けば志真に限った話ではないらしかった。

検査の時間以外は、基本的に施設の開放区域内であれば、自由に移動が許されている。だから、同じように施設に保護された人々とも話ができるのだ。

怪我の状態が酷い者は別施設に移されたいが、その他の、あの事件に関わった人間は全て、この保護施設に収容された。異世界人以外の、この世界の人間も全員だ。

皆この施設で、志真と同じように検査を受ける毎日を過ごしてい

る。いい加減退屈でしょうがない。

一応、どういふ基準なのかは分からないけど、少しずつ家に帰されてる人もいるらしい。伊吹やフィオーネももう出て行ったし、当初よりも人が少なくなつたなあというのは感じていた。

いつ、出られるんだろう。

せめて、モクに会えれば良いのに。

そう思うが、一度施設に潜り込んだ時に開いた秘密通路は、どうやっても開いてくれそうになかった。その上、忙しさの為か更にやつれたりザレットに「大人しくしていないと酷い目に合わせます」と、据わつた目で宣言されてしまっている。

酷い目って何だろう。

分からないけど凄く怖い。

鬼気迫るリザレットを更に怒らせることなんて、今の志真にはできなかつた。

クローバーみたいな葉っぱが生い茂るところで、志真はごろんと寝転がる。空が青くて、眩しかった。さわさわ風に揺れる葉がキラキラ光っている。

平和だ。

心地よさにつられて眠気が襲ってくるが、眠りたくない。志真は眉間に力を込めた。

夢を見るのだ。

繰返し繰返し、同じような夢を。崩れ落ちる聖殿と、あの女の化物。火事になったり、洪水になったり。出口の無い薄暗い聖殿の中を、とにかく必死で逃げ回る夢。

どこまでも追ってくる人々の悲鳴。



次々に死んでいく人々。時には、アルジャーラーやウィガーが死んでしまう時もある。嫌な、夢。

怖い、と思うのは、その夢は一步間違えたら現実だったかもしれないっていうこと。

施設には、家族や友人、恋人を失った人も沢山いる。だから素直に自分の無事を喜べなかった。良かったって、一瞬でも思ってしまった自分が嫌で。

(……最低、だ)

腹が立った。

ぐるぐると、お腹の辺りで音がなった。志真は小さく溜息を吐く。こういうところも嫌になる。だけど、仕方が無い。自己嫌悪に浸っていても、お腹は空くのだから。

生きているのだから。

立ち上がると、一瞬だけ眩暈がした。

ぶるぶると首を振って、志真は歩き出した。

食事は部屋まで運ばれたりしない。食事をしたければ、自分で食堂まで行く必要があった。とにかく混むので、ゆっくり食事を取りたければ、時間をずらして行く必要がある。

今はお昼の時間から1時間ばかり過ぎているから、まあ良い頃合だろう。

広い食堂には、四角いテーブルがいくつも並ぶ。

お昼時間を過ぎてても、まだまだ盛況の様子。だがところどころに空いている席が見えた。食事は所謂ビュッフェ形式となっている。トレイに皿を載せて、好きな料理を取っていけば良い。無料の食べ放題だ。

経営は大丈夫なんだろうか。

関係ないなりに、心配になってしまふ。リザレットの給料はちゃんと出るのだろうか。

煮込みハンバーグみたいなものと、茶色いご飯みたいなもの、それからサラダと良い匂いのするグリーンスープをトレイに乗せて、志真は座る場所を探した。

「あ」

途中で、知った顔を見つけて足を止める。

何やら難しい顔で、リゾットぽいものを食べているウイガー。足を止めてからしまった、と思った。驚くべき事態だ。ウイガーが若い美人な女性と2人で食事している。

これは遠くからこっそり気づかれないように、観察するべき光景だ。しかし、時は既に遅く、ウイガーの空色の瞳はしっかり志真を捕らえていた。

「何、馬鹿みたいな顔をしているんだ」

呆れたような口調。いつもならば怒るところだが、正直一緒の女性が気になって、それどころではない。

20歳前半くらいだろうか。

小柄だけど、スタイルが良い。小顔で、目が大きくて、綺麗っていうより可愛い感じの顔立ちだ。ふわふわとした橙色の髪を編みこんで横に垂らしているのが、またよく似合っている。

目が合うと、にこっと微笑まれた。

「こんにちは」

感ぜまで良い！

「こ、こんにちは。初めまして、シマです」

「初めまして、リチルよ。異世界人、日本の方よね？」

「うわお、何で知っているんだ！」

思わずウィガーを見ると、首を横に振られた。

「私、ここの職員なの。イブキは元気？」

「えっ、イブキって、いつさん!？」

何でここで伊吹？

思わぬ名前が出てきたことに、驚いた。うんざりとした様子のウィガーが、空いている椅子へと指を向けた。

「騒ぐな。迷惑だろう、座って話せ」

「え、でも、邪魔じゃない？」

「邪魔？」

心底怪訝そうに言われた。理解した。どうやら先走りすぎていたようだ。ラスカウルの影響で、恋愛脳っぽくなっていたかもしれない。

そうだよな。こんな可愛い人が、そんなわけないか。

志真は言われるまま椅子に座った。

「えーっと、それで、リチルさんは、イブキ、知ってる？どうして？」

「私、イブキの担当職員の1人だったのよ。結構長い間、一緒にいたから、どうしても気になっちゃうのよね。イブキったら、折角ここで働いているのに、ちっとも顔見せにきてくれないし」  
なんて事だ。

よく分からないけど、気になるとか言っている気がする。

「今回は担当範囲から外れてたし、忙しくて、結局会えなくて残念だったわ」

何処と無く寂しそうに笑うリチルに、衝撃を受けた。

ええ、それって、個人的にウィガーより有り得ないんだけど。

詳しい話を聞きたかったが、リチルは忙しいらしくそれ以上の話

は聞けなかった。ウィガーと2人になったテーブルで、志真はハンバーグをつつく。

「人の好みって、ホント色々だよー」

伊吹は。貧弱そうで、暗そうな感じではあるが、まあ顔は普通だと思う。もうちょっとしゃんとして、格好を何とかすればそれなりになるんじゃないだろうか。

問題は中身だ。

頭は良いのかもしれないが、優しくないし、薄情だし、意地悪だ。上から目線で話すのもむかつく。そこそこ……頼りになるところは認めるけど。

もぐもぐ口を動かしながら、渋い顔でお茶を飲むウィガーを見る。外見は、本当悪くない。

ちよつとばかりふけているが、まあ、そこは好みで。『同級生なんて子ども過ぎて』って言った志真のクラスメイトなら、きつとどんぴしゃなんではないだろうか。

ラスカウルが生きてたら……。

2人が付き合う、なんて未来もあつたんだろうか。もう多分、二度と会えないだろう友人を思い出して、少し寂しくなった。

「何なんだ。人の顔を見て溜息をつくな」

「人生って上手く行かないもんだなあって思ってる」

「……はあ？」

死んだ後で本気の恋をするなんて。どうやったって、叶わない恋だ。だから、ラスカウルが成仏(?)した事は良かったのかもしれない。

ウィガーだって良い年だ。28歳、くらいと聞いたような。

いつ結婚したっておかしくない。そういう相手がいるのか知らない。

いが。

(ルーさんも、何かウィガーのこと良いとか言ってたっけ)

思えばそれが切欠で、ラスカウルが暴走したのだ。何だかそれも、懐かしい。

「そういえば」

ぼんやりとご飯を食べつつ友との思い出に浸っていた志真の耳に、やけに低く冷ややかな声が届いた。

「お前には色々と聞かなければならない事があったな」

背筋に冷たいものが走る。

ギギギ、と音が出そうな強張った動きで、隣のウィガーに視線を向けた。薄っすらと口元に浮かべた笑みが、機嫌の良さを表していないことくらい、志真にだって分かる。

物凄く、怒っていらっしやるようで。

志真はその後に続く説教タイムを覚悟した。

## 志真と保護者のQ&A 2

何だかんだで、この口煩い保護者との付き合いも長い。

彼が志真に掛ける言葉の80%は小言、文句、説教でできている。それだけ、志真の行動にも問題があるのかもしれないが、多分彼が普通より大分真面目で頑固で融通が利かない性格のせいでもあると思う。

私もよく注意されるよ、とフィオーネも苦笑していた。

ただ今回は。

今回のことだけは本当に、全面的に自分が悪いと思っている。

ウィガーは志真の食事が終わるまで、説教タイムを伸ばしてくれただが、後に待っているお叱りの言葉の数々のことを考えるだけで、もう何の味もなかった。

食事を終え、ウィガーに言われるまま、大人しく後についていく。騒がしい食堂ではなく、邪魔の入らない場所に移動して話をするつもりのような。どれくらい怒っているのか考えると、怖くてしょうがない。

細い通路を無言で進んでいく背中の後ろを、志真は力ない足取りで歩いていった。

どうやら向う先は取調室っぽい部屋があるところのようだ。ただ本格的に説教をするつもりなのか。

やがて、1つのドアの前でウィガーは足を止めた。

ドアに取っ手とかはついていない。左端真ん中付近に鈍く緑色に光る穴が開いていて、ウィガーはそこに人差し指を突っ込んだ。ぴ、と短い電子音みたいな音がする。指を引き抜くとドアが開いた。

入れ、と目で促されて、志真は覚悟を決め部屋に入る。

入った途端に回れ右したい気持ちになった。

「な、何であんたが……」

「ようこそ、シマ。久しぶりだな」

にやりと人の悪そうな笑顔を浮かべるのは、ユーイ・ユーイだ。そんなに広くない部屋に、明らかに大きすぎる派手なソファ。私物だろうか。黒の生地に金の刺繍が入ったクッションに悠然と背を預け、足を組むリラックスモード。

その前に置かれたテーブルも、他の部屋とは違って立派なものだ。台の部分が硝子である上、どういう仕組みなのか中で魚が泳いでいる。本物？CG？何か本物に見えるような。

もう、どこから突っ込んだら良いのか。

入り口で啞然とする志真を、ユーイは鼻で笑った。

「いつまでそこで間抜け面をさらしている。さっさとそこに座れ。ワイガーが入れないだろ」

そこ、と指示された場所にあるのは、何の変哲も無い安そうなパ  
イプ椅子。

何これ。

と思うものの、ワイガーにまで急かされたため、志真は大人しくそれに座ることにした。

どうやら、志真の食事中に、ワイガーがユーイに連絡していたらしい。どういう事なんだ。自分1人の手には負えないか思われたのか。それとも単に、志真に対する罰としてのユーイなのだろうか。考え込む志真に、ユーイが獲物を見るのように目を細めた。

「さて、シマ。お前には色々聞きたいことがある」

かつてない、緊張感。

「分かっていると思うが」

白い壁、白い床、白い天井。息苦しく感じるのは、この状況のせいか、それとも単に部屋に窓がないせいかな。

何とか緊張した空気から逃げ出したいくて、つい硝子のテーブルの中で泳ぐ色鮮やかな魚に目をやってしまう。これは結構、和めていかもしれない。

「これ以上自分の立場を悪くしたくなかったら、洗いざらい吐け」  
多分、どつちも。

青い尾びれがひらりと揺れる。

ユーイの言葉が正確に伝わるように、ウィガーが同時通訳してくれているおかげで、微妙に心にゆとりが持てた。この何か迫力のあるユーイと1対1っていう状況は、ちょっと、いやかなり嫌だ。

言葉、分からなくて良かった。

正直今の自分の立場がいまひとつ分からない。ただ説教のために呼ばれた、って感じでは無さそうである。

大体、洗いざらい吐けって言われても。

そもそも、ユーイ達が何を聞きたいのかが分からない。

「……吐けって言われても、何言えば良いの？」

「とぼける気か？」

「そんな事言われたって、本当に分からないんだけど。聞きたいことがあるならちゃんと聞いて。そうしたら、私だって答えられる」

ユーイの冷たい緑色の瞳が、志真を観察している。心の中まで見通すみたいない鋭い視線を、志真は真っ直ぐ見返した。

じりじりと、にらみ合ったまま時間だけが過ぎていく。  
根競べのような沈黙を、先に破ったのはユーイだった。

「……時間の無駄だな」

うんざりと、ユーイが息を吐く。

「まあ、お前にそんな頭があるわけないって事は分かっていたが、



念の為だ」

「……はあ!？」

何それ。

むっとする志真を無視して、ユーイは聞いた。

「敵対者って言葉を誰から聞いた？」

敵対者……イアーガー。

何度も聞いた不思議な言葉。その意味を誰かに聞きたいと思っていた。しかし、今はその前に。

志真は、少々気まずい思いをしつつ、ユーイを見た。

「……ラスカウル」

「ラスカウル？誰だそれ」

隣で、ウイガーが顔を顰めているのが、見なくても分かる。だが、もしかしたら、ユーイなら。

「私の部屋にいた幽霊。昔そこで殺された女の人だよ。ずっと傍にいて、言葉とか色々教えてくれたんだ」

ラスカウルは言っていた。

ユーイは魔法使いだ。魔法使いは幽霊を退治する力を持っているとか、そんな事も言っていた。だったら、もしかして。

「ああ……あの辛気臭い女か」

「ちよっと、ラスのことそんな風に言うな!」

「ラス、ねえ」

思案するように間を置いてから、ユーイは口を開いた。

「で、そのラスは他に敵対者のことについて何か言っていたか」

「えっと……」

曖昧な記憶を探る。

「最初は教会でいきなりだった。座ってたら、いきなりラスの声が出て。逃げてって。その後、敵対者がどうのって言った後、声がいなくなっちゃって。後は、事件の後…、夢かもしれないんだけど。」

……敵対者がまだいるから、もうここにいられないって言った。  
何か、敵対者がいると皆、変わっちゃうからって」

ウィガーが通訳を終えると、しんと部屋の中が静まり返った。  
沈黙が重い。

ユーイはいつもより真剣な眼差しで、じつと志真を見つめていた  
が、やがて口を開いた。

「シマ」

「……な、何？」

「良い病院を紹介しよう」

「何それどういう意味!？」

「大分重傷のようだ。頭の具合が……手遅れかもしれないが」

残念だ、とでも言うように溜息まで吐かれた。むかつく、ついで  
うかこれはどういう事だ。ユーイには幽霊が見えるんじゃないか  
のか。

「ユーイ、魔法使いなんでしょ!? 幽霊とか見えるんじゃないの!  
?」

「見えるか、そんなもん。……まあ、だが残念だが病院の方は保留  
にしておいてやる」

何が残念だが、だ!

っていうか、どういう事なんだ。ラスカウルは確かにユーイから  
逃げ回っていたのに。

「ラス、というのが何者かは知らないが、それでお前の妙なところ  
の説明はつかないこともない。敵対者についての特質についても正  
しいことを言っている。普通なら、知りえないような情報だ」

「色々納得いかないけど……結局、その敵対者って何なの」

「落ちてくる異世界人に寄生して、この世界を滅ぼそうとする怪物  
だ。教会でお前達が見たの女の化物っていうのも、敵対者だと推測  
される」

「寄生つて」

「敵対者は周りのものを変質させる……、歪めるって言った方が良  
いか。寄生された人間は元より、接触した人間も少なからず影響を  
受ける」

思い浮かぶのは、あの蜘蛛みたいに手足を曲げた女の人の姿だ。

「……ん？あれ、ちょっと待って」

接触した人間も？

ぞつと、背中が寒くなる。

「じゃあ、もしかしてあの毎日しつこい検査つて」

「珍しく察しが良いな。そういう事だ。目の色、髪の色の変化だの、  
そういう軽い変化なら良いが、偶に深刻なのが出て来るからな。今  
回は、接触期間が短かったせいかな、今のところ異常は出ていないが、  
念の為に期間を置いている」

深刻なつて、どんなものが。

考えると全く笑えない。

怖い。

志真は自分の腕をぎゅつと掴んで身震いした。

「だ、大丈夫つて……いつ分かる？」

「度合いによつて変わるが、10日もおけば充分だろう」  
後、5日。

もしも自分もあんな風になつてしまつたら。

(どうしよう)

怖くて仕方が無かつた。

## 志真と保護者のQ&A 3

何がどうなるのか、分からないっていう状態が何より怖い。

ユーイやウィガーの態度から、ろくでもない事なんだろうとは分かるから、余計に。

そんなわけで、志真は2人に説明を求めた。敵対者とかいう化物と接触した人に、出てくる影響、変化ってというのは具体的にどういうものなのか。

ユーイがあからさまに面倒そうな顔をしたが、この際気にしてなにかいられない。しつこく食い下がると、ようやく口を開いた。

「そうだな……突然人格が凶暴になるっていうのが多いな。暫くして、大量殺人事件を起こした奴もいる。ふらふらまともな状態と、凶暴な状態を彷徨って自殺するのもいたか。後は、脳にいきなり腫瘍ができたり、心臓麻痺を起こすケースもあつたが、こっちは直接の因果関係は不明だ。後は、……印象的な症例としては、性別が変わったのがいた」

「……え？」

どれも深刻な症状ばかり、だが。

性別が、変わる？

「男だったのが女になったケースと、その逆で、女が男になったケース。今まで13名の被害者が出てるって話だ。直接、見たことは無いが資料で読んだ限り、性別が変わった以外に変化は無い。まあ生死に関わる事態でないだけマシなケースともいえるか」

そ、そうか？

いつの間にか、ユーイは機嫌の悪さを引つ込めて、にやにやとした顔で、顔を引きつらせる志真とウィガーを眺めている。

「も、もしかして嘘？からかってるんだ！」

だが、ユーイは緩やかに首を横に振った。

「いいや」

残念ながら本当だ、とちっとも心の籠らない上滑りな言葉を付け加える。

「婚約中の娘とか、子供が生まれたばかりの若い父親とか。中々涙と混乱を誘う出来事だったようだぞ。新しく人生やり直すと、はりきったたくましい女性もいたらしいが」

「……本気で言ってるの？」

「ああ。何なら資料を取り寄せてやろうか？」

「いい」

どうせ、読めないし。

「まあ、そうならたら災難だが、死ぬような事は無いだけマシだ。

諦めて新人生を始めるんだな。案外、お前にはそっちの方が向いているかもしれないぞ」

「冗談！」

そりゃあ、女らしい方ではないかもしれない。志真自身、小さい頃は男の子になりたい願望があったし、成長してからも男に生まれれば良かったなあ、なんて思ったこともあった。

でも、それはやっぱりどこか本気じゃなかった。

困る。

今更、男になっても絶対困るし、嫌だ。

モクの事があるから余計にそう思う。

もしも、万が一志真が男になってしまったら、モクはどう思うだろうと想像してみる。モクは優しいし、思い切り心が広そうだから、特に気にしないかもしれない。

案外、普通に受け入れて。

今まで通り、何にも変わらず友達でいてくれそうである。

(うわ……それってかなり凹む)

2人はただの友達で、別に恋人ってわけではない。志真が男になったところで、モクが困ることはないのだ。

(何か……)

考えれば考えるほど、落ち込んできた。

とにかく、性別がこのまま変わらないことを祈っておこう。自分の為に。

「まあ、そこまで深刻になるな。さっきも言ったが、そうなる確率はかなり低い。余程運が悪くない限りは、何も起こらず済むだろう」と、ウィガー。

自分だって志真と同じように不安な立場なのに。口うるさくて細かいけど、根は良い人だ。本当に。ユーイと違って。

「ありがとう、ウィガー。ウィガーも何も無いと良く祈っておくよ。教会に行こうって誘っちゃったの、私だし。本当にごめん。何か、ウィガーって運があんまり良くなさそうだし……」

心配だ。

そう告げると、ウィガーは苦虫をつぶしたような顔になった。

「お前は何でそう一言余計なんだ」

「うわ、ごめん！不吉なこと言っちゃったけどさ、そうじゃなくて。ああもう、ウィガーがなるくらいならユーイがなれば良いのに……」

目に見えないほどのスピードで、ウィガーの手刀が志真の頭部にヒットした。容赦無しの一撃に、ぐわんと視界が揺れた気がする。

「いったい！」

「お前は何でそう余計な事を言うんだ！」

ずきずきと痛む頭を抑えつつ、志真は厳しい顔をしたウィガーを呆気に取られた気持ちで見上げた。

何か、凄いますい事を言ってしまったらしい。

ウィガーの怒りっぷりに驚いて、いきなり叩かれた事に対する苛立ちも、水を掛けられた蝋燭の火のように鎮火する。

(私、今何か怒らせるようなこと言った…?)

考える。ウイガーがなるくらいなら、ユーイがなれば良いのについて。そこだろうか。ユーイがいかにも面白がっているのに腹が立ったから、つい出た言葉だった。

確かに不謹慎だったかもしれない。

冗談では済まないし、人の不幸を願うような、意地の悪い言葉だったかも。

(でも、そこまで怒ること?)

ユーイだって、似たようなことを言っていたのに。本気で不安になってる志真やウイガーを、からかって面白がっていた。なのに。

「ウイガー、いい。どっちかかっていうと、そこまで過敏に反応される方が複雑な気持ちになるからな」

ため息混じりに告げたユーイに、ウイガーが顔を顰めた。

「……悪い」

「だからそこで謝るな」

怒っていたウイガーが、気まずいような顔で黙り込む。

何が何だか分からない。

聞きたくても聞けないような雰囲気である。自己嫌悪を顔に貼り付けたウイガーと、やれやれといった様子のユーイを交互に伺う。

緑色の目が志真を捉えた。

「俺はいくつに見える?」

今更その質問?既に志真は、彼の年齢が30歳以上だって知っている。とても、そうは見えないが。見た目は中学生くらい、せいぜい14、5歳くらいである。志真が答えを言う前に、ユーイが言った。

「俺が最初に敵対者に接触したのは14の終わり頃だった。お前らと同じように隔離され、検査を受けたが異常無しって判断で。異常

だと正式に認定を受けたのはそれから3年後」

淡々とユーイは話し続ける。どちらかというところ、志真に通訳してくれるウィガーの方が、どこか苦々しい感じの顔をしていた。

「成長異常つてのは、俺で3例目の貴重な症例だ」

何て、ことだ。

志真は呆然とするしかなかった。

ユーイは確かに子供にしか見えないけど、それは単にそういう人なんだと思っていた。異世界人だし、どこか違うのかもしれないって。そういうもんだと思っていた。

知らなかった。

ユーイがなれば良いのに。その言葉にウィガーが怒ったのも無理はない。ユーイは既に被害者なのだ。何と云っていいか分からずに、志真は呆然とユーイを見る。

にやり、とユーイは不敵に微笑んだ。

「おかげで俺は永遠の美少年っていうわけだ。出来ればあともう4、5年後だったら言う事無しだった」

「……は？」

「ま、そこまで人生上手くはいかないが、これはこれで悪くない。

美少年好きの女っていうのは案外多いし、変に警戒もされないしな」

「はあ!？」

「このなりだと、貢ぐ必要も無いし、どっちかっていうと向こうが勝手に貢いでくれる上、寝たところで責任取れって騒ぐ女も滅多にいない」

ウィガーは眉間に皺を寄せ、通訳の役目を放棄した。

何を言っているか分からないのに、分かる気がする！

思い起こされるのは、ユーイが毎日違う女性をはべらせていたことだ。それも美人ばかり、色々なタイプをよりどりみどり。



志真はにやりと笑うユーイを思い切り白い目で見た。

「最低だ！」

「人生、どうなるうが楽しまないと損だろ」

ふふん、と偉そうに笑う。

一瞬でも申し訳なくなった自分が馬鹿みたいである。特にウィガンなんて、ユーイのことを思って真剣に怒ったというのに。

……もしかして、気にするなって言うユーイなりの気遣い？

そんな可能性も一瞬だけ浮かんだが。

多分違う。

ユーイは本気で今の自分を楽しんでいるに違いなかった。たくましい。そういうところは、ちょっとだけうらやましいかもしれない。

## 志真と保護者のQ&A 4

3日、4日と日が経った。

沢山いた人が、どんどん施設を出て行っているというのに、志真は未だに退所の許しが出ていない。もう残っている人は30名程だ。アルジャーモ、2日前に家に帰った。

ウィガーがいるからまだ良いけど、この状態は結構不安だ。残されているっていうことは、まだ変わっちゃう可能性があるってことになる。

凶暴な人格になったり、病気でころつと死んじゃったり、性別が変わっちゃったり。

はあ、と志真は溜息を吐いた。

退屈のぎと運動不足解消の為、志真は施設内を歩き回っていた。本当なら庭を散歩したいところだが、生憎今日は雨である。傘はあるけど、こんな日に外に出る気にはならない。

憂鬱だ。

シャーリン教会になんて、行くんじゃなかった。結局、あそこがシユターク教派と関係しているのかどうかも分からずじまいだ。やっぱり、もうちょっとリキキの言葉を怪しむべきだった。

(ほんと、どういっつもりなんだろう)

リキキは知っていて、志真にシャーリン教会に行くよう進めたのだろうか。流石にそこまでの悪意は無いと思いたかった。確かに彼女には嫌われているけど、でも。

(嫌ってるからって)

やりすぎだ。助かったから良かったようなものの、下手をしたら死んでいた。リキキは嫌な奴だと思っけど、でも。

もやもやしつつ歩いてみると、前方に見知った背中を発見した。

大分離れているが、あの薄い影を背負ったような哀愁漂う背中  
間違はなく、ウィガーのものだ。ウィガー、と呼びかける前に、そ  
の背中が階段に消える。

何処行くんだらう。

この上の階は、用の無い時はあんまり歩き回るなって言われてい  
る、研究施設がある場所だ。検査の時くらいしか、用は無い筈の場  
所だ。今日の検査はもう終わっているのに、どうしたんだらう。

(……まさか)

何か異常が見つかって呼び出されたとか。

浮かんだ嫌な予感に、いてもたってもいられなかった。

階段では追いつかなかつたが、上の階に上った時に、丁度部屋に  
入ろうとしているウィガーを発見できた。左側の通路にある、赤い  
ドアの部屋。あれは、検査の後とかで気分が悪くなったりした時に、  
一時的に休憩する為の部屋だ。

やっぱり、どこか具合が悪いのだろうか。

志真は迷わず走り出した。この辺りのドアは、全部自動ドアみた  
いに横に開く。ただし、ロックが掛かっているらしく、決められた  
人に対してしか開かない。

ウィガーが開けたドアでも、志真が開けられるとは限らないのだ。  
だから、閉まりかけているドアに向って、志真は体を滑り込ませ  
た。うっかり体を挟まないように、ドアは異物を感じて開くよう  
になっている。ギリギリで、何とか靴の先が届いて、部屋に入り込  
むことに成功した。

勢いを殺すために前足に力を入れて、とんとんと飛んで着地する。

よし、完璧！と、喜ぶのも束の間。

「……シマ？お前、何でここに」

愕然とした顔のウイガーが、志真を見下ろしていて我に返る。いつもなら、ここで小言か怒りの言葉がくるはずだが。

不思議に思いつつ、志真は答えた。

「いや、ちよつとそこで見かけたから。もしかして、何かあったのかなつて気になつて」

「……え？」

驚いたような声は、ウイガーのものではなかった。もっと、柔らかい響きを持った、女の子の声である。

そこで漸く、部屋の中にいるのがウイガーだけではなかったことに気が付いた。目の前にいるウイガーが邪魔で気が付かなかったが、その背後に2人いる。

2つのベッドが部屋の隅に並んでいて、真ん中に丸いテーブルと椅子がある。窓を背に、華奢な感じの女の子が座っていて、その隣に背の高い男の人が立っていた。

2人とも驚いたような顔で、志真を見ている。ちよつとだけ気まずい。

誰……？

何かどこかで見たとがあるような気がする。

特に、男の人の方は。

邪魔なウイガーを避けるように身を乗り出して、じつと観察する。かなりの、男前だ。背が高く、筋肉質だけど細い感じ。癖のある黒髪の間から覗く、黄金色の瞳が綺麗だ。鼻がすつと高く、彫が深い、エキゾチックな感じの顔立ち。

……？

志真はすつと手を上げると、青年の目の部分を隠してみる。するど。

「あ……分かった、ハルさん！」  
クラスメイトのハルラック・エジだ。いつも、鳥の巣みたいな髪の毛で顔を隠していたから分からなかったが、こんな顔をしていたのか。

彼も確かに保護施設にしていると聞いていたが、どうしてここにいるのだろう。

「よかった。元気？」

「ああ」

相変わらず素っ気無い。

しかし、彼の隣にいる女の子は誰だろう。妙に気になる。

妙に親しみやすい容貌のためだろうか。

色白で、小さくて、華奢である。綺麗な真っ直ぐな黒髪は、大体肩のすぐ下辺りまでの長さ。目が大きくて、鼻はちよつと低め。華やかな印象は無いけど、こつほつとするみたいな可愛らしさがある。透き通るように薄い水色の瞳が、凄く綺麗な。

(知らない子、だよな)

何か妙に懐かしい感じがあるけれど。志真は押し黙っているウィガーに目を向けた。何で黙っているんだろう。いつもなら、もっとこつ志真に対して怒っているところの筈。

なのに、何故ウィガーの方が後ろめたそうな顔をしているのか。

あやしい。

「ウィガー？」

「……」

「もしかして、ウィガーの彼女？」

こつそりと、聞こえないように声を落として聞くと、ウィガーは何故か深く溜息を吐いた。何なんだ。胃が痛むように顔を顰めた後、何かを諦めたような感じの自虐的な笑みを浮かべ、ウィガーは言った。

「彼女はサカマキ・キクノ」

その名前には聞き覚えがある。

「キクノ……？あ！もしかして教会にいた人！？」

あの混乱の中で、階段を上っていた少女だ。遠くてよくは見えなかったけど、確かに黒髪でこんな感じの子だったと思う。

無事だったんだ、良かったな！。

「お前は……もうちょっと他に何かあるだろう」

「何かあって」

何？

ウィガーはそんな志真に呆れた目を向けた後、黒髪の少女、キクノへ顔を向けた。

「キクノ……こいつはハイタニ・シマだ」

何その紹介。

「こいつ」だし、名前だけだし。もっと他にあるだろう。そんな愛想も素っ気も無い紹介に、キクノは小さく頷いた。戸惑うように瞬きを繰り返した後、じつと志真と目を合わせる。それから。

「えっと……、はじめまして、坂巻菊乃です。地球の、日本の方ですわね？」

あんぐりと、口が開く。

「ええ！？何で！？」

日本語だ。

驚く志真に、キクノは真面目な口調で答えた。

「名前が、日本名でしたし。さっきから、日本語を喋っていたので、多分そうかなと」

「い、いやあの、そういう事じゃなくて……あれ？」

日本名……？

サカマキ、キクノ……漢字は分からないが、日本名っぽい。キクノは、菊乃とかだろうか。まさか。

信じられない思いで、志真は菊乃を凝視した。  
目の色とかは違うけれども、確かに彼女の姿は日本人と大差ない。  
懐かしい感じさえした。

「海津女子の高等科2年に通ってました」

「わ、私は天城西の普通科2年」

うわあ。

何だかよく分からない感動が胸に込み上がってくる。同じ世界の  
女の子に会えるなんて、思いもしなかった。

伊吹の他にも同じ世界の人がいたなんて聞いていない。

それに対する不満はあるが、それが消し飛ぶぐらいの勢いで、志  
真は興奮していた。

## 菊乃の信頼 1

灰谷志真。

もう会う事は無いと思っていた同じ世界の人間と出会って、菊乃は戸惑っていた。

日に焼けた肌に、くるくるとよく動く明るい色の瞳の、いかにも健康的な少女だ。背が高くて、女子にしては短めのショートカット。それが快活そうな彼女によく似合っていた。

きらきらと目を輝かせて、生き生きと表情を変える。

(明るい……)

それがとにかく第一印象だ。

元の世界、日本にいた時は、あんまり身近にいなかったタイプの人間だ。明るくて社交的で、人と仲良くなるのが上手。クラスの中で眩しい存在が志真なら、菊乃はいつも隅っこで一人読書しているような目立たない存在だ。

話をするのは、同じように本が好きな大人しいタイプの人ばかりだった。

そんな理由もあって、若干気後れしてしまう。話が合うだろうかというか、本当に一番恐れているのは、鬱陶しいとか、暗いとかそういう風に思われてしまうこと。

まさか、菊乃がそんな不安を抱いているとは知らない志真は、無邪気に菊乃に話しかけてきた。

「ねえ、菊乃ちゃん、あ、菊乃ちゃんって呼んで良かった？」

「は、はい」

いきなり名前にちゃん付け。

最初は大抵苗字に「さん」付けが普通だった菊乃は、驚きながら頷いた。別に嫌なわけではない。ちよつとばかり、照れるだけだ。



しかし、これが彼女の普通……。

「えっと、じゃあ、志真ちゃん」

頑張つて、彼女に合わせようと呼んでみると、何故か志真は目を丸くした。ぽかんと口も開いている。

ま、間違えた…？

密かに焦る菊乃の前で、志真は徐々に頬を赤くした。

「うわ、志真ちゃんとか呼ばれるの幼稚園以来かも。なんか照れるね。うわー、新鮮だけど何か恥ずかしい！っていうかなんだろっこれ、何かきゅんってきた」

「……お前は何を言っているんだ」

呆れた顔でウィガーがつっこむ。

「いやいや、だってさー。ねね、菊乃ちゃん、もう一回呼んでみて」

「え……」

何で？

きらきらと、志真は期待に目を輝かせている。この状況だと、非常に呼びにくい。妙なプレッシャーを感じる。徐々に顔が赤くなるのが自分でも分かった。

「だから、お前は一体何をやっているだ！」

ウィガーが眉間に皺をよせ、思い切り志真の頭にげんこつを落とす。かなり良い音がしたから、痛かった筈だ。

「ちよつと、何すんの！」

「お前が馬鹿な事ばかりやるからだろう」

「だからって頭叩くことないでしょ！ぱーならともかくぐーだし！」

言い合いを始めた2人を見ながら、菊乃はほっとしていた。志真には悪いが、ウィガーが口を挟んでくれて助かった。なんだったんだろう。よく分からない。

変な人。だけど、多分悪い人ではなさそうだ。

それにしても。

(仲良いな……)

遠慮なく悪口を言い合う志真とウィガーを見て、菊乃は口元を緩めた。

しかしこれでは、ウィガーから話を聞くことは出来ない。できればハynesのことについて、聞きたかったのだが。

散々躊躇った後、ついにジャンナに連絡をとったのは、一昨日の晩のことだ。

忠告を受けたとおり、シーツの中に潜ってジャンナから貰った指輪を押した。石の部分を押し込むと、かちりと小さな音が響く。続いて、微かなノイズ音。

これで、良いのだろうか。不安に思いつつ、そっと声を掛けてみた。大きな声を出すと、誰かに聞かれるような気がして、本当に囁くような声になった。

「ジャンナさん？」  
程なくして返事があった。

『あー症例38ちゃん、良かったわー、ちゃんど連絡してくれてー。もうこないかと思っただわよー、この待たせ上手う』

……。

意外に鮮明に聞こえる。声は少しばかり小さいが、状況を考えればこの方が良い。

『大丈夫ー？ま、貴方が酷い事されることは無いって思うけどねえー。良いのか悪いのかはわからないけどお』

「私は、大丈夫です。けど……どういう意味ですか？」

『長くなるけど、聞きたあい？でもあんまり時間取れないから、ハインちゃんのこと話せなくなるかもー』

それは困る。

意味ありげなジャンナの言葉は気になるが、優先順位をつけるならハイネスの事が先だ。

「ハイネスさんの話が聞きたいです」

きっぱりと告げると、微かに笑い声が聞こえた。

「そお？じゃあ予定通り」

「お願いします」

「はいはい。さあて、時間が惜しいし、手っ取り早くいくわよー。

ハイネちゃんは、今シユターク教派だつていう疑いかけられて追われてるって話はしたわよねー？何でそんな事になつちやつたかつていうとー、何故か休暇中のハイネちゃんが事件の起きた現場にいたこと、それからー、その後行方を晦ませたことがねえ」

どーこ行つちやつたのかしらあ、心配ねえ。と言うものの、ちつとも心配しているようには聞こえない。

口調のせいだろうか。

少し面白がっているような。

『真面目なハイネちゃんに何があつたか知らないけどー、ね、38ちゃん』

症例が消えて、ただの数字になつてしまった。

『貴方現場にいたんでしよう？でえ、ハイネちゃんに助けられたつていうのはほんとうー？その時、何か言つてなかつたー？』

交わした言葉は多くない。

何か特別な意味があるような事は言っていないかつたと思うが。

「あまり、時間なかつたです。変な音して、ハイネスさんが、逃げろつて言つて。それから……」

その後の記憶ははっきりしない。

とても、怖かつたことだけは覚えている。

「気になっている事は1つだけあります。助けてもらつて、お礼を

言いました。その時、ハインスさんが、お礼は必要ないって、言いました」

『ふんふん、それでー？』

「……それだけ、何ですけど。あの、その後何か言おうとしていました。でも、何か…邪魔が入って」

『聞けなかったのねえ。うーん、意味深ねえ、確かに何か気になるかも』

「……ハインスさんは、無事なんですか」

『少なくとも、聖殿で回収された死体の中にはいなかったみたいよー。だから、追われてるんだしー』

死体という言葉に、逃げる時に聞いた悲鳴や叫び声が蘇り、背筋が冷えた。

『うちも必死よおー。あーんな酷い事件が起きちゃって、その上うちの隊員が関わってるかもしれないなんてねー』

「ジャンナさんも、ハインスさんのこと、疑ってますか？」

『どうかしらねえー。ハインちゃんらしくない気はするけど、人って他人の事全部分かるわけじゃないし。ただねえ、動機も理由も証言も揃ってるっていうのが。私ねえー、こっ見えて捻くれ者なのよお。だからなーんか疑っちゃうの。……何か裏があるんじゃないか、って』

裏……。

『ねえ、38ちゃん。できたら、ウィガー・ハルベルトと話をしてみてくれなあい？』

「え、ウィガーさん、ですか？」

『そうそう。何か彼も現場にいたらしいのよねえ。今も保護施設内で隔離中らしいからあ、頼んでみたら会えるんじゃないかしらー』  
ウィガーもあの場にいたのか。

そういえば、あの時誰かが自分の名前を呼んだような気がする。

もしかして、あれはウィガーだろうか。

『ウィガー・ハルベルトはハイネちゃんと知り合いだし、何か話している可能性もあると思うのよねえー。彼の目からどう見えたか、その辺も聞きたいわー。本当は直接尋問したいけど、ちよつとねえー。頼めるう？』

おねだりする様な、甘い声で囁かれる。

勿論、少しでも事情が知りたいのは菊乃も同じだ。ウィガーが何か知っているかもしれないというなら、聞いておきたい。

ちゃんと、話してもらえるかは分からないが。

『ウィガー・ハルベルトと話せたら、また連絡頂戴なー。そしたら、ハイネちゃんが疑われてるもう1つの理由を教えてあげるわあ』  
できれば今すぐ教えて欲しい。

そう、菊乃が口にする前に通信は切れた。その後は全く繋がらず。

何だか、良いように使われているような。

他に方法も無いので、菊乃はハルラックを通して、ウィガーと話をしたいという要望を伝えてもらった。駄目もだったが、その希望はすぐに通じ、こうして今日その機会を与えてもらったのだ。

## 菊乃の信頼 2

一度上手くいったからと言って、次も上手くいくとは限らない。もしかしたら、これがウイガーに話を聞く最後のチャンスとなる可能性だってある。ハynesに関する話を聞く事は、今の菊乃にとつては同郷の人間と話す事よりも、大切な事に思えた。

嬉しそうな志真には悪いが。

ようやくウイガーとの口げんかを打ち切り、改めてこちらへ顔を向けた志真に、少しの罪悪感を覚える。正面の椅子に座って、テーブルに両手を付き、こちらへ身を乗り出す姿が、無邪気な子どもみただったから余計に。

「ねえ、菊乃ちゃん、良かったらさー、一緒にお茶しながら色々話そうよ」

「……えっと」

期待に満ちた志真の表情を前に、菊乃は言葉を詰まらせた。

志真は、菊乃の存在を、心から喜び歓迎してくれているみたいだった。

何も分からない異世界で、分かり合える同じ立場の人間と知り合えた事は、確かに喜ぶべきことだと思う。菊乃だって、嬉しい。心強くもある。志真とこのまま色々話したい気持ちもあるが、駄目だ。

それは、菊乃の為だけの望みだから。

よし。

心を決めて、菊乃は志真を見つめた。

「ごめんなさい、私も貴方と話したい気持ちはあるけど、今はウイガーさんに聞きたいことがあります。だから……、その、お話はまたの機会に」

「……ウィガーに？」

きよとんと、志真は目を丸くした。

「えっと……それって、私がいたら駄目な話って感じ？」

やや表情を曇らせて、何だか恐る恐る疑問を口にする。凄い。何を思い感じているか、手に取るように分かっってしまう。

素直なんだ。

しかし、そんな姿を見てしまうと、はっきり駄目だと言い難い。

というか、別に彼女がいたら駄目という事は無いのだ。ウィガーに話を聞けるなら。

「私は、話が聞けさえすれば……」

未だ立ったままの状態で、渋い顔をしているウィガーに視線を移す。その言葉を受けて、ウィガーは深くため息を吐いた。

「大人しくしている」

「はい」

いても良いと言われたことが嬉しかったのか、途端志真は笑顔になった。2人のやり取りは、何だか親子のような感じで微笑ましい。

志真の右隣の椅子に座り、ウィガーはこちらを見た。

「それで、俺に聞きたいことというのは？」

「ハインス・ユーゴさんのことです」

はっとウィガーが目を瞪る。

「……ハインスのこと？何故、俺に」

「事件のあった教会に、ウィガーさんもいたと聞いて」

それは実際、ユーイに確かめたから間違いない。ウィガーに似た声を聞いたと言ったら、隠すことも無く教えてくれた。まだ、この施設にいたこと。

「確かにいたが」

「私はあの時、一時的に目が見えなくなっていて、だから分からない事も多いです。私を助けてくれたのは、ハインスさんだったと思

うんですが」

「ああ。それは確かだ」

「でも……それならどうして、ハイネスさんが事件の犯人の1人として、追われることになっているんですか？私には、どうしても納得できなくて」

「……それは」

ウィガーが言葉を詰まらせる隣で、志真が再び身を乗り出してきた。

「えーっと、ちょっと待って。菊乃ちゃんを助けた人って、あの銀髪のカッコイイ人だよ？しゅつときて子ども助けてくれた人！で、菊乃ちゃんが落ちそうになった時もひゅーんって飛んでった特撮ヒーローみたいな」

確かにハイネスは銀髪だ。

「えっと、多分」

「あの人凄かったよね、本当ヒーローとか勇者とかそんな感じだった！」

うんうん、と1人興奮した様子で頷いた後、首を横に傾ける。

「その人が何で事件の犯人になるわけ？おかしくない？」

「おかしいです」

志真の同意が心強い。良かった。変だっと思うのは、自分だけではなかった。菊乃に加わり、志真からも「何で？」という目を向けられたウィガーは閉口する。

面倒な事になった。

そう、顔に書いてあるようだった。

少し、申し訳ない気もするが、ここは退けない。

「ユーイから説明は？」

「……ハイネスさんが行方不明だという事と、シユターク教派の1員である疑いがあるという事は聞きました。だから、私を助けたん



だろうって」

「え、シユターク教派!？」

何故か志真が驚いている。

「シマ？」

不審そうなウィガーの視線に、志真ははっと顔を強張らせた。目を泳がせながら、にへらと笑う。

「えーっと、シユターク教派ってあれでしょ、異世界人が大好きみたいな人達」

「好きというのは、また違うと思うが」

「細かい事は良いんだって。で、その人達、今回の事件に関係してるの？」

くりくりと、丸い瞳が菊乃を見る。

これって、秘密の情報だったんだろうか。だが別に、口止めはされていない。こんな状況は、誰も考えていなかったのかもしれないが。

それならそれで、構わない。

「そう、聞きました」

「本当に……そうだったんだ」

本当に？

なにやら1人で思い悩み始めた志真はまるで気づいていないが、ウィガーの目が疑惑を確信した者の目になっている。

言っただけの方が良いのだろうか。

「あの、志真ちゃん」

「!あ、ごめん、ちょっと考え事してた。で、何だっけ……あ、あの銀髪のヒーローのことだよ。あの人がシユターク教派で……って、でもやっぱりそれおかしくない？」

「何がだ」

「菊乃ちゃんを助けたのが、異世界人だからって理由だったって事

は良いとして。でも、あの人初めに子どもとか助けに来てくれたよ？あの子ども異世界人だったってこと？」

「……いや、違うと思うが」

「だったらやっぱり変だよ！その後だって、あの化物みたいなのと戦っててくれたし。少なくとも事件起こした人には見えなかった」

その辺りの話は、初めて聞いた。

やっぱり、ハインスが事件の犯人というのは間違いなんじゃないだろうか。そう思えて仕方が無い。だからこそ、ユーイは菊乃にこの話を伝えなかったのだろう。

「ウィガーさんは、どう思いますか？」

ハインスとウィガーは昔からの知り合いだったと聞いた。そんなウィガーになら、菊乃に分からない部分も見えているかもしれない。

「……俺は」

ウィガーは再び迷うように言葉を詰まらせた。眉間に深く皺を寄せ、困りきったような顔になる。

「違うともそうだと、判断する材料が少なすぎる。何か話せれば良かったが、あの時は緊急事態でそんな暇も無かったからな。確かにハインスの行動は、民間人を助けるものだったが、そもそもあの場にいた事が引つかかる。その上、姿を消したとなれば、疑惑の目を向けられても仕方は無い」

そうなのだ。

事件の直後に、ハインスが姿を消してしまったこと。そこが何より不利な点だ。

ハインスは未だ見つかっていない。一体どこへ行ってしまったのか。無事なのだろうか。

「ハインスの事は昔から知っているから、間違いであれば良いとは思う。ルーミケラウスの為にもな」

「え……？何でそこでルーさんが出てくんの？」

「何でつて。……ハイネス・ユーゴはルーミケラウスの弟だからだが。知らなかったか？」

「ぼかんと、志真の口が開く。」

「弟……弟！？あー、何かそういえばカツコイイ弟がいるって言った。ハイネス、だっけ？そんな名前だったっけ」

「お姉さん、いるんですか」

「ああ。ルーミケラウス、うちの従業員だ。昔に、不幸な事件で他の身内を全て無くして、互いが唯一の肉親だと言っていた。今こんな事になって一番苦しんでいるのは、彼女だろうな」

その言葉が何故か胸に突き刺さる。

唯一の肉親。

たった2人の家族、それは菊乃が失ってしまったものだ。

きつと二度とは戻らない。

「きつと何かの間違いだよ。ルーさんの弟がそんな事するわけ無い」  
「お前は会ったこと無いだろう」

志真とウイガー、2人の会話をぼんやりと聞き流す。

ハイネスの姉。

その人に聞けば、何か分かるだろうか。

### 菊乃の信頼 3

無事ウィガーに話を聞く事ができた。

ハインス・ユーゴの潔白を証明するような話は出なかったが、それでも一歩前進したといえる。後でジャンナに連絡すれば、彼女の持つ新たな情報も聞けるだろう。その状態で、気持ち沈んでいるのは何故なのか。

どうしてだろう。自分でも分からない。

菊乃の落ち込みを指摘したのは、ハルラックだった。ウィガーや志真と別れ、部屋に戻った後のことだ。

「何か、良くない話が出たのか？」

「気遣わしげに、ハルラックが聞く。」

「え？」

「いや……、何か暗い顔をしている」

指摘されて、自覚した。同時に、先程の会話の全てを日本語で行っていた事も、思い出した。ハルラックは当然、日本語を知らない。どうして気づかなかったのか。

訳の分からない会話が交わされる最中、ずっと一人で黙っていた彼に、申し訳なく思う。

「ごめんなさい、ハルラックさん」

「？」

「あの、ずっと言葉分からなかったですね？」

「……ああ、気にするな」

その事が、とまるで気にしていないような顔で、ハルラックは微笑した。腹を立てても良いところなのに、心が広い。

菊乃の護衛というよく分からない立場になったハルラックとは、一日の殆どを一緒に過ごすようになった。眠る時は流石に別の部屋

だが、その他はずっと一緒にいる。

他人、しかも男の人と一緒にいるというのに、彼の存在に緊張する事は殆どなかった。不思議だ。豹の姿の時から想像がつかないほど、穏やかで物静かな雰囲気のせいだろうか。凄く安心できるのだ。

菊乃は先程ウィガーや志真から聞いた話を、ハルラックに伝えた。ハynesの行動、彼の姉のこと。

「家族のことを思い出したのか」

菊乃は首を横に振った。

家族を、母を思い出して少し寂しい気持ちにもなったが、悩みの原因はそれではない。

「ずっと、考えてました。ハynesさんが、姿を消した理由」

自主的に姿を消したのか、誰かの手によって本人の意思と関係なく連れ去られたのか。ハynesは強い。後者の線は薄いだろう。

もしも自主的に姿を消したのだとしたら、理由は何か。

一番最初に考え付くのは、後ろめたいことがあるという理由。

例えば、本当にユーイ達が疑っている通り、シユターク教派の一味で、事件の実行犯の1人だから。そういう可能性も勿論あるが。

「キクノはハynesを信じたいのか」

「多分、そうです」

それほど、親しい間柄ではない。殺されかけたり、脅されたり、恐怖に身が竦むような思いをした相手だった。

でも、助けてくれた。

教会の時だけではなくて、菊乃が自暴自棄になっていた時にも、連れ出して胸の内に溜め込んでいたものを、吐き出させてくれた。

自分の意思で生きていいのだと、認めてくれた。存在を。

菊乃自身を、認めてくれた。

異世界人だからという理由では無いと思う。もしかしたら、そう思っただけなのかもしれないが。

「ハインスさんが、本当に事件と無関係だとしたら。どうして、いなくなつたのか、考えました」

「答えは出たのか？」

「分からない……でも、もし私だったら」

たった一人の肉親を、悲しませるような事はできない。母を置いて、事件の現場から消えるなんていうことは。

もしも、そんな状態で姿を消す理由があるとすれば。

「誰か、大切な人を守る為」

「……ハインスは誰かを、庇っている？」

「最初は、そうだったら良いなと思って……でも、それは私の気持ちで、良くないです」

勝手な願望だったと思う。ハインス自身の苦しみに、思い至っていなかった。もしも本当にハインスがその立場にいるなら、苦しく辛い思いをしているだろう。

彼に姉という存在がいる事を知って、ようやく気がついた。

(間違い、だと良い)

ハインスを信じたい。同じくらい、自分の想像が間違っていることを願っていた。

『なあるほどねー』

夜。暗闇の中で再びシートの中に潜って、ジャンナに連絡を取った。ウィガーと志真に聞いた事をそのまま伝える。最も、大した情報は無かったが。

『子どもを助けたり、敵対者に向っていったりしたのは流石ハインちゃんって感じだわー。ケラスの鏡ねえ。事件と無関係の証拠には

ならないけどー』

途中で良心が咎めた、とかそんな風にも考えられる。

『悲劇の姉弟』

「え？」

『11年前のことよー、この世界に迷い込んできた異世界人の中に、敵対者がいたの。その頃、ユーグリッドっていう村の近くでは、かなり大きな水災害が起こっててねえ、上流の村から人やら物やら色んなものが流されてきてて、その異世界人も最初はその人達と同じ被災者だって思われて保護されてたらしいわあ』

いきなり関係の無い話をするとは思えないから、これはきっとハインスに關係する話なのだろう。

『落ち着いた後、流石に異世界人だって事は分かった筈なんだけどー、届出は行われなかつたのよあ。ユーグリッドの村には、落下人信仰があつたつていうから、多分そのせいねえ』

「落下人信仰、ですか？」

『大昔に、世界喪失者に村を助けてもらったつて事があつたらしくてえ。シユターク教派とはまたちよつと違う形で、異世界人を歓迎していたようねー。多分、ユーグリッドの村人自体が、元々異世界人を先祖に持つ種族じゃないかつて言われてたことも關係してると思うわあ。そんな訳で、その異世界人は村の教会に匿われていたの。イスルド教会よあ』

どきりとする。

今回の事件が起こつたのと同じ、イスルド教会だ。

『ハインちゃんとそのお姉さんは、その教会の子どもだったのあ。だから当然、その異世界人とも交流があつた』と思うわあ。この辺りはハインちゃんも話してくれないし、憶測だけど。その人が、敵対者として目覚めたのはおよそ一年後。事態に気がついた国が動いた時には、村の人間はみーんな殺されてて、敵対者は隣の村を襲つ

てたつて話よー」

「ハインスさんと、そのお姉さんは」

「無事だった理由は分からないわねえ。2人とも壊れた教会の地下で、気を失っているところを発見されたらしいわ」

どうして、助かったのだろう。

「不思議でしょう？」

菊乃の心を読んだようなタイミングで、ジャンナが笑う。

「だからねえ、2人とも色々言われたのよー。疑われたり、恨みをぶつけられたり。だからハインちゃん、あんな可愛げの無い子になっちゃったのかしらねえ。昔は可愛かったのに」

可愛かったハインスというのを想像できない。

「でもそれで、どうしてハインスさんが疑われる理由になるんですか？」

「言つたでしょう？ ユーグリッドには落下人信仰があつたつて」

「……でも、家族や、村の人を殺されたのに」

「2人はねえ、孤児だったらしいのよお。親戚はいたんだけど、どういふわけか引き取られなくて、だから教会の孤児院で育てられてたみたい。色々、不遇な目にあつていたんじゃないかって、これは唯の噂に過ぎなかつただけどお」

不遇な目。差別や、虐めみたいなものだろうか。親がいないことで色々、言われたりしたのかもしれない。

酷い生活をしていたとしたら。

敵対者となつた異世界人が、村人を殺した事で、2人はその生活から解放されたことになる。2人は殺されなかつた。その事実を、彼らはどんな風に受け止めたのだろう。

\*\*\*



手渡された紙の束に目を通し、ユーイは渋い顔になった。

一番上にあつたのは、坂巻菊乃の退所許可書。それを捲ると、ウイガー・ハルベルトへの坂巻菊乃の身元預かりの依頼書。どちらにも、ユリウスの印が押してあつた。

「あの野郎」

どういづつもりだ。

現在、菊乃はユーイの保護下においている。施設に戻った今も、そこは変えていない。退所すれば、再び屋敷へ連れて行くつもりだつた。それが一番安全で、安心できる処置である。それを。

「何でこう、問題が起きそうなことを」

いや、狙いは分かっている。

ユリウスは、坂巻菊乃を使つつもりでいるのだ。

## 伊吹、不吉な予感を抱く 1

伊吹が保護施設を出て2週間後。

ようやく志真とウィガーが戻って来た。これで漸く、慣れない宿仕事から解放されると思うと、全く喜ばしい限りだ。

仕事いけなくて暇なんですよ、と強引に伊吹を引っ張り出したのはルーミケラウスだ。1人で飲んでいた晩の翌日、すっかり前の明るさを取り戻したのは良いが、妙に絡まれるようになってしまった。由々しき事態だ。

妙に話す距離が近かったり、声が甘かったりするのは多分気のせいでは無いと思うが、フラグが立っている気がするはおそらく気のせいだ。

根暗のもやしっ子異世界人がもてる筈が無い、勘違いするな。後で自己嫌悪する羽目になるに決まっている。

ルーミケラウスの事はさておき、問題は志真だった。彼女が帰ってきたことで、漸くずっと胸に溜めていた疑惑を、ぶつけることができるのだから。

「いっさん、何か怖いんだけど」

「こっちは何か目が痛い」

灰谷志真の部屋を訪れたのは、初めてだった。

まさか、こんなに乙女チックな部屋だとは。似合っていないにも程がある。全体的にピンクでフリル、可愛らしく少女趣味全開の小物の数々の中に佇む灰谷志真の姿には、違和感しか感じない。

日に焼けた肌に、丈夫そうな髪質のショートカット。

女にしては背が高く、丈夫そうな骨格の持ち主でもある。

どこから見ても健康優良児、下手をすると元気そうな少年に見えてしまう彼女には、ドレスでダンスするよりも、スタンプ帖を首にぶら下げラジオ体操の方が似合うだろう。

そんな伊吹のしらーっとした視線を感じたのか、志真はむっと頬を膨らませた。

「言つとくけど、私の趣味じゃないから」

「安心しろ。人の趣味にまでけちをつける気は無い」

「違つて言ってるじゃん！」

余程、嫌なのか、志真は顔を赤くして怒っている。別に、部屋や趣味の事はどうでも良い。心の底から。

「本題だが」

華奢な木製の椅子に浅く座り、伊吹は未だ不満そうな顔の志真を睨みつけた。

「今回のシャーリン教会で起こった事件についてだ。お前が知っている事を、洗いざらい吐け」

「う……、知ってることって言われても、私にもよく分かんないし」

「誤魔化すな。何か知ってるだろう。大体お前、何で急に祭りだなんて言い出したんだ。それも、よりもよってあの教会」

「それは……だって」

誤魔化しは許さん。

そんな伊吹の気迫が伝わったのか、志真はううっと唸りながらも口を開いた。

「確かめたくて、その、あの教会が本当はシユターク教派の秘密のアジトだ、みたいな話聞いたから」

「お前、知ってたわけか」

「知ってたっていうか、良く分からなかったから、はっきりさせようと思ってた。まさか、あんな事があるとか思わないし。シユター

ク教派つて、怖いね。何考えてんのか全然分かんない」

「……そんな、良く分かんない状態で、何でシユターク教派がどうとかって話になるんだ」

過程がすっぽり抜けている。

シユターク教派の存在は、志真には伏せられている筈だった。考え方が考え方だけに、悪影響を及ぼす懸念がある、という理由でだ。実際、過去に彼らに影響され、取り込まれてしまった異世界人もいたという。

志真が自分でシユターク教派にたどり着いたとは思えない。

どう考えても、誰か吹き込んだ奴がいる筈だ。

「何か私にもよく分かんないんだけどさ。宿屋の悪い噂とか流してたのが、シユターク教派の人達かもしれないんだって」

「その話は誰から？」

「ニトロ」

ニトロは、クラスメイトの異世界人だ。ニヒルに笑う三つ目の男で、見た目の怪しさとは裏腹に、割合話しやすく気さくな性格をしていたように思う。どちらかというと、面倒見が良いような。

しかし、勿論表面上の性格などどうにでもなる。

「でも、まあ、ニトロも証拠は無いし、シユターク教派と関わるのはやめとけて言ってたんだよね。面倒事に巻き込まれるだけだつて」

「……そう言いつつ、お前にシャーリン教会の話をしたわけか」

「いや、違うけど」

きよとん、と志真は目を丸くした。

「シャーリン教会の事を教えてくれたのは、リキキだよ。今考えれば、リキキが親切に教えてくれるとかおかしいよね。何か嵌められた気がする」

リキキ、とは。

同じ異世界人仲間のクラスメイト。双子の吸血鬼の姉の方だ。伊吹自身はよく知らないが、何でも志真とは犬猿の仲だという。

「お前、馬鹿なんだろう」

思わず心の底から同情するくらいに。志真は、再び顔を赤くした。「ば、馬鹿ってそんなにシミジミ言っないや、私だって怪しいとは思ってたよ、本当に！でも他に手がかりとかなかったし、注意しとけば大丈夫かなって……そんなレベルじゃなかったけど」

「……ここをどこだと思ってる」

つくづく平和ボケな女だ。ここは平和で安全な日本じゃない。何が起こるか分からない、異世界なのだ。

「リキキも知ってたのかな」

「……平和ボケにも程があるぞ」

「いや、だってさ。確かに私、リキキに凄く嫌われてる自信あるけど、今回は下手したら死んだと思う。そこまで、するかなあ」

かな、っていつかしただろう実際。

その平和的でお人好しな思考には、全く苛々とさせられる。

「とにかく、リキキの話はウィガーにでも伝えておけよ。どうせ言っていないんだろ」

「言っていない。けど……、何かヤだな。告げ口みたいで」

「先生に言っちゃおう？えー、告げ口って最低とかそういう女子の告げ口レベルで事を語るな！」

事の重大さが本当に分かっているのか。怪しいところだ。

志真は力無く笑うと、項垂れた。

よく見れば、目の下に薄っすらと隈ができていた。流石にあんな事件があった後で、疲れているようだ。心なしか、頬も薄くなったような。

「……なんか、悪い夢みたい」  
「そんなの、今更だ」

この世界に来てからずっと。

「ねえ、いつさん」

志真が掠れるような声で言った。

「敵対者って、何？」

「……それも、リキキか？それとも二ト口の方か？」

違うよ、と志真は首を振る。じゃあ、誰だ。志真はとてつもなく言い難そうな顔で、伊吹を見上げた。

「……ラスカウル」

誰だ、それ。

「この部屋にいた幽霊……って、いや、本当なんだってば！もういなくなっちゃったけど、ラスが教えてくれたんだよ、あの時、教会で事件が起こる前に危ないから逃げろって！」

「へえ」

「……やっぱり、信じてくれないんだ」

当たり前だろう。

志真は何故か打ちひしがれた様子で、椅子の上でがくりと首を下げた。

「何か自信なくなってきたちゃったんだよね」

「急に、何言っているんだ」

「ラスのこと、誰も信じてくれないし。肝心のラスには、もう多分会えないし。ユーイなら分かってくれるって思ってたのにさ」

「ははは」

「そこ笑うところじゃないんだけど」

いや、笑うところだ。

志真が誰彼構わず幽霊の友達の話をしていたと思うと。笑える。志真は恨めしげな顔で、伊吹を睨んだ。

「いっさんって、本当意地悪だ」

ああ、知っている。

意地悪で、根性も悪くて、捻くれていて、冷たいのだ。自覚はあるし、相手からもそう見られていた方が安心できる。頼りにして欲しくない。何も出来やしないから。相手にがっかりされるのも、自分に幻滅するのももう充分だ。

「あー、ラスと、もう一回話せないかなー！」

まだ言うか。

椅子の上で足をばたばたと子どものように動かす志真に、伊吹は呆れた視線を投げかけた。

とはいえ、少し気にかかることもある。

ラスカウルという友達がいないとしたら、一体誰が志真に敵対者という言葉を吹き込んだのか。志真のすぐそばに、何か不穏なものがあるような気がしてならなかった。

## 伊吹、不吉な予感を抱く 2

これは、そろそろ行つといた方が良さだろうな。

ベッドのシーツの上で、長い体を丸めて眠ることつを見下ろし、伊吹は軽く溜息を吐いた。相変わらずのだらけ具合。毎日毎日、ほぼ寝てばかりいる。時々起きて餌を食べているし、調子が悪いという風にも見えないが。

毛艶も良いし、鼻の頭も乾いていない。湿疹が出るとかそういう事も無い。食べたものを吐いたり、下痢をしたようすもない。敢えて言うなら多少丸くなった気がする。

寒い時期なら冬眠（冬眠する種なのかは知らないが）を疑うが、この初秋の気候で冬眠はないだろう。

伊吹は用意した小さめの籠の中にタオルを詰め、その上にこてつを置いた。ぐんにやりと生暖かいこてつはされるがまま。全く起きる気配が無い。

これで良いのか、竜の末裔。

最も、その説は眉唾ものだと思っている。鱗があるから、適当にそれらしい説を流して、価値を高めたのだろう。その方が高く売れるから。

伊吹は籠の蓋を閉めると、部屋を後にした。竹のような木で粗めに編んだ籠なので、蓋を閉めても空気が薄くなる事は無い。

いつものように調理場の前を通り、一応声を掛けていく。「行つてきます」「おう、いつてらっしゃい」「気をつけて行って来るのよ」「はい」そんなやり取りをして、裏口から外へ向う。

裏庭へ出たところで、背後から声が掛かった。

「イブキさん、ちょっと待って」



振り返ると、フィオーネが駆けて来た。長い髪を今日は耳の後ろ  
辺りで1つに纏めている。七部丈の白いシャツに、丈の長いブルー  
のスカート。ふわりと広がる足元の生地は薄く、白い花柄が透けて  
見える。

何か、珍しい格好だ。

「出かけるんですか？」

そう聞くと、フィオーネは一瞬言葉を詰まらせた。

「その、やっぱり私も一緒に行こうかと思って。余計なお世話かも  
しれませんけど」

動物病院の場所を地図に書いてくれたのは、フィオーネだった。

当然、こてつの状態も話してある。

「駄目ですか？」

「……いえ、別に構いませんが」

特に、断る理由はない。

伊吹の返事に、フィオーネはほっと表情を緩めた。

「じゃあ、行きましょうか」

地図はあるが、道はフィオーネの方が詳しい。自然と、彼女の後  
についていく形になった。

「こてつ、何も無いと良いですね」

「まあ、そうですね」

会話が続かない。

保護施設から帰って以来、こんな風に話す機会も余りなかった。

勿論、顔を合わせれば挨拶くらいは交わしていたが。

一時は流石に元気がなかったが、今はもうすっかり立ち直ってい  
るようだ。ウイガーや志真も帰って来たことだし、これで彼女も安  
心できるだろう。

「最近、ルーと……ルーミケラウスさんと仲が良いみたいですね」  
予想していなかった話題を振られて、伊吹は一瞬反応に困った。

確かに以前より話す機会が多くなったが、あれを仲が良いと言ってしまうのはどうだろう。一方的に絡まれているというか、からかわれているというか。つい弱味を見せてしまった相手に対する、気まずい気持ちの裏返し。そんなところではないかと思う。

最も、それをフィオーネに話す事はできない。

「いや、仲が良いというか……。まあ、話はよくするようになりましたね」

「ルー、弟さんのことで落ち込んでいたから、ちょっと心配していたんですけど。あんまり人に弱音とか吐く人じゃ無いし、無理していないか気になっていたんですけど」

「はあ……」

「でも、今のところ落ち着いているみたいで……。それって、やっぱりイブキさんのお陰なのかな」

「はあ？」

お陰も何も、伊吹自身は何もしていない。

「それは無いと思いますが」

きっぱり断言できる。

フィオーネは苦笑した。

「イブキさんって、謙虚なんですね。もっと自信を持ってても良いと思いますよ。ルーが言っていたんです。イブキさんと話していると楽しいし、安心できるって」

何だその意味深な言葉は。

ルーミケラウスが酔っ払って弱音らしきものを吐いた晩以来、2人の間であの事件のことが話題に上がった事はない。弟のことも。

伊吹が立ち入るような話ではないし、向こうだって胸の内を吐露できるほど信頼してはいないだろう。誤魔化すような日常的な会話

のやり取りは、一見距離が近く見えるのかも知れないが、実はその逆なのだと思う。

当たり前障りのない会話。

伊吹自身、身に覚えのある事だから、良く分かる。

イブキさんと話していると楽しいし、安心できる。

ルーミケラウスがどう言ったのかは不明だが、フィオーネにそう思わせた理由については推測が出来た。「だから、大丈夫だ」「大丈夫だから、弟のことで踏み込んできて欲しくない」きつと、そんなところだ。

ルーミケラウスが伊吹に構うのは、そのあたりの事もあるのかも知れない。

あの宿屋の人間は皆良い人のだが、良い人だからこそお節介が過ぎるところがある。困ったり、弱ったりしている人を放っておけない。

一方で伊吹は出来る限り面倒事には関わらない、というスタンスを貫いている。

必要以上に他人に踏み込まない、いらぬ気遣いも、言葉もかけない。そんな伊吹の態度が楽だったのかもしれない。

大して会話が弾まないまま、目的地についた。

動物病院、として連れてきた貰ったその場所は、一見普通の民家に見えた。赤い屋根に、クリーム色の壁の、こじんまりとした四角い家だ。

唯一、ドアの前に掛かった看板が鳥の形をしているあたりに、それっぽい雰囲気を感じる。

一抹の不安を感じたが、医者の評判は上々らしく、狭い待合室は人と動物で溢れていた。(一瞬帰ろうと思ったが)待つこと2時間。ようやく伊吹……いや、こてつの番が回ってきた。

医者は中年の男（？）、獣人とか名前が付きそうな姿をしていた。二足歩行の茶色い毛並みの犬：猫？ぺたんと垂れた耳の形は犬っぽい、顔の形は猫っぽい。表面を覆う毛皮さえなければ、普通に人の顔になるかもしれない。少々、目がとんがっているが。

「よろしくお願いします」

「患者は？」

伊吹は診察台らしき緑の台に、こてつの入った籠を載せた。蓋を開けると、医者の方が覗き込む。

「む」

ぐぐ、と鼻の頭に皺を寄せ、男は唸った。その様子に、フィオーネが顔を曇らせた。

「あの、どうなんでしょう」

「臭い」

「……は？」

「だから、臭い」

言いつつ、男は近くの助手の女に診療室の窓を開けさせた。

「3日に一度は洗っていますが」

フィオーネの物言いたげな視線を受けて、伊吹は主張した。

「いや、そういう匂いじゃない。これはあれだ、クルーセルの匂い」

「クルーセル？」

「つて、何だ。」

「魔草の一種だ。特にこれは、ヴィーダに強く効く。鼻を狂わせ、弱らせる」

「魔草……？」

再び聞き覚えのない単語。後で調べるために、記憶しておく。医者者の白目の少ない黒い目が、そんな伊吹に疑惑の目を向けた。

「動物虐待か？」

「は？いや、まさか、誤解です。よく分かりませんが、病気ではな

いんですね？」

「病気じゃない、これは魔草の中毒症状」

「毒……、餌にそれが混じっていたのか？」

「いや、これだけ匂いがついているという事は、香か何かだろう。」

人の鼻は鈍いが、ヴィーダの鼻は敏感だ」

「こてつ、大丈夫なんでしょうか？」

フィオーネが不安そうに口を挟む。ふむ、と医者は顎の毛を撫でた。

「2週間あれば、毒素を抜けるだろう。その間こちらで預かることになるが」

良いか、と聞かれて伊吹は頷いた。頷くしかなかった。入院するとなると、費用がどれだけ掛かるのか、不安で堪らない。が、ここで渋れば再び動物虐待を疑われそうな気がしていた。医者の方は、未だ伊吹に対して厳しい。

妙なことになった。

伊吹はこてつを医者に預けて、フィオーネと動物病院を後にした。

### 伊吹、不吉な予感を抱く 3

魔草。

それからクルーセル。

宿についてすぐに、その謎の言葉について調べてみた。魔草とは、異世界から持ち込まれた植物の中で、周囲の生物に対して害ある瘴気を発生させる植物のことらしい。

危険な外来種として、栽培は禁じられているが、その特殊な効果に目をつけて密売を目論む者たちもいるようだ。

クルーセルは中でも、脳に作用し、高揚感、多幸感、催眠作用等を齎す種で、人気が高い、とある。

(つまり、麻薬と同じようなものか)

特にヴィーダのような竜種に対しては絶大な効果を持つ、と記されている部分が目に付いた。偶然だろうか。否、違う。

即座に甘い考えは捨てる。

こてつがいて、クルーセルが使われた。

そう考えたほうが余程自然だ。

何者かが、こてつを排除した。こてつ……ヴィーダは、敵対者として覚醒した者の匂いを嗅ぎ付けることができるらしい。元々、危険察知能力の高い動物だったところに目をつけられ、敵対者を見つけることのできるように、訓練されるようになったようだ。

敵対者に寄生されていても、自覚症状も無い最初の内はヴィーダも嗅ぎ付けられないらしい。大体3ヶ月から4ヶ月くらい経過した辺りから、反応するようになる。

伊吹にこてつが渡されたのは、吹雪が接触を試みようとした時、又は遠くから様子を伺いに来た時の為だったのだろう。

こてつを排除したのは、吹雪の関係者だろうか。

だとすれば近いうちに、あの馬鹿兄貴と対面を果たすことになるかもしれない。一気に憂鬱な気持ちになった。

問題はもう一つ残っている。

一体いつ、クルーセルが使われたのか。

施設を出た時は、こてつの様子は普通だった。だが宿について部屋に戻った時には既に、様子がおかしかったように思う。妙にふらふらしていたのは、眠いためかと思っていた。ベッドの上で丸くなって眠り、伊吹が呼んでも起きなかった。

今、考えてみれば、あの時は既にクルーセルにやられていたのだろう。だとすれば。

施設から、宿に戻るまでの間。

あるいは、宿の中で。

後者だったら最悪だ。あの日、宿は営業をしていなかった。一人の客も入っていない。事前に仕掛けられていた可能性もあるが、どうだろう。香の効果というのは、そこまで長続きするものなのか。考えられない。

一番可能性が高いのは、宿屋の人間が犯人である場合だ。

ウィガーや志真は勿論除外できる。あの日来ていなかったアンナとラクトの線も薄いだろう。

残るは、リアラ、フィオーネ、ルーミケラウス、カオロン、ミーチエ。この5人だ。特に、長く一緒に過ごした前3人辺りが怪しい。(一体、誰が)

その中の一人、いや、複数犯の場合もある。最悪、皆共犯者という事も。そんな内容のミステリー小説を思い出し、伊吹は苦い気持ちになった。

マジで最悪だ。

ここにおいても良いのか？

すぐにでも、出た方が良いのではないだろうか。しかし、今、保護施設は一般人の出入りを規制している。要望がある場合は、保護者を通して届出を行うように言われていた。

保護者、つまりウイガー・ハルベルトだ。

奴を信じていいのだろうか。確かに面倒見がよく、堅すぎるほど真面目な上、お人よしの男だが、この宿屋の人間だ。繋がっていないと限らない。

ウイガーだけではない。この宿屋の人間は、基本的に皆良い人達のように見えていた。志真程盲目に信じることはできないが、その善良さを疑ったことは無い。窮地で掌を返されることは覚悟していても、まさか裏があるとまでは考えていなかった。

……ほんの少ししか。

(どうする)

信用できそうな人間は、志真だけだ。そう思い至った時のがっかり感は半端なかった。頼りない、おまけに足を引っ張られそうな気がしてならない。

今回の件を相談したところで。

いつさん、考えすぎだよ！この人がそんな事するわけないって！

そんな答えが返ってくるのは目に見えている。

却下だ。

今そんな事を言われたら、本気で殺意が芽生えるかもしれない。逃げようにも行く場所が無いし、何より相手が吹雪であるなら、自分を追って来るかもしれない。

いつもいつもいつも、そうだった。



余計にややこしい事になるのに、兄貴面して伊吹の問題に手を出してくる。伊吹くんのお兄ちゃんが怖いから遊ばない。小学校時代、ちょっと好きだった女の子にそう言われた時の衝撃は、未だに覚えている。

軽く昔の苦い思い出を回想していた伊吹は、階段を上る足音に我に返った。

足音は、ゆつくりとこの部屋へ近づいて来て、止まる。

静かな部屋に、ノック音が響いた。緊張していたせいで、思わずびくつと飛び上がってしまった。誰にも見られていないが、気恥ずかしい。

「イブキさん、いますか？」

フィオーネだ。

どうも最近、出現率が高いような気がする。前は気のせいかと思っていたが、疑惑の目で見るようになった今は、どうも疑惑の目で見てしまう。

「イブキさん？」

「います。…何か用ですか？」

「兄に頼まれて、呼びに来たんです。ちょっと下りてきてもらえませんか？」

「ウイガーが？今で無いと駄目ですか？」

「ええ……、あの」

何故そこで言葉を濁す。

ホラーなバックミュージックの幻聴が聞こえてくる気がしてならない。選択肢を誤れば、デッドエンド直行みたいな場面なのか、まさか。

「本当は、吃驚させようと思ったんですけど、諦めます。実は、今日から異世界人の方を家で預かる事になって。1人は、イブキさん

やシマと同じ世界の人だつて、言ってみましたよ？今から皆で食事するところなので、イブキさんも来てください」

……その回答は、予想外だった。

坂巻菊乃。

同じ日本人であり不幸な世界喪失者。女子高生。何かと厄介らしいと噂を耳にした事もあり、多少の偏見を持っていたが、本人は至って普通の大人しそうな少女だった。

染めていない真っ直ぐな黒髪はこれぞ日本の女子と言った感じだが、何故か目の色が水色だ。外国人の血が混じっているのだろうか。「はじめまして、坂巻菊乃です。よろしくお願いします」

そうリアラ達に丁寧に挨拶する菊乃の背後には、もう1人見知らぬ男の姿があった。

長身で細身だが筋肉質という羨ましい体格の、男前だ。ハルラック・エジという名で、彼も異世界人らしい。初対面となるが、彼も一応クラスメイトだ。何でも菊乃の護衛として、ここで一緒に暮らすらしい。

部屋は別だが、隣同士。志真と同じ階の客室を使うらしい。宿屋で一番上等な部屋だが、現在宿泊客が来ない為問題は無い、のか？

何だその好待遇。

色々勘ぐってしまうが、答えは出ない。

ちなみに、2人はこの居候という立場で住むわけではなく、一時的な客人として在住することになるらしい。その為、きちんと宿泊費は支払われるのだとか。

まあ、宿屋としては少しでも売上があるのはありがたいことだろう。

食堂のテーブルをくつつけて、皆でテーブルを囲む。テーブルの上には色取り取りの料理が並び、様々な種類の飲み物が用意されていた。

こんな風に歓迎会が行えるのは、店に客が来ないためだ。

既に酒で顔を真っ赤にしたカオロンとアンナが、調子の外れたような歌を歌い、それをルーミケラウスが手を叩いて笑っている。ラクトはもくもくと料理を食べ、その隣ではミーチェとアンナが近所の噂話に花を咲かせている。ウィガーはいつもの通り、悩み事がある様子。フィオーネと志真は菊乃に質問攻撃をしかけ、どこか困った様子の菊乃をハルラックは静かに見守っている。

賑やかな食事風景は、平和そのもの。

だが、伊吹にはそれが嵐の前の静けさに思えてならなかった。これで、日本からきた異世界人が3人揃った事になる。

その上、ここにいる内の誰かが、クルーセルを使用した可能性が高い。

一体何が起こるのか……、暫く安心はできなさそうだ。

## 志真と束の間の平穩

美味しい食事は、人を元気にする力があると思う。

何が言いたいかというと、カオロンとミーチェとラクトの作るご飯は、美味しいっていうことだ。宿屋の従業員、住人全員での夕食は、菊乃とハルラックの歓迎会と志真達の退所祝いを兼ねている。こんな風に皆で賑やかに食事をするのは初めてで、楽しかった。宿屋に客がいないからこそ出来た事だと思つと、ちよつと複雑な気もするけど。楽しいものは楽しいし、こういう時は嫌な事は忘れて騒いだ方がきつと良い。

こんな時にも不景気な顔してるのは、伊吹くらい……いや、ウイガーも何か相変わらず胃でも痛めているような顔をしてる。何だかなあ。

「菊乃ちゃん、ほら、これも食べて。美味しいよ」

じゃがいものグラタンみたいな料理を小皿に取り分けて、渡す。

遠慮しているのか、中々食事に手をつけていない菊乃を見かねて、志真はどんどん料理を取り分けた。

「あの、そんなに沢山は。もう充分だし、志真ちゃんが食べて」

「えー、全然食べて無いじゃん」

「そうかな。今日はかなり、食べた方だと思う」  
小食すぎる。

だからそんなに細いんだ。手首とか足とか本当に細い。うう羨ましい……。志真も決して太っていないが、骨格ががっしりしている為遅く見えてしまうのだ。健康的だの、丈夫そうだのいう褒め言葉は良く頂いたものである。

ぼりぼりと、根野菜のステーキを齧りながら、志真は菊乃の様子を伺った。

菊乃は年の割りに物静かで、落ち着いた雰囲気を持っている。大人しくて、あまり自分から話したりしない。志真の周りにはあんまりいなかったタイプだ。

ちよつと疲れてる、かな。

話しかければ微笑んで答えてくれるけど、どこか元気は無い。騒がしいのが苦手なのかも。それ以上に、他に何か気がかりな事があるようで、時々ぼうつとしている。更に視線が、時折ルーミケラウスに向かっているような。

気のせいじゃないよね？

思い当たる事はある。菊乃が前に話していた、ハynes・ユーゴという人のことだ。菊乃を助けた筈の彼はルーミケラウスの弟で、今は教会の事件の容疑者として追われているっていう話だった。

きっと、その人の事を聞きたいのだろう。

でも流石に、こんな席で聞ける話じゃないし、何より家族であるルーミケラウスには聞き辛い事でもある。多分、今はまだルーミケラウスも触れて欲しくないだろうし、話せるのはもう少し先になりそうだ。

いつものように明るく話すルーミケラウスだったが、時折物憂げな顔に変わる瞬間があることに、志真も気がついていった。

(そりゃ、そうだよね……)

たった一人の弟が、あんな事件の犯人として追われているのだ。本当に犯人かどうかは分からないけど、追われている事実は変わらない。連絡も取れず、どこでどうしているのかも分からなくて、いつ捕まるかも分からない。そんな状態で、平気な筈は無いのだ。

溜息をつきかけて、志真は慌てて暗い気持ち振り払った。

テーブルの上にあった赤味の強いオレンジ色の飲み物を、一気に飲む。うわ、ちよつと苦い。全体的には甘酸っぱくて、中々いけるかも。

「何だろこれ」

「何って……、あ、それ果実酒よ。パイヤナの実のお酒」

「ええー？何？ぱい……？」

「お酒みたいですよ。パイヤナの実の、果実酒だって。大丈夫？」

フィオーネの言葉を、菊乃が丁寧に訳してくれる。優しいなあ、伊吹と違って。そう思うと同時に、自分の情けなさが身に染みる。何で伊吹も菊乃もそんなにしっかり喋れるようになってるわけ。

「……お酒、かあ」

道理で顔が何か熱くなるわけだ。

未成年、だけど。

「ま、大丈夫だよねー。ここ異世界だし」

「そんなわけあるか」

遠くから、伊吹が口を挟んできた。こういう時だけ、耳聡い。

「こつちの世界はそれ程飲酒に厳しい規定は無いようだが、一応18歳からだ。更に、異世界人はそれぞれの世界での法律に従う決まりだぞ」

「もー、いつさん煩いし細かい！」

「お前が大雑把過ぎるだけだ」

「うふふ、2人とも兄妹みたいねえ」

おっとりしたりアラの言葉に、志真と伊吹は黙り込んだ。こんな口煩くて陰険な兄とか冗談じゃないし。恐らく、向こうも似たような事を思っているに違いなかった。

そんな感じで盛り上がった宴会も、日付を超える前に終わった。途中で帰ったアンナ（何と子どもがいるらしい、シングルマザーだ）の他は、今日はここに泊まっていく事になった。

どうせだから、とフィオーネの提案で、志真の部屋に菊乃とルーミケラウスを呼んだ。流石にベッドに4人は眠れないから、絨毯の

上に布団を敷いて、皆で寝転びながら話す。

こういうのは、修学旅行みたいでわくわくする。

「キクノは、ユーイさんのところにいたんでしょ？大丈夫だった？」

「えー！」

フィオーネの言葉に、志真は思わず声を上げた。

「あんな奴のところに行ったの！？大丈夫？セクハラとかされなかった？」

「シマってば……何言っているか分からないけど、分かる気がするわ。ユーイさん、悪い人じゃ無いんだけど、女性関係はちょっとね

……」

「あそこは師弟揃って曲者よ。2人も好い男だし」

そう言うルーミケラウスも色っぽい。

「2人？」

「ああ、シマは知らないのね。もう1人、ジエレミーさんっていう人がいるのよ。凄く色っぽいけど素敵な人なんだけど」

『けど』がつくんだ。

フィオーネが苦笑する。

「ジエレミーさんも、色々女の人との噂が耐えなくて」

うわあ、最低。

「菊乃ちゃん、本当に大丈夫だった？」

「私、子どもだし。そういう対象には、ならないと思う」

本気で言っているんだったら、認識が甘すぎる。菊乃は確かに色気の点では足りないかもしれないし、凄い美少女ってわけでもないけど、充分可愛い女の子なのだ。

その上相手はセクハラ魔人。

似たような弟子がいるとなると、更に危険は倍増だ。

「何にも無かったなら良いけど、これからは気をつけなくちゃ駄目だよ」

真剣に忠告する志真に対して、菊乃は困ったように笑った。

「まあ、玉の輿を狙うんだったら、2人とも良い相手だと思っわ。顔も頭も良いし、お金だって持ってるし」

「そんな事言っつてルーさん、いつもユーイさんの誘いを断ってるくせに」

「あんなの唯の社交辞令よ。本気にしちゃ駄目。一晩だけのお遊びの相手になるつもりは無いわ」

どこか気まずそうに、菊乃が通訳してくれた。ルーミケラウスの発言に、志真は感動した。

凄い大人発言だ。

そんなルーミケラウスが好きになる男の人って、どんな人なんだろう。

「ルーさんって、どんな人好き？」

「どんな人かしらねえ」

謎めいた笑顔を浮かべながら、首を傾げる。そういう仕草も色っぽい。その色気の半分でも自分になれば……、等と虚しいことを思っってしまった。

「もう、ルーってばいつもそうやって誤魔化すんだから」

「あれ、でも前、ウイガー良いつて言ってた」

「そういえば、そうだったわね」

「本気？」

「素敵だっつて思っつのは本当よ。もしも」

もしも？

言いかけて、ルーミケラウスは目を伏せた。ひっそりと、自嘲気味に笑う姿に、何だか胸が騒ぐ。

ざわざわって。



「ルー？」

「そうね、やっぱり秘密」

うふふ、と一転悪戯が成功した子どものように笑った。

「秘密が多い方が、女は魅力的に見えるのよ」

「私たちに見せてもどうしようもないと思うけど」

呆れたようなフィオーネの言葉。

志真はルーミケラウスが、すっかりもとの雰囲気に戻ったことに、ほっとしていた。

もしも。

その続きは何だったんだろう。そう思いながらも、何だか聞いちやいけないような、そんな気がした。

聞けなかったことを、後で後悔することになるとも知らず。

翌朝、ルーミケラウスと菊乃、それからハルラックの3人は宿屋から姿を消した。

感じた違和感の正体を知る為に、菊乃は気づかれないように目を閉じた。声を聞いて、記憶の中の声と聞き比べる為に。

初対面の筈の彼女に、懐かしさを感じた。

それが最初に覚えた疑問。この人を、知っている気がする。この声を、どこかで聞いた。こちらの世界へ来てから、出会った人はそんなに多くない。

目を閉じたまま、菊乃は彼女の声を聞き、疑惑は確信へと変わる。いくつかの疑問が氷解して、新たな疑問がいくつも浮かぶ。

目を開くと、彼女の深い眼差しとぶつかった。

視線が交わり、菊乃は知る。菊乃が気が付いたことを、相手も知ったということ。どうしてここに。

疑問は言葉にできなかった。ここにいない筈の人。イスルド教会の地下で、菊乃の世話をしてくれていた人の1人。どうして。証拠は何も無い。だが菊乃が証言すれば、身柄を拘束して取り調べることもできたかもしれない。

そうすることができなかったのは、あの場の暖かく平和な空気を壊したくなかったこと。

それから、どこにいるかは分からないハイネス・ユーゴのために。

思ったよりも早く、保護施設を出る事になったことも意外だったが、それ以上にユーイのところではなく、ウィガーのところへ行くように言われたことに戸惑った。

見放されたのかもしれない。

そう思えば納得だったが、分からないのが何故かユーイが非常に

不機嫌だった事だ。

『言つとくが、あくまで一時的な措置だからな。お前の保護者は俺だ。くれぐれも妙な真似はしでかすなよ』

菊乃が何か問題を起こせば、ユーイの責任になるから大人しくしとけ。

そういう意味だと思つ。

何でそんなややこしい事になつてゐるんだろう。ウィガーは既に2人の人間の保護者になつてゐるから、手に余るといふ事なのかもしれない。

だったら、ウィガーの宿屋ではなく、ユーイの屋敷に行つた方がよいような気もするが。向こうは向こうで何か考えがあるようだ。護衛にハルラックを付けてくれるくらいだから、あんまり良い想像はできなかった。

自分が、ここへ来た意味を、菊乃は早々に理解した。有り得ない再会によつて。

彼らもまた、疑つてゐたのだ。ハインス・ユーゴが黒にしろ、白にしろ、その姉が全く無関係であると言えるかどうか。

「気が付いたのに、どうして言わなかつたの？」

深みのあるしつとりした声が、囁く。

部屋の明かりは消えているけど、月明りがあるから完全な暗闇にはならない。寂しそうな微笑を見せるルーミケラウスの顔も、はっきりと確認できた。

こんな顔の人だったんだ。

何となく感慨深い。声で想像したよりも、ずっと綺麗な人だった。肌の色や、目の形なんかハインス・ユーゴに似ているかもしれない。何も言われていなくても、気がつけただろうか。

「皆、楽しそうでした。志真ちゃんや、フィオーネさん、皆も、きつと悲しむから」

少し前まで、楽しくおしゃべりしていた志真もフィオーネに目を向ける。それぞれ敷いたマットの上で、すっかり眠ってしまった。菊乃達の話し声は届かない、深い夢の中にいるようだ。

眠る前、ルーミケラウスの淹れてくれたお茶を、菊乃は飲まなかった。

「……いずれ、知るわよ。早いか、遅いか、それだけで」

「このまま何もしなかったら、私」

「駄目よ、キクノちゃん」

嫣然と、ルーミケラウスは微笑んだ。

「もう遅いの」

優しい声に、ぞっとするような狂気が混じっていた。

「黙っていてくれてありがとう。お礼に、せめてここから出て行く事にするわ。勿論、貴方が私を黙って行かせてくれたら、だけど」

膝を立て、ゆっくりと立ち上がるルーミケラウス。何か、恐ろしい予感を抱きながら、菊乃も立ち上がった。

「ここを、あの教会のようにしたくはないでしょう？」

「ルーミケラウスさん」

声が震える。

世話焼きで、明るくて、色っぽいお姉さん。宴会で見た、そんな彼女の雰囲気はどこにもなかった。

「ねえ、お願いキクノちゃん。私もね、可愛いシマちゃんやフィオーネを、できれば殺したく無いって思ってる」

妖しく微笑みながら、残酷な言葉を口にする。

できれば、っていう事は。必要があるならするという事だ。

「黙って来てくれるわよね、キクノちゃん」

鈍く光る赤紫の瞳に、胸の奥がざわついた。異様に伸びた鋭い爪が、寝息を立てて眠るフィオーネの柔らかな首に添えられる。眩暈がした。

「外の獣も黙らせておいてね」  
今にも、フィオーネの首が切り裂かれそうで、頷くより他になかった。

\*\*\*

真夜中に、黒い獣の背に乗り2人の女と見られる人間が逃走。見張りについていた隊員が追跡したものの、途中で見失った。

その報告を受けたユーイの機嫌は、当然ながら最悪だった。黒い獣は、ハルラック・エジで間違いない。2人の女はルーミケラウスと、坂巻菊乃だ。

「あの馬鹿」

妙な真似はするなと言ってあるのに、何でこういう事になる。

「家に連れてこないで、ウィガーのところになんか預けるからですよ」

良い大人の癖に意地を張って、と呆れたように溜息を吐くジェレミーを、ユーイは睨んだ。

「言っておくが、今回の事を取り決めたのは俺じゃない。ユリウスの馬鹿だからな」

「ユリウス殿下ですか」

眉をひそめ、顎に手を置き思案するジェレミー。

連絡を貰ってから情報収集に走らせていたはずだが、その服装には一分の乱れも無い。

机に山と詰まれた資料を漁っているユーイとは、大違いだ。こっちは着替える暇も無く働いていたというのに。何なんだその余裕は。

「何をお考えだったかは大体想像はつきます。ですが、1つ、貴方方の予想していない不味い事態が起こっているかもしれません」

「随分脅すな」

「ウィガー預かりの異世界人、カガミ・イブキの話によると、彼の飼うヴィーダにクルーセルが使われたらしいのです」

クルーセル。

ヴィーダを惑わす魔草の1つだ。

「ヴィーダの中毒症状は深刻で、現在病院にて治療中だとか」

何故そんな真似をしたのか。ヴィーダが覚醒した敵対者を嗅ぎ付ける能力を持つていることを思えば、おのずと答えは出て来る。

「近くに敵対者がいるってか」

「あそこにはイブキがいますから。彼の兄が接触を試みようとしている可能性はあります。ですが、僕の勘では別口ですね。教会に現れたという敵対者……、目撃者の証言が確かならば、変体可能のところまで侵食が進んでいた。ウィルドの核が盗まれて、1月も経っていないに関わらず。もう1つの気がかりは、変体可能な敵対者としては被害が少なく、あつさりと倒されている、その弱さです」

菊乃が敵対者に有効な特別な力を持っている。

その可能性も無くは無いが、一連の事実を照らし合わせると、敵対者自体が弱体化していたと考えた方がしっくりくる。

それは、ユーイも分かっていた。

「ここからは完全な推測でしかありませんが、奴らは敵対者の核を分裂させる事に成功したのでは」

それは既に、実現困難として停止された研究だ。

「本来は、敵対者を無力化する為の研究でしたが。彼らは敵対者の増産が目的なのかもしれません」

## 菊乃の窮地 2

同じ世界に生きているのに、許されない。

同じ心があるのに、認められない。

異質だから。

その悲しみを、痛みを、怒りを、誰よりも知っている。

連れて行かれたのは、砂漠だった。息が白く凍える程の冷えた砂の海が、突然切り替わった。リモコンでテレビのチャンネルを変えたみたいに、一瞬で、そこは砂漠から泉を隠した小さなジャングルへと変わった。

白い石で出来た大きな白い建物が遠くに見える。そんなに大きく無い、四角い箱のような建物だ。

先を歩くルーミケラウスは、菊乃に現状を把握する猶予も与えてくれなかった。

「のんびりしてる時間はないわ。さつさと来て」  
心なしが、言葉も刺々しくなっている。

隣に立つ、黒い豹の姿になったハルラックと視線を交わし、彼女について歩き出した。

（巻き込んでごめんなさい）

そんな思いを込めて、獣の首の辺りを撫でると、気にするなともいうように頬を寄せられた。艶やかな毛並みは肌触りが良く、菊乃の気持ちも落ち着かせてくれる。

砂に足をとられながら、何とか白い建物の前にたどり着いた。何の装飾も無い、白い石を積み上げ塗り固めたような壁。中心にある金属製のドアに、ルーミケラウスは手を当てた。ずぶり、と指の先が黒っぽい金属の中に沈み込む。

ぎよつとして見てみると、かちかちと音がして、ドアが開いた。ルーミケラウスは埋まっていた指を引き抜くと、何でもないので顔を振り返る。

「入って」

思わず目で追った指の先は白のまま、汚れたりはしていなかった。どうなっているんだろう、あのドアは。

気になったが、触る勇氣は無い。

促されるまま建物の中に入った。暖かい空気に触れてほっとする。あの冬のような寒さの中、長袖とはいえ寝間着の薄い服で過ごすのは、厳しかった。

建物の中は白い壁でいくつかの部屋に区切られているようだった。玄関みたいなものはなくて、いきなり狭い通路が奥へと続いている。通路の両脇は白い壁。金属製のドアが交互に8つほど並んでいる。1つのドアに1つの部屋があるのだとしたら、そんなに広い部屋では無さそうだ。

こつこつと、足音がよく響く。

ルーミケラウスは入り口から数えて3番目のドアの前で足を止めた。今度は指を突っ込んだりしなかった。ドアに掛けられていた銀色の鎖を外すだけで、開いた。

ドアが閉じないように押さえながら、ルーミケラウスは菊乃達を呼んだ。

このまま、捕まってしまうても良いものか。今ならば、逃げられそうな気がする。ハルラックが一緒なら。

どうする、と問うように、ハルラックの餞色の瞳が、菊乃を窺う。

「……人がいる、中から血の匂いがする」

「え」

『この匂いには覚えがある。……ハイネス・ユーゴだ』



菊乃は目を見開いた。

事件以来、行方不明になっていたハイネスがここにいる？考えるよりも先に、足が動いていた。ドアに駆け寄り、中を覗く。縦に細長い部屋だった。その奥に、壁にもたれるようにして俯く人影が見える。

高い小窓からの月明りだけでは、暗くて良く分らない。

意を決して、菊乃は部屋に足を踏み入れた。ハルラックも後ろからついて来る。

褐色の肌に、青く光る銀の髪。

近づくにつれ、血の匂いが濃くなった。投げ出された両足首に鉄の枷が嵌められている。顔には何度も殴られたような痣があり、服の下から滲む血が、布を赤黒く染めていた。

「……酷い」

声が震える。

硬く目を閉ざしたまま、ぴくりとも動かない姿に恐ろしくなった。

「ハイネスさん？」

膝を付き、呼びかけるが返事はなかった。

薄く胸が上下しているものの、呼吸は浅い。すぐに病院に運ばないと、死んでしまうかもしれない。

振り返った先で、ドアが閉められるのを見た。

「ルーミケラウスさん！」

思わず叫ぶ。

「ハイネスさんを、病院につれて行かせてください！」

「残念だけど無理よ、今は困るの」

「困るとか、そんな事言っている時では無いです。このままじゃ、ハイネスさんが……弟、ですよ？どうして、こんな」

「弟だから、助けてあげたのよ。本当なら、もう死んでるところだった。大丈夫よ、そんなに簡単に死ねるなら、私たちもこんなに苦しまずに済んだわ。心配するなら、自分の身を心配しなさい」

声が足音と共に遠ざかっていく。最後の方は良く聞き取れなかった。その後、何度呼んでも、彼女は帰ってこなかった。

ドアは頑丈で、とても壊せそうに無い。部屋にたった一つの窓は高い位置にあり、菊乃でも抜け出せそうに無いほど小さかった。

『傷を見る。キクノ、手伝ってくれ』

早々に出る事を諦めたハルラックに呼ばれ、菊乃はハイネスの元へ戻った。言われるまま、力の抜けた男の体を横たえる。意識の無い成人男性の体を動かす事は、かなりの重労働だった。

触れたところの体温がびっくりするくらい熱い。40 近いのではないだろうか。

「熱が、あります」

『傷口から細菌が入ったのかもしれない。傷口は深いが…、血は止まっている』

服を破り、傷口の一つ一つを確かめる。獣の姿での作業は、大変そうに見えた。人に戻っても、着る服が無いからそのままにいるのだろうか。

菊乃は辺りを見渡した。

隅に毛布が何枚か重ねて置いてある。少し埃を被っているが、匂いは問題無さそうだ。

「……ハルラックさん、あの、良かったらこれを」

黒い豹は、菊乃の差し出した毛布を見下ろした。何ともいえない沈黙の後、小さく溜息が聞こえた。

『……裸よりはマシか』

申し訳ない気持ちになりながら、菊乃は後ろを向いた。

「キクノ、ここに水を」

むき出しになった皮膚に、痛々しい傷跡があった。赤黒い血で固まった傷口を、なるべく直視しないようにして手を翳す。目を閉じて、身の内の揺らぎに意識を預け、水を引き出す。

ふわつとした水の塊が宙に浮かび、傷口を包み込むように鎮座した。

大分上手くできるようになった。傷口を洗うのに水がいる、とハルラックに言われて試してみたところ、あっさりと水を出すことができたのだ。

但し、加減ができなくて、床が水浸しになってしまったが。何度か繰り返す内に、コツがつかめてきた。

「君の呼び出す水には、ミリニエルの加護がある。きっと、この男を助けるだろう」

「ミリニエルの加護？」

「俺の世界にいる水の女神だ。癒しと浄化の力を持つ」

そうやって傷口を清潔にしたあと、乾いた布を当てる。これは適当な布が無かったため、菊乃の着ていた寝間着を破いて使うことになった。足首までの長さがある寝巻き用のワンピースだった事が幸いしたが、お陰ですっかり短くなってしまった。

包帯の代わりは、毛布の下にあった麻袋のようなもの。粗く編まれた紐を解いて、使用した。

ハルラックの見立てで折れているという右手の親指と人差し指、それから橈骨を添え木を当てて固定する。添え木には、ハイネスのベルトについていた金属の板を使わせてもらった。

熱が大分高いようなので、毛布を裂いて濡らし、額と首の後ろ、脇の下に当てておく。どこの世界も、必要な措置は変わらないようだ。

「ここでできる事はこれくらいだ。少し、眠った方が良い」

ハルラックの気づかずに、菊乃は小さく首を横に振った。疲れていたが、眠くは無い。床に敷いた毛布の上で、苦しげな呼吸を続けるハイネスを見つめて、菊乃は膝を抱いた。

目を離したら、その間に彼が死んでしまうような気がした。

「キクノ……、彼はおそらく死なない」

そんな菊乃を、ハイネスから遠ざけるようにハルラックは腕を回した。背後から抱え込むようにして、引寄せられる。

『気をしっかり持て』

いつの間にか、ハルラックは獣の姿になっていた。暖かい毛皮に包まれて、ほんの少し緊張が緩んだ。

『あまり彼には近づかない方が良く。彼からは、青の血族の匂いがする』

### 菊乃の窮地 3

青の血族？

聞きなれない言葉がまた出てきた。問いかけるが、返事は無かった。代わりに。

『目覚めるぞ』

と、少し緊張気味の低い声が聞こえてきた。するり、と横を通り抜けた黒い毛並みが、菊乃の前に立つ。そこに立たれると、何も見えない。多分、態とそうしたのだろう。

菊乃に見せたくない何かがある。あるいは、何かから菊乃を隠したいのかもしれない。その何かは、ハイネス・ユーゴの他に思い当たらない。この部屋にはその3人の人間しかいないのだ。目覚めるぞ、とハルラックは言った。

ハイネスが気が付いたのなら、それは喜ばしい事だ。何故こんな状況になるのか、分からない。分からないが、それを説明してもらえそうな状態ではない事は、菊乃にも分かっていた。

『傷ついた青の血族は厄介だ。手加減はできない……君が、望まなくても』

どういう意味。

ハルラックが低く喉を鳴らす。

一瞬体勢を低くして、それから前へと飛び掛っていった。俊敏に動く大きな黒い体が遠ざかった事で、漸く菊乃にもハイネスの姿が見えた。ゆらりと頼りない足取りで立っていた青年は、次の瞬間飛び掛ってきたハルラックに向って牙を剥いた。

かっと思開かれた紫の瞳が一瞬で赤く染まる。

獣の姿をとっているハルラックの鋭い爪を飛び退いて交わす。そ

の動きは、運動神経が良いでは片付けられないようなものだった。異世界人だから、なのか。

横に飛び、壁を蹴って回し蹴りを食らわすハイネス。身を捻って交わした直後、ハイネスの足に食らい付こうとするハルラック。

目まぐるしく繰り広げられる争いに、菊乃はその場を一步も動けなかった。

どうして。

何故こんな事になっているのか。

思考が停止している間も、ハイネスがハルラックの体を殴打し、ハルラックの爪がハイネスの体を傷つけている。

獣の姿になっているハルラックと同等の動きを見せるハイネスだったが、時間が立つにつれ若干動きに陰りが出てきた。当然だ。ついさつきまで、酷い怪我と高熱に魔されていたのだ。激しく動いた事で、閉じていた傷口も開いたらしく、当てていた布にも血が滲んできている。

このまま続ければ、ハイネスは今度こそ死んでしまつかもしれない。

(止め、ないと)

呆然としている場合ではない。漸く動き出した頭で、必死に考える。止めたくても、激しくぶつかり合う2人の間に割って入る事はできそうにない。動きを目で追うので精一杯だ。

何か自分にできること。

思い至るのは、1つしかない。

目を閉じて、深呼吸をする。自分の中の揺らぎに意識を集中し、ありったけのものを引き出した。

「！」

次の瞬間、菊乃は水の中にいた。

自分でやったにも関わらず、一瞬水を飲んでしまった。顔を上に向け、地面を蹴って水面を目指す。

やりすぎた。

何とか水面に顔を出し、呼吸をする。床に足が着かない。長細い部屋は、今や大きな水槽のようになっていいる。

「……キクノ」

同じように顔を出したハルラックの、物言いたげな視線を感じた。

「ごめんなさい」

「……いや、良い。これで良かったかもしれない」

一言も責めない、彼は優しい。

「この水にはミリニエルの力が宿っている。これだけあれば、青の血族に足りるだろう」

青の血族……ハイネスは未だ水面に上がってこない。まさか、泳げないのだろうか。いや、そういえば彼の両足には鉄枷が付けられていた。あれでは、泳げても上がってこれないかもしれない。不安に駆られた時、思ったよりも近い位置に頭が出た。

丁度、ハルラックと菊乃の間辺りだ。

濡れた銀の髪を鬱陶しそうに払い、ハイネスは菊乃を見た。背筋に緊張が走る。合わさった目の色は、冷たく澄んだ紫。以前と変わらない鋭い眼差しの中に理性の色を見つけて、菊乃はどうしようもなく安堵した。

「……これはお前の仕業だな？」

許可の無い能力の行使は、保護法違反に当たる。

「すみません」

また、保護施設行きかもしれない。

「いや。……助かった」

言われた言葉に耳を疑う。目を丸くする菊乃に気がつかず、ハイネスは辺りを見渡した。

「それで？何故お前達がここにいる」

『お前の姉に連れてこられた』

直球だ。

どう言おうか迷っていた菊乃は、どきりとした。

「……………あいつは今どこにいる」

『さあな。俺とキクノをお前の餌代わりに放り込んで、どこかへ行った。行き先なんか、俺達に分かる筈が無い』

ハルラックがやけに刺々しいのは、気のせいだろうか。

2人の間に流れる空気が冷たい。

今までの事を考えれば無理はない。一度はハイネスに捕まっていたし、その上先程は手当てしたのに襲われた。何であんな事になったのか分からないが……………、そろそろ辛くなってきた。

険悪な雰囲気よりも、ずっと立ち泳ぎしているこの状態が。

この水は普通の水ではないようで、最初は楽に浮かんでいられた。それが、途中から徐々に体が沈むようになり、今はちゃんと手足を動かさないと、浮かんでいられない。

そんな理由で、2人の会話に口を挟む余裕は無く、必死に泳いでいたのだが。

「……………つぶ」

一度沈み、顔を出して息を吸う。

自分の出した水で溺れるなんて、情けない。虚しい気持ちで、もう一度沈みかけたところ、力強い何かに引っ張り上げられた。

「！」

目の前に、濡れた銀の髪を見つけて瞠目する。

引っ張り上げてくれたのは、どうやらハイネスの片腕だ。菊乃の背に回し、水に沈まないように支えてくれている。

「あ、ありがとうございます」

「……………全くお前は、手がかかる」

近くにある紫の瞳を、どうしても直視する事ができなかった。教



会でもこうして、助けられた。あの時、自分を支える体温に、どれだけ安堵したか分からない。

しかし、今は。

安心よりも落ち着かない気持ちの方が強い。

目が見えているせいも、その距離の近さを意識してしまう。単に、助けてもらっているだけだと分かっているが。

冷静になろうと務めていても、徐々に顔に熱が集まってくるのを感じていた時。

『……………キクノを離せ』

低い声が聞こえた。

ハルラックの声だ。いつの間に菊乃の背後に移動していたようだ。その体を支えるように押し上げられる。

『青の血を受け継ぐお前に、キクノは預けられない』

『……………』

敵意すら感じるようなハルラックの言葉に、ハイネスは不快そうに眉を寄せた。だが、ゆっくりと腕が外される。

ハルラックの背に支えられながら、菊乃は困惑していた。先程から出る青の血とは何の事だろう。2人の間では通じているようだから余計に、聞き難い。

だが。

「青の血とは？」

疑問を口にしたのはハイネスだった。分かっていたいなかったのか。

『思い当たるところはあるだろう。他者の命を吸い上げて、その身の力とする者達だ。戦場になれば、ただ1人生き残る者』

『……………』

他者の命を吸い上げて。先程もそんなような事を言っていないかったか。この水には力があるから、青の一族にも足りるとか、そんな

ような事だ。近づくな、とも言っていた。

他者の命を吸い上げる……、食べられるとかそういう事だろうか。

先程、正気を無くして襲い掛かってきたのは、その為？

『だからこそ、敵対者に出会っても生き延びた』

分かるのは、凍りついたようなハインズの瞳が、やけに辛そうに見えたことだけ。

「あの、ここ出る方法探しませんか？このままだと、辛いです」

と、この部屋を水槽みたいにしてしまった張本人が言うのも、何だけれども。

青の血族や、ハイネスについての話は気になるが、この険悪な雰囲気は嫌だった。それに何より、ハイネスのあんな目を見てしまつたら。

誰にだって、触れられたく無い事はある。

「……少し待て」

「え？」

問いかける暇を与えず、ハイネスは水の中に潜っていた。何度か金属がぶつかるような音が響き、程なくして、がこつと何かを外れるような鈍い音がした。同時に、水面が揺れ、留まっていた水が、どこかに向つて流れ始める。その勢いに巻き込まれそうになる菊乃を、ハルラックが襟首を口で啜えて捕まえていてくれた。

みるみる水かさが減っていく。

やがて床に足がついた。流れに足をとられそうになるので、菊乃は必死にハルラックの背中にしがみ付いていた。

水が足首の辺りまで減つて、流れも緩やかになつたところで漸く何が起きたのか理解した。部屋の入り口にあつた、金属製の扉が外されている。それを見た時は目を疑つた。

あんなに頑丈そうで重そうなドアを、一体どうやって外したのか。ハルラックでも、びくともしなかつたのに。

見たところ、ハイネスの方がハルラックよりも細身に見える。背丈もほんの少しハルラックの方が上だ。それほど力に差があるよう

には見えない。何か道具か、武器を隠し持っていたのだろうか。

当のハイネスは涼しい顔で、倒れたドアの上に足をかけ、持っていた鉄の枷を部屋の隅に放り投げている。

「行くぞ」

「え、あの、ハイネスさん、怪我は」

「……もう治っている」

信じられないが、本当のように聞こえる。

つい先程まで怪我と熱で死に掛けていた人には、とても見えない。骨折していた箇所に着いていた添え木も、いつの間にか外されていた。

混乱する。

この世界の人間は、怪我の治りが早いのだろうか。

建物の外に出ると、すっかり明るくなっていった。日が高いところに上っている。昨晚とは打って変わって気温が高い。日差しも強く、肌がじりじりと焼けるようだ。

この分なら、湿った体もすぐに乾くに違いない。

「被っている」

と、ハイネスに渡されたのは、茶色い毛布だった。水を吸って重いが、これもその内に乾くはず。

「町の方角は分かるか」

『ああ』

「では行け」

行け、とそう言ったハイネスの顔を、菊乃はまじまじと見つめた。

「ハイネスさんは？」

「俺は彼女を追う」

彼女とは、ルーミケラウスのことだ。それ以外に考えられない。

「遠くには行っていない筈だ」

『追って、どうするんだ。彼女は既に、敵対者に侵されている。望』

みは無い』

乾いた風が吹いている。舞った砂埃が、ほんの少し目に入って痛い。

「知っている。望み等、もうずっと前から途絶えていた」  
乾いた声。

ハイネスの凍て付いたような紫の瞳の奥で、怒りと悲しみが交互に揺れる。胸の奥が、ぎゅっと掴まれた様に苦しかった。

「終わらせるのは、俺の役目だ」

淡々と吐かれた言葉に、彼の絶望の深さを知る。終わらせる、と彼は言った。それは、彼の姉、ルーミケラウスのこと？

敵対者と呼ばれるものの事を、菊乃はまだ完全に理解していない。異世界人にくつついてこの世界にやってくる、寄生虫のようなもの。寄生した相手を取り込んで、恐ろしい力でこの世界を壊そうとする。そういうものだと思っていた。

一度そうなったら最後、もう寄生された人間ごと殺すしかない。

ルーミケラウスは、ハイネスのたった一人の肉親だ。

彼は彼女のために立場を捨てて、身を隠していたのに。

「ハイネスさん……」

「……そんな目で見るな。お前から、同情はされる覚えは無い」

鋭い視線に、憎悪の色が見えた。血の気が下がる。（傷つけた）  
そんなつもりじゃなかったけど、どうしようもない自己嫌悪が湧き上がった。

（私は、いつもそうだ）

苦しくなつて、下を向く。

他に方法はないんだろうか。

言ってしまった言葉が堪えた。もしもあるのなら、そんな悲壮な顔はしない。誰よりも、他の方法があればと思っているのは、き

つとハイネスだ。

『お前1人に、敵対者を斃せるとは思えない』

「……耳に挟んだ情報が確かなら、敵対者の力の源は分かたれた。本来のものよりも、弱体化している筈だ」

『なら、教会に出たというあれも？』

「おそらくは。……町にはまだ他にも数体潜んでいる筈だ。何を、狙っているかは知らないが。町に戻ったら、ケラスに報告しておけ」  
その言葉に、弾かれたように菊乃は顔を上げた。

「ハイネスさんは……」

続く言葉を口にすることが、酷く怖かった。

「戻りますよね？」

ここで一緒に戻らなくても。一人でルーミケラウスを追って行ってしまっても。

終わらせる、と言った。

ルーミケラウスを終わらせて、その後は。ハイネスはどうするのだろう。いつまで待っても返事はなかった。けれど、菊乃は知っている。ハイネスは、もう戻らない気でいるのだと。

目が痛い。

しつこく吹く風が、その辺りの砂を巻き起こしていくから。

どうしてこんな気持ちになるのだろう。

不安で、怖くて、哀しい。痛いのは目だけではなくて、胸の辺りが苦しかった。何も言葉を残さないまま、ハイネスが歩き出す。儂い砂に残した足跡も、すぐに風が消し去ってしまう。

いなくなるんだ。

さらさらと、流れて消える足跡を見つめる。

おいていかないで。

もう少しで叫びそうだった。そんな風に言っただけで仕方がないと分かっているのに。菊乃とハイネスには、何の繋がりもない。でも。

そのまま、黙って見送ることはできなかった。ハイネスの背中を追って、走り出す。その後を、獣の姿のハルラックが何も言わずについて来た。

「……何のつもりだ」

ハイネスは、暫く歩いてから足を止め、冷めた目でついてくる二人を睨みつけた。

「一緒に行きます」

「俺が何をするか不安か」

「心配です」

訝しげに眉根を寄せて、ハイネスは菊乃を見つめる。

「町に戻らないのは、良いです。寂しいですけど、ハイネスさんの自由だから。でも、死ぬのはダメ」

「……………」

「ハイネスさんは、お姉さんを終わりにしたら、自分も一緒に死ぬつもりなんでしょう？違う？」

温度のない瞳に見つめられて、居心地が悪い。凶々しく、他人の心に踏み込むような言葉を吐いていると分かっているが、黙っていることはできなかった。

「私、少し分かります。私も家族は、お母さんだけ。ずっとそうだったから、新しい家族ができた時、お母さんが新しいお父さんと結婚した時、私だけ、一人になったみたいで、寂しくて。ほんの少し、帰りたくないなって思ったなら、ここに来てました」

もうずっと、前のことのような気がする。

「ここには、本当に誰もいなくて、今度こそ本当に一人で、怖くて寂しくてどうしようって、ずっと苦しかったです。でも、助けてくれる人もいて。ハイネスさんも、そう。一番辛くて哀しい時に、私

を助けてくれたんです」

菊乃を認めてくれた。

ハインスにしたら、大した意味は無いことだったのかもしれない。誰かの代わりだと、そんなような事を言っていた。しかし、それでも嬉しかったのだ。

「ハインスさんが死んだら、私は悲しいです」

憎むべき敵でも見るような眼差しが、一瞬だけ揺れる。瞬き後に現れたのは、拒絶の色だった。

「助けたかったのは、お前じゃない」

「うん……知ってます」

知ってはいたのに、改めて言われるとやはり胸が痛かった。

「でも、もうそういうのは良いんです。私は、私が見たいようにします」

こちらを睨むハインスを、菊乃は真っ直ぐに見返してそう告げた。



したいようにする、そう宣言した菊乃を、ハynesは無視することにしたようだ。さっさと歩いていく彼の背中を追いかけて、菊乃は走った。ただでさえ砂の上は歩き辛い。足の速いハynesについていくのは、大変だった。

毛布が邪魔で仕方が無いが、取ると日差しで大変な事になりそうな気がする。着ているものは、寝間着である薄い生地ワンピース一枚。それも、ハynesの怪我を手当てする為に、破いてしまっている。

色んな意味で、毛布を外すことができない。

『辛かったら言うの良い。俺が運ぶ』

そう、ハルラックが言ってくれるが、甘えるわけにはいかなかった。ただでさえ、迷惑ばかりかけている。

「大丈夫、です。あの、ハルラックさんは、町に戻っても」

そう言うと、呆れた目で見られた。

『……俺は君の護衛だ。1人では戻らない  
はつとする。』

菊乃を守る事が彼の仕事だったことを、すっかり忘れていた。

「ごめんなさい。私の、我侭で、迷惑と危ないことに巻き込んで」

『そうじゃない。……悪かった。少し意地の悪い言い方をした。本当は違う、護衛でなくても同じだ。俺は君と来たと思う。だから気にしなくて良い』

「ハルラックさん……」

『それに俺も、彼らの事は気になっている』

そう言うと、ハルラックは菊乃の方へ体を寄せた。

『乗れ。見失うぞ』

少し話している間に、大分距離が開いていた。

「ありがとうございます」

ここは、素直に甘えることにする。本当に、いつも助けられてばかりだ。肌触りの良い毛皮にしがみ付き、菊乃は誓う。いつか、彼が困った時は、絶対に力になろうと。

\*\*\*

菊乃1人なら何とでもなっただろうが、ハルラックの方は厄介だった。少女を乗せて、彼の後について来る黒い獣を振り返り、ハイネスは眉を顰めた。

一体、どこまでついて来る気なのか。

折角助かったのだから、さっさと町に戻り保護してもらえば良いのだ。

態々、厄介ごとに関わろうとする菊乃の気が知れない。

死んで欲しくない、そんな風に他人に言われたのは初めての事で、少なからず動揺した自分に苛立ちを覚える。

気がついた時には、姉と2人で生きていた。

母も父もおらず、教会で必要最低限のものを与えられ生かされていた。いつも、餓えていた気がする。食事だけでなく、色々なものに。

他の子供と違う自分達の境遇。その理由を知ったのは、6歳の頃だった。どうして僕達には父さんや母さんがいないの。そう無知な彼は姉に尋ね、彼女を困らせていた。何かを我慢するような、歪んだ顔の意味を知った時の後悔は今も忘れない。

ハイネスは生まれてくるべき子供ではなかった。

難産の末、生まれた赤子は死んでいた。心音が聞こえず、体温も徐々に失われていっていたという。母親は泣きながら赤子の額に頬

を寄せた。

「ハインス」

新しい家族の為に用意しておいた名前。それが、彼女の最期の言葉となる。数分後、死んだ母親の胸で、死んでいたはずの赤子が産声を上げた。

時折村に生まれる、シンセ、篡奪者と呼ばれるもの。

それは村の秘密であり、外界との接触を控え、ひっそりと生きている理由でもあった。

触れた者の命を奪い、自らの糧とする者。人よりも丈夫で、桁違いの身体能力を有する。そして、重症な怪我等の命の危機に晒された時に、他者の命を糧としてその身体を維持する。

かつて、村に混じった異世界人の血のせいだ。

ユーグリッドの村には、数種の異世界人の血が脈々と受け継がれていた。時には祝福を、時には呪いを。ユーグリッドの村は、異世界人の血に囚われていた。

ハインスの姉、ルーミケラウスにもその力が宿っていた。最も、ハインスに比べれば微小なものだったが。2人の父は子供を捨て、村を出た後二度と戻らなかった。親戚にも背を向けられ、2人は教会に預けられる。

厄介な子供2人を、生かしてくれただけでも奇跡なのだと思う。本当なら、そのまま見捨てられていても不思議ではなかった。

かつて、この村が異世界から来た怪物に襲われた際、助けたのがそのシンセだったという話もあるから、そのせいかもしれない。

ただ生かされていた。

殆ど誰にも声を掛けられないまま。傷つけられたことはない。い

ない者として扱われることに、ハイネスは慣れ、ルーミケラウスは慣れなかった。

ルーミケラウスはいつだって、渴望していた。自分を認めてくれるもの、求めてくれるもの、愛してくれるもの。自分と同じ弟を守り慈しみながら、自分を守ってくれる存在を求めていたのだと、今なら分かる。

水害と一緒にやってきた世界喪失者。

ヤガセという若い男を、最初に見つけたのはルーミケラウスだった。彼女はすぐに夢中になった。言葉を知らず、事情も知らないヤガセは両親のいない子供2人に優しくかった。明るく声を掛け、一緒に遊んだ。

下心のようなものは無かったと思う。

早熟で、美しい顔をしていたとはいえ、ルーミケラウスはまだ12の子供で、ヤガセは20を越える大人だった。だからこそ、ルーミケラウスは安心して甘えていたのだろう。錯覚のような淡い恋心は、いつしか深く彼女の中に根付いていた。

ヤガセはハイネスのことも可愛がっていたが、彼に対する思いは複雑なものだった。親切にしてくれる大人等いなかったから、その好意は嬉しい。だがそれよりも、たった1人の姉を取られてしまうような不快な気持ちが勝る。

「もう、ハイネったら、どうしてヤガセに失礼な態度取るの」

2人になると、いつもそう叱られていた。

「あんな事してたら、嫌われちゃう」

膝を抱え、不安そうに呟いていた事を今でも覚えている。あの頃が、彼女にとって一番幸福な時だったのだろう。それは、長くは続かなかつたけれども。

半年を過ぎた頃から、ヤガセの様子がおかしくなった。最初は、

本当にごく偶に。うつろな目をしてぶつぶつと呟いたり、何日も眠り続けたり。その内に、暴力的な行動を取るようになった。

衝動的に暴力を奮い、すぐに我に返っては酷く狼狽し、謝罪する。泣きそうな顔で、何度も何度も。

その内に塞ぎこみ、人を避け部屋に閉じこもるようになった。

誰にも言わないのよ、病気って事にするの。

そう、ハインスに言いつけたのはルーミケラウスだった。一緒にいる事が多かったから、真っ先に異変に気がついたのは彼ら姉弟で、他の人々は長く気がつかなかった。

敵対者。

その頃、ハインスはその存在を知らなかったが、多分ルーミケラウスは知っていた筈だ。でなかったら、口止めなどしないだろう。

村の他の者達が敵対者の存在に気がついた時には、既に全てが手遅れだった。

敵対者は、周囲のものを歪める。人の運命さえも。

けれど、時々思うのだ。

彼女の運命を曲げてしまったのは、他の誰でもなく、自分ではないのかと。

ハインスの中に流れる忌まわしい異世界人の血。敵対者。異世界人は、いつも彼を煩わせる。

サカマキ・キクノも、そんな異世界人の1人だった。

無力で、無知で、周りに翻弄されるしかない少女。常に自分を押し殺し、固く表情を凍らせて、その身を守ろうとしているように見えた。たった、1人で。

その姿が、自分と、ルーミケラウスに重なった。

だからだ。

菊乃自身の事等、見ていなかった。彼女を通して、違うものを見

ていた。

(だから、言うな)

助けたかったのは、彼女じゃない。

(死んで欲しくないなど……俺に)

何も知らないくせに。ハイネスがどういう人間で、どんな風に生きてきたか。どれだけ、人を殺してきたか。

(今更)

希望など知りたくない。

それは単にこの先の絶望を深くする為のものでしか無いのだから。

## 菊乃の窮地 6

遠くへ行こうと思っていた。

誰にも見つからないほど遠く。すこしづつ、自分の意識が侵食されていく。怯える気持ちも徐々に削られていくようだった。

こんな風だったのか。

大好きだった、優しくかった人の事を思い出すと、ほんの少しだけ自分が戻ってくるような気がする。

遠くへ。

彼も行こうとしていた。遠ざけられたのは、嫌われたせいではない。きつと、助けようとしていたのだと、今ならば信じられる。

幸福な夢を見たのは一瞬で、意識は再び塗りつぶされる。暗い、冷たい感情に胸が締め付けられた。凶暴な気持ちになったかと思えば、次の瞬間孤独と不安に押しつぶされそうになる。

寂しい、寂しい、寂しい。

1人は嫌、1人にしないで。

誰か。

儘なら無い自分の感情を持て余す。聞いていた以上に、進行が早い。1日、抑制剤を飲まなかっただけで。

こんな風に、感情に振り回されるのは不快だった。苛々と爪を噛む。

人に制御できる程度の力へと変えたのだと、教えられていた。他の人がどうかは知らないが、ルーミケラウスは信じていない。異世界人が神の遣いだとも思っていないし、そもそも神がいるとも思っていないかった。

シユターク教派にいたのは、ごく個人的な願いの為。  
そして、敵対者の核を受け入れたのは、かつて愛していた人への  
贖罪の為だった。

\*\*\*

前を歩くハイネスから一定の距離を取って、菊乃とハルラックは  
歩き続けていた。

どれだけ時間が経ったか分からない。

高いところにあつた日が徐々に傾いて、今は砂の海に沈もうとし  
ている。少なくとも、5、6時間は歩き続けているかもしれない。  
幸い、水は出せるので水分補給はできているが、食事は取れていな  
い。

その上歩き続けているから、もう足が棒のようになっていた。今  
にも倒れてしまいそうなところを、歯を食いしばってついでいく。  
ここで菊乃が倒れたとしても、彼はそのままどこかへ去ってしま  
うだろう。

決して、足を止めることなく。

こちらを振り向こうとしない背中に、彼の怒りの深さが透けて見  
えているような気がしていた。

助けたかったのは、お前じゃない

その言葉が、耳の奥にくっついて離れない。

今彼は、菊乃を助けてしまった事を後悔しているかもしれない。  
冷えた瞳の奥に根付いている、暗い憎悪。

自分がどれだけ勝手な事を言っているのか分かっているつもりだ。  
一刻も早く、姿を消した身内を探しに行きたいだろうところを、  
こうして邪魔して。誰にもいて欲しく無いだろう場所へ、同行しよ



うとしている。

人の顔色を窺うようにして生きてきた。

今までの菊乃なら、決してそんな真似はしなかっただろう。誰かの邪魔になるくらいなら、嫌われるくらいなら、心が疑問を唱えていても黙っている。余計な波風はできる限り立てたくない。

しかしそんな風に流されていたら、決して望む事は叶わない。

嫌われても、憎まれても、ここで最後になるよりずっと良い。ハインスを1人で行かせてしまったら、きつとずっと後悔する。だから。

『来たぞ』

それまで黙っていたハルラックが、初めて口を開いた。低く唸るような声を上げて、菊乃の前に立った。ハインスが足を止める。沈みかけた赤い夕日に染まった砂の上を、ふらふらと歩く女の姿が見えた。

ルーミケラウスだ。

焦点の定まらぬ瞳がこちらを見た。足が止まる。長い黒髪をその体に纏わりつかせ、ぼんやりと立つ。昨晚とはまるで違う、頼りない姿に戸惑う。

敵対者。

恐ろしいものだと思っていたのに、何故かその姿は途方に暮れた迷子のような、寂しげなものに見えた。

「……ルーミケラウス」

労わるような優しい声で名を呼んで、ハインスが足を踏み出す。まるでそれを恐れるように、ルーミケラウスは首を横に振った。

姿勢を低くし、警戒するように唸るハルラックを一瞥し、ハインスが釘を刺す。

「余計な手出しはするな。俺がやる」

『武器も持たずどうするつもりだ』

それには答えずハイネスは、後ずさるルーミケラウスに近づいていった。

「来ないで」

何かを耐えるかのような、弱々しく震える声が言う。

「押し留めておく事は、もう限界なの。分かるでしょ。流石の私も弟を殺したく無いのよ。だから、助けてあげたのに」

「そうか？俺を殺しかけたのも、貴方だったと思ったが」

「そうしなかつたら、組織の人間が貴方を殺していた筈よ。助ける為に、そうしたの。ちゃんと、餌もあげたでしょう？」

ルーミケラウスの熱に浮かされたような赤紫の瞳が、菊乃とハルラックを不思議そうに眺める。

「何故生きているの」

餌とは、自分たちの事なのか。

その意味に気がついて愕然とした。

「ルーミケラウス」

「触らないで！」

伸ばされた腕を、振り払う。一瞬で異様に伸びた爪が、ハイネスの手を傷つけた。飛び散る鮮血が、乾いた砂地に染みを残す。

「ハイネスさん！」

思わず足を踏み出したが、ハイネスの鋭い視線に押し留められた。

「……何故耐える？貴方はずっと、俺を憎んでいた筈だ」

「何、言ってるのよ」

「俺が貴方から母を奪った。父も、他の家族も、親族も。教会で、誰からも振り向かれず生きる事になったのは、全て俺が生まれたせいだ」

「……違っわ、私にもあの力はある」

「俺ほど強くは無い。それくらい力を持つ者ならば、他にもいた。彼らは普通に、村に受け入れられて生活していた」

ぶるぶると、不自然なほど揺れる白い腕で、ルーミケラウスは自分の両肩を抱いた。何かから身を守るように。

「俺が生まれなければ、幸せに暮らせていた筈だ」

淡々と、語られる言葉に、胸が締め付けられる。

「憎めば良い。貴方にはその権利がある」

「やめて。私はそんな風に思っていない。貴方は私のたった一人の弟、もう貴方しかいないのに」

「弟だからと言って、許さなくて良い」

「……やめて」

「自分の中の憎悪を認めろ、ルーミケラウス」

あの時と同じだ。

自暴自棄になっていた菊乃を、海辺に連れて行った時と同じ。我慢せず、心の中に溜め込んでいるものを吐き出せと、彼は言った。

同じ、だとしたら。

ハイネスは、ずっとルーミケラウスに、たった一人の實の姉にすら、憎まれていたことになる。事實は分からないが、少なくともハイネスはずっとそう思っていたに違いない。

どんな気持ちで。

「ハイネスがいなかったら……？駄目よ、そんな風に言ったらヤガセが怒るわ。約束もした。貴方はたった一人の、弟なんだから、私が守らないと」

ぼそぼそと、力の無い声が言う。

「いないと駄目なの。1人になるわ、貴方がいなくなったら、もう誰も。みーんな、いなくなっちゃったんだから。どうして分かって

くれないの。殺しちゃ駄目、殺したら、守るから、大丈夫よ」

「もう良い、ルーミケラウス。例えどんな風に思われていても、俺は貴方を助ける。この力は、きつとその為のものだ」

『……お前まさか』

驚いたように、ハルラックが声を上げた。ハインスは答えず、苦しむように胸を押さえ、蹲っているルーミケラウスにゆっくりと手を伸ばした。

『敵対者の力を吸収するつもりなのか』

それがどういふ事なのか、菊乃には分からなかった。

ただハルラックの声音から、不吉なものを予感して、不安な気持ちでハインスを見つめる。彼は壊れ物を扱うかのように、ルーミケラウスの肩に触れた。

小さく震える彼女の肩を励ますように撫で、背中に手を下ろす。

丁度半ば辺りで手を止めると、ルーミケラウスの体が大きく震えた。

「う、が、ああ……っ」

苦しげに身を捻り、呻く彼女を地面に押し付けるようにして、ハインスは背中当たてた手を固定する。

硬く目を閉じ、眉間に皺を寄せ、何かに耐えるかのように歯を食いしばったハインスの額に、汗が滲む。

低く喉を鳴らしながら、ハルラックが足を踏み出す。

「ハルラックさん？」

『……行かないと。止めるべきだ』

緊張した声で、ハルラックが囁いた。

『敵対者の力は毒だ。例え青の血族であろうとも、変容は避けられない。万が一2つの力が合わされば、最悪な結果になる。……どちらにしても、彼は死ぬだろう』

死ぬ？

どくん、と胸の奥で何かが脈打つ。

そんなのは嫌、強く思う心に応えるように眠っていたものが目を覚ます。

何かを選べば、何かを失う。

誰かが自分の名前を呼んでいる。

酷く怒って叫んでいる声も聞こえる。何を言っているかまでは分からない。全部の音がとても遠く聞こえた。目を開けると、もっと不思議だった。全てが淡い虹色の影みたに見えた。人も、地面も、空も。交じり合っている。

良く見れば、少しずつ色が違っていて、辛うじて区別がつく。

そんな中に、ぼつんと黒い染みみたいなものが蠢いていた。

じわじわと伸縮を繰り返すそれは、酷く気持ちが悪くて、不快なものに思えた。

何か怖い。

そう怯える心に、何かが囁く。

大丈夫、もうすぐに還してしまうから。

その誰かの言葉通り、黒い染みはどんどん小さくなっていく。逃れようとするように、激しく伸縮しながら、溶けていく。

もう少しで全部消えてなくなる、その時だった。

強い衝撃が肩に当たり、景色がぐるんと反転する。続いて、背中に衝撃があつて、頭が揺れた。目が回る。気持ちが悪い。細かい泡のようなものが、目の前を飛んでいく。それが眩しくて、菊乃は強く目を閉じた。

「……すぐに止める。ルーミケラウスを殺すつもりか」

真上から降ってきた低い声に、菊乃ははつと目を開いた。頬を擦る、銀の髪。すぐ近くにある怒りを湛えた紫の瞳に、瞠目する。近い。ハインスに両肩を抑えられ、上からのしかかるような形で顔を覗きこまれている。

その状況に、混乱した。

どうしてこんな事になっているのだろう。今までは何をしていたのか、全く思い出せない。

「ハインス、さん？」

掠れた声がでた。喋ると、ぴりつとした痛みが全身を貫く。どうしてだろう、酷くだるい。呼吸をする事すら、苦しいくらいだ。

ハインスは、混乱する菊乃から腕を離して身を起こした。急いでどこかへ向うハインスを、ぼんやりと視線で追う。起き上がる気力すら湧いてこない。

「ルーミケラウス！しっかりしろ、ルー！」

初めて聞くような、焦燥に駆られたハインスの声。

ルーミケラウス。

膝を付く彼の向こうに、倒れている黒髪の女性が見えた。

「キクノ、大丈夫か？」

視界の右から、黒い影が現れる。手で触れられない代わりに、湿った鼻先で無事を確かめるかのようにそっと頬に触れられた。

「ハルラック、さん…わた、し」

「何も喋るな、負担がかかる」

低い声が耳を擦る。

「………すまない。止めるべきだったのに」  
何を。

殺すつもりか、そう言ったハインスの言葉を思い出す。

(私、が?)

背筋が冷えた。覚えていないのに、知っている。自分がしたこと、その結果を。

ハインスはこちらに背を向けて、ぐったりとしたルーミケラウスに必死に呼びかけている。投げ出されたしなやかな腕は、ぴくりとも動かない。ぎゅつと心臓が縮んだ。

ハインスを助けたかった。死んで欲しくなかった。

だから、ルーミケラウスを？

違う、そうじゃない。

そんなつもりはなくて、ただ……、ただ？

『キクノ？』

助けたかった、だけで

ハインスは、生きている。

それなら、良い。望みは叶っている。憎まれても、恨まれても。

(良い筈なのに、寂しい……)

きつと、ハインスは菊乃を許さないだろう。彼にとって、唯一の姉であるルーミケラウスを、もう少して死なせてしまうところだったのだから。

どんな理由があつたところで、事実は変わらない。

冷たい胸の痛みから意識を反らして、菊乃はその体を起こそうと腕に力を入れた。

『キクノ、無理をするな』

ハルラックが焦ったような声を上げる。

「ダメ、おきないと……助け、ないと」

少しでも体を動かすと、鈍い痛みが全身を駆け巡った。全身がいきなり酷い筋肉痛になったかのようなようだ。それでも何とか耐えて起き



上がろうとする菊乃を、ハルラックが鼻先で押し戻した。痛い。

「離して」

『駄目だ。今の自分の状態を分かっていない。女神の力を行使することは、並みの人間には大きな負担となる。特に、君の体には適していない……命を削る行為だ』

適していない、のか。だからここまで体が痛むのだろうか。

『無理をすれば、死んでしまう』

死ぬのは怖い。でも、今は。

「ハルラックさん、お願いします」

こちらを見下ろす黄金色の瞳を見つめて嘆願する。暫くの沈黙の後、ハルラックは折れた。黙ったまま、前足を器用に背中と地面の間に差し込み、起き上がる手助けをしてくれる。

「ありがとうございます」

いつも、いつも彼には助けられてばかりだ。

『……… 本当なら』

呻くような低い声で彼は言った。

『首根っこを引きずってでも、今すぐ病院に連れて行きたいところだ』

ぎしぎし痛む体を引きずって、ハイネス達がいる岩場の影へと急ぐ。

地面に横たわったルーミケラウスの様子を見るハイネスは、近づく気配に気がつき顔を上げた。鋭い視線を菊乃に向けて、威嚇する。「それ以上、近づくな」

後、1メートルほどの距離のところ、菊乃は足を止めた。

「ルーミケラウスさん、ハイネスさんと同じだと言いましたね？ だったら、できると思います」

「……何を言っている？」

言葉で説明するよりは、やって見せた方が早い。そう思って、菊乃は小さく息を吸った。

イメージして、自分の中のものを引きずり出す。

暖かく柔らかい水の気配を感じる。

「！」

次の瞬間、横たわるルーミケラウスの体は、丸い水の塊の中にあつた。息ができなくなると大変なので、顔だけは水の外に出しておく。

ハインスの時は、これでうまく言った筈だ。あの時ハルラックは言っていた。この水にはミリニエルの加護があると。傷を癒すとか、そんな風に言っていた。青の血、というものの意味を未だはつきりと理解しているわけではないが、青の血にもこの水は良く効くとか、そんな事も言っていた気がする。

現にハインスは、あんなに酷い怪我だったにも関わらず治ってしまった。

だから、きつと。

眩暈に耐えながら、水を維持する。

菊乃の意図を理解したのか、ハインスも何も言わなかった。ただ、いつもよりも更に硬い表情で、水に包まれたルーミケラウスの様子を見守っている。

祈るような気持ちで待つが、一向に変化の無いまま、時間だけが過ぎていく。

1秒、1分がとてつもなく長く感じた。

どれだけの時間が過ぎたのかは分からないが、徐々に手足から力

が抜けていくのが分かった。気を抜くと倒れてしまいそうで、歯を食いしばって耐える。

『キクノ、もう止める。これ以上は無理だ』

そんなことない。

菊乃は小さく、何度も首を横に振った。頑なな態度を取る菊乃に、ハルラックは溜息を吐いた。

『……恨むなら、俺を恨め』

濁る意識の中で、そんな言葉を聞く。理解する前に、獣の前足で足を払われた。もう殆ど力の入らない足は、簡単に崩れる。バランスを崩し倒れる菊乃の体を、ハルラックの背中が受け止めた。

菊乃が意識を反らしたことで、溜まっていた水が一気に広がった。音を立てて、乾いた砂地に流れていく。水を一気に吸収した白い砂は暗い色に染まった。

ルーミケラウスは動かない。

もう、一度

ハルラックの背中から、何とか起き上がろうとするが、もうそんな力は残されていないかった。視界が白く濁っていく。誰かが自分の名を呼んだ気がしたが、それ以上意識を繋ぎとめておく事はできなかった。

「キクノ」

紙のように白い顔で、意識を失った彼女の名前を、思わず呼んでいた。責めるような獣の瞳と視線がぶつかる。

数秒の沈黙の後、ハルラックは何も言わずに背を向けた。背中の少女が落ちないように、ゆっくりと歩を進め、去っていく。くたりとした少女の手が、その動きにあわせて力なく揺れる。血の気の失せた唇から、目が離せなかった。

危険な状態である事は一目で分かった。恐らく、長くはもたない。そう考えた途端、奈落に突き落とされたような気分陥った。

何故。

先程から、まともに思考が働かないことに疑問を覚える。

人が死ぬ事など、珍しくも無いことだ。昔から、ハイネスの周りには死が溢れていた。母も、教会の育ての親も、故郷の人々も。異世界人対策本部ケラスに入ってから、命令によって自ら誰かの命を奪ってきた事も少なくない。

それに対して、特に思うところもなかった。

ハイネスにとって唯一意味のある存在は、ルーミケラウスだけだ。他の人間の事など、どうでも良かった筈だ。

特に、異世界人など。

「ハイネ……」

弱々しい声が、自失していた彼の意識を呼び戻した。黒に近い紫の瞳がうつすらと開かれ、ハイネスを見上げていた。

「貴方も、そんな顔をするようになったのね」

そんな顔とは何の事か、ハイネスには分からない。

「……ルー？」

「懐かしい呼ばれ方ね」

力なく、ルーミケラウスは微笑んだ。

「行つて。あの獣が走れないのは、背中の子を振り落としてしまうから。貴方が支えてあげれば、もっと早く走れる。……貴方にも、分かる筈よ。あの子は、長く持たない」

長くは持たない、その言葉にハイネスは眉を顰めた。そんな弟を、ルーミケラウスは弱々しく微笑みながら、じつと見つめる。

「あの子を失つたら駄目よ。貴方は、私のようにならないで」

「それ以上、喋るな」

苦しげな息を吐いて、ルーミケラウスはハイネスを睨んだ。

「姉さんの、最期の言葉くらい、聞きなさい。行つて、あの子を助けるの。それで、貴方を許してあげる」

「……ルー」

「貴方の言う通りよ。私、きっと貴方を憎んでた。でも、ちゃんと愛してもいたの。たった一人の、弟だもの。それだけは、信じて。ほんと……駄目な姉だったわ……ごめんなさい」

「貴方が俺に謝ることなど、無い」

小さく、口の端を上げると、そこから息が漏れた。

「一回じゃ、足りないくらいよ。でも、これで許して。……さあ、もう行つてハイネス」

力ない腕に押されて、ハイネスは立ち上がった。

顔を上げると、まだ視認できる場所に黒い獣の姿が見えた。その背に乗せられた少女の姿も。胸に湧いた焦燥感に気がつき、戸惑った。

（俺は、彼女を失いたくないと思っているのか）

答えの出ない、不確かな感情に突き動かされるように、足を踏み出す。突き詰めて考えたい事は多々あったが、考えている時間はなかった。

一瞬生じた躊躇いを振り切り、ハイネスは走り出した。

\*\*\*

走り去るハイネスの背中を見送る。無事に黒い獣と合流し、去っていくところまで見届けて、目を閉じた。

気温は徐々に下がってきている。

じきにもっと冷え込むだろう。その前に、ここから立ち去りたかった。下手をすれば、町からケラスの奴らがやって来るかもしれない。

十分に時間を置いてから、ルーミケラウスは起き上がった。

あちこち痛いし、吐き気はするし、気分は最悪だ。死ななかつただけ、マシかもしれない。いや、本当にそうだろうか。

「本当に、ごめんねハイネ」

この場にはいない弟に謝罪する。勿論届くことはないが、所詮こんなのはただの自己満足だ。謝られたところで、許したくないことなんて山ほどある。

「あー、でも少し安心したわ。このまま一生独り身で生きていくつもりなのかと思ってたし。折角見た目良く生まれたんだから、ちょっとは楽しめば良いのに」

何であんなに不器用で頑なんだろう。

(私の弟とは思えないわ)

育て方を間違えたのだろうか。そんな事を思って、苦笑する。ろくに育てもしなかつたくせに、偉そうなことを考えてしまった。

(憎んでいる、か)

まさか、見抜かれているなんて思わなかった。誰にもとてもいいない、醜い感情。大切だと思ふ反面、疎ましくて。こいつさえいなければ、そんな風に何度も思った。けれど、彼を失えば、自分を必要としてくれる人は誰もいなくなる。

(愛も、憎しみも)

結局は、自分の事ばかりだ。

ハイネスが赤子の時は、流石に教会の人が世話をしていた。本当に、必要最低限のことしかしてくれなかったが。おかげで彼は生きて大人になれたのだ。

昔はそんな風にすら、考えることができなかった。

捨てられたんだって、そればかり。世界の全てを憎み、恨んでいた。今だって、少しそういう部分は残っている。

「ごめんね」

無意識に出てきた言葉は、誰に当たたものなのか自分にも分からなかった。細かく地面が揺れているのに気がついて、ルーミケラウスは顔を上げた。

揺れにあわせて、砂が流れていく。

離れた場所で砂が大きく盛り上がる。ずるずると、砂を払い落としながら、下から銀色の大きな船が現れた。砂が入らぬように張ってあったシールドが消えると、船の先に人影がいるのが見えた。

長い亜麻色の髪を靡かせた小柄な女性が、こちらに向かって大きく手を振る。

それに向かって、ルーミケラウスは軽く手を振り替えた。

「ちよつと遅いわよ、ナナミ」

「仕方無いよ、こっちはこっちでちよつと問題があつて」

「どうせ、フブキでしょ。もう大丈夫なのね？」

「まあ、何とか。そっちの話も聞きたいけど、詳しい話は後で。とりあえず船に乗って、見つかったらマズイよ」

「はいはい」

ルーミケラウスは、船からおろされた梯子に足を掛けた。

「ここが本当の彼女の居場所だ。」

帰ってきた、そんな風に思えるところ。

あの居心地の良い宿屋でも、この世に唯一人の弟のところでも、胸糞悪いシユターク教派のところでもなくて。

信じるものの為に、戦える場所だった。



## 伊吹、手紙を受け取る 1

この世界のセキュリティ意識はかなり低いのではないか、とそんな不安に駆られる朝だった。

見張りがついていながら、菊乃を初めとした3人の人間が行方不明になるとか、酷すぎるだろう。安全面の不安については兎も角として、一体何が起きたのか。身近で起きた事件を、自分には関係ないものだと放っておく事はできない。

明日は我が身かもしれないのだ。  
分かっていることのいくつかを整理する。

外部から侵入した者はいない。

志真とフィオーネは、薬によつて眠らされていた。  
薬は睡眠前に飲んだお茶の中から検出されている。

そのお茶を淹れたのは、ルーミケラウスである。

……簡潔すぎて逆に迷う。

推理小説やゲームであつたなら、確実にミスリードを疑うところだ。しかし、まあこれは現実だし間違いないのだろう。クルーセルを使用したのが彼女だと考えれば筋も通る。ハルラックも菊乃も、昨日ここへ着たばかりなのだから、そんな細工はできない。

最も、誰か他に協力者がいれば別だが、可能性は低いだろう。

それにしても、ルーミケラウスか。

最近やたらと接近してくるようになったのにはやはり、裏があつたのか。何かあるだろうと思っていたから、別に驚かない。

ああ、やつぱりな、と。

……そんなものだ。

「いつさん……酷い顔してるよ」

「俺は普通だ。お前こそ色々酷いぞ」

調査員やらケラスやらが来ていた為、今日の朝食は大幅に遅れた。聞き取り調査から解放されて、ようやく台所に残されたチーズとハムのサンドイッチ的なものを食べているところへ、志真がやって来たのだ。

泣いたのが一目で分かる酷い顔に、ぎよっとした。

臉ははれているし、目の下が赤い。顔も何だか浮腫んでいる。

「顔、冷やせば？」

思わずそんな言葉を掛けてしまっくらいに酷かった。

「……後でやる」

そう言つて、志真は伊吹の隣に座った。皿に取り分けられていたサンドイッチに手を伸ばし、ぱくりと齧りつく。

「はー、美味しい」

それは溜息混じりに言う台詞か？

「こんな時でもお腹空いちやうんだよね。何か嫌になるんだけど」

「それは当たり前だろ。生きているんだから」

「うん」

それから無言で食事を終えた。冷やされたお茶を飲み、一息入れる。他の人間はまだ来ない。取調べが長引いているようだ。

伊吹は立ち上がると、まだ食べている志真を残して部屋に戻った。

暫くは、外に出るのを控えるように言われている。

窓を開け換気しながら、軽く部屋の中を掃除した。何だか動いていたい気分だった。集めた資料、ノート、本を纏めていく。あ、これこんな所に挟まっていたのか。そんな発見も多々あった。

一番吃驚したのは、ベッドの下だ。

普段あんまり見ないから気がつかなかったが、木の実やら乾いた肉やらが小さな山を作っていた。

こつこつめ……。

知らない間に、余った餌を保管していたらしい。虫が湧いたらどうする。幸い、目に見える虫は湧いていないようだったが、当然始末させてもらう。

木の突くらいなら良いが、生ものは駄目だ。絶対に。餌の量を少し考えた方が良さだろうか。無駄にするのは勿体無い。バケツに水を汲んできて、床板を拭く。

この世界……、というかここが宿屋だからかもしれないが、基本的に室内でも靴で過ごす。日本人である伊吹にとつては、いまひとつ寛げない仕様。なので、一応伊吹は室内ではサンダルみたいなものを買って来て、室内履きとして使っている。

衛生的にも良いだろうし、何より楽だ。

だが、そうしているのは伊吹だけで、時折訪れる志真やウィガーは土足で踏み込んでくる。だからこつこつして、時々床を拭く必要があった。

見た目あんまり汚れていなくても、気分的に良くない。

いつその事、外に下駄箱を置いて、来客用のサンダルも揃えておこうか。

そんな風に考えた事もあったが、遠くない内に離れる予定なので結局止めた。今の状態だと、もう暫くはここで過ごす事になりそうだが。

「……ん？」

ベッドの下に潜り、床を拭いていた伊吹は奇妙なものを見つけた。普段、こんな所に入る事などまず無い。徹底的に掃除しようと思いたなければ、この先も知らずに過ごしていただろう。

ベッドの裏に、封筒のようなものが貼り付けられている。

紙の白さから言って、ごく最近仕掛けられたものようだ。しかも、封筒には筆のようなもので文字が書かれていた。

伊吹ちゃんへ

何故日本語、しかも漢字、無駄に達筆、最早考えたくもないちゃん付け。

更にその下に、重要機密と赤い文字で書かれていた。とどめのハートマークに殺意が湧く。

何だこれ。ふざけてんのか。

中からは何と現金が！という事にはなりそうもない予感がしたので、伊吹はベッドの下で暫し考えた。

- 1 この事は忘れよう
- 2 誰か人を呼ぶ
- 3 思い切って開けてみる
- 4 とりあえず封筒を外してからじっくり考える。

1は無い。

こんなものがベッドの下にあると思うと、気になって眠れない。万が一危険なものだったら、余計に嫌だ。

2は最も無難に思える。

無いとは思うが、万が一恐ろしい毒物的なもの等が仕掛けられている事も否定できない。その場合、伊吹の手には余る。

その可能性を考慮して、3は無い。

2が一番良いと思いつつ、重要機密の文字が気になりすぎた。もしも人を呼んで報せてしまった場合、この封筒ごと没収される恐れがあった。中に書いてある内容しだいでは、そのまま永遠に知らせてもらえない可能性がある。

または、偽の情報を与えられるかもしれない。

好奇心は猫を殺す、というが。

伊吹は目を閉じ考えた。

出来れば自分の目で中を確かめたい。そうしなかつたら、永遠に気になってしまいそうな気がした。

散々迷った末に、伊吹は4を選択した。唯の封筒だ。何処にも仕掛けは無いように見えたが、ここは異世界。伊吹の常識では考えられないことが起こり得る。

とにかく慎重に封筒を外した。

どうやらのりのようなものでくっ付けられていたらしいそれは、あっさりと接がれてくれた。何も起こらない。ほっとしつつ、手にした封筒を持って、伊吹は狭いベッドの下から這出た。

そのままベッドの上に座り、封筒の調査を開始する。

封筒を裏返すと、小さく文字が書かれていた。誰かに見せたら後悔するよ。そんなふざけた言葉が書かれていた。

脳裏に、とある女子高生の顔が浮かぶ。

ちゃん付けといい、ハートマークと良い、彼女の仕業としか思えないが。しかし、どうも字が上手すぎるような気がしてなら無い。

と、伊吹は志真が聞いたら怒りそうな事を考えていた。

志真が犯人なら何の不思議も無い。

彼女は割りと良くこの部屋に出入りしているし、日本語も書ける。日本人なのだから当然だ。だが、理由は分からない。

封筒を開ければ、全てとは言わなくても何かは分かるだろう。

そう思うのだが、中々開ける気にはなれなかった。ただの手紙ならば良いが。

伊吹は窓から入る光に、封筒を透かして見た。

折りたたんだ紙が入っているようだ。他に大したもの……いや、何か丸い小さなものが入れている。親指くらいの平たいもの。

中心あたりに二つ、かなり小さな穴があいている。

釘……か？

益々意味不明である。

まあ、釘のような他の何かなのかもしれない。

どちらにせよ、然程危険なものでは無いようだが。いや、そう決  
め付けるのは早計か。何せここは。

(どうする……?)

開けるか否か。

伊吹はかなりの長い時間、その封筒を手に唸り続けた。

## 伊吹、手紙を受け取る 2

1時間は悩んだらうか。

優柔不断な奴だとよく単純な兄に馬鹿にされたが、こづいのは慎重と言うのだ。1つの選択が、命を縮めることもある。平和に長生きしたいなら、冷静さと慎重さを忘れてはいけない。

「……よし」

いくつかの展開を想定した後、伊吹はついに決意した。

延々とこんなものに悩むのも馬鹿らしい。開けてしまおう。外から感触を確かめる限りは、釘のようなものと手紙らしきものしか入っていない。

剃刀など手を傷つけそうなものは仕込まれていないようだ。ナイフを持ってきて、ベッドの上で慎重に封を切る。開いた口を開け、逆さにすると、まず釘が転がり落ちてきた。表にハートの形が刻まれた、赤い釘。

伊吹は目を細めた。

見覚えがある。

手に取り確かめるが、それが本物かどうか確かめる手段はなかった。でも、似ている。問題は、何故ここにこんなものがあるのかという事だった。

これは、むこうに。

伊吹のいる筈だった世界の日本にある筈のものだ。

(こよりのコートの釘が、何でここにあるんだ)

例え、本物で無く似ているものだったとして、それが伊吹の元へ届けられた意味をどうしても考えてしまふ。はつきり言って、不気味だ。

確かに目にすれば思い出すが、こんな事でもなければ思い出さなかった。こよりが気に入っていたダツフルコートについていた釦など。ハートの形がついているという特徴があったこと、それをこよりが話していたことが印象的だったからこそ、何とか頭の隅に残っていたが、普通なら思い出さない。

ここへ来て、誰にも話したことのない話の筈だ。

(……という事は、まさか)

何となく、予感を抱きながら、伊吹は封筒にみっちり詰まった手紙の束を取り出した。量の多さに辟易する。10枚くらいありそうだ。罰ゲームか何かか。

とりあえず開いてみる。

中身は割りと普通な感じだ。

封筒に書かれた文字と同じ人物が書いたらしい。日本語で達筆。見た途端に、思わず頬が引きつった。

貴方がこの手紙を読んでいるという事は、

そんな一文で始まっていた。何だこれ。思い切り、向こうの世界のネタじゃないか。まさかの世界共通ネタなのか。

盛大にからかわれた感じを受けつつ、伊吹は先を読み進めた。

私はもうこの宿屋にはいないという事ですね。

(私って、誰だ)



あ、ちなみに念の為にここで名乗っておくと、私はルーミケラウスよ。

疑問に手紙で答えられた。何ともいえない気持ちになる。それにしても、ルーミケラウスとは予想外だった。何故日本語をここまで上手に書けるのか。謎過ぎる。

読む気力を大幅に減らしながらも、先へ読み進めた。

色々不審に思っているかもしれないけど、何故私があんな事をしたのか、全部説明するから最後まできちんとして読んでね。ウィガーやケラスに報せるのは、その後で。どうするか判断は貴方に任せろ。

如何にも意味深な書き出し方だ。こうやって、先にウィガー達へ見せてしまわないように予防線を張っているのか。つまり、この先は彼らに知られては拙いようなことが書かれているわけだ。

読んでしまえば、彼らにこの手紙を見せる気を失くす様な何か。

その予想は的中した。

全てを読んだ後、伊吹は手紙を見つけたことを後悔した。知りたかった事が、知れた事は良い。これが真実か否か、それはまだ分からない。だが、なるほどと納得できるところは幾つかあった。

この世界の、この国の秘密、罪。

通常、決して異世界人には……この国に住む一般人にすら、知らされる事の無い話。

他の世界から異世界人が迷い込むようになった原因は、この世界の方にあるという内容が書かれていた。

この国が過去に行った召還実験による事故。

それにより、本来隔たれている筈の世界同士が繋がるようになった。その流れは一方的で、こちらから違う世界に行く事は無い。以

来、時折落ちてくる大量の世界喪失者による問題が多発し、この国は事故の責任を取り異世界人対策に乗り出した、と。

「ふざけんな」

思わず悪態が口をついで出る。

(いや、待て……。これがまだ本当かどうか決まったわけじゃない) 伊吹を巻き込む為の、適当な方便かもしれない。この国や、王家、保護施設へ不審を抱かせる為の。

(……例え、本当でも)

運悪く迷い込んできた異世界人である伊吹に対して、この国は手厚い保護をしてくれたと思う。一部過激な排除派の奴らはいるし、危険な事も多々あるが、それでも衣食住を与え、将来生きていく為のサポートまでしてくれている。

そこには素直に感謝したい。

これからだって、伊吹が問題の無い異世界人である限り、その保障は続く。

そう、例え、手紙の内容が真実だろうと、無かるうと。

(俺には関係無い)

生きていくのに何の不都合も生じないのだ。そう言い聞かせて、自分の中の不安定な気持ちを押さえつける。波風を立てるな。忘れる。

理不尽に弾圧されているような状況ならば、また違っただろう。幽閉、処刑、奴隷扱い。そういう扱いを受けていれば、伊吹は彼女たちの仲間に加わったかもしれない。

例え、無謀に思えても、それが唯一の希望だったら。

(けど、俺は満足している)

面倒な事に関わる気は無い。

その手紙は結局のところ、ルーミケラウス達の仲間に加わらないかという誘いの手紙だったが、伊吹は生憎どちらにも属す気は無かった。特に、ルーミケラウスのところには。

……あいつがいる。

吹雪が心配している

その一文は余計だった。

それだけで、検討する気も失せる。もう、あの兄に振り回されるのはごめんだ。普通に、平和に生きていきたい。伊吹は決意する。ルーミケラウスと無謀な仲間達と係わり合いにはならない。この手紙は他の誰の目にも触れさせず抹消する。そうして、無かったことにするのだ。

当初の目標どおりこの宿屋を建て直し、学校を卒業して1人で暮らす資格を得る。

なるべく、早い内に。

その決意は揺るがなかった。

とんとん、と軽くドアがノックされた。決して大きな音では無かったが、考え事に夢中になっていた伊吹はびくつと肩を震わせた。

「イブキさん？」

フィオーネの声だ。

「……なんですか？」

「お昼過ぎても下りてこないの。一応、食事は下に用意してあります。お腹が空いたら、いつでも食べに来てください」

「どうも」

それで用は済んだのかと思ったが、足音がしない。フィオーネは、そのままドアの前にいるようだ。

何だろう。

一応手紙を枕の下に隠しておく。志真のように、いきなり部屋に

入ってきたりはしないだろうが、念の為だ。一刻も早く燃やしておいた方が良くもしれない。誰の目にも止まらない内に。

「あの」

そんな事を考えていると、再びフィオーネから声が掛かった。

「元気、出してくださいね。きつと、皆無事で、すぐに帰ってきてますから」

予想外の励ましの言葉だった。

何故か落ち込んでいると思われている。

足音が遠ざかっていくのを確かめてから、伊吹はベッドに仰向けになった。

「帰ってこないだろう」

菊乃やハルラックがどうなったかは分からない。手紙の内容が確かなら、殺されたりはしない筈だ。だが、ルーミケラウスは戻らないだろう。だからこそ、こんな手紙を残していったのだ。

弟の事を寂しげに語っていたルーミケラウスを思い出して、伊吹は盛大に顔を顰めた。

「女つて、恐ろしいな」

あれは演技だったのだから。こうして謎の手紙を受け取った今も、信じられない思いだ。

何を考えているのか、さっぱり分からない。

枕の下に隠した手紙を取り出して、ポケットに入れた。この部屋に置いていくのは不安だった。調理場には石焼釜がある。そこでこっそり燃やそう。

敵対者に寄生されている兄、吹雪の居場所。

それに繋がる手がかりになるかもしれないこの手紙を、誰にも見せずに始末する。伊吹にできるのは、これくらいだ。

伊吹はベッドの上に転がっていた小さな赤い釦を手にとって、溜

息を吐いた。

伊吹、手紙を受け取る 2 (後書き)

ここまで読んでくださってありがとうございます。次の更新は3月5日を予定しております。

## 憂鬱な彼の胸の内

吹雪は苛々していた。

基本的に建前を知らない彼は、感情と表情とが直結している。苛々している今はそのまま、苛々した顔をしていた。太い眉根の間に思い切り深い溝をつくり、周囲を威嚇するような半眼、それから薄い唇の端を思い切りへの字に曲げていた。

元々人相が悪いといわれる彼だったが、この顔の時は本当に子供が怯えて近づかない……、少なくとも日本では。

「フブキー、遊ぼうよー！」

「遊んでーフブキにーちゃん！」

「積み木やろうよー」

「登っていいー？」

わらわらと、ちび達に纏わりつかれた吹雪は、木箱に腰を下ろしたまま大きく舌打ちを響かせた。

一体どうなっついていやがるんだか。

この胸糞悪い異世界（未だに意味が分からない）では、残念ながら吹雪の迫力は今一つ通じないらしい。子供に懐かれるなんて事が、まさか自分の人生で起こるとは。

（人生色々って、本当だな）

珍しくしみじみとした気持ちになる吹雪の肩や膝には、こ煩いちび達が我先にとよじ登っていた。

ここは、異世界という場所らしい。

最初はどうにも信じられず、納得するまでに時間がかかった。2週間くらい経つまでは、そのうち夢から覚めるだろうと思っていたのだが、どうも長い。

まさかこれが現実か？

と思いつつから、漸く詳しい話を真面目に聞いた。途中で寝たが。仕方がない、到底吹雪の頭では理解できない事柄だった。こういうのは、あいつの方が得意な筈。弟である、根暗で勉強が好きな伊吹が。

商店街が突然砂漠に変身した時には、奴も一緒にいた。そうだ、その時に伊吹が「夢だ」と言うから、すっかり信じ込んでいたのだ。（あの野郎、いい加減な言いやがって）熱いし訳が分からないし苛々していたところへ、突然砂の中からでかい生き物が現れたのだった。

怖いとは思わなかった。

なんだこいつ、でかすぎだろう。

そんな風に驚いている内に、一飲みにされた。暢気すぎた。夢だと信じ込んでいたからだ。その後はあまり覚えていない。

ぐにぐにした生暖かく気色の悪い感触や、生臭い饅えた匂いを嗅いだ気がするが、おぼろげだ。気がつけば、この船に乗っていた。

砂の中を移動する、砂船という乗り物らしい。

乗組員は30人前後。

時折、外から客も来る。入れ替わり立ち代り、色んな奴が乗り込んでくる。このでかい船の船長は七海・ルルルイエというふざけた名前の女だ。日本語を話せる、唯一の人間でもある。

吹雪は彼女からこの世界に関する様々なことを聞いた。

この世界には時折吹雪のような異世界人がやってくること。やってきた異世界人は、国に保護という名目で身柄を拘束され、あらゆることを調べられるらしい。その上で問題があると、安全な奴か確認されるまで監禁続行。下手をすれば始末されるそうだ。

やばかった。



吹雪は自分が短気で暴力的で喧嘩っ早い人間だとの自覚がある。流石に始末されるほどではないと思うが、あんまり良い状況は想像できない。自分の幸運が分かったところで、気がかりなのは伊吹だった。

伊吹は頭は悪くないが、要領と運が悪い。ついでに性格が悪い。何かまずい事になっているような気がした。

あんなのでも、血の繋がった弟だ。

別に大事だとは思わないが、見捨てるのも目覚めが悪い。

七海に頼んで探ってみてもらったところ、中々保護施設から出してもらえないでいるということが分かった。

気になったので、無理を言って町に潜伏し、様子を探った。施設を出るらしいとの情報を耳にして、こっそり様子を見に行っていたところ、妙な奴らに襲われていた。倒れているのを見て、駆けつけようとしたが七海によって阻止された。

幸い、無事だったようだが、伊吹は再び施設内に戻ってしまう羽目に。この世界は中々物騒だ。何とか伊吹を連れ出せないものか機会を伺っていたが、伊吹には常に見張りがついていた。接触する機会すらもてないまま、いよいよ吹雪が潜伏しているのが見つかりそうだという事で、町を脱出しなければならなくなった。

問題は何も解決していない。

情け無え。

今までの事を振り返って、吹雪は益々苛々した気持ちになるのだった。

「いつて」

頭皮を引っ張られた痛みで、現実を引き戻される。何が楽しいのか、きやつきゃと笑いながら髪やら頬を引っ張られて、ついに吹雪

はきれた。

「いい加減にしるテメェら！」

ぐわつと大声を上げて立ち上がる。その拍子に、ごろんごろん床に転がり落ちながら、子ども達は楽しそうに歓声を上げた。

「フブキが怒ったー！」

「きゃー、こっわーい」

「このやるー！皆でやつつけちゃえー！」

5人の子ども達が一斉に吹雪に群がってくる。小さな手足を振り上げて、叩いたり蹴ったり好き放題だ。攻撃力など微々たるものだが、うざつたい。適当に足を引つ掛けて転ばせたり、投げ飛ばしたりして反撃するのだが、それが更に子ども達を興奮させる結果になる。

何でだ。

砂の海を潜行する砂船。そこに居住するようになってから、彼ら悪ガキ共の相手がもっぱら吹雪の日課となっている。乗組員の子ども達と、行き場の無い孤児らしい。全部で7人だが時折外からの客が子どもを連れてくることもあった。

忙しい大人達に代わって、遊び相手に任命されたのが吹雪だった。 안타くらいしか暇なのいないよとか腹の立つことを言われたが、凶星だった為何も言い返せなかった。

力仕事くらいならできるが、他の仕事は無理だ。

まず文字が読めない。

言葉もようやく片言で話せるようになったくらい。言っている意味は何となく分かるが、細かいところまでは聞き取れない。

今の状態は正にただ飯食らいのお荷物だ。追い出されたって文句は言えない。

しかし自分にガキの世話を押し付けるか？

と、吹雪は呆れた気持ちであった。

子ども2人を持ち上げて、マットの上に放り投げる。

体が大きく、人相は悪い。言葉遣いも態度も乱雑で、繊細な気づかいとかは縁遠い。普通なら「近寄らせたくない」相手になるだろう。

吹雪だって短気なところは認めるものの、大人だ。

蹴ってきた足を掴んでその辺りに転がしておく。

いくらなんでも子ども相手に怪我をさせるような真似はしない。

だが、それでも大抵の人は警戒する。見た目や噂の影響は計り知れない。

別にそれは良いのだ。実際、無意味に暴力を奮った事は無いが、喧嘩で警察に補導されたことも、誰かを傷つけた事もある。そういう事をしてきた以上、人から信用されなくなっても仕方が無い。自業自得という奴だ。

一斉にタツクルをしかけてきたので避わずと、勝手に木箱に突っ込んで行った。

見ず知らずの何も縁の無い人間を信用し、無償で助けようとするこの人間の方が変なのだ。

(妙な病気も持ってるってのに)

崩れた紙や木の箱を避けて、埋まった子ども達を救出してやりながら、吹雪は舌打ちをした。

鈍い痛みが米神にある。

生まれてこの方、病気というものには縁がなかったが、ここに来て厄介なものを患うことになった。異世界人が世界を越える際にかかる事があるらしい。

腹の底から叫びたくなるような、暴力衝動。

最初は自分がおかしくなってしまうのかと思った。一応、薬で

抑えられているが、うっかり切らしてしまったり、発作が起きた時には最悪な事になる。

自分でもわけが分からなくなるのだ。記憶も飛んで気がつけば、破壊しつくされた部屋がある。

恐れや怯えを抱く自分を、情けなく思う。

だが怖い。

いつか、取り返しのつかないことをしてしまつたのでは無いかと。そんな恐怖が吹雪を苛んでいた。

## 志真と芽生えた不信感 1

世の中は、予測のつかない事ばかり起こる。

最高に楽しかった宴会の翌日が、最悪な日になるなんて志真は夢にも思わなかった。朝起きた際に知らされたのは、ルーミケラウス、菊乃、ハルラックの行方不明情報。昨夜の彼らの様子を散々聞かれたが、むしろ聞きたいのはこっちの方だ。

一体、何が起こってんの。

聞くだけ聞いて、肝心の事は何一つ教えてくれない。守秘義務があるだの、まだ調査中だの言ってこちらの質問には一切答えないその態度、どうなんだ。でも、もつとどうなんだって思うのは、一緒に部屋にいたのに何にも気がつかなかった自分に。

調子にのってお酒を飲んで、寝てしまったのがいけなかったんだろつか。やっぱり異世界でも法律違反はいけない。

呑気にぐーすか寝ている隣で、菊乃やルーミケラウスに何か大変な事が起こったに違いないのに。

(せめて、私がちゃんと気がついて起きてたら)

その日はずっと、そんな感じでもんもんとしていた。不安と後悔と自己嫌悪。黙って待っていてもどうなっているのか教えてもらえないわけでも無いし、いつその事自分が探しに行きたかった。

しかし、そんな志真の性格はとっくに見抜かれていた模様。

「こんな時に、これ以上騒ぎは起こすなよ」

そう、ウィガーにも釘を刺された。

「お前が出て行けば、その分人員が割かれる。そうすれば菊乃達の搜索に投入できる人員が減るだけだ」

確かに。そんな風に言われてしまったら、大人しく引き下がるしかない。

悔しかった。何でいつも自分には何にもできないんだろう。子どもだから？異世界人だから？無事を祈るしかできないとか、本当に嫌になる。

菊乃とハルラックが見つかったと聞いたのは、その日の夜。

これから死神にでも会いに行きますというような、陰気な顔をしたウィガーからだった。態々ハルベルト家の居間に呼び出された。ようやく齎された朗報にフィオーネとリアラと3人で、喜びあったのは一瞬。

「あれ、菊乃ちゃんとハルさんだけ？……ルーさんは？」

そう聞くと、ウィガーはその表情を凍らせた。

「何かあったの？」

フィオーネが不安そうな顔で兄を見上げる。ハルベルト家の居間に、暗い影が落ちた。野苺の模様のクッションを背にしていたリアラが、ゆっくりと身を起こす。

「無事なの？」

「……生死不明、となっているが、ハインスやハルラックの話ではまず助からないだろうと。未だ確認は取れていない」

何かを押し殺しているような、低く淡々とした声。その言葉の内に、志真は固まった。

（え、何……？助からないって、言った？）

「そんな、どうして」

「その辺りの詳しい話はまだ話せない。ただ……」

ウィガーは一度、躊躇うように言葉を止めた。

「何？」

「どうやら菊乃達を連れ出したのは、ルーミケラウスの仕業らしい」その言葉が、志真達に更なる混乱と衝撃を与えたのは間違いない。何がどうしてそうなったのか、全く納得がいかなかった。

「嘘、何でルーさんがそんな事するわけと、志真。」

「何かの勘違いとか、あ、誰かに騙されてとか、そういうのでは？」と、フィオーネ。

「それは何処からの情報なのかしら」と、リアラ。

一辺に聞かれたウィガーは、リアラの質問を優先させた。

「ハルラックとハイネスの証言です」

「ハイネスさんは、シユターク教派の一味である疑いをかけられていたんじゃないかしたら？」

「現在取調べ中のようだが、嫌疑は晴れるだろうとユーイが言っていたので、そうなるでしょう」

「そうなの」

1つ頷いて、リアラは可憐な仕草で首を傾けた。

「さつきから、キクノちゃんの事が出てこないような気がするんだけど」

その質問にウィガーは痛む胸をつつかれたみたいな顔をした。言葉が無くても、それだけで何か良くない事があったのだと予想できる。

「キクノは昏睡状態で保護施設に運ばれた。一命は取り留めたが、予断を許さない状況らしい」

「う、嘘……」

声が震える。

だって、昨日はあんなに元気だったのに。笑って、沢山話してた。

「た、助かるよね？」

「……俺に聞くな」

そういう時は、肯定的に返事をするものじゃないのか。

間違ってる。こんなのおかしい。ルーミケラウスが容疑者で、死  
んじやったかもしねなくて、菊乃も危ない状態で。

昨日の楽しかった宴会が、凄く遠い昔の事のようにだ。

何でいつもこんな事になっちゃうんだろう。

そして再びの保護施設。

今回は、宿屋の人間全員で、検査入院である。ハynes達の情報  
で、ルーミケラウスが敵対者に寄生されていた事が判明したからだ。

「はあ」

思わず溜息も出てしまう。

する事も無いので、食堂の日当たりの良い場所を選んで、フィオ  
ーネとアンナの3人でお茶をしているところだ。

「それにしても、ルーがねえ」

フルーツの香りのするお茶を一口飲んで、アンナは口をほころば  
せた。

「これ美味しいわ」

「カツシユの香茶でしたっけ？」

「そうそう。後でミーチェさんにも奨めておこうかな。メニュー  
に加わったら人気出ると思うし、私も嬉しいし」

その言葉に、フィオーネが顔を曇らせる。

「……お店、再開できるのかな」

「何とかなるわよ、多分ねえ」

ずーんと気が重くなる。そもそも、宿屋に人が来なくなったのは  
異世界人、志真のせいでもあるのだ。このまま潰れてしまったら、  
本当に申し訳なさすぎる……、と落ち込む彼女の背中を、アンナが  
強く叩いた。

「ほら、そんな顔しないしな」

励ましているのだと分かっているが、結構痛かった。凄く細いの  
に、力は結構あるようだ。



「ルーの事は流石に私もショックだったけど。今更考えたってどうしようもないし」

「……ルーさん、本当に死んじゃった？」

「さあ、それは私にも分からないけど。確か、死体はまだ見つかっていないのよねえ。でも、例え生きていたとしても、もう帰っては来られないわね」

「捕まる？」

「最悪その場で殺されるわ」

あっさりと、言われた言葉に志真はぎよっとした。

「こゝ、殺される？その場で？」

目を白黒させる志真に対して、アンナは眉を八の字にして苦笑した。

「敵対者に寄生されているんなら、そうなると思う」

「助けられないの？」

その質問に対して、フィオーネもアンナも困ったような顔で首を横に振った。

敵対者っていうのは、異世界人にとり憑いてやってくるものらしい。もしも、自分がそうだったら、同じように殺されていたのだろうか。

殺されない筈が無い。

敵対者にとりつかれた人の末路を、その恐ろしさを志真も知っている。助ける方法が無いというのなら、絶望的だ。ルーミケラウスのように、この世界の、国の人間であっても殺されるのだ。何の繋がりも無い異世界人なんて。

志真はようやく、その可能性に辿りついた。

この世界に来て、すぐに保護施設に保護された。色々検査をして、

状況を教えてくれて、更に生きていく為の環境を与えてくれた。

感謝してもきれない。

でもそれって、唯の親切だったのだろうか。

人道的支援、困っている罪の無い異世界人をただ助けるためだけのもの？

きっと、違う。

未だ会えないモクのことを思う。敵対者に寄生されていたら、殺されていただろう自分の事を思う。菊乃や伊吹も一緒に来ていたのに、その事実は伏せられていた。外に出られた時期も違う。

(それって、何で)

一度芽生えてしまった不信感は、志真の心に重く押し掛かった。

## 志真と芽生えた不信感 2

誰かに考えすぎだよって言って欲しい。

色々考え過ぎて、頭がパンクしそうであつた。元々、物事を深く考えるというのが苦手だ。考察とか推察とか？直感で生きているような志真には無縁の言葉。

延々と答えの無い疑惑について考えているだけで、底の無い泥沼に嵌っていくような気分になる。その泥沼の名前はきつと「人間不信」とかそんな感じ。あ、それとも「異世界人不信」だろうか。異世界、怖い。

悪意とか、意地悪では無いという事は分かっている。

敵対者みたいな化物がいたら大変だし、そりゃ何もなしで町中に出しちゃうわけにはいかない。教会での事を思い出し、志真は渋い顔をした。

でも。

（あの人も、最初からあんな化物だつたわけじゃ、無いんだよね）  
きつと、普通の人間だつたんだ。遠くからしか、まともな姿をみていないが、綺麗な女の子だつた気がする。年だつて若そうだった。ぞつとする。

一歩間違えれば、志真だつてああなつていたかもしれない。あんな悲惨な姿になつた上に、誰かを傷つけて、殺される。

ルーミケラウスも。

身近な人がそうなつて初めて、志真はその恐ろしさを実感した。やるせない気持ちになつてしまう。何とかして助けられないのだろうか。助けられなかったのだろうか。

3日間の検査期間を経て、志真達は元の生活に戻された。再び細

々と宿屋の業務を再開し（客は全く来ないけど）、学校への通学も許可された。元通り、平和な日常。だが、そこにルーミケラウスの存在は無い。

学校に行っても、モクがいない。

（ラスもない……）

その空白が不安だった。

「よう、シマ。大変だったな、色々」と

相変わらず欠席者多数の学校にて、そう軽い調子で声を掛けてくるのは二ト口だ。三つの瞳を細めて、にやりと笑うその姿に志真は力なく笑い返した。

「おはよ、久しぶり」

「何だよ元気無いな。ま、当然か」

二ト口は元気出せよ、と琥珀色の飴を志真の掌に落としてくれた。がらんとした教室は寂しい。広さがあるだけに余計に。

飴は、蜂蜜とレモンの味がした。

ほっとする甘味を確かめながら、志真はぐったりと机の上に上半身を預けた。こここのところ、変に考え過ぎていたためか疲れが溜まっている。

「何かもう疲れたー」

「仕事忙しいのか？」

「ううん、暇。客、来ない。疲れたは、考える事」

「考えるって、何を？」

眠いのを我慢していたら、欠伸がでてきた。えーっとね、と志真は再び考える。どう言ったら伝わるだろう、このもやもや感。不由な言葉では、到底伝わりきれない気がする。

「敵対者、助けること、無理？」

「……助ける、ねえ」

少々呆れたような声になった。

「方法があるか無いかは分からないが、現状そこまでの余裕は無いだろう、この世界に」

「ん？」

「放っておけば犠牲が出る。止めるだけで精一杯って事だ」

机に耳をくっ付けるようにして首を捻り上を見る。見上げた二ト口の横顔は、どこか冷めていた。

志真の視線に気がつくのと、二ト口はにやりと笑んでみせる。

「外出るぞ」

「は？」

「出席ノルマなんて無えから、1日くらい休んだって平気だろ」

1日くらいというか、もう何日も休んでいる上、超久々の学校だったわけなのだが。二ト口に引つ張られるまま、学校を早退してしまった。登校してすぐ早退していく2人を見て、ジャイルさんはどう思ったのだろうか。

相変わらずの強面からは、何も読み取れなかった。

30分後、志真は公園のベンチに二ト口と並んで座り、鳥に餌をやっていた。

何だこれ。

怪訝な顔の志真に、食べ、と差し出される紫色の物体。毒々しい色に反して、いかにもおいしそうな甘い香りが鼻を擽る。焼き芋みたいな匂いがした。思わず、白い紙に包まれたそれを受け取る。まだ暖かい。

隣で二ト口が大きな口で同じものを食べているのを見て、志真も思い切って齧りついた。あ、美味しい。芋っぱいけど、更にまるやかクリーミーな感じ。

「さっきの話の続きだが」

「……ん？」

口いっぱい頬張りながら、志真は二ト口に目をやった。

「敵対者を救えるかどうかって話だ」

「ああ」

その話、あれで終わりじゃ無かったんだ。

「教室で話す内容じゃねえからな。流石に、目つけられる」

「はあ」

目をつけられるって、誰に？

あの場にいるのはジャイルさんしかない。

「なあ、シマ。本当のところな、この世界の人間じゃ敵対者を殺すことすら出来なかったんだ。最初の敵対者を斃したのは、異世界人だった。それからずっと後も、今も。異世界人の力と知恵を借りて、何とかこの世界を守ってる」

長い言葉を聞き取るのは大変だった。

最も、最近では大分何が言いたいのか理解できるようになっていく。

「異世界人、守るの協力してるって事？」

「半強制的に、な」

皮肉たっぷりに聞こえるのは気のせいだろうか。

「異世界人保護には二通りの意味があるんだ。1つは、敵となりうるものを見つけ出し、排除すること。もう1つは、いざという時に戦える駒の確保」

「戦う？」

「敵対者とか、異世界から来た別の脅威とか。そういう万が一が起これば、駆り出されるって事だ」

「やばい。」

志真は青褪めた。

「私、そういうの無理。戦うとか、強くないし」

戦争体験の無い、平和ボケとか呼ばれる世代だ。あんな、化物と戦えって言われても、盾の役くらいにしか……いや、盾にもならず死ぬかもしれない。

ぶんぶんと、首を横に振る志真を見て二ト口は噴出した。

「っはは、いや誰もお前に戦えとか言わねえだろうよ」

「だよね！」

「じいさんとか、ハルラックとか……俺は微妙だが、モクは間違いない」

「え、モク!？」

じいさんの事も疑問だが。

モクの優しげな佇まいを思い出す。背は高いが華奢な姿は、とても戦えるような感じではない。腕とかぽきつと折れちゃいそうな感じなのに。

「モク、戦える?」

「本気になれば」

二ト口はどこか遠い目をした。

「モクはこの世界だって壊せる」

……………えつと。

何かいきなりスケールの大きな事を言い出した。これが自分の事を言っているんなら、この自意識過剰めとか笑えるが、友人の事を言っているのだから反応し辛い。「冗談という雰囲気も無かった。

微妙な顔になった志真に視線を戻し、二ト口は嘆息した。

「まー、ちよつと大げさかもしれねえが。それくらいのがモクにはあるって事だ。だから、中々施設から解放されねえ」

「……モク、大丈夫?」

「シマ。お前モクを助けたいか?」

常に浮かべている笑みを消し、二ト口は志真を見つめた。いつになく、真面目な顔に緊張が走る。

助けたいかって、そりゃ。

「うん、助けたい」

「その為に、世界を敵に回しても？」

うん、勿論ーって。

そんな風に軽く答えられる雰囲気じゃなかった。世界を敵に回してもって、よくある例え話な感じなのか、違うのか。

違うって、何。

自分で考えた事にツツコミを入れたくなる。

混乱する志真の一挙一動を見逃すまいとするように、二ト口の三つの目がやたら熱心に見つめていた。

「答えは、シマ？世界か、モクかどっちか選ぶだけでも良い」

「良いって、そんなの」

どっちか選ぶものなのか？

「何かをひっくり返したいって思っているんなら、それくらいの覚悟が無いと無理だってことだ」

困惑する志真に、二ト口はいつもの笑みを見せる。

斜め上から見下ろして、面白がるみたいな顔。

「からかってる？」

「いや。まあ、ちょっと楽しんではいいる。俺はそういう主義だから」

「は？」

「は？」

何を言っているんだ。

「限りある生なら、楽しまないと損だろ。退屈な人生を長く生きるよりは、危険でもスリルや波乱がある人生の方が面白くないか？」

「そう？」

平凡で平和な生活だって良いじゃないか。

と、最近本当にそう思う。

「俺はそうなんだよ。だからな、シマ。モクを助ける為に世界を敵



に回す覚悟ができたらな、いつでも俺に言えよ。待ってるぜ」

にやにやしながら、本気なんだか冗談なんだか分からない事を言う二口に、志真は「はぁ」と気の無い返事をするしかなかった。

頼りになるけど、変な人である。

## 菊乃の休演

困っているんだよ、とそう、いかにも人の良さそうな顔をした男が言う。それを、親の敵でも見るような目つきで眺めるユーイ・ユーイ。

非常に不機嫌だ。

「ここ最近、彼が上機嫌だった試しが無い。

部屋の隅で、自らの存在を心の無い置物であるように（少なくとも表面上は）心がけていたジェレミーは、そのやり取りに耳を澄ませながら書類の整理に勤しんでいた。

凡庸な癖に妙に人を惹き付ける魅力ある青年は、ユリウス殿下だ。彼はこの国の王子であると同時に、ユーイの協力者兼友人である。友人、というよりは気の置けない悪友のような間柄だった。2人の間には遠慮が無い。不敬ともいえるようなユーイの態度を、ユリウスはお気に召している節がある。

「勝手に困ってる」

ここにジェレミー以外の第三者がいたなら、その言い様に眉を顰めただろう。怒るか、嘆くか、咎めるか。ユリウスは仮にもこの国の王子なのだ。

最も本人は気にしていない。

「冷たいね。そう言わずに力を貸してほしいな」

「知るか。こっちは忙しいんだ。ケラスの事情にまで首を突っ込んでいられるか」

「そこを何とか」

気さくな苦笑いを浮かべつつ、ユリウスは言う。

「今ハイネス・ユーゴを失いたく無い。齎された情報が確かなら結構な戦力になりそうだし、勿体無いだろ」

ハイネス・ユーゴの身柄はケラスにて拘束中。容疑についての取

調べは随分難航しているらしい。菊乃を連れて、ハイネスが帰還した。その際簡単に事情を説明した後、だんまりを決め込んでいる。不明な点は未だ多く、ケラスの連中も手を焼いているようだ。

全く、面倒な人だ

一度、ユーイと共にハイネス・ユーゴに面会した。相変わらずの無表情で、何もその目に映していないかのような暗い瞳をしていたので、嫌味を言う気も失せてしまった。ユーイが幾つか質問したが、一つも答えは得られなかった。

世界の一切を遮断して、口を閉ざす。  
あれでは手を焼くだろう。

シユターク教派との関わりについて。

ルーミケラウスの事情、企み。  
敵対者について。

シャーリン教会での事件に関与していたのか否か。

元々、顔の筋肉が鉄でできているかのごとく表情を変えない、無表情で無口な男ではあった。戦いの際に負った酷い怪我にも、声を上げることなく耐えて、敵を葬ってきたような男だ。きつと拷問の類も通用しない。(拷問は既に禁止された手法なので、適用されることもないだろう)

そんな彼が、ただ一つの言葉には反応したように見えた。それがまた、面白くない事実でもある。

ユリウスは、彼から情報を聞き出してくれとユーイに頼みに来たわけではない。

ハイネス・ユーゴは既に5日、食事を取っていないらしい。水は飲んでいようだが、このままではいずれ死ぬ。緩やかな自殺を試

みているわけでは無いだろうが、結果的にそうなるだろう。

どちらにしろ、貴重な重要参考人をみすみす死なせるわけにはいかない。ケラスも頭を悩ませている。

最も、ユリウスには、情報提供より他の思惑があるようだが。

「キクノだって、ハイネスが死んだら悲しむと思うが？」

腹立たしい事に、その言葉を否定する要素は無かった。

「だから何だ」

ユーイは冷えた眼差しをユリウスに向ける。

「キクノが悲しもうが腹を立てようが、俺には関係無い」

「合理的に考えるべきだ。キクノは懐柔しておくべき有用な人材だ。恩を売っておく必要がある」

優しい顔で、声で、告げる言葉は冷徹だ。相変わらず。彼の恐ろしいところは、優しさも善良さも持ち合わせていながら、いつだってそれに振り回される事なく冷静な判断を下す事である。

酷く嫌そうな顔をするユーイに、ユリウスはにこりと笑いかけた。

「頼むよ、ユーイ」

どの道、彼の方が立場が上だ。

命令されれば殆どの人間が逆らえないというのに、彼は態々こうしてお願いでいく。命令ではなく、あくまで自主的に取り組ませなければ良い結果は得られない。それが彼の持論であると、いつか本人から聞いた事があった。

ユーイは兎も角、彼の周囲にいる人間の殆どは、そんな彼の強かさ気がついていないに違いない。

ユリウス殿下の評判は上々。

広く周囲の話に耳を傾け、誰に対しても決して偉ぶる事無く対等に接する。慈悲深く、賢明な理想の王子。彼の思うように転がされているとも知らない人間は、全くもって幸せだ。

同時に哀れなような気もする。

勿論、ユリウスとユーイは気心知れた間柄である為、その手は通

用しない。

「ハインスが死なないように手を打って、ついでに適当に理由をつけて身柄を引き取ってきてくれればそれで良い」

「お前が自分で言え。一発で済むだろうが」

「権力を盾に身勝手な事をすれば、信用を失う。その点、君は元々横暴で身勝手だと思われるから問題ないだろう」

「喧嘩売ってんのか!？」

「嫌だな、誠意を込めて頼んでいるだけだ」

「誠意って言葉の意味を一度辞書で調べておけ」

束ねた資料を確認しつつ、クリップで留める。それらを棚の引き出しの中に、種別に収めた後、ジェレミーはドアへ向った。

態々彼らがいる場所から離れた側のドアを選んだのだが、当然のように見咎められた。

「おい、ジェレミー何処へ行く」

「新しいお茶をお持ちしますよ。すっかり冷めてしまったでしょうから」

来客用の応接セットのテーブルの上に用意されたカップは、手付かずのまま湯気が消えている。

「必要ない。どうせ飲まないんだ、勿体無いだろう」

王族であるユリウスは、毒味なしで食事や飲み物に手をつけることはしない。勿論それは承知している。とはいえ、これは一応の礼儀だ。

「気遣い感謝する。だが、ユーイの言う通りその必要はないよ。もう行かなくてはならないし」

ユリウス殿下はにこりと笑った。

「じゃあ、失礼するよ。ユーイ、後の事は頼んだ」

そう言って、ぱつとその姿を消した。

転移の魔法である。見事。言い終わると同時に消えた為に、ユーイに反論の隙を与えなかった。

「つく、あの野郎……」

怒りに打ち震えるユーイ。先の事を思って、ジェレミーは溜息を吐いた。彼の弟子という厄介な立場にある自分が、結局のところ一番苦労する嵌めになるのだ。

## 伊吹、お嬢様と知り合う 1

平穏な生活が戻って来た。

仕事をして、学校に行つて、仮住まいの宿屋へ帰る。思ったより早く回復したこてつも戻つてきて、再び頭の上に居座るようになった。心なしか、体重が増えたような気がする。頭に乗る重みが以前よりもずっしりと来て、首がこる。

平和、だ。

勿論あくまで表面上、或いは一時の平和というやつである事は理解していた。

何せ問題は何一つとして解決していない。

シユターク教派はまだ敵対者（分割して弱体化しているらしい）を抱えているというし、伊吹の兄を匿っている謎の組織は、この国に革命を起こそうと目論んでいるらしい。

悪夢だ。

その2つについては警戒しつつ、できるだけ回避する方向で。

以前に増して、熱心に仕事をし、合間に勉強と研究を続ける生活に没頭した。嫌な事をできるだけ頭の外に追い払いたかったから、というのもある。

少しでも時間があれば、嫌でも考えてしまう。

ルーミケラウスからの手紙の内容を。

既に灰と化した手紙であるが、その内容は伊吹の頭にしっかりと刻み込まれてしまっていた。

思い返すたびに、気分が沈む。

開けるべきでなかったパンドラの箱。

それと同じくあの手紙も、見るべきでなかったかもしれない。

何をしていても、いまひとつ晴れない気分だ。図書館により調べものをして、宿屋に戻る頃には夜を迎えていた。いつもの様に裏口を潜った時、聞きなれた大きな声が伊吹を呼んだ。

「いつさん、遅い！ずっと待ってたんだからね！」

ショートカットのいかにも健康的な少女が飛び出して来て、そんな文句を並び立てる。待っててくれと頼んだ事は一度も無い、伊吹は半眼になった。

何だか知らないが。

「お前が勝手に待ってたんだろ」

そう言つと、志真はむっとした顔になった。

「違つて、待ってたのは私じゃなくて、えーつと」

「何だよ」

「女の子のお客さんが来てる。帰るまで待つって言うから、食堂で待つてもらってるよ。もう3時間くらい」

「は？と伊吹は眉を顰めた。この話の流れでは聞くまでも無い、が。俺に？」

「そつだよ」

肯定した後、志真はにやけた顔になった。三日月を下向きにしたみたいに目を細め、口の両端を吊り上げる。

「いつさんもやるねえ、可愛い子だったよー。化粧濃かったけど。」

「どこで知り合つたの？」

「どんな奴」

「金髪碧眼、ちよつとつり目で、お嬢様みたいな凄いドレス着てた」  
全く記憶に引つかからない。一体誰だ、そう思いつつ、からかう志真の言葉を無視して、伊吹は食堂へと向かう事にした。

お嬢様。

そんな名称がぴったりくる少女だった。派手な金の髪を複雑に結び上げて、紫色の大きな芍薬のような花で耳の後ろ辺りを飾る。ふ



んわりと広がったレースを幾重にも重ねたドレスは、かさ張るしいかにも動きにくそうだ。

胸をぐいっと押し上げて、腰をきゅっと絞る。

どこのお姫様だよ、とつつこみたくなるような格好の少女は、この古くてこじんまりした宿屋の中で浮いていた。

志真の言う通りに化粧は濃い。20前半だと思われるのだが、その若さでその化粧の濃さは有りなのか。

(誰だこいつ)

生憎伊吹には見覚えが無かった。これだけ目立つ相手だったら、見忘れたりする事は無さそうだ。猫のような大きな青い目が、訝しむ伊吹を見つける。

窓際に腰を下ろしていた少女は、流れるような動作で席を立ち、入り口で戸惑う伊吹に向って丁寧に一礼した。

「わたくしはミルラ・ラクリエル。貴方がイブキ・カガミ様ですわね？」

「……ええ、はい」

「今日は急の来訪をお許してください。どうしても、お願いしたい事がございまして、参りました」

「俺にですか？」

「はい。立ち話ですのようなお話ではありませんから、どうぞこちらへ」

と、彼女の正面の椅子をすすめられる。思わず礼を言って座ったが、ここは彼女の屋敷ではない。客の立場が、逆になっているような。

別に、構わないが。

「名前でお分かりかも知れませんが、わたくしはラクリエル商会の

人間ですの」

当然知っているだろう、とでも言うようなこの自信に満ち溢れた態度。ラクリエル商会はこの国で、主に異世界関係のものを扱い、手広くぼろもうけ……商売しているグループだ。

「はい」

それで、と続きを待つ伊吹に対して、ミルラは僅かに気分を害したような顔をした。

反応が薄かったのが気に入らなかったようだ。見た目どおりプライドの高いお嬢様らしい。

頭から下りて膝で毛づくろいを始めたこてつを撫でながら、伊吹は愛想笑いを浮かべる。

「ラクリエル商会のような立派なところが、わざわざ俺を訪ねて来るような理由が、思い当たりません。どのようなご用件なのでしょう」

態と下手に出てやると、ミルラは一瞬軽蔑したような目を伊吹に向けた。

子どもだな。

取り繕うように微笑むミルラを見つめ、伊吹は内心で嘲笑う。

感情をいちいち顔に出してしまうのは、取引をしようとしている者としては失格だ。

猫を被ることならば、彼女より余程上手く出来る自信があった。

「貴方が異世界から持ち込んだ、アサガオとキューリはうちでも取り扱いを始めております。特にアサガオは美しく、栽培も難しくなく、お客様に好評を頂いておりますわ」

「それは、良かったです」

「異世界から持ち込まれた様々なものの中で、植物は特に手軽に触れることができる、人気ですわ。勿論、人体や環境に悪い影響を

与えてしまうようなものは、世に出すべきではありませんけど」

一旦言葉を切ったから、ミルラは熱心に伊吹を見つめた。澄んだ青色の奥に、油断ならない色が見える。

「イブキ様の持ち込まれた種は、3つだったと、そのような情報があります。現在世に出ているのは2つ。後の1つは未だ、イブキ様がその権利を有していると、それは真実なのでしょうか？」

情報漏えいを怒るべきか、それとも今までばれなかった事を喜ぶべきか。

今はとりあえず。

「そうですね、一応まだ」

「理由をお聞きしても？」

「……すべて手放すのは寂しかったものですから」

目を伏せて、自嘲気味に笑う。今ならば、役者にでもられそうだが、気づかれないように伺い見れば、鼻白んだ風のミルラの顔があった。「お恥ずかしい話ですが、二度と戻れない故郷のことを思うと、どうしても手放す気にはなれなくて」

いざという時のための切り札だからな。

顔を上げると、ミルラが笑顔を取り繕った。

「お気持ちお察しいたしますわ」

嘘付け。

「でも、そう、そうですね、例えば種を手放されても、量産されればこの世界に思い出の花がたくさん増えることになりますわよ。そうですれば」

「そうですね。ですがそれはもう、この世界で育った別の花なんです。そんな風に感じるのは、おかしいと思われるでしょうが」

自分で言っているにも、何言っただこいつと思う。

「なので、これはどうしても手放せないのです」

どれだけ金を積もうと手放す気は無いので諦めて帰れ。

そんな思いを言外に込めて告げると、ミルラは引きつった笑顔のまま固まった。

「どうしても、ですか？」

「申し訳ないですが」

「ど、どうしても………？」

いきなり声が弱々しくなる。途方に暮れたような響きに、違和感を覚えた。

大きな青い目が心なしか潤んでいた。目の端が赤い。ぎゅっと赤い唇を引き結び、耐えるように頬を震わす彼女に、嫌な予感が過ぎる。

おい、まさか。

そんな伊吹の内心の動揺を他所に、ミルラの目から大粒の涙が零れ落ちた。

## 伊吹、お嬢様と知り合う 2

女の泣き顔は綺麗だ、とか言った奴はちよつと出て来い。

そんな事を思う伊吹の前には、酷い顔で泣いているミルラ嬢がいた。仮にもお嬢様がそんな泣き方でよいのか。本人も何とか泣き止もうとしているらしく、毒々しい色の唇を引き結んでいるし、眉間の皺も益々深くなっている。

(お陰でヒキガエルみたいな顔になっているがな)

とどめなく流れる涙のせいで、濃い化粧がはがれてきていた。女というのは、何故目の縁を黒くなぞるのか。伊吹には理解不能だ。流れ落ちた涙によって、顔に黒い筋が入ってしまったミルラの顔は、正にホラーな出来だった。

トラウマもののゲームを思い出して、益々微妙な気持ちになる。

「う、売って、ください。お願いしますわ。お、お金なら……」

泣き止むことを諦めたミルラは、今度は伊吹の説得に乗り出した。その執念は、疑問だ。それほど儲かりそうなものだろうか。未だ、花の種という以外に、詳細は明らかにしていないにも関わらず。

「そう言われましても」

「お、お願いします」

「……失礼ですが、何故そこまで必死になられるのですか？ただ商売の為、というには、貴方はその……」

必死すぎないか？

そう問うと、ミルラは華奢な肩を大きく奮わせた。ひくりとしゃくりあげて、顔を歪める。

「わ、わたくし……っ」

「はい？」

「わたくし、け、結婚はいやですの。政略結婚なんてしたくありません、しかも、あ、あんなギスニツチみたいな男となんか！」

ギスニツチって何だ？多分ここまで嫌がるくらいだから、ろくでもないものなんだろうが。叫んだ後、わっとテーブルに顔を伏せて泣き出すミルラを、伊吹は冷静に見下ろした。

……色々意味が分からない。

「ミルラさん、貴方の結婚と俺の持つ種の話が全く結びつかないのですが」

「お、お爺様が……っ、お前のような才能のないものは、さ、さっさと結婚した方が良いとおっしゃって。か、勝手に縁談を」

ギスニツチみたいなのと縁談か。

「断れないのですか？」

「お爺様のいう事は絶対です。い、嫌なら使い物になるところを、見せろと」

ああ、段々話が見えてきた。

「異世界人が異世界の種をまだ持っているから、それを何とかして来いって！」

がばり、とミルラは顔を上げた。その化粧と涙でぐちゃぐちゃになった顔のすさまじさに、伊吹は思わず身を引いた。

「お願いですわ！わたくしの人生が掛かっているのです！どうかわたくしに種を譲ってください！」

「無理です」

必死の懇願を、伊吹はきっぱりと断った。

変に期待を持たせるほうが酷である。一瞬硬直した後、ミルラは再びわっとテーブルに顔を伏せて泣き始めた。

流石に気の毒だとは思うが、こればかりは譲れない。

「すみませんね、お力になれなくて」

謝ると、一層しゃくりあげる声が大きくなった。

下手に声を掛けても無駄そうなので、伊吹は入り口を気にしつつ（いつ何時泣き声を聞きつけた誰かが来ないとも限らない）、ミルラが落ち着くのを待った。

2、30分は経っただろうか。

漸く落ち着きを取り戻したミルラが、泣きはらした顔を上げたのを見て、伊吹は立ち上がった。気配を察知してするりと膝からこてつが逃げ出す。

こてつはそのまま、椅子の上で丸くなった。

「少し待っていてください。湯とタオル、持ってきますから」  
帰るにしても、そんな顔では帰れないだろう。

親切、というよりは罪滅ぼしのつもりで。彼女の事情を汲んでやる義理は無いが、流石にあそこまで泣かれると後ろめたい気持ちも湧く。

食堂を出て、一番近くの湯が汲める場所、調理場に向う。

「すみません、桶と湯貰えますか」

そう声を掛けて足を踏み入れる。りょうかーい、と明るい声で答えたのはアンナだった。てつきりカオロンかミーチエがいるものと思っていたから、驚いた。ラクトはいるが、2人の姿は見えない。

「カオロンさん達は？」

「病院に行ってるわ。あ、診察じゃなくってお見舞いねー」

アンナが説明している背後で、ラクトがてきばきと桶にお湯を足している。

「さつき、お茶を持っていこうとしたんだけど、深刻そうだから入れなくって。大丈夫？何かすっごく泣いてたみたいだけど、修羅場？」

「まさか」

そばかすの浮いた小さな鼻の上をくしゃりとさせて、アンナが笑った。

「シマが見に行こうとするから、ウィガーが部屋まで連れて行ったんだけど。後で大変よ？」

ウィガーに深く感謝した。

「アンナさん、綺麗な布かタオルありませんか。顔を拭けるようなあるわよう、ちょっと待ってて」

アンナは快く返事をする、ぱたぱたと軽い足取りで出て行った。彼女に比べて、ラクトは無口だ。無言で湯の入った桶を差し出される。

2人になるのは少しばかり気まずい。

彼とまともに話すのは、あの妙な預言者っぽい話を聞かされて以来だ。

選ばれた勇者よ、この宿屋の危機を助けたまえ。

そんな感じの話だった。未だ、伊吹は何もできていない。腹を立てているだろうか。（いや、別に助けなくちゃいけない義務とかは、無い筈だけど）

ちらりと様子を伺うが、ラクトは何も言わない。

既に伊吹から目を離し、ナイフで野菜の皮をむいている。しゃりしゃりと、微かな音が響く。

「安心していい」

唐突に聞こえた言葉に、伊吹は肩を揺らした。

こちらを見ないまま、ラクトは続ける。

「食事は1人分大目に用意しておく」

……何の話だ？

それっきり、再び口を閉ざしたラクトに、伊吹は困惑を隠せない。ミルラが食事をとっていくとでも思っているのか。そんな事は一言



も言っていないし、そうなる確立も低いと思うが。答えを明らかにする前に、アンナが戻って来た。

「はい。これとこれとこれとこれ、あとこれね！」

ほんぽんと、次から次へと渡される品物に伊吹は目を瞠る。頼んだのはタオルか布だけだった筈だが。

「ご丁寧タオルと布の2つが用意されている、それは良い。」

「何ですか、これ」

タオルの上に置かれた固形石鹸と、更に瓶が2つ。中にはそれぞれ蜂蜜色の液体と、桃色の液体が入っている。

「この石鹸は化粧落とし用の洗顔石鹸、こっちのピンク色の液体は洗顔の後につける保湿液で、もう1つの方は美肌液。腫れを抑えたりする効果もあるから使ってもらって」

「凄い気の回しようだ。」

同じ女性だからだろうか。ありがたく受け取って、伊吹は食堂へと戻った。少々時間が掛かったので、帰っている可能性も考慮したが、ミルラはそこにいた。

いつの間にかテーブルの上に乗ったこてつの顎の辺りを撫でて、小さく笑っている。

少し元気になったようなのでそれはいいのだが、その顔で笑うと益々怖い。こてつが食われそうな感じの絵面だ。

「お待たせしました」

そんな失礼な事を考えつつ、伊吹は彼女の前に洗面セットを置いた。

「これ、使ってください」

ミルラは腫れた目で伊吹を見上げた後、俯いた。テーブルの上に置いた手が、きゅつと拳を作る。

「……………ありがとう」

消え入りそうな声でそう礼を言って、ミルラはお湯を使い始めた。ぱしゃぱしゃと、水が撥ねる音が響く。注視するのも失礼だろう

し、自分の足元の辺りに視線を置いた。

全く、何でこんな事になっっているんだか。

真面目に仕事をし、学校で勉強し、更に図書室で調べものをした。伊吹は疲れている。ついでに腹も減っていた。体は清潔さと睡眠を要求している。

「ありがとうございます」

いつの間にか水音が止んでいた。終わったらしい。顔を上げた伊吹は、ミルラの顔を目にして驚いた。

美人だと、知ってはいたが。

化粧を落とした方がずっと良いとか、どうなんだ。

### 伊吹、お嬢様と知り合う 3

女の顔が、化粧で驚くほど変わるといっことは知っていた。時折素人でも特殊メイク並みのビフォーアフターな変身を遂げる者がいることも。

しかし、現実ではお目にかかった事は無い。

良いと思っていた子と寝起きでドッキリなんていう経験は、残念ながら伊吹の人生で起こった事はなかったからだ。それどころか、親しく言葉を交わす女友達すらいなかった。

しかし、化粧っていうのは綺麗にするためにするものだろう、普通。

それともあの化粧がこの世界の流行なのか？あれで美人なのか？残念ながらその価値観にはついていけない。別に、ついていきたくないと思わないが。

厚化粧を落とし、まあまあ美人から奇跡的美少女へと変身を遂げたミルラの前に、伊吹は居心地が悪かった。同じ年くらいかと思っただが、年下かもしれないと、白くふつくらした頬の線を眺めて思う。無駄に長くびっしり生えた睫毛の下の大きな青い瞳。目元が赤くなっているせいで、妙に色っぽい。

「……失礼ですけど、ミルラさん。おいくつですか？」

「……………24歳ですわ」

まさかの年上だった。童顔なのか。ミルラは首から頬にかけて真っ赤にし、恥じ入るように俯いた。

「分かっていますわ。行き遅れだっと思っていらっしやるのでしよう。お爺様が口を出したくなるのも当然ですわ」

別にそんな事は思っていない。

日本は晩婚化が進んでいた。30代を過ぎて結婚する人も多かつ

たあちらの世界で、24歳で行き遅れとか言ったらあちこちから石が飛んでくるに違いない。

「恋人とかいかなかったんですか」

「これだけ美少女だったら、周囲の男が放っておかなさそうだが。」

「いたらこんな事になっていませんわよ」

馬鹿にしているんですの。

ぎろり、と睨まれて伊吹は沈黙した。外見が良くてももてるとは限らないらしい。余程性格に難があるのだろうか。確かに少々気が強く、扱いつらそうな感じはするが。

「わたくしがちょっと良いなと思う人は皆、お兄様やお姉さま、妹に夢中で、わたくしの事なんて……」

じわり、と再びミルラの眦に涙が浮かぶ。

先程泣いたせいで涙腺が弱くなっているのか。

いや、それよりも、お兄様……？

その一言が引つかかる。あまり、深く知りたくないような気もするが。ミルラが良いなと思った相手に女も含まれているのか、それとも相手の男がそっち系なのか。

伊吹は深く考えるのを止めた。

「だから、わたくし殿方とお付き合いをしたことありませんのよ。それなのに、いきなりあんなギスニツチみたいな男と結婚だなんて……！」

「それは、まあ気の毒だとは思いますが」

だからギスニツチって何なんだ。そう思いつつ適当に同情の言葉を掛ける。ミルラはきつと赤くなった目を伊吹に向けた。

「同情してくださるなら、種をわたくしに譲ってください！」

「お断りします」

「ひ、酷いですわ……、わたくしが、こんなに困っているのに」  
「お力になれず申し訳ないですが、種は俺としてもどうしても必要なものなので」

このままでは、いつまで経っても諦めてくれなさそうだ。  
伊吹は溜息を吐いた。

「この宿屋、客がいらないと思いませんか？」

「……営業妨害や中傷のせいで、客足が途絶えているそうですわね。お兄様の調査資料で読みましたわ」

調査資料？

「まあ、分かっているなら話が早い」

「ええ、だから必ずお金が必要の筈だからこの件は軽いつて……お兄様の嘘つき」

……何か薄ら寒いものを背筋に感じるのは気のせいか。

「貴方はこの宿屋にお世話になっているのですわよね？恩とか、感じていないんですの？大金が得られれば、この宿屋をもっと綺麗に改装したり、色々工夫もできますのに」

「確かに新しい建物になれば、それなりに人を呼ぶことができますかもしれません。ですが、根本解決とはならないと思います」

「どういう事ですか？」

「異世界人に纏わるマイナスイメージは、それで払拭されないだろうという事です」

ここに志真や伊吹がいる限り。

シャーリン教会で起こった事件を境に、異世界人に対する悪感情は更に広がっていると考えて良いだろう。

それに加え、ルーミケラウスの事もある。

国民の混乱を避けるため、情報規制が敷かれているが、人の口には立てられない。何かしらの悪い噂が出る事は、覚悟しなければ

ならなかった。

「大体、この宿屋の人達は、俺が大金を融資しようとしても素直に受け取ってくれないでしょう。これは、お金で解決できる問題ではありません」

できたら、簡単だったのだが。

「では、どうするつもりなんですか？」

テーブルの上にぐいっと上半身を乗せるようにして、ミルラは伊吹の方へ顔を近づけた。大きな目が心なしか輝いている。興味津々といった様子だ。

「……今考えているのは、他の宿と決定的な差をつくることです。そこにしかない食べ物、そこでしか買えないもの、そこでしか見られない景色。そういったものがあれば」

「確かに、客を呼ぶ事はできるかもしれませんがね。但し、話題になる価値がなければ無駄になりそうですけど……あ！」

ミルラは再びぱっと目を輝かせた。

「もしかして、それに異世界の花を使うつもりなんですかね？」

「計画としては」

まだウィガーやリアラにも話していないし、実際どうなるかは分からない。断られたら、それ以上伊吹の勝手にする事はできないのだ。

何となく断られるような気がしている。

だから、彼らにこの話を持ち込めないでいた。残念ながら、伊吹にはこれ以上の策は思いつかない。

### 異界の花。

無害な異世界の植物は、この世界でも人気が高い。この宿屋のみで見られるとなれば、それなりに客は集められる筈だ。幸い、向日葵の種は食べられるし、その辺りの展開も視野にいれている。

異世界のものを通して、交流をしていけばいつか理解が得られるのではないか。

というのを、表向きの理由にしようかと思っている。これならば、リアラやウィガー達も良い返事をくれるのではないかと。

「面白そうですね、植物は育てばいつかは種ができますよね。ひとつでも外へ持ち出されてしまえば、いくらでも量産できますわよ?」

「当然、その辺りの事も考えてあります。異世界から持ち込んだ植物は基本的に、無害と認められたものは、自ら手放さない限り、その権利を侵害される事はありません。盗難防止策として登録申請さえすれば、30年間は所有権が保障されます」

植物ならば、その種までも。

これに違反すると、高額の賠償金を支払わなければならない。

「ついでに、魔法を買いました」

「魔法!?!」

これは、ベンジャウルからの入れ知恵だ。

この世界には、魔法というものが存在する。最も魔法が使える人間は、ごく限られていて、滅多にお目にかかれるものではないらしい。

希少価値の高いその能力は、世のため人のためというよりも、高価な商品として有効利用されている。魔法商会という胡散臭い場所を通して。

「魔法というか、呪いみたいなものですね。範囲指定魔法だと言っていましたけど。対象のものは指定した範囲内でのみ成長することができると。そういう魔法です」

「そんな事ができますの?」

「何度か試しましたが、効いているようですね。範囲外で種や苗を植えても成長せず、枯れました」

未だに半信半疑だった。

何度も試したので、偶然という事は無いと思うが。既に契約しているのに、本物であってほしい。かなりの高額出費だった。

「凄いですわ、本気ですのね」

素直に感心した、といった様子のミルラに、居た堪れない気持ちになる。最初の高慢そうな様子はどこへいった。化粧と一緒に落ちてきたのか。

「……そういう理由なら、仕方ないですわね。うちで商品にして流通させるより、面白そうですし。わたくし……諦めます」

肩を落とし、暗い声で告げるミルラ。

人生諦めます、と言っているように聞こえるのは気のせいか。



## 伊吹、お嬢様と知り合う 4

種を譲る事はどうしたってできない。

だから、納得し引き下がってくれるなら、伊吹としては助かる話なのだがどうにもすすきりしなかった。

気に入らない。

悲壮な顔で俯かれると、妙な罪悪感を感じてしまう。(これも手の内なのか?) 向こうが勝手に言い出した話に、後ろめたさを覚える必要は全く無いし、今日会ったばかりの他人の事まで心配してやる義理も無い。

「……意外にあっさり諦めますね。良いんですか、結婚」  
関係ない、そう思うのについて余計な事を言っていた。

交渉は決裂したのだ。

後は黙って見送れば良い。暫くすれば、彼女の事など忘れるだろう。しかし、出てしまった言葉は戻らない。何でこんな事を言ってしまったのか。

多分、疲れているせいだ。

ミルラはむっとしたように赤い唇を尖らせた。

「良い訳ありませんわ!ですが、貴方種を譲る気なんて無いんですよ?」

「天地がひっくり返ってもないですね」

即答する伊吹に、ミルラは恨めしげな顔になった。

「ほら。それならもうどうしようもありませんわ」

悔しそうに眉間に皺を寄せて、ミルラはきゅつと唇を噛んだ。最初の勢いは一体何処へ消えたのか。墓穴を掘ったな、と自分の発言を反省しつつ、伊吹は当たり前障りの無い言葉を搜した。

「すみません、ええつと……まあ、結婚してみれば案外上手くいくかも」

「ありえませんか！気持ちの悪い事おつしやらないで！」  
顔を青くして、ミルラは叫ぶ。

物凄い拒否感を抱いているようだ。そんな相手と結婚しなければいけないとは。

「お気の毒に」

「そんな棒読みで言われたら、余計にむかつかますわ」

「すみません、所詮他人事ですので」

「……貴方、結構意地悪ですわね」

話をしている内に地が出てきてしまった。もう交渉は終わったのだから、構わない。

「酷いですわ。貴方もわたくしみたいな目にあえば良いのに」

逆らえない身内に言われて嫌な相手と結婚。

それこそこの異世界においては、絶対にありえない話だ。伊吹は薄く笑った。だが。

「俺なら家出しますね。絶縁して1人で生きます」

万が一自分がそんな風になったなら、絶対にそうする。波風立えず、平穏に生きていきたい。その為なら、多少の我慢はしても良いと思う。

生きたいし、死にたくない。

だが、どうしても我慢できない事を我慢してまで、生きていく意味はあるのだろうか。

少なくとも、今の伊吹には無い。

死にたくない、生きていたい。それだけの思いしかない、今の伊吹にとっては。

黙りこんでしまったミルラが何を考えているのか、伊吹は考えようとも思わなかった。そろそろ帰らないだろうか、そう切り出そう

とした時、ミルラのお腹が鳴った。  
くるるる、と。

しんと静まり返った食堂に、その音はよく響いた。  
はっと我に返ったミルラの顔が、見る間に真っ赤に染まる。伊吹は思わず笑ってしまった。

「わ……」

ぱくぱくと、真っ赤な顔で金魚のように口を開閉した後、ミルラは俯いた。

「夕飯、食べていきますか？」

ラクトが2人分用意していると言っていたことを思い出して、聞いてみる。わざわざ伊吹に言ったという事は、そういうつもりなのだろう。

驚いたような顔で見つめられて、伊吹は自分の発言を後悔した。

さつきから、失言ばかりしているような。

「まあ、口には合わないかもしれませんが……」

「……いただいでいきますわ」

失敗した提案を取り消す前に了承された。

こうなったら今更撤回は出来ない。

伊吹はラクトのところへ、2人分の食事を取りに行った。

やはり、庶民の食べ物が口に合わなかったのか、神妙な顔で食べ続けたミルラは終始無言で、妙に気まずい時間となった。

上品に、1人半前くらいの食事を片付けて、ミルラは宿屋を後にした。もうこれで、会うこともないだろう………

そう思った日のたった2日後。

彼女は再び伊吹の前に現れた。早すぎの再会である。

「何やっているんですか」

思わず第一声がそんな言葉になってしまっても仕方が無いと思う。すっかり馴染み、見慣れた自分の自室にて。古い丸テーブルの横の椅子に腰掛けて、入り口で固まる伊吹に首を傾げるミルラ・ラクリエル。

足元に置かれた大きな（ついでに高そうな）鞆2つを見て、嫌な予感がした。

「入りませんか？」

「……だから、何でここに」

ぴよん、と頭上から飛び降りたこてつが、主人の戸惑いも知らず部屋に入り、ベッドの上で毛づくろいを始める。その気ままさが羨ましい。

少し落ち着こう。

階下でリアラから、客が来ている事は聞いていた。何でか勝手に部屋に通した事も。誰も彼も、一体何を考えているんだ。伊吹は痛む米神を押さえつつ、ミルラへと視線を戻した。

相変わらず派手なドレスを着用している。今日は桃の花のような可愛らしい感じで、それに合わせたのか化粧も薄めだ。

何となく、直視できない。

「今度はどのようなご用件で？」

ふわりとレースを重ねた、肩の辺りに視線を置く。

「わたくし、家出をしたんですの」

やっぱり、そうなのか。予想が的中した事が悲しい。凄まじい面倒事の予感がする。

「他に行くあてがありませんの。ここに置いてください」

「無理です、ありえませんが、他を当たってください」

一体何を考えているのか。

伊吹とミルラは友人でも何でもない。単に一度商売の話をしただけの間柄だ。頼られる覚えも、助けてやる理由も無い。

「……他が無いからここに來ているんですわ」

赤い唇を尖らせて、ミルラは不満げな顔をした。

「家出というのは、お友達の家や、頼れる知人の家へ転がり込むのが初心者向けだと聞きましたわ。でも、残念ながら、わたくしの周りの人間で、お爺様よりわたくしを優先してくれそうな方はおりませんの」

それはそうかもしれない。

彼女の祖父はラクリエル商会のお偉いさまであり、その影響力は計り知れない。その意向に逆らった孫娘を匿うという事は、彼に逆らう事にもなる。

「言っておきますが、俺だって貴方の為に貴方の祖父に逆らう気はありませんよ」

「そう、おっしゃると思いましたがわは？」

低く、猫が喉を鳴らすような声に、不吉なものを感じて伊吹は視線を上げた。艶やかな花のような笑みを浮かべ、ミルラは言う。

「だから、先手を打たせて頂きましたの」

先手って。

(そんな策略家だったか?)

種の事で交渉してきた時の印象では、言っただけは悪いが凡庸。要領悪く嘘をつけないタイプで、取引や駆け引きには向いていないと感じた。

拙く取引を持ちかけて、失敗しそうだと思つたと切羽詰って酷い泣き顔を見せてくれた。女の涙を武器にする事もできず、子どもみたいに泣いていたのに。

まさか、あれすらも演技だったのか？

呆然とする伊吹に気がつかず、ミルラは無邪気に続けた。

「お爺様に、心に決めた殿方がいるので結婚はできないと。ちゃんと、名前も言ってきましたわ」

「……まさか」

いや、聞きたくない。しかし、耳を塞ぐ暇も無かった。

「貴方には申し訳ありませんが、貴方のお名前を使わせていただきました。具体的な名を出さないと、説得力に欠けるとお兄様が言うので」

「会ったばかりの奴の名前に説得力はあるのか!？」

「お互いに電撃的な一目ぼれ、という事に」

「お互いに!？」

ええ、と頬を染める意味が分からない。

「もう一瞬でも離れていたくありません、と手紙を残して屋敷を出てきましたわ。これでお爺様もきつと信じてくれるはずですよ!」  
色々和最悪である。

伊吹は頭を抱えなくなった。

おっかしいよなー。

この世の中、時々っていうか最近頻りに、吃驚するような事が起こる。志真は未だ寝癖の治らない髪の毛を蒸しタオルで押さえながら、その光景を観察していた。

不機嫌を通り越して無表情になった伊吹が無言で朝食を取っている。その隣では、金髪碧眼、どこぞのお姫様のような美少女が、物珍しげにちまちまと料理を食べていた。ちなみに、朝食の内容は細切れ鶏肉と野菜のスープ、柔らかめのコーンブレッド、それからハムエッグである。別に珍しい料理ではない。

「イブキ、この薄っぺらいハムのようなものはなんですか」

「……ハムですよ」

「ハム！こんなに薄いものもあるんですね！」

これがハムじゃなかったら何なの。一般人の志真には理解できない会話をする辺り、ミルラは真正正銘のお嬢様に違いなかった。

ミルラ、何とか……。

自己紹介はされたのだが、あまりに衝撃的な事を告げられたせいで、覚えられなかった。

初めまして。わたくし、この度イブキと婚約いたしましたミルラ

……

うわーうあーうわー。

婚約ってマジで？

花のような笑顔を浮かべるミルラの隣で、伊吹はずっこけそうに

なっていた。その後、目を吊り上げて彼女の頭をはたいていた。D  
Vだ。結婚とか、何でいきなりそんな事になっているのか分からないが、思いとどまった方が良い。

ミルラの顔には見覚えがあった。

少し前に訪ねて来て、伊吹に泣かされていた人だ。化粧の感じが違うせいで大分若く見えるけど、間違いない。理由は分からないけど、大泣きしていた人だ。あんまりに泣いているから放っておくのはまずいような気がして様子を見に行こうとしたのだが、ウィガーに阻止された。

ミルラが帰った後で伊吹に何があったのか聞こうとしたが、黙秘権を行使された。その態度、後ろ暗いところがあるとみなす。

もしかして、無理やりに言い寄ったりしていないだろうか。

何か弱味を握って、嫌がることを無理やり……、美少女と伊吹の取り合わせはあまりにちぐはぐで、そんな妄想を働かせてしま  
う。

だが実際は、どちらかというとい伊吹の方が困っているように見え  
た。

それが、また不思議である。

ミルラは嬉々として伊吹の後ろをくつついて回っているし、伊吹は彼女を鬱陶しそうにしながらも、決定的な拒否はできないでいる、  
みたいな感じだった。

何それ。

志真は現実の不可解さに困惑を隠せない。

普通逆じゃない？

後でフィオーネから聞いた話によると、彼女は物凄いお金持ちの  
家のお嬢様らしい。何でも伊吹との結婚を家の人に反対されて、飛  
び出してきたのだとか。



凄い、そんな事現実で本当に起こるんだ。  
相手が伊吹というところで、2重に吃驚である。

朝食を終えると、伊吹はさっさと職場に向かった。その後を、親について歩くカルガモのようにミルラもついて行った。

「婚約者同伴で職場とかつて、それ良いの？」

「貴方の働いているところをわたくしも見てみたいですよ」

「とくに面白い事も無いですが、それで良かったら」

「嬉しいですよ！」

瞬時にそんな会話が浮かんで来て後悔した。変なものを想像してしまった、忘れよう。

遅れて食事を終えた志真は立ち上がり、テーブルの上の食器を片付け始めた。今日の片付け当番を任されている。店を開けていない為、食事は揃って取れるようになった。お陰で片付けもしやすい。

全然、良い事では無いが。

既に大体の人が食べ終えて、それぞれの仕事に向かっている中、フィオーネだけがまだ食事を続けていた。

珍しい。

何でもてきぱきとこなす彼女は、食べる事も早かった。5分くらいの休憩で、素早く、尚且つ綺麗に食べるのがフィオーネなのに、今日はやけにゆっくりだ。

まあ、大した仕事も無いし、偶にはのんびり食べたいのかもしれないけど。

「……………」

パンを小さく千切っては、口に運ぶ。じっくり噛んで、時々ぼつと動きを止めて、思い出したように飲み込む。そして再びパンを……………。

「フィオーネ？」

千切りかけたパンを見つめたまま、ぼうつとするフィオーネのお

かしな様子に、志真は思わず声を掛けていた。

「フィオーネ、どうした？具合、変？」

フィオーネは驚いたように顔を上げ、志真を見た。目を丸くしたまま、辺りを見渡す。

「あ、あれ、もう皆食べ終わったのね。私が最後？」

「うん」

気がついていなかったのか。

「ごめん。何か食欲なくて……片付け、私がやっておくよ」

「大丈夫、私やるよ。でも、大丈夫？」

「うん、平気。どこか痛いとかそういうことは無いから」

微笑みながら、フィオーネは手にしていたパンを皿に置いた。

「残したものは、お昼に食べようかな。よし、じゃあ片付け、一緒にやるう」

「うん、ありがとう」

一緒にやれば早く済む。志真はありがたく、フィオーネに甘えることにした。

片づけをして、身支度を済ませて、学校に向う。

今日は二トロとアルジャラー、それからじいさんが学校に来ていた。中々の出席率だ。モクは未だ保護施設から出させてもらえないし、菊乃は入院中。相変わらず、意識が戻らないらしい。

今日で何日目だっけ。

1週間は過ぎていると思う。

会いに行きたいけど、会わせてもらえない。体の方はほぼ回復しているから、その内目が覚める筈だとウィガーは言っていたが。

(本当に、大丈夫なんだよね?)

どうも信じきれないせいで、不安な気持ちになってしまっ。

(だって、きつと都合の悪い事は教えてもらえない)

どうも暗い気持ちになっていけない。

志真は、溜息を吐くと、窓際で日差しを浴びつつお昼ね中のアルジャーに視線を向けた。ゆっくりと上下する優しい緑色は、密かに志真の癒しだった。

（良いなー、緑って目に優しい感じがするし、可愛いし）

暫し心を休めたところで、持ってきた絵本と辞書を取り出す。

長いことそのままになっていたモクから借りた本。お姫様と竜の話だ。

竜に助けられたお姫様は、竜に事情を話し婚約者の命を救う為に、竜の鱗が必要な事を訴える。自分を助けてくれた心優しい竜ならば、きつと願いを聞いてくれると信じて。

だが、竜は何も言ってくれない。

何度言葉を繰り返しても、涙を流しながら頼んでも。

どうして。

竜を恨めしく見上げたお姫様は、竜の閉じた瞳から流れる涙を見つめる。それだけではない。竜の瞼が開かぬように、縫い付けられている銀の糸が光っていた。なんて酷い。お姫様はその糸を外そうと決意する。

動かないで。

体によじ登ってくるお姫様を恐れるように、竜は後ずさりをする。落っこちそうになりながらも、お姫様は諦めない。

中々、根性のあるお姫様である。

挿絵には、大きな竜の体によじ登るお姫様が描かれていた。頑張る姿は好感が持てる。都合よく周囲に助けられるお姫様よりも、こっぴどお姫様の方が好きだ。見ていて応援したくなる。

さて、これからどうなるんだろう。

次のページを捲ろうとすると、そこへ日に焼けた手が挟まれた。

邪魔。

抗議の念を込めて見上げるが、二ト口はにやにやと笑う。

「昼飯の時間だ」

その言葉に誘われるように、お腹がぐうつと音を響かせた。いつの間にか、そんな時間になっていたらしい。絵本の続きはまた今度だ。

## 志真と恋の三角関係 2

振り返ってみれば、朝の時点で充分予測できた事態である。

志真はじと目で伊吹と、その隣にちよこんと座っているミルラを眺めた。婚約者同伴で登校とかこのバカップル。お前達には常識はないのか！軽蔑！という顔の志真を、伊吹はちらりとはあるが確かに見たのに無視をした。  
むっとする。

まあ、伊吹はちつとも楽しそうな様子ではない（どっちかという  
と胃が痛いみたいな顔だ）し、でれでれしていないからまだマシだ。  
何なんだろうなー！

仲良く並んで座っているけれど、やっぱりちぐはぐに見える2人  
だった。

本当に何なんだー、あの2人。

あれこれ伊吹に質問していたミルラも、授業が始まると大人しく  
なった。今日の授業は文章の書き方及び読み方。志真にとってはか  
なり苦手な分野であるが、ミルラみたいなこの世界の人間にとって  
は小学生レベルの内容だと思われる。

退屈じゃないのかな。

そう思うが、ミルラは始終楽しそうだった。

伊吹達は図書館によって帰るといふから、志真は1人で宿屋へ帰  
ることにした。宿屋は無期限休業中で、いつ再開するのも決まっ  
ていない。志真のする仕事も殆ど無いけど、なるべく自分でできる  
事を見つけて手伝う事にしていた。

気にせず友達と遊んでくれば良いわ、とリアラは言ってくれてい  
るが、今は宿屋が心配でとてもそんな気にはなれない。

志真が心配したところで、どうにもならないって分かってはいるけど。

子どもで、異世界人で。

無力すぎる自分が、歯がゆい。

何か良い方法とか無いかなー、そんな事を思いながら宿屋にたどり着いた。裏口にはフィオーネが立っていて、帰ってきた志真を見つけて手招きをしている。

「シマ、お帰り。良かった早く帰ってきて。今日はシマにお客さんよ」

「え？私？」

伊吹と違って、わざわざ自分を訪ねて来る知り合いなんて思いつかない。二ト口とかは学校で会っているし。またリキキが、それともチャティだろうか。

「誰？」

聞いてみても、フィオーネは笑って答えなかった。

「行けば分かるわよ。食堂で待ってみえるから、急いで」

その言葉に急かされて、食堂に入る。入り口から中ほどに入った位置にあるテーブルの前に、人影が2つ。

白髪の瘦せた老婦人と、頭部が寂しい少々小太りの老紳士。

多分、夫婦だろう。

お客って、この人達？

（誰？）

リキキでもチャティでもない。予想しない老夫婦の登場に、志真は戸惑いを隠せなかった。

「あの、こんにちは？」

黙っていても埒があかない。思い切って声をかけ、近づく。志真

の存在に気がついた老婦人が顔をこちらへむけた。

くすんだ緑色の小さな瞳、目じりに皺の入った優しげな顔に、何となく見覚えがあるような。

「ようやく会えましたわね」

「え、あの、はい」

にっこりと笑う老婦人に、志真はしどろもどろになる。ヤバイ。やっぱり知り合いっぽい。向こうは覚えているみたいなのに、こっちははつきり思い出せない。

「自己紹介を先にしましょうか。私はパルメラ・ニクス。こちらは、主人のジュリアン・ニクス。よろしくね」

「あ、はい。私はシマ・ハイタニです。よろしく」

「改めてお礼に来ようと思っていたのだけど、いつ来てみてもお店が閉まっているでしょ。裏庭の方でお店のお嬢さんをお見かけしたから、今日は思い切って声を掛けてみたの」

「……はい」

どの辺りで疑問を挟もうか思案する。

「シャーリン教会では、転んだところを助けてくれて本当にありがとう。運が悪ければ、押しつぶされてしまっていたかもしれないわ皆、混乱していたものね」

あ、と思わず声を上げそうになった。

思い出した。教会での出来事が鮮やかに蘇る。そうだ、あの時の。

「良かった。無事で」

「ええ。貴方も。幸い主人も無事で……、事件の悲惨さから考えると、本当に幸運でした」

「妻との再会を喜べたのも貴方のお陰です。私からもお礼を言わせてください。本当にありがとう」

「い、いえ、そんな。私、何も」

2人にお礼を言われて、居心地が悪くなった。

本当に大した事はしていない。ただ、転んでいたところを助けただけで。そりゃ、あのままだったら怪我はしたかもしれないけど、志真ではなくても違う人間が助けたらどうとも思う。

「大した事は、してなくて」

本当に当たり前の、小さな事しかできなかつた。

「あの後、色々な人に聞きましたよ」

「え？」

パルメラの暖かな眼差しを、志真は見つめ返した。

「あのわけの分からない混乱の中で、危険を顧みず、一生懸命怪我人を助けようとしている異世界人達がいたと。言葉の不自由な異世界人で、まだ子どもで、それも女の子だったって」

「勇敢なお嬢さんがいたと聞いて、妻はすぐに貴方のことだと確信したようですよ」

うわお。

感謝の念が籠った微笑を向けられて、思わず目をそらしたくなつた。

正直言葉の半分も分からなかつたけど、何か褒められているっぽい事だけは分かる。賞賛の眼差しで、全部が伝わってくるような気がした。むず痒い。

多分、顔が真っ赤になっているだろう。

あの時、確かに志真は怪我人を助けようと走り回つた。

でも、誰1人として、志真1人の力で助けられた人はいない。皆が手伝ってくれたから、出来たのだ。

だから、こんな風に褒められると正直困る。

無力さを痛感していたところだから余計に居た堪れない。

「いや、あの、私本当に何も……」

パルメラは静かに首を横に振る。

「噂を聞いてね、伝えないと思つたのよ」



「え？」

「この宿屋の噂。あの事件のせいで、異世界人のことを悪く思う人は更に増えたわ。私の周りでもそういう人はいる。でもね、私はそうは思わない。あの時、混乱の中で倒れた私を助けようとしてくれたのは、貴方だけだったわ。今は、辛い事も多いと思うけど、覚えておいてね。色々な異世界人がいるように、私たちも色々だということ。この宿屋が再開した時は、必ずお客として遊びに来るから、挫けないでね」

皺だらけの細い手が、ゆっくりと労わるように志真の頭を撫でた。その暖かさに泣きそうになる。

彼女はお礼を言いに来たわけではなくて、励ましに来てくれたのだ。

宿屋の、異世界人の悪い噂を聞いて。志真のことを心配してくれたのだ。

胸の奥がじんわりと暖かくなる。

どうせ何もできない、力も無いし頭も悪いし、子どもだし。そういう風に諦めかけていた。もうちょっとで、諦めてしまふところだった。自分には何もできないって。

(そんな事無いよね)

きつと何かできる事がある筈だ。大きな事はできなくても。小さなことでも、積み上げていけばきつと何かに繋がっていく、筈。

誤解が広まって、中々解けなくても、どこかに分かってくれる人はいる。

志真は久しぶりに晴れやかな気持ちで、パルメラとジュリアンを見送った。何もかも上手くいくような気がしてくるくらい気分が高揚していたのだが。

さて、中へ戻ろうと踵を返した志真の耳に、妙な音が聞こえた。ぱからぱからぱから。馬の蹄のような音。一瞬、懐かしい時代劇の

オープニングが頭を過ぎる。

振り返った志真は、音の出所を探した。

遠くから近づいてくる、一頭の……白馬？何か羽のようなものについており、やや体躯が小さいが、その他は普通に馬に見える。

その背に跨り、更々と栗色の髪を靡かせている遅い肩幅の青年。

一目見て、面倒事の予感をキャッチした志真は、即座に背を向けた。見なかったことにしよう。しかし、その判断は少しばかり遅かった。

### 志真と恋の三角関係 3

「その愛らしいお嬢さん！」

羽の生えた白馬に乗った青年が叫ぶので、志真は思わず辺りを見渡してしまった。買い物帰りの子供連れの主婦や、腰が曲がりかけたお婆さんまで皆振り返っている。

志真はお嬢さんではあるものの、愛らしいという形容詞が付けられるような外見ではない。残念ながら。当然彼が呼びかけているのは自分ではない、と思ったのだが。

「貴方ですよ、黒髪の乙女。短い髪も中々良い、円らな黒い瞳もチーグーのように愛らしい」

……えーつと。

まさか、マジで私!?

明るい茶色の瞳が、どうも真っ直ぐに自分を見ているような気がして、志真は大いに戸惑った。白い歯がきらりと音を立てて光りそうなの、暑苦しいと爽やかを同時に体現したような男である。垂れ目の甘目の顔立ちに、よく鍛えられた肉体。

ナイスガイ、とかそんな言葉が似合いそうな青年である。

男は宿屋の裏戸の前で、ひらりと馬から飛び下りた。ばさつと翻る真紅のマント。高そうな皮のブーツに白いズボン。金釦が二列並んだ深緑の上着。一体どこの王子様ですか、と聞きたくなるような格好だった。

「やあ、愛らしいチーグーちゃん。怯えたような顔をしないで欲しい。私は決して怪しいものではないよ、安心してくれたまえ」

安心しろとか言っているみたいだけど、安心できるか。見るからに変人である。

(っっていうか、チーグーって何?)

「ああ、君にそんな憂うような瞳は似合わないよ。私の名前はクリスティアン・ベルナ・ハーバー。唯のしがたい貴族の端くれさ。気軽にクリス様とでも呼んでくれればいい」

何だろう、何て言っているのか分からない。名乗っているみたいだけでも。

「えっと、クリス？」

で、良いのか？

呼んでみると、クリス？は額に手を当てて仰け反った。

「おっと、君は声まで愛らしいね。しかもいきなり呼び捨てでくるとは、中々積極的だ」

マジで何言ってるの。

良く分からないけど、何だか関わりたくない気がする。気づかれないように後ずさりを始めた志真に、クリス？は甘ったるく微笑みかけた。

「君に、芽生えたばかりの淡く純粹な思いを踏みにじるのは悲しいが、言わないわけにはいかないね。残念だけど、私にはもう婚約者がいるんだ」

分からないなりに、凄く不愉快な気持ちになってきた。

これは真面目に相手にする必要のない相手に違いない。きつと、ただの変な人だ。志真はもう彼の存在は無視して、宿屋の中へ戻ろうと決めた。

くるりと身を翻すと、途端に制止の声が掛かる。

「ああ、待ってくれチーグーちゃん。君が怒って当然だ。でも、どうか聞いて欲しい。私は今どうしても君の力が必要なんだ！」

そこでそんなに大声で話されるのは、迷惑なただけ。

ただでさえ、評判が下がりまくっているというのに、また変な噂が流れたらどうしてくれる。志真はきつと彼を振り返った。

「声大きい！静かに！」

「あ、ああ、すまない。つい取り乱してしまった。だがどうか分かって欲しい、いくら私でも愛する婚約者が野蛮な男に連れ去られたと聞けば、冷静でいる事は難しい」

にわかに真剣な顔つきになって、彼は聞いた。

「ここに、ミルラ嬢が囚われているというのは本当かい？」

「ミルラ？」

「そうだ。ミルラ・ラクリエル嬢。妖精のように美しい女性だよ」

この変な人はミルラの知り合いなのか。

「いる、けど？用？」

そう納得して肯定してしまった志真だったが、次の瞬間後悔した。

「神よ！私の愛する人を見つけれられた事に感謝します。ミルラ！今貴方の愛するクリスティアンが助けに行く！待っていてくれ！」

そう叫ぶと同時に、クリスは柵に手を掛け飛び越えてきたのだ。

「ちよ、ちよつとー！」

不法侵入者だー！

いきなり他人の家に柵越えて入ってくるとか、有り得ない。もしかして、強盗？慌てて近くに転がっていた竹箒を持って、クリスを止めようとした。しかし、見るからに筋肉隆々の男に対して力で叶うわけが無い。

あつさりと、振り下ろした箒の先を掴まれる。びくともしない。

「チーグーちゃん、君のように愛らしい子どもを傷つけたくは無い。どうか、大人しくしていてくれたまえ」

「泥棒、ダメ！出てく！」

「人の心を盗む罪は誰も裁く事はできないよ。けれど、人の婚約者を誘拐する事は犯罪だ」

「何言ってるかわかんないけど、煩い！人の家に勝手に入ってくるなー！」

「仕方が無い、手荒な真似はしたくなかったが」

強く握っていた箒ごと、ぽいっと横へ放り投げられた。何という馬鹿力。

「すまない」

転がる志真に向ってそう言って、クリスは裏口から中へ入ろうとした。

「さつきから、何やっているの？……シマ？」

そこへ、騒ぎを聞きつけたフィオーネが現れる。顔を覗かせた彼女に、ドアに向かっていたクリスは動きを止めた。

「フィオーネ！その人、変！注意して」

「ええ！？」

フィオーネは肩を竦ませながら、目の前で固まっているクリスへ視線を向けた。

「あの、家に何か用ですか？」

「……………美しい」

「はあ？」

溜息混じりに吐き出された言葉に、フィオーネの目が丸くなった。啞然としてしまう気持ちは良く分かる。

何なんだろう、この人。

「その凜とした佇まい、内側から光るような美しさにはどのような男でも惹かれざるを得ない、ああ、罪深い女神よ」

「……………シマ？」

こっちに聞かれても困る。

自分の知り合いでは無い事を強調する為に、志真はぶんぶんと首を横に振った。何やら感動した様子でクリスは両手を広げている。

「何か、ミルラの知り合いだった？」

「ミルラさんの？」

「……………美しい人よ、貴方のその澄んだ瞳を悲しみに曇らせるのを見たくはありませんが、言わなくてはいけない。こちらにいるミルラ・ラクリエル嬢はこの私、クリステイアン・ベルナ・ハーバーの婚約者です」

「え!？」

ミルラの婚約者とか言った？

フィオーネと志真は驚きの顔を見合わせた。

彼女は伊吹と婚約したとか言っていた筈。

「どういう事？」

「分からないけど……、どうしてそれが私の瞳を悲しみに曇らせる事になるのかも、良く分からないわ」

「まともに聞くこと、ない。きつと、かなり変な人」

ミルラの婚約者だっていうのも、怪しい話だ。

「私は、身元の怪しい男に攫われたというミルラ嬢を救う為、やってまいりました。さあ、彼女は今どこに？」

救うと言っちゃっているよ。

男にさらわれたって……、その男というのはもしかしなくても伊吹の事に違いなかった。

「どうする？」

「どうしよう……本人でないと、確かめようもないわね」

「ミルラは？」

「まだ帰ってきていないわ」

2人は小さく溜息を吐いた。

「あの、クリスティアンさん？」

「ああ……どうか、クリスと気軽に呼んで欲しい」

「……クリスさん。あのですね、今ミルラさんは外出中で、いつ戻るか分からないんです」

「なんと」

「申し訳ないのですが、いらした事は伝えておきますので、また後日いらつしやるか。それとも……」

フィオーネは気乗りしない様子で付け加える。その気持ちは良く

分かった。

「中で暫く待たれますか？」

志真だったらば付け加えないその一言。フィオーネは人が良いのだ。

「申し訳ないが待たせてもらうよ」

きらり、と白い歯を光らせて爽やかに暑苦しい笑顔を浮かべるクリス。空気を読むという能力は身につけていないらしい。

「……では、どうぞ中へ」

食堂へと案内される客人が1人。

(いっさん、早く帰って来い)  
できるだけ早急に応援求む。



日が落ちて、外が暗くなっても伊吹達は戻って来ない。ついでに、クリステイアンも諦めて帰る気配はまるで見せず、リアラが気を使つて用意した夕食をちやつかり食べているところだ。誘拐された婚約者を助けに来た人にしては、呑気すぎやしないか。

嫌がるミルラを無理やり連れ去った極悪人伊吹（彼の主張だ）  
。その2人が今一緒にいるのに、全然心配していないみたいで、首を傾げたくなる。  
しかも。

「このようなところに、貴方のように可憐で美しい貴婦人が隠れているとは。この奇跡の出会いを、私は神に感謝しなくては」

「まあ」

クリスの感極まったような賛辞を、リアラはおっとり笑って流している。先程からずっとこの調子だ。

何なのあの人。

そう思うのは何度目か。明らかに、クリスのリアラに対する賛辞は、熱の入り方が違う。リアラ>フィオーネ>>志真である。普通に通にけなされるよりもむかつく。

クリスのくどき文句のような攻撃に目を白黒させていたフィオーネは、彼の気が反れた事にほっとしているようだった。

「しかし、不幸な事に私には既に決まった女性がいます。ああ……もっと、早く出会っていれば結果は違ったかもしれないが」

「まさかとは思いますが、その決まった女性というのはわたくしの事ではないでしょうね？」

絶好調に舌を滑らせていたクリステイアンに、冷やかな言葉が

投げかけられた。

はっと顔を上げれば、入り口に伊吹とミルラの姿があった。待ちかねていたけど、中々最悪なタイミングでの登場だ。

ミルラはこれ見よがしに伊吹の腕にしがみつき、きつとクリスを睨んでいる。

こ、これは、修羅場………？

ごくり、と息を飲む。全く関係ない志真がここまで緊張する必要は無いのだが。一方、自称婚約者にも関わらず、不実な言動を目撃されたクリスは全く動揺することなく、大きく両手を広げてミルラに眩しい笑顔を向けた。

「ミルラ！心配していたんだよ、無事で良かった。私の可愛い小鳥」  
嘘付け。

と、思わず心の中で突っ込んでしまう。あんたさつきまでリアラさんに夢中だったし、と。そんな事はお見通しなのか、ミルラ目は冷たい。虫けらを見るみたいな目で見ている。

「心配？他人の貴方に心配してもらう必要なんてありませんわ」  
びしつと言った。

思いやりの欠片もない。やっぱり、婚約ってというのはクリスの思い込みなのか。

(思い込み激しそうだもんね……)

婚約者(だと思っ込んで)にそんな事を言われたクリスは、につこりと微笑んだ。まさかのダメージ0である。もしかして、マゾ？

「ああ、ミルラ。私が美しい女性に囲まれているから、焼き餅を焼いているんだね。そうやって強がって私の気を引こうとする姿は、本当に愛らしいよ」

「違いますわ！」

「心配しなくて良いんだよ、私の妖精。どんなに美しい花が辺りに

咲き乱れていようと、私の妻は貴方だけだ」

強い……っというか、怖い。

志真はどん引きしていた。熱っぽい視線で見つめ、おいでというように手を伸ばすクリスマスに対して、ミルラは涙目になっている。

感動で、というよりは怒りと恐怖でというのは、その表情を見れば分かりそうなものなのに、クリスマスはスルーだ。

ますますしがみ付いてくるミルラの顔を、伊吹は少々鬱陶しそうに右手で押し返している。その態度も中々酷い。この2人、婚約しているんだよね？

くっ付いている2人に対して、クリスマスは不快そうに眉根を顰めた。「さて、君。いい加減に私の婚約者を離してくれないか」

いやくっ付いているのはどう見てもミルラの方だ。

「美しい女性を見て報われない気持ちに胸を痛める気持ちはよく分かるが、ヤケをおこしてはいけないよ。今ならばまだ何もなかったことにしても良い。さあ、ミルラを帰してくれたまえ」

「帰りませんわ！」

全身の毛を逆立てて怒る猫のように、ミルラは怒りを露にした。

「わたくしはイブキと婚約しましたの！貴方との事はお爺様が勝手に決めた口約束だけですけど、こっちには是があるんですよ！」

肩に掛けていた小さなバックから、ミルラは綺麗に折りたたんだ紙を取り出した。薄い緑と金色の蔦で縁取りされた、A4くらいの紙である。

真ん中に書いてある文字は読めないが、下の方に伊吹のサインがあるのは分かった。

「そ、それは……！」

あのクリスマスが衝撃を受けている。

そつちに吃驚だ。

「まさか、そんな……贋物では」

「本物ですわ。ほら、ここにお爺様やお父様のサインもありますわ」

「あ、ありえない……」

気になる。一体あの紙は何なのか。志真は、隣で不安げな顔をしているフィオーネに聞いた。

「フィオーネ、あれ何？」

「婚約証明書よ。あっても無くても構わないんだけど、きちんとした家柄の人達は用意するみたいね。誓約書も兼ねていて、大体1年以内には結婚するのが普通みたい」

「へー！」

それがあるっていう事は、伊吹は本当にミルラと婚約しているのだ。

クリスはその婚約証明書を嘗め回すように見た後、がくりと床に手を付いた。

「なんて事だ……！」

本物、だつたみたいだ。

「やつとお分かり頂けたみたいで嬉しいですわ。わたくしは貴方の婚約者ではなく、イブキの婚約者なんですの」

心底嬉しそうに胸を張るミルラ。

「信じられない……こんな貧弱そうな冴えない男と君が。おまけに異世界人じゃないか」

むっとする。

伊吹が冴えない男だつていうのはその通りだが、異世界人だつていうのをマイナス理由に上げるとか、喧嘩売ってんのか。

何か黙っていられなくて、志真はずいっと前に出た。

「異世界人だから何！」

クリスの、明るい色の瞳が見開かれる。

「あ、いや、すまない、チーグーちゃん」

まだ言ってるのか。志真は半眼になった。

「チーグーとか違う、私はシマ！」

「……………シマ」

「用終わった。もう帰る」

さっさと帰れ。そんな意味を込めて、未だ床に手を付いてこちらを見上げているクリスに、手を振った。

膝を立て、立ち上がるクリスの次の行動は、まるで予測できないものだった。故に、反応する事もできず。気がつけば、振っていた右手を大きな掌に包み込まれていた。

「……………ええっ！？何！？」

「すまないシマ……………どうやら私の不用意な言葉で繊細な君の心を傷つけてしまったようだね」

痛ましげな視線と、労わるような声。

っていつか、顔が近い！

志真は精一杯首を仰げ反らせた。手をつかまれている為に、距離が取れない。

「ちよ、離して！」

ぶんぶんと手を振って振りほどこうとするけれど、びくともしなかった。相変わらず凄い握力である。手が痛い。

「本当にすまない」

「もー、良い！手、離す！」

「許してくれるのかい？志真、君は何て優しい子なんだ」

キラキラと輝くような笑顔を向けられる。そわそわと、背中を這い上がるものがあった。

「もしかしたら……………、君こそが私の運命なのか」

硬直する手を持ち上げられ、流れるような動作で指に顔が近づけられるのを見た瞬間、金縛りが解けた。

「変態っ！」

反射的に手を引き抜き、そのままグーで繰り出したパンチは、見事彼の右頬にヒットした。ふごつとカエルが潰れたみたいなきを上げて、よろけるクリス。残念ながら、吹っ飛ばすまでには至らない。

「何なのアンタ！ほんつとうに無理！今度変な事しようとしたら、ただじゃすまないから！」

と、日本語で怒鳴る。

意味は通じなくても、気迫だけは通じて欲しい。そんな思いも虚しく、クリスは赤く腫れた頬を撫でながら、志真に向かって微笑んだ。

「情熱的だね、シマ。君の不安な気持ちにはよく分かる。私と君とでは身分が違いすぎるというのだね？だが、そんな心配は無用さ！真実の愛の前には、全てが無意味」

絶望的に通じていない。

「ああ……、僕もここに住ませて貰おう。ここは確か宿屋だったから問題ないね、君が安心できるまで傍にいるよ」  
にっこりと笑うクリスに志真は青褪めた。

ついでにさっきまでミルミルミル言っていたのに変わり身が早すぎる。っていうか、何この展開。最悪だ。

## 菊乃の懸念

呼吸、体温、心音に異常は見られない。脳波なども調べてみたが、正常だ。ただ、眠り続けている異常。

ユーイ・ユーイは苛々した面持ちで、安らかに眠る菊乃を見下ろした。揺さぶって、起こしてやりたい気持ちがいじわり湧いてくる。いや、実は一度……二度程実際に実行した。「起きろ！」と怒鳴って肩を揺さぶったりしてみたが、結果は見ての通り。

これが男だったなら、引っ叩くところだ。最も、それでも起きないだろう。

精神的に疲弊した状態で、目覚めることを菊乃が拒否している。

それが、ユーイのたどり着いた結論だった。彼女に起こった様々なことを思えば、無理もないと思える。この先のことを思えば、このまま眠っていたほうが彼女のためにも良いかもしれないと、一瞬でも考えてしまった自分に腹が立つ。

(甘い考えに流されんな)

ユーイは菊乃個人の事ではなく、この国の、世界の利益を考えなければならぬ立場だ。この世界に忍び寄り、未知なる脅威。敵対者、それからその背後にいるかもしれないもの。それらに対抗する術を持つ人々は貴重だ。

例え、それが菊乃の命を縮めることになっても。

ユーイは坂巻菊乃の不幸を思う。たった一人、家族と切り離されて異世界に来て、わけの分からない力を得て、利用されようとしている少女。

哀れに思っても、してやれる事は何も無い。

ユーイには、哀れむ資格すらないのかもしれない。

厳しい表情で菊乃を見下ろすユーイに何かを思ったのか、ジェレミーが密やかな声で彼の名を呼んだ。返事の代わりに視線を向ければ、真面目な顔で口を開く。

「やはりここはあれしかないのでは」

あれ？

この弟子との付き合いは長いが、未だに時々何を考えているのかわからない時がある。今が正にそれだった。

「あれって何だ」

ついでに何の事を言っている。

「前に読んだ小説ですけど、眠り続けている姫は、運命の王子の口付けで目覚めると、そういう物語でした」

「……お前、まさかそれを実行しようとか」

「確か、あの話は彼女の世界に伝わる古い話ですからね。試してみる価値はあると思いますよ」

「ねーよー！」

真面目な顔で何を言っているんだ。

冗談なのか、本気なのか。分からないだけに性質が悪い。呼吸が止まっているわけでもなし、口付けして起きるとかどうという理屈なのか。

理解に苦しむ。

「……ジェレミー」

「何でしょうか」

「お前、暫くこの部屋に立ち入り禁止だ」

不満げな顔をされたが、妥当な判断だと思う。ジェレミーは少々菊乃に対して近づきすぎている。気に入りの娘くらいで留まっているなら良いが、本格的に好意を持たれるのは厄介だ。



何せジェレミーはしつこい。

博愛傾向にあつて、滅多に特別を作らないが、気に入るものが出るのとことん構う傾向にある。気に入りの家具、動物、文房具。今のところそこまでのめり込んだ人はいないが、出来たら多分厄介だ。

万が一にでも、菊乃に対してそういう思いを抱かないようにしなくては。

今後に支障をきたすだろうし、何より菊乃が気の毒だ。

(あれはどうも、何か厄介なものに好かれる性質な気がする)

必要以上に様子を見に来るユリウス(真面目に仕事をしてんのか)といい、厄介ごとの塊のようなハインスが、菊乃の様子のみに対応することといい。ついでに、ケラスの変態異世界研究者のジャンナも、「キクノちゃん、キクノちゃん」と煩い。

まあ、あれは貴重な研究対象としての意味だろう。

それからハルラック・エジ。

ユーイからしてみれば、彼が一番不可解な存在だった。無口で大人しい異世界人。菊乃が来るまでは、目だった問題を起こすこともなかった。

だが、彼は確実に何かを隠している。それも、恐らくは菊乃に関わる事柄で。

最初に菊乃を助けた事は本当に偶然だったのか、その疑問はユーイの中で再び大きくなっていった。

(全く、どいつこいつも……)

菊乃の立場を考えれば、眠っている今が一番平和で幸せな時かもしれない。そう考えて、ユーイは複雑な溜息をはいた。

目の前で、ドアが閉められる。

その向こうに幸せそうな家族の団欒があった。快活に笑う綺麗な母と、優しげで穏やかな父。間に挟まれた高校生の娘もにこにこ明るく笑っている。オレンジの暖かい光の下で、美味しそうな手料理が並べられていた。今日は私も手伝ったんだよ、そう主張する娘に、両親は目元を緩ませる。

弾けるような笑い声。

幸せな風景。

そこに、菊乃の入る余地は無い。

小さく吐いた息が白い。

そこは暗くて寒かった。瞬きをするとドアが消える。暖かい光も見えなくなった。暗闇の中で菊乃は目を閉じる。右も左も分からない。浮いているような、落ちて行っているような。

「……言えば良かった」

ぼつりと後悔の言葉が出て来る。

私も手伝うって。

言えていたら、あの家族の一員でいられたらどうか。簡単なたった一言。ぎこちなく、だけど仲良く寄り添う母と新しい妹の後姿を見ていたら、それがどうしても言えなくて。勝手に距離を感じてしまったのだ。

もう二度と、やり直す事はできない。

誰も頼る相手のいない未知の世界で、菊乃は生きていかななくてはいけなかった。

再び目を開けると、新たなドアが見えた。

その向こうに何があるのか、今度は見えなかった。何があるのか、

何が起こるのか分からない。だからいつも怖かった。

今も怖い。

でも行かなくてはいけなかった。自分のした事の結果を見るために。菊乃はゆっくりとドアに手を伸ばした。

「行くの」

唐突に響いた甲高い声に、菊乃はびくりと肩を揺らす。振り返るが、闇が広がるばかりだ。

「どうして、ずっとここにいっても良いのに」

暗闇の中、声だけが響く。大人のような、子どものような。ただ女性の声だということだけははっきりしていた。

「誰？」

「折角守ってあげたのに。ここにいればずっと守ってあげられるのに」

菊乃の疑問には答えずに、声は囁く。

「外に行けばまた傷つくのに。悪戯に命を縮めるだけなのに。人は、どうして自分の命を大切にしないの。こんなに脆くて儂いのに」

「耳元を風が通り過ぎる。」

振り返れば、ドアが開いていた。広がる光が闇を浸食していく。

「もう呼ばないで。私は貴方を殺したく無い」

目覚めてすぐは、ぼうつとしていた。

先程まで見ていたような気がする夢すら思い出せなかった。

頭の中に白いもやがかかっているようで、はっきりとものが考えられない。熱があるのかもしれない。何だか頭が痛い。体はだるく、喉が渴いてひりひりしていた。名前を呼ばれたのでそちらを見る。心配そうにこちらを見下ろす、飴色の瞳があった。

ハルラックさん。

そう呼ぼうとしたけれど、咳き込んでしまって声にならなかった。

「これを飲んで」

細いチューブのついた液体入りのパックを差し出される。中身は何かよく分からなかったが、果物のような甘味と喉のすつとするすつきりした喉越しの飲み物で、幾分か喉が楽になった。咳止めとかだろうか。

「…あ、りがと…」

酷い声だった。

「無理に声を出さない方が良く、喉を痛めているようだ」

ハルラックは憂うような眼差しを菊乃に向けた。

「念の為に医者を呼んでくる」

そう言っ出て行ったが、彼の帰りを待つ事無く菊乃は再び眠ってしまった。次に目が覚めたのは、その半日後のことだった。

## 伊吹、引き返せなくなる 1

まさかこんな事になるとは。

予想外の展開のバーゲンセールに、伊吹は平静を装いながらも混乱していた。

そもそもは、ミルラの問題を何とか解決してやろうという話から始まっている。別になけなしの親切心を発揮したわけではなく、単に厄介ごとに巻き込まれなくなかったからだ。

(結果余計に厄介な事になっているが)

異世界、恐るべし。

いや、恐ろしいのはラクリエル家である。

君子、危うきに近寄らず。

昔の人の有りがたいお言葉を全く生かせなかったが、向こうから近寄ってきた場合はどうすればいいのかも、できれば教えておいてもらいたかった。

少し落ち着こう。

そして、自分の行動の何がいけなかったのかを、振り返ってみる。

伊吹はミルラと話し合い、何とかラクリエル家に直接出向いて、何とか彼女の祖父を説得できないかやってみる事となった。彼女の後ろ盾であるラクリエル商会が、伊吹のところへ怒鳴り込んでくる前に動く必要があった。

拗れて『良くもわしの可愛い孫娘を……、お前等社会的に抹消してくれるわ』とかならないとも限らない。早急に誤解を解くべきである。

で、出向いたのだが。

「ここ、ですか？」

「そうですねよ？」

伊吹の戸惑った様子に、ミルラは不思議そうに首を傾けた。目の前には、予想よりも数段こじんまりしたお屋敷がある。勿論、普通の民家に比べれば大きいのだが、手広く商売して儲けているらしいラクリエル商会にしては、小さい。散々渋っていたミルラが、自分を騙そうとしているのではないかと、一瞬疑ってしまった。

しかし、きよとんとした大きな目は、嘘をついているようには見えなかった。

ミルラは強引かつ身勝手な上、周囲は自分に協力してくれるもの、という結構高慢な考え方を持っている。が、反面おどろく位に素直で純粹だ。人の言葉を鵜呑みにしてくれるし、疑う事を知らないというか、人を騙すということができないというか。

聞けば、初めて会った時の濃い化粧は妹が施したもので、「絶対に商談が成功する化粧」というやつらしいが、確実に遊ばれている。更に、家出計画に伊吹を巻き込んだのは、彼女の兄の入れ知恵だとか。のりのりで演技指導をしてくれたらしい。聞けば聞くほど、ラクリエル家と関わりたくない気持ちが増す。

そんな中で、ミルラは割合まともな方なのかもしれない。

「行きますの？」

「勿論」

不安そうに瞳を揺らしていたミルラは、はあっと大きな溜息を吐いた。

「分かりましたわ。ついてきなさい」

背筋を伸ばし、しずしずとミルラが歩いていく。門番の男が目ざとく彼女を発見した。

「これは、ミルラ様。家出されたと聞いておりましたが」

「お爺様にお話があって、戻りましたの」

「では、後ろの方が噂の？」

噂って何だ。聞きたいような、聞きたくないような。

「余計な詮索を許した覚えはありませんわ。彼はわたくしの連れです。黙って通しなさい」

「は、これは失礼いたしました」

強い口調を返すミルラに対して、門番の男（30代後半）が向ける眼差しは暖かい。可愛い娘を見るような感じである。逆に、伊吹に向けられる視線は鋭い。

うちのお嬢さんを泣かせやがったらばらして魚の餌にしてやるぜ！的な無言のメッセージを受け取った。

（俺は今日ここから生きて帰れるのか）  
非常に不安だ。

門をくぐって庭に入る。

日本を基準にして考えれば広いが、この国で有数の金持ちだと考えると小さな庭だ。その代わり、珍しい植物が育てられているようだった。どれも異世界のものである事は、保護施設の農園で働いているからこそ分かる。

「シワジの青とか、独自の品種改良品だろ。あ、コウジマの実」  
思わず足を止めてしまう。

子どもの拳大の大きさの、黄色と枯れ草色の斑模様。中身は鮮やかな橙で、非常に爽やかな甘味のある果物らしい。高価すぎて食べた事はないから、伝聞だ。そもそも、普通の店には並ばない品物だ。希少価値の高い理由は10年に1度しか実を成さない為である。

「イブキ、詳しいですわね」

「一応仕事ですからね」

今日、職場に（無理やり）案内した事を思い出したのが、ミルラは頷いた。

「そういえば、そうでしたわね」

しかし、流石はラクリエル商会である。平然と庭木になっている

が、この実1つで日本円にして10万くらいの値がつく事もあるのだ。

土産にいくつか持たせてもらえないだろうか。

ざっと見ただけで数十個の実が生っている木を見上げて思った。

そんな邪な思いが通じたのか、ミルラが口を開いた。

「食べたんですの？」

「いや」

食べたいというよりも、儲けたい……とは、流石に言えなかった。

「非常に美味しいと聞いた事があるので」

「そうなんですの？」

何故そこで疑問系。

「食べたこと無いんですか？」

「ええ」

こんなにあるのに？

普通食べるだろう。ひよっとして、商売用なのか。何気なく足元

の茂みを見た伊吹はぎよっとした。食われないまま朽ちた果物が、

捨て置かれている。

何故だ。

落ちている果物の数を、思わず目で追ってしまふ。

(……8つだと。……約80万円の損害)

お前ら、それだけ稼ぐのに、人がどれだけ苦労したと思っているんだ！と思わず怒りたくなる気持ちをつくつと堪える。小さな屋敷に惑わされるな。ここは国でも有数の金持ち、ラクリエル商会なのだ。

80万なんてはした金に違いない。

そう考えると、余計に腹が立つのだが。

「この家では、庭に生ったものは食べてはいけないとか、そういう



決まりでもあるんですか」

「ありませんわよ」

「だったら、食べるべきです。折角生っているのに」  
「もっというなら、売るべきだ。というか、いらぬならくれない  
だろうか。」

勿体無い。

枝に手を伸ばしたのは、殆ど衝動的なものだった。目の前の取れ  
そうな場所に、熟れた実がなっていた。

「あ」

ミルラの驚いたような声と、ぱきりと果実をもぐ音はほぼ同時に  
響いた。

「ほら」

しまった勝手にもいでいた。己の行動を認識すると同時に、それ  
をミルラの手元へと差し出す。さも、彼女のために取りましたとい  
うように。

ミルラは伊吹を見たまま、何故か驚いたように固まっている。大  
きな青い目が、更に大きく零れ落ちそうだ。

(……これじゃ、フォローできなかつたか)

素直に謝るべきか考え始めたところで漸く、ミルラが動いてくれ  
た。おずおずと、白い両手を差し出して伊吹から果物を受け取る。

「あ……ありがとうございます」

何故そんなに声が震えているのか。ついでに、白い首筋から頬に  
掛けて、林檎のように真っ赤になっているのか。

伊吹には理解不能であった。

「……見ましたわよ、お姉さま」

幾分幼い少女の声が、背後の茂みの方から聞こえてきた。その声  
に、真っ赤な顔で俯いていたミルラがびくっと顔を上げる。

「エリー？」

がさがさと、しげみ（あれは恐らくウイストロン）の濃い葉を掻き分けて、ほっそりした少女が現れる。崩れたところのない、人形のような美少女だった。流れる長い金の髪と、青い瞳がミルラにそっくりなので、彼女の妹である事はすぐに分かる。

年は15、6くらいだろうか。

髪やら服に葉っぱを沢山つけている癖に、細い腕を体の前で組んで偉そうに薄い胸をはっている。更に流し目。

「そこのお兄様。私もその果物を食べてみたいですね。どうか、わたくしにも取ってくださいませんか？」

強請るような甘い声。

思わず、

「自分で取れ」

と言いたくなるような……いや、既に言っていた。

断られるとは思っていなかったのか、ミルラの妹エリー？は驚いた顔をしている。まずかったか。つい、嫌な元同級生と重なって。

思えばあれが、女性が苦手になった原点である。

## 伊吹、引き返せなくなる 2

忘れもしない中学1年生の頃の思い出。

クラスでも人気だった、ちよつと可愛くて明るい少女。自分とは縁の無い彼女がある日話かけてきた。

「伊吹くん、あのさ今日の宿題やってきた？算数のやつ」

目の前ではにかむ可愛い少女。同じ教室で過ごしながら、全く話した事もない相手。いきなりのことにどぎまぎしながらも、伊吹は頷いた。当然やってきていたからだ。嘘をつく理由は無い。

「凄いい！私馬鹿だから難しくても伊吹くん頭良いしやってるかもって思つて。思い切つて聞いてみて良かったあ。あの、写させてくれない？良かったら……、だけど」

そこで何故嫌だと言えなかつた過去の自分。

言えなかつたためにそれ以降、何だかんだ言われて宿題を写させてやる羽目になったのだ。まあ、それだけならばまだ良かった。

更にそれから半月後。

「伊吹てさあ、カナのこと好きなんじゃねえー？」

廊下が赤く染まつていた夕暮れ。

忘れ物を取りに教室に戻つた時の事だった。女子の数人がまだ残つていて、話をしていた。話題はまさかの自分のこと。入るに入れない。咄嗟に姿を隠してしまった。

「えー」

「私もそう思うー。ね、もし告白されたらどうする？付き合つ？」

「無いよー。伊吹くんって頭良いけど暗いし、ちよつと気持ち悪くない？」

「うつわ、いつつも宿題見せてもらつてる癖にその言い草。アンタ鬼だねえ」

楽しげな笑い声を聞きながら、腹の底から嫌悪と怒りが湧いてき

たのを今でも覚えていて。というか、今思い出しても腹の立つ。

帰ろうと思いかけて踏み止まった。

逃げるみたいで悔しかったのだ。勢いつけてドアを開くと、ぱつとこちらを振り返った少女達が気まずそうに口を閉ざした。気まずい沈黙の中、伊吹は黙って自分の机に向った。机のフックに掛けられた縦笛。

それがその日忘れたものだった。

無事手にして教室を出ようとした時だ。

「盗み聞きなんて、サイテー」

決して大きな声ではなかったが、静まり帰った教室でそれはよく響いた。その声は、いつも伊吹に宿題を見せてと強請ってきた『カナ』のもので。

その後切れた自分が縦笛を思い切りカナに投げつけたとしても、仕方が無かったと今でも思う。例えその後、その件が「縦笛殴打事件」として歪められて伝わり、卒業までクラスの女子から無視される羽目になったとしてもだ。

後悔はしていない。

後悔するのは最初に彼女の本性を見抜けず、淡い恋心っぽいものを抱いてしまった事である。人生最大の汚点だ。

流石に利用されているのは分かっていた。それでもまあ彼女が喜ぶなら良いとか温いお花畑思考を思い出すと、わけもなく叫んで倒れたくなる。忘れよう。覚えている価値も無い思い出だ。

そして、今日の前にいるミルラの妹からは、彼女と同じような匂いを感じた。自分の容姿が優れていることを自覚し、目の前の男に影響を与えられると信じている。

自分が一言お願いすれば、伊吹程度の男ならば馬鹿みたいに言いなりになると思っているのだ。伊吹には分かる。現に今、断った伊

吹に対して驚いたような、不快感を抱いたような顔をしていた。それは一瞬で綺麗に隠されたが、見逃さなかった。

「お姉さまには取ってあげたのに、わたくしには取ってくださらないんですの？」

傷ついたような顔で、悲しげな上目遣いを向けるエリー。

中々の演技派だ。

しかし、どうして執拗に伊吹に果物を取らせようとするのだろうか。

これに何か意味があるのか。何かの罠か。もしかして、実をもらいだ途端泥棒とか叫ばれて屋敷の者に掴まるとかそういうイベントが用意されているのだろうか。

いや、待て。

伊吹は先程果物を渡した時の、ミルラの不可解な反応を思い出した。それ自体に何かあるのだろうか。

様々なことに考えを巡らせていた伊吹は、手を打つような乾いた音に我に返った。

パンパンパン、と乾いた音が高らかに響く。

音のする方から、背の高いがっしりした体格の老人が現れた。軍人のようないかつい顔に白い口ひげ。左目に眼帯。黒地に金と銀と朱の刺繍の入った羽織を身につけた、いかにも只ならぬ雰囲気を持った男だ。

そんな男がしかめっ面で拍手をしているのがまた怖い。（何の拍手だ）

その彼を。

「お爺様！」

とミルラとエリーが呼んだ時、伊吹は眩暈がした。マジか。多少の覚悟はしてきたつもりだったが、ヤクザというか海賊というか、流石にそういうのが出て来るとは思わなかった。（貴族の端くれじやなかったのか）

ギロリ、という擬音が相応しい視線を向けられる。それだけで寿命が何年か縮みそうだ。

挨拶しなければ、と口を開いた伊吹だったが、少しばかり遅かった。

「お主、なかなかやりおるのう」

にやりと笑う姿は悪徳商人にしか見えない。越後屋、そちも悪じやのうみたいな台詞を言われては、尚更だ。

しかし何の事なのかさっぱり分からない。反応のしようが無いので、伊吹はとりあえず曖昧に笑った。

「お騒がせしまして、申し訳ありません。私はイブキ・ガガミと申しまして、ご存知でしょうが異世界の人間です。未だこちらの常識に通じていないところが多々ありまして、本意では無いですが不愉快な事を仕出かしてしまうかもしれません。お許してください」

「構わん構わん。というか、迷惑を掛けておるのはどちらかということ、家の孫娘のほうじゃろつ」

おお、ばれているし。

祖父に見られて、ミルラは小さく肩を竦めた。エリーもその隣で大人しくしている。見た目よりも話の分かる老人のようだ。と、安心しかけたのだが。

「まあ、立ち話もなんだし、家の中へ入れ。孫の旦那になる男なら、それなりのもてなしもせにやならん」

は？

思わず目が点になった。

そんな伊吹に対して老人はかかかと大笑する。

「コウジマの果実をもちで渡すつーのは、我が家に代々伝わるプロポーズなんじゃ。女が受け取るか受け取らないかは、その返事になつとる。受け取るのは了承するって意味がある」

「代々つて、お爺様の代で勝手に決めたんじゃありませんの。自分

がそうしたからって」

はあ！？

伊吹は思わずミルラを見た。ミルラは再び顔を赤くして、横を向いたまま伊吹と目をあわそうとしない。

謀ったな。

いや、伊吹が知らずにコウジマの果実をもらってしまったのだが、それにしても何故受け取る。

「ミルラ……」

「……だって、いきなり渡してくるんですもの！ついですわ、ついで」

ついで受け取るなよ。

「まー、知らなかったんじやろうが、それはそれで中々運命的で良い」

良くねえ。

「いや……ですが、私はこちらには何の土台も持たない、異世界人です。どういう人間かも分からない相手に大切なお孫さんを任せるとも良いんですか」

「家柄だの身分だのに拘るような時代じゃ無いよ。家に必要な商才じゃね。その点あんたは中々見所があると思うてのー！。宿屋建て直し計画、楽しみにしてるよ。軌道に乗りそうなら、いくらか用立てても良いとおもつとる」

……ぐらつと、きた。

ラクリエル商会との繋がり、正直言って欲しいのだ。しかし、だ。

「ですが、ミルラさんのお気持ちも」

「そうじゃのう」

そうだろう。

老人は、黙っている孫娘の方へ視線を戻した。

「で、どうなんじゃ、ミルラ。わしの推薦したクリステイアン・ベルナ・ハーバーか、このイブキとどっちが良いんじゃ？」

二択かよ。

伊吹は頭を抱えなくなつた。もうちょっと選択肢を増やしてくれ。「勿論イブキですわ！」

きっぱり宣言されたところで嬉しくもない。選ばれた理由は、伊吹の好感度が高いからではなく、相手の好感度が最低値になっているからだ。

ギスニツチみたいな男、クリステイアン・ベルナ・ハーバー。

後に調べたところ、ギスニツチというのはエメラルド色に金の模様をやたら派手な小動物だった。見た目はやや胴体の長いビーバー。注釈として、女性関係が激しく複数の女性と同時に関係を持つような男に対して、この小動物の名前が使われる事があると記されていた。

この小動物、一夫多妻制らしい。



### 伊吹、引き返せなくなる 3

しかし、異世界に来て結婚について考える羽目になるとは。

恐らく向こうの世界にあのままいたなら、一生悩む事はなかっただろう。女友達どころか、同級生の女子ともろくに口をきかなかつたくらいだ。一生独身。それで良いと思っていた。

それなのに、結婚とか。

結婚すれば、市民権を得られるうえ、絶対的な後ろ盾を得られるのだから、伊吹にとっても決して悪い話ではない。

(悪い話どころか……)

美人で金持ち(性格はちょっと癖があるものの気にならない範囲だ)が相手とか、恵まれすぎていて逆に怖い。絶対どこかに落とし穴が。更なる不幸か、或いは厄介ごとの前フリとしか思えなかった。もしかしたらこの一連の出来事は仕組まれていて、自分は何かを試されているところなのだろうか。

何にせよ、ろくな事にはならない気がする。

逃げ道を塞ぐように用意された婚約証明書。

ミルラとの結婚が進められていたクリスティアン・ベルナ・ハーバーを納得させる為には、絶対に必要なものだと言って作成させられた。

後で詳細を調べたところ、どうも嵌められたような気がしてならない。書類に判を押す時は、きちんと詳細を確認してからにしましよう。どちらにしても、あの雰囲気の中で断る事は難しかった。

「まあ、どうしても嫌だつていうんなら、破棄にしてくれても構わないからそう深刻にならんでも良い」

そう、ラクリエル商会のご隠居（裏ボス）ジョール・ラクリエルは笑っていたが。目は笑っていないかった。うちの可愛い孫娘のところが不満なんじゃい、と腹の底で思っているに違いない。

別にミルラに不満があるわけではなかった。

しかし、結婚したいと思うほど好意を抱いているわけでもないのだ。大体知り合って2日しか経ってない相手と躊躇い無く結婚できる奴がいるか。……いるかもしれないが、少数派の筈。

こんな美人と結婚とかラッキーと思えるほど、伊吹は楽観的な人間ではない。

「いつさん、ちょっとあれどうにかなんないかな」

翌日、通勤途中の伊吹を追ってきたのは志真だった。いつもよりも幾分青い顔で、元気が無い。理由は分かっている。

ジョールが用意した婚約証明書によって、完璧にふられてしまったクリスティアン・ベルナ・ハーバーは、その後どういわけか志真に言い寄っている為だ。

全くどうい趣味なんだ。

ミルラと志真にはまるで共通点が見つからない。性別、女っていうくらいだろうか。

「まあ、無視しておけばその内に飽きるだろ」

「他人事だと思っ！いつさんは良いよねー、あんな綺麗な人と婚約とか……騙されてない？」

否定できない。

「クリスティアンだって顔とかは良い方だろ。貴族らしいし玉の輿じゃないか」

「女たらしで変態って辺りで帳消しだよ。大体、私あの人の事好きじゃないし」

他に好きな人いるし、という小声で囁かれた言葉は聞かなかった事にしてやった。相手はどうせあのモクとかいう異世界人だろうし、

興味も無い。

思わず呟くという、柄にもない行動に照れたのか、志真は誤魔化すように大きな声で言った。

「大体さ、クリスマスだって私の事本当に好きってわけじゃないと思うんだよね」

「ほう」

「出会って良くわかんない内にさ、しかも追ってきた婚約者に振られた直後に告白って、やっぱりちよつと無理があるよ」

意外とちゃんと考えているらしい。

「何か他に考えてる事があると思うんだけど」

「だろっな」

多分、ミルラ絡みのことだ。

あつさりと肯定すると、志真は驚いたような顔をした。

「心配じゃない？」

「何が」

「だって、ミルラさん置いて来てるし。クリスマスも暫くいるって、取り合えず2週間分前払いで宿代貰っちゃったらしいよ」

しかも一等部屋である。金持ちめ。

「良いカモが入ってよかったじゃないか」

「それは良いんだけど、そーじゃなくってさ！」

「ミルラに何かするんじゃないかっていう心配なら、するだけ無駄だぞ」

少なくとも、今日のところは。

「え、何で？」

心底不思議そうな顔をする志真には言うつもりは無いが、クリスマス・ティーン・ベルナ・ハーバーはさっきからずっと、自分たちの後方でうろつろしているからだ。

尾行しているにしろは、堂々と姿を見せている。時折、物陰に隠れているようだがあんまり意味が無いような。あの無駄に立派な体格と、派手な服装は人の群れの中にあっても目立っていた。

さて、奴の目当ては一体どちらなのか。

イググローブス乗り場で志真と別れた後、その派手な男の姿がイググローブスに乗り込んでいたのを確認した伊吹は、非常にがっかりした気持ちになっていた。婚約者を奪われた男が、奪った（誤解だと主張しておきたい）男にどんな用があるのか。

不穏な用しか思い浮かばない。

クリスティアンは少々暑苦しい感じではあるが、彫の深いイケメンであった。身長も高くマッチョで、好みはあるだろうが女性に受けそうなツボは持っている。性格に難ありとは言っても、本人に自覚は無いだろうし。

（そりゃ、納得はいかないだろうな）

貧相で貧弱な異世界人相手では。

暴力に訴えられればまず勝てない。いざという時は、遠くから護衛してくれている筈の護衛が駆けつけてくれるだろう。

しかし出来れば遠慮したい。

痛いのは嫌いだ。

暴力も。

イググローブスを下りて、いつもの道のりを歩く。頭の上で、後ろを向いて威嚇しているこつに、敢えて気がつかないふりをしつつ。保護施設まであと半分の辺りで声がかかった。

「イブキ・カガミ。少し、私のために時間をとってもらえませんか」と、クリスティアン・ベルナ・ハーバー。

以外に紳士的に声を掛けてくれたので、幾分気が楽になった。職場には遅れると一報を入れ、近くの店に入る。所謂喫茶店で、数種

類のお茶や珈琲、ジュース等の飲み物と菓子、軽食なんかを出している洒落た店だ。

動物連れOKの店なので、偶に利用している。

この時間に来た事は無かったが、何気にカップルが多い。そんな中、2人がけの席に、小さなテーブルを挟んで男と向かい合っているのは、聊か抵抗があったが致し方ない。

「で、話というのは」

それぞれ注文した飲み物とケーキ（これはクリスティアンのみ）が届いたところで、伊吹はそう切り出した。クリスティアンは優雅な動作で、繊細な形のカップに口を付けた。

「ミルラ嬢と別れてくれないか。……とは、言わないので安心してくれたまえ」

はっはっはっは。

怪訝に眉を寄せる伊吹に対して、クリスティアンは高らかに笑う止める。周囲の視線がこちらに集まっているじゃないか。

伊吹と嫌そうな顔を、どう受け取ったのか彼はおかしそうに言う。「そう心配することはないよイブキ。私は常に前だけを見る男だ。

過去の事は振り返らない、美しいミルラ嬢の事は残念だが……嬉し  
い事に世に魅力的な女性は多い」

「過去というか、つい昨日の事ですが」

切り替え早すぎるだろう。

白い歯を見せながら、にこやかに辺りを見渡すクリスティアン。  
やめる。周囲の女性は大部分が男連れなのだ。

多分その辺りがミルラに嫌われる要因と見た。男にも嫌われそう  
であるが。

「とはいえ、私にとって、妖精のようなミルラ嬢との結婚はとても  
魅力的なことではあったのだ。彼女が妻になるという事もそうだが、

何よりあのジョール・ラクリエルに認められ、彼の家族となる事は  
大変名誉な事だからね」

「はあ」

ここは謝るべきなのだろうか。

「昨日は本当に驚いたんだ。あの婚約証明書……、あれにジョールの  
名前があるって事は、君は彼に認められたという事になる」

男に熱く見つめられたところで、少しも嬉しくは無いものだど、  
伊吹は知った。

「つまり君は、いずれラクリエル商会の重役になるかもしれない男  
だという事だ。今の内に、親交を深めておくのも悪くないと思って  
ね」

爽やかに、暑苦しい笑顔を浮かべるクリスティアン。

言動のおかしさの割りに、中々抜け目の無い男のようだ。

## 伊吹、引き返せなくなる 4

「これは一体どういう事ですの」

仲良く（表面上は）一緒に帰ってきた伊吹とクリスティアンを見て、ミルラは眉を顰めた。

「昨日の無礼を謝罪してね、彼とは友人になつたんだよ」

白い歯をきらりとさせながら、クリスティアンは笑う。

「……友人？本当なんですか？」

「まあ、不本意ながらそういうことになりました」

「ははははは、このように本心を言い合える仲というわけですよ、

ミルラ嬢」

はっはっは。

この切り返しは学ばなければなるまい。この男、馬鹿に見えて馬鹿ではない。

ジョール・ラクリエルに認められたへと、クリスティアンが思い込んでいただけだが、男と今の内に交友を深めておきたい、それから何が彼の気を引いたのか知りたいというのが、クリスティアンが伊吹に近づいてきた理由らしい。

表向きにはそう言っているが、その実虎視眈々と伊吹を落としたいれようとしていたとしても、驚きはしない。とにかく中々本心の見えない男だった。

そんな彼と友人になった理由はただ1つ。

こっちとしても、商売の上客になりそうな貴族とのつてを作っておきたかったからだ。限りなく打算的な友情である。お互いに承知しているので問題は無い。取り繕う必要が無いのも楽だった。

宿屋建て直し計画についても、上手くいく目処がたつたら援助すると申し出てくれた。成功する見込みがない内は見守らせてもらうよと、実に冷静な発言。

こつちも乗っ取られないように目を光らせておこつ。  
そんな、割合に殺伐とした関係を友人といつてもいいものか。

「あリアラさん。今日も何て美しいんだ！」

帰ってきて早速、出迎えたリアラに大げさな贅辞を叫び始めたクリステイアン。あれが友人とか言いたくない気持ちになってくる。

割合と本気で。

「……イブキ」

ミルラは納得いかない様子で、伊吹を睨み付けてきた。

怒っているのかと思えば、すぐに不安そうな顔を見せる。

「わたくしの事、見捨てませんわよね」

「は？」

「愛情より友情とか言つて、わたくしをクリステイアンに売つたら一生許しませんわよ！」

何を心配しているかと思つたら……、伊吹は思わず笑つてしまつた。

「余計な心配だと思えますよ」

何せあいつは、過去を振り返らない主義とか言つて、ミルラへの思い（本当にあつたのかすら疑わしくなつてくる）は綺麗さっぱり忘れている。

色々と言動の怪しい男ではあるが、その辺は信じても良い気がした。

あれも結構打算的な男だ。

チャンスがあれば付け込んできそうだが、無駄だと分かっているならきつと何もしない。ミルラのみが嫌だと言っているなら無茶を通しただろうが、ジョールの決定がある限りクリステイアンは従うだろう。

その辺の事情はミルラに話しておいたほうが良いかもしれない。

そんな、余計な不安を抱えるくらいなら。……と、思ったのだが。



結果だけいうと、ミルラは激怒した。

「しっぴんじられませんわ！」

怒りで声が震えている。

「歯が浮くような台詞ばかり言っておいて、実はお爺様に取り入るためとか、どれだけわたくしを馬鹿にすれば気がすむの！許せませんわ！」

どうやらプライドをいたく傷つけてしまったようだ。お嬢様だしな。フォローの言葉も見つからないので、伊吹は黙っている事にした。

ちなみに場所はミルラの部屋だ。クリスティアンと同じく宿屋の一等部屋。最初はリアラが「婚約しているなら、同じ部屋がいいかしら？」と恐ろしい提案をしたので、全力で却下しておいた。

間違いが起こったらどうする。

今のところは婚約者だが、いつ反故にされるかも分からない。その時になって「よくも家の孫娘を傷ものにしてくれたもんじゃのう」とか脅される可能性だってある。

世の中は理不尽にできているのだから。

ミルラはミルラで不満そうだった。多分、クリスティアンと同じ階の部屋というのが気に入らないのだろう。そればかりは同情する。

暫くすると、ミルラの怒りも治まってきたらしい。

椅子の背もたれに体を預け溜息を吐くと、少しだけ落ち込んだような顔を見せた。

なんだか、すっきりしない気分だ。

「もしかして、ミルラさんはクリスティアンのことが好きなんですか」

あんまりの落ち込みように、そんな疑問が浮かんできた。だとしたら、とんだ茶番だ。伊吹の発言に、ミルラは素早く身を起こした。

「そ、そんなわけ有りませんわ！何処からそんな考えが浮かぶんですの！？」

「嫌っている割りに落ち込んでいるようなので」

「……………それは」

眉を顰め、ミルラは気まずそうに視線を落とした。

（痛いところを突かれたというところか）

伊吹は溜息を吐いた。少しばかりイラついたが。

「だって、皆結局はお爺様やお兄様ばかりなんですもの」

拗ねたように、ミルラは口を尖らせている。

「前も話しましたけど、仲の良い友達や、男の人が出来そうになっても、お兄様やお姉さまを見ると、皆すぐにそちらの方に夢中になってしまうのですわ。最近ではエリーも。お爺様目当てで近寄ってくる人も山ほどいましたし、誰も、本当にわたくしの事を見てくれる人なんて結局何処にもいないんですわ」

お嬢様にはお嬢様であるが故の悩みがあるようだ。

「だから……………イブキが、わたくしの事を好きでなくても構いませんわ。偶然でも、コウジマの実をわたくしにくれたんですもの。その上、エリーの我侭を無視して、お爺様に取り入ろうとしないで、わたくしの気持ちを優先してくれた人なんて、今までおりませんでしたわ」

真っ直ぐで純粋な瞳に見つめられて、伊吹は大変後ろめたい気持ちになった。自分の行動がかなり美化されてとらえられている！

その事実には衝撃を受けた。

エリーに対して厳しい態度に出たのは、単純に彼女の態度が気に入らなかっただけである。お爺様に取り入るとするのはどう考えても面倒事がセットになっている為、小心の伊吹としては安全な道を選びただけで。

つまり、ミルラを優先させたというのは全くの誤解だ。

「だから、つまり……わたくしは、イブキの傍にいたいのです」

これ以上ないくらい顔を真っ赤にさせながら、ミルラは消え入りそつな声で告げた。

……今更違うとは言えない雰囲気である。

思いもかけぬ展開に、伊吹は動揺していた。

女にもてる外見でも性格でもなかった為に、こんな事態は初めてだ。相手は金髪碧眼の美少女とか、到底現実で起こるとは思えない出来事が。

夢か妄想……やっぱり何かの罠なのか！

どうしてもそつちに考えが向かってしまう。硬直する伊吹に、ミルラは怒ったような顔をした。

「何とか言ったらどうですの」  
いつも通り強気な口調は保っているものの、青い目は不安で揺れている。

ぐら、と伊吹の中の何かが揺れた。

「か……」

口の中が乾いていて、言葉が掠れる。

「勝手にすれば良い」

漸く出てきたのはそんな台詞だった。平坦で素っ気無い声だと、自分でも思っ。

各務伊吹、23歳。

捻くれている自覚はあったが、自分にツンデレ属性があると気がついた初めての瞬間であった。

志真と微妙な乙女心 1

朝。

宿屋であるとはいえ、現在は自分の自宅である筈なのに、何故こんな気が休まらないのだろう。

ドアをほんの少しだけ開けて、廊下の様子を伺う。

よし、誰もいないな。

きちんと確かめてから素早く廊下に出た途端、斜め向いのドアも開いた。何このタイミング怖すぎる。

「おはようチーグーちゃん。今日も寝癖が鳥の巣のようで愛らしいよー！」

朝からきらきらした笑顔を惜しみなく振りまくクリス。最後に愛らしいとか付け加えれば何を言っても暴言にならないとも思っているのか。断じてそんな事は無いからな。

でも朝の挨拶は大切なので、礼儀正しい（と自分では思っている）志真はきちんと愛想の無い挨拶を返した。

ちなみに、チーグーというのは魚の名前であった。

おい、と言いたい。

イルカとか可愛い海生き物に例えられるならば良い。しかしチーグーは普通に魚。丸くて小さくて黄色い。小粒な目も、レースで出来たミニスカートみたいなのも可愛いといえば可愛いけど、魚だ。食用には向かないけど、観賞用として人気があるらしい。

全く嬉しくない。

魚差別をする気はないけど、見て可愛いのと例えられて嬉しいのは別である。乙女心は普通に傷ついた。人をチーグーちゃんなんて呼ぶ男に振りまく愛想など無い。例え客であつてもだ。

（客、なんだよなー）

動機は兎も角、クリスはお金を払ってこの宿屋の一番良い部屋を利用してくれている。その話を聞いたミルラも「わたくしもちゃんと払います」と言って、宿泊費を払ってくれるようになった。

うちはお休みしているところだし、良いのよ、気を使わないで〜とリアラは断ったみたいだけど、最終的には貰う事で話がついたようだ。

宿泊客がいるならお店の方も再開しないとね、という事になって今日から宿屋、食堂共に営業再開である。

その辺の切欠を作ってくれた事は、志真もクリスに感謝していた。「チーグーちゃん、また後で健気に働く君に会いに行くから待っていてくれたまえ」

そんな事を言わなければ、もっと愛想よくできるのだが。

「おはようございまーす！」

硬い生地の生成りのエプロンを身につけて、志真は調理場を覗いた。

「おう、おはよう」

「おはよう、シマ」

既に忙しく働いていたカオロン・ミーチェ夫妻がにこにここと明るく挨拶を返してくれた。ラクトは軽く首を振るのが挨拶みたいなものである。

「手伝い、ある？」

「ここは人出が足りてるから、掃除の方手伝ってやってくれるかい？久しぶりの営業だから、ぴかぴかにしておかないとねえ。フィオーネ達が行っている筈だから、よろしく頼むよ」

「はい」

志真は元気良く返事をして、向いの食堂へ続くドアを開けた。

ミーチェが言ったフィオーネ（達）は、アンナのことだと思っていたが、違ったようだ。真剣な顔でテーブルを拭く女性を見て、志

真は驚いた。

「え、ミルラさん？」

動かしていた手を止めて、ミルラは顔を上げた。力を込めて拭いていたせいか、白い頬が赤く染まっている。今日は化粧をしていない上、長い金髪を三つ綱にして両横に垂らしているせいで、余計に幼く見えた。

実年齢は24歳らしいけど、20を越えているようには見えない。しかし、見れば見るほど伊吹にはもつたいたい美人だと思う。美女と野獣……、いや伊吹は野獣っていう感じではない。美女とオタク……美女ともやしっ子とか？

「おはようございます、シマ」

「おはよう、ございますミルラさん」

挨拶をした後で、志真は疑問をぶつけて見た。

「ミルラさん、何やってるの？」

「何って……見ての通り、掃除ですわ」

うん、そうだね。しまった。言葉の選択を間違えた。どうして掃除してるのって、聞けば良かったのだ。

「掃除と、洗濯と、それからお料理は特に大切なものなのでしよう？」

その言葉に、志真は目を丸くした。

（わ、まさか私が言ったから本気で？）

昨晚、寝る前にミルラと話す機会があった。部屋が同じ階にあるから、偶然顔を合わせたのだ。彼女はちょっと難しい顔で、志真に聞いてきた。

「イブキと貴方は、同じ世界から来たんですわよね？」

「うん、そう」

「……あの、そちらの世界では、結婚した女性はどのような事をしますの？妻に求められる必須条件のようなものはありますか？」  
詳細は違つかもしれないが、こんな感じのことを聞かれた。はっきり言って驚いた。この人は本気で伊吹と結婚するつもりなのだ！と。

婚約証明書まであるくらいなのだから、今更かもしれないけど。それにしても、妻に求められるものとかって……、古いところで浮かぶのは大和撫子とかだろうか。今はもう絶滅したとか言われているけど、男にとっては理想的な感じがする。

でも大和撫子って具体的にどんな感じなんだ？

志真には最も縁遠い言葉だったため、説明する事はできそうになかった。なので。

「掃除と、洗濯？後、料理！これ大事。美味しい食事ね！」

男を落とすには胃袋から！

そう力説して料理部に入った友人がいた事を懐かしく思い出しながら、志真はミルラにそう答えたのだった。

(どうしよう、本気すぎる！)

間違った事は言っていないと思うけど、ここまで真剣に行動に移されると焦る。下手な事は言わないで本当に良かった。調子にのって「お帰りアナタ、ご飯にする？お風呂にする？それとも…」的なネタを教えなくて本当に良かった！

(まあ、言葉が訳せなかったただけけども)

そんなもの本気で実行されていたら、伊吹からどんな報復を受けるか。……ちよつとばかり、うるたえる伊吹を見たいとも思うが。

しかし、まだ言葉がちゃんと話せないことに感謝する日がくるとは。

「どうかしたんですの?」  
「何も無いよ!」

あはははは、と乾いた笑いを漏らす志真に、ミルラは首を傾げた。  
「あ、シマ、おはよう。手伝いに来てくれたのね」

「フィオーネ!おはよう」  
フィオーネは床にバケツを置き、脇に挟んでいたモップを二つ手にした。

「床は掃いたから、モップがけお願いできる?その後は窓を拭いて、できたら棚のグラスも全部磨いておきたいから……とにかく急いでやりましょう」

「うん!頑張る」

今日は学校も休みなので、時間もある。志真は張り切って掃除を開始した。

1時間ばかり掃除して、朝食を取る事になった。普通なら調理場に置いてあるテーブルで順次とっていくのだが、今日はまだ営業再開1日目という事もあって、全員で食堂に集まった。

全員……一応客である筈のミルラとクリスも混ざっている。

良いのか?と思うが、本人達が至極当然の顔をしているので、多分良いのだろう。というか、今更かもしれない。

騒がしいクリスとミルラに挟まれた伊吹の顔は、苦渋に満ちているけれども。

「イブキ、この奇妙に塩辛い薄い魚はなんだい?」

「魚の干物ですよ。何の魚かは知りませんので、他の人に聞いてください」

「い、イブキ……、喉に何か刺さりましたわ!」

「……魚の骨です。死にはしませんので、そこまで泣きそうな顔をするのはやめてください。パンでも飲み込めば取れますよ」

大変そうー、と志真は安全圏(クリスから隣に座ろうと言われて



逃げた)から、伊吹の不幸を眺めていた。

しかし、クリスも変な人だ。婚約者を取った相手と普通に仲良くできるなんて。しかも、そのミルラは伊吹にべったりだ。

(変、なの……)

「い、イブキ……?」

「……また刺さったのか。もう良いです、ちょっと皿寄越してください。骨取りますから」

そう言うと、苛々した様子でミルラの魚の骨取りを始める伊吹。

(もうちょっと優しく言っただければ良いのに)

と、志真は見ていて思うのだが。

「イブキ、あの、ありがとうございます」

「別に貴方の為では……」

無愛想にそう言いかけて、伊吹は苦虫を潰したような顔になった。どうしたんだろう?

すっかり2人に気を取られていた志真は、まるで気がついていなかった。

食事が進まない様子の少女にも、そんな彼女を面白そうに見る彼の視線にも。

## 志真と微妙な乙女心 2

一部騒がしい朝食を終えて、再び念入りにお掃除。

そうして11時にお店を開けた。カーテンを開けて、食堂側の入り口のドアを開き、外に看板を出す。宿屋入り口となる庭側の門も開けて来た。

こうやってちゃんと営業するのは約1月ぶりくらい？もっと大々に宣伝した方が良いんじゃないかと思っただけど、そうすると変なお客さんも呼びつけちゃうかもしれない。なので、こうひっそりとお店を開けることになった。

当然開店を待ちかねていたお客さんがどばっと来店、なんて事は無い。待ちかねてくれているお客さんがいるのかすら、怪しいけども。

お店を開いて20分経過。

まだ誰もやって来ない。

リアラは楽しそうにテーブルに一輪挿しを置いて花を飾っているし、カオロンとミーチェ、ラクトは張り切ってデザートの試作品をこしらえている。お客がこなくてやきもきしているのは、どうやら自分1人のようだと思真は悟った。

(こんなんなら、やっぱり掃除の方手伝えばよかった)

その方が、気持ち的に楽でいられそうだ。

全客室の掃除が完了していないから、フィオーネとミルラがアナを手伝いに行っている。忙しいようだったら呼びに来てと言われているが、これじゃいつまで経ってもその必要は無さそうだ。

うろつると、ドアの前を通って外を覗いてみるが、通り過ぎる人、時折立ち止まって看板を見る人はいるのに誰も入って来てくれない。

まだ噂の影響が残っているのだろうか。

悩んでいる内にも人が通り過ぎていく。じれったい……！いつもの事外に出て客引きをしたいくらいだ。ピラとか配って、お店の宣伝をして。

（でも私がやると完全に逆効果になりそうだし）

異世界人が敬遠されているのなら、志真は姿を見せない方が良いのかもしれない。そう思い至って、多少落ち込んだ。

（もしかして、私がいるからお客さんが来ないとか？）

どうしよう。やっぱり今からでもフィオーネと代わって来た方が良いかな。暇すぎてネガティブ思考になってきた志真の肩を、背後から誰かが叩いた。

「頭をそんなに下に向けて、どうしたんだいチーグーちゃん」

クリスの暑苦しい爽やかな笑顔は、落ち込んでいる時に見るとHPが削られるような気がする。最早チーグーとか呼ぶな！と突っ込む気すら失せてしまった。

「おや、チーグーちゃん、萎れた蓄みたいな顔をして。ああ、分かった！お腹が空いているんだね」

分かった！の時点で絶対分かかっていない事は分かっていたとも。

「よし、チーグーちゃん。今から一緒に食事をしよう！だから元気を出すんだよ！」

「ええ！？」

「気分が晴れるように窓際の、日当たりが良い場所が良いと君もそう思うだろう、うん。そうそう、この辺りが良い、実に良い」

「いやいや仕事中だし！」

という志真の必死の言葉も抵抗も一切無視された。椅子を引いてくれて座らせてくれるという風に言えば紳士的な行動を想像するかもしれないが、実際は無理やり椅子に押さえつけられて座らされるといって、非常に乱暴な扱いであった。

今現在も、立ち上がろうとするのを、肩を押さえられて阻止され

ている。

「客が1人も入っていない店には、何となく入りづらいものだよチーグーちゃん」

にっこりと笑うクリスを、志真は思わずぽかんと見上げた。

えーっと、つまり。サクラになるって事か、な？

確かにお客が入っていると、次の人も入ろうかなという気になるかもしれない。なるほど。

「でも私、仕事だし！」

1人でやってよ、そういうのは。そう主張すると、クリスは大げさに首を振った。

「1人で食事をするなんて、そんな寂しい男だと思われるのは心外だよ。私としても、食事は可愛らしい女性達と優雅にとるべきものだという信念は、できれば曲げたくない」

そんなどうでも良い事を信念にしないで欲しい。

「勿論食事代は私が出すよ」

売上には貢献するよ、そう言っているように聞こえる。折角お店を開いているのだ。カオロン達にも料理を作ってもらいたい。

でも、良いのかなあ。

志真が助けを求めて近くのリアラを見上げると、ふんわりとした笑顔を返された。

「今は暇だし良いわよ。後で忙しくなりそうだったら、来てくれれば良いわ。シマとクリスさんが美味しそうに食べていけば、お客さんも来てくれるかもしれないし」

「流石、リアラさんはお美しい上にお優しい。できれば貴方ともいつかこうして食事をしたいものです。勿論、2人きりで」

きらりと光る白い歯に、意味深な笑顔。お前という奴は。

「お水を持ってくるわね」

流石リアラさん、スルーです。

クリスマスの奢りなので、遠慮なく注文した。ほぼ無理やりに付き合  
わされる事に対しての抗議のつもりだったけど、相手は庶民とは程  
遠い金銭感覚の持ち主だ。「それくらいで良いのかい？チーグーち  
ゃんは慎ましいね」とか言われた。

注文して食べられなかったら作ってくれた人に対して失礼なので、  
その挑発には乗らないぞ。

早速運ばれてきた野菜サラダ、白緑色のスープをもりもりと食べ  
る。しゃきしゃきとした野菜の歯ごたえに、甘酸っぱいあっさりし  
たドレッシングが良く合う。白緑色のスープは、まるやかでこくの  
ある味わい。

「うん、このシェフは実に良い腕をしているな。その上、珍しい  
料理ばかりで素晴らしい」

良い腕は兎も角、珍しくはない。

金持ちであるが故、庶民の味が珍しい的なアピールは無視してお  
くに限る。

「クリスマスって、なんで家に帰らない？暇？」

「まさか、こつ見えて私はハーバー家の跡取り候補だよ。暇の筈無  
いじゃないか」

暇にしか見えないけど。

「必要な仕事はこつちに持って来ているからね。君の小さな頭を悩  
ませる心配などどこにも無いよ、チーグーちゃん。安心したまえ、  
私は暫くはここにいます」

いやいやいやいや。

そんな心配していない。むしろ早く出て行ってくれないかな、と  
か思っていたりするくらいだ。ただそうすると、宿屋の収入がまた  
減っちゃうからな。

難しいところだ。

「クリスマス、ミルラのこと好き？」

「勿論、あんなに愛らしい妖精のような女性を好きにならない男等、いる筈がないよ。ああ、だけどチーグーちゃん、心配しなくて良いとも。私は世の女性の全てを平等に愛しく思っているからね、勿論君の事もだよ」

「こんなんだから、ふられるんだらうな。」

「ここまで徹底した女好きって初めて見た。でも、だ。それって結局誰も好きじゃないのと同じことじゃないかと思うのだ。クリスの言う好きは、花が綺麗、子犬が可愛いというのと同レベルである。」

「世のすべての人がそうであるなら、誰も傷つくことなく幸せだろうに。どうして人は特別な相手を持つのだらうね、チーグーちゃん」  
「？」

「恋とは意志ではない、だとしたら、必ず誰かは泣く事になる」

「お願いだから、出来ればもうちょっと解り易く話して欲しい。何が言いたいのかさっぱり分からないので。」

「困惑する志真を残して、クリスティアンは珍しく悩ましげな表情で、遠くを見ていた。」

「何となく気になって、その視線を追う。」

「いつの間にか掃除を終えて戻って来たのか、そこにはフィオーネの姿があった。カウンターの奥にある棚のグラスを、せっせと磨いているところのようだ。」

「フィオーネ？」

「凜と佇むフィッシュアの花のようだ。恋する女性というのは物憂げな表情まで美しい」

「花！」

「(そうだよ、フツは花でしょ！何で私は魚なわけ) むっとしかけて、その後が続いた言葉に口が開いた。」

「え？」

今、恋って言った？

目を丸くして、クリスを凝視する。

「恋！？フィオーネが？」

「ああ、そのようだね」

「あ……もしかして、クリスにしてるって、言う？」

彼女は私に恋をしているのさ！と、そういうナルシスト発言を普通にしそうだから困る。しかし、彼は残念そうに首を横に振った。

「非常に不可解な事かもしれないが、そうじゃない。彼女の好きな人はどうやら別の相手さ」

不可解どころか、物凄い信憑性が出てきてしまった。

### 志真と微妙な乙女心 3

クリスと志真のサクラ作戦が上手くいったのかは分からないが、その後無事にお客さん第1号がやって来た。閉める前にも来てくれていた常連さんだ。続いてぽつぽつと、客が入る。

「心配してたんだよ」「大丈夫かい」そんな、暖かい言葉を掛けてくれるお客さん達に、リアラは嬉しそうだった。

勿論、一時期よりは全然客が入っていないし、赤字状態は免れな  
いだろうけど、取り敢えずはほっとした。本当、誰も来なかったら  
どうしようとか思っていたから。

(それより、問題は……)

食事の終わった席の皿を片付けながら、志真はこっそりとフィオーネの様子を観察する。今は、新しく入ってきた客の注文を取っているところだ。

ときばきと注文を書き付けていきながら、談笑しているのを見て、思わず客の顔を確認してしまう。

ざっと見たところ、40歳後半の中年の夫婦だ。ずんぐりと太っていて、少々頭が薄い。がはははと豪快に笑う、下町の気の良いおっちゃん風。

(違うなー)

フィオーネの様子も至って普通だし。

流石にあの人がフィオーネの恋の相手というのは、無理があると思う。見ていれば分かるって言うてもなー、と志真はもう一度じつとフィオーネを見た後、皿を持って歩き出した。

フィオーネには好きな人がいる。

そう、クリスは断言していた。その上相手まで分かっているらしい。単にクリスの勘違いかもしれないけど。そこまで話しておいて、



肝心の相手は教えてくれなかった。

流石にその辺りは私が話す事じゃないとか、突然常識人っぽい事を言いだすからびっくりだ。当のクリスは「少し用があるから出かけるけど、すぐ戻るから寂しいだろうけど我慢して欲しい」とか相変わらず寝ぼけたことを言っただけで出て行った。

ちなみに志真個人にはなく、女性全員を対象にした言葉である。

クリスの事はどうでも良いとして、問題はフィオーネだ。

好きな人がいるというのが本当なら、相手は誰なんだろう。

……気になる。

見てれば分かる筈だと、そう言うという事は、身近にいる人だと思うのだ。知り合って3日くらいしか経っていない間に、クリスが会った人となるとそう多くない。出かけていた事もあるから、その時となるとお手上げだけでも。

それ以外だったら。

(カオロンさんは……やっぱり無いよね。凄く良い人だけど、良いところお父さんって感じ出し。後は、ラクトに……いっさん?)

思いつく限りの顔を思い浮かべる。後は手紙の配達に来た少年くらいか。ウィガーは実の兄だし、除外するとして。

(範囲狭っ)

今日まで宿も食堂も営業休止していたから、そんなものだ。

志真の思いつく限りではその3人。うーむ、益々悩ましい。ラクトは良い人なのかもしれないけど、口数が少なすぎているのかいなのかわからない事もしばしば。何を考えているのかも未だによく分かっていなかったりする。

そういうミステリアスなところが魅力?と言えるのかもしれない。

(でも何か違う気がする)

次に伊吹を思い浮かべて、志真は大きく首を横に振った。

無いと思う、絶対無いな。

後は……、手紙の配達に来ていた少年か。あんまり覚えていないけど、14、5歳ぐらいの快活そうな少年だった。いつも元気良く「こんにちはー！」って感じでやってくる。悪くないんだけど、年下か。いまいちぴんとこなかった。

やっぱりこれは、志真の見落として誰かがいるのかもしれない。

悩んでいる内にドアが開いて鐘が軽い音を立てる。

「いらっしやいませー！」

志真はテーブルを拭いていた手を止めて顔を上げると、入ってきたお客さん達を笑顔で出迎えた。

お昼時にぱらぱらと来てくれた客足も、2時になる頃にはぱつたりと途絶えた。再び暇になったので、床にモップ掛けをする。そんなに汚れているわけでもないけど、他にする事もない。

暫くたつても客が入らないのを見たりアラが、志真達に声を掛けた。

「今の内に休憩にしましょうね。私がここにいるから、3人は調理場でお茶を飲んできて。お客様が見えたら呼ぶからお願いなね」

3人というのは、志真とフィオーネ、それからミルラのことである。

調理場ではカオロン達もお茶を飲んで一息いれているところだった。あんまり広いとはいえない場所だけど、詰めればなんとか全員座ることができる。

「ご苦労様。時間があつたからオードのケーキを焼いたんだよ。ほら、どうぞ」

にこにここと機嫌の良いミーチェが、大皿に乗ったどっしりしたフルーツケーキを切り分けてくれた。お酒の入った甘いケーキは、疲れた時に食べると本当に美味しい。細かく砕いた木の実がまた良い

アクセントになっている。

「おいしい！ミーチエさん」

「おいしいですわ」

「そりゃあ良かった」

ミーチエは嬉しそうな顔で、志真達がケーキを食べる姿を眺めていた。お母さん、って感じがするなあ。そう思ったら、胸の奥がちくりと痛んだ。

（ああ、ダメだ。もう結構経ってるのに）

寂しい気持ちは急にやってくるから油断できない。忘れるようにフオークで切り取った大きなケーキの塊を、口に放り込んだ。ちょっとやりすぎた。頬いっぱい詰り込んでケーキをもごもごと咀嚼する。

「シマつてば、そんなに慌てなくてもまだいっぱいあるわよ」  
くすくすとフィオーネが笑った。

（別に、普通だけどなあ）

恋に悩んでいるとか、そういう様子は見られない。やっぱりクリスの勘違いなんじゃないだろうか。あの人、思い込み相当激しそうだし。そう、結論を出しかけていたところで、裏口の方から「こんにちはー！」という元気な声が聞こえてきた。

噂の（志真の中で）郵便配達の少年だ。

一番ドアに近い位置にいたフィオーネがさっと立ち上がる。その隣にいた志真も慌てて立ち上がった。

「シマ？良いのよ、私が行くから」

「いつほひひふ」

まだ口の中がいっぱいこんな言葉になってしまったけど、一応「一緒に行く」と言っただけ。何とか通じたみたいで、フィオー

ネは不思議そうな顔をしながらも歩いていった。

廊下に出ると、裏口のドアから郵便配達少年が顔を覗かせているのが見えた。

日に焼けた肌に、短い茶髪。大きな目はちよつとばかりつり目で、勝気そうな感じだ。

「こんにちは」

ちらちらと窺ってみるものの、フィオーネの態度は至って普通。

「どうも。ハルベルトさん宛てがこの3通で、クリスティアン・ベルナ・ハーバーさん宛てに12通」

うわ。

斜めに掛けた大きな鞆から、ばさつと取り出される大小様々な封筒の束に、志真は驚いた。普通の手紙とかでは無さそうだ。

「後、カガミ・イブキさんっていう人もここで間違いない？」

「ええ……、間違いないわよ」

驚いたように目を丸くした後、フィオーネは頷いた。普通のサイズの封筒を受け取ると、郵便配達少年は鞆の金具を留める。

「じゃあ、これで。またよろしくお願いします」

「ありがとう、いつもご苦労様」

定番通りの挨拶を残して、少年は去っていった。フィオーネはそんな少年の後姿ではなく、手元の手紙に視線を落としていた。

「持つ？」

「大丈夫よ。クリスティアンさんの分は部屋に届けておくとして、イブキさんのはどうしようかな」

「部屋じゃダメ？」

「あそこは客室じゃなくてイブキさんの部屋なんだし、やっぱり本人がいない時に勝手に入るのはちよつと」

今まで何度か勝手に入って怒られたことのある志真としては、耳

が痛い話である。

「じゃ、ミルラに頼む？」

何の気なしに言った言葉だった。

彼女なら婚約者（未だにちょっと信じられないが）だし、良いんじゃないかと思ったのだ。ただそれだけ。

なのに、フィオーネの顔が一瞬確かに曇るのを、見てしまった。

「そうね」

そんな顔を見た後では、笑う顔すらぎこちなく見えてきてしまうから不思議だ。

「ミルラさんなら、婚約者だし大丈夫かな」

私の馬鹿！

まさかの伊吹なのか。志真は動揺を隠せなかった。

（何でいっさん？嘘でしょ……やっぱり信じられないんだけど）  
多分あれだ。

フィオーネが誰かに恋をしていると思うから、そう見えてしまうだけだ。多分。

## 志真と微妙な乙女心 4

気のせい気のせい見間違い。

そう念仏のように心で唱えてみるものの、一旦掛かったフィルタ―は中々簡単には外すことができないようだ。

もう、そうとしか見えてこないから不思議！

各務伊吹、という同郷で同じ立場の人間の魅力が、志真にはいまひとつ理解できない。顔はフツ―である。日本人らしい薄い顔立ち。まあ、すつきりしているとえば聞こえはいいかもしれない。

もしかしたら、こちらではそれが受けるのだろうか。

一瞬そう考えたけれども、その割りに自分がもてる気配は無い事に気がついて、何となくむっとした気持ちになった。

違うね多分。

背だつてあまり高くない。小柄なミルラ相手なら兎も角、背の高いフィオーネとはあんまり変わらないくらいだ。それに細い。頼りがい皆無の薄さを誇っている。

頭は良いかもしれないけど、嫌味つたらしいし、捻くれているし、優しくない。はっきり言つて意地悪だ。

なのに、一体なんで!?

伊吹とミルラとフィオーネで三角関係みたくなっているのだ。

これはまずい。実にまずい。

何と言つても伊吹とミルラはもう婚約しちゃっているのだ。フィオーネは大きく負けている。というか、そこでフィオーネが上手く割り込めたとしても、今度はミルラが泣く事になるかもしれないわけ。

誰かが泣く事になる、というクリスの不吉な予言が当たつてしま

うことに。

(泣くならいっさんが泣けば良いのに！)

フィオーネもミルラも美人だし、良い子だし、もつと他に色々良い人がいる筈なのに、何故そこで伊吹なのか。分からない。

どうしよう、と関係ない志真が悩む必要は全くないのだが。

(フィオーネが泣くのも、ミルラが傷つくのも嫌なんだけど)

その為に自分ができる事って何だろうか。取り敢えずは、フィオーネが悩んでいるならば、聞いてあげることだろうか。まだ普通の女子高生だった時には、よく友人から彼氏についての悩みや片思いの悩み等を聞いていたものだ。

もっぱら聞く専門で、的確なアドバイスすらできなかったが。

聞いてくれるだけで、ちょっと楽になった。

と、あの言葉が本当なら、自分にもできる事がある筈だ！

「フィオーネ！」

志真は早速、クリスの部屋に手紙を持っていこうとするフィオーネを追いかけた。

「どうしたのシマ？」

「あの、いつでも、話聞くんよ」「話？」

「悩み、とか……、こ、恋とか？」

言葉のボキャブラリーが少なすぎて、オブラートに包むことができない。フィオーネは目を丸くした後、噴出した。

「どうしたの、急に」

あれー。

「え、だって……あの、フィオーネ、好きな人いる？」

「好きな人って、恋をしているかっていう事よね？残念ながらいないわよ。今はそれどころじゃないし」

「あれあれあれー？」

「そう、なの？」

「今のところはね。でも本当にびっくりした。いきなりどうしたの？」

不思議そうなフィオーネの様子は、どんなにじっくり観察してみても、普通だ。強がっている様子も無い。

と、いうことは。勘違い？

何だよー。

志真は誤魔化すように笑うしかなかった。

\*\*\*

こここのところ、調子が悪い。

皿を割ってしまったり、ぼうつとしていて同じところを二度も雑巾掛けしていたり、折角洗った洗濯物を落として汚してしまったり。

とにかくありえない失敗が多くて、自己嫌悪の毎日だ。「疲れてるんじゃないの？ちよつと休んだら？」とおっとりした母にまで言われる始末。ただでさえ、家が大変な時なのに、弱音なんて吐いてられない。

しっかりしなきゃ。

そう思っただけで、ちよつと気を抜くとぼうつとしてしまっ（駄目だなあ、こんなんじゃ）フィオーネは溜息を吐きつつ、



鈍く痛むこめかみを指で押した。

もしかしたら、志真が変な事を言い出したのもこれせいだろうか。灯の消えた食堂は、しんと静まり返っている。

店を再開した初日の今日は、客の入りは少なかった。徐々に戻って来るんだろうか。その辺りは全く予想がつかない。不安はあるけど、出来るだけの事をするしかなかった。

(母さんのはんびりしているし、兄さんは……)

頼りにはなるけど、商売には向いていない。どうして騎士を辞めてしまったのか、今でもその理由は教えてもらえていなかった。母とフィオーネ。2人の事を心配してというのもあると思うが、それ以上の何かがあるような気がしていた。

暫くじつとこめかみを押さえて、椅子に座っている内に眠くなってきた。小さく欠伸をして、瞬きを繰り返す。

このままここにいたら眠ってしまいそうだ。

お風呂に入って、もう寝よう。

既に日付をまたいでいた。あんまり夜更かしすると明日に響く。

フィオーネはもう一度欠伸をしてから立ち上がった。椅子ががたがたと音を立てる。

「誰かいるのか」

途端にドアの方から声が掛かって、フィオーネは思わず飛び上がった。誰もいないと思っていただけから、余計に驚いた。跳ね上がった心音がどくどく耳の後ろで響いている。

今の声は。

「い、イブキさん？」

「……ああ、すみません。フィオーネさん、ですか？ 暗い中音がしたものだから」

気まずそうに謝りながら、伊吹が食堂へと入ってくる。灯はきえ

ているものの、窓から入る月の光があった。それに照らされて、伊吹の輪郭が見えてくる。

「驚かせてすみません」

「い、いえ。こちらこそ。ちよつと掃除をしていて」

「……こんなに暗い中ですか？」

「終わったので灯を消して行こうと思ったんですけど、ちよつと疲れていたので一休みを。イブキさんは？」

気の緩んでいたところを見つけられてしまった気恥ずかしさを誤魔化したくて、質問を返す。暫しの沈黙の後、伊吹は答えた。

「お茶を貰いに」

何だか複雑そうな響きが気になった。

「どうかしたんですか？」

「いえ別に。……ちよつと前にも、こんな事があつたなと思つただけです」

何のことだろうか。分からない。フィオーネが聞くよりも先に、伊吹が言う。

「大したことじゃないんです。すみません」

その言葉に、フィオーネは眉を顰めた。

伊吹はいつもそうだ。

言葉や態度で線を引こうとする。一定以上には人を受け入れてくれない。最初は単に遠慮しているのかと思つた。異世界人だから、警戒しているのかも、とも。

でも伊吹は誰に対してもそうだった。同じ立場の志真に対してさえも。

（私が何か言えることではないと思つけど）

そんな生き方は寂しいと思つてしまふ。

ミルラが相手なら、その線はなくせるのだろうか。そう思つた途

端、何故か背中がひやりとした。

(……なんだろう、疲れているからかな)

何となく落ちた沈黙が気まずい。相手もそう感じたのか、伊吹はぎこちなく口を開いた。

「邪魔をしてみませんでした。じゃあ、おやすみなさい」

踵を返して、去ろうとする伊吹を見たら、勝手に口が動いていた。

「イブキさん」

「はい？」

振り返った伊吹に、フィオーネは固まった。

特に用があつたわけでもないのに。自分の行動が分からない。

「どうしたんですか？」

な、何かを言わなければ。しかし焦れば焦るほど、言葉が出てこない。こんな経験は初めてだった。

「フィオーネさん？もしかして具合でも」

フィオーネは慌てて首を横に振った。

「よ、呼んでみただけです」

拳句の果てによろやく出てきた言葉がそれである。気まずい沈黙に、死にたくなつた。

全く、自分らしくない。

「……本当に大丈夫ですか？」

「はい……何か、ちよつと疲れているみたいで」

「そうみたいです」

そうやって冷静に返す辺りが伊吹らしいと思っていると、テーブルの上にカップが置かれた。

「何ですか？」

「……ガバ茶です。疲労回復に効くとラクトが言っていました。どうやら俺よりも、フィオーネさんの方が必要なようなので」

さも迷惑そうな顔で、素っ気無い言葉をかける。

しかし、伊吹は人に優しくしようとする時に、相手から目を反らす事、何故か怒ったような顔になる事を、フィオーネは既に気がついていた。

「いないなら……」

「いえ、貰います！ありがとうございます、イブキさん」

「……それじゃ、もう行きます」

気まずそうに背を向けて、足早に去っていく。その背中に、おやすみなさいと声をかける。多分、小さすぎて届かなかったかもしれない。

フィオーネは暫くして、残されたカップに手を伸ばした。指の先がじんわりと熱を持ち、痺れていた。

暗くてよかった、とフィオーネは思う。おかげで赤くなった自分の顔を見られずに済んだ。やけに苦いお茶を一口飲んで、フィオーネは熱を持った頬を押さえた。

「……どうしよう」

そうして、何度目かの溜息を吐いた。

死ぬ事よりも、生きる事の方が難しい。

と、無事生還を果たした菊乃は思う。何だか分からないけど、自分分は死ぬところだったらしい。記憶は一部曖昧になっているが、はっきりと残っている。

あの時は混乱していて分からなかったことも、今なら考える事ができた。何せ体が本調子でないため外に出してもらえないから、時間だけはたっぷりあるのだ。

あの時、ハルラックは言っていた。  
力を使うことが菊乃の負担になっていると、無理をすれば命を落とす。

なるほど、自分が死に掛けた理由はそれだろうと、菊乃は考える。こうして生きているのは、途中でハルラックが止めてくれたから。それは、あの人を、ルーミケラウスを助けられなかった事を意味していた。

じくじくと、胸の奥が痛む。

(助けられなかった)

本当はそんな言葉では片付けられない。

(私が)

殺してしまったのだ。

この異世界に辿りついてからというものの、悪い夢のような事ばかり起こってきたけど、今回の事が一番酷い。

「気に病む事はないよ、キクノ。君が殺したのは人ではなく敵対者だ。もしも君がそうしなかつたら、もつと多くの被害が出ていただろう。罪の意識を感じる必要は無い。私達は君に感謝しているのだから」

ユリウスからの感謝の言葉を、菊乃はぼんやりと聞いていた。

人を殺して感謝されるなんておかしな話だ。敵対者に寄生されたとはいえ、その土台は人だった筈。ルーミケラウスという個人が確かにいたのに、無かつたことにされている。

一度敵対者に寄生された者を助ける術は無い。敵対者になった者はいずれ、多くのものを殺し破壊する。だからこそ、排除するしかない。正当防衛だ。

ううん、違う、本当は。

ハインスが助けようとしていたのに、菊乃はその邪魔をしてしまったのだ。

「それで、何か欲しいものは？」

「……え？」

ぼん、と肩を叩かれて菊乃は顔を上げた。人懐っこい顔が思いの外近くにあつて驚いてしまふ。思わず首を竦めた彼女の肩から、ユリウスは乗せていた手をゆっくりと戻した。

「ぼうつとしていたようだが、まだ本調子ではないようだね」

以前も使用していた保護施設の部屋だ。それなりの広さの部屋に、ベッドとテーブル、椅子が置いてある。

調子が戻らずベッドにいる時も、ユリウスは度々様子を見に来ていた。本当に2、3分、適当な話をして帰っていくから不思議だった。今は起き上がれるので、きちんと椅子に座って話をしているところだ。

いつもならばいるハルラックも席を外している、ということはある。それなりに大切な話があるのだろう。多分。

最初は構えていたのだが、ユーイの失敗談や彼の弟の話など、世間話が続いたのでつい気を反らしてしまっていた。

「すみません」

「構わないよ。君に何かあったら大変だ。改めてもう一度言っけど、今回、先回との君の働きに対して、何か褒賞を与えようという話が出ている。多少の融通はきくから、何か望みがあるなら言つと良い。いつの間にそんな話になっていたのか。」

ユリウスは悪戯を企む子どものようににやりとした。

「遠慮は無用だよ。この際だから無茶な事を言っであれらを困らせてくれれば、私の胸もすくというものだ。宝石でも、装飾品でもドレスでも、望むだけ与える。屋敷が欲しいなら土地と使用人もつけさせよう。そうだね、見目の良い男も集めておこうか、どんな男が好きかは知らないが……ああ、もしかして既に意中の相手がいりするののか？」

(……どうしてそこでそういう話になるんだろう)

この、目の前の人はこの国の王子だと、確かにユーイは言っていた筈。

啞然とする菊乃に対して、ユリウスはにこりと笑いかけた。

「いないなら、私と結婚して王妃の座でも狙ってみるかい？」

……。

これは多分冗談なのだろう。真面目に返さず、笑った方が良いのだろうか。……慣れ無い事は止めておこう。

菊乃は難しい顔で、ユリウスの笑顔を見上げた。

「あの、何もいりません、お気遣いなく」

「そう言うだろうと、ユーイも言っていたよ。キクノは何も欲しがらないだろうし、何よりルーミケラウスという女性の事で罪悪感を抱いているだろうから、何を贈っても素直には受け取らないだろうと。……そこで1つ提案なのだが」

ゆっくりと、ユリウスは言葉を区切り、菊乃の顔を眺めた。まるで、そこに浮かぶ表情を見逃すまいとしているように。

「ハインス・ユーゴを何とかして欲しい」

出された名前に心臓がはねる。

最後に見た、射抜くような冷えた眼差しを思い出す。ハインス・ユーゴは無事だと聞いていた。正確にはそれだけしか教えてもらっていないかった。

「……何か、あったのですか」

「未だ彼に掛かった嫌疑は晴れていなくてね。姉との共謀も疑われている。肝心の彼が何も喋ろうとしないものだから、余計にややこしい事になるのだけだね。何しろ、二度目だし」

「二度目、ですか？」

「聞いていないかな。彼は一度敵対者が出た村で生き延びている。あの時も、色々と揉めたらしいが、何せその時は子供だったからね。見逃されていたが、今回はそうもいかない」

知らず両手を握り締める菊乃に、ユリウスは目を細めた。

「命まで奪われる事はないだろうが、一生牢屋暮らしにはなるかもしれない」

硬直する菊乃に対して、彼は首を傾けた。

「そこで聞くが、キクノ。君は彼を助けたいと思うか？」  
頷くと、満足げに微笑まれる。

「では、ちょっと出向いて彼を説得してきてくれないか」



え。

暗く肌寒い、錆びたような匂いが鼻を刺激した。

頑丈そうな白い壁に囲まれた狭い廊下。ずらりと並ぶドアには小さな窓が二つ上と下についている。上の窓には鉄格子が嵌っていて、下の窓はそのまま何の覆いもない。腕くらいなら通りそうだが、うっかり手を出すと電流が流れる仕組みになっている。

入る前に説明をしてくれた女性に「気をつけてくださいね」と、笑顔で言われたが笑い返せなかった。

ちなみにそこは食事を出し入れする場所だ。

ここは真正正銘の牢獄である。

重犯罪を犯した者達が入られる場所で、菊乃が前にいた場所とは比べ物にならない、嚴重な警備下に置かれてあった。

ハynes・ユーゴがここに収容されて15日が経過している。

その間、彼は一切食事をしていない。そうユリウスは言っていた。このままではもたないだろうから、何とかして欲しいと言われたが、自分が行ったところで、どうにかできる事だとは思えなかった。

精々、怒りをぶつけられるくらいだろうか。

焦燥感が胸に湧く。

きっと、今のハynesは生きる気力を失ってしまったているのだ。ルーミケラウスが死んでしまったから。そうしたのは自分だ。そう思うと、踏み出した先から沈んでいくような気持ちになる。

「ここです」

先を案内していた警備の人が、ユリウスに向って一礼する。

「鍵を」

は、と短く返事があって、鍵が外された。ちなみに警備上の秘密

ということ、その間菊乃は後ろを向かされていた。

「キクノ」

呼ばれて振り返るところで、腕を引っ張られた。え、と思っ間もなく、今度は背中を押される。

「行っておいで」

その言葉を聞いた時には、既に菊乃は牢の中にいた。がちゃん、と重くドアが閉まる音を背中で聞く。

何がどうなっているのか。

呆然とする菊乃の視界に、横たわる人影が映りこんだ。

## 菊乃の褒賞 2

青白い光に銀の髪がくすんで見えた。

顔を向こうに向けているから分らないが、褐色の肌と髪色はハイネス・ユーゴと同じものだ。こうしてみても、何だか痩せた……薄くなったような気がする。

早まっていた心臓が次第にゆっくりになっていく。

落ち着こう、と菊乃は大きく深呼吸した。

さて、一体どうしてこんな事になっているのか。「まずはハイネスに食事を探らせて欲しい」とか、そんな事を言っていたのに。正直気乗りはしなかった。菊乃に何が言えるだろう。何を言っただって、彼を不快な気持ちにさせるだけだ。

それでも来たのは逃げられないと思ったから。

だが、ユリウス達は何故菊乃にこんな事を頼むのだろう。彼らだつて事情は知っている。ハイネスが菊乃の説得に応じるはずが無い事くらい、分かりそうなものなのに。

憎むべき敵を使って、恨みを晴らさせてやろうとか、物騒な事しか思い浮かばない。罵倒も、暴力も覚悟して来たつもりだが、やっぱり怖かった。

気分は猛獣の檻に投げ込まれた餌用の動物……、はっとした。

(もしかして、そういう事?)

一瞬で血の気が引いた。

ハルラックは彼を『青の血族』と呼んでいた。他者の命を吸い上げて生きる、とか。あの時は菊乃の呼んだ水で何とかなってしまうのだつた。どういう理屈かは分からないが。また、水を呼べば良いのだろうか。それともそのまま餌代わり、なのだろうか。

(……前にもこんな事があつたな)

あの時はハルラックが一緒だった。ハイネスは酷い怪我をしていて、もしかしたら死んでしまうのではないかと気が気ではなかった。今は、

こちらに背を向けて横たわるハイネスを、菊乃はじつと見つめた。先程からぴくりとも動かない。どんなにじっくり見たところで、生きているという証拠は見つからなかった。

(まさか、もう)

胸を潰すような不安に押されて、ようやく声が出た。

「ハイネスさん？」

その一瞬、菊乃は彼が助かるのなら、自分の命がなくなっても良いと確かに思った。

呼びかけに対するハイネスの反応は速かった。

電流でも流されたかのように跳ね起きながら、こちらへ顔を向けた。視線の先に驚きに固まる菊乃を見つけたハイネスは、一瞬目を見開いた後、忌々しげに目を細くする。

「何故お前がここに」

「う、ごめんなさい……」

不機嫌極まりない掠れた声には、謝らずにはいられない不穏な響きが滲みでていた。震える手を何とか押さえようと努力した。ぎゅつと唇を噛み締めて、覚悟を決める。

何を言われても、何をされても文句は言えない立場だ。

「……俺に近づくな」

低い声で言うと、ハイネスは慎重な動作で背中を壁につけた。肩膝を立てた姿勢で座ったまま、苛立ったように乱れた銀の髪をかきあげる。胸の辺りを押さえるようにシャツを掴む手が震えていた。良く見れば、額に脂汗のようなものが浮かんでいるのが見てとれる。酷く具合が悪いようだ。

大丈夫ですか、そんな言葉が浮かんだが、今この状況で口にする

には間抜けな言葉に思えた。どう見たって大丈夫ではない。

「何故、ここにいる」

二度目の問いに、菊乃は少し躊躇ったが正直に答える。

「ハイネスさんが、もうずっと食事をしていないと聞きました」  
「……………」

「それで、何とかして欲しい、と」

自分に何とかできるわけが無いと思っていた。どんなに考えてみても、ハイネスを説得できる言葉なんて思いつかない。そもそも憎むべき仇である自分に頼むのが間違っているのだ。人選が悪すぎる。暫くの沈黙の後、ハイネスは言った。

「出て行け」

簡潔な言葉に、菊乃は首を横に振る。

しかし、見つけてしまった。

「出て行きません」

ハイネスを説得できなくても、彼の命を繋ぐ方法を。きっぱりと言った菊乃に、ハイネスの視線が更に厳しいものになる。それを、じっと見つめ返した。

「ハイネスさんが、食事を探るまでここにいます」

もしも、それでもハイネスが食事を探らなかったとしても。その時は菊乃の命を与えられる、筈だ。多分、とその辺りは自信がない。ただ、酷い怪我を負ってきた時に襲い掛かってきたハイネス・ユーゴの姿を思い出すと、そういう事だろうなと思えるのだ。

危機的状況において発揮される、生存本能。

どうやって他者の命を奪うのかは分からない。水で贖えたくらいだから、接触だけでいけるのかもしれないし、普通にぱりぱりと食べられるのかもしれない。

その辺りの事はあまり考えたくない。

できればあまり痛くない方法でお願いしたいものだ。

「そう言えば、俺が従つとでも？」

冷やかな言葉が不思議だった。どういう意味だろう。

「俺はお前の命など惜しまない」

「知ってます」

間髪いれずに頷くと、何故か眉根を寄せられた。

怒っているような、苛立っているような顔だ。

具合が悪いせいだろうか、いつもよりも表情豊かに見える。怒りと、苛立ちと、葛藤のようなものが代わる代わる顔に浮かんだ。

「知ってる」

もう一度、今度は自分に言い聞かせるように。

罪の償いの仕方など分からない。誰もその機会を与えてすらくれなかった。ルーミケラウスのことだけではない。シャーリン教会に出たという敵対者を消したのも、菊乃だとユリウスは言っていた。はつきりとした記憶も実感も無い、ただ直視できない結果だけが目の前にある。

そうしなければ、もつと沢山の人が死んでいた。

けれどその言葉は、犠牲にされた命に関わる人の前では、とても口でできないものだ。絶対に。

(どうして、私じゃなかったんだろう)

恐れていた筈の未来を思う。いつその事、誰もが疑っていたように、自分が敵対者に寄生されていたなら。ハイネスは何も思うことなく菊乃を殺していただろう。彼らはすぐに彼女の死を忘れるだろうし、菊乃は無常な現実に憤りながら、ハイネスの優しさを知ることもなく、ジエレミーやユーイにただ怯えたまま、この世界に親しみや愛着を持たずに死んでいけたのに。

今となっては、そちらの方がずっと楽だったと思うのだ。

ハイネスに殺されても良い。

そう思つのも、悔恨の気持ちからというよりは、その苦しさから逃れたいからというのが強かった。自分でも最低だと思つ。

でももう、ちょっと辛い。

「嘘だ」

長い沈黙の後で、ぼそりと掠れた声があった。顔を上げると、紫色の深い眼差しとぶつかった。相変わらず、人を射抜くような眼差しだ。

嘘つて、何が。

言葉の意味を図りかねる菊乃に、ハイネスは目を細めた。

「俺に生きるというなら、お前も死ぬな」

その言葉はどんな罵倒や暴言よりも、確かな威力を持って菊乃の心臓を貫いた。罪悪感や苦しさから逃げようとしていた自分を、あっさりと暴かれてしまったような気がした。

1人だけ安易に死に逃げられると思うな、生きて苦しめ。

そんな風に翻訳してしまうくらいに、今の菊乃の精神状態はまづかった。

青褪める菊乃を一瞥して、ハイネスは怪訝に眉根を寄せた。今の言葉で、死にそんな顔をされる意味が分からない。

飢餓状態で頭が働かないせいだろうか。

分からないが、拒絶されたような気分になった。胸の奥に怒りとも、悲しみとも判別できない感情が浮かぶ。他人にそんな想いを抱

いたのは初めてだ。

何故彼女がここにいる。

疑問の答えをハイネスは既に知っていた。

自分が彼女だけは殺せないからだ。

長く考えるまでもなく、どうするべきかの答えは出ていた。



### 菊乃の褒賞 3

「さて、君。ハイネス・ユーゴをどうしたい？」

適当に挨拶を交わした後、につこりと笑ったユリウスに、菊乃は首を傾けた。

言っている意味が分からない。

彼の後ろでは、彼の銅色の髪を苛立たしげに睨み付けているユー・ユーイの姿があったが、どうやら助け舟を出してくれる気はないようだ。

ハイネスが食事を探る意志を示しても、菊乃は部屋から出してはもらえなかった。実際にハイネスが食事を終えるまでずっと、その場にいなければならなかったのだが、そこにどんな意図が隠されていたのか、菊乃には全く分からない。

いくら考えても分かりそうにないので、途中からは考えることを放棄していた。

長い間ものを食べていなかった場合は、出来るだけ消化に良いものを少量与えるという、菊乃の常識を覆す量の食事をしてみせたハイネスは、体調を崩すことなく順調に回復しているという。

青の血族、というやつだからだろうか。

ハイネスが食事を終えた時点で、菊乃はようやく外に出してもらうことができた。それが2日前のことだ。

その辺りのことを踏まえてもう一度、先程のユリウスの言葉を思い出してみる。

ハイネス・ユーゴをどうしたい？

「……………」

何の見当も付けられない。

菊乃は自分で答えを出すことを諦めて、素直にユリウスに問うことにした。

「どういう意味ですか？」

聞くと、ユリウスは不思議そうな顔になった。あれ、分からない？みたいな顔だ。

「君への褒賞なんだけど」

「はい？」

そんな無邪気に、不思議そうな顔で見られても困る。

意味を理解するどころか、益々分からなくなった。ハイネスの話をしてきた筈なのに、何故褒賞の話になるのだろう。思えば始まりは逆だった。褒賞の話をしてきた筈なのに、何故かハイネスのところへ連れて行かれたのだった。

(あれ……?)

菊乃ははっとした。

もしかして、この二つは関係した話なのか。思えば確かにそのようなことを話していた気がする。褒賞は素直に喜ばないだろうか、そこから提案としてハイネス・ユーゴの話がでてきた。

内容が『お願い』であったから、褒賞のことはすっかり頭から外れていたのだが。実は関係があったらしい。

(つまり……………どういうこと?)

悩む菊乃を見下ろしていたユリウスだったが、突然噴出した。ぎよっとする。

「はははは、いや、すまない。世界の終わりみたいな深刻そうな顔をするから、ついからかいたくなって。可愛いなー、やっぱりうちに来ない？」

「無視しろキクノ。酔っ払いの戯言だ」

「酷いな、ちよつとしか飲んでいないよ」

「そのちよつとで酔う安い体質だろうが」

王子様、なんだよね？

と何度目かの疑問を浮かべる。朝から酔っ払っているユリウス自身もそうだが、ユーイの態度があまりにも乱暴で吃驚だ。この世界の王子の価値は、案外低いものなのかもしれない。

「そもそも君がマーサにばれないように、水差しに酒を入れておくという偽装をするからこんな事になったんだけど」

「勝手に部屋に入って断りもなく飲み食いする奴が悪い」

それは何か、どつちもどつちだ。

「まあ、この件で争っているほど、私は暇じゃない。今はキクノの褒賞の話だ」

急に真面目な声になったので、菊乃も反射的に背筋を伸ばした。ユリウスの瞳は不思議な色をしていた。緑色に、金が混ざって光っている。

普段はそうでもないのだが、時折問答無用で従わなければならぬいような、そんな雰囲気纏う時があった。

「君がハインス・ユーゴに恩を感じ、気にかけている事は聞いていた。彼が死んだり、重い処罰を受ける事になれば気に病むだろうともね。私たちとしても彼を助きたい気持ちはあるが、障害になることがいくつあった。その内の1つは片付いたが、もう1つ残っている」

ユリウスは浅く椅子に腰掛けたまま、肘掛に置いた指の先を軽く弾いた。とんとんと、ほんの少しの苛立ちを乗せて。

「これが中々に厄介だ。ハインス・ユーゴやハルラックの証言が正しいという証拠が無い。肝心のルーミケラウスの死体も出てこないから、余計に」

その名前に心臓が撥ねる。

気がついているのか、いないのか、ユリウスは構わず話を続けた。

「君の証言が加わったから数は減ったんだけどね。ただ、それもハイネス・ユーゴの潔白を示すものではないし。だからこの際、強引に」

楽しそうにやりと笑うユリウスに、妙な胸騒ぎがした。

「ハイネス・ユーゴを君にあげようかと思って」

一瞬反応できなかったとしても、致し方ない事だと思う。

「は、い……？」

どういう意味、なのだろうか。

「だからね、君は二度に渡って敵対者を斃した功労者だ。二度目は未だ証拠不十分で疑問視する輩も多いが、一度目は間違いない。これから先の事も考えて、ご機嫌を取って取り込んでおくべきという意見が大多数を占める」

そうなんだ。

でも、そういうのは、本人に話すべき事では無い気がする。

ユリウスの隣のユーイは、もう俺は知らんといった態度で、堂々と持ち込んだ本を読み始めていた。

「今の君は多少の我侂が許される、中々美味しい立場にいる。それを利用して、話を作らせてもらった。君が命の恩人だと信じるハイネス・ユーゴの境遇に胸を痛め、彼を何とか救って欲しいと私に嘆願した。他には何もいらないと健気なことを言っていたとか、随分思いつめた様子だったとか、色々と大げさに脚色させてもらったよ。脚色というか、それは捏造というのでは。」

勿論、ハイネスを助けたいという気持ちは否定しない、が。

「そういうわけで目論みは上手くいったから、ハイネス・ユーゴを」

助ける事が、君への報酬というわけだけど。不服かな？」

考えた末、菊乃は力なく首を横に振った。

色々思うところはあるものの、もういやという気持ちである。「それは良かった。では、最初の質問に戻ろう。ハynes・ユーゴの今後について。君はどうしたい？」

別にどうもしたくない。

そもそもそれは、ハynes自身に聞くべきことだ。菊乃が決めて良い事ではない。望む事は1つだけだ。

「私への褒賞で助かったとか、そういう事は秘密にしておいてください」

きつと、知ったら嫌な思いをするに違いない。

菊乃の言葉に、ユリウスは変な顔をした。

「……キクノ、1つ聞きたいんだけど」

「何ですか？」

「君はハynes・ユーゴが助かって嬉しいと思っているか？」

1つ瞬いて、菊乃は素直に頷いた。何故そんな事を聞かれるのかは、謎だ。

「嬉しい、のか。嬉しいんだよね……」

「？」

「……まあ良い。それが君の望みなら、そうしよう。今日のところは、これで帰るよ。行こう、ユーイ」

優雅な挨拶をして帰っていくユリウスと、素っ気無い言葉を残して後に続くユーイを見送って、菊乃は小さく息を吐いた。話をしていただけなのに、何だかかなり疲れたような。

席を外していたハルラックが戻るまで、菊乃は椅子に座ったままぐったりと目を瞑っていた。

中々に手強い。

ユリウスは、異界人の少女に対してそんな印象を強くした。欲がない人間を縛る事は難しい。欲しいもの、望むものを与えて懐柔しようと考えていたが、あれでは。

こちらに好意を持ってもらう必要は無い。何を思われていようと、従わせる事は出来るのだから。

彼らは依る術の無い異界人だ。

(いざとなれば、個人の感情を考えている場合ではなくなる)

だがユリウスは、強制的に従わせるという方法が好きではなかった。特に女性に対しては。

恐怖で縛り恐れられるよりは、喜ばせて慕われる方が良いに決まっている。

好意がある方が、土壇場で裏切られる可能性も少ないし。

ハインス・ユーゴを助ければ、菊乃はもっと喜ぶかと思っていた。(気にするのは、好意を持っているからだと思っただが、見当違いだったか)

殆ど顔色を変えることなく、始終何かを考えるような顔をしていた少女を思い出して、思案する。

そういえば、ユリウスは彼女の笑った顔を見たことがない。

泣いたり怒ったり、そういう表情も知らない。大体今日のような不安げな、何かを我慢するみたいな難しい顔をしている。

手強い、な。

だが、そういうタイプの方が楽しめる。

今までに、様々な手管で出会う人々を誑し込んできた(健全な意

味で、男は笑う。その後ろで、ユイはその厄介な男と縁を切る方法を、真剣に考えていた。

## 憂鬱な彼の胸の内 2

お願い、お兄ちゃん。

思えばその一言に弱かった。

自分を兄とも呼ばず、呼び捨てで、それも年に1度呼ぶか呼ばないかだった生意気な弟に比べて、妹は可愛かった。明確な比較対象があった事と、彼女の体が弱かった事。自分が守らなくてはいけないという使命感は、深く吹雪に根付いていた。

こいつは俺が守る！

そんな風に思っていたが、実際戦う相手が悪かった。病氣と闘うのは医者と、それから本人にしかできないことで、吹雪はそれを見ていることしかできない。苛める奴がいたらぶつとばしてやるし、困らせる奴がいるならば出て行って話をつけてやる。（解決方法はいつだって手荒なものにしかならないだろうが）

けれど、代わりに病氣と闘ってやることはできないのだ。

他の家族と顔を合わせないようにして、何度も病院にいった。こよりは滅多に弱音を吐かなかったし、我俣も言わなかった。だからこそ、偶にでる可愛い我俣くらいは何でも叶えてやろうと、吹雪は思っていた。

学校に行きたい

それがこよりの最後の願いで、弟と決定的に決裂することになる切欠でもある。多分、吹雪のした事は愚かな事だったのだろう。その頃無菌室で治る見込みもない治療を続けていたこよりを、黙って外に連れ出すなんていうことは、決してしてはいけない事だということ。吹雪も、更に言えばこより自身もよく分かっていた事だ。



これが、最後。

そう2人とも思っていたからこそ、こよりは度が過ぎるくらいにはしゃいでいたし、吹雪は始終涙を堪えていなければならなかった。ずっと後悔しているし、今だって忘れていないのに、もしももう一度あの時に戻ったとしたら、自分は同じ事をすると確信していた。吹雪は彼女のお願いに弱いのだ。

伊吹は永遠に吹雪の愚かさを許しはしないだろうし、吹雪自身も許してもらおう何て思っていない。

いつか、自分が医者になってこよりの病気を治す。

伊吹がそんな風に考えて、一生懸命に勉強していた事を吹雪は知っていた。妙に大人ぶって、素直ではなかった弟は、決して誰にもそんな事を告げなかったが、家族全員気がついていた筈だ。

弱くて、捻くれていて、現実主義なあいつだけが、こよりの事を諦めなかった。

医者から「覚悟しておいてください」と言われても、親がこよりの残り僅かな人生について考え始めた時も、こより自身が何とか受け止めようとしていた時も、伊吹だけは。

恐らく、本当に強いというのはああいう馬鹿の事を言うのだろう。

「フブキ、フブキ……、大丈夫？」

心配そうに自分を呼ぶ女の声に、吹雪は億劫な気持ちを抑えて目を開けた。ベッドに体を横たえて、額に右手を当てていた吹雪を、覗き込むように見下ろす二つの明るい茶色の瞳がある。

「聞こえてる？」

目が合うと、確かめるように更に顔を近づけられた。ふわり、と肩の上までの長さのふわふわした亜麻色の髪が揺れる。

その長さに切られたのは最近で、未だに少し見慣れない。

「……ナナミ」

返事の代わりに名前を呼ぶと、女はほつと息を吐いた。

「良かった、アンタが部屋から出てこないって、子ども達が大騒ぎしてるよ」

「……………」

嫌そうな顔をする吹雪に、七海は笑いかけた。僅かに開いた口元から、小粒な白い歯が見える。吹雪は彼女を見るたびに、動物園で見た栗鼠を思い出す。特に前歯が大きいとか、そういうわけではないのだが。

体も、顔の作りも全体的に小さく、ちょこまかと良く動くせいかもしれない。

「それにしても派手にやったね」

呆れたような口調で、七海は部屋をきよろきよろと見渡した。窓も無い壁ばかりの部屋は、壁も床も天井まで、深く切り刻まれていた。当然敷いていたマットも、箆筥等の家具までぼろぼろになっている。

辛うじて、ベッドだけが無事だった。

刃物で切りつけられたような鋭い傷跡。それが、何も武器を持たない自分の手によるものである事は、信じ難い現実だった。

「……………悪いな」

「良いよ、フブキが無事ならね」

に、っと笑ってみせる七海の、何処までが本心かも分からないストリートな物言いには最早慣れた。

「新しい部屋用意するから、ちょっと待ってて」

「いらねえよ」

「遠慮？」

「……………別に、そういうわけじゃねえ。どうせ同じ事になっちまうんなら、別にこのままで良いだろ」

「うーん」

七海は腕を組んで苦笑した。

「フブキが良いなら良いけどね。あたしとしては、なるべくこうゆうことにならないよーに頑張ってほしいところだよ」

そうは言っても、吹雪だって自分の意志でやっているわけではない、と思う。

腹の底から突然湧いて出て来る不快感。破壊衝動。怒りや憎悪、それに対する違和感。日に日に強くなっている。俺じゃない。

何か別のものがこの体を支配している。もしかしたら、頭がおかしくなってきたかもしれないと、吹雪は疑っていた。

いつか、目が覚めた時に周囲に死体が転がっているんじゃないかと。今はそればかりが怖かった。

「ごめんね。もうちょっと我慢して。きっと、あたしが何とかするから」

笑顔を引つ込め、真摯な顔でそう告げる七海から、吹雪は目を反らす。彼女もまた、決して諦めない人間だ。

「それよりあいつの事はどうなってんだよ」

「弟くん、ねえ」

不肖の弟伊吹。

彼を何とかこちらで保護してもらいたいのだが、七海はあまり気乗りしないようだった。

「監視きついし、当の本人からも音沙汰ないし。今のところ特に国に目を付けられるような部分だつてないから、放っておいたほうが良いと思うけど。どっちかっていうと、ウチにきた方が危険なくらいだよ。それ、分かっているから向こうも無視してるんじゃないかな」

「……あいつは俺の弟だ」

互いに気に入らない事実だが。

「俺がここにいる以上、どうやったって巻き込まれる」

「それはそうなんだけどね」

うーん、と七海は首を捻る。珍しく、気乗りしない様子で。

「実はさあ、ルーが言ってたんだ。イブキって子の性格を考えるに、こつちに来たら来たで、ウチの命取りになりかねないって」

「ああ？」

「無理やり連れてきたところで、情報もって逃げた上、垂れ込みとか、そういう事しそうな感じだから気をつけた方が良かったかね」

まあ、しそうである。

想像して、思わず舌打ちする吹雪だった。

それがイコール吹雪の死に繋がるとしても。(いや、だからこそか?) 伊吹は躊躇わずにやるだろう。向こうは既に、吹雪の事など兄とは思っていないのだ。憎んでいる相手を庇う理由は無い。

反論しない吹雪に対して、七海は感慨深げな顔をした。

「憎まれてるね、フブキ」

「……………」

そういう事は普通思っても口にしねーだろ！

と、基本的に気遣いとは縁遠い人間である吹雪ですら思う。彼女といると、自分が常識的な人間に思えてくるから驚きだ。

「まあ、一応フブキの気持ちが一番だから、どーしてもって言うなら、手はあるよ」

小さな手を腰に当てて、七海は笑う。

栗鼠っぽい外見には似合わない、悪どい笑みだ。

「但し、弟くんにもっと嫌われることになると思っけど」

「別に好かれないとか気色悪い事は考えてねえよ」

「じゃ、決まり」

果たしてその選択は正しかったのか。

どういう結果になるうとも、あの時程の後悔を背負う事はないだ  
ろう。もう、二度と。

## 伊吹、デートという名の試練に向く 1

うーむ。

伊吹の目の前、自室のベッドの上には2枚のコインのようなものがあつた。これは貨幣ではない。とある植物園への招待券である。

保護施設にある農場で知り合った業者の人間からの頂き物だ。突然手紙が送られてきた時は、何かと思つたが。異世界のものは珍しいから人気がある。それらを取り扱う仕事をしている彼らからのご機嫌取り、かつ営業みたいなもののようにだ。

ここは珍しい植物を集めているというし、評判も良い。参考がてら、一度は行って見たいところだった。

そんなわけで、行く事は決定している。

問題は招待券が2つある、という事実。こういう気遣いは正直いらない。何でこういうものは、いらぬ気を利かせてペアでご招待とか余計な事をするんだ。誰も彼も一緒に行けるような相手に恵まれていると思つなよ。誘つような相手がいない惨めな男を影でせせら笑つような行為をして楽しいか……まあ、今はいるけれども。

(……いたらいたで、悩むもんだな)

そもそも最初から1枚であれば何も悩む必要はなかったっていうのに。

どうなんだろう、ここは誘つた方が良いのか？

仮にも婚約者なのだ。ミルラはどうやら植物とか好きらしいし、喜ぶような気もする、が。

誘つ……。

それは彼女も友人もいなかった伊吹にとっては、かなりハードルが高い行為であつた。こちらへ来て大分コミュニケーション能力を

つけてきたとは言っても。

大体これ、ミルラと2人で行ったら普通にデートだろう。

一体どんな顔をして誘えば良いというんだ。万が一にでもそんな場面を志真辺りにでも見られたりしたら……。 (死ぬる)

「……………」

いや、別に何も悩む必要は無い。

1人で2回行く。

これがベストな選択だ。

ちなみに伊吹のベストな選択は、いつだって誰かに邪魔されるのであった。

いつもと変わらぬ平和な朝食時。食堂への客は僅かながらにも訪れるようになったものの、宿泊客は未だクリスティアンとミルラのみ。

そんなわけで、未だに全員揃ってのやたら気疲れする朝食は続けられていた。その事が伊吹を追い詰める事になる。

「そつえば」

と、パンにジャムを塗っていたクリスティアンの口を、その時点で塞いでおくべきだった。向けられた意味ありげな流し目に、何となく嫌な予感を感じたのだ。

「イブキはルーロイ植物園の招待券を貰ったらしいね。あそこは中々良いところだよ、麗しい女性達にも非常に人気のあるお奨めのデザートスポットさ！」

思わずむせた。

おまえ、何でそんな事を知っているんだ。おまけに余計な情報を付け加えるな。と、言いたかったが、げぼげごと咳き込んでいた為に、無駄にまわる彼の口を黙らせる事はできなかった。無念。

「2枚持っているんだらう？一体誰と行くつもりだい？」

爽やかに暑苦しい笑顔を一辺埋めてやりたいと真剣に思う。で、そのまま一生埋まっていってくれ。

一度出てしまった言葉を戻す事は出来ない。非常に残念な事に、この世界でも未だタイムマシンの的なものは開発されていなかった。伊吹は恨めしくクリスティアンを睨む。

見る、この空気をどうしてくれる。

……いや、本当にどうしたんだ、この空気。思わずたじろいでしまうほど、静まり返っているのだが。

ラクトが無言、ウィガーが無口なのはいつもの事だが、先程まで騒がしかったカオロン・ミーチェ夫妻は態とらしく窓の外を眺めたりして、ひたすらお茶を飲んでいるし、志真等はパンを片手に固まっている。女子ならせめて口を閉じる。

何だこの皆の不自然な態度、何だこの緊迫した空気は！

隣から痛いくらいに感じる視線も気になるが、それよりも。

「フィオーネさん」

「は、はいっ！？」

おかしなくらいに驚かれたせいで、余計に大変な事に。

「お茶毁れてますよ」

「え……わっ！」

ティーポットから注いでいたお茶は、既にカップから溢れてテーブルに流れ出ていた。しつかりもののフィオーネにしては、珍しいいや、最近はやいよいよやっっているか。色々あって疲れているのかもしれない。

「大丈夫ですか？」

「ご、ごめんなさい、ちょっとぼーっとしてて」

「大丈夫？フィオーネ」

まあまあ、と言いなながらリアラが布巾を持ってテーブルを拭き始



める。その隙に、伊吹は空いた食器と鞆を持って立ち上がった。

「すみません、急ぐのでお先に失礼します。ごちそうさまでした」

その声を掛けて、さっさと立ち去る。あ！逃げた、との志真の声は聞こえなかった事にした。

調理場の流しに食器を置き水につけておく。裏口へと向うと、ミルラが後を追ってきた。

「イブキ！」

「はい」

「……い、いつてらっしゃい」

「……うん」

別に頼んだわけではないが、ミルラは毎朝こうやって見送りに来る。最初の頃のぎこちなさを考えるに、誰かに吹き込まれたのではないだろうか。（恐らく志真辺りだろうと思っっている）

伊吹としては慣れない、気恥ずかしいばかりのやり取りだったが、邪険にはできなかつた。何の変哲もないただの挨拶なのに、妙に満足そうな顔をされてしまうと。

しかし今日は、その顔を見る事はできなかつた。

白い頬をほんのり赤く染めて、ちらちらと物言いたげな視線を向けられる。……分かり易すぎる。（畜生……クリスティアンめ）伊吹は軽く溜息を吐いた。

「……行きたいんですか？」

う、と言葉を詰まらせた後、ミルラは追い詰められた猫みたいな顔で、こくりと1つ頷いた。何でそこまで緊張されるのかが分からない。

期待と不安の籠った青い目。

やめろ、こっちにまで緊張が移る。

というかこの状況は何なんだ。もう誘わざるを得なくなっている

ような。

「行きますか？」

ぱつと、青い目が輝いた。

「行きます！」

実に良い笑顔だった。

「……じゃ、行きましようか。まあ、他に誘うような相手もいないですしね」

「ありがとう、イブキ！わたくし、楽しみですわ！」

余程嬉しかったのか。

ミルラは伊吹に飛びついてきた。ふわりと、花みたいな匂いが鼻を擽る。目の前に舞う金の髪を呆然と見つめ、柔らかく暖かい感触にぎよっとした。

な、

あまりの事に、一瞬頭が真っ白になった。

全身の血液が物凄い速さで流れている。酷使される心臓を一刻も早く宥めなければ、体が持たない。冷静になれ！と思うものの、全神経が胸に抱きついてきたミルラへと向かっていた。

お前は俺を殺す気か！

女性ならばもうちょっと恥じらいを……と、八つ当たり気味な怒りをぶつけたくなったが、見下ろしたミルラの顔が真っ赤だったのを発見してしまった。

何だそれ。

何とか落ち着きかけていた心音が、再び騒ぎ始める。

っていうか、自分から抱きついてきておいてなんだその反応。

いちいち調子が狂わされる。

伊吹は何とか落ち着いていた声が出るように努力した。

「……………離してくれないと、遅刻します」

その為必要以上に無感情な声になったのは否めない。しかし正直  
気を使っている余裕はなかった。

ぱっと、ミルラが体を離す。真っ赤な顔のまま、俯いた。

「ご、ごめんなさい。わたくし、つい」

「良いです、別に。まだ間に合う時間ですから」

実際、まだ時間に余裕はある。そもそも朝食を途中で切り上げて  
早めに出てきたのだ。

「じゃ……………、行ってきます」

「い、いつてらっしやい」

いつもよりも早歩きになったのは、致し方ないことだ。

## 伊吹、デートという名の試練に向く 2

後で改めて3日後と決めた。

当日の今日、空は雲ひとつない快晴である。

風が少しばかり冷たいが、歩いている分には丁度良い。そのせいか、クリスティアン曰く「人気のデートスポット」であるルーロイ植物園は今日も朝から賑わっていた。

最も、相当広いので人ごみにうんざりしたりする事はない。桜色のタイルで舗装された道の上をちらちらとすれ違う人々。その殆どがデートを楽しんでいると思われるカップルで、そこに子どもを連れた家族が混ざっている感じだ。

これは1人で来なくて良かったかもしれない。

相当居た堪れない気分になっていそうだ。幸せそうなカップルに囲まれながらも無心で植物をスケッチしている男がいたが、自分はきつとあんな風にはなれないだろう。

(しかし)

今もまあ、快適とは言い難い。伊吹は溜息をついて足を止めると、振り返った。驚いたように肩を震わせ、慌てた様子でミルラも足を止める。2人の間には大体3歩くらいの距離があった。

妙に緊張した面持ちで見つめられているような。

(何なんだ……?)

朝からずっとこうだった。

一体その距離の意味は何だ!?何か嫌われるような事をしただろうか。これというような事は思いつかなかった。

離れて歩かれる意味……か。

もうちょっと離れて歩いてよ、アンタの連れだって思われたくないし。とか、そんな事を言われたこともあったな。偶然帰りが一緒になっただけで。相手は近所の同級生だった。昔っから気が強くてカエルを手に追いまわされたこともある。

高校生になつた途端、スポーツ少女からギャルへとクラスチェンジしていた。短いスカートをはいておいて「やらしい目で見えてんじやねーよ、変態」とか言ってくる、理不尽極まりない女だった。断じて見ていない。まあ、美人といえば美人だったかもしれないが。思い出したら苛々してきた。こっちだって願ひ下げだ！とか返せるようなら、半ひきこもり生活をする事もなかっただろう。

だが、今ならば言い返せるような気がする。二度とその機会が無いのが残念だ。

で、だ。

伊吹は難しい顔で目の前のミルラを見つめる。

今日のミルラは長い金髪を編みこんで結い上げるといふ、伊吹ではどうなっているのか分からない複雑な髪形。左側の耳の後ろ辺りに小さな青の造花が3つささっている。

薄い水色の清楚なワンピースに、白いレースのカーディガンという格好は、ミルラに良く似合っていた。

見れば見るほど、何故彼女が今自分と一緒にいるのか謎である。

(……落ち着いて考えてみれば、やっぱり不自然だな)

大体思い返してみれば、彼女は植物園に行きたいとは言っていたが、一緒に行きたいとかは言っていなかった。

一緒に歩きたくないなら、そう言ってくれた方がよい。後ろから難しい顔でついてこられると、気になって仕方が無いし。

「えっと、良かったら別行動にしますか？」

「え？」

ミルラはきよとんとした後、怪訝そうな顔になった。

「どうしてですか？」

「いや、どうしてって……」

「もしかしてわたくし、何か間違った事をしてしまいましたの？それで、イブキは嫌になってしまったんですね！？」

くしゃり、と泣きそうに顔を歪めるミルラに、伊吹は動揺した。

何でいつもこう予想外の展開になるんだ。

「違いますので落ち着いてください。……というか、間違った事ってどういう意味ですか。もしかして、また誰かに何か言われましたか？」

ミルラは叱られた子どものような顔になった。

「……ちゃんとシマに聞いたんですのよ。デートの時は、殿方の3歩くらい後ろを歩くのがマナーだとか、影を踏むのは失礼だとか」

またお前か、灰谷志真！

伊吹は思わず米神を押さえた。っていうか、一体いつの時代の話をしているんだ！後でしめる。

「……イブキ」

ミルラは不安そうに伊吹を見ている。それでもきつちり3歩の距離を保って。先程まで不快だった距離が、急に笑えるものに思えてきた。3歩後ろ、影を踏むな。通りで地面ばかり見えていると思った。

「イブキ！」

「……何ですか？」

さっきまで泣きそうな顔をしていたミルラが、突然怒り出したので驚いた。白い頬を真っ赤に染めた上、涙目で伊吹を睨みつけている。

「ひ、酷いですわ！人が不安になっているところを、笑うなんて！わたくしの事、からかったんですの！？」

「笑ってません。相変わらず騙されてるミルラさんは、確かに面白いですけどね」

「面白い!? ……え、だ……騙されてる、んですの?」

「嫌じゃないなら、隣歩いてください。後ろから怖い顔でついてこられると、気が休まらないので。後、影の事も気にしなくて良いですよ」

少し間を置いて、ミルラは恐る恐る伊吹の隣に立った。よし、これで良い。

「折角植物園に来ているんですから、地面じゃなくて植物見てください」

「そ、そうですね」

これで落ち着いて植物観察できるというものだ。

今の涼し目の気候で育つ植物がある庭園がそれぞれ五箇所。湿地ゾーンに砂漠ゾーンまである。温室の数は16で、植物園の中心には大きな池があり、周囲を囲む雑木林にも散歩コースが作られているので、時間があれば行ってみたい。

初めは硬い表情をしていたミルラも、次第にいつもの調子を取り戻していた。

「あ、あの小さな木、動いてますわよ!？」

「肉食系植物ですからね。あの頭の部分になっている果物で、獲物を誘き寄せるそうですよ」

シエンゾやアルジャラーの世界の植物だそうだ。彼らの祖先とも言われているらしい。根っこが地面に繋がっているとはいえ、あれだけ動かれると動物なのか植物なのか分からなくなってくる。

「あ……あの、うねうね動いている緑色の海藻のの塊みたいなものは何ですか」

「吸血植物らしいですね。一塊に見えますが、300くらいが群生しているみたいです。草食の動物を捕まえて餌にしているようですね。勿論人間も餌の対象に含まれますよ」

ここからでは分からないが、ふやふやしているように見える葉には、毒付きの細かい棘がびっしりだ。

「あの真つ赤な花は綺麗ですわね」

「あれは花粉が猛毒で、吸うと体が麻痺します。その際に種を植え付けられて苗床にされるらしいですね、生きたままで」

先程から傍で青い顔をしていたカツプルが、とうとう逃げ出していった。何かをやり遂げたような気持ちである。

「……どうしてそんなに物騒なものばかりなんですか」

「危険植物ゾーンに入っただけで、何言っているんですか」

ちなみに危険植物ゾーンであるこの館は、全面分厚いガラスで区切られていた。

綺麗とはいえない不気味な植物も多い為か、デートには人気が無い場所らしく、割合空いている。時折、怖いもの見たさで入ってきた奴らが、きゃーきゃー言っただけで騒いでいるようだ。遊園地で言うならば、お化け屋敷的存在だろうか。

「入ろうって決めたのは、イブキですわよ」

何だその白い目は。

言っておくが、断じてお化け屋敷的效果を狙ったわけではない。

単に、他に無い珍しい植物の観察を優先させたただけだ。何せ、保護施設の農園の中でも、立ち入り禁止区域になっている研究所でしか、育てられていない。未だ見習いの立場の伊吹では、入れない場所だ。

「この辺の植物は、図鑑でしか見られないようなものばかりなので、ミルラさんの庭にも無かったですよね？」

あつたら大問題だ。

「……確かに。言われてみれば初めて見るものばかりですわね」  
きよろきよろと周囲を見渡して、ミルラは頷いた。

どうやらいらぬ誤解をされずに済んだようだ。機嫌を直し、笑顔



を見せる。

「ありがとうございます。気を使ってくださったんですね」  
「何でそうなる。」

「……いえ、俺が見たかっただけです」

居た堪れないので白状しておいた。それでも嬉しげなミルラから、視線を反らす。丁度角の方を見た時に、さっと隠れる影を見たような気がした。

「……………」

気のせいか、見間違い。

そんな風に片付けられるほど、伊吹は脳天気では無かった。護衛の者というのも考えにくい。今までそんなミスを犯す奴はいなかった。

暫く見ていたが、出て来る様子はない。だからと言って確認しにいった、余計に厄介な事になっても面倒だ。

「イブキ?どうしたんですの?」

「何でもないです。行きましようか」

暫くは、このまま気づかないふりをして様子を伺うか。

### 伊吹、デートという名の試練に向く 3

「ヤバイ、何あの良い雰囲気」

物陰に隠れて2人の様子を伺っていた志真は、その順調なデートの様子に動揺を隠せない。対象は勿論伊吹とミルラである。頭は良いかもしれないけど、女子の扱い方など知らなさそうな伊吹のことだ。このデートは絶対にうまくいかない、そう信じていたのに。

で、ミルラの方が伊吹に愛想を尽かすと予想……いや、本当にそうなるように願っていたりした。

「あー、やっぱり私のアドバイスが的確すぎたのかな」

女子は黙って3歩後ろからついて来い、人の影を踏むな、とか言いそうだと思っていたのだ。好きなタイプは大和撫子とみた。2人にうまくいかれるのはちょっとあれなんだけど、真剣なミルラに嘘は教えられなかったから仕方無い。

植物園の話題が出た3日前の朝食。

あれからフィオーネの様子が更におかしくなって、もう一度聞いてみたのだ。そうして知った……というか、確認したあんまり認めたくなかった現実。

いてもたってもいられなかった。

「ああ、君は花よりも可憐で美しい」

近くでクリスティアンが女性をナンパし始めている。一応横に怒った顔の男性がいるけど、見えているのだろうか。多分それ、彼氏だと思うけど。

入園チケットを手に入れてくれたのは彼なので、ここは好きにやらせておこう。今は、それよりも伊吹とミルラだ。先へと歩き始めた彼らを追って、志真も尾行を再開した。

\*\*\*

……増えている。

あちらこちらから感じる視線。自意識過剰でも、被害妄想でもない筈だ。あれから5つほど館を見てまわり、今はなだらかな丘の上にいる。隠れる場所は殆どない。

ざつと辺りを見渡せば、あそこにもあそこにもあそこにも、何度も見かけた顔がある。

というか、あのいかにも顔を隠してますという感じの少年（本当は少女だが）は、灰谷志真だろう。変装のつもりかしらないが、大きな帽子にストールで口元を隠している姿が、どこぞの孤高の旅人みたいである。

余計に目立っていると、本人は気がついていないのか。

（あいつ……こてつをどうしたんだ？）

この植物園は動物の入場を禁止しているので、志真に預けて来たのだ。まさか、連れてきてはいないだろうな。見つかったら罰金ものだ。

更に、時折聞こえてくる女性をナンパする齒の浮くような台詞、どうやらクリステイアンも来ているようだ。

（何をやっているんだ、あいつらは）

余程暇を持て余しているらしい。

後は少し下ったあたりにあるベンチに座っている少女。両脇に同じ年くらいの若い男を連れてきているが、どうも見覚えがあるような気がしてならない。ミルラの妹のエリーではないだろうか。

「……イブキ！」

怒ったようなミルラの声に、はっと我に返った。

正面に、眉根を寄せて口を尖らせた不満そうなミルラの顔がある。「さつきから呼んでますのに」

周辺の怪しい人間チェックに気をとられ過ぎていた。

お弁当を作ってきたというミルラに一抹の不安を感じたが、用意するので待つているように嬉しそうに言われて邪魔をするわけにもいかない。暇なので視線の正体を探っている内に、どうやら準備が終わっていたようだ。

芝生の上に敷かれたレジャーシート……細かなピンクの花柄の薄い布みたいなお敷物の上に、バスケットから取り出された3つの四角い容器があった。クリアガラスの容器の中には、それぞれおかずとおにぎりとデザートが収められている。

ミーチェに手伝ってもらったというから、味の心配はしていない。その、おにぎり以外は。

のりのついていない少し黄色っぽい歪な三角。見るからにかちこちに固められている。色はこっちの米の色なので問題ないとして。

「どうぞ。沢山あるので、遠慮なく食べてほしいですわ」

遠慮なくとは言っても、きらきらと、期待と不安の目で見つめられると、非常に食べ辛いのだが。

「……いただきます」

腹を括って食べるより他に無い。

手を合わせ、伊吹はおにぎりへと手を伸ばした。手にしてみると、一層固い。どんだけ力込めて握ったんだ。米粒が潰れて固まっている。

口に入れるとやはり固く、ねちねちもそもそもしていた。塩分は足りない。唯一中の甘辛い鶏肉みたいなものは美味かった。

「ど、どうぞですか?」

不安8割、期待2割みたいな顔だ。

「美味しいですよ」と即答するのが正解なのかもしれないが、そんな事知った事か。これが正式なおにぎりだと思われるのも癪であるし、何よりこの先張り切つて量産されるのが目に見える。

しかし、きつぱり不味いと言つのも勇気が言つた。少し間を置いて、更に不安そうになつたミルラを見て、考える。

「本音を隠した贅辞を聞くのと、本音しかない辛口評価とどちらが良いですか？」

「……………え！？あの、えつと……………つて、もう答え出ているじゃありませんの！」

「あ、言われてみればそうですね」

「……………もう！イブキは意地悪ですわ！」

「残念ながら、生まれつきです。これ、灰谷志真から聞いて作つたんですか？一人で？」

「いいえ、シマも手伝つてくれましたわ」

全く残念な女子だな、灰谷志真。

「今度作る時は、俺が教えますよ」

是非とも本当のおにぎりの美味さというやつを、教えておかなければならない。日本の料理が誤解されない為にも。

何気なく言つた言葉に、ミルラは大きな目を丸くした。何だ？白い肌が徐々に赤く染まっっていく。

「ミルラさん？」

名前を呼ぶと更に赤くなつた。

「わ、わたくし……………」

「はい？」

「嬉しいですわ」

蚊の泣くような声ってこんな感じか、とか。そんな関係のない事を思いつつ、伊吹は赤い顔で笑うミルラの顔から慌てて目を反らした。

落ち着け。

動揺するまま、伊吹は手を伸ばし固められたおにぎりを口に運んだ。よし、不味い。一口ごとに冷静さが戻ってくるような味である。妙にぎくしゃくしたまま、会話も少なく昼食を終えた。まだたっぷり時間がある。少し休憩した後、トイレを済ませて残りの庭園を回ろうという事になった。

木陰にあったベンチの1つに座り、伊吹は空を見ていた。

青い。

薄っすらと出てきた雲が綿みたいに広がっている。

女性用のトイレが少々混んでいたのも、こうして待つことにしたのだ。なだらかな斜面の下にあるトイレをちらりと見る。先程よりは、人も減っているようだ。

(それにしても、遅くないか)

漸く不審に思い始めた。既に10分くらいは経過していると思う。単に化粧を直している、或いは腹を壊している。そういう事ならば良いが。

空を見つつもさりげなく女子トイレの入り口を見ているが、今のところおかしいところは無い。ただミルラが出てこないだけで。

もう少し、待つか。

そう思った時、伊吹の座るベンチの隣に誰かが腰を下ろした。何気なく目をやって、ぎよっとする。

流れるような金糸の髪、憂いを宿した青い瞳。染み1つないどころか、輝くような白い肌。同じ人とは思えないほど美麗な人間がそこにいた。

ほんの少し耳の上部分が尖っているのが目についた。

瞬きをすると、長い睫毛がきらきらと光って見えるのは何の効果だ。ふつくらと赤い唇から微かな息を吐き出して、青い目が伊吹を捕らえた。

途端にふわりと、艶やかに微笑む、青年。

そう、そこらの女性よりも美人だが、れっきとした青年のようだ。体つきの見て間違いはない。華奢だが肩幅はあるし、胸が平だ。

何故かこちらに向って親しげに微笑んでくる青年に、伊吹は愛想笑いで対抗した後、さりげなく目を反らした。

隣から視線を感じるが、気がつかないふりをしておく。

誰かを待っているのだろうか。そうであって欲しい。その顔立ちに何となく似ている人を知っているような気がするが、つきつめて考えたくは無かった。

ミルラはまだか。

じりじりと、その戻りを待つ伊吹に向って、その謎の青年は言った。

「妹はもう戻らないよ」

## 伊吹、デートという名の試練に向く 4

妹と聞いて。

真つ先にこよりの顔が浮かんだ。続いて瑞希と葉月の不満そうな顔。いや、分かっている。彼の言っているのはあくまで『彼の妹』だという事くらい。つまりは。

ミルラ。

伊吹は思わずまじまじと、艶然と微笑む男の顔を見た。目元と口元が、ほんの少しミルラに似ていると感じたのは、やはり気のせいではなかったのか。

(何というか)

残念な気持ちでいっぱいだ。

「念の為に言っておくと、妹というのはミルラの事だけど」

「……分かってます」

「じゃあ、私が何の為にここに来ているのかも、もう分かってくれているのかな」

友好的な意味ではないという事くらいはな。

そんな言葉を飲み込んで、伊吹は黙って彼を見返した。

ミルラの話聞いて、ずっと疑問に思っていたことがある。周りの人間は皆、自分から離れて行ってしまふ、彼女の兄や姉、妹や祖父。彼らの方を選ぶのだ、と。

おかしいと思っていた。

ミルラはあの通り美人だし、可愛いし、性格も悪くない。世間知らずで高慢な態度を取る時もあるが、気になるほどではない。もてない、好かれないなんてとても信じられなかった。

もし、本当にそんな事が起こるといふのなら。



強制的に選ばせているのではないか。そう、伊吹は睨んでいた。そもそも、兄や姉と仲良くするからといって、ミルラから離れるというのがおかしい。

「勝手な事を言っただけで申し訳ないけど、ミルラとの結婚は諦めて欲しい。できれば、妹とは二度と会わないでくれ」

イラッとした気持ちになるのは、多少自分の身に重なる部分もあるからだ。兄貴面していちいち人のやることに難癖をつけてくるどこかの馬鹿のせいで、どれだけ苦い思いをしてきた事か！

「祖父の事は何とかするから心配しなくても良い。勿論、妹と結婚することで得られる以上の利益の保証もさせてもらうよ。私が責任もって援助していくと約束する」

……非常に美味しい話だな。

思わず感心してしまった。自分の打算的な性格を完全に読まれているような気がする。

「元々君は、妹に押し切られる形で婚約したのであって、結婚に乗り気では無かったんだらう？クリステイアンの話では、女性よりも仕事に情熱を燃やすタイプだそうだし」

おまえか、クリステイアン！

……いや、まあ、あいつはそういう奴だよな。驚くだけ損というものだ。事細かく報告してくれたようだが、所詮出会って十数日の付き合い。

「どうかな？」

と改めて返事をするように促すミルラ兄へ、伊吹は薄っすら笑い返した。

「用件がそれだけでしたら、お引取りを」

予想外の返事だったのだろう。青い目が丸くなっている。そうい

う顔はやはりミルラに似ているようだ。

「結婚をどうするかは、俺とミルラさんが決めることで、家族とはいえ貴方が決めることじゃない」

「私はあの子の兄なんだけど」

「煩い、だから何なんだ」

それは伊吹の地雷キーワードである。

反射的に出てしまった乱暴な台詞に、ミルラ兄の目が点になる。

驚きから立ち直った後には、不快そうな顔になった。意外と表情豊かな人である。

「兄だから、あの子が幸せになれないような結婚に賛成はできない。当然じゃないか」

「そついうの、余計なお節介つていうんですよ」

「なっ！お節介だと」

「実に余計なお世話です。どんな結婚だって、確実に幸せになれる保障なんて誰にもできるわけがない。いちいち邪魔していたら、ミルラさんは一生独身だと思いますが」

う、とミルラ兄は一瞬言葉を詰まらせた。

「……ふん、それだけ言うのなら、君はあの子を幸せにする自信と覚悟があるわけだ」

「ありませんよ、そんなもの」

「……………」

何だこいつ、という目で見られた。

しかし当然だろう、あるわけがない。この先、自分ひとりでもちやんと生きていけるか未だ見通しが立たない異世界人である伊吹が、「妹さんは必ず幸せにしてみせます」とかどの口で言うつこののだ。まあ、例え自信があっても言いたくない、恥ずかしい台詞でもある。

「そこはハツタリでも幸せにするとか言うところだろーが」

ぼそり、と低い声が聞こえた。

その声音に違和感を覚える。

すっかり不機嫌そうな顔のミルラ兄。当初纏っていた神秘的な雰囲気や、無駄な色気は掻き消えて、少しばかりガラが悪そうな男の顔がそこにあつた。

「そういう、中途半端な感じ困るんだよなア」

やってられん、とばかりに、がしつと自らの頭を掴む。さらりとした金髪に指を突っ込んだ、かと思えばぱさりと抜けた。細長い指についてきた金の髪の毛の塊。

……人はそれを鬘と呼ぶ。

とはいえ、安心なことにミルラ兄の頭に髪の毛は残されていた。

3cm程の長さに刈り込まれているが。

髪の毛の長さで大分雰囲気は変わるものだな、と、どう反応して良いのか分からないでいる伊吹に、ミルラ兄はにやりと笑いかけた。

「知ってるか？鬘って相当むれるぞ」

知らねーよ。

髪の毛は大切にしろよ、との言葉には最早何と返せば良いのか分からない。ベンチに放り投げられた金の鬘は、丁度2人の間に落ちて着いた。

何だこの状況。

ミルラ兄は長い足を組むと、そこに肘をつき顎を乗せた。物憂げに溜息を吐く。

「俺らもさあ、お節介だつていうのは分かつてんだよ。でもウチは結構大きな商売やって金もあるから、ろくでもない奴らばかり

寄って来る。で、ウチン中でアイツだけ、そういうの見抜けないんだ」

「それは……甘やかして、成長の機会を奪っているからじゃないのか？」

「ああ、じーさんにも良く注意されんだよな、それ」

「ああ、と溜息を吐いて、ミルラ兄は頭を掻いた。

「今回も大丈夫だから放っておけて。じーさんの言う事は大体正しいって分かっちゃいるけど、結婚だぜ？しかも会って間もない異世界人相手とかありえねーだろ」

「その辺は否定できない。」

「伊吹にも妹が数人いるだけに。」

「まあ……心配する気持ちは分らないでもないですが」

「いい加減なこと言うなよ」

「俺にも妹がいるので」

「え、いんの？」

「……今となつてはいないようなもんですけどね」

二度と会う事は無いだろうし、向こうは兄がいたという事すら覚えていない筈だ。彼女達が、一体どんな相手を選ぶのか見ることすらできない。

（まあ、あいつらは異様に見る目厳しいから、変なのは連れてこないだろうけどな）

「それはそれで切ねー話だな」

いきなりミルラ兄の眼差しが、同情的なものに代わった。同じ兄であるという事から、親近感を覚えたのかもしれない。

しかし伊吹は例えここに妹達がいたとしても、いちいち彼氏に対して干渉したりはしない、筈だ。口出しされる鬱陶しさも知っているからこそ。

さてどうするか。

そんな微妙な雰囲気になってきていた。そこへ。

「ジユド！」

そう言って駆けて来る長い金髪の女性がいた。階段を上がつてくるその女性は、先程までのミルラ兄にそっくりの姿をしていたので、少しばかり驚いた。双子だろうか。まさかあれも鬘とかじゃないだろうな。

そんな疑惑を抱く伊吹の隣で、ミルラ兄が立ち上がる。

「どうした、そんな慌てて」

「ちよつと目を離れた隙に、ミルラがいなくなってしまったの！こつちに来てるかと思って」

思わず伊吹とミルラ兄は顔を見合わせた。

「いや、こつちには来てねーよ、なア？」

「見ていませんね」

同意を求められて頷く。

どうしよう、とミルラ姉が青褪める。

「何かあったのかもしれないわ。さつき、向こうで女の子の悲鳴を聞いたって人がいましたの。まさかとは、思っけど……」

「リイ！」

ふらりと青い顔でよろめいた彼女を、ミルラ兄が慌てた様子で支える。

伊吹は難しい顔で考え込んでいた。

果たしてこれは演技か否か。

伊吹を試す為の三文芝居なのか、それとも本当にミルラに何かあったのか。

## 伊吹、デートという名の試練に向く 5

虚言か真か。

とにかく話を聞いてみるしかなかった。彼らは妹が出会ったばかりの異世界人と結婚すると聞いて、心配になった。まあ、その気持ちは理解できる。クリステイアンから植物園へ出かけるという話を入手、この機会を逃す手は無い。まずは様子を見守ってどんな感じが観察し、2人が離れた隙に接触してどんな人物が見極める。

ミルラ兄…ジウド？が伊吹と接触している間、ミルラ姉…リイ？がトイレでミルラを引き止めておく、そういう事になっていたらしいのだが。

引き止めるまでもなく、ミルラは入った個室から出てこなかったのだそうだ。

流石に長い、呼びかけても返事がない。もしかしたら倒れているのではないか、そんな結論に達して無理やりドアを開けたところ。

「いなかったのです。窓があつたから、そこから出てしまったみたいで。てつきりジウド達の方へ行くつもりなのかと思っただけど、そんな様子も無いですし、辺りを探してみたんですけど」

「悲鳴、つてのは？」

「エリーの友人が氷菓子を買いに行っていた時に聞いたらしいのです。他にも何人が聞いた方がいるそうなの。後、地面にこれが落ちていました」

彼女の手には、見覚えのある青い花の髪飾りがあつた。それは確かに、ミルラが今日髪につけていたものだ。

「それはどの辺だ？」

「湿地帯の方です」

厳しい顔をしたジウドと、紙のように白い顔をしたリイのやり取

りを、伊吹は黙って眺めていた。

さっぱり分かん。

とても演技には見えないが、ジユドの見事な化けっぷりを見たばかりだ。彼と双子の Riy も同じようなものかもしれない。

嘘でも本当でも構わないだろう。どちらにしる、探すべきだ。そうすれば何かあった場合にも後悔しないで済む。そう思う一方で、こんな風に試されたくないという苛立ちがある。

「クリス！」

Riy をベンチに座らせたまま、ジユドが叫んだ。

近くの茂みがかざりと動いて、金髪の大柄な青年が姿を見せる。

お前、そんな近くにいやがったのか。にこりと白い歯を見せて、クリステイアンは笑う。

「どうやらこの私の力が必要なようだね！良き友人と、麗しいご婦人の為ならば」

「御託は良い。テメーはここで Riy を守れ。言っとくが、変な真似はすんなよ。したら殺す」

「相変わらず人聞きの悪い。このクリステイアン、美しいご婦人を守る事はあっても、傷つけるようなことをする筈がない！さあ、この弱き姫君は私に任せて、安心して行きたまえ！」

安心できねえ……。

その時のジユドの心の声が、聞こえてきた気がした。

ジユドは一瞬、真剣に嫌そうな顔になったが、ミルラの危機を優先させた。一度だけ、黙って伊吹の方へ鋭い視線を向けたが、結局は黙って走っていった。

「で、イブキ。君は行かなくて良いのかい？」

ベンチで休む Riy の隣に、人一人分の間を空けてクリステイアンが座る。意外にも体を寄せる事はしなかった。長い足を組みながら、

伊吹を試すような笑みを浮かべる。  
全くもって気に入らない。

もしもこれで全部こいつらの企てだったとしたら。

それなりの報復をさせてもらう。きっと多少の事では怒りは治まらないだろう。だが、それでも、そうであってくれる方がずっと良い。

柄にもなく、そんな事を思った。

\*\*\*

「全く、素直では無いな、我が友は」

往生際悪くぐずぐずしていたが、結局探しにいった伊吹を眺めて、クリステイアンは肩を竦めた。その発言、伊吹が聞いていたら恐ろしいことになると思う。我が友って、いつからそうなっているわけ。つい先程クリステイアンが出て行った茂みから、志真もようやく頭を出した。

「ミルラ、大丈夫？」

良く分からないが、いなくなってしまったという事は理解した。

「さあ……、心を痛めている姫君に、こんな事を伺うのは心苦しいことこの上無いですが、ミルラ嬢の行方不明は確かなことなのでし  
ようか？姫君」

「……はい。これはわたくし達の企みではありません」

真っ白な顔で弱々しく頷く女性。吃驚するぐらい美人だった。人じゃなくて妖精とかそういう別の生き物みたいだ。何となくミルラに似ている。

「わたくし達のせいです」

じわり、と大きな青い瞳に涙が浮かぶ。

「わたくし達が、馬鹿な事をしたから、あの子が……」



「そのような事は決してありません。必ずミルラ嬢は見つかりますよ、このクリスティアン………の代理の可愛いチーグーちゃんがきつと見つけてくれることでしょう!」

「はあっ!?!」

いきなり話を振られても困る。

大体今こそ自分が探すとかつこつけるべき場面ではないのか。白い目で見あげる志真に、クリスティアンは笑いかける。

「こてつ、連れてきているね」

伊吹から預かったヴィーダを、更に預けられそうな人は誰もいなかった。置いてくるわけにもいかず、内緒で連れてきていた。この事が伊吹にばれたらと思うと怖い。

手にした小さなバスケットの籠を掲げる。

「いる、けど?」

「ヴィーダの鼻はとても良いのだよ。上手くすればミルラ嬢を見つけてくれるかもしれない。姫君、ミルラ嬢の持ち物等ありましたら彼女に渡してください」

おずおずと、美女は小さな青い花飾りを差し出してきた。

なるほど、警察犬みたいなことをさせるわけか。

志真も心得て、籠からヴィーダを出してやった。鼻先に受け取った髪飾りをぶらさげてみる。

「こてつ、ミルラ探して」

ふんふんと匂いを嗅いだ後、こてつが走り出した。おお、見つけたんだらうか。

「行きたまえ!チーグーちゃん!」

自分で行けよ!

と、思いつつ志真は慌ててこてつの後を追った。小さな体ですると駆けて行く。すぐに見失ってしまいそうだ。

\*\*\*

広い植物園を走り回って、ミルラの姿を探す。時間が経つにつれて、焦燥感が募った。嫌な感じだ。この状況は、伊吹に嫌な事を思い出させる。

あの時も、必死で探した。

町中を走り回って。

結局見つけれなかった。あの時の絶望感は忘れられない。足元から地面が無くなっていくような感覚。

病室に戻ったこよりを見た時、安堵よりも怒りの気持ちが湧いた。ごめんなさい、そんな風に謝るから余計に遣る瀬無く、悔しかった。裏切られたような気がした。馬鹿な意地を張っている内に、無理が祟って、程なく死んでしまったこより。

思い出したくもないのに、次から次へと思い出してしまふ。

「ミルラ！」

振り切りたくて、声を上げる。

全く何だってこんな事に。

面倒だと思う。人とかかわりが増えれば増えるほど、こんな面倒事が増えるのだ。つりあいの取れていない婚約なんか、その内に駄目になると思っていた。いや、今だって思っている。

ミルラはどう見たって伊吹を過大評価していた。

それは、今まで身近に人が寄り付かなかったから。兄やら姉やらに邪魔されたせいで、ろくな友達の1人もいなかったのだ。

つまり、他に比較する対象がないということだ。

でもこれからもそうだとは限らない。

伊吹は自分を知っている。身の丈にあっていない望みなど持たない。望んだところで叶わない夢なんて、もう。

「カガミ・イブキ」

苛々としながらミルラを探す伊吹を、誰かが呼んだ。

耳元に直接吹き込まれたような声は、残念ながらミルラのもではない。思わず足を止めそうになるが。

「そのまま探すふりをしていて。アンタには、見張りがついているからね」

誘拐犯の指示のようだなと思いつつ、伊吹はそれに従った。

今のところ相手の姿は見えない。声だけが聞こえるという不気味な現象を、どう捉えてよいものやら。

歩きながら、辺りを探る。場所は砂漠ゾーンの手前辺りだ。噴水がある広場に差し掛かった辺り。幸せそうに歩くカップルが何組も、立ち止まったり歩いたりしている。

その誰もが怪しく見えた。

「探しものはアンタ達が最初に入った館にあるよ。誰にもばれないように急いで来てね。じゃないと、保証できないよ」

何をだ！

思わずそう怒鳴りそうになるところを何とか耐えた。その言葉の後に、ふつりと何かが途切れるような不思議な感覚があった。

これはどうやら伊吹をターゲットにした誘拐のようだ。ミルラの兄達によるものだったら、彼女に危険は無いだろう。だが、もし別

口だったなら。

伊吹は探すふりを続けたまま、頭の中に植物園の地図を思い浮かべる。入り口に近いその場所までは、少々距離があった。だが、できるだけ急ぐしかない。

姿が見えない護衛のことを気にしつつ、伊吹は指定された場所へ向い始めた。

無我夢中で走った。

何せこてつは素早いし、小さい。ちよつとでも気を抜くと見失ってしまいそうなので、目の前の小さな白にだけ意識を集中して走った。賢い、とは言っても所詮は小動物。後を追う志真に気を使って走ってくれるわけもなかった。

藪は突っ切るし、階段なんかも使わない。いくら体力があるっていったって、限度がある。心臓はばくばく音をたて、息がきれてきた。

「ここ、広すぎ！」

体力の限界を感じつつ、それでも気力でもってこてつの後を追った。やがて、こてつは1つの建物の中に入っていった。

（あ、あそこか？）

妙な人ばかりが出来ている。人々の足の間をすり抜けていくこてつ。

「こてつ！」

ちよつと待つてよ。流石に志真はすり抜けられない。

「こ、ごめんなさい、通して！」

普通に人を掻き分けて（迷惑な顔とかされるけど、この際気にしてはいられない）何とか入り口へと近づく。こてつはその中に入ったようだ。

これはいよいよゴールが近いのかもしれない。いや、ここがゴールでありますように！もう走れないから。そんな事を思いつつ、入り口をくぐる。一瞬ふわつと体が押されるような違和感があった。

（ん？）

謎の空気抵抗みたいなものを感じたが、それはすぐに消えたので気のせいだったのかもしれない。こてつを見失ってしまう。志真はすぐに前方を走る白色に意識を戻した。

「……入った、ぞ？」

外では、館の中に入って行った少女の姿に、ざわめきが起きていた。一番近くにいた人間が、試しとばかりに近づくものの、透明な何かに阻まれる。変わっていない。何も無い様にしか見えないのに、手を伸ばすと何かに押し戻されるような感覚があるのだ。

異世界から持ち込まれた魔法。

結界というものの存在を知る者は少ない。そもそも魔法を使うことの出来る素養を持つ人間が、この世界には少なかった。その為広くは浸透していないし、貴重な魔法使いは魔法を高く売ることが出来る。男は溜息を吐いて、自前の通信具を取り出す。

魔法に関する事件は、それ専門の人間に頼むしかない。

一方、魔法の魔の字も知らず、結界の存在にも気がつかないまま館への侵入を果たしてしまった志真は、ふらふらとした足取りで無人の館を彷徨っていた。

ついにこてつを見失ってしまったのである。

(でも、この中にいるのは間違いないし)

きちつとした順路がある。途中で二手に分かれたりするところはあるけれど、先へ進めば合流する。真ん中に大きなドームがあつて、その中を渡る通路が上下で二つあつた筈。その頭に思い浮かべられるのは、この館に入るのが2回目だからだ。

色がおかしかったり、動いていたたり、不気味な植物ばかりあるこの場所は、伊吹達が最初に入ったところである。こっそり後をつけていた志真も、当然ここへ入っていた。

(フツ、こんなところデートで入る?)

そんな事を思うのも二度目だった。

ガラス越しとはいえ、変な植物ばかり生えている不気味なところに、わざわざ入りたくは無い。しかもデートで。

特殊な環境で育つ植物の為に、わざわざ薄暗くしてあるところもあるのだが、その辺なんかどこのお化け屋敷かという薄気味悪さだった。

あそこ、1人で通るのなんか嫌だな。

(何か……誰もいないし)

朝に入った時も、他に比べて人は入っていなかった。でも伊吹達みたいな奇妙なカップルもちらほらいたのに、今は誰もいないようだ。不人気なのは納得だけど、流石になんかおかしくないだろうか。意識した途端、ぶるっと体が震えた。

かさかさと、何かが動く音がガラスの向こうから聞こえるけれども、必死で見ないようにする。

「こてつ、戻ってきてよー！ミルラさん、ここにいるのー!？」

雰囲気に飲まれないように叫んでみたのだが、エコーがかかって木霊する自分の声が余計に不気味な空間を作り出す結果となった。

返事は無い。

志真は泣きそうな気持ちで、逃げるように走った。

こつという時に限って、ホラー映画や怖い話を思い出してしまうのは何でだろう。振り払おうとしてもしつこくついてくる。今にも向こうの影から世にも恐ろしいものが飛び出してきそうだ。

両側のガラスの壁。

その向こうに生い茂る、不気味な植物達。

たった一人、変な世界に迷い込んでしまったみたいで恐ろしかった。(もうそういうのはうんざりだ)だから、ゆつくりとカーブする通路を走り、その先でぐちゃぐちゃに割れたガラスの破片が飛び散っているのを見た時には、心臓が止まりそうなほど驚いた。

解き放たれた危険生物、エイリアン、未知の生物的なものが、ガラスを突き破って出てくるところを、瞬時に想像してしまった。ごくり、と息を飲む。

ここで一体何が!?

ただ事ではない。おそろおそろ近づくと、散らばったガラスの傍にこてつの姿を見つけた。器用にガラスを避けて、無くなったガラスの向こうへ、不気味な植物オンパレードなジャングルの中へと飛んだ。

こてつ!?

慌ててその後を目で追った。緑やら赤やら黄色やら。派手な色彩、珍妙な形の植物の群れ。その中に人が立っている。

「い、いつさん!？」

どきつとしたが、良く見れば知った人物である事に気がついた。志真と同じ境遇の日本人、伊吹である。

知った人を見つけたことで、心細さが吹っ飛んだ。

ガラスを踏まないように気をつけて、僅かな隙間を飛び傍へと駆けつける。そんな志真を、伊吹は驚愕の顔で見っていた。

「お、まえ、何でここに」

「私もミルラさん探してたんだよ。こてつが案内してくれて」

「……話が違う。……何でだ?……このタイミングで」  
何やら難しい顔でぶつぶつ言っている。

「どうしたのいつさん?これ、何があったわけ!?ミルラ、見つかった?」

矢継ぎ早の質問に、伊吹はちらりと志真を見たものの、すぐに足元へと視線を戻した。大きな葉っぱに邪魔されて見えなかったものが、志真にも確認できた。

「え、み、ミルラさん……?」



ぐったりと、横たわるミルラの姿がそこにあった。青白い顔で、硬く目を閉じている。

「ちよ、ちよっとミルラさん！？いっさん、何があったの！？」

「来るな」

大声で怒鳴られたわけでもないのに、迫力のある声だった。

いつもとなんか違う。

何度も叱られた志真であるが、こんなに怒った伊吹を見るのは初めてだった。

「悪いが、俺は逃げる」

「へ！？」

青白い顔、据わった目、その上唇を曲げて笑う。そりゃもう、どこの悪役だっという顔で言う台詞がそれ！？

怖いっという気持ちも吹っ飛ぶ肩透かしである。

「ちよっといっさん！逃げるって何、どういう事かちゃんと説明してよ！」

「もう他に道が無い。俺だって命は惜しい」

そう言っつて、肩に乗っていたこてつの首根っこを掴んだ。ぶらんとしたこてつを地面へゆっくりと下ろす。

「こてつ、悪いが灰谷のところへ行け。お前は連れていけない」

そんな伊吹を見上げて、こてつは後ろ足で立ち首を傾けた。

「悪いが灰谷、後は頼んだ」

「な、何言っつて、ちよっど待っつてよ！」

「頼む」

その言葉が、志真に向けられたものではなかった事に気がついたのは、後になってからの事。

伊吹の背後にぱつと現れた新たな人物に、志真は駆け寄りかけていた足を止めてしまった。何この人、どっから来たの！？

驚愕する志真に向けて、悪戯っぽく笑いかけた小柄な女性は小さく手を振った。

「じゃあね」

え、と思う暇も無かった。

次の瞬間志真の目の前から伊吹達の姿は掻き消えた。ミルラも、見知らぬ女性も。まるで最初からいなかったみたいに、ぱっと姿を消したのだった。

「な……、何これ」

呆然とする志真の前で、残されたこてつだけが不思議そうに首を傾けていた。

## 志真と異世界人連続誘拐事件 2

目撃者は得てして疑われるものである。

と、そんなミステリードラマみたいな経験はいらなかった。伊吹とミルラの初デートという平和なイベントだった筈なのに、事態は思わぬ方向へ転がっている。

ミルラ・ラクリエル嬢誘拐事件、逃走中の容疑者の名前は各務伊吹！

……なんでこんな事になっているのだ。  
いくら考えても分からない。

「俺は、逃げる」

こてつを追ってたどり着いた場所で、伊吹は志真に向ってそう言った。彼の足元には、意識のないミルラが横たわっていた。割られた分厚いガラスが散乱した通路。ドラマのワンシーンみたいな衝撃的な一面に、テレビでも見ているみたいないな気持ちになった。

ジャンルはミステリーとかサスペンスとか。

本来ならガラスの向こうにあるべきその場所に立つ伊吹と、ミルラ。

一目散に駆け寄って、伊吹の肩へと上っていったこてつとは違って、志真は2人に近づけなかった。情けない事に雰囲気飲まれてしまっ

伊吹とミルラと謎の女性。

消えてしまった3人を見たのは志真しかおらず、唯一の目撃者と

して面倒な取調べが続いていた。

(いつさんの馬鹿！)

後の事は頼むとか気軽に言っただけで消えてしまった伊吹が恨めしい。消えるならちゃんと理由くらい言っただけ。じゃないと気になるし、不安だし……心配だ。

心なしか薄暗い(窓とかないせいだろうか)狭い部屋にて、志真は頭を抱える。部屋の隅ではそんな志真に対して油断無い視線を送ってくる、いかつい女性が1人いた。あの鋭い視線は犯人とかに向けられるものではないだろうか。

そう、志真は疑われているのである。

伊吹と同じ日本人だし、異世界人だし、唯一の目撃者であるし。

怪しまれる要素は満載だ。実際は、何も知らないのに、怖い顔で詰め寄られ、知っているのだらうとしつこく聞かれることに、志真の繊細な心(自称)は折れそうである。

虚しい。

2時間も続いた取調べは一旦休憩に入っていた。お茶は出たけど、お茶請けは無い。こっちはお腹が空いているんだよ、夕飯とは言わないけどせめてお菓子くらい出してくれ。そう言いたいけど、とても言えるような雰囲気ではなかった。

先程からぐうぐう鳴るお腹を押さえて、目の前の四角い机にだらしと腕を伸ばした時、がちやりと正面のドアが開いた。

「よう、シマ。相変わらず無駄に元気そうで何より」

この状態を見てよくそんな事が言えるな。志真は姿勢を崩したまま、不機嫌な顔で入ってきた偉そうな少年、ユーイ・ユーイを睨みつけた。

今日のユーイはいつもの派手な服ではなく、黒の軍服みたいなものを着ている。さらりと肩の上でゆれる金髪がやたら映える色だった。

「何しに来た」

「相変わらず口の利き方がなっていないな」

「相手、見るから」

お前に使う敬語など無い！との強気な態度を見せる志真に対して、ユーイは小ばかにしたように鼻を鳴らした。

「そうか？……残念だな。折角食事を持ってきたが、無駄になりそうだな」

「！」

ぎょっとする志真を横目で見ながら、ユーイはドアに向かって告げた。

「ジェレミー、食事は必要なくなりそうだ」

「待て！」

「……待て？」

「ま、待つてください？食事、いります！」

く、屈辱……！

爆笑しているユーイを見て、志真はぎりぎり歯を噛み締めた。

しかし、本当に我慢できない程空腹なので仕方が無い。良く考えてみれば、昼食も伊吹達を見る方を優先させていた為に、菓子パンみたいなものくらいしか食べられなかった。

その後で、全力疾走してカロリーを消費してしまったし、お腹が空くのも当たり前だ。

満足いくまで笑った後、漸くユーイは外の人を呼んでくれた。

机の上に並べられた黄金色のスープに、細かく切った野菜炒めが乗ったぱりぱりに焼いた鶏肉。魚のフライ卵ソース掛けにチーズの入った丸いパン。

最高です。

空腹だったせいかやたら美味しく感じる。丁度良い塩加減、繊細で上品な味付け。それをもりもり食べる志真の姿は、上品とは程遠かったに違いない。

食後のお茶を飲んで、ようやく志真は一息ついた。

「……どれだけ飢えていたんだ」

「見ていて気持ちのよくなる食べっぷりですね」

「そうか？俺はむしろ気持ち悪くなった」

ユーイと話すもう1人は、食事を運んでくれた人だ。改めて見ると美形である。背も高いし、スタイルも良い。灰青の瞳も綺麗だし、口元のほくろがセクシーだ。フェロモン系。いかにも女の人を誑し込んでいそうな感じだと思うのは、偏見だろうか。

見ていることに気がついた男は、志真に向って微笑んだ。

「食事は満足していただけましたか？僕はジェレミー・ニス・ホークといいます。以前から貴方の話を聞いて一度会ってみたかったですよ」

「話？」

「ええ、このユーイ様や、ウィガーから」

その2人からという事は、きつとろくな話ではない。思わずじと目でユーイを見ると、ふんと鼻で笑われた。

「さて、無駄話はそれくらいにしろ。食事が終わったなら、取調べを再開する」

え。

思わず志真は固まった。

「あんたが？」

「じゃなかったら、何で態々俺がここに来ていると思う。お前の愉快な顔をわざわざ眺めに来るほど、俺は暇でも酔狂でもない」

相変わらずムカつく事を言われている気がする。むっとしたところで、まあまあとジェレミーが間に入った。

「今回の事件、魔法に関わる事が出てきたので、私達が借り出されたんですよ。他の件でも少し気になることがありますし」

「まほう？」

「そう、この世界に魔法使いの数は多くないですからね。狭い世界なんです」

ゆっくりと丁寧に喋ってくれるジェレミーは、非常に感じが良い。それにしても魔法に、魔法使いか。そういえば、ラスカウルがユイの事を魔法使いだと言っていた。

「じゃ、いつさんとミルラ、ぱって消えたのは」

「転移魔法ですね。非常に高度な魔法なので、使える人間は限られます。その辺りから、犯人に繋がる情報が得られるかもしれませんが」

「どんな奴だった」

気がつけば、酷く真剣な目で見られていた。

「どんなって……女の人。小さかった、けど大人？髪は……」

何色だったっけ。何せ一瞬のことだったしな。言葉を詰まらせる志真に、ユイは苛立った様子を見せた。

「良いから日本語で話せ」

「え」

「聞き取りくらいは俺にも出来る」

何それ聞いてないんですけど。いつから！？目を丸くする志真に、ユイは早くしろと短く告げた。

「えっと、じゃあ……髪の毛は明るい色だったと思う。黒とかじゃなくて、でも金髪とかでもなかったかな。茶色？ふわふわしてた。これくらいの長さで」

右手を使って肩の辺りを示す。

「小さかったのは間違いないよ、いっさんが大きく見えたもん。後、細かった」

「目の色は？」

「……何だろ、覚えてないや」

何度も言うけど、一瞬のことだったのだ。服装だっではっきり思  
い出せない。

「あ、でも」

ひとつ引つかかることがあった。

「何か最後にさ『じゃあね』って言われた気がするんだよね」

日本語で「じゃあね」？それとも同じような言葉がこちらにあっ  
て、聞き間違えたのだろうか。

がたん、と大きな音を立てていきなりユーイが立ち上がったので  
吃驚する。

見たことも無い険しい顔をしたユーイに、志真はどうしたの、と  
いう言葉を飲み込んだ。ぐっときつく眉根を寄せて、目の奥に困惑  
とも怒りともつかない色を乗せて手元を睨んでいる。

「冗談、だろ」

「な、何……？」

何か拙い事を言った？そんな事ないよね？困惑してユーイの隣の  
ジエレミーを見上げると、苦笑を返された。

「どうやら、シマの見たという女性は、僕達の良く知っている人が  
もしれません」

「え」

「ナナミ・ルルルイエ。日本人を祖父に持つ、魔法使いで異世界研  
究者でもあった女性ですよ」



### 志真と異世界人連続誘拐事件 3

七海・ルルルイエ。

生きていたのか。

それを喜ぶべきか、嘆くべきか。生きていたなら、きっと厄介な事をしでかすに違いないと思っていた。その予感はどうやら的中していたようだ。

おそらく、各務吹雪を匿っているのは彼女だろう。

そして一連の異世界人失踪事件に関わっているのも。既に18人の異世界人が姿を消している。伊吹も加えるなら19人。自ら姿を消したにしても、目撃情報が全く出ないのはおかしい。転移魔法が関わっているのでは、とその可能性が示唆された時に、真っ先に思い浮かんだのはやはり彼女の事だった。

ユーイの知る限りでは、その魔法を使用できるのは七海と、ユリウスの2人だ。ユリウスの仕業と考えるのは無理がある。どう、考えても怪しいのは七海だった。

こんなの、許せない

そう言っただけ姿を消した彼女が何をしようとしているのか。ユーイ・ユーイは憂鬱だった。

\*\*\*

取調べを終えると、宿屋へ帰ることができた。たった1日で色々な事がありすぎだ。もうお風呂に入る気力もない、さっさとベッドに入って休みたい。

そんな気分だったというのに、そうはいかないようだった。

「おかえり、チーグーちゃん」

相も変わらず暑苦しい笑顔で迎えてくれるクリスティアン。さあおいで、とばかりに広げられた両腕に、ツツコミを入れる気力もないのだ残念ながら。お願いだから休ませてくれい。

しかし、彼の事は余裕でスルーできるけれども、その隣で不安そうな顔をしているフィオーネは無視できない。(いっさんめ！)

ユーイ達の話だと、異世界人連続誘拐事件とやらに関わっているかもしれないという。だから、もしかしたら伊吹は被害者で悪くないのかもしれない。

……でも、いっさんは自分で逃げるとか言ってたし。

本当にどうなっているんだろう。ミルラは大丈夫なのだろうか。

空気を読まないクリスティアンに押されて、彼の部屋にて話をする事になった。フィオーネの他にもう1人、見慣れないようで見ただことのある男の人だ。

細身で短髪の中性的な美青年……？顔だけ見たら、女の人で通りそうな感じだけど、決してなよなよしているわけではない。どっちかっていうと、男っぽい雰囲気を漂わせている。

彼の名はジウドウル・ラクリエル。

ミルラの兄だと紹介された。言われて見れば似ているような。

「さて」

と、切り出したのは、やはりクリスティアンだった。

丸いテーブルを囲んで、右にフィオーネ、左にジウドウル、正面にクリスティアンという布陣。

「一体何があったんだい？話してくれたまえチーグーちゃん」

何か、尋問再びって気がするのはいのせい？

何度も話したお陰なのか、志真にしては解り易く簡潔に説明をする事ができた。植物園で志真が目にした事、伊吹の言った事、それからユーイ達から聞いた異世界人連続誘拐事件について。

只一つ、七海という女性については喋る事ができない。

他に漏らすなとユーイから口止めされているからだ。

「異世界人連続誘拐事件って、俺の妹は異世界人じゃねえんだけど。何であいつまで」

「イブキに対する人質とも考えられるけど、この場合、どうやらイブキ自らミルラ嬢をつれて行っているようだからねえ。となると、どうなるかな」

え、何どうしたの。

珍しく真面目に考えているっぽいクリステイアンの姿が、いつになく頼りになる存在に見える。……疲れているんだろうか。

「我が友は臆病で慎重な男だから滅多な事は仕出かさない筈なのだが」

「……ほお。随分かつてるみてーじゃねーか」

「当然ですとも。愛情は無限、されど友情は有限です」

「……すまねえ、意味が分からねえよ」

ミルラ兄に同意する。

「ラクリエル家のご隠居の目は確か。彼に切られない限りは、私とイブキの熱い友情も終わる事は無い」

いや、その友情ってかなり打算的じゃないか？

熱いんだか冷たいんだか。

「この状況においても、未だご隠居は動かれていない、という事は「何だよ」

「ここがイブキの正念場になるだろうね。恐らくご隠居は見極めようとしておられる筈。彼が、本当にミルラ嬢の夫に相応しいか否か」

何だか良く分からないけど、大変な事になっっているみたいだ。ねーよ、って小声でミルラ兄がぶつくさ言っているのが気になるけども。

志真はちらりとフィオーネの様子を盗み見た。先程から黙ったまま、何かを考えている様子。その気持ちを思うと、胸が痛む。

志真だって伊吹達の事は心配だ。

でもきつと、フィオーネはもつと辛いに違いない。

「フィオーネ、平気？」

「……うん、大丈夫。イブキさんとミルラさん、戻ってくるわよね？」

「勿論だとも！」

志真よりも早く、クリステイアンが高らかに声を上げた。

「イブキは、遣り残した仕事を残していくような男ではありません。必ずや、ここに戻ってくるでしょう。このクリステイアンが保障します。だから、そのような悲しい顔をする必要はありません。貴方にはそのような顔似合いませんよ、フィオーネ」

さりげなく口説くな。

真面目なのか不真面目なのか分からない（いつもの態度だ）のクリステイアンに、ジユドウルは苛立つ。

「そんな悠長な事言ってる場合か。ミルラが無事かも分かんねえ時に」

「あ、安全は大丈夫って、ユーイ言ったよ」

誘拐犯の正体が七海という人ならば、殺されたり痛めつけられたりするような心配は無いとユーイは言っていた。異世界人に悪意を持っている人ではない。どっちかというと、逆らしい。

「……ユーイさんが。でも本当にそうなのかしら」

ユーイの保障では、フィオーネの不安は拭えないようだ。

「フィオーネ」

「1つ気になっっている事があって」  
言うか言うまいか迷っているような様子を見せた後、フィオーネは言った。

「イブキさんは何故こてつを置いていったのかしら」

え、そこ？

「動物禁止、とか？」

伊吹は動物を可愛がるようなタイプには見えないし、構っている暇はないって思ったのかもしれない。どちらにしても、志真には大したことは思えなかったのだが。

「グイーダは敵対者に反応するからね」

とクリステイアンが言えば、フィオーネは思案顔で頷いた。

敵対者、つて。

教会での出来事は、志真にとっては忘れられない記憶である。

「伊吹には1人兄がいたらしいのだよ。一緒にこちらへ来てすぐに、死んでしまったらしいが。実は生きているという話もあるようだね」  
何それ、初めて聞いた。

伊吹に兄がいたことも、一緒にこちらへ来たことも、更に、死んだって……。

「その兄が敵対者に憑かれているという噂だ」

なんだって。

そんな事、一度も伊吹は。

「い、いっさん、それ知ってる？」

「さあね。でもイブキが知らないとは、私には思えないが」  
志真にも思えなかった。

「じゃあ、やっぱり……」

「イブキはその兄のところへ行つたのかもしれないね。しかし、分らないのはミルラ嬢のことだ。彼が何の関係もない彼女をわざわざ巻き込むとは思えない。その辺りに、まだ何か秘密があるような気がするよ」

大丈夫だ、とユーイは言ったが。

本当に大丈夫なんだろうか。

## 菊乃の後悔

この世界に来て色々あったけれども、立て続けに起きた不幸な出来事は一旦収束して、現在は悪い夢でも見ていたのかなと思ってしまうほど、平和な日々が続いていた。もしかしたら、こっちが夢なのかもしれない。

どちらかというところ、そちらの方がありそうな話である。

施設の人の態度もぐっと親切になったけれども、何となくまた余計な事をしてしまいそうな気がして、あんまり外出はしていない。時々、日が暮れてから施設内の庭を散歩するくらいだろうか。

そんな引き籠もりがちの菊乃のところへは、毎日誰かしら来客があった。義務的に様子を見に来ているわけではなく、どうやら自主的に来ているらしい。

大抵いきなり来ては、適当に喋って帰っていく。そんなわけで、部屋に引き籠もっている割には、色々な情報が入ってきていた。

結果、こここのところの平穏さ加減について気を緩めそうになっていたけれど、やはりそれではいけないと思うようになった。

各務伊吹が失踪したと聞いて。

今のところ、誘拐、又は脅迫されて連れて行かれたという線を疑われているらしい。同時に彼にはお金持ちのお嬢さん誘拐の容疑も掛けられているとか。

何だかややこしい話だった。

その話を菊乃に教えてくれたのは、ジェレミーとジャンナだ。別々の時間にやってきた彼らの話は、少しづつ違うところもあったけれど、大筋は一緒だった。

特にジェレミーから齎された情報が、菊乃の頭を悩ませる結果と

なっている。

伊吹とお金持ちのお嬢さんを連れ去ったとみられている謎の女性。その人物である可能性が高いと言われているのが、

(七海・ルルルイエ)

………何か、どこかで聞いた事のある名前だ。

忘れていたわけではない。特に思い出すこともなかったけれど、聞いてすぐ思い至ったくらいだ。ただ、その人を知っているとは言い出せなかった。同一人物だとの証拠は無い。それでもちよつと変わった名前だし、そんな偶然は無いような気がした。

同じ人かもしれない。

そう思っただけでお言えないのは、彼女の言葉がひっかかっているからだ。

嘘つきなこの国に騙されて利用されないように。

そんな意味深なことを言っていた。

彼女か、この国か。一体どちらを信じれば良いのか。未だ菊乃には判断がつかない。

悩んでいる内に食事を疎かにしたのがいけなかったのか、体調を崩して熱を出してしまった。

「何をやっている」

呆れたように見下ろされている。

偶然にも、同じ事を思っていた。何をやっているんだろう。熱のせいで幻でも見ているのかとも思ったが、何度瞬きしてもそれは消えたりしなかった。



無表情にベッドの菊乃を見下ろす、銀髪の青年、ハイネス・ユーク。

目にかかる程伸びていた髪を切って、すっきりした印象になっていた。何だか若返ったようである。そういえば、幾つなんだろう。ぼんやりとそんな事を思っていると、不意に手を伸ばされた。

熱を測ろうとしたのか、伸びてきた大きな掌は、菊乃の額に触れる前に止まり、引き返していった。

「……顔が赤い」

嘆息しながらそんな事を言われた。

「どうして、いるの」

「……熱を出したと聞いた」

答えになっっているような、いないような。

それとも熱のせいで頭が働いていないから、分からないのだろうか。

「何かあったのか」

質問の意図が分からなくて、菊乃はハイネスを見返した。

「ここのところ、食欲がなかったらしいな」

心配されているのかと、錯覚してしまうような静かな問いかけだった。そんな筈はないと思うのに。

やはり夢なのかもしれない。

そういえば、看病についていてくれているハルラックの姿が見当たらなかった。部屋に視線を彷徨わせると、ハイネスが言った。

「ハルラック・エジは氷と水を貰いに行った。直に戻る」

僅かに眉を寄せて、ハイネスは一步菊乃から距離を取った。

「戻れば、行く」

やや不機嫌そうな声にはっとする。もしかして、彼はハルラックの代わりにここに呼ばれたのだろうか。1人にされても全然構わないのだが、ここのところ妙に過保護にされてしまっている。

そのせいで、またハイネスに迷惑を掛けてしまった。

「ごめんなさい」

謝罪など、何の足しにもならないだろう。その証拠に、一層空気が重くなった。

(何やっているんだろう)

ここどころ、甘えていた自分を猛省する。落ち込んで、体調管理もろくにせず、拳句の果てには熱を出すなんて。自分の事ばかり考えていた。これではいけない。もっとしっかりしないと。

「これからはちゃんとして、ハイネスさんにも迷惑掛けないようにしますから……」

から、の先は続かない。熱に浮かされるように、言わなくても良い事を言った。菊乃を見つめていたハイネスの冷ややかな紫の瞳が、僅かに見開かれる。

「……俺は、お前に迷惑を掛けられた覚えはない」

逆だろうと言われて、菊乃は戸惑った。逆？

(どういう意味?)

分からなくて、菊乃はじっとハイネスを見上げた。同じように戸惑っているようなハイネスが再び口を開こうとした時、邪魔が入った。

軽いノックの音と共に「僕です、入りますよキクノ」との声。

この声は、ジエレミーのものだ。

ドアが横にスライドすると同時に、ジエレミーが室内へと入ってくる。その背後に、ハルラックの姿も見えた。

「熱を出して寝込んでいると聞いて、随分心配しましたよ。具合はどうですか?どうぞ、これお見舞いの花」

そう言って差し出された切花は、既にまるっばい形の花瓶におさ

まっている。オレンジ色の可愛らしいパンジーみたいな花と、黄色と白の小さな花。見ているだけで、元気が出てきそうな色合いである。ふわりと甘い香りが漂ってきた。

「ありがとうございます」

「この部屋は少々殺風景だと常々思っていたんですけどね。これからは毎日花を持ってきますから、楽しみにしててくださいね」

何か、『毎日』を強調されたような気がするの、気のせいだろうか。

(暇なのかな……)

ベッドの横の台に花瓶を置き、ジェレミーはふとハynesを見た。にこりと笑う顔が怖い。

「おや、ハynesさん。まだいたんですか」

棘のある言い方にぎよっとする。そういえば、ジェレミーはハynesのことをあまり良く思っていないようだった。あまり近づくなとも警告された気もする。

「ご苦労様でした」

「……………」

そんなジェレミーに対して、ハynesも冷ややかな視線を返す。

「キクノ、新しい氷枕だ。交換するから少し頭を起こせるか？」

そんな中、ハルラックは我関せずと菊乃の世話を焼く。何だかわけの分からない事になっている。

頭の下冷たさに反して、熱が上がりそうな予感がした。

「ジェレミーさん……………」

「何かな、キクノ」

「伊吹さん、見つかりました？」

一呼吸置いて、ジェレミーは苦笑した。

「まだだよ、キクノ。もしかして、熱の原因はそれなのかな」  
当たっているようで、違う。

「駄目ですよ。心配する気持ちは分かりますが、それで貴方が体調を崩すのは」

「違います」

だから、そんな風に甘やかされるのは苦しい。もう、黙っている事はできなかつた。優しくしてくれるのに、それを信じる事ができないのが苦しくて。

「私、ナナミさんという人に会ったことあります。ずっと、言えなくて」

「ごめんなさい。」

菊乃の謝罪に、ジェレミーは目を細めた。

「いつ、どこで？」

「教会の地下にいた時に。だから、顔は分かりません。私に逃げるように言ってくれた人がいて、その人が名乗ったんです。ナナミ・ルルリエと」

ようやく、言えた。

しかし気持ちは晴れることはない。

言っても言わなくても後悔する。

伊吹を連れ去ったかもしれない人。しかしその人は、確かに菊乃を救ってくれた人だった。

## 伊吹、仁義無き兄弟の争いを再開する 1

話し合いではなく暴力で。

伊吹は常々それで片をつけようとすする野蛮な輩を見下してきた。その筆頭が彼の兄である吹雪である。何かつて言つとすぐ手が出る。口では敵わないからといって、力で相手を打ち負かそうというのはあまりに愚かな行為だ。

それは己の正しさの証明にはならない、決して。ただ鬱憤を晴らす為だけの行為。

(…………殴りたい)

しかし今、伊吹はそんな衝動と戦っていた。

あの日、ミルラを探す伊吹を誘導する声の指示で、危険植物館に向った。嫌な予感があったがそうするより他になかった。そもそも相手がどうやって伊吹に話しかけているのかすら分からないような不可思議な状態で、下手な行動は取れない。

やらかしてしまった時に危険になるのは、伊吹ではなくミルラだ。緊張しつつ足を踏み入れた館内には、全く客がいなかった。いくらデートに不向きで不人気な館だろうと、普通ではない。進みたくない気持ちを何とか抑えて歩いた。

出来るだけ怯えている事を悟られないように気をつけて。

(大丈夫だ、護衛がついて来ている筈)

その過信が誤りの元だった。

向こうは伊吹に護衛がついていることを知っている。当然手は打つてあるのだった。伊吹には全く理解できそうにない、ファンタジーな手が。

まあそれは良い。

館の半ばまで進んだ辺りでミルラを見つけた。

まず目に入ったのは砕け散ったガラス。大きく穴のあいたガラスの壁へと目を向けて、その向こうに倒れているミルラを見つけた。ぎよっとした。

「ミルラ」

一瞬死んでいるのかと思った。駆け寄って息があるのを確認して安堵したが、肩を叩いても名前を呼んでも起きる気配がない。

「暫くは起きないよ」

再び耳元に聞こえてきた声に、伊吹は眉根を寄せた。

「そのコ、敵対者に寄生されてるから」

「……は？」

一瞬、何を言われているのか分からなかった。そんな伊吹を声は笑う。

「少し遅かったね。もうそのコは手遅れだよ。敵対者なの」

遅かった、って。

どういう意味だ。敵対者に寄生されている？脳裏に過ぎる、地下で見た化物の姿。盗まれたウィルドの炎。教会に出たという『敵対者』。

「嘘だ」

考えを纏めるよりも早く、否定の言葉が出ていた。

「どうしてそう言える？」

「有り得ない」

「そうかな」

「姿も見せない奴のいう事なんか、信じられるか」

「信じたくない、が正解だよ。カガミ・イブキくん。あたし達はずっとね、敵対者について研究してきたんだよ。それで分かったこと、できたことがいくつもあってね。分離と、分解とある程度の制

御までは可能になってる。進行は、遅らすくらいしかまだ出来ないけどね」

嘘だ。

見下ろすミルラは、無邪気な寝顔を晒している。安らかに眠っているようにしか見えない。何も変わったところは見当たらなかった。

「首の後ろ、触ってみて」

まるで、伊吹の思考を読んでいるかのようなタイミングで、声が出る。反発心を思えたが、結局は手を伸ばした。ほんの少し頭を持ち上げて、首の後ろに触れてみる。硬い何か石のようなものが手に触れた。

ひやり、としてすぐに手を引き抜く。

「それが敵対者の核だよ」

嘘だろ。

「よおく考えてみてよ。そこにいたらそのコがどうなるのか。大丈夫、時間はあげるよ。暫くはココ、誰も入って来られないようにしてあるから」

気が動転していた。信じられなかった。そこへ、志真が来たのだ。今考えると、最悪なめぐり合わせだった。

人を騙そうとする時の条件として、考える時間を与えないというのがある。志真が、第三者がそこに来た事で、伊吹は見事に追い詰められた。

敵対者に寄生された者を救う手立ては、無い。

他に犠牲が出る前に、始末される。殺される、それが当然の判断だと伊吹は思っていた。今も思っている。誰だって犠牲の少ない方を選ぶ筈だ。だが。

ここにこのまま残れば、ミルラは殺される。

伊吹には、それを良しとは出来なかった。

(……………うつつ)

そんな自分を振り返って、伊吹は悶絶した。

(嘘、だと……………それが、嘘だとオ！)

あっさりと告げられた企みに、流石の伊吹も落ち着いてはいられなかった。

用意周到に首の後ろにそれっぽい石まで貼り付けやがって。

良かった……………ミルラは敵対者に寄生されてなんかいなかったんだ！

とか素直に喜べるような状況ではない。勿論、良かった事は良かったのだが、が。

(……………くそ)

いや、本当に冷静に考えれば……………あの時にだって半信半疑だったのだ。ただ完全には否定できず、その上雰囲気にも飲まれてしまった。

まんまと罠に嵌ってしまった自分に落ち込むやら、あまりに卑劣なやり口に腹がたつやら、暴れたくなる気持ちや何とか抑えている伊吹の隣で、ミルラはむっつり黙り込んでいる。

俯いて、自分の手に穴があくんじゃないかという程の熱視線を向け、ぐつと口元に力を入れてへの字を完成させていた。

あきれ返っているのかもしれない。

伊吹の判断ミスで、ミルラまで妙なことに巻き込む結果になったのだ。

(……………終わり、だな)

例えここを脱出できたとしても、こんな騒ぎに彼女を巻き込んだ



以上、伊吹も無事ではいられないだろう。婚約破棄だけで済めば良いほうで、最悪社会的に抹殺されるかもしれない。

伊吹は再び暴力的な衝動に駆られつつ、正面で明るい笑顔を見せる女に目をやった。頭も手足もやたら小さく華奢にできている、いかにも活発そうな女性だ。

七海・ルルルイエ。

伊吹を畏にかけ、ここへ連れ去った張本人。……というか、ここは一体どこなんだ。未だそれすら知らされていない。二段ベッドのある狭い部屋で、窓はあるが外側から蓋がしてあって、見られないようになっている。

反対側には鉄格子。

部屋の中は廊下から丸見えで、プライバシーとかあったものではない。どこからどうみても牢屋だった。

ベッドが無い側の壁にあるドアの向こうは、トイレと洗面台と風呂が設置されていた。暫くここで生活しるとでもいうのだろうか。男女混合で？

言いたい事は色々あるが、伊吹は鉄格子の向こうの七海を睨みつけた。

「目的は何だ」

ん？とばかりに首を傾げる。黄色の長袖のシャツに、カーキ色の妙に膨らんだショートパンツ姿の女性は、子どもにこそ見えないが大それた事を企むような者にも見えない。精々下っ端の使い走りといったところか。

「お前達のボスは？話ができるなら、したい」

そう言つと、七海は目を丸くした後けらけらと笑った。

「してるよ、ボスはあたしだよ」

「は？」

「ノロイ103号の艦長でボスをやっているのはあたし、七海・ルル

ルイエだよ。よろしくね」

「……本気で言っているのか？」  
信じられない。

「ボスがのこのこ俺たちを攫いに出たのか？」

普通、そういうのは部下の仕事じゃないのか。

「だって、その方が確実に早いから。あたしくらいしか、転移の術は使えないしね」

どうやら、本気で言っているようだ。まだ疑わしいが。

「……だったら聞くが、何故俺達をここへ連れて来た」

にっこりと、七海は笑う。

「フブキの為だよ」

「……また、またお前か。」

いつもいつもいつも、何だっぺこう、自分の邪魔ばかりしてくるのか。

(何で)

静かに怒りに打ち震える伊吹に、七海はゆっくりと首を横に振った。

「あんまりフブキのこと怒らないでね。頼まれたけど、作戦とか考えたのはあたしだし。フブキはなーんにも知らないから」

だからって、許せるか。

「俺が目的なら、何でミルラまで」

「あれ、そのコを連れて来たのは、そう決めたのは君だよ、弟君」  
「……そう仕向けたのは」

「その辺はね、あたしの個人的な好奇心。弟君は、フブキの事をあつさり切り捨てちゃったみたいだけど、そのコの事はどうするのかな」

猫のように目を細め、七海は凍りつく伊吹をじっと見つめた。

「知りたかった、知ってほしかった。ただそれだけだよ」

## 伊吹、仁義無き兄弟の争いを再開する 2

何なんだあの女は。

七海は言いたい事だけ言った後「忙しいからまた後でね」とのたまに去っていった。取った手法の卑劣さ、外道さを責めてみて「うん、知ってる」とか全く堪えていない様子。あれはもう駄目だ。情けや常識を期待できるような相手ではない。

手遅れだ。

そもそも、国家転覆を狙うようなテロリストに、常識を求める方が間違っていた。

改めてみても狭い部屋だ。金属の床に壁。天井も普通より低いよ  
うで、閉所恐怖症でないのが幸いといった感じである。壁にくっ付  
いた二段のパイプベッドに、2人掛けのソファと小さなテーブル  
が1つ。それでももういっぱいである。

ベッドがある側の壁には埋め込み式のクローゼットがついており、  
中には服や下着が何着か揃えられていた。一応、男物と女物で左右  
に分けられている。

伊吹は溜息を吐いた後、古そうな灰色のソファの上のミルラを  
見た。丁度こちらを見ていたらしく一瞬目があつたが、途端にぱつ  
と逸らされる。

途端に憂鬱な気持ちが増した。

何で、一緒なんだ。

こういう場合、普通は別々に監禁するだろう。繊細で微妙な年頃  
の男女を狭い部屋に閉じ込めるとか。まさか、婚約者だからと言っ  
ていらぬ気を使われているのだろうか。

先程の人を食ったような態度の女を思い出して、即座に否定する。

あれは、気を使うような殊勝な人間では無い。どちらかという人と遊ぶような手合いだ。

「……………」  
どんなに他に意識を持つていこうとしたところで、結局は無駄だった。この気まずい沈黙はいかんともし難い。謝って逃げるという行動すらも許されない監禁状態を、一体どうやって切り抜けるといふのだろう。

「ごおおお、と風なのか何なのか、非常に耳障りな音にもすっかり慣れてしまっていた。

伊吹は途方に暮れていた。

ミルラはこっそり顔を上げ、難しい顔で黙り込んでいる伊吹の横顔を盗み見た。眉間にくつきり刻まれた深い皺。切れ長の瞳で睨むみたいに鉄格子に向けている。

きつと、呆れているに違いない。

そう考えるだけで、泣きたくなった。

最初は。

何て意地悪そうな人なんだろうと思ったのだ。

聞いていた年よりも若く見える童顔で、白い肌も細い体もなんとも頼りなくて、これなら何とかかなりそうだと思ったのは最初だけ。はつきりしない口調や遠まわしな言い方に苛々したりもした。

気弱そうにへらへら笑うくせに、無遠慮に、こちらを観察するみたいな強い視線。

緊張している事、内心怯えているところを気づかれないように必死だった。ちつとも何を考えているのか分からない人だと思っただけ、種を使つての宿屋建て直し計画について話している時の伊吹はとても生き生きとしていた。

何だか羨ましい。

彼がする事を見てみたいな、と思った。

同時に、ただ結婚したくないという理由で、祖父に言われるまま彼から種を奪おうとしていた自分が恥ずかしくなった。

(口では意地悪な事ばかり言って、でもイブキは結局助けてくれる)

嬉しかった。

呆れられても、怒られても。伊吹はちゃんとミルラのことを見ていてくれた。ミルラの失敗を指摘して、怒ったり、呆れたりしながら時々笑う。その顔がミルラは好きだ。人の失敗を笑うなんて、いつも思うのだが、絶対一瞬見惚れてしまふ。

ほんの少し目を細めて、口元を緩ませる。

普段の伊吹からは考えられないような、優しく甘い微笑み。それを見るといつも背中がむずむずして、嬉しい気持ちになって、それから恥ずかしくなる。

その後で我に返って、失敗を笑うような伊吹の態度を怒るのだが、伊吹は大抵訝しげな顔をした。自分が笑ったことにすら気がついていないのだ、きっと。

伊吹が好きだ。

日に日にその気持ちは大きくなって、どんどん不安になっていった。婚約も結婚も、自分が押し付けたようなものだ。いつか。

もう付き合いきれないって言われるような気がして、怖かった。

(思えばずっと、イブキには迷惑ばかりかけていますもの)

だから、努力しようと思った。

一緒にいて良かった、一緒にいたいと思ってもらえるように頑張っていたが、空回るばかりで、うまく出来た試しはない。

どうしてこうなんだろう。

兄も姉も妹も、皆優秀でしっかりしていて、祖父の信頼も厚いのに、いつも自分だけがうまくできない。

(今日だって……)

トイレで姉に会った時は驚いた。兄が来ていて伊吹と話をしていて聞いて、いてもたってもいられなくなり、トイレの個室の窓から抜け出して……、実はそこから記憶がない。

だから、起きて全く身に覚えのない場所にいた時には驚いたし、混乱した。それでも落ち着いていられたのは、伊吹がそこにいたからだ。

一体何が起こったのか。

伊吹と先程の七海とかいう女性の話を総合して考えるに……。

(謝るのは、わたくしの方ですわよね……どう考えても)

伊吹は何度も謝ってくれたけれど、捕まって伊吹に迷惑を掛けたのは自分の方だ。

(イブキは、わたくしの為に)

ミルラのことを考えて、ここに来た。そう考えるとじわりと胸の奥が暖かくなる。同時に今の状態に落ち込んだ。

伊吹がこうして危険な目にあっているのは、自分のせいなのだ。

大人しくしていれば……いや、もっと強く姉や兄に対抗できていたら、こんな事にはならなかった。

きつと、もう呆れ果てたに違いない。

そう思うと心臓の辺りが冷たくなる。謝ろうと思うのに、その一言を発するには多大な勇気がいった。だが、言わなければ。決意して顔を上げると、伊吹がこちらをじつと見ていた。まともにぶつかった黒い瞳に、咄嗟に言葉が出なくなる。

張り詰めたような一瞬の間を置いて、口を開いたのは伊吹だった。

「次に誰かが来たら、部屋を別にしてもらおうように言いますから、少しだけ我慢していてください」

伊吹にしたら、考えた末の言葉だったのだ。

こんな狭い中で、男女2人きり……それも、面倒事に巻き込んだ張本人と一緒にいるのは、嫌だろう。婚約者というのだって所詮は建前みたいなものだ。ミルラにしたら、ギスニツチみたいな男との結婚から逃げる為の手段でしかない。

何とかここから連れ出すとか、絶対に守るとか、そんな難易度が高い嘘は吐いて安心させてやる事はできない。だが、部屋を変えてもらうことくらいはできるかもしれなかった。

伊吹なりの気遣いだ。

だが。

ミルラの大きく開いた瞳から、ぼろりと大きな涙が毀れたのを見て、伊吹は動揺した。固まる伊吹を他所に、次から次へと白い頬を伝って涙が零れ落ちる。

何だか、いつかも見たような光景だ。

「……………ミルラ？」

恐る恐る名前を呼ぶと、小さな肩が震えた。

「じ、ごめんなさい」

何故そこで謝る。

「ごめんなさい、わ、わたくしのせいで」

その言葉で気がついた。ミルラはずっと怒っていたわけではなく、怯えていたのだと。



(……………なんで)

そう思うのだ。

向こうの狙いは最初から伊吹で、ミルラはそれに巻き込まれただけだ。

(俺が悪い……………いや、それも違う)

泣くミルラを見ていたら、頭が冷えてきた。違う、断じて違う。悪いのは自分でもミルラでもない。

「ごめんなさい」

「謝るな。……………ミルラは悪くない。悪くないのに、謝る必要は無い」  
「で、も」

「俺ももう謝らない。謝るべき人間は他にいるのに、俺達が謝るのは変だ。だから……………」

驚いたような顔で、ミルラは伊吹を凝視している。

「だから、泣くなよ。……………俺は、別にミルラの事を怒ったり、責めたりする気持ちは無いし……………謝られるのも、泣かれるのも、困る」  
「……………イブキ」  
「泣かれたら、どうすれば良いのか分からな……………分かりません、の  
で」

しまった。

気が動転しすぎて言葉遣いが。その上、さりげに呼び捨てにってしまった。伊吹は頭を抱えなくなった。

### 伊吹、仁義無き兄弟の争いを再開する 3

よし、落ち着いて軌道修正を図ろう。

伊吹は自分の失言を誤魔化すように、埋め込まれたクローゼットを開けてタオルを探し出し、ミルラに手渡した。

「あ、りがとうございます」

しゃくりあげながら受け取ったミルラは、白いタオルに顔を埋めて小さく息を吐く。どうやら泣き止んでくれそうなことにほっとした。

こういう時になんと声を掛ければ良いのか分からないが、妹を持つ兄としての経験上泣いているところに声を掛けると、余計泣く。それが一般的なのかは分からないが、伊吹はその経験にしたがつてそっとしておくことにした。

話をするにも、落ち着いてからにするべきだ。さりげなくミルラから視線をずらそうとした時に、「イブキ」とくぐもったような声が追ってきた。

「……………怒っていないのですら」

「はい？」

「どうして部屋を別にしてもらおうとか、言っんですの」

どうしてって。

泣きはらした真っ赤な目でこちらを見上げるミルラは、まるで捨てられようとしている子犬のような顔をしていた。う、と言葉に詰まる。

何だその無防備さは。

ミルラにとっては、伊吹等意識するほどの存在ではないのかもしれない。

そう思うと余計に居た堪れなくなる。年頃の男女が狭い部屋に2人という状況を、意識し過ぎているのだろうか。だけど意識するなというほうが無理だろう。身近な異性なんて、妹達くらいしかいなかった。流石にミルラを妹達のようには見られない。

「相手の出方が分かりません。一体いつまでこの状況が続くのかも。俺は男で、ミルラさんは女です。何日もこんな狭い部屋で2人というのは、ちょっと問題あるでしょう」

「男と、女……それが問題、ですか？」

それすらも意識していなかったのか。箱入りというか、そもそも伊吹を男として意識していないのではという予想が、現実味を帯びてきた。

（馬鹿らしい）

こうなってくると、結婚だの、婚約だの馬鹿馬鹿しいにも程がある。あれこれ振り回されただけに苛立ちが募った。……まあ、どうせそんな事だろうとは思っていた。決して甘い夢など見ていない。断じて。

（……本気にする方が、馬鹿で）

少しばかり嗜虐的な気持ちになっていた。分かっているのなら、分かってもらう。

「……俺も男ですから。ミルラさんを襲わないとは断言できません」  
すると口から出てしまったのは、明らかに失言だった。

「お、おそ……う？」

白い頬がぱつと赤く染まる。正直、言うてから後悔した。取り消せるものなら取り消したい。

「いや……今のはあくまで」

「襲っちゃうなんて、さ。やー、弟君、君大人しそうな顔してなかなかやらしいのね」

「！」

よりもよって何というタイミングで何という事を言うのだ。声の主は勿論ミルラでは無い。

伊吹は声のした方、鉄格子の向こうの廊下を振り返った。そこにまにましている七海の姿を見つけて、思わず舌打ちしてしまう。

一体いつからいたんだ。用があるのではなかったのか。

「いやー、中々声掛けづらい雰囲気だったよ、修羅場かと思ったら痴話喧嘩にもなんないかわいいやりとりでさ」

「何の用だ」

「冷たいね。折角食事のこと忘れてたと思って戻ってきてあげたのに。感謝して欲しいな」

「そもそも忘れるな。」

「でもまあ、そうだよな。弟君も年頃の男の子だし、可愛い女の子と2人きりは気まずいよね。なかなか可愛いところあるんだね」

「……煩い。人の言葉を曲解するな」

「こっちも気が利かなくてごめん。すぐに部屋の方は用意させてもらうよ」

「駄目ですわ！」

と、即座に意義を唱えたのは、勿論伊吹ではない。

ソファーから立ち上がったミルラは、真っ赤な顔で意を決したように両手を握り締めている。

「わ、わたくしはイブキの婚約者ですわ……」

その時点で、何やら嫌な予感はした。

「で、ですから、イブキがわたくしを、その、お、お、お、襲つても問題ありません！」

一体何を言っているんだお前、は！

この上ないほど全身赤く染まった状態で、ミルラはきつと伊吹を睨みつけている。

背後でけらけら笑う七海の声がむかつくが、それに対して怒る気力もわかない。伊吹は、くらりとする額を押さえた。

正直ミルラを甘く見ていた。

何故いつも、こちらの想定外の言動を返してくるのか。今まで伊吹の周りにいた女共ならば、先程の発言にはドン引きするか笑うか罵るか馬鹿にするかだ。間違っても「襲っても大丈夫！」的な返しをしてくる奴はいない。

緊張した面持ちで、こちらの言葉を待っているミルラに、伊吹はため息を吐いた。

「……………全く、何でいつもそうなんですか。聞いているこっちが恥ずかしい」

「なっ！さ、先に変な事を言ったのはイブキですわ！」

「本気で言ったわけじゃありませんよ。もう少し危機感を持ってほしくて言っただけですので、本気にされたら困ります」

「……………とか言いつつ耳まで真っ赤だね、イブキ」

「あんたは黙ってる！」

怒鳴れば益々爆笑された。

正直殴りたい。女だろうとな。

「で、結局どうする？」

一頻り笑った後、七海が聞く。

「何を？」

「部屋だよ、部屋。別？それとも一緒？」

「当然別でお願いします」

「イブキ！」

責めるようなミルラの声はスルーする。これ以上、振り回されて溜まるか。そう固く決意するが、イブキ、と継るような声に思わず言葉を止めてしまった。

「行かないで、1人にしないでください」

消え入りそうな声だったが、それはしっかりと伊吹の耳に届いた。はっとする。

伊吹がどうのというより、1人になる事が怖かったのか。

まあ、そうか。こんなわけの分からない場所に、1人取り残されるのは不安だろう。伊吹は狭い中2人きりという状況ばかりを気にしていた為に、そこまで気が回らなかった。(そんな場合でも無いな、確かに)

「どうするの?」

答えをもう知っているみたいだな、七海の笑顔は気に障るが。

「分かりました。……部屋はとりあえずこのままという事で」

こんな事にミルラを巻き込んでしまった以上、彼女を守る努力はしなければならぬだろう。できるか、できないかは別として。

そのためには、確かに傍にいた方が良い。

そう自分に言い聞かせて、結局振り回されている事実を目を瞑ることにした。

「じゃあ、このままで。うん、こっちとしても手間が掛からないし助かるよ。ハイ。これ朝食ね」

鉄格子の下の開いている部分から、パン二つづつとパックの飲み物が載ったトレイを滑り込ませ、七海は再び立ち去ろうとした。

その背に慌てて声を掛ける。

「おい」

無視して行くかと思ったが、七海は足を止め、顔だけこちらに向けた。

「何かな」

「あいつに……吹雪には会えるのか？」

七海は不思議そうに伊吹を見つめる。

「あれ、会いたいの？」

「あいつが元凶なんだろう？ だったら会って直接話をつける」

会って話し、何を考えているのか知らなければ、この状況を打開する術を見つけることもできない。

正直に言っ、敵対者に寄生されているという吹雪と会うのは気が進まないが。

そんな事を言っている場合でもないだろう。

どの道、ここにいる以上危険は避けられないのだ。

## 伊吹、仁義無き兄弟の争いを再開する 4

各務吹雪。

伊吹にとつては疫病神であり、目の上のたんこぶであり、兄である男。

「会わせるのは良いけど、約束してもらおうよ」

右側の眉を上げるようにして、七海はシニカルな笑みを見せた。

「隙について吹雪を傷つけたり殺したりしないこと。危ないからね」  
誰がそんな無謀で野蛮な事をするか。付け加えられた意味深な言葉も引つかかる。その危ないというのは、伊吹に対する忠告だろう。

「それからね、フブキには敵対者に関する話はしないように」

「……教えていけないのか」

「病気つてことにしてあるから。ま、そう遠くもないしね」

それで、納得しているのか。

(……まあ、あいつは単純だし、深くは考えないかもしれないが)しかし、こちらへ来てそろそろ5ヶ月は経つ。敵対者に寄生された者は、じわじわと体や意識を乗っ取られていくらしいが、そろそろ危ない頃では無いだらうか。

真実を報せずに匿っていたとしても、先は無い。

「あんだ、あいつをどうする気なんだ」

鉄格子の向こうで、七海は猫のように目を細めた。

「助けるよ。絶対に」

どうしてだ。

会えるように調整して来ると言い残して去っていた七海の言葉を思い返して、伊吹は眉根を寄せた。異世界から来た、何の関わりも



ない人間。助ける義理なんて無い筈なのに。

兄弟である伊吹が見限っていることを、暗に責められているような気がするの、やはりどこかで罪悪感があるからかもしれない。脳裏をちらつくのは、向こうに残してきた家族や、こよりの顔だ。もしも一緒にここへ来たのが、吹雪でなかったら自分はどのようなのだろうか。

考えるまでもなかった。伊吹の答えは隣にいるミルラが証明しているようなものだ。

「……………」

ちらりと目を向ければ、七海が持つてきたパンを食べるミルラの姿がある。先程泣いたせいで目元が赤いが、すっかり元気を取り戻したようだ。状況は全く好転していないにも関わらず、安心しきっている様子。

その姿に、自分に対する信頼を嫌でも気づかされてしまう。迷惑だと思いつつも、それだけではない複雑な感情がある事を、敢えて見ないふりをした。

「ミルラさん」

ぱくり、と小さな口で上品にパンを食べていたミルラは、青い目を伊吹に向けた。

「話してなかったと思いますけど、吹雪というのは俺の兄です」

そう切り出すと、ミルラは手で口元を押さえつつ、一生懸命に口の中のものを飲み込んだ後、こう言った。

「知っておりますわ」

「……………」

「調査資料にありましたもの」

その調査資料とやらを、一度見る必要があるようだ。

「他にどういった事が？」

「えっと……………」フブキという方は、こちらへ来た後に事故で死んだと

思わて処理されていたけれど、どうも生きているらしい事が判明した。後は、その……敵対者に寄生されている可能性が高いという事も」

伊吹の顰めた顔を見たミルラは、落ち込んだ顔でごめんなさいと小さく付け加えた。

別に怒っているわけではない。確かに人の個人情報の色々見られていた事は気に食わないが、今更言っても仕方のない事だ。

「説明の手間が省けて良かったです」

と、いう事にしておこう。

「そういうわけなので、吹雪との話し合いには俺1人で出向きます」  
安心しかけたミルラの顔が、驚きの色に染まる。

「1人でなんて、駄目ですわ!」

「なるべく早く戻れるようにしますから、少しの間は1人で不安かもしれませんが」

「そういう事じゃありませんわ!」

文句が出るのは想定内だった。

しかし、怒った顔で身を乗り出してきたミルラにはぎよっとする。狭いソファーに二人で座っているのだ。只でさえ近いのに、身を引いた伊吹を追ったミルラは殆ど彼の体の上に乗るかかっていた。

何だこの状況。

「わたくしは、イブキの事を心配しているのですわ!」

上から、さらりとした金の髪が伊吹の頬を擦った。

不安やら怒りやらを緋い交ぜにした青い瞳が、真っ直ぐに伊吹を見下ろしている。紅潮した肌のきめ細やかさや、長い睫毛の一本一本までもが確認できそうな距離に、動揺しない方がおかしい。

(可愛い、とか。……意識するな、こういう時は違う事を……)

そう、例えば一瞬で現実に引き戻されるような他の事をだな。ぱつと脳裏に浮かんだ吹雪のふてぶてしい顔に、上りかけていた熱は

瞬時に冷えた。

「ミルラ、近い」

はつと、青い瞳が揺れる。伊吹の言葉でようやく状況を理解したらしいミルラは、次の瞬間真っ赤になって固まった。

人の上で固まるな。さっさと降りて、

「凄いい取り込み中だけど、出直そうか？」

貰うのはどうやら遅かったようだ。鉄格子の向こうでにまにま笑う七海と、その背後に目を見張っている吹雪の姿を見つけて、伊吹は返す言葉を失った。

何という再会。

あんなに気まずそうな顔をした吹雪の顔など見るのは初めてだった。こちらにも似たような顔をしているに違いない。

少し痩せただろうか。

何ヶ月ぶりかにもた兄の姿は、記憶にあるものと然程変わりはない。小まめに切っているのか、短髪なところも相変わらず。目付きの悪さも、伊吹には逆立ちしても敵わないだろう筋肉も健在だ。

密かに想像していたように、腕が増えているとか、頭が伸びているとか、今のところそういう事は無いようだった。

とか、現実逃避という名の観察を行っている場合ではない。

「出直すか」

ぼそりと言われた言葉に、伊吹は深く溜息を吐いた。ミルラさんと再び呼びかけてとりあえずどいてもらう。ソファーにしっかりと座りなおし、鉄格子の向こうの2人を見た。

「正直、来るというのは予想外だったんですけど」

しかもこんなに早くに。

伊吹の言葉に七海はにやにや笑っている。態とか。態となんだな。どうもこの女は好きになれない。

「驚かせようと思ったのと、面白い光景が見られるかもっていう好奇心ね。予想以上だったよ」

「ちよつとは悪びれる」

「弟くんにここを歩きまわさせたりはできないからさ。中々鋭いみたいだからね、君。油断できない。だから、フブキの方を連れて来ることにしたんだよ」

警戒されているという事は良い事だ。

逃げられる可能性が、逃がしてもらえる可能性はある。

伊吹は七海から、顰め面をしている吹雪へと視線を移した。

さて、何と話を進めればよいのか。久しぶりとも声を掛けるべきなのか。まともに話するのは本当に久しぶりのことになる。こよりが死んでからは。

気に入らないことがあると、すぐに手が出るような男だ。

それを考えると、この鉄格子の存在は非常に有り難いような気がしてきた。そんな事を考えていると、吹雪の鋭い目がぎろりと伊吹を睨んだ。

「テメーに確認しておきたいことがある」

「……何だよ」

「これは、夢じゃねえんだな」

ここまで来てそれなのか。

「あれから何ヶ月経ったと思っているんだ。非常に残念な現実だがいい加減認めろ」

「最初に言ったのはテメーだろうが」

夢だと。

誰しもが思うだろう。あれをいきなり現実と受け入れるのは無理がある。その事で責められる覚えは無い。

「そっちの女は何だよ」

嫌なところを突っ込んでくる。そこはスルーしろよ。無難な紹介をしようと伊吹が口を開く前に、ミルラがソファから立ち上がった。

「はじめまして。わたくしミルラ・ラクリエルと申します。イブキとは婚約しておりますの。」挨拶が遅れて申し訳ありません、お義兄さま」

スカートの端を持ち、優雅に挨拶するミルラに眉間に指を当てて伊吹は溜息を吐いた。お義兄さまって、何だ。

「何だって？」

訝しい顔の吹雪には、どうやら通じなかったようだ。

そういえばこいつは、脳みそまで筋肉でできているような男だった。そう安心するのも束の間、隣にいた七海が完璧な日本語で通訳を始める。

終わった。

驚きに目を見張り、伊吹とミルラの交互を見た後吹雪は言った。

「確認するが、これは本当に夢じゃねーんだな？」

どういう意味だ。

というかその確認に何か意味はあるのか。

## 伊吹、仁義無き兄弟の争いを再開する 5

思えば人付き合いを苦手としてきた伊吹に比べて、この兄はもてていた。友達も多かったし、時々女性と歩いているところを見かけたりもした。

どちらかという化粧の派手な、気の強そうな女が多かったように思う。

つまりは、伊吹の苦手なタイプだ。

なので、まともに話した事は無いし、そもそも興味すらなかったので、干渉したことも無い。

その辺りを踏まえてスルーしろ。

との、伊吹の願いはと折りは届かなかった。

「……お前、何か騙されたりしてんじゃねーだろうな」

ミルラに無遠慮な視線を向けた後に放ったその一言に、伊吹の米神がぴくりと引きつった。どいつも似たような事言いやがって。自分でもそう思うことがあるとはいえ、人に、特に吹雪に言われると腹が立つ。

「その話の良い」

「良くはねえだろ。お前、変な女に引っかかりそうなところがあるからな」

「余計なお世話だ。一々兄貴面して干渉してくるな、鬱陶しい」

鉄格子の向こうで、吹雪が驚いたように目を剥いた。

「なっ、ダメえ……」

「あんたが面倒事を起こすのは勝手だが、それに俺を巻き込むな。迷惑なんだよ」

常々言っただけの事だった事を言っただけ。

今までは、あちらの世界にいた頃は、吹雪の力を恐れてはつきり

と言えなかつた文句を。口にすると多少すつきりした気分になった。唾然としていた吹雪だったが、時間が経つにつれ徐々に険しい顔に戻る。鋭い三白眼で鉄格子の向こうの伊吹を、睨みつけた。

「テメー、本当に伊吹か？」

「はあ？」

何を言っているんだ。

「今までは俺とまともに目も合わさなかつたじゃねーか。大体いつから『俺』とか言うようになったんだよ。すかして『僕』とか言うてた奴が」

知るか。

いや、本当に気がつかなかつた。以前から一人称はその時々で変えていたが、そういえば最近は殆ど『俺』になっていた気もする。だが。

「……それは今する話なのか？」

全く持つてどうでも良い。

じつと、いや、ギンとした視線でもって、吹雪は伊吹を睨みつけている。

しかし思ったより普通に会話ができている事に驚いた。いつもなら、途中で切れる吹雪の暴力を警戒しなければならぬのだが。

間にある鉄格子の存在が非常に頼もしい。

「俺がここに連れてこられたのはアンタのせいらしいな。一応聞くけど、理由は、用は何なんだ？」

「……………」

「聞いて納得できるような答えがあるなら、俺も少しは考えても良い。けど、何も無いって言うんなら、俺とミルラを今すぐ解放しろ。何処でも良い。ここの居場所がばれるのがマズイって言うんなら、目隠しでも、薬でも使え。知りえた情報を黙っているのは難しいと思うが、俺らはまだ大した事は知らないし、分かっちゃいない」

今のうちならば。

「とか言って、気がついたこと全部喜んで話しそつだよねえ、弟くんは」

反応しない吹雪に代わり、七海が余計な口を挟む。

「でも、信じてもらえると思う？イブキはフブキの弟で、自分からこつちに来たんだよ？立場、かなり悪くなってると思うけど」

誰のせいだ。

挑発的な七海の言葉に、しらつとした顔を向ける。

「多少立場が悪くなっていようと、俺は帰る。ここにいるよりは、マシだからな」

それに、自分が巻き込んでしまったミルラは、どうやっても帰してやらなくてはならない。そのミルラは先程から日本語での会話についていけず、不安そうに成り行きを見守っている。

「そうかな？拷問、とか。まだされたことないよね」  
拷問、だと？

その物騒な響きに思わず返す言葉を失ってしまった。しかも、まだつていうのは何だ。これからされるみたいではないか。

「言ったことがすべてだとは思われるわけないよ。あちらさん、あれ絡みだとね、結構本気で手段選んでこないから」

あれ、というのは敵対者のことだろう。  
吹雪がいるからぼかしているのだ。

「積極的な異世界人保護だつて、半分以上はそのため。いつだって探してんの。対抗する為の力、武器、道具としてね。アンタ達やアタシのじいさまの世界はそういう意味では役立たずだ。だからその分、早く保護施設を出る事ができる。自由もある、けど。そうじゃない人はずっと縛られるんだよ。半強制的にね、武器にされる」  
人を食ったような笑顔を浮かべながらも、七海はどこか悲しげに見えた。



いや、騙されるな。あれは演技かもしれない。それに。

「……だから、何だ。善意でも、悪意でも、俺達はそれに縋るしかない。生きる手段をくれるだけ、ありがたい話だろ」

「意外にお人よしだね。そもそもは、この世界が過去に行った召還実験の失敗のせいだ。あれが無かったら、誰もこんな苦しみを負わずに済んだ。アンタ達を保護するのは、当然の贖罪だと思わない？ フツーならさ、対価なんて求めちゃ駄目なものだよ」

「……だから、吹雪を保護したのか？」

敵対者云々は兎も角、犠牲者の1人だから。放っておけば保護されず、始末されたらう事は目に見えている。

「テメー、黙って聞いてりゃ、弟の癖に呼び捨てにしてんじゃねえぞ。調子に乗んな」

不機嫌に低い声で文句を言われて、伊吹は半眼になった。

やっと喋ったかと思えば、それかよ。よし、無視だ。しかし今日の吹雪は今までからしたら考えられないくらい大人しい。鉄格子効果か。それとも難しい話についてこられないのか。

苛々した様子は伺えるものの、両腕を組んだまま動いていない。物に当たる様子も無いのは、本当に珍しいことだ。

………家のぼこぼこの壁に謝れ。

「とにかく、だ。俺は別にこの世界にも、この国での待遇にも文句は無い。ここで生きて行くとしたら考えられないくらい大人しい。鉄格子効けないし、賛同もできない。こうやって、巻き込まれるのは本当に迷惑なんだ」

繰返し、訴える。

話せば分かる、ような相手ではなくても。

伊吹は真っ直ぐに吹雪の目を見た。

「あんたの病気の事は、気の毒に思ってる。ここに来なければ、そんな目にあわなくて済んだらうし、その切欠がこの世界にあるっていうのなら、恨みなくなる気持ちも分かる。でもそれは、俺にはどうにもできない事だ」

吹雪が、伊吹を頼ろうとしたとは思わないが。

「だから、悪いけど」

がしゃん、と大きな音を立てて鉄格子が揺れた。そこに拳を打ちつけた吹雪が、歯を食いしばり伊吹を睨みつける。

「テメーに何が分かる」

「……………」

「口先ばかりで適当な事ばかり言いやがって。テメーはいつだって、何にも分かっちゃいねえんだよ」

吐き捨てるような言葉に、血が逆流するような苛立ちが沸いた。

「それはこつちの……………」

「憎い」

言い返そうとした伊吹は口を閉ざした。

視線は鉄格子を握る吹雪の手元に釘付けになっている。おいおい。思わず心の中でそんなツツコミをいれてしまった。

頑丈な筈の鉄の棒が、大きく曲げられてきている。

冗談、だろ。

いくら吹雪が喧嘩に強く、無駄に力があつたとはいえ、そんな化物染みた範囲にまでは及んでいなかったはず。

「壊す」

「フブキ」

「殺す」

物騒な言葉を吐きながら、ぐいぐい鉄格子を曲げてくる吹雪は、自分の兄ながら恐ろしかった。殆ど無意識に、背後にいるミルヲを

庇う。

こちらを睨みつけるどこか虚ろな目。

それを見た途端、自然と口が動いていた。

「……吹雪」

はっとしたように、吹雪の眉間の皺が薄くなる。

「帰り、たい。帰りたいたい……帰りたいたい」

呆然と呟きながら、頭を抱えるようにして吹雪は床に蹲った。その背を慰めるように撫でる七海は、何か言いたいような顔をこちらに向けたが、結局何も言わなかった。

(……なんだ、これ)

大きく曲げられた鉄格子の棒と、見たこともないような兄の姿に呆然とする。

関係ない。

嫌悪していた迷惑な兄にも関わらず、胸の奥が痛む。一歩間違えていたら、自分がそうなっていたかもしれない。

いや、もしもなんて無い。

起こってしまった事は、もう誰にも変えられないのだ。伊吹にも。

いつか……遠からず、吹雪はあの化物に変わるのだ。

地下で見たものに対する恐怖と衝撃は、伊吹の中に深く根付いてしまっている。

俺には関係ない。

そう思わなければ、やっていられない。

### 憂鬱な彼の胸の内 3

これは一体何なんだ。

わけの分らない、自分のものとも思えない感情が、吹雪の中を引つ掻き回していく。憎い、悲しい、痛い、怖い。帰りたい。帰りたい、帰りたい、帰りたい。

しかしその望みが、もう決して叶わないことを知っている。

黒ずんだ大地が風によって剥がれていく。天に吸い込まれるように消えていくのを見送って、吹雪は溜息を吐いた。見たことも無かった景色は、今も見慣れたものへと変わっていた。

太陽も見えない薄暗い不吉な色の空へ、色々なものが剥がれ吸い込まれていく。木や花等の植物から、鳥や魚、森や山に住む動物、人。建物も水も、何もかもが空へと落ちていく。実際は空へと舞い上がっていつているのだろうが、この光景は落ちていつているといった方が正しいように思えた。

空を見上げるのを止めて地上を見れば、少し離れた場所に、同じように空を見上げている数人の子どもを連れた女性の姿があった。いつもの、夢だ。

黒いもやがかかっているせいで、子ども達の姿も女性の姿もはっきりと見る事はできない。映りの悪いテレビのような砂嵐の向こうで、女性が吹雪の方を見た。

「おや、また来たのかい」

声で、年のいった女だと分かる。掠れて、少し低い声だ。

「この光景が気になるのかい？あんだみたいに怖がらずに何度も来

るのは珍しいよ。普通はね、近づくこともしないもんだ」

来ようと思つて来ている訳ではない。

気がつけば、同じ夢を見ているだけだ。

「夢か、確かにこれは酷い悪夢だね。私らの悪夢が、あんたの悪夢になつたんだ。繋がっている、だから、あんたはここに来る事ができる」

夢というのは、いつもわけが分からないものだ。

「ただどね、これは夢じゃない。悲しい現実なんだよ。少なくとも、私らにとつてはさ」

だから吹雪は深く考える事はない。

「だから私らが酷い選択をしたことも現実なんだね。ごめんよ。許してくれとは言わない。私らも、迷わなかつたわけじゃ無いんだ。いや、決めた後だつて、こつやつて迷つている。だつて、あんたみたいなのを、犠牲にするんだと思つとね」

夢が覚めかけていた。

証拠に視界を覆う影が徐々に薄れていつている。女や、子ども達の姿も、その声もどんどん小さくなっていく。

「行くのかい」

夢の世界の人間から呼びかけられるのは、妙な気持ちだ。

「……私はリョーシカ。覚えていられたら、また会えるだろう。覚えておきな。そうしたら、また………で………い」

瞼を開けると、見慣れたぼろぼろの室内があつた。

何度夢から覚めても、その悪夢は終わることをしらない。吹雪が生まれた地球の日本、家族が住んでいる家に辿り付ける日はあるのだろうか。

暫し痛む頭を押さえた後、がしがしと髪を掻きながら吹雪はベッドから起き上がった。

「……また、妙な夢を」

元々夢などあまり見ない方であったのに、こちらの世界へ来てからは度々見るようになっていた。純粹に故郷の夢だったりする時もあるれば、今日のようにわけの分からない夢の日もある。

病気のせいだろうか。

「何だ……りよー、りよーしか？」

確かそんな名前だったと思うが。……正直、覚えていられる自信が無い。メモか何かないだろうかと室内を見渡したが、生憎見当たらなかった。

テーブル等の家具も全部吹雪が壊してしまったため、今あるのはベッドのみ。着替えも毎朝七海達が持ってきてくれるという、情けないような状況だった。

ナイフなどの刃物類は元より、ペン等の凶器になりそうなものは全部始末された。

少し考えて、吹雪は抉れた壁に目を向けた。あれは自分の手がつけた傷だ。どんな怪物だと笑えてくるが、これが現実である。

尖った爪の先を、左腕に当てる。そのまま深く食い込ませると、あっさり皮膚へと傷を作った。びりつとした痛みや出て来る血に構わず、皮膚を切り裂いていく。

消えたりしないように、なるべく深く。

リョーシカ。

そう腕に掘り込んだ。

じっと見つめる内に流れていた血はすぐに止まり、傷口が塞がっていく。あれほど深く切ったにも関わらず、今はもうピンクの筋のようになっている。有り得ない速度で治っていく傷を、吹雪は眉を寄せて眺め続けた。

やがて傷口は完全に塞がり、白い引きつったような筋だけが残った。消えなかった名前に、ほっと息を吐く。

残った名前が酷く大切なもののように思えた。

これは夢ではない。

現実だ。

それを吹雪に分からせてくれるような気がした。

「全く……笑える」

自分の体に何が起こっているのかは分からない。病気なのか、何なのか。あまり良くない事だというのは、周囲の態度から見て取れる。

「フブキー、起きてるー？」

ノックの音と共に、ドアが外から開かれた。顔を覗かせた長い黒髪に褐色の肌の女は、ベッドに腰掛ける吹雪の姿に、ぎよっと目を剥いた。

「ちよつと、なあに、その血は！どこか怪我したの！？」

「ずかずかと部屋に入り込んでくると、吹雪の左腕を掴んだ。」

「傷は……はあ、治ってるみたいね。でも、この傷」

「……………」

「何なの？何かの記号みたいね」

カタカナであるが、当然この世界の人間であるルーミケラウスには読めない。しかし、七海ならどうだろうか。

「包帯」

「いるの？」

「ああ」

「頷けば、不思議そうな顔をされた。」

「傷は塞がってるみたいだけど。……まあ、良いわ。後で持ってきてあげる」

そう言って、吹雪の隣に腰を下ろした。その重みで、クッションが弾む。

「それで、どうだったの？」

「何が」

「イブキと、会ったんでしょ？」

伊吹。

吹雪は僅かに眉を顰めた。

漸く再会を果たした弟には、色々驚かされた。まず、女連れだったこと。婚約者だと言っていたことにも驚いた。金髪に青い目の若い女で、有り得ないような美人だった。何がありえないって、人形みたいな顔したあれが伊吹の婚約者だと名乗ることだ。

騙されているに違いない。

伊吹はとても女にもてるような男ではなかった。根暗で、陰険。

容姿は言うほど悪くは無いが、背には恵まれず、何よりひよろい。

久しぶりに顔を合わせた弟は、相変わらず……。

(いや)

同じでは無かった、か。

変わっていた。

あんなに真つ直ぐ人の目を見てくるような奴ではなかった。逃げるみたいに視線を反らし、不満そうにしながらも関わり合いになりたくないと言った態度で避けていく。

聞こえにくい声で文句を言い、吹雪が睨むか手を上げるような真似をしただけで、諦めたような顔で引いていった、奴が。一步も引かず、はつきりとした声をあげた。さり気なく、婚約者だという女を背後に庇って。

「……………」

「いつまで考え込んでんのよ」



あれは、本当に伊吹だったのか？

「……もう」

むくれるルーミケラウスに視線をやる。

そういえば、彼女は暫く伊吹と一緒にいたことがあるらしい。

「どんなだったんだ」

「なあに？」

「イブキ、は」

ルーミケラウスは呆れたような顔をした。肩にかかった髪をしなやかな動作で払い、組んだ足の上に肘をつけて顎をのせる。

「私が聞いていたのだと思ったけど。まあ、良いわ。そうねえ、イブキは」

少し考えるように目を閉じた後、言葉が続ける。

「中々からかいがいのある、可愛い子だったわよ。何か、必死でね。クールで排他的で、人を避けるところもあつたけど、根はお人よしっていうか。悪役に徹しきれない、みたいな。見てると苛めたくなっちゃうのよね、私」

「……………」

「そうそう、私達がいた宿屋のお嬢さんが、どうもイブキに気があるみたいだね。その娘がまたからかいがいがあるから、つい私も悪ノリしちゃって」

楽しそうに笑う女に、吹雪は呆れた。

それにしても、伊吹に気があるお嬢さんとは。先程の女だろうか。そうそうあれがもてるとも思えないから、恐らくそうなのだろう。

微妙な勘違いを残したまま、話は進む。

## 志真と思わぬ落とし穴

私は呪われているのです。

瞼を縫い付けける銀の糸が光る。それがまるで涙のように見えた。

周りに不幸を呼んでしまう。

私の目を見ないで。

見れば貴方は死んでしまう。

どうか、そつと、このままに。

(そんなの、寂しい……)

眩しい光に、志真は瞼を震わせた。何だか血の気が下がっているような。ぼんやりとした視界が逆さまだと気がつくと同時に、自分の頭がベッドからはみ出て落ちそうになっている事を自覚した。

酷い寝相だったようだ。

首が痛い。口を開けて寝ていたらしく、喉の奥までカラカラに乾いていた。

「うっ……」

もぞもぞと体を動かして起き上がる。

その拍子に体の上に乗っていた絵本がぱさりと床に落下した。お姫様と竜の話。昨日やっと読み終わったのだが、何だか消化不良な終わり方であった。

お姫様は自分の髪と引き換えに、竜の鱗を貰って帰る。

その後、呪われた竜がどうなったのかは分からない。最後の挿絵で1人……一匹？で佇む寂しそうな姿が描かれていただけだ。

(……うーん)

なんともすっきりしない。そういえばこれは、シリーズものにな

っているのだっけ。だつたら、この終わり方も納得だ。  
続きも借りてこなければ。

志真は落ちた絵本を拾い上げると、ベッドの上に置いた。

伊吹とミルラの行方は分からないまま、5日目の朝だ。心配でやや不眠症みたいになっている。眠れない時間を活用したところ、ついに借りていた本を読み終わることができた。  
でも。

これを奨めてくれたモクも、未だに保護施設から出て来れないでいる。菊乃も回復しているとは聞いているが、未だ会わせて貰えないし。

「はー……」

溜息を吐いていても始まらない。着替えて、朝の手伝いにいかなくっては。

「おはよう、フィオーネ！」

「おはようシマ」

元気に挨拶して手伝いに入る。床掃除は終わりそうなので、テーブルと窓拭きだ。先に覗いた調理場は、人が足りているようだったから、朝の支度もいつもより早く終わるかもしれない。

「あ、そうだフィオーネ」

「何？」

「今日、本……図書館行くね。だから、少し帰るの遅いかも」

「分かったわ。気をつけてね」

「うん」

「仕事中は……いや、普段もだが、伊吹の話はしないことにしている。なるべく、いつも通りに。」

「そういえば、クリスティアンさんは朝早くに出かけたみたいよ」

「へー、忙しい？」

「そうね。何か昨日、小規模の同調現象があったみたいで、その野次馬だとか言っていたわ」

「同調現象!？」

それは何度も聞いた言葉だ。志真達がこの世界に迷い込んでしまった原因が、それだった筈。

「また誰か来た？」

「さあ。兄さんならユーイさんから何か聞いているかもしれないけど」

「いる？」

「まだ帰ってきていないわね。同調現象まであったとなると、余計に大変かもしれないわ」

ウイガーは施設の関係者ではない。

彼曰く腐れ縁の友人ユーイによって、こき使われているのだった。伊吹のことも進展があったかどうか聞きたいのだが、この分ではいつ帰ってこられるかも分からない。

(同調現象、か)

この世界に来てしまってから、もう随分経っていた。

宿屋を手伝って、学校へ行く。

すっかり慣れたいつもと変わらない日々、これで良いのかと不安になる。

自分だけ平和でいて良いのだろうか。

せめて午前中は伊吹達を探しに行こうかとも思った。でも、ここを探せば良いのかすら分からない。植物園でミルラを見つけたみたいに、こてつに手伝って貰えないかと試したが、不発に終わった。

お手上げだ。

そもそも探して良いんだろうかって気もしている。

伊吹は自分から「逃げる」と告げて行ったのだ。行き先はやはり、兄のところなのだろうか。伊吹の兄もこっちの世界に来ているなんて、知らなかった。

その人が敵対者かもしれないっていう事も。

どうなっちゃうんだろう。

兄がそんな事になった伊吹の気持ち、更に不運な伊吹の兄の事を思う。どうにかできないんだろうか。志真にできる事は。

悩みつつ町を歩く志真は、気がつかなかった。歩く前方に、突如現れた緑の水溜りのようなものに。気がつかないまま足を踏み出し、そのぬめる様な感触にあれっと思った時には、声を上げる間もなくそれに沈んでいた。

志真の体を飲み込んだ小さな水溜りは、現れた時と同じくじわりと景色に溶け込むように姿を消す。

「き、消えた……」

彼女の後方を歩いていた不運な老人は、目の前で起こった光景に完全に腰を抜かしていた。彼の目には、まるで緑色の水溜りが意志を持って、自ら少年（実際は少女）を飲み込んでしまったかのように映っていた。

恐れをなして、もう何も無い現場から離れようともがきつつ、叫んだ。

「おおお、お、男の子が消えた、消えたぞ！」

志真が聞いたら落ち込みそうな言葉だった。

その報告を聞いたユーイは、対策本部の一室にて舌打ちをした。  
「……今度はシマか」

次々と問題ばかり起こす奴らだ。  
最も、今回のものは今までとは訳が違う。目撃された緑の水溜りのような物体が何なのかは謎だが、あれは異世界から紛れ込んできた新たな客なのだ。

同調現象が起きたのは昨日のことだ。経過は観察できたものの、肝心の客人の確保には失敗した。山奥のような場所だった為、こちらに落ちてきたのは、体が半透明の鳥のような動物1匹（こちらは捕まえた）と、例の緑色の水溜りのような物体だけだ。

大したことにはならなさそうだ、と思ったのは間違いだった。

あの緑の水溜りは、どうやって片付けようか相談する隊員の前で掻き消えた。なくなったのなら良かったが、それ以降町のあちこちで現れたり消えたりして、市民からの通報が相次いでいる。

何なのかと訊ねられても答えようがない。

（寧ろ、こつちが聞きてーよ）

それでも、危険性は低いと思っていた。今回志真が消えるまでは、消えたり現れたりするくらいで、住人に危害を与えたという話は無かったのだ。

それが。

まさか、よりにもよって志真が飲み込まれるとは。

接触したのがまずかったのだろうか。一応住民に注意を呼びかける必要があるかもしれない。

同じ世界から来た人間に話を聞く必要もある。

後は今までの出現情報を照らし合わせて、何とか出現の傾向を算出して人員を配置……、しかし捕まえるにはどうすれば良いのか。無闇に接触すれば志真のように取り込まれるかもしれない。そう、

その志真を助ける手立ても考えなくては。

(……とはいっても)

ユーイは冷めた茶を一口飲んで、目を細めた。

(生きてんのか?)

残念な結果の方が想定しやすい状況。しかし、何故か志真の顔を思い浮かべると。

(生きていそうだな)

と覚えてしまう不思議。

## 菊乃の役割 1

灰谷志真に起こったことを菊乃が知らされたのは、事が起きた翌日の事だ。

リザレットによつて呼び出され、ハルラックと共に向つた先には、見知らぬ老人の姿があつた。3人が集まったところで、同調現象が起きた事から志真が消えてしまったことまで説明した後、リザレットは淡々と言った。

「その水溜りの捕獲及び志真の救出の手助けをするように」

熱が下がり回復した日の翌日から、菊乃の生活に変化があつた。

殆ど部屋から出ないという半ヒキコモリ気味な生活のせいで、体力が落ち弱っているのだ。と、判断されたのかは分からないが、保護施設にあるトレーニングルームでの運動が、日々のカリキュラムとして課せられるようになった。

午前には2時間、午後には2時間。

菊乃に合わせて休憩を挟んでくれるものの、すっかり運動不足になつていた菊乃には厳しく、翌日はもれなく酷い筋肉痛に苦しめられる事になる。

柔軟体操にランニングに腕立て伏せ、腹筋。ダンベルのようなものを使った、筋力トレーニング。それに加え短剣を使つての護身術的なものの訓練。

勿論短剣は本物ではなく、切れないものを使っている。

最初は普通の剣やら、刀みたいなものやら、棒みたいなものやら色々持たされた。重すぎて振ることが精一杯というような菊乃の様子に、最終的に選ばれたのがこの短剣だ。

短剣、とはいえ、カッターナイフや工作用のナイフとは違つ。



柄から刃先までの長さは25cmくらいあるし、結構重い。完全に武器といった感じのものだ。

これはやっぱり、自分の身は自分で守れ、という事だろうか。

振り返れば結構危険な目にあっているし、現在も伊吹は行方不明のまま。生まれ故郷の地球、日本より余程物騒そうなこの場所で生きていく為には、確かに必要な事かもしれない。

そう思い、何とか筋肉痛に耐えトレーニングをこなしていた。

しかし、トレーニングを始めてたったの4日目である。

溜まっているのは疲労と筋肉痛ばかり。体力も筋力も、一朝一夕でつくものではない。

そんな菊乃にまで協力を求めるとは、そんなに人手不足なのだろうか。それだけではない、他の思惑があったとしても、協力するのはやぶさかではない。

何せ、巻き込まれているのは志真なのだ。

(志真ちゃん、大丈夫なのかな)

無事である可能性が高いとは聞いていても、心配だ。無事でない可能性だって、勿論あるのだ。楽観はできない。

その後の聞き取り調査で、移動を続ける緑の水溜りみたいなものが、精霊の通り道と呼ばれるものの一部だという事が判明している。通り抜けたものを別の場所へつれて行ってしまおう、という。

現在は、同調現象により、一部だけ切り離されてしまったものが、本体に戻る為に暴走し転移を続けている状態だ。放っておいても(元の世界に戻る事はできないので)2、3日もすれば力は尽きる、が。問題は志真だ。

この世界のどこに行ったか分からない彼女を見つけ、連れ戻す為

には、その水溜りが存在する内でなければならぬらしい。

「……連れ戻す前に水溜りが消えてしまったら、どうなるのですか？」

菊乃の質問に対して、リザレットは細い目を更に細くした。

「見つけ出すのが困難になります。すぐに生死に関わる問題には発展する事は無いでしょうが、シマがこの国にいるとは限らない以上厄介な事になる前に見つけるべきです。妙な輩に捕まらないとも限りません」

協力して戴けますね、と言われて菊乃は頷いた。

手続きをすると言っけてリザレットが出て行くと、謎の老人がこちらへ顔を向けた。長い髪も顔の半ばまで垂れ下がった眉も、口元を覆い隠すようなふさふさした髭も、全部が白い。丹念に手入れされているのかさらさらストレートだ。

眉毛に見え隠れしている目は丸く、黒い。

ずるつと長い深緑のローブという格好とあわせると、仙人、または魔法使いといった感じの老人である。

沈黙の中、最初に口火を切ったのはその老人だった。

「さて、では自己紹介といこうかの。とはいえ、ハル坊とはくらすめいとじゃし、今更改めする話も無いがのー」

それから顔中を皺皺にして笑う。（は、ハル坊？）思わずハルラツクの顔を伺うと、微妙な顔をしていた。

（確かにハル坊は、無い）

背も高いし、肩幅もある。立派な青年に対して、坊というのはなんともし合わない呼び方だ。

「ハル坊はやめてくれ、じいさん」

渋い顔での抗議に対して、老人はとぼける様に首を傾げた。

「ほうほう？それではハル君とかの方が良いかのー。ハル君、しっくりせんが、その内なれるじゃろう」

「……じいさん」

ハルラックはその渾名も気に入らなかつたようだが、菊乃は内心で思っていた。（ハル君……か、何か可愛い）

「しかし鬱陶しい前髪切つて随分おつとこ前になったもんじゃ、うん、その方が女人にもてるじゃろう」

ハルラックが蜂蜜色の瞳に呆れたような色を滲ませる。老人はひよいつと首を傾けるようにして、菊乃へと視線を移した。

「さてさて、そちらの可愛い娘さんはどちらさんかのう」

知り合いらしい2人のやり取りを見ていた菊乃は、慌てて頭を下げた。

「あ、私は菊乃…キクノ、サカマキです。よろしくお願いします」

「ははあー、礼儀正しいのうキクちゃん。わしはジーじゃ。皆からはお茶目にじいさんと呼ばれとる。キクちゃんも気軽にじいさんと呼んでくれい」

「は、はい。じいさん」

ふおふおふお、と笑う度に垂れ下がった白い眉や髭が揺れた。

何だか仙人みたいな容貌のジー。妙に和む雰囲気を持った人である。小柄な老人を見下ろして、ハルラックは小さな溜息を吐いた。

「じいさんがいるという事は、例のものはじいさんの世界から来たものなのか」

ほのぼのとした気分になっていた菊乃は、ハルラックの言葉にはつと気を引き締めた。

「その通りじゃー、ハル君は相変わらず鋭いのう」

じいさんは相変わらずぼやんとしている。

「わしらは『寸道』とか、『ちよつとそこまで』とか呼んで、重宝

しとつたがのう。着点をしつかり決めてから入らんと、おかしなところへ飛ばされてしまつんじや。そのせいで『迷い道』とも呼ばれていたのう」

「それは、こちらの意志で行き先を決められるという事なのか？」

「そういう事じやのう。その人の一番行きたい場所へと導くが、果たしてシマはどこにたどり着いたんじやろうなあ」

行きたい場所。

そう言われてぱつと浮かぶのは、日本だ。二度と帰れないといわれた懐かしい故郷、誰よりも会いたい家族がいる場所。同じ立場の志真にとつても、そうではないだろうか。

そんな菊乃の思い付きを見抜いたかのように、じいさんは長いあごひげを撫でながら首を横に振つた。

「残念じやが、あれは異界にまでは届かんからのう。この世界のどこかにはいる筈なんじやが」

志真の行きたい場所。

残念ながら、菊乃には見当もつかない。お互い分かり合えるほどの時間は経っていないかった。

何だか不安になってくる。

「……見つかりますか」

「大丈夫じや、キクちゃん。寸道を見つけさえできれば、こつちのもんじや。そつからシマちゃんを引き戻す方法はちやんとある。わしと、キクちゃん、協力して頑張れば必ず良い結果が生まれるはずじや、どーんとな」

「……さりげなく、俺をいないことにしていないか」

半眼で口を挟んだハルラックに、じいさんは大げさに肩を竦めた。「なんじや、ハル坊いつからいたんじや？」

「最初からだ。……全く、そういう呆けたフリで人をからかうのは

悪い癖だぞ、じいさん」

何のことじゃか、とじいさんはとぼけて笑っている。緊張感を壊すようなやりとりに、菊乃は自然と肩の力を抜いていた。

（もしかして）

ふおおおお、と力が抜けるような笑い方の老人をまじまじと見つめ、菊乃は思った。

（そういう、わざと……かな）

## 菊乃の役割 2

町では既に、大勢の人間が緑の水溜り、寸道を捕らえる為に走り回っているらしいというのに。

(……行かなくて、良いのかな)

菊乃がそんな不安な気持ちになるのも無理はなかった。

リザレットから作戦に参加しているという証だという腕輪を貰い、動きやすい服装(短めのワンピースに七部丈のズボン)に着替えてまでしてやっていることといえば。

お茶である。

場所は保護施設近くにある喫茶店だ。白い壁のシンプルな建物で、黒茶の床板と一体になった長方形のテーブルが、規則正しく並んでいる。

テーブルの側面にある緑色のガラスみたいなものに手を触れると、艶やかに磨かれたテーブルの上にメニューが現れるという、近未来……異世界使用。客層はカップルが多く、家族連れや1人できている人がそれに混じっている。

耳の尖った人、毛むくじゃらの人、髪や目、肌の色も様々だ。

こうしてお店でゆっくりする経験は初めてで、非常に興味深いけれども。

作戦中、の筈。

こんな事していて良いのだろうか、という後ろめたさが勝っている。

保護施設を出た後「何をするにも腹ごしらえじゃ」と言って、真っ直ぐここへきたのはじいさんだった。リザレットからは、彼の指示に従い手助けするように、と言われている。つまり、菊乃達のリーダーは彼、じいさんなのだ。

そのリーダーはのんびりと、あわ立つ赤紫色の謎の飲み物を啜っている。美味しいのう、とか言ってすっかりくつろぎモードだ。

「じいさん」

菊乃の隣で、浅く椅子に腰掛けて外の様子を見ていたハルラックが、腕を組みながらそんなじいさんを見下ろした。

「一応聞いておくけど、この場所はシマ救出の作戦に何か関係はあるのか？」

「いや、特に無いのう」  
「やっぱり。」

「……じいさん。少しは真面目にやれ。シマの安全が掛かっているんだろ」

「より良い結果を導き出すには、入念な準備が必要になるんじゃないよ。もう手は打っておるから安心せい。ハル君もキクちゃんも、そう力リカリしとらんで、まずは気持ちを落ち着けるんじゃない」

「ずず、っと飲み物を飲んでから、じいさんは髭を絞るように撫でた。手は打つてあるとの言葉に、少し安心できた。きっと、何か考えがあるのだろう。」

「何より、あの子らには時間が必要じゃからのー」

「……誰の、何の事だ？」

ハルラックの問いに、とぼけるように再び飲み物をすするじいさん。

「茶が冷めるぞ、ハル君」

「……最初から冷めているから」

ハルラックの頼んだ飲み物は、クガルという葉を使ったアイスティーだ。

「相変わらず猫舌じゃのうー」

からかうようにじいさんが言う。その言葉に、菊乃はハルラックのもう一つの姿を思い出していた。黒い毛並みの豹のような、大き

な動物。

不思議、だ。

もう菊乃は、隣にいる長身の青年と、あの大きな黒い動物が同じ存在だという事に、違和感を感じなくなってきた。

しなやかな体付き、黒く艶やかな髪と毛並み、蜂蜜を溶かしたような瞳の色。

一致するところが多いとはいえ、菊乃の常識からすればそれは考えられないような事なのに。もう当然の事のような気がしている。当たり前前、不思議とも思わない自分に、菊乃は微かな違和感を覚えた。

「キクちゃんも、ぼーっとしたらんでちゃんと食べるんじゃない」  
「え」

どん、と目の前に置かれた皿に、菊乃は思わず目を丸くした。山のように積まれた分厚いパンケーキが5枚、白磁に蔦模様の入った皿の上にとんと鎮座している。たっぷり掛かった甘い香りのシロップと、溶けかかった薄桃色のクリーム。見ているだけでお腹がいっぱいになりそうな代物だ。

これは……。

呆然とする菊乃に対して、じいさんはふおふおと笑う。

「女の子は甘いものが好きじゃろう。キクちゃんはどうも細すぎるからもう、遠慮なく食べて作戦に備えるんじゃないぞ」

甘いものは確かに嫌いではない。しかしこの量は。

気がつけば、いつの間に注文したのか、テーブルの上には他にも料理が並んでいた。じいさんの前には、具沢山のスープと柔らかそうな白パン。ハルラックの前には、血の滴る分厚いステーキ（何の肉かは分からない）が3枚積み上げられていた。皿の隅に申し訳程度に付け合せの野菜が隠れている。

その表情を見るに、それもハルラックが注文したもので無いよ



うだ。

「ハル君といたら、肉じゃ。ここはわしの奢りじゃ、遠慮なく食べてくれい」

「……いただきます」

1枚途中で挫折する気がしてならなかったが、菊乃は大人しく食べ始めることにした。

トレーニングをするようになってからは、以前よりも食事を採れるようになった。しかし、いきなりこれは無理だ。

(そもそもこれは、1人分なのかな)

3、4人で分けて食べるものなんじゃないだろうか。フォークとナイフで小さく切り分けながら、口に運ぶ。外はさくっ、中はとろりと半熟でクリーミーな味わい。ホットケーキ的なものを想像していたが、どうやら違うようだ。思ったよりも重くない。

たっぷり掛かったシロップもしつこくなく、ほのかに苦味のある甘さであっさりしている。

これなら1枚くらいなら食べられそうだ。

隣を見れば、ハルラックは既に半分以上を食べ終えていた。慣れた仕草で肉を切り分け、ひよひよい口に運んで咀嚼し、飲み込む。一連の流れるような動作には無駄がなく、綺麗だ。

見ているだけでお腹がいっぱいになりそうな食べっぷり。

「キクちゃんも、ハル君見習ってしつかり食べるのじゃぞ。キクちゃんには、頑張ってもらおうからのー」

「は、はい」

志真を助ける為に、だろっか。

じいさんのその言葉に、ハルラックは鋭い視線を投げかけた。

「キクノに頑張ってもらって、何をさせるつもりなんだ」

「おおっ、ハル君。いっくらキクちゃんが可愛いからって、いたい

けなじいさんをそんな怖い目で睨むのは良くないぞー」

「じいさん」

「そんな事言ってもしょうがないじゃろー。シマちゃんを呼び戻す基点となるのは、キクちゃんしかおらんからのう」

「私、が？」

基点とは、どういう事だろう。

「シマちゃんを引っ張る時に必要なんじゃよ。シマちゃんに近い者、確かな繋がりを持つ者がのう」

確かな繋がり。

そんなもの、あるのだろうか。確かに親近感を持っているし、仲良くなりたいたいとも思っている。でも。

「この異世界で、同じ世界に生まれ育った者というのは、それは大きい、確かな繋がりじゃ。他の者には太刀打ちできん。イブキがおれば、そっちに頼めたかもしれんがのう」

伊吹も未だ見つかっていない。

「今はキクちゃんだけが頼りじゃ」

その言葉に、菊乃は小さく息を飲んだ。

(私だけが?)

責任重大過ぎるような。

「危険は無いんだろうな」

緊張する菊乃を横目に、ハルラックが確認する。

「どうかのう。そうそうある事でもなし、わしも初めての試みじゃ。理論上はうまく行くとおもうがのー」

「……他に方法は無いのか」

「あればいいんじゃないがのう。無い以上は、キクちゃんに頑張ってもらうしかあるまい。何せシマちゃんの安全が掛かっておる」

どうかのキクちゃん、と問いかけられて、菊乃は小さく頷いた。

「頑張ります」

自分にしかできないのなら。志真を助けられるというなら、多少の危険は構わない。

(万が一、私が死んでも)

「無理はしないでくれ、キクノ」

心配そうな顔でハルラックが言う。

「悪いが、もしも危険だと判断したら、俺はお前を止める。例えそれで、シマが助からなくても、恨まれても」

自分を見つめる蜂蜜色の目の奥に、憂うような色を見つけて菊乃は瞬いた。

時々、ハルラックは菊乃にそんな目を向ける時がある。

悲しそうな、痛むような、苦しそうな、色。

「俺は、お前を守る事を優先する。それが、俺の」

償いで、使命だから。

その言葉を掻き消すように、大きな音楽が突如辺りに鳴り響いた。

### 菊乃の役割 3

ばくばくと、心臓が煩く音を立てている。

「なんじゃ、良いところじゃったのに無粋じゃのー」

ぼやきながらロープの下から細い棒のついたネックレスを取り出す。音はそこから出ているようだ。かちりと押すと音が止み、代わりにホログラムが出てきた。

「貴方はそこで何をやっているのだ」

掌サイズの大きさの上半身だけのリザレットが、不機嫌そうな顔で問う。

硬直していた菊乃とハルラックも、そこで漸く緊張を解いた。

「搜索の方はどんな具合かのう」

「呑気な事を。3度接触まで行きましたが、捕獲はできておりません。罠の方もさっぱりです。さっさと行って搜索に加わってください」

「そう焦ることも無いぞー、その内に罠に引っかかるじゃろうからのう」

「そんな悠長なことを言っている場合ではありません。新たな犠牲者が出れば、益々厄介な事になります」

「それは問題ないわい。じゃあ、また何かあつたら連絡してくれい」  
「何故……」

ブツ、と音を立てて宙に浮かんでいたリザレットが消える。

話の途中だったが、良いのだろうか。怒り狂っているだろうリザレットの姿が容易に想像できる。

「どういう事だ、じいさん」

何事も無かったかのような様子で、再び食事を始めたじいさんは、

ハルラツクの問いにひょいと眉を動かした。

「新たな犠牲者は出ないって、どうして言えるんだ」

「寸道は元々、わしらのような者が利用しておった道じゃー。普通の人間には渡れんよ」

「だが、シマは」

「シマちゃんはほんの少しじゃが、魔力を持っておるみたいじゃからのう。本来なら、寸道を使える程のもんじゃ無いんじゃが、まあ、その辺は色々偶然が重なったんじやろう。とにかく、じゃ。普通の人間ならアレに触ったところで、何にも問題はない」

寸道はじいさんの世界から来たものだ。

それなら、じいさんの言っている事は確かなのかもしれない。

(でも…)

リザレットはその事を知らない様子だった。先程も説明するチャンスはあったのに、言わなかったという事は。(態と?) どうして

「この事は、秘密じゃぞー。厄介なことになるからのう」

「……ああ」

何だか分からないが、ハルラツクは納得した様子で頷いている。

多分何か理由があるのだろう。彼らが敢えて言わないことを、こちらから聞くのも気が引ける。

気にならないといえば嘘になるが。

理由が分からないまま、結局菊乃も頷いて、その話はそこで終わった。

たっぷり2時間ほど使った昼食を終え、公園で散歩などして時間を潰し(じいさんはベンチで昼寝をしていた)日が傾き始めた頃、寸道が畏にかかったとの連絡が入った。

緑の水溜り。

それは本当にそのままのものだった。

川岸に沿う石ブロックの散歩道。等間隔で植えられたこんもり丸い形の木の間。紫色に光る幾何学模様の陣の上にそれはあった。

その水溜りを囲むように、5人の屈強そうな男性（1人は女性かもしれない）が立っていた。手を後ろに組んだ格好で、鋭い視線を周囲に向けている。遠巻きにも野次馬の姿が無いのは、彼らのお陰かもしれない。

「じい様」

びしつと背筋を伸ばした強面の男が、細い目をじいさんに向け、これまたびしつとした声を上げた。

「ご指示を」

「うむ。後はわしらに任せて離れておれ」

偉そう、だ。

はっ、と軽く頭を下げる男。そのじいさんに指示を仰いだ男がどうも彼らのリーダーだったらしく、彼が手を振ると後の4人も一斉に周囲に散った。

悠々とした足取りで、緑の水溜りに近づくじいさんとハルラック。躊躇いながら、菊乃もそれに続いた。

見れば見るほど不思議なものだ。どろりと半透明の緑色で、一見はただの水溜りだが、よく見ればふるふると動いており、僅かな伸縮を繰り返している。それに合わせて、地面に浮かぶ不可思議な図形も薄っすらと点滅していた。

「さてキクちゃん、こっちに来てここに立ってくれない」

水溜りの前に立ったじいさんが、手招きで菊乃を呼ぶ。言われたまま近づくと、今度は膝を付くように言われた。更に。

「片方の手をここにつけて、もう一方の手を寸道の中に突っ込んでくれない」

「ここ」と指し示されたのは、淡く光る図形の中でも、丁度掌の大きさの花のような模様がある部分だった。そこに手を置くのは良いが、流石に不透明な謎の液体の中に手をつ突っ込むのには抵抗がある。しかし、志真を助ける為に必要な事なら、やるしかない。

菊乃は一度掌をぎゅっと握り締めてから、思い切って手を伸ばした。手首辺りまで一気に浸かる。思ったよりも深さがある。不思議な感覚だった。冷たいような、温いような。水の中に手を入れていくのに、そんな感触はない。指の先を動かしてみても抵抗は無く、空気に触れているのと変わらない感じだ。

(……変な感じ)

戸惑いつつ、自分の手元に目を向けて、ぎよっとした。

表面近くが僅かに透けている緑色の水の中に、自分の手が見当たらないのだ。

手首から下が消えてしまっているように見える。

(な、何……)

「そのまま。大丈夫じゃー、手の感覚はあるじゃろつ。ちよっと見えないだけで、ちゃんと繋がっておるからのつ」

思わず手を引き抜こうとしていた菊乃は、その言葉に何とか踏み止まった。

「ほれ、ハル君。キクちゃんの隣におらんと駄目じゃろー。万が一引つ張られそうになったら、しつかり支えるんじゃぞ」

その言葉に従い、ハルラックが菊乃の右横に座る。

「よし、じゃあ始めようかのうー」

そんな、なんとものんびりした言葉が、始まりの合図だった。

菊乃の背後に回ったじいさんが、ぼそぼそと不思議な言葉で歌い始める。途端に周囲の空気が変わるのが分かった。

ざわざわと何かが動いている。

周囲の景色は何も変わっていないのに、目に見えぬ何かが物凄い速さで動き回っているのが感じ取れた。

(何、これ……)

胸の鼓動が早くなる。

その内に、何処からとも無く、様々な楽器を一齐に鳴らしているような喧しい音が響き出した。その音のせいかは分からないが、気持ちが悪くなってきた。ぐるぐると目が回り、額から汗が滲む。

唇を噛み、不快感に耐えている菊乃の背中に、ぼんと手が触れた。息を飲む。何。燃えるように熱い。その熱は一瞬で全身にまで広がった。

「今じゃ、キクちゃん。シマちゃんを呼ぶのじゃ」

はっと菊乃は目を見開いた。

「志真、ちゃん」

「もっと、強く」

「志真ちゃん、志真ちゃん！志真ちゃん！」

戻って！

無我夢中で声を出した。

指の先に何かが触れる。意識するよりも早く、掴んでいた。誰かの手だ。そう認識できた瞬間、緑の水溜りがぐんつと盛り上がった。菊乃の手自然と持ち上がり、水面から引き出される。繋がったままの誰かの手が次に目に映った。そして。

すっかり薄くなってしまうた緑の水溜りの上に、呆然と座り込む



志真の姿があった。

「志真ちゃん」

「どうやら、成功したらしい。良かった、と。そう思えたのは束の間のことだった。」

「……なんで」

ぼつり、と言葉を漏らした後、志真はくしゃりと顔を歪めた。ぼろりとあふれ出した涙が、次から次へと川のように頬を伝って落ちていく。

「何で呼んだの!」

わっとその場に泣き伏せる志真に、菊乃はどうする事もできなかった。

## 伊吹、約束する 1

その頃、相変わらずの監禁生活を送っていた伊吹は、当然志真の身に起こった事は知る由も無かった。

今日で7日目。

解放される気配は無く、助けがくる気配も無い。運動不足に加えて、出て来る料理のワンパターンさにストレスが着々と溜まっている。

硬い保存の利きそうなパンに、野菜スープ。肉類、魚類は干したものの、塩漬けにしたもの。果物は砂糖漬けか乾燥させたもの。捕虜だから手を抜かれているわけではなく、大っぴらに動けない為に長く保つ食料品ばかり用意してあるのだろう。

ここはどうやら一軒屋の一室等ではなく、大きな乗り物の内部らしかった。最初はどこかに静止していたらしく気がつかなかったが、2日目の夕方頃になっていきなり動き出した。以来、止まったり動いたりを繰り返し移動を続けている。

揺れがあまり感じられないので、水の上とかでは無いと思う。空の上でも無い筈だ。それはあまりに目立ちすぎる。

「朝だよー、起きてる?」

朝から苛々するほど明るく弾むような声だった。

声の主は、こんこん、と壁を叩きながら、ひょいとドアについた鉄格子越しに部屋の中を覗き込む。茶色い毛布の上で胡坐をかいている伊吹の姿を確認した後、ドアを開けた。

「おはよう、弟くん。可愛い彼女がお待ちかねだよ」  
からかうような言葉に反応したら負けだ。

マットも無い床で寝ている為、体の節々が痛い。もう大分、慣れたが。夜寝る時だけでも部屋を別にしてくれと、頼んだのは伊吹の方だった。2段ベッドの上下とはいえ、同じ部屋に寝ているというだけで意識せざるを得ない。

悲しいほど、女性に免疫が無い伊吹だった。

健全な青少年である以上、色々と不都合なところもある。何とかミルラを説得して、夜眠る時のみ隣の物置(?)のような縦長の狭い部屋の使用を勝ち取った。

毛布2枚しか与えられなかったのは、面倒だとぶつぶつ文句を言っていた七海の嫌がらせかもしれないが、後悔はしていない。

やはり、1人で考える時間というのにも必要だと思うのだ。

七海について、部屋を後にし、すぐ隣の牢へと移る。

誘導するのは小柄で華奢な女が1人、だ。

特に拘束されてもいない伊吹が、彼女を人質に脱出を目論むのは当然の事だった。確かに体力に自信は無い。だが、何とかいけそうな気がするくらいに、彼女は頼りなく見えた。

のこ。

3日は慎重に様子を見て、4日目に行動に移したところ、あっさり投げ飛ばされた。綺麗な一本背負いで。(そういえばこいつの爺さんが日本人だとか言っていたっけ)と、投げられている最中に思い出した。

受身などは取れず、思い切りぶつけた背中への痛みで呼吸を止めていた伊吹を、七海はにやりとしながら見下ろした。

ぼそぼそと、聞きなれない言葉を呟いた後、七海の掌の上に火の玉のようなものが浮かんだ。そこで完全に、伊吹は自分と彼女の戦闘力の差を悟った。圧倒的に、負けている。格闘家+魔法使いとか、卑怯だろう。せめてどちらかにしてくれ。

今、考えれば。

そうでなかったら、のこの彼女1人で出歩いたりしないだろう。伊吹達を攫いに来たのも彼女だった。

そんな理由で、彼女を人質にとつての脱出は諦めざるを得なかった。

「おはようございます、イブキ」

伊吹が顔を覗かせると、いつものように、ぱつと顔を輝かせて駆け寄ってくるミルラだったが、流石に少し疲れているようだ。

早く、何とかしないと。

ミルラに挨拶を返してから、背後で鍵を掛けている七海を振り返る。

「おい」

「はいはい？」

「……今日は吹雪は」

ざーんねん、と両手を軽く開き七海は首を横に振った。

「まだちよつと調子が良くないみたいなんだ」

これで、何日目だ。1日目に顔を合わせて以来、奴は全く顔を見せてこない。こつちから話をさせると言っても、調子が悪いと断られる。

本当か、と疑う気持ちと、もう1つ別の懸念が浮かんだ。

(まさか、いよいよ……)

敵対者とやらに乗っ取られたのか。

早くここを出なければ。

焦る気持ちばかりが募る。伊吹には七海たちの行動がさっぱり理解できなかった。

彼らはどうやら異世界人に対する国の対応に、異議を持っているらしい。その事は別に良い。どんな世界だろうと、色々な考えを持つ人はいるだろうし、数が多い方、権力がある方が必ずしも正しい

とは限らない。

だが、吹雪を、敵対者と呼ばれる化物に変わると分かっている人間を、何故匿うのか。家族や恋人というわけではない。知人ですらなかった、垢の他人を、何故危険を冒してまで庇っているのか。

(利用する、以外に何かあるのか?)

がつん、と音を立ててスプーンが掌から吹っ飛んでいく。床で2、3回回転したそれを、ミルラが拾い上げた。

見事に折れ曲がっている。

「駄目みたいですね」

「……そうですね」

壁の隙間に押し込んで、パネルの一枚でも外せないかと思ったが、やはり無謀だったようだ。

「大丈夫ですわよ、イブキ！きつと何とかできますわ」

ミルラの励ましの言葉を聞きながら、伊吹はソファーへと腰を下ろした。

情けない。

もう少し何かできると思っていた。しかし、現実には甘くない。

彼らの仲間に入ったふりをして油断を誘おうにも、そもそも相手にされず。

突破口になりそうな伊吹達を攫った理由が、吹雪の「弟を匿って欲しい」という余計な頼みである限り、交渉は吹雪とするしかない。それなのに、会うこともできないでは。

苛々と考え続ける伊吹の隣に、ミルラが静かに座る。いつものように細い棒2本と、固めの毛糸を取り出して、不器用な手つきで編み始めた。

一応、習っていたというだけあって、綺麗に編めている。ただし、

その速度は非常にゆっくりだ。それでも5日かけて徐々に編み進め、今はバスタオルくらいの大きさにまでなっている。……一体何を作ろうとしているのかは謎だ。

暇な監禁生活で退屈を紛らわす為に、七海に持ってきてもらったものだ。ちなみに伊吹は本と辞書を差し入れてもらった。

編み物を始めると、ミルラは途端に無口になる。

その集中力は凄まじい。

横から見ても真剣な眼差しで、一目一目に熱い…険しい視線を送っているのが分かった。何か嫌いなものでも思い浮かべて編んでいるのか？と密かに疑っている。

よく飽きもせず、と何となくミルラを眺めていた伊吹は、眉を顰めた。

どこことなく、だが。いつもと違う。

伊吹はミルラをじっと見つめて、違和感の正体を探った。青い目は潤みがちで、頬は赤く染まっている上、額に汗が滲んでいる。まさか。

「ミルラさん、ちょっと」

「え？」

殆ど何も考えずに、手を伸ばしていた。

両肩を掴んでこちらに向かせ、その額に手を当てる。(熱い)やはり、発熱している。この感じ、38は越えているんじゃないだろうか。手をどけて、これ以上ないくらいに目を見開き、真っ赤な顔をしているミルラを睨む。

「熱があります。具合が悪いなら言ってください」

「……で、でも大した事は」

「頭痛や吐き気は？」

「……少し、頭が痛いですわ」

「他は？」

「喉が少し」

風邪、だろうか。

「治るまで寝ていてください」

七海に頼めば、医者と呼べるだろうか。思案する伊吹に、ミルラは心細そうな顔を向けた。

「寝ているのは嫌ですわ」

「何言ってるんですか」

「だって、眠る時は別々でないと駄目なんですわよね？わたくしが眠ったら、イブキは隣の部屋に行ってしまうんでしょう？」

一瞬、言葉に詰まってしまった。

今にも泣きそうな顔のミルラは、目を丸くした伊吹を見つめる。

「そんなの、寂しいですわ」

何という顔で、何という事を言うんだ。

伊吹は赤くなった顔を見られないように、額を押さえて俯いた。

「それはまた別の話だろ……。大体、俺も、病人を放っておくほど薄情では無いつもりです」

動揺を誤魔化す為に、いつも以上に素っ気無い口調になってしまった。

「……いて、くれるんですの？」

「看病には慣れているので、まあ安心してください」

「ありがとう、イブキ」

ふわりと微笑んだかと思ったら、いきなり倒れこんできた。慌てて支える。

そこまで具合が悪かったのに、何をやせ我慢していたのだと、少しばかり腹が立った。

## 伊吹、約束する 2

寝たくない。

寝たら、帰っちゃうんでしょ？

何だか懐かしい記憶を呼び戻してしまった。伊吹はテーブルを隅へと追いやって、ソファをベッドの横へと移動させた。そこでなら、本を読みながら下段のベッドで眠るミルラの様子を見る事ができる。

まだ熱が上がっている最中らしく、震えているのであるだけの毛布と布団をかけておいた。今後あがりきった熱が下がってくれば、逆に暑くなってくる。汗を掻くことも考慮して、着替えの服とタオル、水分補給用の水と、頭を冷やす用の水桶とタオルを用意しておいた。

医者はまだ来ない。

というか、こちらから呼びかける手段が無いのだ。一応先程大声で叫んでおいたが、気がついてもらえただろうか。

駄目だったら、七海が昼食を運んでくるまで待たなければならぬ。

異変に気づき、すぐに飛んでくる様子が無いところを見ると、監視カメラのようなものは無いようだ。

ただの風邪ならば良いが。

こちらの病気のことは詳しくない。だから不安だった。こよりのこともあって、病人の看病には慣れているし、病気についての知識も普通の人よりはあると思う。

しかし、それはあくまで向こうの世界の話。

こちらの世界ではまた別だ。

伊吹の知らない病も山ほどあるだろうし、体のつくりだって同じ



だとは限らない。

(そうだ、同じ、じゃない)

肌の色に、目の色、髪の色。

それ以上に、様々な違いがあるかもしれない。だとしたら、向こうでしていたのと同じやり方で良いのかすら、不安になってくる。思わぬことが命取りとなってしまう事も無いとは言えない。

考え出すと、止まらなかった。じわじわとした不安が心の中を圧迫します。

「……………」

とうとうじっとしていられなくなって、伊吹は再びソファから立ち上がると、鉄格子に指をかけた。

息を吸ってから、がしゃがしゃと思いつき揺らしてやる。

「誰かいないのか！ さっさと医者連れて来いって言ってんだろ！」

そうして騒ぐ事2分程度で、漸く七海が現れた。遅い、と不満を口にはするものの、彼女の登場がこれ程まで嬉しかったことが嘗てあっただろうか。勿論、無い。多分、これから先も無いだろう。

七海は1人ではなかった。

背後に巨大な男を1人連れてきていた。身長は2メートルは確実に越えていそうな大男で、横幅もある。その為狭い通路で窮屈そうに身を屈めていなければならなかった。

目を引くのは、体の大きさばかりではない。

全身黄土色に光る鱗で覆われており、鼻先はつぶれ、左右に離れた両目は瞳孔が縦に伸びている。恐竜がそのまま生き延びて進化を遂げたら、こんな感じになったかもしれない。そう思わせるような姿だ。

あの石みたいな拳で殴られたら、一発であの世に直行できそうである。まさか、騒いだ事への脅しとして連れて来たわけではないだろうな。

不審の目を向ける伊吹に対して、七海はにやにやと笑い返した。

「ご希望のお医者さんだよ」

マジか。

そんな思いが顔に出てしまったのだろうか。大きな体の医者からじろりと鋭い視線を向けられた。すっと開かれた口の間から、白く尖った歯が覗く。

「患者は？」

意外に低く響く良い声であった。

「こちらです、が」

果たして大きいとはいえない牢の入り口を、彼は潜れるのだろうか。ベッドで眠るミルラを見下ろした大男は、すっとその目を細める。

「開けても構わない？」

「後で修理してくれるなら」

謎の会話が交わされた。直後、大きな両手が鉄格子を掴んだ。まさかと思う暇も無かった。気がついた時には、がこんという重々しい音が続けざまに響き、鉄格子ごと綺麗に取り外されていた。

有り得ない。

呆然とする伊吹を押しつけて、恐竜のような医者がミルラのベッド脇にひざまずく。その姿を見て、漸く硬直が解けた。

医者だというのは本当かもしれない。が、今の有り得ない力技を見せ付けられた後では、彼にミルラの診察を任せることに、大きな不安を感じてしまう。

「おい」

「心配しなくていいよ、弟くん。ああ見えてズガンは天才的な名医だからね」

何だその効果音みたいな名前。伊吹にとって、七海の言葉など何の保証にもならない。しかしここでは悔しい事に、彼らを頼るしかない事も分かっている。

だから。

「これでミルラに何かあつたら、俺はお前達に必ず報復するからな」「へー、何してくれるのかそれはそれで楽しみだよ」

ムカつくほど余裕である。

分かっている。伊吹は無力だ。人一人助ける事すらできない。それでも、だ。必ずどこかに突破口が見つかる筈だ。蟻が象を倒すことだってあるのだ。

油断無く見守る中で、ズガンは手際よく診察を進めていた。腕がよいというのは本当かもしれない。鉄格子を外したその手で脈を取り、熱を図り、首元においた謎の長細い機械で何かを調べた後、採血を済ませた。

持ってきた鞆の中に入っていた長方形の黒い箱、何かの計測器のようなものに採血した血液を入れる。宙に映し出された文字の羅列は、伊吹には読めなかった。次々と流れるように表示されるそれを、ズガンは食い入るように見つめている。

表情の読みにくい、鱗で覆われたその顔が、僅かに顰められたのを伊吹は見逃さなかった。同時に七海も気づいたようだ。

「悪いの？」

「いや……ストロノームだ。病気ではない、中毒症状を起こしている。どこかでギャリニアの種を吸い込んだな」

ストロノーム。

植物に寄生されること。

それは、異界から持ち込まれた病気だった筈だ。伊吹が知っているのは、植物関連の単語だったからである。

寄生する植物は数十種あり、出て来る症状も寄生方法も様々だ。

ギャリニアは、粉のような細かい種を飛ばし、口や鼻から体内に入り込む。喉や鼻の奥等で寄生し、成長と共に毒素を排出し、宿主を弱らせ殺すタイプの植物だ。

やがてその死肉を肥料に根を張り、芽を出し成長する。

「薬を飲めば種はすぐに排除できる。種が消えれば、中毒症状も自然と緩和していくだろう。だが」

重々しい声で、ズガンは言った。

「生憎、ここには除薬の類は置いていない」

そうか。なるほど。だったら簡単な事だ。

伊吹は隣に立つ七海を見た。

「帰せ。今すぐに」

再三要求し、その度にのらりくらりと交わされ続けてきた。しかし、今回は絶対に要求を通らせる必要がある。

「ミルラだけでいい。元々、あんた達の目的は俺だけなんだ。それに、死なせる事はあんた達も本意じゃないんだろう」

「薬を調達するっていうのじゃ駄目？」

「身元のしつかりした医療機関でないと、入手困難な品だ」

「そう」

参ったなあ、と頭を掻く七海を、伊吹は白い目で見た。

「こうなったのも、お前のせいだよ」

ミルラが寄生されたのは、おそらくあの植物園での事だ。ガラスを割って、そこにミルラを置いたのは他にもない、この七海である。

「少しでも責任を感じるなら、ミルラを帰せ。できれば俺も帰してもらいたいものだが、この際妥協する。とにかく、ミルラだけでも」  
「駄目ですわ」

力の無い声で、異を唱えたのはミルラだった。

苦しげに眉根をよせ、いつの間にか青い目を薄っすらと開いてい

る。起き上がろうとするところを、ズガンが押しとどめた。

「ミルラさん」

「駄目ですわ、イブキ」

苦しそうな息を吐き出しながら、懸命に言葉を繋げる。

「こんなところに、イブキ1人で置いて行けません、わたくしなら、大丈夫ですから」

大丈夫だよ

その言葉は、伊吹の古傷を刺激する。

ああ、全くどいつもこいつも。

### 伊吹、約束する 3

病人のたわごとなど聞いていられない。

というか、他に助ける方法は無いのだから、迷う事はないのだ。

伊吹はミルラの言葉を無視して、七海に彼女を帰すことを約束させた。すぐにでも、と思ったが、「こつちも用意っていうものがあるし、そつちも少し話す時間があるだろうから、また後で」と1時間ばかり時間を貰ってしまった。

廊下の壁に立てかけられた鉄格子のお陰で、随分風通しがよくなっている。

風なんて来ないが。

今ならば、他の場所を探りに行く事もできる。

ソファーに座ったまま、伊吹は小さく溜息を吐いた。病人のミルラを放つて行く事はできないし、連れて行くこともできない。

ここに大人しく留まることを見透かされているようで、面白くなかった。

もう1つの頭の痛い理由。

ベッドへ顔を向けると、赤い顔をしたミルラが涙目でこちらを睨みつけていた。

「わたくし、てこでも動きませんわよ」

「通常の状態でも、あのズガンさんに貴方が敵うとは思えませんけどね」

「…っ、あ、暴れますわ」

「やめてください。只でさえ体力が落ちている時に、バカですか。

あんまり世話を焼かせないでください」

そう言うと、ミルラの青い目が一層潤んだ。

罪悪感みたいなものを感じさせる、そういう表情は卑怯だ。だが、

病人だからって甘い顔はしない。

「どうして。わたくしがイブキと一緒にでは無いと嫌だと押し通せば、もしかしたら、2人とも帰してくれたかもしれないわ。本当に、わたくしを死なせる事が本意では無いと言うのなら」

「あいつらは、きつとそんなに甘くないですよ」

そこまでミルラの命を惜しんでくれるとは思えない。何を犠牲にしてもいいような、目的がある奴らだ。

「ミルラさんには、俺の人質というだけの価値しかないんです。だから今この逃げられない状態にある以上、死んでも、逃がしても大した痛手にはならない。だから、逃がしてくれる気になっている内に、逃げてくださいって言っているんです」

最初から、彼らの目的は伊吹なのだ。

(まあ俺も、あくまで吹雪のおまけでしかないけどな)

ああ、でも吹雪に対しての人質というわけではないか。単に、彼の望を叶えているだけに過ぎない。

あの短気で短慮な兄は、義理人情に厚い男だ。気が合わないとはいえ、弟である伊吹を見捨てておくことはできない。だから、こんな事になっているわけで。

(めんどくさい奴……何にも分かってないって、それはこっちの台詞だ)

あの発言には本当にむかついた。今でも時々蘇ってはイラっとさせてくれるという、破壊力のある台詞だ。

「わたくし、怖いのですわ」

「大丈夫ですよ、無事に帰してもらえさえすれば、後は病院に行つて……」

口にしてから、ふと不安が過ぎる。

本当にそうだろうか？

帰したといって、その辺りに捨て置かれていたところで、伊吹に

確かめる術はない。ミルラは少しではあるが、こちらの事情を知ってしまっている。

（まさか、口封じまではしないよな）

そこまで冷酷な奴らだとは思いたくないが、信じる事も難しい。

「違いますわ……イブキのことです」

新たな不安の種について、どうするべきか考えていた伊吹は、その言葉に顔を上げた。ベッドに寝たままの体勢で、ミルラは不安そうな顔でこちらを見上げている。

「この方達が何を考えているか、わたくしにはまるで分かりませんわ。だから、余計に不安になるのだと思いますわ。イブキに何かあったら、わたくし……」

その言葉に、心を突かれたような気分になったが、何でもないふりをした。

「変な心配していないで、無理せず寝ていてください」

「……いやですわ」

拗ねたような顔で言われる。多少幼くなっているのは、恐らく熱のせいだろう。微妙に舌が回っていないし、目もどこか虚ろだ。

「ちゃんと寝て、病気が治ったら、またどこかへ行きましょう」

そんな言葉が出たのは、恐らくこよりと重ねてしまった為だ。元気になったらすることを、いくつもいくつも約束した。

結局どれ一つとして、果たされなかった約束。

「本当に？」

何となく手が伸びた。

よしよしと頭を撫でてやると、ミルラのぼんやりとした目が瞬く。本当に子どものようだった。

「約束します。だから、良い子ですから、寝てください」

「こ、子ども扱いしないでほしいですわ、年は、わたくしの方が…

…」



最後の方になるにつれ、声が小さくなっていく。

熱の高さを知る為に、そっと額に手を置くとミルラは目を閉じた。

「……イブキの手、冷たくて気持ちが良いですわ……」

ほっと息を吐きながら、ミルラはふにやりと微笑んだ。

どうやら眠ったらしいミルラを見下ろして、伊吹は渋い顔になる。深く考えずに約束してしまったが、今のは何か。

『俺、ここから無事に戻れたら、婚約者とデートするんだ』的な、死亡フラグ台詞に通じるものがあつたような。

何だろう、早速悪寒がする。

「意外に優しいんだね」

笑いを堪えるような声に、伊吹は伸ばしていた手を止めた。全く嫌なタイミングで表れる女だ。

ゆっくりと歩いて来た彼女は、部屋の前で足を止めた。

「用意は整ったのか？」

そうじゃなくって、と七海は小首を傾けた。

「さっきのね、ちょっとしたお芝居だよ。ズガンはああ見えて人情家だからさ、ちょっと煩いところあるんだ。だから、これは内緒ね」

七海がポケットから小さな小瓶のようなものを取り出す。中は、青紫色の液体で満たされていた。

「実はさー、あるんだ。除薬」

何だと。

信じられない言葉を聞いた。思わず目を剥く伊吹に対して、七海は悪びれず笑う。更に。

「どついつ事だと思つ？」

というふざけた質問までしてきた。

ズガンは知らない。除薬がここにある事すら、知らなかった。あの態度は芝居とも思えなかつたし、七海がここで嘘をつく理由も無い。だとすれば、あらかじめ用意したのは、していたのは七海だろうか。ズガンにも知らせず？何故……。

「まさか」

最初から、知っていたのか。ミルラがストロノームになる事を。いや、もしかしたら。

「仕組んだのか？」

すべては偶然なんかではなくて。

植物園のガラスが割られていたのも、わざわざ危険植物の中にミルラがいた事も、更に伊吹も七海も同じ場所にいたのに、ミルラだけが運悪くストロノームになった事も？

七海の笑顔がそれを肯定している。

「お前」

怒りがかつと腹の底から燃え上がる。湧き上がった衝動のまま、無意識に足を踏み出していた彼を、七海が華奢な手を伸ばして押しとどめた。もう片方の手の指で持った小瓶を振ってみせながら。

「短気は損気つてね。イブキを説得する自信はなくてさ。だから、大分卑怯だけど人質を取らせてもらったんだよ」

「何が目的で」

「ちょっと攫いたい子がいるんだ。どうしても必要なんだけど、ガードが固くつて。協力してくれないかな」

しないと、ミルラの命は無いつて、悪どいにも程がある。

「それは脅迫って言うんだ」

最低最悪な。

しかし、伊吹には他に選択肢がない。見えない。

(畜生……)

伊吹は笑う七海を睨みつけた。  
いつか絶対に後悔させてやる。

伊吹、約束する 3 (後書き)

## 伊吹、約束する 4

ミルラはいつも伊吹の想像しない事を仕出かす。  
その時もそうだった。

油断していたのは伊吹だけではなかった筈だ。病人で、眠っている（と思っていた）ミルラに注意なんて払っていなかった。伊吹も、七海も。

「え!？」

話をしている最中に、突然ベッドから飛び出してきた彼女に驚いて、反応するのが遅れた。勇ましくベッドから飛び降りた彼女は、そのまま猫のように七海へと渾身の体当たりを食らわす。多分、途中で足が滑って体勢を崩したのが功を成した。

啞然とする伊吹の目の前で、ミルラと七海は床へと倒れこむ。その際、衝撃で七海の指から小瓶が離れるが見えた。宙へと投げ出されたそれは、すぐに重力に従って落下を始める。

咄嗟に動けた事は奇跡だった。

思い切り手を伸ばしながら、飛び出す。指の先が小瓶にぶつかって撥ね上がる、軌道を変えたそれに肝を冷やしたが、何とかつかむ事ができた。ほっとするのも束の間で、直後勢いのついたまま硬い壁に激突した。

痛い。

これは絶対に内出血を起こした。

ああしかし、痛みに呻いている暇は無い。

「ミルラ、そのまま動くな!」

上半身を持ち上げかけていたミルラは、はっとした様子で七海の

腹の辺りに再び頭を戻す。伊吹も起き上がろうと手を着く七海の肩を押さえた。その拍子に、床に戻された頭の辺からかなり痛そうな音がしたが、無視だ。

「ちよ、痛……」

更に掌で七海の口を塞いで押さえる。

魔法とか使われたら厄介だ。そうやって2人がかりで押さえ込み、まずは口と両手を着ていたシャツと、ベルト代わりの革紐で縛る。それから余裕を持って、クローゼットの中を漁り、使えそうなものでとにかく上半身をぐるぐるに巻いてやった。

ついでに自分の着替えも済ませる。

「むー、うー、ううー」

糞虫のような姿で床に転がる七海を見下ろし、伊吹は会心の笑みを浮かべる。

「良い格好だな」

「えうー」

何やらもごもご言っているが、今は構っている暇は無い。

「ミルラさん」

壁にぐったりともたれているミルラへ声を掛ける。無理をしたせいで、具合が悪くなったのだろう。赤い顔でせいぜいと苦しそうに息をしている。

「無茶するからですよ。全く……。上手く行ったから良いですけど、下手をしたら薬が無くなっていましたよ」

その事を考えるとぞっとする。

「それでも、良いと思ったんですわ」

「は？」

「わたくしの、せいで、イブキが悪事に手を染めることも、意に沿わないことを、するのも嫌……。絶対、駄目ですわ」

伊吹ははつと目を見開いた。

そんな事の為に？自分が死ぬかもしれないというのに。  
潤んだ青い瞳でこちらを見上げるミルラへと手を伸ばし、

「この馬鹿！」

その頭を叩いた。

これが病人ではなかったら、拳骨を食らわしていたところだ。

「な、何するんですの！」

「言っても分らない奴には、鉄拳制裁。貴方は馬鹿か。そんな事の為に、簡単に命を賭けるな！」

「な！馬鹿つて酷いですわ！」

「酷くない、本当の事だからな」

悪事だろつが、意に沿わぬことだろつが、それが必要ならばするだけだ。誰かの助けや良心など待っているだけ無駄だ。

守れるのは、頼れるのは自分だけ。

手段を選べるほどの力も知恵も無い。卑怯だろつと、臆病だろつと、醜悪だろつと。

(だから)

誰かに命を賭けてもらう資格があるような、そんな男ではない。  
誰かに惜しんでもらえるような価値は無いのだ。

「そんな事で貴方が死ぬくらいなら、一生悪事でも働かされていた方がマシだ」

苦々しく呟いて、伊吹はミルラの手を掴んだ。何故か金魚のように真つ赤な顔で口をパクパクしているミルラを引き起こす。掴んだ手は酷く熱く、足元がふらついていた。

無理ができるような状態ではないが、いつまでもこんな所でのんびりしているわけにもいかない。薬を飲めば種を排除することは

きる。すぐに症状が良くなる事は無いが、先に薬だけは飲ませておいたほうが良いだろうか。

伊吹は手にしていた小瓶を、ミルラの手に渡した。

「今の内に飲んでおいてください」

「はい。……全部でしようか？」

「んー！うー！ぬー！」

ミルラが小瓶の蓋を開けようとした途端、七海が大げさに騒ぎ始めた。

「ふー！むうめー！」

無視することが憚れる煩さ、必死さである。何となく予感することもある。伊吹は七海の口を塞いでいたシャツを、少しだけずらしてやった。

「それ、薬じゃないから！」

開口一番の台詞に、思わず眉間に皺が寄る。

「何だつて？」

「だから、嘘なの。色が似てるから持ってきたけど、殺虫液だよ！飲んだら大変」

「……お前」

いや、待て。それこそが嘘だつていう可能性もあるのでは。だが、どちらか確かめることもできない以上、飲ませる事はできない。

「だつてしょうがないよ、本物を持ってきて交渉なんて、危なくつてできないよ普通。ズガンが鉄格子外したままで行っちゃったし、万が一割っちゃったりしちや元も子もないしね」

まあ、確かに。

つて思えるか！

「本物はどこにある？というか、本当にあるのか？」



「勿論。あたしの部屋にちゃんと保管してあるよ」

「案内」

伊吹は、七海を縛る時に取り上げた果物ナイフを彼女の首に突きつけた。他には何だか分からない丸い平たい二枚の軽い物体と、カードキーを2枚手に入れている。

「まー、まー、弟くん。ここは穏やかに行きなよ」

「そうして欲しかったらさっさとしろ」

「いや、これじゃ1人で立てないし」

手を後ろで拘束しての、腰の辺りまでシートでぐるぐる巻いた状態を眺め、伊吹は考えた。

この状態にしてなお、油断はできない気がしていた。

彼女には散々騙されているだけに、警戒も沸いてしまう。上手く部屋まで案内してくれるかも、更に素直に薬を渡してくれるかも不明だ。

この際、人質にして、脱出した方が良さだろうか。

上手く外へ逃げることができれば、病院でちゃんとした治療を受けさせることができる。

ふらふらのミルラを抱えて、更にこの厄介そうな人質を連れて進むのは、非常に骨が折れそうだ。だが、この場所がどういうところなのかも、更にどれだけの人間がいるのかも分からないのに、2人だけで出て行くのは無謀に思えた。

伊吹は再び七海の口にシャツを巻き、紐をひっぱる形で起き上がらせた。足は縛っていないので、歩く事はできる筈。

「妙な事はするなよ」

ナイフを首元に近づけて言えば、七海は二度ほど頷いた。……どこか楽しげですらあるのが、一々気に障る。

「ミルラさん」

冷たい壁に顔を寄せていたミルラは、小さく頷いて顔を上げた。

「歩けますか？」

「大丈夫、ですわ」

気丈に言うが、足元が覚束ない。伊吹は左手を差し出した。

「掴まってください。体重かけても良いですから」

「ありがとう、イブキ」

ミルラは嬉しそうに微笑んで、その腕を取り額を預けるように身を寄せてきた。熱い体温が伊吹を不安にさせる。

本当なら、安静にしておかなければならない筈だ。

無理をさせて良いような状態ではない。

良いのか、本当に？

浮かんでくるこよりの面影が、伊吹の決意を鈍らせる。しかし、もう引き返せない。思い切って通路を進み、すぐさまぶつかる黒いドアに、手の空いているミルラがカードキーを滑らせる。

しゅ、と音を立てて横にスライドしたドアの向こうに、早速人影が見えた。

「あら」

ぎくりと強張る伊吹を見つけて、その人物は驚いたように目を丸くした。

「見つかったかった」

悪戯が見つかった子どものように笑う女に、伊吹は言葉も出ない。

ルーミケラウス。

死んだはずではなかったのか。

## 伊吹、約束する 5

狭い通路を塞ぐ形で、彼女は立っている。

死んだと伝えられていたルーミケラウスが、生きていた。

(本物、か?)

目の前の女と、自分が知るルーミケラウスに差異はないように思えた。他人の空似というレベルではない。

確かに死体は見つからず、捜索中だと言っていたが。見つからない筈だ。まだ死んでいないのならば。

長い髪を1つに束ね、相変わらず露出の高い服を着ている。赤いタンクトップのような上は丈が短く、腹の辺りは丸見えだ。黒いぴっちりした短パンに、透かし模様の入った橙の布を腰に巻きつけ斜めに垂らしている。

健康そうな肌艶といい、かなり元気そうだ。

「何がどうなっているんだ」

伊吹の問いに、ルーミケラウスは肩を竦める。

「ナナミったら、何ドジ踏んでいるのよ。それともお遊びの最中だった?」

「むーふうー」

「うふふ、なあに言ってるのか全然分からないわあ。楽しい?そっちの可愛い女の子は随分具合が悪そうね」  
そうだ。

腕にある、重みと熱を意識する。驚いている時間は無い。ルーミケラウスが生きている理由も意味も、伊吹には関係のない事だ。本物だろうと良く似た誰かだろうと、どちらでも良い。

この場にいる以上、伊吹の敵だ。だったら、言う事は1つ。

「ここから出せ」

七海の首元に再びナイフを突きつけて告げると、ルーミケラウスはアーモンドのような形の目丸くした後、からかうように微笑んだ。「ちょっと見ないうちに勇ましくなったわねえ、イブキ。でも、本当にできるの？ここにいるのは、私達みたいな弱い女ばかりじゃないし。ふらふらなお嬢さんを連れて立ち回るのは、ちょっと大変だと思っわよ」

「真正面から喧嘩を売ることなんて、最初から考えてない」  
「なるほど、作戦があるっていうわけね」

腕を組み、余裕の表情で「お姉さんに聞かせてみなさい」とか、完全に舐められている。そんなところで、次の発言をするのはかなり気が引けたが。

「死んでやる」

「は？」

「どんな手を使ってでも、死んでやるって言っているんだ」

「……どんな脅しなのよ、それ」

……うるさい。放っておいてくれ。自分でも、情けない発言だという事は良く分かっている。

七海もルーミケラウスも訝しげな顔をしていた。しかし、その発言に最も驚いていたのは、ミルラだ。青さと赤さを混合したような酷い顔色で、それこそ死にそうに苦しそうな顔で、不安そうに伊吹を見上げる。

「イブキ、何を言っていますの」

「情けないが俺には何もない。力は元々自信がないけど、頭の方だつて多少は良いけど、それだけじゃ足りないっていう事くらい分か

っている。だから、なるべく地味に堅実に生きていこうって思っていたんだ。こんなわけの分からない異世界じゃ、余計に」  
それを悉く邪魔しやがって。

誰も彼も、何故伊吹を放って置いてくれないのだ。

「俺にとつちや、迷惑な話だけだな。俺が今ここに居るのは、吹雪が頼んだからだろ。あいつは馬鹿だけど、身内を見捨てるような奴じゃない」

まあ、それが迷惑の元で、こんな事になっている元凶でもあるわけだが。

「だからもし、ここで俺が死ねば。お前達にダメージはなくても、吹雪は違う。もう、ここには俺くらいしか話のできる家族はいないから、余計にな」

伊吹がここにいるのは、吹雪の為だ。

彼らにとって、伊吹に価値は無いかもしれないが、吹雪には価値がある。敵対者、だからなのか。それとも他に意味があるのか。まあ、どうだって良い。問題は、吹雪を通せば伊吹自身にも価値が出て来るという事だ。

「もう一分一秒たりともこんな所に居たくない。本物の薬を渡せ。それからミルラと俺をここから出せ。叶わないなら、死んでやる」

伊吹が武器にできるのは、正にその身ひとつだった。

七海が不自由な半身を捻って、伊吹を睨みつけた。ぶんぶんと首を横に振って、何かをしきりに訴えている。シャツを外してやると、早速怒鳴られた。

「アンタはどうしてそこまで分かってるのに、分かんないんだ！」  
いつもどこか飄々と人を上から見下ろしているような彼女の、そ

んな風に感情をむき出しにした姿は初めて見る。

「フブキはアンタの心配ばかりしてたよ。自分の方が大変で、それどころじゃないのに、全部後回しで。なのにアンタは何よ。どうしてたつた一人の家族の味方になってあげないんだ！」

「本当に俺の為を思ってるって言うんなら」

関わらないでいてくれると有り難かったのだが。

思わず笑ってしまう。

「誰かの為なら、何をしても許されるっていうのか？思いやりから愛情から出た行為だから許せて、我慢しろって。そんなの、結果を見通せない唯のエゴでしかないだろ」

伊吹の気持ちなどそこには無い。

こよりの望みだったかもしれない。

だけどその行為は確かに彼女に死を導いた。こよりがいなくなつた時、どれだけ皆が心配したか。半狂乱になっていた母の涙。青褪めた顔で探し回っていた父の小さく見えた後姿。

突然こんな所に連れてこられたあげく、故意に病気にさせられたミルラ。それも下手をすれば、命に関わるような。

（誰が許したって）

「俺は許さない。お前らも、吹雪も」

外へ向けていたナイフを、自分へ向ける。

不思議だが、人に向けるよりはずっと、気が楽だった。

「イブキ！」

しかし、反撃は思わぬところからやってくる。掴まっていた腕を振りほどき、ミルラがナイフを持っていて腕へしがみ付いて来た。ナイフの先が危なっかしく揺れて、肝が冷えた。

殺す気か！

「ちょ、やめる、ミルラ！」

「いけませんわ！死ぬなんて！イブキがし、死んだりしたら、わたくしっ……」

「落ちていてください、只の脅しです……今はまだ」

「えい」

その隙を、見逃される筈はなかった。もみ合うミルラと伊吹へ、七海が体当たりを仕掛ける。2人分の体重を伊吹が受け止められるはずはなく、敢え無く床に転がった。

しかしナイフは死守してある。

起き上がる事もできないが。

「しづといなあ」

「そっちこそしつこいんだよ。さっさと諦めて俺達を解放しろ。もう俺は、ここで大人しく監禁されている気は無い」

「……そうねえ、もう諦めたら、ナナミ」

思わぬところから応援が入った。腕を組み、呆れたような顔でこちらを見下ろすルーミケラウスだ。

「イブキは頭固いわよ。ここで死なれたら面倒っていうのは、確かにその通りなんだし。ここに置く事に拘る必要は、もう無いでしょ、どういう事だ？」

伊吹の視線に、ルーミケラウスは小さく首を横に振った。

「フブキがちょっとね、変なのよ。こここのところ、ずっと眠っているの」

瞳に、物憂げな色が浮かぶ。

「もうこのまま、“フブキ”は二度と目覚めないかもしれないわ」

その言葉は、妙に重く伊吹の胸に響いた。

『助けてあげて』

そう言われて、頷いてしまったのは、一体いつの事だったのだらう。

男は灰色の夢を見ていた。

世界が剥がれ落ちていく夢。大勢の人々が涙を流し、絶望し、それを呪う。

見上げれば、破れた空が見える。

青空の下で何も知らず幸せそうに笑いあう人達がいて、それは酷く残酷な現実だった。

憎い、どうして、悲しい、苦しい。

本当はただ。

男は一度目を瞑り、それから地上へ目を向けた。ひび割れ黒く焦げたような大地の上に、立ち竦む痩せた少女が1人。

男は無言で彼女へと手を差し出す。少女は大きな瞳を瞬いて、やがて小さく笑った。

「私は、ジューエ」

忘れないでね。



## 志真と繋がる運命と 1

考える、考える、考える。

どうすれば良いのか、自分に何ができるのか、何を信じて、何を自分の敵とするのか。

「シマ！」

ノックも成しに部屋に飛び込んできたフィオーネは、驚く志真に抱きついてきた。一瞬だけ見えた顔は、今にも泣きそうなものだった。肩に回された腕も細かく震えている。

あの時と一緒にだ。

志真が妙な水溜りに飲み込まれて、戻って来た後。勿論、すぐにごごへ帰って来たわけでは無い。保護施設であれこれ事情を聞かれて、身体検査を受けて、事故のショックで混乱有りと診断を受けた為、一晩泊まって様子を見た後、戻された。

戻って来た志真を見たフィオーネは、丁度今みたいに泣きそうな顔で迎えてくれた。良かった、と言って。家族みたいに抱きとめて迎えてくれたのだ。

「どうしたの、フィオーネ」

「イブキが見つかったって。ミルラさんも無事よ。詳しくは教えてもらえなかったけど、命には別状ないし、酷い怪我もしていないって」

いっさんが。

「良かった」

のかな。

伊吹には色々な疑惑が持ち上がっていた筈。簡単に疑いを晴らす

ことができるのだろうか。

「戻ってこれる？」

「暫くは、また検査とか調査とかで無理みたいね」

黙りこむ志真を励ますように、フィオーネはその肩を撫でた。

「大丈夫よ、ちゃんと帰ってくるから」

本当は、フィオーネだつて不安な筈なのに。本当に、良い人だ。

(でも、フィオーネはきつと何も知らないんだ)

保護施設。

今の志真にとっては、その名前は悪の秘密結社みたいな印象になっていた。

緑色の水溜りに落ちた後の事は、覚えていないと志真は言った。

大泣きして、取り乱していたのが幸いして、その嘘はあっさりと信じられたようだ。

そう、嘘である。

本当は覚えていた。

(忘れる筈ない)

「痛っ！」

水溜りには底がなく、ぬるりと滑るようなぞつとする感触が、つま先から頭の天辺までを撫でて行った。視界がもやもやと薄暗く濁ったかと思つたら、次の瞬間ぱつと開けた。

青黒く光る壁が眼前に迫る。反射神経はいい方だけど、これは無理！成す術もなく、志真はその壁に激突していた。

思い切り鼻をぶつけた後、反動で後ろへ傾いた。目の奥で白い火花が飛び散っている。あまりの痛みに呻きながら鼻を押さえ、その場にへたり込む。鼻の奥が熱い。濡れた感触が落ちてきて、確認す

ると思った通り鼻血が出ていた。

「うづ…、何、何なわけ」

涙目で鼻を押さえながら、鞆を漁る。生憎ハンカチしか見つからなかった。薄い黄色の花柄のハンカチを犠牲にして、何とか鼻血を押さえながら、志真は周囲に目をやった。

薄暗い部屋だ。それに何だか寒い。

外を歩いてきた筈なのに、いきなり室内とか怪しすぎる。こづい  
う経験は、2度目だ。

「また、違う世界に来ちゃったとか」

そんなだったらどうしよう。

戻れたのだしたら、大歓迎だけど。

「あ、下、草だ」

通りでがさが音がすると思った。鼻を押さえしていない方の手で、  
ゆっくりと草を掻き分ける。その下は地面ではなく、壁と同じよう  
な色をした硬い石（金属）だ。

何だこれ。

この不可思議さ、どうやら日本に戻れたわけではなさそうだ。（

その線は最初から期待してなんかいなかったけど）

「だれ？」

唐突に沈黙を破った何者かの声に、志真は思わずハンカチを取り  
落とした。

人がいるという可能性を、思いつかなかった自分に驚きだ。薄暗  
くてよく分からないが、ここは外なんかではなく室内。

不可抗力とはいえ、志真の立場は不法侵入者だ。

「ご、ごめん、私、あの」

あー、何て言い訳すれば良いんだ！

とにかく謝り倒すしかない。志真は声の主を探して、部屋の中を見渡した。大分目が慣れてきたようで、部屋の様子が見えてきた。窓もドアも確認できない、箱みたいな部屋だ。広さは結構あって、10畳くらい？床にはびっしりと植物が生えている。

「……………つて、あれ？」

誰もいないぞ。

誰かの声を聞いたと思ったのに。幻聴だろうか。

「新しい、人？」

耳のすぐ後ろに息遣いを感じて、志真は飛び上がった。

「ひよわぁ！」

ホラー映画とかでも、一番怖いのはこうやって安心しかけたところで突然出て来る場面だと思う。

あわあわと、床を這うように移動して、振り返る。

一番最初に目に入ったのは、白だ。

白い服を着た、細身の少年。白い肌に、青みがかった銀の髪。柔らかに閉じられた瞼を縁取る睫毛も、銀色だ。

「え」

と、思わず呆けた声が出る。

だって、まさか。いや、でも似ている。最も、志真の知っている彼は、常に目隠しをしていた為、本当に似ているのかは分からないのだが。

顔は、でも髪の色や鼻から下の感じは。

「も、モク？」

恐る恐る呼びかけると、少年は小さく首を傾けた。そのゆっくり

とした動作は、やはりモクと通じる。

「そうだけど、君は？」

「え」

「誰？」

その言葉は容赦なく志真の心臓を抉ってくれた。

シヨックだった。

ずっと会いたかったのに。会えたと思ったら「誰？」ってあんまりじゃないか。

(いや、ちよつと待って。この人って本当にあのモク?)

似ているとは思うし、本人も肯定した。でも、何だか彼は志真の知るモクとは、雰囲気が違う。目隠しだっしていないし、普通に喋っているし。

何より普通、忘れるか?……モクが自分を忘れる筈がない、この辺は願望だ。

同名の良く似た他人、とか?それとも、兄弟とかそういう。

「僕は1人だよ」

「え？」

「兄弟はいない」

口に出してはいない、筈だ。志真は思わず口元へ手をやった。濡れた感触に、鼻血を出していたことを思い出す。

うわ、酷い。

慌てて手で顔を覆いながら、志真は俯いた。よりにもよって、こんな顔を見られるとは。赤面しつつ、落としたハンカチを探す。

「これ？」

志真の血がついた、薄い黄色のハンカチを少年が差し出す。

「あ、ありがとう」

何だかもう泣きそうに惨めな思いを感じつつ、志真はそれを受け取った。

どうしよう。やっぱりこの人はモクかもしれない。

モクもこの彼と同じように、言葉にしなくても志真の言いたい事を分かってくれていた。知らない筈の日本語も理解してくれて、改めて考えると何だか謎だ。

分からないけど、もしもこの人が本当にモクなら。

「ここは、異世界人保護施設なの？」

試すように日本語で聞いた質問に、モクは小さく頷いた。

「そう聞くということは、君は知らずに来たんだね」

「う……ん。学校に行く途中だったんだけど、変な水溜りに落ちちゃって。気がついたらここにいる。何か、よく分かんないんだけど」  
うーん、と頭を捻った後、志真はある結論に達した。

「あ、ひよつとしてこれって夢？」

「え？」

「何か色々と変だし。でも夢なら都合よくモクがいても不思議じゃ無いかも」

「……………」

ならば、忘れられているってというのは、心の奥底にある「こうなったら嫌だなー」が反映された結果だろうか。

志真は改めて怪訝な顔をしているモクを眺めた。

顰められた眉があるせいか、志真の知る彼よりも表情が豊かに見える。一番大きな違いは、やはりあのインパクトのある目隠しが無いことだ。

それなのに、何故目を閉じているのだろうか。

（私がモクの目の色を、知らないから？）

殆ど無意識で、手を伸ばしていた。

指先がモクの白い頬に触れると、彼はびくりと肩を震わせるようにして後ろに下がった。

「何するの」

「え、あ、ごめん。何で目を閉じているのかなって」  
「……………」

薄い唇を引き結び、彼は困ったように首を傾けた。

「君は、誰？」

何だか途方に暮れたような声だと思った。

## 志真と繋がる運命と 2

夢なのか、それとも彼は志真の知るモクではないのか。

どちらにしても、知らないというのなら名乗らなければならぬ。

「私は志真。灰谷志真、名前は志真の方ね。えーっと、ちょっとでもこう聞き覚えとかない？」

少し考えるように間を置いてから、モクは首を横に振った。聞かなきゃ良かった。何だかがっかりしてしまう。

「貴方は、モクで良いんだよね？」

頷く仕草とかは本当に、志真の知っているモクと同じなのだが。

「私、モクとは友達のつもりだったんだけど」

少なくとも、今のところは。

拗ねるような気持ちでそう言うと、モクは呆気に取られたような顔になった。相変わらず目は閉じているものの、小さく口が開いている。

「友達……僕と？」

「そう……っていうか、そっちが、私の知ってるモクならんだけど」  
大分止まってきた鼻血を拭う。どこかに血がついていないだろうか。鏡がないと分からない。

「ねえ、ここに鏡とか……ひえ!？」

顔を上げた志真は、すぐ目の前に少年の白い顔を見つけて飛び上がった。驚く志真のことなど構わずに、モクは鼻先を首の辺りに近づける。

「な、な、何何なにー!」

匂いを嗅がれている？犬か。モクは時々動物っぽい仕草をするって……そんな事はどうでも良くて、近い、近すぎる！目を開けていないから、適度な距離が測れないのだろうか。のけぞるようにして



離れるが、出来た距離の分だけモクは追ってきた。

「モク！」

いっばいっばいになって叫ぶと、漸くモクは志真から離れた。真つ赤な顔で汗まで掻いている志真に比べて、モクの白い肌は少しも色を変えていない。平然としている。

(なんか、再び負けた気分……)

モクは顎に手を添えるようにして、難しい顔になった。

「……不思議だ」

志真からしたら、モクは不思議だらけだが。

「さっきは血の匂いが濃くて気がつかなかったけど、どうしてだろう。君から僕の匂いがする」

「に、匂い？何？」

しかも『僕の匂い』って何！

「微妙だけど、僕の守りの気配があるんだ。不思議だ。僕には覚えが無いけど、僕は君に会ったことがあるんだろうか」

じつと見つめられているような気がした。相変わらず目は閉じられていたけれども、何といえれば良いのだろうか。モクの全神経が自分へと向けられているような気がするのだ。

(な、何か緊張……する)

ごくり、と唾を飲み込む音がやけに大きく感じて、うるたえた。

夢とは思えないリアルさだ。

だんだん夢だと思い込むことも難しくなってきた。だとしたらどういう事になるのだろうか。この人は、本当にモクなのか。モクなら、どうして志真のことを知らないなんて言うのか。

「も、しかして、モク、記憶喪失？」

ぱつと閃いた言葉を口にした途端、何だかありそうなことに思えてきた。保護施設で何かあって、それで記憶を無くした、とか。

「モク、他の人の事は分かる？」

「他の人？」

「そうそう、学校の皆だよ。二ト口とか、アルジャラーとか、ハルさんとか、じーさんとか……あと、リキキとキリリとかもね」

リキキの辺りは思い切り小声になってしまったのも仕方が無い。

(私の事忘れてるのに、あっちを覚えてるとか、シヨックだし)

そんな密かなもやもやに蓋をして、志真は眉を顰めているモクを見た。

「覚えてる、よね？」

ゆっくりと首を横に振ったモクは、困ったように首を傾げる。

「学校、って何？」

「え！そこから!？」

思ったより事態は深刻だ。一体どれだけの記憶を、モクは失ってしまったんだろうか。そしてそんな事になる原因とは一体。

何だか悲しくなってきた。

「ごめんね、本当にごめん、モク」

「どうして君が謝るの？」

「だって、モクが保護施設に入らなくちゃいけなくなったの、私のせいだもん」

「？」

「今のモクは覚えてないかもしれないけど、モクは私を助けに来てくれたんだよ。でもそれで、保護法違反？何か、駄目なことしちゃったみたいで、モクだけまた施設に入れられちゃって」

鼻の奥がつんとしてきた。じわじわと涙が滲んできたので、志真

はそれを抑えようと額に拳を押し当てた。

「私、何にもできなくて」

「勘違いだよ」

「え」

「僕は記憶を無くしていない。僕は君を知らない、学校も他の人も。だって僕は、もう何十年もずっとここから外に出ていない」

記憶をなくした記憶すらないのでは。そう思ったが、それよりも衝撃的な発言があった。

「な、何十年とか、言った？」

何週間とかの間違いではなくて。

「うん」

あっさりと、モクは肯定する。

「冗談、じゃないよね？何それ、どうということ……」

もしも志真たちの記憶を失っているのだとしても、それ以前の記憶は残る筈だ。その記憶が、何十年も閉じ込められているというものかというのか。

「……モクって、何歳？」

「ちゃんと数えたことが無いから分からない。でも、2000年くらいは生きている気がする」

長寿過ぎる。

自分とそんなに年が変わらないように見える少年を、志真はしげしげと見やる。モク流ジョークではないのか。確かに二トロも、モクの年は分からないとか、結構生きているらしいとか言っていた気がする。

自己申告の年が正しいのだとしたら、何十年も閉じ込められているという発言にも真実味が出てきた。

でも、どうして？

自分の時は、追い出されるような勢いで外に出された。危険性がないと判断されたからだ、二ト口は言っていた。逆に危険な力を持つ者は、それだけ審査も厳しくなるということだ。

モクは、どうして。

「僕は、呪いを持った竜だから」

志真の心の中に浮かんだ疑問に、モクは淡々と答えを与えた。

「呪い？」

「僕の目を見たものは、皆死ぬ。そういう呪いを持って生まれた者を、僕の世界では命者と呼ぶ。死者の国を統べる神が、足りない命を狩る為にこの世に送り出すのだ。命者は神殿から出ることを許されない。間違った命を狩らないように。そこで、罪人の命を狩る役目を与えられる」

ちかちかと、目の奥で点滅する光。

そこで志真の知らない世界を、モクの姿を見ているような気になった。言葉としては理解できないのに、伝わってくるものがある。

志真には見えた。

薄暗い冷たい石の壁に囲まれて、たった一人で空を見上げているモクの姿が。胸が痛くなるような、寂しい光景だ。

「あまり、見ないで。君の魂を迷わせてしまう」

モクの白いひんやりした手が、いつの間にか志真の目を塞いでいた。真つ暗だ。

「何？」

「僕の声も、本当は良くない。届きすぎるから」

優しく触れていた手をそっと外すと、モクは微かに微笑んだ。

「世界が変わっても、僕は変わらなかった。僕の目は誰かを殺すし、

僕の声は誰かを惑わす。だからここにいる。それだけ。君が寂しく思うことはないよ」

目を閉じているモク、目隠しをしているモク。

彼の話の聞いているうちに、自分が何も知らないことを思い知ってしまふ。どうしてモクが目隠しをしているのか、喋ろうとしないのか。その理由を、志真は知らずにいた。

何にも、知らなかった。

「不思議だ。君が悲しいと、僕も悲しい」

唇を噛む志真の顔へ、モクは手を伸ばした。

「君の中の僕の知らない僕の記憶。それが、謎の答えになるのだろうか。教えて、シマ」

囁くような声に背中を押され、志真は口を開いた。

### 志真と繋がる運命と 3

学校のこと。モクのこと、ニトロやアルジャーラー達のこと。

モクは熱心に耳を傾けた。本人との思い出をこんな風に語るなんて、少しばかり気恥ずかしい。おかしな状況に困惑したが、次第に気にならなくなった。

このモクは何も知らない。

だから、事細かに説明していかなければならなかった。

「学校つていうのは、勉強するところ。私達が行つてるところは、外で自立して生活していく為に、必要な事を覚える場所だよ」

「そこに僕が？」

「うん」

「僕には縁のない場所のように思えるけど」

心底不思議そうにモクは首を傾げる。

彼の言葉が真実なら、モクはこの世界に迷い込んでからもう数年も、ここに閉じ込められているのだ。もうそれが、当たり前的事になっているのかもしれない。

何だか悲しかった。

モクが学校に通えていたのは、どんな奇跡だったのだろう。それを志真の為にぶち壊してしまったのだ。もしかしたら、モクが記憶を失っているのは、保護施設の人達が何かしたせいなのかもしれない。この世界には、そういう技術があるのかも。

(何かそれが正解な気がしてきた……ど、どうしよう、どうすれば) こんなのとても志真1人の手に負えるようなことじゃない。誰かに相談して。

「そのニトロという人は？」

言葉にはしていない。ぱつと頭に浮かんだ人の名を問われて、志真は目を丸くした。

「あ、えっと、二トロはクラスメイトで友達。モクを最初に紹介してくれたのも、二トロだよ。目が三つあって、いつつもニヤニヤして人をからかうけど、困った時には助けてくれるし、頼りになる人だと思う。モクとも仲が良くて、大体いつつも3人で勉強してた」  
二トロなら、何か良い方法を思いついてくれるかもしれない。それとも、無理だから諦めろというだろうか。

「後ねアルジャーと、じいさん。この2人は割りと学校に来るんだけどさ、大抵眠っちゃってるんだよね。日当たりいいところで、気持ち良さそうにしてるから、私も時々混ざりたくなっちゃって」

「その人達も、友達……」

「うん。私とモクの友達」

「君の話は不思議だ。僕が外にいて、友達までいるなんて」

「覚えてないかもしれないけど、実際そうだったんだよ」

どうしたら、思い出すことができるのだろう。こんなのは、余りに寂しい。記憶喪失には、強い衝撃を与えるといいとか、うる覚えのベタな手法しか生憎浮かんでこなかった。

「君の言葉は真実だ。でも、僕は記憶をなくしていない」

これはどういう事なんだろう。不思議そうに首を傾げるモク。単に記憶をなくしているという感覚が、無いだけではないだろうか。

記憶を取り戻すことについての良い考えは、まるで浮かばなかった。

志真にできる事は、ただただモクに記憶を渡すことだけだ。同じ体勢でいるのは疲れるので、どんどん姿勢を崩していった。最後にはごろりと硬い草むらに寝転がって、思いつく限りのことを伝える。どのぐらいの時間が経っただろう。

窓も時計も無いから、何も分からない。

その内に、志真が行方不明だと騒ぎになるかもしれない。ここに見張りとか、食事を運びに施設の人が来て志真を見つけたら、それこそ大問題になるんじゃないだろうか。

不可抗力、なのだけど。

それを信じてもらえるとは思えなかった。このままでは、またモクに迷惑がかかってしまうかもしれない。(それは、駄目だ。絶対ダメ！)

志真ちゃん

「え？」

不意に呼ばれた気がして、志真は思わず起き上がった。モクの声では無い。か細い女性の声だった。

「聞こえた？」

「うん」

モクにも聞こえたという事は、幻聴とかでは無いようだ。

「シマ」

「へ？」

「シマの体の回りに何かある」

自分の体を見下ろして、志真はぎょっと飛び上がった。

「な、何これ!？」

薄くだが、緑色のもやもやしたものが、体の回りを覆っている。

何だか黴みたいだ。

志真ちゃん。

誰かが志真を呼んでいる。その度に、志真の体を覆う緑の膜が濃くなっているような気がした。非常に不気味だ。

「うっ、ヤダ……気持ち悪い」

息ができないとか、痛いとかそういう害は今のところ無い。無い



が気分は良くなかった。何とか振り払おうとするものの、霧のようなそれはびったりと、志真の体から離れない。

「誰かが君を呼んでる。どこだろう……、とても、遠い」

モクは、考え込むように宙に顔を向けてから、

「そう……そういうこと」

と、微笑んだ。

「君は未来から来たんだね。怖がらなくていいよ、シマ。君は元の場所へ戻るだけ」

「え、な、何？未来って！」

「どういうこと!？」

全身を隈なく覆う緑の膜に動揺しつつも、志真は懸命にその言葉の意味を考えた。元の場所へ戻るといふ言葉に、妙な胸騒ぎがして思わず指を伸ばす。モクの冷たい手を掴もうとしたのに、それはすりとすり抜けた。

「なっ！」

有り得ない光景に、志真は更に混乱を深める。

「やだ、モク、私」

「悲しまないで。僕は嬉しい。この先に、君と会える未来があるって分かってるから」

「何言ってるかわかんないよ！モク！私ここにいる、出られないって言うなら一緒にいるよ！」

それで何処に行けなくなっただけで構わない。

「……僕に会いに来て、シマ。ずっと、待ってるから」

柔らかく微笑んだモクの顔が近づく。ふっと額に呼気を感じた瞬間、柔らかい暖かいものが触れた。ぴりりと痺れるようなむず痒さが、一瞬で触れた場所から全身を駆け巡る。眩暈がした。視界がぐるぐる回って、すぐ目の前にあるモクの顔が良く見えない。

「モク」

「またね、シマ」

それが最後の言葉だった。

耳元でざわざわと鳴っていた音が、一斉に止む。そして。

志真ちゃん！

菊乃の声だ。そう思った瞬間、誰かに腕を掴まれていた。ぐんと世界が一回転するみたいな感覚がして、気がつけば酷く眩しい場所にいた。目を開けていられなくて、思わず瞑る。

柔らかい風が志真の頬をなでていく。

ここはモクといた、あの四角い部屋ではない。外だ。志真一人で、外に出てしまったのだ。あそこに、モクを置いて。

(私だけ……)

\*\*\*

「やっぱり、そうなんだな、ハイタニ・シマ。彼女が」

何の変哲もない、特別な能力の1つも、特異点も見られない単なる不幸な世界喪失者だった。あまりにも平凡で、だからこそ自分が立てた仮説であっても、疑わずにはいられなかったのだが。

今、その正しさが証明されたのだ。

「こう繋がるのか、面白いもんだ」

モク、という異世界人の事は、彼ら異世界人の中でもかなり有名な存在だった。目を見ただけで人の命を奪う事ができる。言葉で他者を支配し、耳で人の秘密を暴く。その気になれば、触れたものに命を与えることすらできるのだという。

彼を人ではなく、神だと噂する者もいた。

どこまでが本当かは知らない。

だが実際に彼はこの世界に落ちてから60年近く、保護施設の地下で隔離され続けてきた。それだけ危険だという事は間違いない。そのモクが外に出たというのは、正に奇跡のような大事件だった。色々な思惑を持つ者達が、こそつて彼に近づき、取り入ろうとした。だが、全ては無駄に終わる。彼は既に主従の契約を結んでいたのだ。

その相手が誰なのか。

その意味を知る者はそれこそ血眼になって探した。見つかる筈も無い相手を。そう笑えるのは、それこそ全ての事情が知れた今だからこそ。

志真はモクを慕っていた。だからこそ寸道は志真に道を開いた。過去に繋がったのは、運命としか言いようがない。そこでモクは志真と主従の契約を結ぶ。モクは外へ出て、再び志真と会う日を待っていたのだ。

二つ目を閉じた三つ目の男は笑う。

「何が起こるか、楽しみだ」

## 菊乃の理由 1

どうして。

悲痛な声が菊乃の耳に残っていた。「どうして呼んだの」大粒の涙を流しながら、志真は菊乃を責めていた。

どうしてって。

それはこっちが聞きたい。どうしていつも、微妙な結果になってしまうのだろう。助けているつもりで、その相手に責められるのは（相手が本当に望んでいる事を、理解できていないから）

それでも放っておく事はできなかった。ハイネスを黙って死なせてしまう事も、志真を行方不明のままにしておく事もできない。だから、苦い気持ちは残っても、後悔はしなかった。でも、気になる。志真はどこに行っていたのだろう。

記憶に混乱と欠落がある為、真相は分からないとされているけど、本当にそうなんだろうか。菊乃には、そうは思えない。志真はきつと覚えている。それを言えない、言いたくない理由があるのだろうから、菊乃も知らぬ振りを通さなければならぬ。

「っー！」

ひゅ、と冷たい風が顔にぶつかる。目の前で止められた剣先に息を飲む。ひやりとした汗が背中を伝い落ちていった。

「訓練中に気を抜くな」

剣を戻しながら、抑揚の無い声音で言う。腰元に下げられた鞘に、完全に剣を収めると同時に、菊乃を見つめていた紫色の瞳から、冷やかな威しさが霧散する。

「そんな調子では怪我をする。今日はここまでだ」

どこか心配そうにも見えてしまうその目には、今も少し慣れない。「すみません。ありがとうございました」

小さく頭を下げて、菊乃も短剣を丁寧にしまふ。一応ちゃんと鞘もついているのだ。よく切れそうな刃を出しっぱなしにしておくのは心臓に悪いし、持ち運ぶときも不安なので助かっている。

ようやく短剣が手に馴染んだ頃、実戦式の訓練相手としてハイネス・ユーゴが現れた時には驚いた。何だか単なる体力をつけるためのトレーニングというより、本格的な戦闘訓練をさせられているような。

ハイネスの指示は的確で、分かりやすかった。

しかし、普通の勉強等とは違って、いくら頭で理解していても、体がついていかなかったら意味は無い。その為、あまり捗っているとは言いがたい状況がある。

「増えている」

微かに苦さを含むようなハイネスの声に顔を上げる。彼の見ている方へと目を向けると、言葉の意味が理解できた。

菊乃達が訓練に使っているここは、保護施設内にある公園の一角だ。茶色いブロックを敷き詰めた広いスペースで、隅には水飲み場や日よけ付きベンチ等が設置されている。

長方形のその敷地は周囲から2メートルほど低くなっており、周りにはなだらかに下る芝生がで囲んでいた。丁度そこに座ってスポーツ観戦できるような形だ。

一番近い芝生の中央部分が、菊乃とハイネスが訓練している時のハルラックの定位置で、時々その隣に遊びに来たじいさんが加わる。今日は更にもう1人。

細身で色白、やや目付きの悪い青年。

各務伊吹だ。

どこか物憂げな表情で立っているハルラックの隣で、じいさんが芝生に身を沈めるようにして寝入っている。癖なのか、両手を胸の上で組んでいるその姿、何だか不安になってくるような。

そこから、1人分くらいの間隙を空けて、伊吹は座っていた。

芝生まで歩いていくと、軽く手を上げて挨拶された。

「どうも」

「こんにちは」

「坂巻さん、軍にでも入るつもりなのか？」

伊吹の言葉に菊乃は小さく首を横に振った。

「いえ。最初は単に、体力をつけろと言われて」

それが何故こんな事になっているのかは、菊乃にも分からない。

伊吹はそんな菊乃を見上げて微かに笑った。

「まあ、こんな世界だし、力をつけておくのは悪くない。時間は良いか？少し話したい」

この訓練以外には、特に予定もない。頷くと、隣へ座るように促された。断る理由も無いので、その通りにする。

伊吹が誘拐された先から無事に戻って、まだ4日しか経っていない。

やつれてはいたが、案外元気そうだった。戻ってからずっと、ほぼ毎日取り調べが続いていて、未だ嫌疑が完全には晴れていないから監視中の身らしい。

「大変ですね」

「まあ」

一瞬だけ遠い目をして、伊吹は菊乃を見た。どこか、複雑そうな目で。

「多分、坂巻さんよりはマシだと思う。手の負えない事に巻き込まれた一般人の苦悩、みたいなものはあるけど」

「どういう意味だろう。」

「坂巻さんと、そのハイネスさん？に言っておかなくちゃいけない事があります」

さも気が乗らなさそうな風に、伊吹は口を開いた。日本語から、こちらの言葉に切り替えたのは、ハynesにも伝える為なのだろう。「伝言。借りがあるので、伝えておきます」

伊吹の隣に座った菊乃と、立ったままのハynesはその言葉に一瞬顔を見合わせた。まるで見当が付かない。

「ルーミケラウスさんは生きています」

え。

生きている？誰が、ルーミケラウス、が？

呆然とした菊乃は、遠くからの「テメエー！イブキ、そりゃあそいつらには伝えるなって言われてただろーが！」という怒鳴り声でようやく我に返った。

「会ったのか？」

妙に冷静にハynesが訊ねる。

「はい。間違いなく本人でしたよ。それも大分元気そうで……」

それは一体どういう事なんだろう。あの時、確かにルーミケラウスは死に掛けていたのに。

「人の事無視してフツーに話進めんな、このタコ！」

怒鳴り声が近づいたかと思ったら遠くなる。

斜面を滑り降りたのは良いが、勢いが付き過ぎて途中で止まれなかつたらしい。一度下までたどり着いてから向きを変え、猛ダッシュしてきた赤毛の男が、伊吹の頭に拳骨を振り下ろす。ごっ、とかなり痛そうな音がした。

耐えるように俯いてから、伊吹は男を睨んだ。

「……っ、監視員の暴力事件として訴えますよ」

「うるせーよ、理由があれば不問だからな、なめんなよ」

この会話から察するに、どうやら彼が伊吹の監視役らしい。

「ジェス」

「……んだよ、ハイネス」

更に2人は知り合いらしい。ただし、相手の剣呑な目付きを見る限り、余り良好な仲では無さそうだ。

「どつという意味か、説明しろ」

「馬鹿言うな。テメーは晴れてケラスに戻れた身って言っても、完全に容疑が晴れたわけじゃねえんだぜ？そんな人生甘くねーんだよ」  
「けつと、顎を突き出すつんつんした赤毛の男。背が高く、筋肉質で、彫の深い強面。剃っているのか眉毛が半分くらいしかない上三白眼。言っては悪いが、かなりチンピラっぽい風体だ。」

そんな彼に、ハイネスは見ているだけで凍りつきそうな冷ややかな視線を送る。

「……エニシア・フィリ・ジエニス」

低い感情の籠らない声で一言。

それがどんな呪文なのか（多分人の名前だと思う）分からないが、効き目は抜群であった。ジェスの顔色が、赤から青へと、信号機のように変化する。

「な、テメー、何で……」

「ジャンナからだ。証拠物もあるとか。手紙に」

「それ以上言うなー！ふざけんなよ、何で……あのくそ女っ、ばれたら身の破滅だぞ！」

歯軋りし、髪の毛を掻き毟った後、ジェスはその場に座り込んだ。更に両手で耳を押さえる。

「……俺は何にも聞いていねー」

凶暴そうな外見に似合わず、情けない格好を取る彼を見下ろし、伊吹は目を細めた。



「エニシア・フィリ・ジェニスンか、覚えておこう」

もう彼の先行きには、不幸しか見えない気がして、何となく可哀想になってしまった。

## 菊乃の理由 2

ルーミケラウスは生きている。

その情報は確かなようだった。伊吹は彼女に会い、話もしたらしい。証拠は無いが、彼がそんな嘘をつく理由も無い。それに生きているのなら、ルーミケラウスの死体が見つからないのは当然で、生きている。

良かった……、心の上に乗っていった重みが少し軽くなった。でも、伊吹の話が本当だとすると、ルーミケラウスは伊吹達を攫った謎の組織にいるということになる。何となく、ハインスの顔を見上げると、いつもと変わらないように見える無表情があった。それでも良く見れば、複雑な気持ちになってるのが伝わってくるような。微かに寄った眉の皺や、下がり気味の口角の辺りから。ルーミケラウスが生きているという情報を、彼に報せないようにしていた理由が、何だか分かる気がした。どんな状況にあるにしろ、ハインスは最終的には彼女を選ぶだろう。たった一人の、大切な肉親を。

もう、ハインスは大丈夫だ。大切な人がいるなら、それだけで生きていける。

良かったと思うのに、寂しい。心細くなるような、もやもやしたものが心を塞いだ。

「それで、ハインスさんはどうするんですか？お姉さんのところへ行きますか」

ぎょっとするような質問を聞いた気がした。質問の主はしらっとした顔をした伊吹で、ハインスは僅かに冷ややかな顔つきになった。「どつという意味だ」

「ルーミケラウスさんが言っていたんですよ。弟は重度のシスコンなので、もしかしたら私の味方になってくれるかもしれないと。この人達も、皆それを心配しているみたいですね」

「……………」

ハインスの周辺温度が更に低下した、ような気がする。

最早菊乃には、ここに口を挟む勇氣は無かった。先程までは緩く耳を塞いでいたジエスも、今はぴっちり耳を覆い音を遮断する事に熱中している様だ。

じいさんは未だ目覚める気配が無いし、頼みの綱のハルラックは我関せずの姿勢をつらぬきいる。自分もそれに習うべきだろうか。

「ちなみに、ルーミケラウスさん達は、坂巻さんをその仲間に取り入れたいようです」

「え」

どうやら我関せずの姿勢は許されないようだ。

「仲間って、私をですか？」

どうしてまた。

「俺にも良く分からないけど、どうも、坂巻さんには敵対者に対抗できうる力が」

「それ以上口にするな」

鋭い声が邪魔をした。

目を見張った伊吹に、射抜くような鋭い視線を向けているのは、ハルラックだ。ほんの先程まで、眠たそうにも見える様子だったのに。

「ハルラックさん？」

急変した態度に戸惑いつつ呼びかけると、ハルラックは小さく肩を揺らした。眉間に皺を寄せ、蜂蜜色の瞳に苦い色を滲ませる。また。

時々見る顔だ。ふとした時に、ハルラックはそんな後悔するような顔で、菊乃を見つめる。どうしてだろう。不思議に思いながらも、聞けた事はない。

「ハル君は、キクちゃんが心配なんじゃよ」

気まずい沈黙を破ったのは、眠っていた筈のじいさんだった。よつこらしよ、とゆっくり体を起こしながら、じいさんは菊乃に笑いかけた。

「勿論わしもじゃ」

「どういう事なんですか？」

「さつき、いつ君が言っておったキクちゃんの力は、ちっと人の身には負担になるものなんじゃー。無理して使えばキクちゃんが死ぬじゃから、まー、できれば使わん方が良い」

力、無意識に胸に手を当てていた。

じいさんの発言に驚く事は無かった。どうしてだか、もう知っていた気がする。

水の女神、ミリニエル。

どこかぼんやりした様子の菊乃を、ハルラックは不安な気持ちで眺めていた。ミリニエル、彼女が選ぶのはいつもどこか似たところのある少女ばかりだ。菊乃にしても、その例に漏れない。

菊乃にミリニエルの力が宿ったのが偶然でないのだとしたら、恐らくそれは自分のせいなのだ。とハルラックは感じていた。

この世界に落ちる前は、ハルラックは水の神殿に使える神武官だった。

天上の神々は、時折気まぐれのように人に恩恵を、その力の一部を与えることがある。与えられた者達は神子と呼ばれ、例外なく神

殿で暮らすことになるのだが、その者達を守るのがハルラックの役目だった。

水の女神が選ぶのは決まって少女だ。

容姿は様々だが、どこか人目を惹きつける美しい者達が多かった。性格も様々で、気の強いものから、大人しすぎる者まで。ただ、どのような性格であつても自分より他人を優先する気質を備えていた。自己犠牲を厭わない娘たち。

それが神に選ばれる条件なのだとしたら、その結果は悲劇でしかない。

神の力は人の脆い体には負担となるのだ。ハルラックは何度も、他人のために、世界のためにその身を投げ出す者達を見て来た。それが正しい光景なのか分からないまま。同じ時を繰り返して。

あの世界から切り離された後も、ハルラックは彼の神に祈りを捧げ続けた。それはもう、殆ど習慣のようなもので、依る術もない世界で生きる為の拠り所にもなっていた。

だから、菊乃達がこの世界に落ちてきたあの日。

あの時にもハルラックは祈っていた。

海で溺れる菊乃を見つけたのは、偶然ではない。恐らく、彼女をそこに呼んでしまったのは自分だ。菊乃に触れて、微かなミリニエルの力を感じ取った時に、ハルラックはそう確信していた。

(だから、俺は彼女を守らなければならない)

義務感から彼女を見守り、害が無いようにしてきた。その中で、言葉を交わして、触れて、知る。菊乃もまた、自分よりも他人を優先するような人間だと。背中にも庇われた時には眩暈がした。

ハルラックも、流石に神子に庇われた事は無い。

その菊乃の性質は、彼女の身を危険に晒し続けることになる。現に、もう何度も菊乃は力を使い、死に掛けていた。

言って聞くようなら良い。

だが彼女は、きつと自分の命など簡単に差し出してしまふ。その事が齒がゆかった。今は義務感だけではなく、単純に彼女に生きていて欲しいと思うから余計にだ。

「ルーミケラウスさん達は、どうして私の力が必要なんでしょう」

じいさんから力を使えば死ぬと言われたにも関わらず、菊乃は平然としている。どころか、そんな質問をした。

黒目がちの大きな瞳の先には、渋い顔の伊吹がいる。

「……俺の兄の為だ」

「お兄さん？」

「吹雪という。……運がない事に敵対者に寄生されているから。言っておくが命を捨ててまで助けるような価値のある人間ではないからな。気にするな」

斬り捨てるような物言いに、菊乃は戸惑うように目を見開いた。気にするなと言うくらいならば、最初から言ってくれな。

物思いに沈むような菊乃の表情に、ハルラックは顔を顰める。近い将来、彼女が見知らぬ不幸な異世界人を助ける為に、あっさり命を落とす場面が訪れるに違いなかった。

なんとしてでも、阻止する必要がある。

「キクノ」

そこで彼女の名を呼んだのは、ハルラックではない。銀の髪に、褐色の肌を持つ青の血族の男。夜明け前の空のような、冴え冴えとした紫色の瞳を菊乃に向けて、ハイネスは告げる。

「俺に生きると言った以上、お前には生きる義務がある」

「え」

「容易くその身を危険に晒すような真似はするな」

淡々と話す男の顔を、菊乃は戸惑ったような顔で見上げた。心配している、一言いえば済むというのに、何故そんな難解な言葉になるのか。ハルラックには分からない。

「でも、ルーミケラウスさんが、その」

「関係ない」

周囲に漂う疑惑まで斬り捨てるかのようにすっぱりと、ハイネスは言った。

嘘ではないと思う。

ハイネスの冬の水のように冷たそうな瞳の奥が、菊乃を見る時だけほんの少し温まるのに、ハルラックは気が付いていた。

最も。

肝心の本人がそれに気が付く日は遠そうだと、困惑気味の菊乃を見てハルラックは思った。

## 伊吹、無謀で無駄なあがきを始める 1

菊乃達と別れ、保護施設の通路を歩いていた伊吹は足を止め、振り返った。後ろから男が2人ついて来ている。一人は護衛のジェスで、もう1人は。

凍て付くような紫色の目をした銀髪の男。ハynes・ユーゴだ。姉と同じく褐色の肌で、滅べと言いたくなるような美形だが、ルーミケラウスにはあまり似ていない。妖艶で情熱的な彼女に比べ、彼の方は氷の彫像ですといった雰囲気がある。

2人が並んでいても、おそらく姉弟には見えないだろう。そんな事を考えつつ、いつまでもこうして黙ってにらみ合っていたところで話が進まないの。

「何か用ですか」

「何故、キクノに先程の話をした」

静かな声と、無表情。しかし、ハynesから恐ろしい威圧感みたいなものが、漂ってきている。

「ルーミケラウスが生きていると、その事を告げたのは言い。だが」  
その後の事は余計だったと、それは伊吹も分かっている。

伊吹はそれほど菊乃という人間を知らないが、何となく慎重で臆病そうな印象を持っていた。その上どうも、自分の身にあまり執着を持たない性質らしい。誰かが助かるんだよ、といえば、黙って犠牲になってしまいそうな。

正に打ってつけの生贄役。

言わない方が良かったかもしれない。今では伊吹もそう思うが。

「事前に知って、考えておく必要があると思っただんですよ」

「？」

「俺達が解放された時、ユリウス殿下宛の信書を持たされたんです。中身は信書というより、脅迫状でしたが。内容は、敵対者に寄生さ



れた者を救う手段として、坂巻菊乃の力が有効であること。それを証明する為に、坂巻菊乃の身柄を一時的で良いので渡して欲しいということ。さもなければ、一連の騒ぎの発端である、召還事故という王家の罪を公表すると」

僅かに眉を寄せたハイネスの背後で、ジェスが大げさに手を振った。

「ばっかじゃねーのか。いつの話だよ」

「馬鹿はあんたですよ。過去の話だから時効だって言うんなら、一般人に伏せておく理由は無いでしょう。事故は過去の事でも、異世界人が来るのは相変わらず続いています。騒ぎの原因がこの国、しかも王家にあると分かったら結構な騒ぎになりますよ」

異世界から来た敵対者によって、家族や恋人、友人を失った者。

何より、異世界から突然こんな世界に来てしまった者達は、決して黙っていないだろう。

「貴方には分かる筈ですよ、ハイネス・ユーゴさん」

ルーミケラウスの弟で、同じように異世界の存在に振り回され、不遇の人生を辿った彼になれば。

「どんな結果になるかは分かりませんが、騒ぎになる事は目に見える」

「……その為に、キクノが使われると？」

「こちらもそんなに甘くはありません。反乱分子をこのまま黙って見過ごす事は無いと思います。でも、多分。どちらにしても坂巻さんは」

利用される筈だ。

敵対者に対する武器として。何も知らないまま、良いように利用される。そんなのは、あまりに気の毒で……。

だから、話した？

いや、違う。それだけではない。

帰る前に、伊吹は吹雪の顔を見ている。「最後になるかもしれないよ」という、不吉な七海の言葉につられたわけではないが。

吹雪はベッドの上で横になっていた。微かな寝息の他に、時々ぶつぶつと言葉にならぬ声を漏らして。苦しそうに眉を寄せる。夢でも見ているのかもしれない。

ぎよつとしたのは、シーツからはみ出ている太い腕を目にした時だ。

「何だ、これ……」

思わず声に出していた。

彼の腕に、引つかき傷のような後がいくつもいくつも残っていたのだ。白く盛り上がる薄っすらとした傷は、隙間無く模様のようにその腕を埋め尽くしている。

片仮名だと気がついた時にはぞつとした。

イリア、キーリエ、ビオ、シューア、サリアン……。

人の名のような、意味を成さぬ文字の群れ。それは、反対側の腕にもあった。

「腕だけじゃないよ、足にもね」

小さく溜息を吐いて、七海は肩を竦めた。

「何で」

「さあ。アタシにもさっぱり。こういう症状が出るの、フブキが初めてだと思う。薬で押さえつけてるせいなのかな。何日も眠っちゃうっていうのもね初めてで。正直どうしたら良いのか分かんなくて困ってる」

しんとした部屋の中に、七海の溜息が響く。

このまま死ぬのかもしれない。眠る吹雪の姿を見下ろして、伊吹はそう感じた。

「アタシは、何とかしてフブキを助けてあげたいよ。そうじゃないと」

小さく唇を噛んで、七海は伊吹に縋るような眼差しを向けた。

「ね、イブキ。お願いだから、フブキを見捨てないであげてよ」

助けてあげて。

脳裏に残った弱った子猫みたいな目を、何とか追い払おうと努力する。あれだって演技でないとはいえない。七海はそんな女だ。

(しかし)

伊吹は鼻の頭に皺を寄せた。

結局自分は菊乃に伝えてしまった。いずれ、変な形で伝わるよりはと思った事もある。もう1つの理由は。

単に頼まれた伝言を伝えず、黙っているのが辛かったからだ。吹雪を憎んでいる。だが、死ぬとまでは思っていない。助ける方法が無いのだから仕方が無いと、そう思っている内は良かった。

だが、可能性があるのなら。

何もしていないでいる事が正しいのか、伊吹には分からない。もっと単純な事ならば良かった。だがここへ来て、力を使う事で菊乃の身が脅かされると知らされて、どうしようもない気持ちになった。

(くそう、面倒なことこの上ない、知らなければ良かった)

何故自分が、あんな馬鹿の為に悩まねばならないのか。心底腹が立つ。兄だの弟だの、鬱陶しい。

責任も、義務も伊吹には無い筈だ。

誰が死のうと利用されようと、どうしようもない事で。

.....。

「ハインス・ユーゴ」

伊吹は腹の底をぐるぐる回る不快さを吹っ切るように、顔を上げた。勢い余って敬語を投げ捨て、ハインス・ユーゴに詰め寄る。

「あんたはこんなところにいないで、坂巻が早まった真似をしないように、ちゃんと見張つとけよ。後、ちゃんと守れ！」

言い捨てて、伊吹は僅かに目を見張ったハインスに背を向けて、歩き出した。

「お、おいおい、ま、待て、待て待て」

慌てた様子でジェスがついて来る。この鬱陶しいことこの上無い、図体のでかい赤毛の男。何が鬱陶しいって、どこことなく吹雪に似ているところだ。

「お前さ……………」

小走りで隣へ追いついてきたかと思うと、太い眉を下げて不気味そうな顔で伊吹を見下ろした。

「頭大丈夫か？」

「……………は？」

「いや、だつていきなりきれてハインスに怒鳴るし、何なんだよ。怖ーだろ」

怖いと、その言葉に伊吹は笑い出したくなった。

得体の知れない未知なる異世界。それが、ずっと恐ろしかった。力も知恵も足りない。他者を圧倒するものなど何もなくて。そんな自分を怖いとか。

しかし、時にハツタリも必要なのだ。

例えばそう、今のよう。実現性の低い馬鹿な目的を持ってしまった時には。薄っすらと笑みを張り付かせた伊吹を見て、ジェスはぶるっと身震いした。

「……………なんだよ、だから怖いんだよ、お前」

見かけによらず、へたれな男だ。

伊吹、無謀で無駄なあがきを始める 1 (後書き)

ここまで読んでくださってありがとうございます。  
次の更新は5月10日を予定しております。

## 伊吹、無謀で無駄なあがきを始める 2

1人で足りないならば、補うしかない。

元々、伊吹の手には余る事態だ。本気で何とかしようと思うなら、誰かの手を借りるしかない事くらい、分かっている。伊吹は英雄にも、勇者にもなれない。唯の半ヒキコモリ大学生なのだから。

「いきなり、何ですか」

頭を下げる伊吹に向ける、リザレット・クラウラの視線は冷やかだ。初対面の時から変わらない機械的な態度。彼女は余り仕事に情熱を燃やすタイプではないらしく、面倒事を嫌い不機嫌さを前面に出してくる。

「お願いします。敵対者と世界喪失者に関する全資料見せてください」

重ねて言えば、ついと細い眉を吊り上げた。

「貴方は常識的な性質の人間だと思っていましたが、買いかぶりだったようですね」

「異世界に来た時点で、俺の常識も粉々にされたので」

「自分には関係ない、そんな風に言っていたように思いますが。実際に兄に会って何か心境の変化でもあったのですか。今更敵対者の事等調べて、どうするつもりだ？」

今更。

その言葉に伊吹は薄く笑う。

本当に、今更だったの。それは分かっているが。

「このまま見過ごせば、後悔するような気がしたので」

ありきたりの言葉に何を思ったのか、リザレットは鼻を鳴らした。「貴方に何ができるのですか。どの道後悔する結果になる事は、間違いない」

「やれる事をやったなら、まあ諦めもつくじゃないですか」

本気で救いたいと、救えると、伊吹も思っているわけではない。相変わらず冷ややかな眼差しを向けてくるリザレットに、自然と笑顔が引きつってくる。

「人を頼れとか、信頼するように言ったのはリザレットさんです。

信頼するので、何とかしてください」

言っと、更に周囲の温度が下がった、気がした。

「案外図々しい人ですね、貴方」

強気な態度を取れるのは、開き直っているせいでもある。それから。

「ナナミの話では、吹雪の現在の状態は、今までのどの敵対者にも無い不可解なものだとか」

びくり、とりザレットの眉が動く。能面のような顔なので、非常に感情が読み取り辛いが興味は惹けたようだ。

「眠り続けて起きない上、何か夢を見ているようで、時々ぶつぶつ寝言を言っています。それから、腕や足に見覚えのある文字のような傷が次々に増えていて、一応全部メモしてきてありますが」

「取調べでその事は言いませんでしたね、貴方」

「取引に使えるそうだと思ったので。吹雪の状態を詳しく話す、代わりに少し協力してくれませんか、リザレットさん。俺は知りたい」

じつと、突き刺すような視線を見返して、伊吹は言った。

「最善の道を」

とか、偉そうな事を言った結果が投獄である。まあ、予想はしていた。薄暗い上肌寒い部屋の中で、伊吹は壁に凭れて溜息を吐いた。情報の隠蔽で、立場は一層悪いものとなっている。幸い、今のところ尋問くらいで、非人道的な拷問等は受けていない。いずれ覚悟



しなければならぬだろう。

(俺の信用はがた落ちだな)

何もかもが吹雪のせいだ。全く。このまま沈黙を貫けば、向こうも多少の譲歩をしてくれるかもしれない。そう思うのは淡すぎる望みだ。何より時間が無い。

もしも、気が変わったら。

七海の言葉を反芻する。

態と何か問題起こして、投獄されててよ。そしたらキクノを連れてくついでに、連れてってあげるからさ。できれば、早めにね。

いつ来るかは言わなかった。堂々と保護施設に侵入すると伊吹に告げるとは、一体どういうつもりなのか。信用されているとは思えない。伊吹がそれを伝えると見越しての、偽情報なのか。

まあ、どちらでも良い。

ここにいればいざれ分かる話だ。

七海達と保護施設。どちらの手も取れない。七海達が本当にここへ来たなら、ついていくのは構わなかった。だが、菊乃が連れて行かれる事は阻止しなければならぬ。

同時に、七海達が捕まってしまうこともできれば避けたかった。

今彼女達が捕まれば、吹雪の先は無い。

硬いベッドの上で、伊吹は薄い毛布に包まり考える。

情報が必要だった。

それから協力者だ。自分のための、協力者。だが、保護施設とも、七海とも折り合いは付かない以上、協力はできない。だから、動かしてみる。どちらに転んでも良いように。

人を動かす。

遠くでドアが開く音がした。かつかつという足音が静かな空間に木霊している。ゆっくりと、急ぐわけではないその音が、こちらへ向かってきていた。

顔を上げ、伊吹は顔を顰めた。

尋問再開、或いは七海達だろうか。考えて、すぐに後者を否定する。いくらなんでも早すぎるだろう。まだここへ入って3時間くらいしか経っていない。

かつんとした足音がドアの前で止まる。

小さな機械音が幾つか響いて、ドアが横へスライドする。外の明かりが部屋へと入り込み、長い影を作った。ドアの向こうに現れた人物を見上げて、伊吹は目を見開く。

「クリステイアン？」

予想外すぎる人物は、白い歯をきらりとさせて微笑んだ。相変わらず、爽やかな上暑苦しい笑みである。

「やあ、イブキ。久しぶりだ、色々あったようだが元気だったかい」  
変わらない態度で入ってくるクリステイアンに、警戒が走る。

「何でここに」

「ジョール・ラクリエルたつての頼みなんだ。孫の婚約者を助けるようにとね。それに何より私達は友人だろう。例えジョールの頼みが無くとも、友の窮地には勿論駆けつけるさ」

はっはっは、と厚い胸板を反らし笑う男。

どう考えても前者が動機だろう。しかし、まだ婚約の話は有効だったのか。流石にもう破棄されるものだと思っていたが。

そんな伊吹の困惑を見透かしたかのように、クリステイアンは笑う。

「君は存外気に入られているんだよ、もっと自信を持ちたまえ。何よりミルラ嬢が君に想いを寄せているのだからね」

「……………」  
「流石に、君だって気が付いてはいるのだろう？」  
からかうように訊ねられて、伊吹は言葉に詰まった。

好かれてはいると思う。だが、それが一時の気の迷いでないとは言いかねない。大体、自分の何処に好かれる要員があったのか、さっぱり分からない。

「……………で、何しに来たんだ？」

質問を返して誤魔化すと、クリステイアンは大きく肩を竦めてみせた。一々仕草が大げさなのも相変わらず。

「事情は聞いたよ。ここから出られるよう手はずは整えた。後、君の希望する敵対者に関する情報も見られるように取引したよ」

「……………は？」

「何故最初からラクリエルを頼らなかつたんだい。知っているだろう、ラクリエルはこの保護施設とも取引がある。その上、多大な援助を行つてもいる。王家に対してもね。だから、ある程度の融通は利くのだ」

知っている。

ミルラと知り合った後に、ラクリエル家については詳しく調べたのだから。

「しかし、君の行動は正しい」

黙っている伊吹に対して、クリステイアンは珍しく静かな眼差しを向けた。

「ラクリエル家の者は気難しいからね。最初から他人の力を宛てにしてくるようなら、その時点で君は切り捨てられていただろう」

肌寒いにも関わらず、冷や汗が滲む。

「その辺りも計算していたのだとしたら、大したものだよイブキ」  
流石は私の友だ、と。

笑うクリステイアンはいつも通り爽やかであるが、言葉の内容は薄ら寒い。

否定も肯定もできない。

ラクリエル家の力を宛てにする事も考えた。あらゆる手段を考えたのだ。同時に真正面から頼つても跳ね除けられるだろうとも、予想していた。だが、敢えてその筋書きは捨てていた。

ミルラの顔が浮かぶたび、妙な罪悪感が湧くために。

### 伊吹、無謀で無駄なあがきを始める 3

敵対者についての聞き取り調査について。

敵対者と呼ばれるそれは、世界喪失者の体にとりついてやっている。しかし今のところ、その正体について知る者はいない。観測又は世界喪失者の証言により、その全ての世界において、敵対者と一致する存在は確認できず、その証言を信じるならば、敵対者はこの世界の外からやって来ているにも関わらず、異世界にもいないという事になる。

未だ接触も発見もできていない、未知なる世界が存在する可能性は否定できない以上は、そこに敵対者の存在する世界がある可能性もまた否定はできない。

—略—

この例のように、異世界の存在を認知し、また事故により迷い込んでくる人がいたという証言した者、高度な召還技術を確立し、積極的に異世界と接触を図っていたという証言をした者。彼らの世界のいづれにも、敵対者の存在は確認できず。

—略—

何故、この世界にだけ敵対者が現れるのか。

(……理由)

窓も無い資料室。空調はきいているようだが、何となく息苦しく感じる。天井全体が柔らかい乳白色の光を発して、広い空間を隙間無く照らしていた。

規則正しく並ぶ棚。資料は紙ではなくフオウルと呼ばれる正方形の板に記録されている。銀色に光る掌サイズで、厚さは3?程度

だろうか。渡された銀色の球体にはめ込むと、自動音声によって再生される。文字で読みたい場合は、その辺りの壁に投影すればいい。「イブキのところにも、やはり敵対者は存在しなかったのかい？」持ち込んだ椅子に座り、お茶を飲んでいたクリスティアンが聞く。長い足を見せ付けるかのように組みながら、カップに鼻を近づけ良い香りだとか呟いている。

確かここは飲食禁止だった筈。

「いなかっただな」

その存在をなんとなく邪魔に思いつつ、しかし助けられた以上危険にもできない。

「そうか。敵対者がこの世界にしか現れないと考えるべきか、それとも」

「何だ」

「敵対者が接触した世界は、既に滅んでしまったのかもしれないとも思ってたね」

その発言に、思わず顔を顰める。

実に嫌な予想だが、否定はできない。あんなものが突然いくつも現れたら、伊吹の世界でも対処できるかどうか。物理的な攻撃により肉体を破壊しても、脅威の再生力で復活するらしいし、化物殲滅にお約束の炎も意味を成さなかったらしい。

「ああ……美しく可憐な女性達が犠牲になったかもしれないと思うと、胸が痛むよ。ああ、私にもつと力があれば……と、ね」

しょんぼりと肩を落とすクリスティアンを見て、微妙な気持ちにさせられた。

実際あった事なら兎も角、想像というか妄想だ。

しかし、たったの1匹や2匹で、ほいほい世界を破滅させられるものだろうか。増えるならば兎も角。

嫌な想像をしてしまい、伊吹は再び顔を顰めた。

ゾンビ映画にはお約束の感染増殖が無くて本当に良かったと思う。接触すれば何かしらの影響は出るらしいが、敵対者が移動するのは、その体が使えなくなった、切り離された場合のみ。それでも充分脅威かもしれないが、増えていくよりはマシだ。

資料を端から確認していく。

今のところ、何かのヒントになるかもしれないと考えていた、吹雪の体に現れた文字と一致するような単語は出てこない。リザレツト・クラウラにも渡してあるが、心当たりは無いようだった。難しい顔で、研究者に渡すと話していたが、解析は恐らく先の事となる。伊吹があっさり解放された理由は、勿論ラクリエル家の口ぞえの結果なのだが、吹雪捜索に躍起になっているせいでもある。菊乃が狙われているという事もあって、この施設の警備も厳しくされているし、伊吹1人に構っている余裕は無いのだ。

大した力も能力も無い男だと、見縊られているわけだ。

一応見張りとして、資料室の入り口に2人立ってはいる。

「ユーイ・ユーイ殿などは、どうも敵対者が意図的にこの世界に送り込まれているのではないかと、疑っているみたいだね」

いつに無く、普通のテンションで喋るクリスティアン。そうしているとともに、頭が切れる男のように見えてくる。

「異世界からの侵略、とかで？」

「そうだ。この世界からしてみれば途方も無い話に思えるが、どこかの世界では空の向こうへも出て行っているらしい。美しい星の元にまでたどり着けるとか、非常にロマンチックな話だ」

「俺のところの話か？一般人はまず行けないけどな」

「それは実に興味深い話だ、イブキ。いずれじっくり詳しく私に話してくれたまえ。この世界では、宇宙よりも身近に異世界という存在があったからね、まずそちらに目がむいてしまったのだよ。実に魅力的な、不可思議な世界の数々。人の姿、自然の美しさ、素晴ら

しい技術にね」

言いながら、クリステイアンは棚の中から一冊（と言って良いのか微妙だが）のフォウルを取り出し伊吹に手渡した。

「見えているものは現実だ。人は手を伸ばさずにはいられない」

よって、この世界では召還という実験を行い、何とか異世界のものをごこの世界に持ってこようと考えたのだ。

そのフォウルは、その召還実験に関する記録が収められていた。

伊吹の世界の人間が宇宙へと手を伸ばしたように、この世界では異世界へと手を伸ばした。

そして、他の世界からこの世界へと、魔の手は伸ばされているのかもしれない。

もしもそれが真実なのだとしたら、随分と乱暴な手だ。一方的な悪意、攻撃。何の警告も、話し合いもなく。価値観の違いか、伊吹にはいまひとつぴんとこない。

まあ、全ての違和感は異世界だからという一言で片付いてしまいうようなものだが、慎重に考えていくべきだろう。

召還実験に関する記録を再生しながら、伊吹は呟く。

「しかし、こつちに害意を持っている敵がいるって言うんなら、その方が簡単だな」

「どういう意味だい？」

「そいつらは少なくとも、敵対者を統べる術を持っているわけだろう。技術が確立されている方が、自然発生的な未知なる生物を0からどうこうするよりは楽だろう」

最もその場合、敵を確定し捕まえる必要があるが。

「仮にそういう敵がいるとして、疑わしいところはあるのか？」

思いついて問うと、

「今のところ全部の世界が疑わしいと思われているよ、勿論君のところもさー」



と、実に爽やかな笑顔で告げられた。

つまり、何にも分かっていないのか。

呆れた視線を向ける伊吹に、クリスティアンは手を広げ大げさに首を横に振った。

「何せ敵対者は特定の世界からの客人にのみ、くつついてくるわけじゃないからね。法則も偏りも見られない。特定のしよすが無いのさ。まあ、強いて言うなら、観測不能の世界からやってきた異世界人は、特に怪しいとされているようだけど」

「観測不能？」

「こちらの世界から見ることができない世界さ」  
そんなところもあるのか。

聞きながら、伊吹は映し出される文字を読む。適当に読み飛ばしていたが、ある部分で目が留まった。

「消失？」

召還実験失敗による結果報告書の一部である。被った多大な被害の記録に紛れてたった一文。対象となった相手の世界の事について触れられていた。

観測点消失、確認不能、と。

## 伊吹、無謀で無駄なあがきを始める 4

消失。

あくまでその世界を見る事ができなくなったただけなのか、それとももつと悪い事が起こったのか。

召還実験により、こちらに多大な被害があつた事は記録されている。が、対象となつた世界がどうなつたのかは分からないのだ。あちらも、無事で済んでいない可能性は非常に大きい。その上観測できなくなっているとなると。

「ここに恨まれているんじゃないか？」

「その可能性は否定できないね。実際そう考えている人達も多いよ。だが、この実験からもう400年近く経っているから、私としてはあまりぴんとこないな。長寿の種が暮らしているのかもしれないが、そうでなかったら当事者はもう死んでいるだろうしね」

物凄く恨み深い種族なのかもしれない。

「それに」

と、クリステイアンは腕を組んだ。

「殆どの世界は異世界の存在を認知していない。その世界で異変が起こつたとして、その原因がこちらの世界だと気が付けたらどうか」

確かに。

言われて見ればその通りだ。どんな異変が起こつたのかは分からないが、原因が異世界ですという結論に達せたとはいえ難い。伊吹の世界でそれが起こつたとして、そんな事を言い出す奴がいたら間違いない頭のかわいそうな人として認知される事だろう。

異世界の存在を認知していた場合は別だが。

「その世界かは分からないが、敵がいるとすれば観測不能の世界の者である可能性が高いというのは確かだ。だから勿論、私達もその

辺りは慎重に対応している」

慎重に対応「簡単には外に出さない、という事だろうか。」

「そのリストもここにあるのか？」

「あるだろうね。見たいならば調べてみよう」

棚に付いたパネルを操作すると、2つ向こうの棚の辺りで音が鳴った。

観測不能の世界から来た異世界人のリスト。

施設職員ではない一般異世界人の伊吹が見る事は色々問題がありそうな代物だ。プライバシー的な意味で。だが特に禁止されていないので、遠慮なく見る。

読み取りの器具にフォウルをセットすると、123名の名前がずらりと名前が映し出された。赤字になってるのは既に亡くなった者達らしい。その数は結構多く、現在生存しているのは15名。その中に、見覚えのある名前が混じっていた。

「ニトロ？」

思わず読み上げると、ページが移動した。ニトロに関する詳細な情報が、本人の画像月で映し出される。皮肉そうな笑いを湛えた、三つ目の青年。間違いなく現在、伊吹のクラスメイトとなっている男だ。

現在19歳……いや、ほんの数日前に20歳になっているらしい。こちらに来たのは彼が13歳の時。今からおよそ7年前だ。外に出されたのは2年と4ヶ月前。5年近くの間、彼は施設で『保護』されていた事になる。

「彼が気になるのかい」

「いや……というか、知り合いだからな」

怪しいかといわれればこの上なく怪しい。胡散臭い雰囲気のある男だ。ただ迷い込んできた年齢が子ども過ぎるような気がする。

「13歳、か」  
どうなんだ。

呟いた伊吹の言葉に反応し、再びページが移動した。どうやら13歳当時の状況が記されているようだ。つまり、迷い込んだ直後の

全身打撲、重度の裂傷に骨折など、あちこちにかなりの酷い怪我を負っていたらしい。その怪我の原因は不明。

迷い出た場所は森の近くで、少なくともその辺りに怪我の原因となるような痕跡は見つけられていない。加えて、本人は怪我のショックか、それとも異世界同調現象に巻き込まれた事が原因か、記憶喪失となっていた。後に記憶は回復するが、怪我に関する事柄などは思い出せないままとなっているようだ。

関連項目、と赤字で記されている部分がある。

「関連項目」

伊吹の声に反応して、再び移動するページ。

ページの最初に記された日付は、二トロが迷い込んだものと一致する。日付の下にはC452～C457までの番号が下へ並んでいて、次に地名が降られている。場所はかなりばらばらだ。1つだけ、二トロのいた場所と一致するものがあつた。その隣に上半身、右腕、頭部、と一列毎に記されている。

「何だ？」

何となく不穏な予感があつた。

「あまり聞いて楽しい話では無いが、それは同調現象による事故の被害者記録だね」

事故の、被害者。

それだけならば伊吹も当てはまるのだが、ここにあるのは番号と、体の一部分、性別のみ。背中 of 辺りがひやりとした。

「まさか」

「そのまさか。運悪く、体の一部分だけがこちらの世界へ来てしまった人達さ」

「……………」  
「恐ろしすぎる。」

不運だと思っていたが、彼らに比べれば全然マシだ。突然上半身が無くなりましたとか、洒落にならない。普通に死ぬ。

「こういう事故は、何故か観測不能の世界との同調現象である場合が圧倒的に多くてね。最近は少なくなってきたが、召喚事故から100年ばかりは頻繁に起きていたらしいよ」

悲しげに眉を寄せて、クリステイアンは溜息を吐く。

「ああ…、幾人もの美しい女性たちに襲った悲劇の事を考えると胸が」

「それはもう良い」

無視して二ト口のページへと戻る。

これが関連として添えられていたということは、彼らは二ト口と共に同調現象に巻き込まれた者達なのだろう。

伊吹にとっての吹雪や、志真、菊乃だ。彼らもほぼ同じ場所で巻き込まれたに関わらず、かなり別々の場所へと飛ばされた。吹雪と伊吹は同じ場所にいたが。

二ト口の傍に残されていたものは、一本の腕。  
細く小さな子どももの腕。

「……………」

考えていたら、気分が悪くなってきた。二ト口は中々へビーな人生を送っているようだ。彼が同調現象が起こるきっかけとなったものを知ったら、どう思うだろうか。この世界が行ったという召喚実験の事故。それを知れば、伊吹等よりも余程深く、この世界を恨むのでは無いだろうか。

いや、二ト口だけではない。

全ての異世界人が、この世界を恨む可能性がある。家族や大切な人と切り離されたのだ。伊吹のように、半分死んだように鬱屈した生活をして来たものならばともかく。

(俺だって、完全に割り切れているわけじゃない)  
不満はある。

だが今はそれを考えている時ではない。吹雪のことだ。敵対者を元に戻す方法など、自分に見つけられるとは思えない。だが。

目を瞑るとそこに異様な吹雪の姿があった。腕や足に刻まれた、不気味な傷跡。思い出すだけで気分が悪くなる。名前のように読めたそれが、何か解決の糸口になる事を期待した。が、今のところ何も分からない。

イリア、キーリエ、ビオ、シューア、サリアン……。

人の名前か、何かの呪文か。全部で57あった。偶然できた傷跡にしては不自然すぎるそれ。

特に意味の無いものだと、思えないのだが。

「イブキ？」

「……いや、何でもない」

溜息を吐いて、伊吹は再びリストへと向き直った。敵対者は外からやってくる。ならば、やはり解決の糸口は異世界にある、のだと思う。

例え可能性は薄くても、やってみるしかない。伊吹はそこにある名前と現住所をメモに書き写し始めた。彼らがこの世界を憎んでいるのなら、敵対者の存在や対処法を態と黙っている可能性はある。

とりあえず最初に当たるのは、二ト口になるだろう。

15人分の名前と住所を写し終え、フォウルを片付け一旦部屋を出ようとしたその時。突然部屋の明かりが消えた。

伊吹、無謀で無駄なあがきを始める 5

窓の無いその部屋は明かりが消えると真っ暗になった。

「何だ？」

心臓が跳ね上がり、声の上擦る。単に誰かが間違つて電源を落としてしまったのかもしれないが、どうしても警戒してしまう。その不安が的中した事を報せるように、いつかも聞いた警報音が煩く響き始めた。同時に、薄暗い緑色の光が転々と棚の上辺りに灯る。

「おや、これは」

と、いつもと何も変わらない様子で、クリスティアンが首を傾ける。

「上で何かあったようだね。その君達、何か情報は回ってきているのかい？」

と、声を掛けた相手は入り口付近にいた無口な見張り役2人。ジエスとは違い、威圧的でとつき難そうなベテランといった雰囲気。男達に、気軽に声を掛けられるクリスティアンには感心する。本当に空気を読まない奴だ。それとも貴族だから読む必要が無いのか。表情筋を殆ど動かさないまま、右の口ひげの男（推定30代後半）が答える。

「今のところは何も」

と言い掛けて、眉をぴくりとさせて暫し黙り込む。数十秒の沈黙の後、彼は再び口を開いた。

「侵入者が数名いる模様です。その内の1人……一体は、変態可能のレベルに達した敵対者だと」

吹雪

口の中が緊張で乾く。じわじわと、腹の底が重くなる。侵入者は七海達のことだろう。来ると言っていた、タイミング的にも。

だとすれば、一緒にいるという敵対者は。覚悟はしていたが間に合わなかったのか、やっぱり。（俺には）

「侵入者や敵対者に関する情報は何かあるかい？」

「シユターク教派と見られる仮面の者達が数名、それから敵対者の性別は女性のようにですね」

女性……。

それならばそれは吹雪ではない。

まだ断定はできないが、少なくともあれを女と見間違っう者はいないだろう。わけの分からぬ気分の悪さは払拭されたが、代わりに行き場のない怒りと苛々した感情が湧いてきた。

あの野郎、間際らしい真似を。

冷静に考えれば、別に吹雪に非は無いのだが、怒りの矛先は彼へと向う。大体、あんな馬鹿な兄の為に、何故自分がここまで頑張らなければいけないのか。いつもいつも、厄介ごとばかり起こして面倒を押し付けやがって。

日本にいた時は、そういうのは親の役目だった。

伊吹は知らぬ顔をしてできるだけ関わらぬように努め、それでも降りかかってくる兄絡みの厄介ごとに腹を立てているだけで良かった。

「避難指示が出ています。ついて来てください」

鳴り続ける警報音の中、伊吹達は部屋を出た。廊下も非常電源の薄暗い明かりに切り替わっていた。教会の時とは決定的に違い、ここには確かな戦力がある。だから大丈夫の筈だ、と。そう自分に言い聞かせて冷静さを呼び戻す。

「彼らはどうやら施設中央西側付近を襲撃中のようにです。幸いここ



から離れていますし、地下通路からケラスへ抜けましょう」

先頭に立ち誘導する男に続いて足を進める。数歩行ったところで伊吹は足を止めた。

「中央付近西側付近？」

そこは研究施設と共に、医療室がある場所だ。通常の病気ではなく、ストロノーム、異世界の植物に寄生され、中毒症状を起こしていた為、この施設で治療を受けていた。多分理由はそれだけではなく、敵対者に寄生された吹雪と同じ空間にいた為でもあるだろう。

経過は順調で、1週間もすれば回復するだろうと聞いている。

一度様子を見に行った時は、眠っていた。

忙しいという理由もあるが、何となく気まずくてそれ以来行っていない。が、ミルラはまだそこにいる筈だ。

施設中央西側の2階に。

ミルラ

「どうしたんですか。立ち止まらないで、急いでください」

「イブキ」

急かされて、のろのろと足を踏み出す。

嫌な汗が手に滲む。

煩くなり続ける警報音が、伊吹の心臓を追い詰める。大丈夫、の筈だ。ここは保護施設で、隣はケラスだ。警備の人間が山ほどいる、民間人の避難は真っ先に行われる事柄だ。多分。

「あの」

伊吹は胃が痛いような思いを抱えつつ、前を歩く男に声をかけた。鋭い視線だけを返す彼に尋ねる。

「施設中央西側の辺りにいた人の避難状況とか、分かりますか」

「……残念だが、その辺りは混乱が大きく、状況も良く分からない」

「……………」

聞かなければ良かったと、伊吹は心底後悔した。

落ち着け。

ここで自分が気にして行ってみたところで、何もできる事はない。襲撃者を相手にして立ち回る武道派ではないのだし。寧ろ足を引く張るだけだ。人間相手だけならば兎も角（いやそっちだって正直無理だと思うが）敵対者までいるこの場面で、何の考えも無しに飛び出していつては、志真と同じ。

俺は、勿論奴とは違う。

……いや、違う。馬鹿だ。

避難指示に逆らい、危険地帯に向かっている時点で、自分の馬鹿さを認めないわけにはいかない。胃が痛い。息が苦しいのは、走っている為だ。階段を駆け上がった時点で既に、体が苦痛を訴えていた。

伊吹は万年運動不足だ。

「大丈夫かい、イブキ」

一方で、隣に並んできた男は、息一つ乱していなかった。そんな彼をじろりと睨んで、伊吹は大きく息を吐き、吸う。

「何で来た」

「はっはっは、君はミルラ嬢を救いに行くのだろう。このクリステイアン・ベルナ・ハーパー、いつだって友の勇氣には応えらるも！何よりミルラ嬢の事は私も心配しているしね。それに他にも弱い女性が怯えながら健気に私の助けを待っているかもしれない、そう思うと、走らずにはいられない！」

走りながら、よくもそれだけ喋られるものだ。

伊吹は最早何一つ言葉を発したくない。というか、息が切れて喋る事ができない。

時折地面が細かく揺れる。

廊下の向こうに見える吹き抜け付近から、爆発音や怒鳴り声、悲鳴のようなものが聞こえてきていた。建物の玄関口にあたるホールも、どうやら争いの場となっているらしい。ミルラのいる医療室へ行くには、そこを通り抜けなければならなかった。

伊吹はスピードを落とし、足音を立てないように気をつけて、壁に擦り寄りながら慎重に先へ進んだ。

白い煙のせいで非常に視界が悪い。

きな臭い匂いがするから、どこかで火の手が上がっているのかもしれないなかった。念の為、口と鼻を手で覆い、姿勢を低くする。付近に人がいない事を確認し、落下防止の透明の壁越しに階下の様子を見た。

何人が倒れている人間が見える。黒いフードに仮面の男が3人、警備の人間と争っていた。敵は彼らだけでなく、妙な物体……生物らしきものがある。毒々しい赤紫色の巨大なゼリー状のものが、伸び縮みしながら壁や床を移動していた。

何だあれ。スライム？

ぶよぶよ半透明な体の中に、血管みたいなものが見えて非常にグロイ。

ゲームに出て来る可愛らしさの欠片もない上、時々真ん中辺りをへこませて、ぺっと黄色い液体を吐き出してはその辺のものを溶かしている。どん引きだ。

動いているものが近くにあると、びよんと体を伸ばしてそれを掴もうとする習性があるようだ。どうしてか、黒フードの男たちには反応しない様子。懐いているのか、それとも何か特殊なアイテムがあるのかもしれない。

「クリステイアン、あれが何か分かるか？」

「さあ。この辺りでは見かけたことはないね。恐らく、この世界の生物では無いと思うよ。」

「そうか」

幸いというか、向こう側に行くのにわざわざホールを下りる必要は無い。このまま姿勢を低くして、壁伝いに隠れて向こうへ行こう。こそこそと、移動を開始した伊吹の耳に、切羽詰ったような女性の悲鳴が届いた。

「……いや！離して！この！」

思わず動きが止まる。

ミルラではない。

しかし気のせいか、聞き覚えのある声だった。

伊吹とクリステイアンは互いの顔を見合わせて、揃って再び階下を覗いた。壁に張り付いていたスライムもどきが、にゅっとその体を引き伸ばし、女性の足を掴んでいる。

更に、何とか振り払おうともがく女性の腕にまで巻きつく。

「っ！」

声にならない悲鳴を上げて、女性が身を縮める。体の動きに合わせて、結んだ長い髪が揺れた。もがく拍子に顔が見える。

（何で）

すらりとした長身のその女性は、間違いなくフィオーネだった。

伊吹、無謀で無駄なあがきを始める 6

何でこんな所にフィオーネが？

そんな疑問は兎も角、まずい状況だった。流石に世話になってい  
る知人のピンチを見捨てていくわけにはいかない。だが、どうすれ  
ば。自分の能力の低さを知る伊吹はどう行動すればよいのか迷うが、  
その点クリステイアンには迷いがなかった。

「フィオーネ！今この私クリステイアンが助ける！暫しの辛抱だ、  
耐えてくれ！」

すつくと立ち上がったかと思うと、落下防止の壁を軽々と飛び越  
える。

「お、おい！」

ここから床まではおよそ2、5メートルの高さ（もつとあるかも  
しれない）だ。死にはしないだろうが、無茶すぎるだろう。肝を冷  
やす伊吹だったが、ずだんと大きな音を立てて地面へと着地したク  
リステイアンは、すぐさま屈めていた膝を立てると走り出す。

……大丈夫そうだ。

一瞬でも心配してしまった自分が虚しい。

鍛えているのか、それとも異世界人は体のつくりからして丈夫な  
のか。颯爽と走りだしたクリステイアンは、割れたガラスや輝の入  
った床タイルを踏み越えて、フィオーネの元へ駆けつけた。

「さあ、フィオーネさん、もう大丈夫ですよ」

言いながらフィオーネの手足に巻きついていているスライムの体に触  
れた。素手で。見ていて思わず突っ込みたくなった。確かに保護施  
設では一般人の武器携帯は禁止されているから、クリステイアンも  
丸腰なのは仕方が無い。

だが、だからと言って、素手で触るか？

案の定、腕に巻き付かれているし。

伊吹は舌打ちしながら階下へ続く階段へと向った。

あの可愛げの一欠けらもないグロテスクなスライムもどきは、身体だが顔だけ分からない中心部分の穴から、謎の液体（きつと酸とかに違いない）を吐き出す。スライムもどきが、現在捕まえているクリステイアン達に、その酸攻撃の狙いを定めつつあるのを見て伊吹は叫んだ。

「クリステイアン！」

その声に刺激されたわけではないだろうが、スライムの身体が大きく膨らんだ。（酸攻撃の前動作らしい、どうも）

一気に顔を険しくしたクリステイアンが、捕まれている方の腕を大きく左右に振るのが見えた。しかし、スライムの拘束は外れない。微妙に伸びてはいるが、しつこくへばりついている。

ピンチだ。

しかし未だ階段を駆け下りている最中の伊吹には、どうすることもできない。

「はー!!」

慌てる伊吹の耳に、クリステイアンの気迫に満ちた掛け声が届いた。掴んでいたフィオーネの腕を離すと、彼女を飛び越えて位置を変える。その非常識なジャンプ力には啞然とするばかりだ。

いくら多少フィオーネの手を引いて姿勢を低くさせたとはいえ、助走無しで飛び越えるとは。

そうした事で、彼らの腕を拘束していたスライムの身体が交差する。薄く引き延ばされ、なおかつ上手く穴を塞ぐ格好となった。すげえ、と思わず感心してしまう。伊吹には絶対真似できない、身体技能を生かした対処法である。

スライムもどきから出された液体は、スライムの身体に害を及ぼすことはないらしい。その為それは、立派に盾の役割を果たしてくれる。

逃げ出すことはできなくても、さしあたってのピンチはなくなっただといえるが、それは少しばかりの時間稼ぎにしかならない。

黒尽くめの男達の内、2名が職員によって取り押さえられていた。だが、残る1人が中々強いらしく、抵抗を続けている。

倒れたまま動かない職員も数名。

じりじりと移動を続けるスライムの餌食になるまでに、それほど猶予はないだろう。何とかしなければ、と思う一方で、何で俺が？と腹立たしい気持ちもわいた。

一般人の、伊吹には荷が重過ぎる現実だ。

避難すればよかった。

心底後悔だ。

大体、何故こんな騒ぎにも関わらず、応援が来ないのか。

ここよりも更に重要な場所を守っているのかもしれない。或いはここは本命の襲撃場所ではなく、ダミーで、他にも襲われているところがあるのかもしれない。何せ、先程報告されていた敵対者の姿が、ここには無かった。

間違いでは、ないのなら。

他の場所。

再びミルラの事が浮かんだ。

彼女がいる医療室が本命だとは考えにくい。冷静な部分でそう思うものの、気は焦る。

何で、俺が。

再びそんな苛立ちを感じながら、伊吹は階段の残りの2段を飛び降りた。

スライム。

ゲームの中では炎系の魔法に弱かった。果たして現実でそれが通用するのか。色が赤系であると、どうしても炎に強そうないメージを抱いてしまう。一度試してみたいところだが、伊吹は魔法など使えないというしよっぱい現実があった。

(要は火なら良いわけだ)

魔法かどうかは、関係ない。多分。

遠目に見ても、スライムもどきのあのてらてらと薄い水気たつぷりな表皮は、いかにも火に弱そうである。塩とかでも効きそうだし、と、何となくナメクジを連想しつつ思った。

塩は無いが、火はあった。

激しく破壊された後の残る入り口付近、瓦礫の辺りが赤々と燃えている。手ごろな大きさの木の棒を手に、伊吹は火種を手に入れた。

スライムもどきは火に弱いか、否か。

その結論はすぐに出た。効果は靦面で、まあ大して強くもないスライムもどきを大人しくさせる事に成功した。残念ながら、ゲームのようにレベルは上がったたりしない。ただ、疲労感だけが残った。

「大丈夫ですか」

助かったよ、ありがとうと大きな声を上げるクリスティアンを無視して、伊吹は座り込んでいるフィオーネに声を掛けた。

シヨックのためか、陰りのある青い瞳が伊吹を見上げる。そういえば、こうして顔を合わせるのは久しぶりだ。

「イブキ、さん」



彼女にしては珍しい、ぼうつとした表情にどきりとする。目の端に涙がせりあがってきていた。

「本当に大丈夫ですか？怪我とかは」

「大丈夫、してませんから」

「それなら、良いですけど。……えっと、じゃあ先を急ぎますので暴れていた最後の侵入者も捕まったことだし、他の職員に任せても大丈夫だろう。不安そうなフィオーネを残していくのは、悪い気もするが。」

「イブキさん！」

離れかけた伊吹を、フィオーネが縋るように引き止めた。

「待って、待ってください！話……、私、話さなくちゃいけないことが！」

必死な様子に思わず足も止まる。

小さく震える手足を支えるようにして、フィオーネは立ち上がった。白い顔いっぱい、不安を貼り付けて。

「シマが」

そして、出てきた名前に、伊吹は思わず眉根を寄せた。

またあいつか。そんな気持ちで。あいつのしかした厄介話なら、また今度にしてもらいたいとすら思った。

だが。

「シマが行ってしまったんです。ここを、襲った人達と一緒に。私、そばにいたのに止められなかった。……止められなかったんです」

行ってしまった？

その言葉の内容は衝撃だった。単に連れられていったわけではないのだと、フィオーネの様子から読み取れる。

「どうということですか？」

「分かりません。シマ…、最近少し元気が無くて。いつもぼうつと  
していて。今日はククノとイブキの様子を見に来るって、それだけ  
の話だった筈なのに。突然、この人達がやって来て。助けたいなら、  
力を貸してやるとか、そんな事をシマに」

「それで、ついていったのか？」

フィオーネは頷いた。

自分から。

強制されたわけではなく、自分の意思で。

「もっと色々話していたけど、大騒ぎでシマに近づくことができな  
くて」

フィオーネの目から涙がこぼれる。

それは後悔の涙だ。

「私、一緒にいたのに」

「……フィオーネさんの責任じゃありませんよ」

選んだのは志真だ。

この後、どうなるうとも。

伊吹、無謀で無駄なあがきを始める 6 (後書き)

すみません。

パソコンの調子が悪いのと、多忙のため、不定期更新になりそうです。

## 志真と反逆の徒 1

気がつけば口をついで出ているため息。ため息をついた数だけ幸せが逃げるとか、そんな事を母親に言われていたと何となく思い出した。もしもそれが真実なら、今日だけでどれだけの幸せが逃げていったのか分からないくらいだ。

うん、絶不調。

保護施設に閉じ込められているであろうモクのことを思うと、胸の中がもやもやする。なんだか食欲もなくて、宿屋の人達に心配されてしまった。

せめて誰かに相談できたら。

これは、とても志真1人でどうこうできる問題ではない。

同時に自分ひとりで何とかしなくちゃいけないとも思うのだった。誰かを巻き込むのは怖い。もっとも、志真が不味いことを仕出かせば、それだけでウィガーの迷惑になるのだが。

どうしたもんだらう。

ため息を吐き、顔を上げると窓際の柔らかな日差しの下で、すやすや眠るアルジャラーの姿が見えた。その向かいの席では、じいさんがうつらうつらと首を揺らしている。ふよふよとゆれる白髪に何となく癒された。

午前の学校。自由時間、とはいえ一応勉強するはずの時間だが、潔いほど誰も勉強していない。まあ、注意されたりすることもなし、ペナルティもないからこれで良いのだ。

問題は。

今日は、というか今日も二ト口の姿は無い。ここ最近妙に休みがちなのだ。忙しいと言っていたが、何をしているのかは教えてくれなかった。

話したかったのに。

モクの事を話したかった。二ト口は物知りだし、今までも何だかんだ言つて志真の相談相手になつてくれていた。頼りになる友達だ。その上、モクとも友達である。

馬鹿にするかもしれないが、それでもちゃんと聞いてくれそうな気がした。

過去に行つて、モクに会つた。

そんな突拍子もない話でも。これがもしも伊吹相手であれば、鼻で笑われたことだろう。頭大丈夫かとか言われそうだし。

(いっさんも、何だかんだ言つて頼りになるところもあるけど)

こればかりは話せそうにない。きつと、信じてはもらえないだろうから。ラスカウルのことを信じなかつたように。

そうして言うのだ。

(お前に出来ることはない。事態を悪くするだけだから、放つておけ)

むかつくけど、きつと正しい。自分の無力さは、時々うんざりするほどだった。異世界でなくとも、志真は大人とはいえない。無力な子供、単なる女子高生だ。

その事が死ぬほど悔しかった。

志真は開いてあつたノートにペンを走らせた。

モクを助ける 何をすれば良い？ 話し合い？それともどうにかして連れ出して、一緒に逃げる？ 方法は？ 考え中 どこへ逃げれば良い？ 分からない

地理にも詳しくないし、逃げた先でどうやって生活すれば良いのか。きつと、追手も来るだろうし、周りの人達にもたくさん迷惑をかけることになる。

(もう一回、リザレットさんに頼んでみよう)

何度となく断られているモクへの面会。

モクに会いたかった。会って聞きたい。モクが望んでいること、元気でいるのか、ちゃんとこの目で見て安心したかった。

午後の授業をさぼり、一旦宿屋へと戻った。重い辞書等を鞆から出して、代わりにおやつとして買い置きしてあった日持ちのする菓子類をつめる。更に最近フィオーネとの買い物で買った黄色いノースリーブのワンピースに着替えた。結構ミニなので、黒のスパッツ的なものを履き、更にざっくり編みの白いストールを首元に巻き付ける。

志真的には、かなり女の子らしい格好だ。

会えるかどうかは分からないけど、万が一会えた時に変な格好はしていたくないという、乙女心だ。

よし。

姿見の前で確認して、気合を入れる。

似合ってるかは分からないが、悪くはない、と思う。もう少し肩幅が華奢だったらとか、足が細かったらとか思わないではなかったが。

乱れた髪を整えて、荷物を持って部屋を出た。

「あれ、シマ。やっぱり帰ってたんだ」

ところで、雑巾とバケツを手にしたフィオーネに見つかった。気分は、さぼっているところを身内に発見された女子高生……なんとどうかそのままだ。後ろめたく、居心地が悪い。

「どうしたの？具合でも悪い……わけじゃないみたいだけど」

「え、えっと、うん」

「今からどこか出かけるの？」

朝と違う志真の格好を眺めながら、フィオーネが不思議そうな顔をする。

「う、うん、ちょっと保護施設に、会いに」

焦るあまり、素直に行き先を言ってしまった。大量な冷や汗がどつと吹き出る。（私のバカ！こういうときは適当に誤魔化せば良いのに……って、いや、別に行き先だけなら問題無い、よね）

そう、それに別にモクに会いに行くことだって悪いことではない。

「私も一緒に行って良い？」

「へっ!？」

何で。

驚く志真にフィオーネは不思議そうな顔をした。

「イブキさんや、ククノちゃんに会いに行くんじゃないの？私もどうしているか、気になっていたから……」

違う。

違うけど、勘違いを正せない。よく考えれば、フィオーネはモクを知らないのだ。

「あの、でも何か特別な用があるのなら、遠慮するわね。また違う機会にでもすれば良いし」

志真の複雑な顔を見たフィオーネが、申し訳なさそうに言う。

「あ、ち、違う！良いの。ちょっと考えごととしてた。ごめん。一緒に行く」

困ったような、寂しそうなフィオーネの顔を見ていたら、ついそんな事を言ってしまった。ダメすぎる。でも、まあ途中でちょっと別行動にすれば良い。

その時点では、そんな風に軽く考えていた。

フィオーネは伊吹の事が好きらしい。

少し残っていた仕事を片付け、支度を済ませてきたフィオーネを見て、志真はその事を再確認する。フィオーネは、シンプルな生成りのシャツに、動きやすそうな黒いズボンから、白いブラウスにウエストの辺りがきゅっとした深緑のフレアスカートに着替えていた。

上品で清潔な感じが、フィオーネによく似合っている。

髪はいつもの通りポニーテールだけど、白い花の髪飾りがついていた。わざわざ着替えたのは、出かけるからという理由だけではない。勿論。

フィオーネのその気持ちは、志真にはよく分かる。

(いつさんの事、好きなんだなあ)

志真の視線に気がついたフィオーネは、はにかむように笑った。

何か切ない。

伊吹には婚約者がいる。信じ難いことだが現実だ。ミルラは分かりやすいほど伊吹に好意を寄せているし、伊吹もまんざらではない様子。

上手くないかないものだ。

フィオーネの恋も、モクのことも。

お互いに何となく口数が少ないまま、保護施設に到着した。正面入り口で登録証を提示する、のはフィオーネだけだ。志真の場合は、顔パスである。異世界人として記録されているためなので、良いのか悪いのかは微妙だ。

特に問題なく通されるが、伊吹や菊乃と面会できるかは分からない。特に伊吹はつい最近まで誘拐されていたのだし、ひよっとしたら体調が悪くて寝ているかもしれないし、リザレット辺りに「まだ面会の許可はできません」と言われるかもしれない。

ちなみにこれは、今まで散々志真が言われてきた台詞だ。

相手は伊吹ではなくてモクの方だが。

大きく息を吸ってはいいて、覚悟だけしておく。今日も言われる可能性が高い台詞だ。

今日はリザレットの無表情の迫力に負けないう、何とか粘ってみよう。



そんな決意を持ちながら中央にある施設の玄関に足を踏み入れた。ひんやりとした空気が耳元を通り抜ける。その異質な空気に気がついたのは、完全に中へと入ってしまったからだった。

吹き抜けとなっている広い玄関ホール。

受付にもなっていることから、数人の一般人と、それから施設職員達がいる。その誰もが気にしていない様子であるのが、余計におかしかった。

ホール中央に立つ黒尽くめの三人組。

それぞれ動物の骨のような仮面で顔を隠している。

（あれは流行のファッションとかいうレベルじゃないでしょ、コスプレ？なんかのイベント？っていうか、何かどっかで見たことあるような……）

啞然として足を止めた志真に向かって、三人組の1人が手を差し伸べた。

「シマ。お前を待っていた」

## 志真と反逆の徒 2

まず啞然とした。

この状況の意味が分からない。本気で混乱した。ただ何だか嫌な予感だけはずっととしていて、ときどきと音を立てる心臓が徐々に呼吸を苦しくさせている。

何これ、っていうか、まずくない？

他の2人よりも背の高い仮面の男は、硬直したままの志真に向かってまだ手を差し伸べている。シマ？と不思議そうに顔を覗き込んでくるフィオーネは、何故かその人物に気がついていない。いや、フィオーネだけじゃなく、周りの人間全員が彼らをスルーしている。こうなってくると、不安になってくるのは自分の目の方だ。

(何これ夢？どつきり？幻覚？)  
分からぬ。

困惑の極みにある志真に再び声が掛かる。

「おいシマ。こっちも急いでんだから早くしろ」

状況を整理する時間を、彼は与えてくれなかった。

「な、何で」

二ト口、とその名を飲み込む。

声が同じだった。顔は隠れているけれど、背格好も同じくらい。ついでに両隣の背の低い2人組にも心当たりがあった。低身長かつ華奢な体型に加えて、仮面の下からはみ出している雪のように白い髪とか、特徴あり過ぎる為に仮面くらいじゃ正体を隠せていない。双子の吸血鬼を連想する、というかもうそうとしか考えられなかった。

リキキとキリリでしょ！とか叫びたいのを堪える。代わりに。

「何やってんの」

掠れた声が出た。

緊張で喉が渇く。その格好にも仮面にも見覚えがあつた。あれだ。シユターク教派の人達が、以前にここを襲撃した時。鉢合わせた彼らがしていたのと同じ格好。

「何で」

シユターク教派。

異世界人の事を神様みたいに思っている人達。保護施設を襲撃した輩。宿屋に難癖つけに来てカオロンさんに怪我させたり、営業妨害している奴ら。それから、教会で……。

志真は顔を顰めた。

教会での事は、未だに思い出すと苦しくなる。沢山の人が傷ついて、死んだのだ。シユターク教派を許せないと思う。たとえ、自分達を助けようとしてくれていている人達だったとしても。あんなのは受け入れられない。

「シマ、モクを助けたいんだろ」

聞き分けのない子供を宥めるような声音で囁かれた言葉に、志真は息を止めた。

いつの間にか、目の前に動物の頭蓋骨の仮面がある。（本物だろうか）仮面の隙間から覗く二つの目が、金色に光っていた。

「助けてい、けど」

どうして今更。

ニトロはいつも志真を宥めている方だった。短気を起こしたり、無茶をしたりしないように。それなのに。

「もう分かっているだろ、シマ。ここで大人しくしている限り、モクは一生自由にはならない。自由も、生も掴み取るものだ。たとえ、他者を踏みにじることになっても。ここはお前がいた世界ほど優しくはない。選べるのはどちらか一方だ。選べ、シマ。モクを助けるか、見捨てるか」

その言い方はずるい！

志真は金の目を睨みつけた。

「助けるよ、勿論！」

隠れていない口元が笑みの形をつくる。凄く、嫌な感じだ。本当にこの人はニトロなんだろうか。だんだん自信がなくなってきた。

「でも、一緒に行かない」

「……シマ」

ため息混じりに名前を呼ばれ、肩を大きく竦められた。

「流石、古の種。もう、効かないか」

その言葉の意味は分からない。だがニトロがそう言った時、ずっと後ろで黙っていたリキキが動いた。細い手が上がったと思った瞬間、背後で爆発音が響いた。

「なっ!?!」

風圧で転びそうになる。もうもうと上がる煙で視界が悪くなった。振り返れば穴が開いて向こう側が見える壁と半壊したドアが確認できた。そこから、黒フードに仮面をつけた人達が次々と突入してきている。一体、何人仲間がいるのか。

「シマ！」

悲鳴のような声で叫んだのはフィオーネだった。こちらを見る青い瞳が大きく見開かれている。いつの間にか志真の肩に乗せられた手が、ぐいっと後ろへと引き寄せる。耳元で、生温い息を感じた。

「モクは俺達が連れて行く」

それだけ言うと、身を翻して去っていく。駆けつけた職員を、他の黒フードたちが阻む。離れていく黒い影を目で追って、気がつけばその後を追っていた。

何だろう。

凄く嫌な感じがしたのだ。(凄く冷たい声だった)モクを連れて行くなって、そう言った時の声は。友達をただ助けてやりたいとか、そういう雰囲気ではなかった。

「二トロ！待って、二トロってば！」

どんだん先へ進む彼らに、中々追いつけなかった。志真も足が速いほうであるが、前の3人はそれ以上に速い。途中で職員が駆けつけても、キリリが吹き矢つぽいものを使って倒している。閉まっている扉を謎の爆発によって破壊し、どんだん進む。

(うわぁ、もうこれ洒落になんない！)

志真は青い顔で、倒れた職員を飛び越える。

死んではいけないと思いたい。気絶しているだけだと。しかし、これだけの騒ぎを起こしてしまつては、例え相手を気絶させたただけであつてもただでは済まないことくらい、志真にも分かる。

捕まつたら絶対保護施設監禁。いや、それで済めばまだ良いかもしれない。無期懲役とか、まさか死刑とかそういうのは……。 (この世界って、死刑制度あるのかな) モクの事も心配だが、二トロ達の事もやつぱり心配だ。

「二トロ！」

「……第三の目が開いている時は、奴の出番はない」

何度目かの呼びかけで、漸く返ってきたのはそんな意味不明すぎる言葉だった。

「俺はチフセだ」

二トロじゃ、無い？

「リキキ」

足を止め、チフセが傍らの少女の名を呼ぶ。

「はい」

「仕上げを」

いきなり三人が振り返つて志真を見た。な、何事。良く分からな  
いが不穏な空気を感じて、志真は一步後ろへ下がった。

「な、何？」

「モク様は、自ら檻に入っているのです。大事なものを壊さない為、

弱い小鳥を握りつぶしてしまわないように、ですわ」

追うように、ゆっくりと歩を進めるリキキから、志真はじりじりと後ずさった。

「自由に不要なのは小鳥です。特別な何かなど持つから、人は不自由になるのです。だから」

床に倒れていた男の手を取り、リキキは膝をついた。手首を口元に引き寄せると、白い牙を立てる。

「あなたはいららないのですわ」

冷たい声に呼応するように、男の目が開いた。

虚ろな瞳が志真を捉える。その濁った色に背筋が寒くなった。まさか。緊張に身を強張らせる志真の前で、ゆらりと覚束ない足取りで立ち上がった。

危険を知らせるアラームが鳴り響いている事に、今更ながらに気がついた。

逃げろ、逃げなきゃ。

そう思う一方で、信じたくない気持ちで足を止める。

(いらないって)

そういう意味じゃ無いと信じたい。いくらなんでも、嫌いでも、憎んでいても、殺したりはしない筈だと。知らない仲ではない、クラスメイトを。

キリリの事は良く知らない。リキキとは確かに仲が悪いけど。でも。

「ニトロ」

ニトロではない、そう言った男へ志真は泣きそうな顔を向けた。

「悪いな、シマ」

言葉とは裏腹に、悪びれぬ調子で彼は言う。

「あいつは気が進まないようだが、仕方が無い。歯止めがある限り、竜は目を覚まさない。怒りと憎しみを知れば、自ら動く」

「な、に言ってるか分かんない！」

「わかる必要はない」

「そん……」

信じなかった。

信じられなかった。

現実にこんなことが起こるなんて。これが、現実だなんて。志真は平和ボケな国で育った、一際平和な女子高生であった。

しかし、その痛みは現実のもの。

「……あ」

逃げる暇も身構える暇すらなく。鋭利な剣の刃が志真の胸の下辺りに突き刺さっていた。

シマ。

誰かの声がする。

シマ、シマ、シマ。

呼んでいる。分かっているも答えられない。目すら開けることができない、いや、もしかしたら目は開いているのかもしれない。ただ、見えないだけで。全てがぼんやりとしか感じられなくて、自分の状態がどうなっているのかすら分からなかった。

先程まであった恐ろしい程の痛みはもう感じられない。

ただ寒かった。

怖い。

ゆっくりと、何かが終わっていくのが分かる。死ぬのかな。暗い、

怖い。怖くて、寂しい。

助けて。

一瞬浮かんだモクの柔らかい笑顔が闇に溶ける。

(助けて、お母さん)

\*\*\*

「地下施設は閉鎖されます。貴方をこの先へ通すことはできません」

冷たく聞こえる丁寧な口調で、リザレットが繰り返す。それに対



して、フィオーネがそんな、と声を上げた。

「まだシマが中に」

「彼女は、自ら襲撃者と共に行っただけでしょう。どのような経緯があったにしろ、結果は同じ。シマ・ハイタニも襲撃者の仲間として対処することになります。残念ですが」

と、全く残念でない口調で述べる。

地下へと向かう通路の途中には、分厚そうな金属の扉が下りていた。進入を防げなかったことにより、彼らを外へと出さないという作戦へと切り替えられている。もしかしたら、もとよりそのつもりだったのかもしれない。

伊吹の証言により、襲撃されることは分かっていた。にも関わらず、ここまであっさりとした進入を許してしまうなんて、あまりにもお粗末だ。態と襲わせて、彼らを捕らえようとしたのではないか。そう、伊吹は疑っていた。

襲撃者を押し返せず苦戦していた割りに、彼らが地下へ入った後の対処は実にスムーズだった。各区間を閉鎖した上、先程までどこにいたんだという数のケラスの隊員や施設職員が、それぞれ配置についている。

先程聞いた話では、医務室にいた病人や怪我人たちの避難も終わっているそうだ。

危険な目にあっただ身としては腹が立つが、暢気に出し抜かれた間抜けだったというよりは、まあ良い様な気もした。

「敵対者も地下なんですか？」

「……報告では」

「ナナミ達も来ているのですか？」

「姿を確認したという報告は今のところありません」  
では、と伊吹は迷った末聞いた。

「吹雪……俺の兄は」

最後に見た彼は眠っていた。眠ったまま目覚めないと七海達は話

していたため、今もその状態である可能性は高いとは思う。

だが、聞かずにはいらなかった。

「同じく未確認です。地下へ進入した者たち以外は全て捕らえましたが、少なくともこの中にはいないようですね。これから取り調べで判明してくることもあるでしょうが、今の時点でお答えできることは何もありません」

これ以上質問するな、とばかりに冷たい瞳で睨まれた。切迫した状態で、ただの一般人である伊吹達の存在は、邪魔以外の何者でもないだろう。

にも拘らず、リザレットにしては丁寧に答えてくれた方だ。

「さあ、そろそろ貴方もケラスへ避難してください。いつまでもここにいたところで、仕方ありません」

「待て、最後に一つ」

切り上げて去ろうとするリザレットを引き止める。

硬質な視線を受け止めて、伊吹は目を細めた。

「坂巻さんは今どこに」

坂巻菊乃。

頼りない風情の少女ながら、この世界へ来たことで妙な力を得てしまった女子高生。運がいいのか悪いのか。もしも襲撃者がナナミ達だったとするならば、その狙いは彼女だ。

「その質問にはお答えできません」

把握していないではなく。答えられないという答えで、伊吹は理解する。現在地下にいるのは志真だけではない。菊乃もそこにいるのだ。

思わず扉へと視線を向けてしまった伊吹に何を思ったのか、リザレットは厳しい口調で念押しした。

「貴方まで面倒ごとを起こすのは止めてください。大人しくしていただけないようなら、特別にケラスの隔離施設を利用する許可を今す

ぐに取りますが」

「遠慮しておきます」

別に、助けに行こうなどとは思っていない。そんな力は伊吹にはないのだ。嫌っていうほど、分かっている。

英雄でも勇者でもない。

伊吹に与えられた役目は、単なる一般人、巻き込まれた不幸な異世界人Aというところ。大事件に巻き込まれて、右往左往するしかない。まさに、今のようになだ。(くそう)

「イブキさん……」

だから、そんな継るような目で見られても困る。期待も信頼も、伊吹には重い。

「イブキ、ここは一つ、可憐な少女達を助けるために、敢えて権力に逆らうというのも乙なものだと思うのだが、……どうするべきだろう。ううむ、悩ましいね」

……お前は黙れ。

それぞれに、聞き分けの悪そうな二人に囲まれて、伊吹は小さくため息を吐いた。

\*\*\*

閉鎖完了しました。

全ての区域からの報告が完了して、ユーイ・ユーイはそこでようやく肩の力を抜いた。まだこれで終わったわけではないとはいえ、肝心の一段階目は成功したわけだ。

「これで命令通り、賊の閉じ込めに成功しましたが、殿下」

緑色のソファアに浅く腰掛け、長い足を組んでいた男がその言葉に微笑を返す。部屋の白い壁一面に映し出される、地下内の映像記録。全ての場所が映し出されているわけではないが、監視には十分

な数だった。

「彼らは何者だと思う？」

そう、ユリウスが指を向けると、その画像が大きく引き伸ばされる。そこには、黒いローブに獣の頭蓋骨を被った3人組の姿があった。場所はどうやら隔離区域の途中のようだ。

「背の低い2人組みは双子の異世界人で間違いないだろう。髪の色、背格好が一致する。大人しくしてはいたが、吸血種だ」

「だとすると、もう1人も異世界人かもしれないね」

「まあ、その可能性は高い」

「報告では、彼らと共にシマ・ハイタニと一緒に行った筈だが？」  
その姿はそこには無い。

途中で何かがあったのか。気に掛かるところだが、他の画面で探してみても、志真の姿は見つからなかった。

代わりに、菊乃の姿が目に入り、ユーイ・ユーイは眉を顰めた。

「心配かい？」

目敏くからかうような声を掛けるユリウスに、白い目を向ける。

「テメーが言うな。気に入ったとか、抜かしておいて」

「貴重な戦力を割くくらいには、気を使っているつもりだが」

画面の中で、ユーイのバカ弟子であるジェレミーが、さりげなく菊乃の手を握っている。反対側には、嬉々とした様子のジャンナ。前をハルラック、後ろをハイネスが歩いている。

ユーイはため息を吐いて、マイクのスイッチを入れた。

「このバカ！」

『いきなり大声でバカというのはひどいですね。耳に直結して響くんですから、もう少し声量を考えてください』

「知るか！こっちはお前を遊びにやったわけじゃねーんだよ。真面目にやれ」

『十分、真面目ですけど』

ねえ、と傍らの菊乃に向かってにこりと笑いかけるジェレミーに、頭が痛くなってくる。

「……完全に遊んでるじゃねえか」

ぼやいたところで、前を歩いていたハルラックが足を止めるのが見えた。

「どうした」

「………血の匂いが」

ハルラックは獣と人、両方の性を併せ持つ。人型である時も、五感 は常人よりもずっと優れている。

「こちらから」

そう言つて、閉ざした壁の一つへと手をついた。太い眉根を寄せ、困惑した表情を滲ませる。

「まさか」

僅かに掠れたような声に、緊張した気配を感じ取れた。

「どうした」

「………ここに、シマが?」

返された疑問に、ユーイも顔を強張らせた。

3人組と共に地下へ入った筈の志真。3人組と一緒にいなかったのは、何故か。その理由が、そこにある。

遠くで非常を告げるアナウンスが響いている。

外部からの進入者による施設破壊。そんな状況だというのに、それほど恐れは感じなかった。たとえ、彼らの狙いが自分にあるとしても。

事前に知っていたからこそ、心の準備ができていた。突然襲われるのとは大違いだ。

「大丈夫ですか、キクノ」

地下に入ってから何度もそう聞いてくれるジェレミーに、菊乃は大丈夫ですと静かに答える。だから、手も離して欲しい、と握られた手に何となく視線を向けてしまいが、果たして通じているのかいないのか。手が離されることはなかった。

彼は相変わらず菊乃を子供扱いする。実際大人とはいえないので良いのだが、やはり少し気恥ずかしいというか気まずいというか。

ここにはジェレミーと菊乃だけで来ているわけではない。ハイネスもハルラックもジャンナもいるのだ。

何となく、物言いたげな視線を感じるのは、気にしすぎだろうか。

諦めて先へ進むと、不自然な位置で行き止まりにぶつかった。

押したところでびくともしない、頑丈で分厚そうな金属の防壁。

「ジャンナさん、お願いします」

「りょうかーい」

にっこりと笑い、ジャンナが首に掛けていた銀色の棒を外した。

中心にある丸い窪みに、銀色の棒を差し込むと、扉に奇妙な模様のようなものが浮かび上がった。淡く点滅する模様に、ジャンナが素早く触れていく。指先に触れられた模様は位置と向きを変え、それを8度ほど繰り返し返した後でようやく壁が上がった。

対侵入者用の防壁だ。

囿として地下へ送り込まれた菊乃達には、一応その壁を解除する術も与えられている。壁が半分ほどまで上がった時点で、すぐに動こうとした菊乃をジエレミーが押し留めた。

「先行は彼に任せましょう」

そう言った時には既に、ハルラックが長身を折り曲げて壁の下をくぐっていた。

「ハルラックさん」

心配で思わず掛けた声に、彼は振り向きもせず言った。

「キクノはここに」

静かだが、有無を言わせぬ口調だった。

ぴりぴりした緊張感に、身が竦む。彼は血の匂いがすると言った。その後で志真の名を出したということは、一体どういう事になるのか。予想はつくけれど、考えたくない。

(どうして、シマちゃん……)

本当に志真がここにいるのだろうか。ハルラックの鼻は確かだ。

だとしたら何故志真がここにいるのだろうか。自分と同じように、囿としてここへ来ていたのだろうか。そんな話は聞いていなかったが。

非常用電気の薄暗い灯りの中、暗闇に消えたハルラックはすぐに戻ってきた。

「何かありましたか」

ジエレミーの問いに、ハルラックは迷うように目を伏せた。

「何よう、意味深な沈黙作ってないでさっさと言ってくれなーい？」

「施設の警備担当職員が3名死んでいる。その内の1人が血だらけだったが、見たところ外傷は無い、返り血なのだと思う。床に、大量の血が残っていた」

「誰の」

「……その場にそれ程の血を流すような怪我をした者はいない」

「志真ちゃんも」

「いないようだ。……匂いは残っているから、その場にいたことは間違いないと思う」

怪我をしたのは、やはり志真なのだろうか。大量の血痕という言葉  
葉を思い出して、血の気が下がる。(どうしよう、何で、志真ちゃん  
んが……)

「行つくわよー、やっぱり自分の目で確かめないと埒明かないわあ  
ー」

「ちよつと、ジャンナさん」

「他に敵がいらないんならー、別に構わないでしょー。ハルラックの  
鼻は利くもの、信用してるわよー」

マイペースを崩さないジャンナは1人で勝手に奥へと進む。震え  
そうになる唇を噛み締めて、菊乃もその後続いた。

菊乃の鼻でも血の匂いを感じ取れた辺りで、人影が見えた。心も  
となない青白い灯りの下、ぐったりと床に横たわっている。白い服に  
身を包んだ、施設職員だ。倒れた男の横の辺りに、どす黒く広がる  
血溜まりがある。

相当の量だ。

人は血を失いすぎると死ぬという事は常識だが、それがどのくら  
いの量なのかまでは分からない。確か3分の1程度だとか聞いた事  
がある気がするが、血の量を見て判断できるような知識は無かった。  
ただ、これだけの量の血が流れたら、ただでは済まないという事  
くらいは分かる。

「変よねえ」

床に顔を近づけて観察していたジャンナが首を傾げる。

「怪我人なのか、死体なのか分からないけど、どうやって移動させ  
たのかしらー。移動させたなら、どこかで擦れたような跡が残りそ  
うなものだけど何も無いし。それに肝心の凶器も無いわあ。犯人は、  
この人みたいなのになー」

「事情を聞こうにも、亡くなられているようではね」



「貴方あの魔法使いの弟子なんでしょうー？何とかならないのお？」  
「なりませんよ」

死体や血痕を調べながら、ああだこうだ言い合う2人をぼんやりと眺めながら、菊乃は首元に手をやった。何だか息苦しい。うまく呼吸ができない気がする。

「……………大丈夫か」  
「っ！」

そつと肩に触れた手に、菊乃はびくりと身を竦ませた。弾かれたように顔を上げた菊乃を見つめる紫の瞳が、僅かに驚いたように見開かれている。ハynes・ユーゴだ。薄い表情の中に辛うじて分かる変化から、どうやら心配してくれているらしいと分かって、申し訳ない気持ちになった。

「ご、ごめんなさい、びつくりして」

「いや……………驚かせて済まない」

小さく首を振って、菊乃は息を吐き出した。しかし、身の強張りを解いたところで、再びジャンナの大声に飛び上がる羽目になる。

「そーだ、ハルラック・エジ！」

「……………」

「貴方、匂いが辿れるんでしょう？これだけ出血しているんだし、簡単にできるんじゃないのー？」

ジャンナの期待に満ちた視線に対して、ハルラックは眉根を寄せた。

「いや」

「何よー？犬みたいな真似は嫌って言うのお？」

「そんな事じゃない。単に……………この血の匂いはここから移動していないんだ。ここで途切れている」

「……………何それ、どういう事」

「分からない、けど」

一呼吸置いて、ハルラックは眉間の皺を深くした。

「シマの匂いもここで消えている」  
ぞつとした。

それが一体どういう事なのか。

考えを纏める暇はなかった。ジェレミーの持っている通信機が音を立てる。ピーっという甲高い音の後に、ユーイ・ユーイの切迫した声が響いた。

『すぐにその場所を移動しろ！近くに敵対者が来ているぞ！予定通り、白の部屋に誘導しろ！』

「キクノ、こちらへ」

素早く立ち上がったジェレミーに腕を引かれるが、素直に従うには志真のことが気掛かりだった。

「でも、志真ちゃんのことを、まだ」

「姿の無い彼女の事を心配しているような余裕はありませんよ。今はとにかく、こちらを何とかしないことには」

「でも！」

志真は怪我をしているかもしれないのだ。それも、命に関わるよ  
うな。

「駄目ですよ、キクノ。作戦の成功だけを気にしているわけじゃありません。もしもこの場で敵対者と接触した場合、一番危険なのは貴方なんですよ」

敵対者を何とかできる力がある、と。

だから狙われている、そう言われてもいまひとつぴんとはこない。その力で菊乃自身が死ぬかもしれないという事も。そうなるだろうと分かっているのに、実感は湧かない。

「それに、既に敵対者はこの中にいる。ここで失敗すれば、もつと大勢の人間の命を危険に曝すことになります」

畳み掛けるようにジェレミーが言う。

その言葉に菊乃は怯んだ。自分の行動一つで、人が死ぬかもしれ

ない。そう言われたらもう何も言えない。

「さあ、早く」

再び腕を引かれる。今度は抵抗できなかった。菊乃にできるのは、ただ志真の無事を祈ることだけだ。そしてそれが何の助けにもならないことを、菊乃は良く知っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2786o/>

---

落下世界の迷子

2011年6月17日23時10分発行